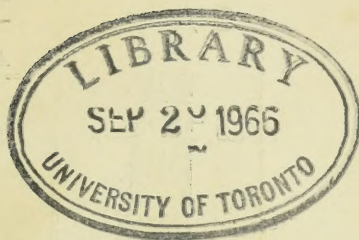
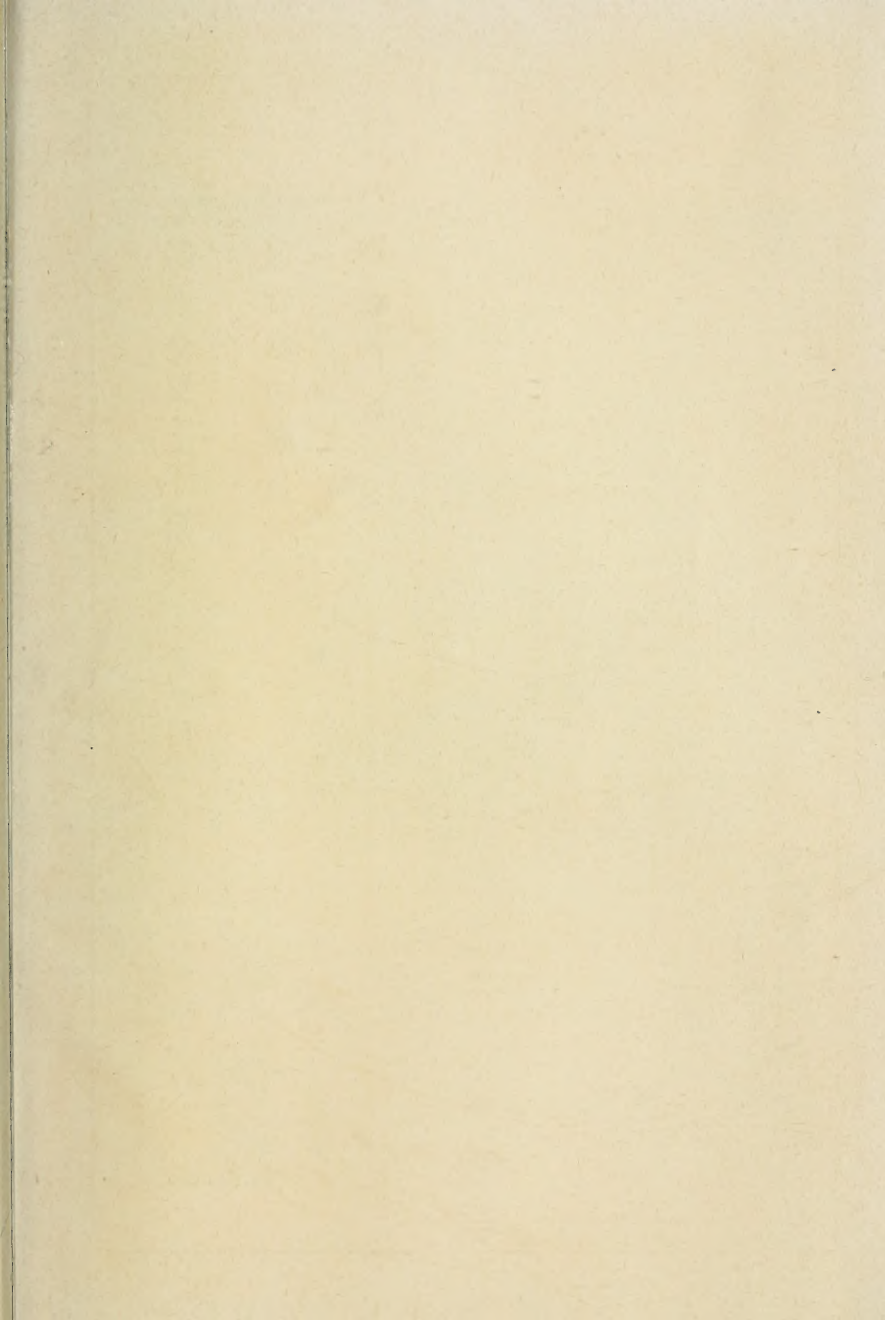
日本戲曲全集
第三十卷

河竹默阿彌集上

東京
春陽堂版

河竹黙阿弥

日本戯曲全集（上） 第三十卷 目次

河竹默阿彌篇

幟鯉瀧白旗　二幕

年々歳々ありふれた隣同志の世話場をば仕組を替へて地獄極樂しかも所は龜井戸の婆婆と冥土の境町閻魔の小兵衞と名もうれた鬼の女房に氣まぐれな三途おばあが締もたせ手拭に取りし百兩の金に心もくらきされ廓をぬけて若草が忍ぶ浮世の伊之助と名のらぬ先に兄弟と知らぬが佛内念がくせいの船のだんまりほどき元は平家の某と二十餘年の夢物語替た趣向を三立目より第二番目へ續き狂言

稿下當時の紋番附に載つてゐる狂言作者連名、客座にある河竹新七は即ち默阿彌、立作者の地位にある篠田瑳助は三世五瓶の門弟、四番目の能晉輔は後の柳水亭種清、また若太夫の河原崎長十郎は後の九代目團十郎である、

閻魔小兵衛（龜戶豐國筆）

若草（菊三郎）　伊之助（團十郎）

小兵衛（海老藏）　西念（九藏）

昇鯉瀧白旗（閻魔小兵衛——二幕）

序幕　向島道行の場

（淨瑠璃）若菜屋若草、浮世伊之助、濡嬉浮世猿（清元連中）

（役名）閻魔小兵衛、浮世伊之助、修行者西念、三位中將重衡、番頭ひね六、貸物屋眼七、若菜屋の若い者喜助、同多助、同米吉。若菜屋の遊女若草、吳羽の內侍、蝶々實眼王の長吉等

（源兵衛堀の場）——本舞臺後ろ黑幕、上の方橋の袂、傍の立木、よき所に平家の落人三位中將、吳羽の前の人相書を立て、總て源兵衛堀夜の體。通り神樂時の鐘にて幕明く、と上下より一文獅子赤鰯豆から柊賣りの仕出し行違ひてはひる。と花道より若い衆三人、藏前伊勢屋と記せし弓張提灯を持ち、下男の裝にて、鉦、太鼓を打ちながら出來り。

○　迷兒の〳〵番頭さんやアい。

△　ひね六さんやアい。

ト呼び、後より眼七貸物屋にて出來り、弓張提灯をすかし見て、

眼七　おい〳〵、そこへ行くのは、藏前の米伊勢屋の若い衆ぢやあないか。

ト是にて三人後を振返り見て、

□　お前はたしか、貸物屋の眼七さん、どこへ行きなさる。

眼七　おいらアちつと人を搜すのだ。まあ向うへ行かう。

ト皆々舞臺へ來り。

○　さうしてお前は、誰をさがしなさるのだえ。

眼七　聞いて下せえ、貴樣達の所の番頭ひね六殿が、昨日おれが所へ來て、今夜年忘れの茶番があるから、心中者の衣裳と毛氈を貸してくれろと言はつしやるから、毛氈はあるが衣裳が家にないから、仲町の長岡屋で、帶から襦袢までそつくり借りてやつて、今朝返す約束だから見世へ行つたとこが、昨日出たきり歸らないとのこと、ついぞ茶番などはしなさらない人だから、もし本當に心中

でもされては大變だから、今日一日方々さがして歩くが、今もつて行方が知れない。見れば貴樣達も、迷兒を搜す樣子だが、誰をさがすのだ。

△　左樣さ、お聞きなさる通り、番頭さんが昨日から歸らないから、迷兒に出ましたのさ。

□　聞けば、家の旦那の鮫鞘の脇差を持出したさうだから、それで分つたわい。

○　そして横町の花屋で、樒を一本買つたといふことだから、それぢやあ心中に、出たのかも知れないて。

眼七　それぢや、あいよ／＼心中に違えねえが、借りてやつた代物まで玉なしにされちやあ、そいつは大變だわい。

ト下手より喜助、多助、米吉若い者の裝、若菜屋といふ弓張をさげ、鉦太鼓をたゝきながら出で、

三人　迷兒の／＼若草さんやアい。

ト呼ぶ。皆々見て、

□　お前方は、どうか吉原の衆だが、やつぱり搜しものかえ。

眼七　貴樣達は若菜屋の若い衆だが、駈落者でもあつたのか。

喜助　お前さんは米屋の番頭さん、お聞きなさい、お馴染の花魁若草さんが、暮方から駈落さ、それで搜しに出ましたのさ。

眼七　あの若草さんは、當時評判の花魁だが、惡足でもあつたかね。

多助　左樣さ、堀の船頭浮世伊之助といふのが足だが、あの妓も借金が多いから、心中でもしなけりやあいゝと、内證でも心配さ。

米吉　もし、お前さん方は藏前のお方だが、お家にも駈落者がありましたかね。

△　左樣さ、番頭のひね六さんが昨日出たきり、今聞けば心中の衣裳を眼七さんから借りたとのこと。

○　もし心中でもしやあしないかと、それで搜して歩くのさ。

喜助　それぢやあひよつと若草さんも、ひね六さんと心中する氣ぢやあねえか知らん。

眼七　そんなら、あのひね六さんは、お前方の家へ客にあがるのかえ。

多助　左樣さ、若草さんのとこへ、よつぽどあつくなつて來なさいますよ。

眼七　それぢやあいよ〳〵番衆は、若草さんと心中に遺えねえ。さあ〳〵大變だ。貴樣達と一緒にさかさなくッちやあならねえ。

口　そんならこれから、向島の方を搜すがようござりませう。

米吉　然し、まだ日が暮れて間もないから、わしどもは此近所をがん張つてるから、お前方は向島の方へ行きなせえ。

○　そんなら、あつちを一ぺん搜して見ませう。

眼七　おいら達は小梅から、こゝら近所を搜して見よう。何にしろ、とんだ人に損料物を借りられた。

皆々　迷兒の〳〵番頭さんやアい。

皆々　若草さんやアい。

眼七　ひねの六さんやアい

ト皆々呼びながら上の方へはひる。後說教がゝりの唄一くさりあつて、時の鐘ばた〳〵にて、花道よりひね六、派手なる衣裳、おしよぼからげ頰隱り一本差し縞を腰へさし、毛氈を肩へかけ口紅の文を持ち、走り出で來り爾き思入あつて、

ひね　今鳴る鐘は、ありや淺草寺のたしか五つ、若菜屋の若草が心中してくれいと讀みの文を、結構の伊之助に持たしてよこした故、あまり死にたうもなけれど、嫌とも言はれず、心中の衣裳を貸物屋の眼七に借り、せりふには芝居の狂言方に書拔をかいて貰つたが、この若草はまう來さうなものぢや。待たるゝより待つ身になるなとは、よう言ふたものぢやなあ。(ト又唄になり向うへ思入あつて舞臺へ來り。)こゝはもう源兵衞堀、河童の棲でたけれども、こゝで待つてゐてくれろとの文、もしひよつと所でも違ひはせぬか。もう一ぺん讀んで見よう、それがよい〳〵(ト件の文をひろげ見て、)何ぢや、淨瑠璃名題東西〳〵(ト下にゐて、)『淨瑠璃名題、若菜屋若草浮世伊之助「濡嬉浮氣鳰」一淨瑠璃太夫清元太兵衞連中、相勤めまする役人若草粂三郎、若太夫長十郎、市川團十郎』。こりや若草の文と思ひのほか、どうして淨瑠璃の觸書と間違うたやら、それにしても淨瑠璃でさぞ上手ならば、奧山でありさうなもの、團十郎とは、これもやつぱり間違ひと見えるわい。

ト手な組み思案の思入、通り神樂になり、上手より以前の喜助等三人に眼七附いて出で來り、ひね六が見付け、

三人　や、見付けた〳〵。ひね六さんだ〳〵。
眼七　何だ番頭だ、コウ〳〵ひね六さん、お前はとんだ人だ。損料物を借りて心中しようとは、あつぱふかいな、さあ脱ぎなせえ〳〵
ひね　あゝこれ〳〵、待つて下せえ〳〵　今心中に出たばかり、まだ心中はしないのだ
眼七　されてたまるものか、さあ〳〵脱ぎなせえ〳〵。
多助　これひね六さん、花魁はどこへこかした。さあ在所を言ひなせえ〳〵。
ひね　なに若草か、おれも其の若草の来るのを、待つてゐるのだ。
米吉　たは言を言ひなさんな、お前が若草さんを連れ出しておいて、待つてゐるも氣が強え
喜助　さあ有様に言ひなせえ。どこへやつた〳〵。
ひね　やあ〳〵、そんなら若草は、約束違へず駈落したのか。
多助　駈落かも凄じい。さあ在所を言ひなせえ〳〵。
ひね　あゝ可愛や、おれ故、太い苦労をしやるなう。
三人　べらぼうめ、たは言つかずと、早く在所を言へ、在所を言へ。

ひね　いや〳〵、心中しようと文をよこしたばかり、若草の在所は知らない〳〵。
米吉　なに知らねえことがあるものか、言はずば締めあげても言はせるぞ。
眼七　あゝこれ、このまゝ締められちやあ衣裳が代なしになる。裸にしてから締めるがいゝ。
三人　さあ〳〵、裸になれ〳〵。（ト皆々衣裳を脱がせる）
ひね　あゝこれ〳〵、それはあんまり情ない。待つてくれ待つてくれ。
眼七　やかましい、ふんばげ〳〵。
三人　合點だ。
ト皆々ひね六の衣裳を脱がせる。ひね六襦袢一つになる。三人在所を言へ〳〵と、有合ふ棒にてひね六をくらはす、ひね六やう〳〵逃げて下手へはひる。三人は後を追つてはひる。此内眼七衣裳を疊み風呂敷へ包み、
眼七　これ〳〵、衣裳は取つたが、損料を取らにやあならねえ。オヽイ番頭、待つてくれ〳〵。
ト眼七下手へ追つかけてはひる。これにて前の道具を引いて取り、黒幕を切つて落す。

(向島平岩河岸の場)――本舞臺三間常足の草土手、眞中出心に坂道、向ふ船板の塀、此内の二間大和葺の二階屋、軒口に平岩と記せし提灯をかけ、一面に伊豫簾をおろしあり、上の方一間出茶屋の臺、是れに葭簀を立廻しある。下の方は松、紅葉の立木、野草前栽植付の河中、半月出てをり、總て向島平岩河岸の體。と二階の伊豫簾を捲上げる、清元連中袴羽織にて居並び、淨瑠璃になる。

〽いにしへを捨てばや義理も思ふまじ、朽ちても消えぬうき中に、浮氣を隅田の土手の霜、解けた二人がふくさ帯、夢も結ばぬ假枕、

ト出茶屋の葭簀の蔭より伊之助廣袖船頭の裝、若草胴抜女郎の裝、伊之助の半纒を掛けて出來り、

伊之　若草、

若草　伊之助さん、

伊之　これ、しづかに言や。(ト思入)

〽水の出初の竿雫、誰に遠慮も棚なし小舟、もやひに搖れて散り紅葉立田にあらで綾瀨川、夢の浮世の伊之助に、まだもえやらぬ若草が實とまことの厚氷り、行方當途も長堤よそ目にそれと心中も、死ぬ覺悟こそわりなけれ。

ト此の文句の内兩人よろしく舞臺へ來り、

若草　今夜内證の年忘れのどさくさまぎれ、首尾よく大門を抜けて、こゝまでは逃げ延びんしたが、是からどうしなますえ、

伊之　どうと言つて見留も付かねえ、稼業を當に心中するのもこけな沙汰、當分影をかくした上話し合をつける覺悟で、あの米伊勢屋の番頭をだしに遣つて、彼奴が連れ出した積りにすつぽり書いた狂言よ、

若草　そりやようざますが、江戸の内にかくれて居いしてはなに、

伊之　なに、そこが燈臺元暗しと逃ッ走りをするより、近所にかくれてゐる方が結句知れねえのよ。

若草　さうして、どこへ連れて行きなますえ、

伊之　その行く先は案じることはねえ、おれが親父が世話をした西念といふ同心者が、境無に居るから、當分そこへ行くのよ。

若草　さうした所がひよつと話し合がつかず、もし吉原へ歸るやうにでもなりんすと、わつちア生きてゐる氣はありんせんよ。

〽くど〳〵いふも愚痴ながら、いつぞや下の巳待の夜旦

那さん方藝者衆の、多くのなかでこなさんの、面白い座の持ちやうぢや、好いたらしいと蔭言にお前の眞似を樂しみにせぬ間は暫しもないわいな。假令心にそまずとも粹なお前のことなれば、苦界する身を立てるとて、義理一遍の仇口は結句心のもめるほど、苦勞苦患に引きかへて、一緒に暮す嬉しさと、番ひ放れぬ風情なり。ト兩人よろしく思入。

〽かゝる所へ向島、顏見世だけに商人も、柿の素顏に掛値なし、負けぬ氣性の小ませ者、

ト合方通り神樂にて、花道より蝶々賣眼玉の長吉手甲股引、手拭を冠り、大きなる辨慶に眼玉の蝶々をさしたるを擔ぎ出て花道に留る。

〽蝶々とまれおやなつけんけれど、日本堤で皆御存じの仕出しそめきの客さん方も、格子で袖を引け四つ過ぎにそれとまつた、朝の歸りに持てゝは睡い、眼玉の蝶の諸翼振りかたげたる戻り足。

ト蝶々賣振あつて舞臺へ來る。

伊之（見て、）誰かと思つたらば、いつも土手にゐる眼玉の蝶々屋さん、今時分どこへ行つたのだえ。

長吉　あいさ、明日は年越で龜井戸の豆蒔だから、錢まうけをしようと思つて、地所を取りに行つて、それから寺島の平作さんの家へ、用があつて今歸る所だが、お前方は堀の船頭衆に吉原の花魁、今時分こゝら邊りにゐるからは、こいつアてつきり心中だな〳〵。

伊之　どうして〳〵、顏見世さう〳〵緣起の惡い、鶴龜鶴龜。

若草　今時向島で、心中なんぞをする野暮はありんせんよ。

長吉　こいつア一番あやまつた、扨はお前方は駈落だね。

伊之　まアそんなものさね。

長吉　二人こつそり手を取つて、こゝから直に隨徳寺、誰憚からずちん〳〵かも〳〵、えゝ畜生め。

〽さつてもうまい舌鼓、打つは追儺の鬼打豆よ、福は内外の目顏を忍び、連れて軒端の梅松竹で、三々九度の盃に四海なみ〳〵お銚子の、變らぬ妹背色なほし、立てる屛風の蝶番ひ、女蝶男蝶のたはむれ遊び。

ト蝶々賣よろしく。是より竹の蝶を指金のやうに獨りで遣ひながら、振になる。

〽戀すてふ戀の胡蝶があなたへひらり、こなたへひらり、ひらりひら〳〵、ひら〳〵ひらり風の蝶、味噌を揚羽の蝶花形か、八つ花形の香にめでゝ猿若町の色くらべ、古

い文句でやつてくりよ。（トよろしくあつて田舎節の振になる。）〽花に蝶々はわしや氣がもめる、來てはちら〳〵まよはせる、いてきちやぐん〳〵オヤヤレ〳〵さうだぞ〳〵。沖のかもめがなくのも道理、水にあはずに暮らさりよか、いてきちやぐん〳〵オヤヤレ〳〵さうだぞさうだぞ、さうだんべい。〽うかれていつまで長遊び、ゆるりとおしげりお樂しみ、獨りちや〳〵くちや蝶蝶賣、羽風こぼして走り行く。

トン蝶々賣辨慶なかつぎ、上手へ走りはひる。兩人後を見送り、

伊之　あの奴め、獨りでしやべつて行つてしまつた。然し蝶々は祝言の附物、いゝ辻占ぢやあねえか。

若草　そりやさうと、お前の心安い坊さんの所へ行つても、窮屈でありんせうねえ。

伊之　なに、氣は詰まりやあしねえが、狹え家だからどうせ樂にやあ行きやあしねえ。是から龜井戸までよッぽどあるが、そんな自墮落な裝ぢやあ仕方がねえ。この出茶屋の中で支度をしよう。

若草　わちきアどうしてよいか、分りイせん。

伊之　おれが着物をきせてやらう。いや、とんだ厄介者だ。

若草　そんならおもひれ歩けるやう、着物を着せてくんなましよ。

〽更けて山谷に打つ紙のきぬたの音もはや絶えて、そつと身にしむ小夜嵐、雲足早き雨雲にむぐらの闇やこもるらん。

ト兩人立上り、思入あつて出茶屋の内へはひる。これにて二階の伊豫簾をおろす。時の鐘合方になり、花道より三位中將重衡淺黄頭巾笈摺にて、吳羽の内侍さら毛壷笈摺、兩人とも胸紐草鞋、藁づとを背負ひ、柄杓を持ち出來り、

三位　今日も最早暮過ぎ、宿り定めぬ旅の空、これこの所は東に名高き隅田川、世にある人は詩歌に讀みこし慰めど、今は日蔭の二人が身の上。

吳羽　落人の身の後や前、行きなやみたるうき旅路、都と聞くもなつかしき、鷗とやらの羽風さへ、もし、追手かとおどろかれ、

三位　一足づゝに消えて行く、霜の劒を踏む心地。

吳羽　お心細いはお道理ながら、人目にかゝらぬ其内に、

三位　少しも早う、今宵の宿りへ。

吳羽　我君さま。

三位　あゝこれ。さあ、おじやいなら。（ト兩人舞臺へ來り、呉羽の内侍人相書」

立札をすかし見て、）何々「平家の落人三位中將重衡、呉羽の内侍人相書」

呉羽　やゝ、こりやこれなる札に、人相を記しおき。

三位　訴へ出る其者には、恩賞なさんとこの立札。

呉羽　扨は我らが行く先々、草を分かつてきびしき詮議、

三位　かくまで平家を苦しむる、無得心なる源氏の輩、

呉羽　御運の末とは言ひながら、

三位　是非もなき身の。

呉羽　成行ぢやなあ。

ト三位中將以前の人相書きと錦の袱紗に包みし系圖を出し、

三位　それに就いても大切な、肌身はなさぬ家の系圖、よく最前落しもせなんだ。そもじも路用に貯へし、金子は所持してゐるやらうの。

呉羽　その路用は、妾がしかと肌身に付け、こゝに持つてゐますわいな。

ト呉羽懷中より、紫の袱紗に包みし金子を出す。此時兩人の非人窺ひ出で、

非人　扨こそ落人、路用の金を。

ト呉羽が持ちし金を取る。三位中將驚き其手を捉へ、

三位　や、狼藉者、ゆるさぬぞ。

兩人　何を小癪な。

ト三位中將金を懷へ入れる。非人是を引出さうとして系圖の一卷を引出し、

非人　や、こりや卷物。

三位　南無三、系圖。

ト取返さうとするを非人系圖を下手へ投り、三位中將の懷へかゝるを支へる立廻り、此内花道より閻魔小兵衛、どてら、三尺、羽織を引かけ手拭を冠り、古き位牌を澤山繩にてからげ肩へかけ、小提灯を持ち出來り、この樣子を見て舞臺へ來り此中へはひり、兩人を圍ひ位牌にて非人をくらはす。これにて非人下手へ逃げてはひる。此中三位中將は呉羽に囁き、呉羽は金を懷へ入れる。小兵衛思入あつて、

小兵　いやはや、途方もねえ奴等だ。（ト提灯にて兩人を見て、）こウ〳〵若い旅の人、あぶねえことだ。何ぞ取られはしなさらねえか。もう〳〵怖いことはないから、こゝへ來なせえ〳〵。

三位　（思入あつて、）はい〳〵、どなたかは存じませぬが、

危いところへおいで下され、夫婦の者が難儀をお救ひ下さりまして、有難う存じます。

小兵　はい〳〵、わしは此の境橋にゐる、閻魔小兵衛といふ貧乏傳師居だが、眼玉は大きいが怖い者ぢやあねえが、見りやあ夫婦連れの順禮衆、宿を取りおくれて、こちらへ野宿をする積りだね。

三位　左様でござります。勝手知れざる夜の道、狼藉に出逢ひ大切なる、いや、少しばかりの貰ひ溜を、すでに取られんと致せしを、あなたがお助け下さりました故、これ女房、あなたへお禮を。

ト此の前より呉羽癪のさし込み、段々苦しき思入。三位中將驚き、

三位　これ女房、どうしやつた、こりや、持病がおこつたのかや。

小兵　(この様子を見て)おゝ御内儀は癪が起つたさうだ。やれ〳〵可愛さうに。(ト提灯を松の枝へかけ呉羽を介抱して)こりや大そうな癪だ。これ〳〵、反つちやあ悪い悪い。これ御亭主さん、薬はないか薬はないか。

ト　これにて三位中將懐をさがし、人相書を取落す。

三位　はい、折悪う薬をみなにいたしました。

小兵　そいつは困つたものだ。おれも薬は持たず、あゝこれ、だいぶ差込む様子だ。反つちやあ悪い悪い。

ト言ひながら呉羽の、癪を押すとて懐へ手を入れ、以前の金包を探り見て思入。

三位　これは〳〵、御介抱下されまして有難うござります。これ女房、心をたしかに持ちやいなう。

小兵　これ〳〵歯を喰ひしばる様子だ。せめて水でも飲ませてえものだ。おゝ幸ひの川水、御亭主お前柄杓で汲んで來なせえ、早く〳〵。

三位　心得ました。

ト三位中將とつかはと柄杓を持ち、前なる川水を汲まうとする。小兵衛呉羽を抱へながら三位中將を川中へ蹴込む。この音に呉羽おどろき見て、

呉羽　やゝ、こりや我君を。

ト寄るを小兵衛懐の金を引出す。呉羽驚き其の手へ縋るを隔く突きとばす。これにて呉羽よろ〳〵と川端へ倒れるを、小兵衛同じく川中へ蹴込み川を見込む、是にて提灯の明り消え、本釣鐘忍び三重になり、下手の蘆原を押分け、西念鼠木綿の着附同じく手甲脚絆茶への頭巾、六阿彌陀箔代建立といふ幟を持出る　出茶

屋の葭簾をばら〳〵と倒して伊之助若草の手を取り、探りながらそろ〳〵と舞臺へおりる。此中小兵衛件の金をさぐり見て、につたり思入あつて懐へ入れる。西念窺ひ出で足にさはりし以前の系圖を取上げ、合點の行かぬ思入にて懐へ入れる。小兵衛位牌を捜すとて伊之助に行當りびつくりなし下手へ來り、又西念に行當り思入。これにて入替り、小兵衛眞中に土手へ足を踏みかけ上手に西念幟を構へ、下手に伊之助若草を圍ひ、三方一時にきつと見得。凄き鳴物になり、四人世話ダンマリの立廻り、小兵衛件の金を落すを、伊之助拾ひ探り見て懐へ入れる、小兵衛西念の懐より系圖を引出さうとするを、西念立廻つて系圖を取り、振拂ふ。小兵衛これにて手をつき、以前の人相書を取上げ懐へ入れる。よきほどにひれ六懐へながら上手より出で、思はず此中へはひり、あちこち突廻され若草を捉へ、すかし見ておどろき、

ひれ　や、われは。

ト此の聲に伊之助探り〳〵ひれ六を突退け、若草の手を取り花道の方へ行く。小兵衛探りて若草の袖を捉へる。西念窺ひ寄り小兵衛を捉へ後へ引戻す。これにて若草の袖切れて、伊之助若草花道へ行く。小兵衛西念をふり拂ひ、懐を捜し、金包なき故おどろき向うをすかし見る。ひれ六窺ひ出る。

小兵　どろぼう。(ト大きくいふ。)

ひれ　(びつくりして、)や。

ト花道へ出るを小兵衛突廻す。西念この内幟を拾ひ、思はずひれ六を當てる、ひれ六ム、と思入。伊之助小石を拾つて、

伊之　えい。

ト礫を打つ、礫立身にて苦しむひれ六に當り見事に轉る。花道の兩人下にゐる。小兵衛は袖を銜へる、西念は幟を構へる。雙方よろしく一時に木の頭、伊之助若草のがれて花道へはひる。西念小兵衛をさゝへ兩人向ふをすかし見る。時の鐘三重模樣にてよろしく、

ひやうし幕

二幕目大切

龜井戸境町の場
隣合地獄極樂の場

(役名——浮世屋伊之助、えんま小兵衛 實は平家

の近臣次郎兵衛盛次、修行者西念實は平家近臣主馬ノ判官盛久、梶原源太景季、三位中將重衡、伊勢屋の番頭ひね六、家主長兵衛、小兵衛子分勘太、同金八、酒屋の亭主眼七、梶原の郎等。若菜屋の遊女若草、小兵衛女房お六、吳羽の內侍、長屋の女房おわた等。」

(龜井戸境町の場)――本舞臺正面一間の居酒店、一間中窓酒肴と書きし立障子、此の脇繩簾、中汲、諸白と書きし立障子、上の方裏長屋の路地口、井戸札に閻魔小兵衛といふ名札、そのほかいろ〳〵の名札打附けあり、左右朝鮮矢來、下の方柾垣、總て龜井戸境町邊の體。幕の內より三人の若い者村の勇みの拵へにて、床几に腰をかけ酒を吞みゐる。傍に眼七紺の前垂片襷の酒屋の亭主にて立かゝり、下手に友八股引草鞋裝の人足にて、首へ赤鰯豆筴柊を入れし籠を斜にかけ、おわた白髮の婆あ見すぼらしき裝て赤鰯を選り取つてゐる。この見得龜井戸の大拍子にて幕明く。

若者　眼公、今日は豪氣に賑やかだの。

眼七　へい、どうでも節分だけ、龜井戸へ鬼やらひを見に人が出るせゐか、お客の絶える間がござりません。

友八　もし〳〵、どれも同じ赤鰯でござります、よい加減にお選りなさい。

わた　さうでないよ、大きいのと小さいのとある、同じことなら大きいのがよい。

若一　おつかア、いくつになつても慾が深いの。

わた　(若い衆を見て、)こりや尾村井の兄イ達か、お相でもしようかね。

若二　さうよ、おつかアでも女だ、野郎よりましだ。

若三　いつぺえやんねえな。(ト茶碗を出す。)

わた　それは有難う。(ト酒を吞む。)

眼七　おわたさん、此の頃はさつぱりやなんさらないの。

わた　どうして〳〵、夏と違つて寒くなつては洗濯物はなし、長い錢が取れない故、白湯も吞めねえわな。見なせえ、まだ單衣だ、あんまり洗ひ物がねえから、今年の垢の落しじまひに、無けなしの髮を洗つたわな。

友八　(大拍子の聞える思入にて、)もし〳〵、あの太鼓は天神樣でござりますか。

眼七　あい、今日は節分故十二座の神樂があつて、晩には

追儺の神事の鬼が出ます。
友八　なるほど話に聞きました。龜井戸の節分、丁度幸ひ
商ひをしながら見に行きませう。
わた（豆箕、赤鰯、柊を取つて、）おい／＼、赤鰯一本に豆
箕柊、これでいくらだえ。
友八　はい、それでは十六文が物だけれど、仕舞物だ、八
文にして上げませう。
わた　それはお忝だが、とてものことに、もう二つ三つ
赤鰯をお負けなね。
眼七　おわたさん、お前の家は一方口だのに、どこへそん
なに挿しなさるのだ。
わた　何さ、晩に茶漬を喰はうと思つて。
眼七　とんだことを言つたものだ。鹽がからくつて喰へる
ものかな。
わた　おや、そんなにからいかね。（ト友八の籠より赤鰯を
一本とり、一口喰つて、）おゝからい／＼、口がもげるや
うだ。これ、口なほしにもう一ぱいおくれな。
若一　なんだのかだのと言つて、又一ぱい呑まれるのか。
若二　とてものことに、大きいものでやんねえ。
わた　それは嬉しいね。（ト茶碗にて酒を呑む。）

眼七　いや、おわたさんも常談者だ、どこの国にか赤鰯を
喰ふものがあるものか。ほんに今の顔は閻魔が鹽辛を嘗
めたやうだ。
友八　いや、閻魔と申せば此の路地札に、閻魔小兵衛とし
てござりますよ。
眼七　あれは佛師屋の職人で、閻魔を彫るのが上手で、そ
こで閻魔小兵衛といふのさ。
友八　はあ左様でござりますか、とんだ名のお人もあるも
のだ。これはおやかましうござりました。赤鰯や／＼。
ト呼びながら下手へはひる。
若一　さあ、もういゝ加減に切上げようぢやあねえか。
若二　さうよ、龜井戸を一ぺんひやかして來よう。
若三　勘定は、歸りに一緒にしますよ。
眼七　よろしうござりますよ。
わた　こりやあ兄イ達御馳走になりました。
三人　また歸りに寄りやせう。
ト三人は下手へはひる。眼七見世を片附けながら、
眼七　おわたさん、濁酒のいゝのが出來たがどうだ。
わた　白馬と聞いちやあ氣が悪いの、節分の御祝儀に三合
ばかりおくれな。

眼七　勘定は大晦日かな。
わた　知れたことさ。（ト眼七の注いてくれた德利を取って）こりやあ有難うどれ、あつたまらうか。
トおわたは路地口、眼七は繩簾の内、はひる。と、花道より二人の人足○△早桶をさし擔ひに擔ぎ、長兵衞羽織股引尻端折りにて、畳んだる役提灯を持ちて出來る。
○　モシ〳〵、どうやら繩が切れさうで、ぎち〳〵します
よ。
△　どうでも佛が土佛のせゐか、豪氣に重たい。あれ〳〵繩が切れさうだ。
長兵　なに、繩が切れさうだ。こゝでまあ佛をこぼしては始末がしにくい。まあ〳〵向ふの居酒屋の前へおろせおろせ。
兩人　さうしませう〳〵。（ト早桶をおろすと、繩切れる。）
○　それ〳〵繩が切れたわ、こゝでゆつくり締めなほすがよい。
△　もし、大家さん、こゝらで繩を貰ひなさいましな。
長兵　さうしよう、幸ひ、こゝの見世で貰ひませう。もしもし、ちとお頼み申します〳〵。

眼七　（内より出來り）はい、こつちへおはひりなさりませ、葱鮪に鰯の鹽燒がありますが、なんで上げませう。
長兵　いえ〳〵繩を一筋下さい、今こゝの見世の前で、早桶の繩が切れて、死人がこぼれかゝりました、早く繩を下さい〳〵。
眼七　なんだ、人の見世先へ死人をおろして繩をくれろ、とんだことを言ふ奴だ。名主のねえ村からでも來やあがつたか、ちつともおくことはならねえぞ、その死人をそつちへ持つて行かつせえ。
長兵　これ〳〵、そなたは居酒屋の亭主か。これ、繩が切れたからおろしたのだ。見世の前であらうが乃至御玄關の前であらうが、おろしたがどうした。死人をおろすとは法度か、さう強情を言はれては、五日でも十日でもこの死人を、この見世へおかにやあならねえ。不承ながら置いて貰はう置いて貰はう。
兩人　さうだ〳〵、持つて行くことは厭だ〳〵。
トロ々にわめく、此時以前の若い者三人出來り、
三人　なんだ〳〵。
若一　こいつは何だ、居酒屋の前へ死人をおろしたな。
若二　そいつはとんだことだ、薄汚ねえ。

若三　早く持つて行きやあがらねえか。
眼七　ぐづ／＼すると、うぬら打ツくじくぞ。
兵兵　何だ、打ツくじく、面白い、打つなら打つて見ろ。
眼七　いけふざけた奴等だ。若い衆、手を貸してくんなさい。
三人　合點だ／＼、死人擔ぎを打ツくじけ／＼。
兩人　さあ。打たれよう。
眼七　打たねえでどうするものか。
ト早桶の棒を取つて打つてかゝる、皆々有合ふ棒にて毆き合ふ。このはずみに桶の箍切れて中よりひれ六の死人經帷子の裝、頭陀袋をかけたるが轉げ出る。皆々捨ぜりふにて思はずひれ六を踏み散し、見世にある手桶を取つて打ちつける、此の水ひれ六にかゝり息を吹返す。皆々それを知らず、同志打に毆き合ふ。ひれ六の心附きたる體にてずつと立ち、喧嘩と聞いて此の中へはひり、仲裁人の思入にて、
ひれ　待たつしやい／＼／＼。（ト捨ぜりふにて止め）おれが預かつた、預けさつしやい／＼。
皆々　いやだ／＼、いやだい。
眼七　（ひれ六の裝を見て、）やあ、わりやあ何だ、裁人か裁人か。
ひれ　おゝ、裁人に濁りをうつたざいにんだ。
皆々　やあ、幽靈だ／＼。
ト膽を潰し、わつと言つて下手へ逃げてはひる。ひれ六一人殘り、早桶のこはれや自分の裝を見て思入あつて、
ひれ　昨夜向島で横ッ腹をひどく打たれて、あゝ痛いと思つたぎり、それから後は夢現、このマアおれが裝といひ、こりやテツキリ死んだと見える。死んだらこゝはもう冥土か。（トうろ／＼四邊を見て）あゝ。どうでおれも心中を仕そこなつて死んだの故、極樂へは行かれまい。何にしろこゝは地獄の何といふ所だか、針の山や血の池も見えず、今では地獄も娑婆のやうだと見える。どうぞ早く閻魔樣の近附になつて、居候にでもおいて貰ひたいものだ。
ト路地より以前のおわた酒に醉ひたるこなし、白の浴衣の裝にて出來り、
わた　あゝ、いゝ心持だ、一人で三合やつたら、べらぼうに醉つて熱くてならぬ故、袢纏を脱いだら丁度いゝ心持だ。

ひれ（おわたを見て、）はあゝ、もし〳〵憚りながらお前さんは、三途川のお婆さんでござりますか。

わた　なに、さんづ婆アえ、そりやあこの裏の閻魔さんの所のお上さんの渾名だよ、私アおわたといふ洗濯婆アさ。

ひれ　左樣でござりますか。はあ、それではこの裏に、閻魔樣がゐさつしやるか。扨はこゝは地獄だわえ。もし、こゝは何といふ所でござります。

わた　龜井戸の境町と言ひやす。

ひれ　はあゝ、冥土の境町、それでは地獄極樂の追分と見える。さうして阿彌陀樣の方はどつちでござります。

わた　なに、六阿彌陀かえ、そりやあこの先の横町さ。

ひれ　その阿彌陀樣の所へは、行かれますまいか。

わた　あゝ此間まで行かれたが、一昨日から道普請で往來止めだ。

ひれ　南無三、それではいよ〳〵地獄へ行くのか。もし、袖振り合ふも他生の緣、どうぞその閻魔樣の所へ、お連れなされて下さりませぬか。

わた　えゝそりやお易いことだ。一緒に來なせえ、敎へて上げよう。

ひれ　それは有難うござります。あゝ地獄にも今は人鬼が。

わた　あゝ、その人鬼も今に出ますよ。

ひれ　扨は呵責の責めに逢ふのか。

ト　おわた先にひれ六附いて路地口へはひる。これにて此道具廻る。

（小兵衞内の場）——本舞臺三間の間平舞臺、正面鼠壁上の方一間障子屋體。正面に大いなる彩色せる閻魔、例の所門口、佛師閻魔小兵衞といふ名札、下の方路地口、こゝに前幕の小兵衞好みの拵へにて硯箱を置き、帳を調べゐる。お六世話女房半纏裝にて鏡臺へ鏡をかけ、髮を撫で附けゐる。下手に勘太鬼やらひの赤鬼の裝にて、節料理の人參牛蒡を切つてゐる。金八同じく青鬼にて、鰹節箱にて鰹節をかきゐる。この見得四つ竹節、柳島の題目太鼓を冠せ幕明く、

お六　こウ〳〵、お前達も臺所はいゝ加減にして、早く天神さまへ行きなさいな。

勘太　何さ、鬼やらひの初まる前には、八野郎が知せに來る積りさ。

金太　日の暮れねえ内に行くと、人に見られるのが難儀だ。

お六　清公は今年初めてか。
金太　あい、わつちは新娑婆さ。
お六　それぢやアどぢに逃げると打たれるよ。
勘太　なに、そりやあ私が附いてゐます、逃げることにやあ喧嘩でもなんでも、引をとつたことはねえ。
金太　違えねえ。
兩人　はゝゝゝ。
小兵　えゝやかましい、靜にしねえか、帳の調べが出來やあしねえ。
勘太　親分、何をそんなに調べなさるのだ。
小兵　後生樂めらが、今日はいつだと思ふ、節分だ。餅もつかねえけりやあならず、疊替もしにやあならず、いくら錢があつても足りやあしねえ。それだによつて、押上の眞濟寺から頼まれた、應擧の圖を寫したこの閻魔、正月の間に合ふやうにと此間から矢の催促、やうやく仕上前になつたによつて、あらましの勘定をして、眞濟寺から借りて來にやあ、この暮が凌げねえわい。これお六、いつまで頭髮をせつちやうしてゐるのだ、早くお節でも煮てしまはねえか。
お六　えゝ忙しない、もうお節を煮るばかりだわな。コウ人參や牛蒡を拵へるなら、序に鰹節も。
金太　姐さん、言はれねえ内にかいて置きやした。
お六　氣が利いてゐるの、とてものことに、晩に蒔く豆を炒つておいてくんな。
金太　あい／＼。
小兵　いや、人遣ひの惡いかゝあだの。おゝ、その豆で思ひだした。勘太や門口へ柊をさしてくれ。
勘太　あい／＼。
お六　ほんに、人遣ひの惡い亭主だの。
小兵　ハックショ、又風邪を引きさうだ。
　ト路地口よりおわた先にひれ六出來り、門口から、
わた　お六さん、今日はお目出度う、嘸お忙うございませう。
お六　おや、隣のおッかあか、お上りよ。髮をお洗ひだね。
わた　あい、洗ひばえもしねえが、かゆくつてならねえから。
小兵　いやさうでもねえ、洗ひ髮ぢやあをぢ坊主も、いやおつかあの前ぢや坊主はさしだの。
勘太　違えねえ、龍興寺の坊主は、
金太　みんなお前の喰ひ物だ。

わた　なんの、そりやあ昔のことだ。

　トひれ六此中内を覗き、びつくりなし、

ひれ　イヤア怖ろしや〳〵、あのまあ怖いえんま様、左右には赤鬼青鬼傍に帳を控へてゐる眼玉の大きいのが見る目で、淨玻璃の鏡に對つてゐる鼻の高い上さんがかぐ鼻に違ひない。然し繪で見たとは大きな違ひ、えんま様も裏店住居とは、地獄も今はしやれたことだ。

小兵　（この聲を聞きつけて、）おッかあ、表に誰か居るぢやあねえか。

わた　あい、お前に逢ひたいといふ人がある故、連れて來ましたよ。

小兵　それは世話であつた。もし、どなたゞかおはひんなせえ。

ひれ　（おづ〳〵内へはひりて、）はい〳〵、どうぞお助け下さりませ、お助け下さりませ。

小兵　何だ、見りやあ金毘羅參りを見るやうな裝をして、助けてくれ、助けてくれと。

お六　おほかた草鞋錢でもくれといふのだらう。

ひれ　いえ〳〵左様ではござりません。どうぞお助け下さりませ、お助け下さりませ。

お六　おッかあ、お前近附かえ。

わた　いえ、今表で頼まれたのさ。

小兵　何だか、わけが分らねえ、これ、手前達聞いて見ろ。

　ト勘太、金八へ思入

兩人　あい〳〵。（ト兩人ひれ六の首を捉へ引たてる。）

ひれ　あい、おゆるされませ〳〵。

勘太　これさ、何もひどいことはしねえ、譯を言ひなせえ。

ひれ　へ、申します〳〵。何をおかくし申しませう。私は娑婆の藏前で、米伊勢屋の番頭ひれ六と申します者でござります。ふと吉原の若菜屋の若草といふ女郎になじみ、雨の降る日も雪の夜も通つた擧句は身の詰り、とても添はれぬことなれば、心中してと若草が頼みに是非なく淨瑠璃に、名を殘さうと思ひのほか、その夜女郎は船頭の伊之助といふ色男と、廓をぬけて行方知れず、心中せうにも相手はなく、向島をまごつく中、その若草を見つけた故、引捉へようとする所を、脾腹をどんとくらはされて一人心中しました私、決して嘘は申しませぬ故、舌をぬかずにこのまゝに、偏にお助け下さりませ。

勘太　何だ、助けてくれ〳〵と、富士講が熱に浮かされたやうに。

金八　いつたい、お前は何だよ。
ひれ　はい、亡者でござりまする。
お六　えゝ氣味の悪い、早く追出しなせえな。
小兵　いや待て〳〵、さつきからの話の様子、何でもこりやあ間違ひか。（ト思入あつて）これ亡者さん、お前こゝを何處だと思ふのだ。
ひれ　はい、地獄ではござりませぬか。
小兵　なるほど、閻魔はあるし赤鬼も青鬼もゐるから、間違つた人の目から見たら、地獄と思ふも無理ぢやあねえが、こゝは龜井戸の境町、私は小兵衛といふ佛師屋職人だ。
ひれ　へえゝ、娑婆でござりますか。（ト心附き、閻魔を見て）なるほど、さうおつしやれば、あの閻魔様は木彫でござりまするね。
小兵　こりやあ押上の眞濟寺から頼まれて、わしが彫つた應擧の閻魔さ。
ひれ　して、この赤鬼さんや青鬼さんは。
勘太　わつちらは龜井戸の天神様の、鬼やらひの神事に出る、赤鬼に青鬼さ。
金八　これ見なせえ、縫ぐるみの下は人間だ。

ひれ　して、又、三途のお婆さんは。
わた　こゝらあたりの寺方へ、お針にはひる洗濯婆アさ。
ひれ　はゝあ、それぢやあわしも亡者ではないか知らん。（ト立つて見て）おゝ今まで心附かなんだ、足がある、足がある。
兩人　何にしろ、足があるとは緣起がいゝ〳〵。
兩人　はてな、私は死んだに違ひないが、此のやうに生返つたは、日頃贔屓な娘御達が、藏前の不動様へお百度でも上げたと見える。
兩人　おきやあがれ。
お六　とんだ道化師だの。どれ、わつちア日の暮れない中、一風呂はひつて來よう。
小兵　湯へ行くなら表へ錠をかけて、ついでに肴を見つくろつて。
お六　えゝ承知だよ。
わた　お六さん、今日はおひねりだぜ。
お六　ほんにさうだの。ト（おひねりをこしらへ、門口へ出て）亡者さんお話しよ。（ト路地口へはひる）
小兵　何にしろ、お前も生返つて仕合せなことだ。
ひれ　いえ、あまり仕合せなこともござりませぬ。

皆々　そりやなぜ〳〵。
ひれ　はい、私が心中しようと思つた若草めは、伊之助とたしかに心中して、あの世へ行つたに違ひござりませぬ。なまなか生返つたばつかりに、もう逢ふことがなりませぬ。
小兵　なるほど、こりや婆婆から冥土へは、幽靈でも行かれまい、いや、お力落しのことだ。
わた　して、その若草伊之助といふは、どんな人達だえ。
ひれ　まづ役者で例へて見ようなら、粂三と八代目に生き寫しさ。
わた　待ちなよ、その八代目と粂三に似た女郎と二才は、この後ろの西念坊の所にたしか。
ひれ　はあ、それぢやあこの後ろに來てゐますか。やれ、十萬億土を早い足だな。
勘太　こゝは婆婆だといふに。
ひれ　ほんにさうでござりました。して見ると、二人も心中をしないと見えるわい。
金八　なに、今頃野暮に心中するものがあるものかな。
小兵　（これを聞き、）むう、そんなら昨夜の二人連か。
ト思入。
ひれ　若草伊之助を、何にしろ見たいものだ。
わた　とてものかゝり合ついでに、私が一緒に行つて教へてあげよう。
ひれ　それは度々御苦勞をかけます。
小兵　おツかア、今に酒が來るよ。
わた　あい、ぢき行つて來ます。
トおわた先にひれ六路地口へはひる。
勘太　いや、とんだ混ッ返しだ。
金八　おゝ、うか〳〵する内日が暮れた。どれ行燈をつけようか。（ト行燈を出し、灯をつける。）
小兵　手前達はもうよからうぜ、早く鬼やらひをしまつて來て、ゆつくり呑まツし。
勘太　あい、さうしやせう。（ト麻の杖を持ち、）
兩人　それぢやあ親分、行つて來やすぜ。
ト兩人花道へはひる。
小兵　こりやあ豆を蒔かざあなるめえ、えゝ面倒な。今おわた婆アの話では、割符を合はせた二人連、昨夜の奴等に違えねえ、殊に女郎とあるからは、云はずと知れた駈落者、弱みへ附込み片袖から文句をつけたら昨夜の百兩
ト此の時下手にて、

）

福は内、福は内。（ト豆を蒔く音する。）

小兵　む、、い、、辻占だ。（トにつたり思入。鬼は外福は内の聲にて、此の道具廻る。）

（修行者西念内の場）＝本舞臺三間の間平舞臺、正面一間の押入、佛壇、上の方折廻し鼠壁、この壁に彩色の天人羣繪の佛像など貼つてあり、いつもの所門口、下の方は隣りの長屋、正面に箱造の阿彌陀如來、傍に六阿彌陀寫し阿彌陀如來箱代仕立願主西念といふ幟立てかけあり。よき所に蓮池を畫きし二枚折の屛風。こゝに西念前幕の修行者にて、破れたる行燈へ灯りをつけてゐる。

西念　冬至からは疊の目ほど日が延びるといふが、まだ一向に延びたが知れぬ、今日も朝から修行に出て、暮れぬ中に急いで歸つたが、もう入江町の暮六つだ、歩いては短い日ぢやが、戸棚の中に寐てゐては嘸長いことであらう。どれ〳〵、（ト戸棚のそばへ行き、）さあ日が暮れました、ちつとこつちへ出さつしやりませ。

ト これにて内より戸を明ける。中に前幕の伊之助、若草ゐる。

伊之　あゝもう暮れましたか、昨夜とつけり寐ないものだから、戸棚の中でぐつすりやつた。

ト 伸びをしながら出る。

西念　さあ〳〵、お前もこつちへ出さつしやりませ。

若草　もうそこへ出ても、ようざますかえ。

ト 若草よき所へ出る。

西念　嘸お前方、腹がへらつしやつたろ。茶はわしが出る時に、炭團をいけかけておいた故、おほかた沸いてゐる時分、何はなくとも、まあ飯でも上らつしやりませ。

伊之　なに、八つ時分に晝飯を食つて、それから直に寐たもんだから、まだねツから喰ひたくない。

若草　わたしよりはお前さん、嘸おひもじうありんせう、構はずお先へお上りなましな。

西念　はい〳〵、ちつと行かねばならぬ所もあれば、そんなら先へ喰べませう。（ト櫃を明けて見て、）やあ、こりやお飯がちつともない。てもよう上らつしやつたな。

伊之　なに、少しもないえ、さつきまでいつぺえあつたものが。

西念　はゝあ、よめた。お櫃の蓋からこゝらあたりが、犬の足跡だらけだ。扨は戸の壞れから雌犬がはひり、お櫃

を明けて食つたと見える。
伊之　それぢやア今夜、飯を炊かずばなるまい。
西念　さあ、五合ばかり鍋でゞも炊きませう。
　ト立ちかゝる。
伊之　うつちやつておきねえ、そりやあおれがしよう。
若草　ほんに、知らぬながらも、わたしもとも〴〵。
西念　いかさま、是から二人で世帯をさつしやれば、どうで飯も炊いたり水も汲んだりせねばならぬ。そんなら稽古がてら二人で炊いて上らつしやりませ。私は今夜柳島にお齋があるから、先で馳走になりませう。
若草　(壁に貼つてある天人を見て、)もし伊之さん、彼處に貼つてあるは、ありやあ天人さんとやらぢやね。
伊之　さうよ、ありやあ天人よ。おゝ外に、まだいろ〳〵な佛が貼つてある。
西念　さあ、この壁を貼る時に、後ろ長屋の佛師屋から貰ひました下繪の反故さ。
伊之　西念さん、あの笙篳篥の音はどこだね。
西念　あれは天神樣の別當所でござりませう。
伊之　いや、とんだ茶番のやうだが、正面には阿彌陀樣、壁の貼交には天人やら、羅漢やら、笙篳篥は聞えるし、極樂へ來たやうだ。
西念　違ひござりませぬ、はゝゝゝ。
伊之　いや、その極樂の菩薩はあるかえ。
西念　さあ、五合位はこゝにあります。(ト偈箱より貰ひ溜の米を鍋へあけ、)おゝ丁度五合ばかりあります。首尾よく飯ができましたら、此の表の居酒屋で菜の物を賣りますから、何ぞ買つて上りませ。
伊之　なんの、錢はこつちにあるよ。はあ、それぢやあ表で菜を買ひやすか。
若草　書附を取つて見ようぢやありませんか。
伊之　馬鹿を言へ、部屋ぢやアあるめえし。
西念　そんなら私は行つて來ます。いや、なんぼ田舍近い所でも、吉原からは僅な路、殊に今夜は節分故、厄拂ひやら法印やら、種々な者が裏へ來る故、必ず表は明けさつしやりますな。
伊之　そりやあ合點だ。おまへはいつ頃歸りなさる。
西念　え、四つ前には歸りませう。
若草　そんならお早う。(ト西念門口へ出て、)
西念　どれ行つて參りませう。(ト花道へはひる。)
伊之　西念坊も苦勞人だけ、通り者だなあ。(ト門口へ掛金

なかける。)
若草　ほんに氣のおけない、よい人ざますねえ。
伊之　手前思ひついちやあいけねえぜ。
若草　堪忍しなましな、親にしてもよいやうな人を。
伊之　(思入あつて、)おゝその親と言やあ、いつぞは聞かうと思つてゐたが、手前の親元は他人ださうだが、實の親は何處だえ。
若草　さあ、私の實の親といふは、何處の誰とも知りませんが、守袋に印籠の片々を添へて捨てありしと、養ひ親のつね／＼話し、それはお前も知つてのこと。また養ひ親は五歳の年、私を吉原へ賣つた後は音信不通で行方知れず、ほんの親は知りませんわな。
伊之　手前もおれも若え身空、これから先へ長く生きたら、逢へねえこともあるめえから、まあそれを樂しみにしてゐるがいゝ。
若草　ほんにさうざますねえ。五歳の年から親なし故、逢ひたうざますが仕方がおッせん。
伊之　まあ、それよりやあ夜食の支度だ、手前米でも磨ぎやな。
若草　あい、水でかきまはすのざますか。
伊之　いや、さうぢやあねえ、そんなことで裏店の何でかかあになれるものか。
若草　稽古をすれば、出來いせう、まあやらしてくんなましよ。
伊之　さらば、おれがお師匠番か。
若草　もし、やさしく教へておくんなんし。
伊之　いやはや呆れ返つたものだ。どれ、政岡と出かけようか。

ト若草に手拭にて片襷をかけさせ、伊之助鍋の中へ水を入れ、捨ぜりふにて米の磨ぎ樣を教へる。此内門口へひれ六出來り、戸の隙間より中を覗き腹の立つ思入にて、ばた／＼と足拍子を踏み、門口を無暗にたゝく、是にて兩人びつくりして飛退き、伊之助若草を戸棚の中へ匿す。ひれ六夢中になり、門口をたゝき力足を踏み後ろへ倒れる。此の時路地口より小兵衞下駄穿きにて出來り、この體を見て、

小兵　そこへ倒れたは、おゝ、さつきの亡者か。

ト小兵衞手を持つて引起す、ひれ六やはり夢中にて、

ひれ　えゝ腹が立つわい／＼。
小兵　これさ、どうしたのだ。(ト脊中をたゝく、ひれ六心

附き。）

ひれ　閻魔さんか、ちよつと來て下されノ＼。（ト小兵衛の手を取つて花道へ連れ行き、）いよノ＼あの家にゐるのが、若草伊之助に違ひない。わしを騙して連れ出させ、あの伊之助と匿れてゐるとは、えゝ腹が立つわいノ＼。これノ＼閻魔樣、どうぞ敵をとつて下されノ＼。

小兵　何と言ひなさる、そこの家にゐるのが、若草伊之助に違えねえとか。

ひれ　決して違ひはいたしませぬ、どうぞ敵をとつて下されノ＼。

小兵　これさ、まあ靜にしねえ。

ト ひれ六に囁く、ひれ六呑込み又小兵衛に囁き、兩人うなづき舞臺へ戻り、ひれ六は路地口へはひる。小兵衛門口へ寄つて、

もし、お頼み申しやせう、お頼み申しやせう。

伊之（思入あつて、）あいノ＼、誰だか今明けてあげやす。

ト言ひながら戸棚の傍へ來り、若草に囁く思入。小兵衛は門口より内を窺ふ。と、この時路地口より以前のお六草履下駄の音をがたノ＼とさせて來り、

お六　そこにゐるのは、家の人ぢやあないか、何をしてゐさんすのだ。

小兵　お六か、これ、（ト囁き、）よしか。

お六　どうしてまあ、ゐつさうな。

小兵　はて、大事ない、しかけて見ろ。（ト合方になり、小兵衛窺ふこなし、お六門口へ來り、）

お六　あの、ちつとお頼み申しまする。

伊之　あい、今明けます。（ト門口を開け、顔を見合せ、）おお男の聲だと思つたら、こりや小粹な、いや、お前はどこから。

お六　私や脊中合せの裏長屋、小兵衛といふ佛師屋の女房でございますが、西念さんはお留守かえ。

伊之　修行先に齋があるとて、日が暮れてから出て行きました。

お六　さうでござんすか、さうしてお前さんはえ。

伊之　わつちかえ、わつちは居候さ。お上さん、何ぞ用でもありますなら歸つたらさう申しませう。

お六　あい、お長屋の喜左衛門さんの家に産があつた故、長屋中が寄合つて祝つてやりますから、それを屆けにまゐりました。

伊之　それは大きにお世話さまでござります、歸りました

らさう申しませう、お長屋並によろしくお賴み申しま
す。

お六 左樣なら、お酒の三升もやりませう。ほんにお前お淋しからう、ちつと遊びにおいでなさい。

伊之 有難うございます。

お六 ほんに男世帶で、嘸不自由でござんせう、裁縫でもあらばおよこしよ。

伊之 またお賴み申しませう。

お六 西念さんも獨り者故、いつでも私が仕立屋さ。もしもし、お前袖口がほころびてゐるよ。

伊之 いやもう、ほころびは常不斷さ。

お六 若い者が見ッともない。ちよつとお出し、縫つて上げやせう。

伊之 なに、お氣の毒な、そして、絲や針も。

お六 いえ〳〵、私が頭に袖口ぐらゐのほころびは、おゝこれ〳〵。(ト髷にさしたる針をとつて)丁度縹色の絲がありやした。さあ、寒からうがちよつとお脱ぎ。

伊之 裸にならずと、片肌ぬいで、(ト肌をぬぎ)おゝ寒くなつた。自由ながらこのまゝで。(ト袖を出す。)

お六 ぢつとしておいでよ。(トお六伊之助の傍へ寄り、左りの手にて袖を捉へ右の手にて行燈を引寄せ、かきたてようとしてわざと灯りを消し)これは粗相な、つい消したわいな。

伊之 えゝ、暗黑になつちやあ大變だ。もうほころびは止しませう。

ト燧箱を尋ね、捨ぜりふにてかち〳〵と打附ける。これを聞いて小兵衛そつと内へはひり、よき所へ坐る。伊之助附木へ火をうつし、

さあ〳〵附きました〳〵。何處の國にか不遠慮な、お長屋のお上さんとたつた二人、灯りを消して、(ト行燈へともし、ふと小兵衛を見て)や、こなたはどこから。

お六 ほんにお前はいつの間に。

小兵 ふんばり女め、動きやあがるな。(ト伊之助に向ひ)もし、私ア裏長屋に住む、閻魔小兵衛といふ佛師屋職人の貧乏人だが、見りやあ此の長屋で顏も知らねえ小二才一人暮しの此の家へ他人の女房を引きずりこんで、慰みものにさしッたか。間男は御定法、並べておいて四つにするぞ。

伊之 むゝ、そんならお前が、このお上さんの御亭主か。今來て逢つたお上さん、そんな覺えはありやあしねえ。

小六　覺えねえとは言はさねえ。人の女房と暗黒に二人ゐるのが第一不審、言はずと知れた間男だ。さあ野郎、何とか返事をしやあがれ。

お六　實にお前に濟まねえが、私アほんに迷つたのさ。

小兵　うぬ、亭主の前でよくもそんなことをぬかした。

ト片肌ぬいできつとなる。小兵衛の腕に犬といふ字の痣あること。

伊之　（思入あつて、）あゝこれで讀めた。女房を玉に美人局、扨は亭主も、（ト腕の痣を見て、）やゝ、腕の痣は。

ト目を附ける。

小兵　や。（ト小兵衛うろたへて、肌を入れる思入。）

伊之　こいつあ仕事にかゝつたか。

小兵　それに似寄りの、この片袖。（ト前幕の袖を見せる。）

伊之　すりや、その袖を。

小兵　證據にしたなら枝が咲く。さ、若いの、こんな餘計の仕事があつちやあ、よもや女房と間男を。

伊之　さあ。いや、しやしたよ。

小兵　いよ〳〵こなたが、

伊之　女房の間男、

小兵　間男ならば首代貰はう。

伊之　むゝ、してその首代は。

小兵　たんともいらねえ、たつた百兩。

伊之　なに百兩、いやお前も眼玉は大きいが、こりやあちつと見損ひだ。高が裏屋の居候、金と言つちやあ。

小兵　いゝや、ないとは言はさねえ。袱紗包みに、小判で百兩。

伊之　や。

小兵　手にあることも見ておいたが、ないと言ふならこの片袖、首代替りに詮議をせうか。

伊之　さあ、それは、

小兵　耳を揃へて百兩だすか。

伊之　さあ、

小兵　この片袖の詮議をせうか。

伊之　さあ、

小兵　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

小兵　きり〳〵百兩、出してしまへ。

伊之　むう、すりやどうあつても百兩を。

小兵　出さにやあ袖の出所を、詮議したなら勾引。

伊之　むゝ。

小兵　いやでも首代出さゞあなるめえ。
伊之（思入あつて、）いゝや、首代出しにくいが、その片袖を賣るなら買はう。
小兵　むゝ、百兩ならば首代兼ねて、この片袖も賣つて進ぜう。
伊之　賣るとあるなら引替へに、
小兵　この片袖と、（ト袖を伊之助の前へ出す。）
伊之（伊之助懷より金を出し、）この百兩。
兩人　どれ。（ト兩人引替へに取り、思入。）
小兵　首代たしかに受取つた。
伊之　こつちは袖を買ひきる百兩、これぢやあおれが惡名も。
お六　間男沙汰も、
小兵　算用濟んだ。
ト四つの鐘鳴る。
お六　あゝもう四つか、寒くなつたの。
小兵　寢酒はあつたか。
お六　あい、とつておいたよ。
小兵　どれ、歸つて煖まらうか。
ト立上り、懷より金を出してお六に見せる。）

お六　お前またそれを取られちやいけねえよ。
小兵　馬鹿ア言へ、今ぢやあ堅氣だ。取られる金がありやあ、鳥金でも貸すわい。
ト言ひながら小兵衛、お六門口へ出る。
伊之　あ、ちぎれた袖を百兩とは、すてきに高い代物だ。
ト此時戸棚の中にて、ばた／＼と音する。小兵衛この音を耳にして、
小兵　あれこそ、たしかに。（ト内を覗くを、）
伊之（つか／＼と來て門をしやんと閉め、）えゝ、をとゝひ來なせえ。
ト唄になり小兵衛お六に囁く、お六うなづき下手へはひる。小兵衛は路地口へはひる。伊之助門口を明け思入あつて、
何は兎もあれ若草が、戸棚の中にゐることを、氣取つた上は此家に、うかつに足は留められねえ。ちつとも早く巣を變へて、（トつか／＼と行き戸棚の戸を明ける。後ろの壁を切破りあるに、伊之助びつくりして、）やゝ、こりや戸棚の壁を切破り、（ト此の時切破りし穴より、以前のひね六脇差をさし、ぬつと出る。）や、われは。
ひね　若草が客のひね六だ。（トずつと出る。）

伊之　扨はこなたが、若草を。
ひね　おゝ、盜みだした。
伊之　なんと、
ひね　これまで廓にゐる中に、われ故多くの金を取られ、鼻毛をよまれた意趣返し荷擔人頼んで隣りから、壁を破つて若草はこのひね六が盜みだしたが、われがあつては寐覺が惡い、殺しておいて若草を此ひね六が女房にする氣だ。さあ、かなはぬところと覺悟しやれ。
ト拔きかゝるを伊之助留め、戸棚の內を見て、
伊之　むゝ、壁の後ろはたしかに小兵衞、扨は是れも彼奴がさしがね。
ひね　知れたことだわ。(ト拔打に斬つてかゝるを、ちよつと立廻つて、)
伊之　表を廻るは面倒な、破れし壁より、(ト伊之助行かうとするを、)
ひね　われをやつては。
ト支へる。それより伊之助有合ふ勸化幟にて立廻り、ひね六の一腰を打落し、これを取つて行かうとするを留める、この立廻りの內にひね六を一トかせ切る、ひね六ワツと倒れる、伊之助見て、

伊之　や、手の廻りにて思はぬ深手。
ひね　人殺しだ〳〵。(ト聲を立てる。)
伊之　えゝ、是非に及ばぬ。
ト ひね六を斬り倒す、ばた〳〵になり、以前の西念早足に出來り、門口を明けこの體を見ておどろき、
西念　やゝ、こりや伊之助殿には、人をあやめて、
伊之　さ、これには段々。(ト言譯をしようとする。)
西念　あゝこれ、(ト四邊へ思入あつて)ひそかに〳〵。
ト心遣ひの思入、伊之助ひね六に止めをさす。この見得時の鐘の送りにて道具廻る。
(元の佛師屋の場)――本舞臺元の佛師屋の道具へ戻る。こゝに若草に猿轡をかけ、赤鬼の勘太、青鬼の金八繩にて縛りゐる、小兵衞はよき所に焚火をしながら砥石にて脇差を磨いでゐる。此の見得時の鐘凄き合方にて道具納まる。
勘太　親方、この女はどこへやらう。
小兵　いや、こかすにや及ばねえ、野郎の來るまで二疊へでも入れておけ。
兩人　合點だ。さあ運びな。(ト兩人して若草を上手の屋體

へ入れ、出て來る。)

小兵　ふん、毛前達は刃物はあるか。

金八　別當所で一つづゝ借りて來やした。

ト閻魔の蔭より脇差を出す。

小兵　それぢやあ野郎が來たならば、な、(ト囁き、)合圖をしるべに、

兩人　下からぐつさり。

小兵　どぢを働くな。

兩人　合點だ。

ト下手の揚板をあげ、緣の下へはひる小兵衛刀を磨ぎしまひ、焚火にてきつと見る。時の鐘下手の壁の破れより伊之助一腰を差し、窺ひ出で兩人顔見合せ、小兵衛は刀を後ろへ匿し、兩人きつと思入。

小兵　や、こなさんはさつきの、

伊之　間男でござります。

小兵　夜更さふけにどこからござつた。

伊之　くづれた壁の破れから。

小兵　はて、無遠慮な。(ト伊之助のよき所へ住ふを見て、)して、何ぞ用かい。

伊之　あい、無心に來ました。

小兵　そりや何を。

伊之　(以前の片袖を出し、)この片袖の身ごろをば、

小兵　なんと。

伊之　貧乏暮しの押入から此家へぬけるくづれ穴、鼠が引いたか隠したか、身幅も狭き女物、而も廓の派手模樣、身ごろの合ふわつちに下せえ。

小兵　いや鼠が引いたか知らねえが、見なさる通りの裏長屋、隠しどころもねえ住居、

伊之　すりやこなさんはこの袖の、

小兵　身ごろとやらは知らねえの。

伊之　知らぬとあらば家搜しして。(トきつとなる、上手屋體にてばつたりと音する。)や、あの物音は。

小兵　鼠が出る故地獄おとしさ。

ト此の時伊之助の前へ白刃二本出る、是を見て、

伊之　や、この白刃は。

ト小兵衛南無三といふ思入にて有合ふ摺鉢を焚火へ置く、これにて暗くなる。

地獄落しか極樂か、劔の山よりけんのんな。

小兵　や。

伊之　こりやめつたに油斷はならぬわい。

ト時の鐘凄き合方になり、双方へ別れきつとなる。これと同時に上手屋台より若草縛られたまゝつか／＼と出る。小兵衛伊之助を切らうとするはずみに若草の縄を切る。これにて猿轡取れ、暗がりにて危き立廻りになり、探り／＼伊之助若草へ行当り、頭を撫でゝ見て

若草か、

若草　伊之助さんか、

ト此の声をしるべに小兵衛斬つてかゝる。伊之助身をかはし離れる。この拍子に若草たぢ／＼となり、上手の鏡台へ手を突き、手へ剃刀にさはりし思入にて取上げる。この中縁の下より勘太、金八出て閻魔を小楯に面白き立廻りよろしくあつて、小兵衛若草を一刀斬る、若草アッと倒れる。この声に伊之助小兵衛を斬る、小兵衛立廻つて伊之助を斬る。勘太若草を引附ける。金八は摺鉢の上へこけかゝり、そのまゝ摺鉢を取る、これにて焚火パッと燃える。小兵衛閻魔の上より斬りかかる、伊之助刀にて受ける。この見得にて明るくなり、三人きッと見得。小兵衛の疵口より流るゝ血汐若草の血と一つに寄るにきつと目を附け、

小兵　やゝ、今若草を斬りし血潮と、我が疵口より流るゝ血と一つに寄りしは、むゝ、

両人　何と

ト伊之助、若草小兵衛に斬つてかゝるを、勘太、金八支へる。小兵衛思入あつて、

小兵　もしや若草が左の腕に、犬といふ字の、（ト又立廻りの内、勘太、金八若草の腕を捲り痣見ゆること）痣のあるからは。（ト又立廻つて、伊之助勘太、金八を当てる。小兵衛守り袋より印籠を一重出し）この印籠をとくと見やれ（ト投げてやる）

伊之　（取上げ見て）この印籠は若草が、親の形見と肌身放さず、

若草　大事にかけし片々の印籠、

ト草若守り袋より印籠を出し、合せて見る。

伊之　時代蒔絵の雪の梅、

若草　模様もしつくり合ひたるは、

若草　小松殿より拝領せし、

小兵　扨は平家の某と、

若草　臍の緒書きに記しあるは、

小兵　邪慳な親のこの盛次、

伊之　そんなら此方が實父なりしか。

若草　とゝさんでござんしたか。

小兵　別れ程經し娘であつたか。

　ト三人顏見合せ、

三人　やゝゝゝ。

　トびつくり思入、小兵衛思入あつて、

小兵　あゝ思ひ出せば一昔、この身の懺悔聞いてくりやれ。（ト誂への合方により、）今は何をか包むべき、元我こそは平家の近臣、越中の前司盛俊が一子次郎兵衛盛次、父前司子なきをうれひ犬神を祈りて儲けし故、腕に犬といふ字の痣あり。我またいまだ壯年の時、主馬盛光が娘をめとり間もなく我胤を懷胎なし、誕落せしは女子にて、不思議なるは左りの腕に犬といふ字の痣あるを、母は見るよりいまはしく、心苦しく思ふ内遂にはそれが原因となり、七夜立たざるその内に果敢なく此の世を去りし故、是非なく／＼も乳母の乳で二月あまり育てしが、日頃信ずる陰陽師我娘をつら／＼見て、劍難の相ある上家に祟ると敎へられ、不便ながらも當歳にて三條小橋へ捨つる折、親子の緣の盡きずして、名のり合ふべき時もがなと傍にあり合ふ印籠の上の一つを守袋へ入れ、涙ながらに棄てたるは早二十年の昔にて、それより平家沒落して斯く淺ましき身となりはて、祟ると言ひし家もなく、今更棄てしを後悔なし、雨の夜雪の朝には思ひ出さぬこともない。あゝ親はなくとも子は育つと、よくも成人なせしよな。

　ト小兵衛若草を引寄せる、若草もすがり寄り、

若草　年頃尋ねし父さんに、めぐり逢ひは逢ひながら、思はぬ深手を負ひし身に、逢ふは別れの今の仕儀。（ト若草の腭へ手をかけ、）

小兵　娘。

若草　父さん。えゝ、おなつかしうござんすわいな。

　ト若草すがり泣く、小兵衛涙を拭ふ、伊之助ほつと思入あつて、

伊之　神ならぬ身の情なや、知らぬことゝは言ひながら末は女房と約束の現在親を手にかけしは、天より罰を受けたるか。棄兒と思ひし若草は系圖正しき身と知れて、今更なんと言譯も立つに立たれぬこの場の有樣。

若草　名乘る甲斐なく先立つ不孝、殊には親に刄向うて薄手ながらも手を負はせ、嘸や浮世の口の端に、

伊之　かゝりや繫がる親人へ、刄を當てし申譯、（ト伊之助脇差を腹へ突立て、）これにてどうぞ許して下せえ。（ト若

痛い(思ひ入れ)

小兵　(見て、)あゝよしなく我が名乘りし故、あたら花を散らせしは、思へば／＼不便やなあ。

伊之　知らぬ事は兎も角も、親殺しの汚名を受け、

若草　死ぬる二人の身の悲しさ、

伊之　犬死なすか、

兩人　口をしい。

小兵　いや、犬死ならぬ、御身替り、

兩人　すりや、何人の。

小兵　(思ひ入あつて、)三位中將重衡卿まつた吳羽の內侍詮議きびしき街の立札。(ト懷中より人相書を出し、)そち達二人が面體年頃、丁度似寄に首討つて源家へ渡し若干の、恩賞受けんと邪慳にも、科なき者を殺さんと思ひし者は棄てたる我子、圖うてもなき御身替り、二人が首にて一旦の詮議の圍み開かせて、何處に忍びましますか、お行方尋ぬる我心底。

わた　(この以前より門口に窺ひゐて、)扨は小兵衞は平家の落人、殊には重衡內侍が贋首、注進なして褒美の金子さうだ。

ト行かうとする、路地口より西念出で、おわたを捉へ突廻して當て、下手の釜のなかへ打込む。

小兵　(門口を明けこれを見て、)や、あなたは隣りさ。(ト思入。)

西念　氣遣ひあるな、盛次殿。

小兵　や。(トきつとなる。)

西念　(內へはひりて、)その贋首へ極書、この西念が進上申さう。

小兵　なんと。

西念　假令似寄りの面體でも、邪智深き源氏方、證據なければ受取るまい。その極はこの系圖。

ト前幕にて手に入りし系圖を渡す。

小兵　やゝ、こりや重衡公御所持の系圖、扨はこなたも由緣の者か。

西念　いかにも、最前よりの一部始終承つて窺きしは、現在血筋の人々故。

小兵　然いふこなたは何人なるぞ。

西念　名乘るも面ぶせなれど何をか包まん、我こそは貴殿の妻女の弟たる、主馬判官盛久なり。

小兵　やゝ、盛久殿であつたるか。

西念　我十歲代のその折に一度逢うたるその儘にて、領地

に人となつたる故、互ひに面は見忘れしが貴殿の懺悔に不思議の對面。あゝ、さはさりながら、名乗る甲斐なき今の身の上。

小兵　すりや、貴殿にも世を忍び、

西念　亡き一門の追善旁々、時もあらばと恥を捨て、表は殊勝な有髪の僧、

伊之　(聞いてゐて思入あつて、)そんなら、つながる、

若草　あの伯父様でござりましたか。

伊之　あゝ現在血筋の伯父なれど、知らぬことゝてこれまでは、

若草　他人向きにて二人とも、

西念　お世話になりしも、

伊之　亡き妹の導きなるか、

若草　あゝいかなる過去の宿業にや、

西念　未來の苦患眼の前、

若草　親子双を合はせしは、

小兵　とりもなほさずこれ修羅道、

伊之　閻魔の前に寄り合うて、

若草　見るもうたてき劍の山、

西念　心の鬼に責められて、

小兵　阿鼻叫喚の苦しみより、

伊之　つらき親子の、

若草　一世の別れ、

西念　思へば果敢ない、

小兵　身の上ぢやなあ。

ト四人手を取交し、よろしく思入。

伊之　あゝ、いつまで言うても返らぬこと、憚りながら御介錯。

小兵　いふにや及ぶ。

西念　あたら若木を、南無阿彌陀佛。

ト伊之助腹の刀を引廻す。若草うつとりとなり、よろしく手を合はす。

小兵　えゝい

ト首を打落す。これをキッカケに遠寄せの鳴物を打込む。西念思入あつて、

西念　や、あの太皷は。

ト此時勘太、金八心附き兩人にかゝるを立廻り引附ける。

小兵　最前女房お六に言附け、重衡卿吳羽の内侍捕虜とならせし故、首討つて渡さんと梶原が旅宿へやつたれば、首

受取りの討手ならん。さるにても此系圖、いかにして手に入りしぞ。

西念　その一卷の手に入りしは、夜前隅田の川原にて。

小兵　やゝ、なんと。（ト思入。）

西念　折しも月の雲隱れ、あたり小暗き川の岸。（ト勘太、金八かゝるを立廻りながら。）入水の者か水音にざつとさはだつ群鷗、怪しと窺ふ蘆原にて蹟き拾ふその系圖、帛紗は覺えの劍先布、內やゆかしく開き見れば、系圖と共に入れありしは、秩父三十四ヶ所の守り、これにて思ひ合すれば重衡卿には順禮に、姿をやつしてお忍びありしか。

小兵　さては夜前隅田川にて、軍用金になさんずと、金に目がくれ突落せし順禮夫婦は、まさしく尋ぬる、やゝゝやゝ。（トびつくりなし。）身替り首にて詮議をゆるませ、君の御行方尋ねんと思ひし事も今となり、水の哀れや兄弟も腕の惡の犬死なるか。たゝ知らぬこととは言ひながら、現在この身は主殺し。（ト腹を切らうとする、勘太、金八これを支へる立廻り。）

西念　やれ待たれよ、早まられな。もし人違ひであるならば千萬悔いても返らぬこと、急く所ではない盛次殿。いざ此上は二人の首級、片時も早く持參あられよ。

梶原源太景季　（上手の屋體にて。）やあ、持參に及ばず、景季疾よりこれにあり。

小兵　なんと。

ト小鼓の入りし合方になり、上手の屋體の障子を引拔く、內に景季長上下大小にて、左右に袴股立の郞等桶を持ち控へゐる小兵衞これを見て、

こりや、いつの間に。

景季　最前女房が注進に、裏より忍び始終の樣子。いや、疾より是に待受けたり。

郞一　重衡內侍二人の首級、

郞二　早く實驗に供へてよからう。

トこれにて小兵衞思入、西念兩人の首を景季の前へ出し、

西念　お訴へ申せし重衡內侍が首、證據は卽ちこの系圖、いざ御檢分下さりませう。（ト系圖を出す。）

景季　（見て。）ほゝお三位中將重衡、吳羽の內侍に相違ない、出かした／＼。よくぞ討ちしぞ恩賞くれん。やあやあ、申附けたる品これへ。

お六　（下手にて。）はあ。

ト時の太鼓にて、下手よりお六先に三位中將、呉羽の
　前順禮裝にて出來る。

小兵 西念 （見て、）これは

お六 もし、こちの人、梶原樣のお情にて下しおかるゝ御褒美は、常々お前の尋ぬる品、ようお禮をおつしやりませ。

小兵 すりや御二方を　はゝはッ、御情厚き御賜物、有難く頂戴仕りまする。

西念 して御二方には、如何して、御安泰にてましませしぞ。

三位 夜前隅田川原にて測らず入水なしたるが、日頃信心なし奉る、熊野三社の靈驗なるや、

呉羽 水に溺れず不思議にも、流れ寄りしは待乳の麓、折よくこれなる景季殿通行ありて助けられ、

お六 御二方のお命に、恙のないもあなたのお蔭。

小兵 は、ゝ寬仁大度の梶原殿へ、此の身の素性包むに詮なし。

西念 名乘る甲斐なき事ながら、われ／＼こそは、

景季 こりや、平家に由緣の者あらば、首討てとある、鎌倉殿の嚴命なるぞ。

兩人 むう。（ト兩人思入あつて、）

西念 斯くまで厚き情を受け、刃向ふ刃のあるべきぞ、ただこの上は御二方の御安泰を願ふのみ。

小兵 いかにも、是まで集めし軍用金も、凡そ員數三千兩を祠堂金となしたまひ、君にはこれより高野へ登り、亡き一門の追善供養。

三位 ほゝ言ふにや及ぶ、某も疾より浮世を捨法師、

呉羽 佛へ仕ふる身は墨染め。

ト三位中將、呉羽肌を脱ぐ、下は白の裝に墨染の袈裟をかけゐる。

西念 その御供は、この西念。

景季 重衡ならぬ今道心へ、源太景季施物なさん。

ト以前の系圖を三位中將へ渡す。

三位 や、こりや失ひし家の系圖、忝ない。

小兵 是にて我も安堵せり、今ぞ此身の邪曲に、積惡報ふ自業自得。（ト刀を腹へ突込む。）

景季 ほゝお、惡に強きは善にも強し、

お六 私も共に、死出三途。

ト お六死なうとするを西念留めて、）

西念 こりや、死ぬる命をながらへて、

三位　夫の菩提、

吳羽　法の道連。（ト此時鷄鳴く。）

景季　最早鷄鳴。

郎等　お立ち。

大勢　（下手にて、）はあゝ。

ト皆々四天矢筈の紋附の提灯を持出る、この時、

樂屋頭取　（立いで、）まづ今日はこれぎり。

ト目出度く打出し

閻魔小兵衞（終り）

鶴下當時）繪番附

蔦紅葉宇都谷峠

五幕

前座は伊丹屋重兵衛が故しゆうの爲の　世
人殺しよしないことゝ氣も筑田鬼藏　界
小兵衛が質入の茶入を詮議に町髪結ひ
結ぶ元結悪縁に二世を掛たる後の月　絡
尾花才三が戀中は材木町の白木屋お駒
時菊月狂言　怪談御伽草　二
御贔屓御好
後座は座頭の文彌こと官金ゆゑに身　組
果す恨みは絡廻り來て仁三が強請に
居酒店ざつとおしづが死霊のたゝり商　三
同志と白無垢に一對そろふのその雛
契情古今が色容は柴居町の黒木屋彦三　組

伊丹屋のゆすり（芳幾筆）

蔦紅葉宇都谷峠

（宇都谷峠座頭殺し――五幕）

序幕

櫻川佐々木家の場
柴井町伊丹屋の場

（役名――伊丹屋十兵衛、佐々木桂之助、尾花六郎左衛門、筑田喜藏、尾花才三郎後に髪結才三、鞠月丹下、佐野松屋淸兵衛・女衒源六、田川伴藏、鳴子見六、伊丹屋丁稚三太、茶道兵才。十兵衛女房おしづ元伊筒屋の抱へ勝山實ハ六郎左衛門娘おしづ、佐々木家の腰元小牧實ハ白木屋お駒、佐々木家の妾千種等。）

（佐々木家塀外の場）――本舞臺正面一面の練塀、松の釣枝、眞中に用水桶、總て佐々木家塀外の體。○△□の中間三人、提灯六尺棒を持ちて立ちかゝり、時の鐘にて幕明く、

△　筆助、可内、何と今夜も雨氣と見えて、暖かなことではないか。

○　時候は寒いはうが順だが、夜更になると袷ぢやあ冷えつくやうだわい。

□　その冷え〳〵とするところへ、用意の江戸一、（ト袂より三合德利を出して）それ〳〵、これさへありやあ夜明まで、何つことはない。

△　ツイとろ〳〵と寐るといふのか、いや覺束ねえ番人だ。

○　手前のやうに酒の好きなものは親達の勘當、すでに御家老の筑田喜太夫樣の御子息喜藏樣が、御納戸金を二百兩遣ひ込み、御追放になられしやつたを知つてゐるか。

□　その二百兩も色狂ひといふでもなく、ぱつと遣つたといふ噂もないが、

△　派手なお噂は聞かねども、今日此頃は以前お邸に勤めてゐた、中間の坊主小兵衛とかいふ者の世話になつてござるといふが、手に覺えた内職はなし、たゞ・とゞのつまりが、斬取り强盗は武士の習なぞと、手前勝手な道理を附けて、惡いことを仕出すものだ。

○　この頃の物騷といひ、屋敷奉公はしても、劍道の道は

少しも知らず險難性だから、中々泥坊を捉へようなどゝいふ手柄ができるものか。

△　さうあきらめて見りやあ、二本差しても犬脅し、案山子に劣つた男だなう。

□　筆助はともあれ、おぬしア噪楽にまかれて、二人棒だらう。

○　その二本棒は樂しみだが、その傍で毎晩一合酒といふのも、氣晴らしになるやつよ。

△　そんなら、一合はずまうか。

兩人　又味噌を上げようと思つて。

△　何にも言ふな、元締の肩へ乘つて來いといふに。

兩人　おんぶとあれば、何時でも。

△　火の用心々々、

ト三人は上手へはひる。此の時淒き合方になり、練塀より見越の松川ゝ獺を傳はり、筑田喜藏頰冠りにて、口に更紗包みの茶入の擣を啣へ出來り、本舞臺へおり、身繕ひをして、

喜藏　佐々木家の重寶花形の茶入、この預かりは豫て遺恨ある尾花六郎左衛門、茶入紛失なす時は切腹、身共はこれを貢代なして此の身の有附、どれ人目にかゝらぬその内に、塒を替へて工夫を附けようか。

ト思入あつて行きかける。此時後ろへ尾花六郎左衛門、蛇の目の傘にて顔を隱し窺ひゐて、此時喜藏の擣を取つて引戻し、ちよつと立廻り、トヾ喜藏脱れて花道へ行く　これにて、

六郎　曲者、

トいふ。喜藏小石を取つて打付ける。六郎左衛門は傘にて受ける思入あつてきつと見込る。此の見得風の音にて道具廻る。

（佐々木家千種部屋の場）――本舞臺常足の二重、正面一面の金襖、二重眞中に千種家の掛物ここへにて仕ひ、この傍に蒔繪の煙草盆、文庫の上に鼻紙臺及び守り本尊を黒の厨子に入れ經卷を載せてある。平舞臺に腰元二人、他に二人の腰元床几にて茶道兵才に向ひ、各々紅葉の折枝を持ち立廻つてある、白障子にて道具納まる。と又立廻つてトヾ兵才打ちすゑられる、

兵才　まゐつた／＼

腰一　何と兵才殿、女子でこそあれ、覺えの手の内、

腰二　これにも懲りず、御自慢なされますかえ。

兵才　いやもう恐入りました。然し負くるは勝の習ひとやら、無手ながらからうして。

ト兵才腰元の一へ組付く。一これを振切つて突退ける。又立かゝるを、後ろより兵才の眼を隠す。兵才手を取らうとするを、両人してしつかと押へつける。兵才足をばた／＼してもがく。

千種　（思入あつて、）おゝ女中方、お手柄々々、これにて縛しめ、暫く窮命。（ト文庫の紐を投げてやる。）

二人　心得ました。（ト兵才を縛る。）

腰二　重ね／＼の恥辱をとりし兵才殿、我々へ降参なせば、

皆々　この窮命に許しまするぞ。

兵才　えゝ情ない、女子と侮り生捕らるゝとは

腰一　以後の見せしめ、お中の口まで引ばつて参じませう。

同二　こりやよい所へお氣が附かれました。憎さも憎し、何ぞ仕置をいたしませう。

同一　その思ひ附はいつそのこと、墨塗りにいたしませうか。

千種　それも一興、兵才殿の面體を、反故染にしてもだいじない。

腰一　かしこまりました。さあお許しの出たからは、観念したか、

皆々　よいわいなう。

兵才　桃栗観念恥かきねん、わしは残念、もう御免。

腰三　へらず口を利くからは、それ墨塗りぢや／＼。

皆々　かしこまりました。（ト硯を取る。）

兵才　これはたまらぬ。

ト兵才逃げだす。此時花道より望月丹下出来り、この様を見て、

丹下　これは／＼打揃うて何事をしめさるのぢや。扨は女中衆達の手籠めに逢ひし兵才どの。さりとは面白をかしい御殿の有様、ちと身共へもお聞かせなされい。

腰四　いえ／＼、あなた方の御存じないこと。

皆々　思ふ存分折檻をいたしまする。

兵才　存分にされてはたまらぬ。丹下殿女中方へ、お詫をお願ひ申しまする。

丹下　いやはや卑怯千萬。何かは知らねど身共に免じて、御了簡なされて遣はされい。

腰二　丹下様の御挨拶、この御兵才殿が剣術の、悪口さへ言はれぬとあれば。なあ呉竹どの。

同一　それ〳〵、武藝を嗜する兵才殿、是に懲りてきつとたしなみめさるゝなら、皆々へも執成し、

丹下　拙者もお詫いたすほどに、

三人　お許しなされませいなあ。

千種　丹下殿のお口添へ、いよ〳〵降參とあるならば、

兵才　いやもう降參所か坊さんでござる。お女中方、これ、頭に免じて坊主眞平御免下されい。

皆々　おほゝゝゝゝ。（ト笑ひながら紐を解く。）

兵才　やれ〳〵、面目次第もない。（ト下手へ下る。）

丹下　兵才殿たしなまッせえ。けれう身共が參り合せて其方の仕合せ、拳も鈍き茶道の身で劍術は無益の沙汰。身共などは斯く兩腰をたばさみ、立派に御知行頂戴いたしてこそ、弓馬槍刀の心掛なうてはならぬ。尤も千種の方は劍術に執心とあつて附々の女中にまで御指南なさるゝと承はるが、兵才殿が此の體たらく、感心仕ッてござる。

腰一　いやもう、拙き業も女子の一心、

一二　お恥しう存じまする。

丹下　又拙者もよい折柄なれば、千種の方へ御稽古を願ひたう存じまする。なんとお叶へ下さるか。

千種　未熟の手の內、どういたしましてお立合ひなりませうや。ほんの申さば、戯同様なことでござりまする。

丹下　その戯れが大執心、幸ひこれに紅葉の折枝、色づくところが又一しほ、さゝ是へ〳〵。

千種　そのやうにまでおつしやるを、辭退致すも不興とやら。腰元衆、丹下殿のお相手に出やいなう。

腰一　最前から望む所と存じをれど、お許しもない其內に、

同二　此の方より願ひましては、失禮と存じまして、控へてをりまする。

同三　たつて御所望なれば、千種の方の仰せの通り、そちたちの內望月様のお相手に。

一二　かしこまりました。

ト立上らうとするを、丹下思入あつて、

丹下　あいや暫くお控へなされい。拙者が相手と申すは千種の方、我が手の內は鈍くとも、免許を受けたる秘事口傳の儀もござる。それとも御意にかなはずば、是にござる桔梗どの、身が相手にならつしやれ。

腰三　どういたしまして未熟の私、あなた様のお相手なぞとは、思ひもよらぬことでござりまする。

丹下　なるほど、こりやさう思はつしやるも尤もなやか、望月丹下も夜叉鬼神ではござらぬ。女子を相手に致すか

らは、ずんどあしらうて遣はさう。(ト言ひながら立つて、その腰元の後ろより〕から組みつかれたら、どうぢやどうぢや。

ト押へ付ける。これにて他の腰元三人丹下へかゝる。兵才これを好きしほに下手へ來り、月の備へ物の團子枝豆などを取つて喰ふ。この中丹下さん〳〵に打すゑられる。この時兵才薄のつばなを持來り丹下の耳へ入れる、丹下はこれにて耳の穴をほじりながら兵才を追廻り、その中丹下は薄の花活を引つくり返し水流れるこなし、腰元四人は丹下をめつた打にする。兵才は花活を取つて額を突込み、花道へ行く、

丹下　まゐつた〳〵。

皆々　こりや丹下様、御卑怯でござります

ト、この中に兵才は花道へはひる。と、花道より尾花六郎左衛門出て來り、

六郎　この月見に奥殿の賑び、實に泰平の瑞相。(ト舞臺へ來り)これは千種の方には、まづ御健勝の體、大慶至極に存じ奉りまする。

五人　あなたは尾花六郎左衛門様。

六郎　いづれも打揃うて、當日の賀儀祝し申さん。

千種　月を祝して今日の出仕、互ひの滿足。

六郎　取分けお次で窺ひまするに、望月氏を始め腰元衆の武藝のお試し、感心仕ッてござりまする。

丹下　身共は未だ獨身でござる、相應な緣談がござるかな。

六郎　これはけしからぬ、つんぼウ話しだ。

丹下　兎角女は眉目形、女に力は入らぬこと。

六郎　あはゝゝゝゝ、少々氣逆上と見ゆる。

皆々　おほゝゝゝ。

丹下　これさ〳〵身共が申すこと間違つた儀は申さぬ。そのやうに笑はるゝな、をかしうはござらぬ。

腰一　それ〳〵、それが違うてをりますぞえ。

ト大きな聲にていふ。

丹下　あの、相應な緣談があると申すか。

腰二　もし〳〵、丹下様はどうしたことか、きつウお耳が遠うおなりなされましたなア。

同三　あまり打ちすゑた故、顚倒なされて、俄の聾。

同二　ほんにさうでござんしたか、笑止なことでござんすわいなあ。

千種　いや〳〵そりやさうではあるまい、年の加減陰病の業とか申すことか。

腰四　千種様へ申上げまする。お耳の遠いその譯は、あの兵才殿が洒のつばなを振廻し、その時丹下様のお耳へつばながはひりましてから、俄の聾でござりませう。
腰二　ほんに、それで聾になりましたか。
皆々　爭はれぬものでござりまするなあ。
六郎　いかさま、物の譬には聞き申せしが見るは始めて。丹下殿を打ちすゑしはあつぱれ感心、まさかの時は一方の、防ぎともなつて頼もしい。
千種　未熟の敎へも武家のたしなみ、生兵法は怪我のもと。
六郎　いや／＼左にあらず、女ながらも武家のたしなみ、誠や人間は病ひの器、どうか直して遣はしたい。
　ト此中丹下耳の穴をほじる、皆々へこなしあつているいろをかしみの思入。千種の方は六郎左衛門の顔色を見て、
千種　丹下殿も病ひより、疾より見ればこなたの顔色常ならず、息づかひも苦しき様子、服薬せずばかなふまい。養生が肝要なれば心得違ひの、いや、薬違ひのないやうに。
六郎　こは有難きその仰せ、いかにも持病の惱みはあれど、なに、これしきに屈せぬ某、別に替りはなけれども、老少不定は時を嫌はず、こゝらが常の心得かと存じまする。
千種　おゝ聞及ぶそなたの氣質、忠義ばかりか何事も、美は磐石のまことの武士と、君にも日頃御噂、随分其の身を大切に、國家の礎朽ちせぬやうに。
六郎　心の磐石くだくるとても、忠義の魂變せぬそれがし。
千種　勇ましきその詞、これより直に君の御前へ。
六郎　拙者も同道。
千種　尾花殿。
六郎　望月様は、これにゆるりと。
千種　さ、皆もいつしよに。
六郎　まづ、
皆々　お越しなされませう。
　ト唄になり、皆々奥へはひる。丹下獨り殘り思入あつて、
丹下　何の事ぢや、身共一人置きざりにして、べちや／＼しやべつて奥へ行きしが、たゞ不思議なは耳のあんばい。がん／＼致して聞えねども、わざと聞える體に見せかけ、その座を繕ひおけば、尾花を詰め千種の方、それと知らぬは身共が頓智發明と申すものぢや。これを思へば世の

中に利口な者は身共一人、此上は諸事萬端引受けて、普請奉行お金方、役德は皆すり込み、小牧を口說いて身共が女房、さううまくゆけばよいが。

ト手を組み思案のこなし。奥より田川伴藏、鳴子曳六出來り、

兩人　丹下さま。（ト言つても聞えぬ思入。兩人思入あつて、）

伴藏　望月氏何をうつかり、田川伴藏、

曳六　鳴子曳六、豫て申し談じたる一件も、大半上首尾。

兩人　（猶だまつてゐるので、）もし、丹下樣。（トきつと言ふ。）

丹下　（心附き、兩人を見て、）是は各、唯今出仕めされたか。

伴藏　いかにも左樣、貴殿は何やら考へて、御思案の大福餅、旨いことをやらるゝな。

曳六　その分口なら身共へも。（ト言ひかけるを、）

丹下　いや、斯やうでござる。手前儀はちと仔細あつて、耳を遠方へ遣はしました。唯今何かと御意なされたが、少しも聞えませぬて。

伴藏　それはお氣の毒、申し談ずる一儀もあれど、聾となられては、

曳六　お年も若いが聾とは、あんまり聞えぬ御病氣、

伴藏　「丹下殿は二十になるやならずにつんぼうとは、嘸聞きたうあらうのに、」

丹下　「なぜ聞かせて下さんせぬ。」（ト淨瑠璃を語る。）

兩人　えゝ、何を馬鹿々々しい。

ト丹下の背中をたゝく、これにてぎつくりし、耳の聞えるこなし。

丹下　あゝ嬉しや〳〵。

兩人　何が嬉しうござる。

丹下　唯今御兩所がどつさりたゝくそのはずみ、つかへし耳がなほりました。

曳六　すりや貴殿のお耳が、元々に聞えるやうにおなりなされたとか。

丹下　さればのこと、はずみに打つたがもつけの幸ひ、蟻の囁くも聞えまするて。

伴藏　それは重疊、然らば豫て筑田喜藏殿と心を合せ、尾花を親子諸共に何ぞれかぞれ、罪にとつて落せし上、彼等二人をぼんでんごく。

曳六　佐々木の家で兩人が重役になる上は、心のまゝと思

ひの外、あの喜藏殿は、御納戸金二百兩盗みせしを、尾花親子に見出され、門前より阿房拂ひ。

伴藏　それ故猶々遺恨重なる尾花親子、筑田氏が計略を以て、昨夜寶藏へ忍び込み、

丹下　あこれ、(トあたりを窺ひ、)六郎左衛門が預かる所の、花形の茶入を盗み取る手筈、首尾よく奪ひ取られしか。

曳六　その儀も上首尾、然し今朝より紛失せし、噂もなきは合點行かぬ。

伴藏　それが即ち智謀拔群なる六郎左衛門、御家の瑕瑾と相なる故、事穩便に計らふ手段。

丹下　それで様子は殘らず知れた、先刻出仕の六郎左衛門、彼れが語音を探り見ん。

兩人　それこそ妙計。

丹下　これ、(ト制して、)御兩所ござれ。

兩人　心得ました。

ト唄、調べになり、丹下先に兩人奧へはひる。花道より尾花才三郎出來りて、

才三　恐れ多くも我君の御寵愛深く、未熟なる某へ殿樣のお妾上を、仰せ付けられしは此身の面目、今日式日のことなれば、刻限よりも早けれども、取次の御茶道當番は誰人ならん。何はともあれ心急き、御詰所にござらねば、萩の間へ推參いたさう。さうおや〳〵。

ト奧へ行かうとする。此時奧より佐々木の腰元小牧出來り、互ひに行違ひ思入あつて、

小牧　あなたは才三郎樣、唯今御出仕遊ばしましたかえ。

才三　いかにも、疾より出仕はいたせども、茶道衆もござらねば、其取次を相待つところ、小牧どの、憚りながら、お尋ねなされて下されぬか。

小牧　そりやもうお心易いことなれど、そのやうにお急きなされずともよいほどに、まあお下にござんせいなあ。

才三　それぢやと申して。

小牧　はて大事ござんせぬ、御用のお邪魔はいたしませぬ。御殿の樣子はよう存じてをりますぞえ。

才三　いかさま、晝夜お附の小牧どの、こりや尤もであつたわいなあ。(ト下にゐる。)

小牧　もし才三樣え、ちとお願ひがござりまするが、おかなへなされて下さりまするかえ。

才三　いやもう男女のへだてはあれども、傍輩の此方樣、身にかなうたことなれば。

小牧　嘘おやござんせぬかえ。
才三　嘘僞りは大嫌ひ、してお頼みのその仔細は。
小牧　あの百人首の歌に、「瀬を早み岩にせかるゝ谷川の、割れても末に逢はんとぞ思ふ」と申しますうは、どういふ心でござんすぞえ。
才三　そりや崇德院の御製、一つ流れの水なれども、物にへだゝり離れ〴〵になるにもせよ、いつか又一つになるといふ、待ち詫びたる戀歌の心と思はるゝわいなう。
小牧　てもしをらしい、一つ流の御奉公いたしまして、人目の關にへだゝるとも、末は女夫になられまするかえ。
才三　そりや、その人々の心々さ。
小牧　さうして、あなたのお心はえ。
才三　そりや人としてこの道を嫌ふは、木石とか申すものの、手前共は大の無骨、親のゆるさぬ不義徒ら、左樣なみだらは致さぬ心さ。
小牧　して、親々のお許し受くる其時は。
才三　いやでござる。（トきつと言ふ。）
小牧　そりやあなたお胴慾でござります。私の心を知らぬか何ぞのやうに。少しは不便と思召し、御推量なされて下さりませいなあ。

才三　武士たる者へ、異なことのおつしやりやう。はて、迷惑千萬な儀でござる。
小牧　あれ、又そのやうなことおつしやつて、氣強いばかりが武士とは申しませぬ。戀も情も知る人を仁者とか申しまする。
才三　仁も過ぎればたはけとやら、木石と言はれうとも、その身を堅固に致さねば、不義者の汚名を受け、掟を破る不忠の科、戀の道こそ知らずとも、弓矢の道なら心を碎く某へ、重ねてかやうなみだら千萬、申し出せば其の身破滅、たしなみめされ小牧どの。
小牧　（立上る才三の袂を捉へて、）そりや又あんまり。
才三　あいや無骨の某、必ずお氣にさへられな。
　　ト才三郎振切つて奥へはひる。小牧思入あつて、
小牧　思ひこがるゝ才三さん、氣強いばかりが男の常か、なまなか言出し此の儘に、かなはぬ戀とあきらめても、心の内が恥しい。なんとしたらよからうぞいなあ。
　　ト歎息したる思入、奥より丹下窺ひ出で、
丹下　それにござるは小牧殿、見るは眼の毒障るは煩惱、聞けば聞きぼら、なまなか耳が聞えずば、こなたの歎きは聞かねども、いまの述懷、才三がことはすつぱりと、

思ひきつたがよさゝうなものぢや。
小牧　さうおつしやるは、丹下さま。
丹下　丹下此度はぬさも取りあへず、こなたの戀路をかたへんと、思ふ心に手向山。
小牧　その御親切はお嬉しう存じまするが、もう何事もふつふつおつしやつて下さりますな。
丹下　言ふは言はぬにいや増す戀路。才三ばかりが男ではあるまいし、其とても獨身なれば結ぶの神の引合せ。これさ、つんとしては譯が分らぬ。戀知り男になびきやらぬか。
小牧　（丹下の手をかけようとするを振拂つて、）御本性でおつしやることか知らねども、この中までは喜藏殿の御難題、お屋敷を追放より、やれ嬉しやと悦ぶ甲斐もなさけなや、相手替つてあなた樣、みだらなことをなされると、御重役のお方でも容赦は致さぬ。御人體にもないそのお顏で、色の戀のと、もとおたしなみなされませ。
丹下　こりや、だいぶ手強う出掛けたな。よし／＼、おぬしがさういふ心なら、可愛さあまつて憎さが百倍、刀にかけても口說き落さう。
小牧　てもまあ、お役がらにも似合はぬ仰せ、お掟を背く不義の成敗、そのお刀でなされますか。
丹下　その掟を存じながら、何故又才三にうツぽれた。
小牧　えゝ存じませぬ、知らぬわいなあ。
ト言ひながら突退けて顏をぴつしやり打ち、唄になり奥へはひる。丹下殘つて、
丹下　どう言へばかういふと、中々手しぶいあの小牧、是といふのも才三めに心を通はすとち女め、今にほえ面かかしてくれる。
トばた／＼になり、奥より才三郎剃刀を持つて逃げて來る。後より佐々木桂之助、殿の拵へにて煙管を持ち出來る。これに以前の四人の腰元、伴藏、曳六い近習兩人、何れも留めながら出る。
桂之　予が面體へ疵を附けた不屆き奴、常ならぬ式日に血をあやして、衣服をけがし、濟まうと思ふや、あまりと申さば奇怪至極。
才三　恐れながら思はぬ麁相、幾重にも御宥免願ひ奉る
ト平伏する。
丹下　（思入あつて、）恐れ多くも御主君の面體へ疵をつけて、御宥免で濟まうと思ふか。
伴藏　左樣々々、平日主君を輕しめをる罰は目前。

曳六　今更お詫を申すとて、この大罪が脱れうか。
丹下　こりや我君のお手おろさるゝまでもなく、いで某が成敗仕らん。（ト立ちかゝる。）
桂之　丹下控へい。
丹下　あ、いや／＼御前、不屆至極の尾花才三、御家の掟以後の見せしめ、しばり首はお定り、その太刀取りは某が。
桂之　いや、その成敗は予が致す。
丹下　すりや、御前様が。
腰元　お手づから、あの才三さまを。
桂之　いかにも、新身の試しも自業自得。
丹下　さすがは君の思召し、恐れ入つたる御成敗、斯く罪も極るからは、大小挽ぎとり繩附にして廣庭へ引きすゑい。
曳六　かしこまつてござる。
ト兩人才三郎の大小を取り、下緒にて後手に縛る。
桂之　言はうやうなき人非人め。それ、廣庭へ引立てい。
伴藏　はッ。君の上意、お立ちなされい。
才三　あ、斯くなり行くも生者必滅。
丹下　引かれ者の小唄ぢやなあ

ト皆々よろしく思入、此見得にてよろしく道具廻る。
（廣庭の場）――本舞臺高足の二重、本緣附、上手障子屋體、上下網代塀、下手萩の下草、調べにて道具留る。と、こゝに紺看板の中間三人竹箒と手桶とを持ち、掃除してゐる。
○　何と折平、當家の殿様は御仁心なお人ぢやと聞いたが、人の噂とは大きな違ひだなう。
□　御酒の機嫌か知らねえが、お側にござる尾花才三様を、お手討になさるといふのは、あんまり短氣なお仕置だなあ。
△　剃刀で瑕を附けた位なら、人をそこなふ殿様でもねえが、それには何ぞ言譯の、ならねえ失敗があるのかもしれねえぜ。
○　あの才三様も、今年が厄年でもあらう。
□　二十四五といふ奴は、男の大厄だ。
△　あたら尾花を枯らすのだなあ。
○　えゝ、洒落どころぢやあねえ。掃除ができたら來やれ來やれ。
ト箒手桶をさげて下手へはひる。合方になり、奥より

以前の腰元四人出來り障子屋體へ向つて、

腰一　千種樣、それにおいで遊ばしまするか。

同二　我君樣よりの仰せ付。

同三　御臺樣の御口上で、

四人　ござりまする。

千種　（屋體の內にて、）御臺樣の御口上とな、それへ行つて承りまするでござりませう。（ト上手の障子を明ける。ト內は總て部屋の模樣、二重へ來り手をつかへて、）お取次御大儀、して御臺樣の御口上とは、いかに仰せ出されました。

腰一　先程よりあなた樣のお願ひ、老女千年樣を以て申入れたるところ、

同二　尾花才三郎役目の越度とは申しながら、我君の御怒り強く、

同三　再三お諫め申せどもお用ひなく、庭前に於て君の御手討と事極り、

同四　唯今これへ引出し、御成敗との、

四人　儀でござりまする。

千種　すりや、いよ／＼死罪と極りましたか。

腰一　さるによつて御臺樣の仰せには、千種の方より願ひの趣き、殊勝なことに思召され、

同二　暫く猶豫のその內に、經文讀誦致せよと、仰せ出されましてござりまする。

千種　はツ、有難きその仰せ、生死不定の世の中なれば、我人ともに果敢ない身の上、定業とは申しながら、今を盛りの尾花才三、散り行く命も過去の因緣、せめて未來の土產にもと觀音菩薩の功力によつて、成佛得脫致させんと願ひ出しが、お聞濟みの上からは、時刻を待つて讀誦せん、それなら尊像經卷諸共、これへ持つて來や。

四人　かしこまりました。

ト經机に載りたる經卷尊像をよき所へなほす。千種の方は塵手水をして經卷をいたゞく。ト上手にて、大勢の聲にて「歩め」と聲し、以前の近習二人才三郎を引立て、後より丹下附添ひ出來る。

近習　下にをらう。

ト以前の下郎めい／＼土俵を擔ぎ、菖蒲革の侍手桶を持ち出來る、丹下土壇の指圖をし思入あつて、

丹下　千種の方には、是においでなされましたか。御覽の通り尾花才三郎は死罪と極り、見る影もないこの體、何とみじめな樣ではござらぬか。

千種　不慮の儀に就き果敢ない身の上、一倍不便に思ふ故、御臺様へお願ひ申し、せめて未來の土産にもと、御經讀誦いたしまする。

丹下　へえゝ、それは御奇特、然し此の期になつて此方様が、經文を讀まれても何のお爲めになりませう。譬へに申す牛に經文、無益なこと、いらざるお願ひお止まりなされいさ。

千種　丹下殿控へめされ、無益と申すはこなたの雜言、御臺様の仰せによつて、普門品をさづくるに、止まれとは誰人が申しました。

丹下　さあ、それは、

千種　常ならぬ御臺様の仰せなれば、聞捨てならぬ今の一言、御臺様へ申上げ、きつと事を正しませうか。

丹下　さ、それは、

千種　人の愁ひを悅びめさるか。

丹下　さうではなけれど。

千種　なければ讀誦の批判めさるか。

丹下　なか／＼左様な。

千種　然なくば言譯。

丹下　さあ、

兩人　さあ／＼／＼。

千種　言譯なければ、この座をとく／＼、

皆々　お立ちなされい。

　トきつと言ふ。丹下こなしあつて、

丹下　でも、繩附をそのまゝに。

千種　科人なれば讀誦濟むまで此方へ、預かる上は氣遣ひなし、下部も引連れ早くお次へお立ちなされ。

丹下　（ぐつとつまつて、）然らば、科人お預け申す。是を思へば才三殿、死花の咲く果報者、羨しいと言ひたいが、忌はしいこの繩目、不淨者のその傍にべん／＼とらうより、下部どもは身について參れ。

中間　心得ました。

丹下　然らば科人は千種様、繩附のまゝお渡し申す。

千種　御念に及ばぬ。

丹下　どりや、休息致すであらうわえ。

　ト丹下先に中間附いてはひる。

腰一　邪曲非道の望月丹下も、其理に服してこそ／＼と立退きますれば、

同二　寸善尺魔のない中に、お經文を讀誦あつて、才三様の未來の迷ひ、

同三　お晴らしなされてあげましたら、其の悦びはいかばかり、

同四　名僧知識の引導より、尊いことで、

四人　ございませう。

千種　これにて普門品を、唱へまするであらうわいなあ。

腰一　左様なれば私共は、その由を御臺様へ。

千種　御苦勞ながら。

皆々　後ほど御目にかゝりませう。

ト腰元四人奥へはひる。千種の方あたりを見廻し經卷を取つて、

千種　實に果敢ないは人の命、露霜よりも保ちがたし。

才三　明日ありと思ふ心の仇櫻、夜半の嵐もこの身にあたる私へ、お經文をお授けなされて下さるとは、有難い結縁と存じまする。

千種　武士の恥あるものと思ひなば、最期に未練はあるまじきが、煩惱の絆に迷ひ、見苦しき死を遂げんこと末代の恥辱、さるによつて普門品の威德を以て、未來永劫成佛なされや。

才三　こは忝きその御詞、死するに未練はござらねども、我君の御怒りによつて、御手討に相なりますれば不忠の汚名、せめてのお慈悲お情には、切腹仰せつけられなば此身の本懷、かくまで厚きこなた樣のお情を以て、この儀お執成下さらば此世の望み更になし、何卒お願ひ申し上げまする。

千種　尤もなる願ひなれど、死するを執成す謂なし、たとへものことに助命を願ひて歸り花、世を忍ぶお心はないかいなう。

才三　一旦罪の極まる上は、助命を願ふ未練はござらぬ。

千種　さればのこと、こなたに未練がないにもせよ、未練を殘すものがある。

才三　そりや誰人が。

千種　外でもない、この千種、私ぢやわいなう。

才三　何と。（ト思入。）

千種　さあ、觀音經の終らぬ中死急ぎをなされずとも、まあこゝへ來てお經を受けたがよいわいなう。

才三　やはりこのまゝ、これにて聽聞仕らん。

千種　（經卷を持ちて、）妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五、お前は二十四、

才三　や、（ト思入。）

千種　（また經をしやんと持ちて、）爾時無盡意菩薩卽從座

廻偏袒右肩合掌向佛」

ト經を讀みながら、だん〳〵土壇の内へはひる、是にて才三郎だん〳〵押されて土壇の外へ出る。千種これに構はず附廻しのやうに、舞臺の眞中へ來る。才三郎これを不思議に思ひ、

才三　下樣には、こは何事をなされまするぞ。

千種　（經を止めて、）何事とは胴慾な、日頃から戀したへど儘ならぬ身の情なさ、徒に月日を送るうちお前樣には不慮の御最期、とても逢はれぬことなれど、御臺樣へお願ひ申し、觀音經を授けんと言うたはみんな僞り事、人目を拂ふ上からは、お命を存へてお屋敷を立退き、夫婦になつて下さんせいなあ。（ト碎けたる思入にて言ふ、才三郎こなしあつて、）

才三　さうとは知らず死ぬるいまはに、佛道の教を受けんと思ひのほか、言語に絶えしその詞、狂氣の沙汰か但し又、それがしを嘲弄めさるお心か、

千種　勿體ない、お主樣は兎も角も、觀音樣を欺いても、あなたに逢うて本心が明かしたいばつかりに。

才三　輕くもなか〳〵けがらはしい、そもこなた樣は賤しき身でありながら、館樣の御不便を蒙むり朝夕の活計、その御恩を忘るゝのみか罪ある我へ戀慕をしかけ、なほなほ罪を重うせんとは、こりや何者に頼まれしか。縛めの身でないことなら不義の大罪人へ注進致さんに、今にも死する某が見脱すは寸志の情、この後とても心を改め、我君を御大切にいたさねば、天罰其身に報いまするぞ。ちえゝ、見下げ果てたる不所存者、情ないお人ぢやなあ（トきつと言ふ、千種は恥入りたるこなしにてうつむく。此時四つの時計鳴る、中間及び丹下いできたりて、）

丹下　今うつ時計は巳の上刻、千種樣の御用向も終りなば、土壇の中へ歩まつせえ。

才三　疾より覺悟の尾花才三、何時なりとも、早く死刑に行はれよ。

丹下　おゝよい覺悟だ、科人を引きすゑい。

中間　はあゝ。（ト才三郎を元の所に引立てる。丹下あたりを見廻し。）下にをらう。

丹下　さあ之からは身共が役目、死罪の場所へ女は無用千種樣には最早用事もござるまい。奧殿へお越しなされい。

千種　そのお指圖なら入らぬ世話、申し殘せしこともあり、その一段聞き切るまでは、御臺樣へお答へがならぬわい

なあ。

才三　あいや、その儀は某一言半句、御返答は仕らぬ。唯心にかゝるは殿様の御身の上。千種の方には君のお傍へ、少しも早く。

千種　斯くまで忠義なこなさんを、刀の錆にかけるとは、あたら花を散らすのぢやなあ。

ト千種の方は思入あつて奥へはいる。才三郎眼を閉ぢ覚悟の思入、下手より前の近習二人出來る

伴藏　丹下殿には刻限違はず、見張りの御役目御苦労千萬。

與六　それがしも死罪の場所へ罷出しは、朋友よりの誼、御前とゝしなに、

兩人　お執成し下されい。

丹下　各方は身共次第、死罪と極まる才三殿、今改めて申すではござらぬが、朋友の某なれば申聞けん。罪はろほしだ、よく聞かつせえ。元來貴殿は我御の權威を鼻にかけ、第一家中の者を眼下に見下し、蔑にいたされたを、今思ひあたつたであらう。

伴藏　身共などはお髭の塵を取らぬ故、さして出世は致さねども、此身は安泰といふものだ。

與六　奥女中へ取入つて、ごま第一の不忠のお手前、とうとう終ひお縛り首。

丹下　はて、天道は正直、悪いことは出來ぬものだ、むゝはゝゝゝ。（ト嘲笑ふ。）

桂之　上手障子の内にて）やあ、かしましい、丹下控へい。

丹下　はツ。（ト驚き控へる。障子明くと小姓二人を從へて桂之助ゐる。）才三郎をお手討の用意、申付け置きましてござりまする。

桂之　丹下、その方は文武兩道には申すに及ばず、諸事萬端の掛り、人に勝れて才あるもの、さるによつて予が心にも適ひし故、傍近く召使ふが、嘸滿足であらうな。

丹下　冥加にかなひ、有難い仕合せに存じまする。

桂之　それに引きかへ、才三めはさして功なき愚者、一命對すも無益の者。

丹下　御意の通り功なき者を、御扶助遊ばさるゝは無益の至り、彼等如きを、則ち穀盗人とか申すのでがなござりませう。

桂之　いかさま、さうであらう。

丹下　これなる才三亡命の上は、我君様へお願ひがござりまする。何卒御聞済み下さりませう。

桂之　其方の願ひとあらば、何事なりともかなへくれん。

丹下　先以て大慶に存じ奉る。そのお願ひと申しまするは余の儀でござらぬ。唯今彼れが相果てますれば、毎朝のお差上の儀は、これにをりまする田川伴藏、鳴子見六の兩人へ仰せ付けられ下さりませう。

桂之　其方が推擧なれば、苦しうない。順役申し付くるぞ。

丹下　はッ、こは有難き仕合せ。御兩所我君の御諚、嘸御滿足でござらうの。

伴藏　貴殿の御推擧を以て、身不肖なる我々へ、右のお役目仰せ付けられ、

見六　此の身の面目、有難う存じ奉りまする。

丹下　さる御兩所、我君の御許容ある上は、重役方へお役目披露、少しも早く此の場を退出。

伴藏　はッ、左様ござらば我君様。

見六　丹下どの。

兩人　御前よろしう。

　ト兩人下手へはひる。丹下思入あつて、

丹下　いざ我君、御猶豫あつては臣下の者へ他聞の憚り、以後の政事が相なりますまい、才三如き不忠の族お手討に遊ばされしとて、不仁の君と嘲りもござるまい、片時も早く御手討に遊ばされませう。

桂之（平舞臺へ下り才三郎の傍へ行き、思入あつて、）こりや才三、予が寵愛致せしをば、自分の才智と心得、物にたかぶり日頃の增長、あまつさへ、唯今の態度見えしところ、その仔細は家に仇なす汝が相好、未然を察する某なれば、予が手にかくる觀念いたせ。

才三　はッ、大罪犯せし才三郎、いかなる刑に行はるゝとも恨むべき謂れなし、不肖なる某が勿體なくも殿様の、お手にかゝるは身の仕合せ、さはさりながら今年まで、御扶助を受けし御恩も送らず、相果てまするが心外に存じます、

桂之　やあ、この期に及んで忠義だて、聞く耳持たぬ覺悟なせ。

才三　疾より覺悟仕ッてござりまする。

丹下　はて、いゝざまだ。やい不忠者の尾花才三、白癡うぬらが日頃から、いけッしらけたしやッ面をひけらかす故、女子供が附廻すをよい事に心得、そは附いてゐる故に、今日のやうな大事が出來いたす。それも身共がいらぬ世話、はてさて笑止千萬。（ト桂之助のためらふを見て、）さ、我君、御猶豫あらず、新身のお試し。

ト桂之助頷き、白鞘を拔き才三郎の眼先へ突きつける。

桂之　才三郎首をさし出し觀念の思入。
覺悟はよいか。南無阿彌陀佛
ト言ひさま丹下の首を打落し、返す刀にて才三郎の縛を解く、才三郎心得ぬこなしにて、

才三　これは。

桂之　是にて成敗相濟んだ。兩人の者、早まゐれ。
ト千種、小牧、奥にて「ハアッ」と返事して出來る、才三郎こなしあつて、

才三　合點行かざる我君の御賢慮、罪ある某を御手討になさるべきを、縛ばかり切り解き、御助命下さる其の仔細は。

桂之　まッ斯く爲すも、勸善懲惡。

才三　ちえゝ有難うござりまする。

千種　もはやお許しある上は、

小牧　御安堵なされ、才三殿。
ト千種才三郎へ大小を渡す、才三郎兩腰をとる。

桂之　予が額へ疵つけしを越度なりと、すでに死刑に行ふべき旨、嘸不仁なる某と恨みつらん、其の儀も承知いたしをれど、これ幸ひと繩うつては罪科脱れず、斯く庭前へ引出せしは、仔細あつてのことだわい。

才三　して其仔細とは、何のやうな儀でござりまするな。

桂之　才三郎、近う。

才三　はッ。（ト桂之助の傍近く寄る。）

桂之　その仔細別儀でない、今曉七つ時そちが親六郎左衞門が預りおく花形の茶入、寶藏へ祕めおきしを奪ひ取つたる曲者あり、これまさしく此程追放なせし筑田喜藏が族の仕業なれども、この事表だつて詮議いたさば家の瑾、事荒だてなば其の品の、知れざることもあらんと存じ、兎や角せんと思ふ内、そちが僅の越度を言ひたて、罪に落して追放致す、何卒暫らく汚名を受け、忍び忍びに寶の詮議、役目と申すは此の儀ぢやわい。

才三　すりや、父六郎左衞門がお預かりの、花形の茶入紛失とな、えゝゝゝ。（トびつくりする。）

六郎　（上手より出來りて、）我君これに渡らせたまふか、恐れながら昨夜お夜詰引けて後、もはや七つに程近き故、愛宕山圓福寺へ參詣なして歸る途中の練塀外、怪しき曲者松ヶ枝を傳はりおりるを捉へしが、宵の小雨でぬかり道、思はず辷りし隙を窺ひ行方知れず、曲者を取逃したは身どもの越度なれども、此事他聞を憚り、何氣なき體

にもてなし、殿様へまツかくと申上ぐれば有難くも、汝に詮議いたせよとの御諚なるぞ。

才三　はツ、未だ若年未熟なる某なれど、大切なる御寶詮議の、役目を蒙る上は、千辛萬苦なすとても尋ね出し奉らん。

六郎　その花形の茶入に、添へたる包みは鴛鴦切、色情に溺れ不淨をそゝぐ其時には、必ず凶事ある試しもあれば若年の其方へ心得の爲め申傳へん。

桂之　いや、六郎左衞門、若年の才三なれども、かねて色情に溺れぬ心底、篤と見屆けおいたれば、心遣ひには及ばぬぞ。

才三　すりや、某の心底を。

千種　今こそ明かす手段と申すは、死ぬるいまはのこなた様へ普門品に事寄せて、不義をしかけしこの千種。恥しめられしまごゝろは、あつぱれ君の御眼力。

小牧　私とても同じこと、お指圖受けて恥しい、戀に事寄せあられもない、あのゝものゝと申しましたを、必ず笑うて下さりまするな。

才三　さばかり深き殿様の思召しとも存じませず、千種殿、小牧殿、無禮の雜言御容赦下さりませ。

六郎　斯くまで深き君の御賢慮、これより直に御暇賜はり、落着くところは其の以前召使つたる若黨作平、唯今にては柴井町に酒店を出しゐるとのこと、彼れに頼つて身を忍び、寶の在所を詮議いたせ。

才三　かしこまつてござりまする。然らば、これより。

ト桂之助思入あつて、近習に持たせし手箱の中より金を出して、小牧に渡し、

桂之　茶入求むる用意の金子（ト才三郎へ渡す。）

才三　重ね〴〵の御恩惠、左様ござれば御前様、千種様にも御機嫌よろしう。

六郎　悴、もはやお暇いたすからは、暫しの間町家の住ひ、必ず怠ること勿れ。

才三　長居はおそれ、あなたも堅固で。

六郎　そなたも達者で。

ト苦痛のこなしにて、名殘りを惜しむ。

桂之　六郎左衞門一世の別れ、悴才三へ暇乞ひの盃しやれ。

六郎　なに、一世の別れとは。

桂之　（六郎左衞門をとくと見て、）六郎左衞門、そちや切腹いたしをらうな。

才三　たんと御意遊ばしまする。
桂之　我心中を見ぬくこと、フラソコの中を見るが如し、始終の樣子を察せしところ、眼中のどよみ、語音の狂ひ、呼吸のいきの合はざるは、汝切腹なせしに相違なし。
六郎　むゝ、(ト思入あつて、)おどろき入つたる御眼力、いかにも茶入失ひし申譯には、まッ此の通り
ト肌をぬぐ、襦袢血に染み、白布にて腹帶なしてゐる。才三郎びつくりなし傍へ寄つて、
才三　すりや親人には、申譯のその爲に、御切腹なされしか、にゝはい。
六郎　縛り首にも及ぶべきところ、切腹なすは武士の本懷、我に心殘さずとも、紛失の茶入尋ね求めて歸參なし、再び尾花の榮えを見せよ、草葉の蔭にて相待ちをるぞよ。
才三　茶入紛失なしたる故、親人にもこの生害、この盜賊は父の敵、日ならず詮議し出して御無念お晴らし申さん。
六郎　出かした〳〵。
才三　われも門出に別れの盃。
ト手水鉢の柄杓を取つて水を汲み、六郎左衞門に出す。六郎左衞門苦しげに水を一杯呑み、才三郎殘りをぐつと呑みほし愁ひの思入。此内桂之助、小牧、千種この體を見て愁ひの思入。六郎左衞門こなしあつて、
六郎　最早近づく此身の知死期、息ある内に門出〳〵。
才三　はッ。(ト身繕ひして行きかゝる、下の方より伴藏つか〳〵と出て、)
伴藏　死罪と極まる才三郎の命を助け、紛失なしたる花形の茶入を詮議の役、はてゆるがせな御成敗、
桂之　他聞を憚る一大事。それ。(ト才三郎へ目くばせする。)
才三　(心得て、)大事を知つたる田川伴藏、遁さぬぞ、
伴藏　何をこしやくな。(トかゝる、この時曳六窺ひ寄つて、)
曳六　才三、觀念。
ト切つてかゝるを、立廻つて兩人をぐつと引敷く。
桂之　其奴ら兩人は、喜藏丹下に荷擔のもの。
兩人　何を。(ト跳ね返す、又立廻つてよきほどに、)
桂之　斬つてしまへ。
才三　はッ。(ト兩人を斬倒す。)
桂之　見事。
ト六郎左衞門につたりと思入あつてがつくりとなる、才三郎寄らうとして顏をそむけ、刀の糊紅を拭ふ。千

種々感心のこなし、小牧才三郎へ見惚るゝ、千種小牧と入替つて文庫を持たせる。と、時の鐘、謠への小鼓にて、双方よろしく、

ひやうし幕

ト幕引附けると、直に尻明けに引返す。

(柴井町伊丹屋の場)――本舞臺三間の間常足の二重塗家作り、軒口に伊丹屋と印したる紺暖簾、八重桔梗の紋附けあり。正面暖簾口、下手酒樽の書割、一升枡、五合枡其の他漏斗などつぎ場の道具、いつもの所門口、下手羽目板塀、石の重りなしたる用水桶、兩社大神宮と印したる祭禮の提灯を立てあり、總て酒屋の店がゝり。神明の祭りの體。聖天の鳴物にて幕明く。と丁稚三太徳利に酒を計つてゐる。中間、寺の下男、長屋の嚊かなど、がや／＼言ひながら買ひ物をしてゐる。

三太　もし／＼お上さん、澤庵は賣りきつてしまつた。

嚊　えゝ、この小倅としたことが、それだから早くおくれといふのに。

三太　お前ばかりがお客ぢやアあるめえし、しづかにしてくんねえ。

嚊　滅ツたらしめ、口ばつかりまめな奴だよ。

○　これ／＼丁稚、手前ばかりで手が廻るまい、こゝの家には番頭も主人もをらぬか。

三太　番頭さんは出番で、若い者は屋敷廻り。

□　そんなら、評判の内儀に店へ出て貰へ。

△　さうだ／＼お上さんの顔でも見りやあ、いくら待たしても堪忍してやるから、早く呼べといふに。

三太　お前もいゝ氣な人だ。お上さんの顔を見よう／＼と思つて、その油揚を狐にでも取られるだらう。

△　晝日中、狐がゐるものかえ。

トこの時さし金附の鳶一羽下り來り、寺男の持つて來た岡持の油揚をさらつて行く。

皆々　そりや／＼鳶が。

△　えゝさらやあがつたな。どうするか見やあがれ。(ト空を見上げて下手へはひる。)

◎　さあ、早く一合くんねえ。

三太　あい／＼。ト徳利をとつて酒をつぐ。)

◎　つぎを氣を附けてよ。

三太　下司ばつた人だ。

○ こゝの宅へ來ると、咽喉がぐび／＼する、五勺ばかりはずまう。

□ ときにお中間さま方も、こゝの家へ酒を買ひに來さつしやるが、上さんは美しい器量でござるの。

○ 左樣々々、新橋ごつての評判さ、それで、わしらも愛宕下から、ひやかしながら來たのさ。

喚 ほんに男といふものは、氣苦勞なことだなう、こゝのお上さんは、元は吉原の井筒屋の花魁で、勝山とかいふ全盛の太夫さんだや。

◎ そんなら、仲の町張りと見えるの。（ト茶碗酒を呑む。）

喚 小僧さん、こんなにお客を待たさずとも、こゝへお上をよんで、皆さんに見せてお上げな。

三太 神明樣の見せ物ぢやアあるめえし、よく見たがる人達だの。おい／＼お上さん、ちよつと見世へ來ておくんなさい、お上さん／＼。

しづ あい／＼、今行くわいなあ。（と奥よりおしづ世話女房拵へにて、絲卷の絲を卷きながら出來る。と皆々おしづに見とれゐるこなし、ほんにお前一人で困つたであらう、お剩錢でも上げるのかえ。

三太 何さ、お剩錢ぢやアござりません、こゝへ來てゐる折公が、お前さんの顏が見たいといふから、それでお呼び申したのさ。

しづ これはしたり、お客樣へむかつてどうしたものぢや。皆さん御免なされませ、身體ばかり大きうても腕白者で困ります。

□ 何さ、子供だものしやうがない。然しにこりと笑つた所を見りやあ、腹も立たねえのよ。

しづ ほんにまあ、御常談ばつかり、おほゝゝゝ。

△ さあ／＼、いつまで見ても飽きはない。

皆々 先樣はお代り／＼。

三太 代はお戻り／＼。

ト皆々から錢をとつて錢箱へ投げ、仕出德利岡持などを提げ、捨ゼリフにてわや／＼下手へはひる。

しづ 三太や、そなたもよう働きやるが、お客でもかまはず、氣にあたるやうなことばかり言うてからに、そのたんびに冷汗をかくわいの。

三太 なんの氣の弱いお上さんだ、笑つてゐると直に貸しになるから、何でも現金に賣るのが、一番勝だぜ。

しづ そこらはだいぶ賢者ぢやと、褒めにやならぬわいなあ。そりやさうと、今のお客樣に帳面へ附けるのはない

かや。

三太　何さ、ありやあみんな現金ばかりさ。それといふのもね、お前さんの顔が見たいといつて、愛宕下、西の久保、鐵砲洲からも。（ト手を鼻の先へ出す。）

しづ　あゝ、びつくりする。

三太　どん／＼買ひに來ますぜ。どうでもお前樣は、こちの家の福の神だねえ。

しづ　そなたの言やる通り、福の神なら苦勞をせぬが、私が廓を出ても、まだまア身請の殘金が濟まぬので、こちの旦那もいろ／＼と心遣ひばかりあるところへ、わたしの弟の才三郎が浪人なして掛り人、今朝用足しに行きやつたが、もう今に見える時分、お茶の支度でもしておからかいの。

三太　そりやあ私にも出來るが、今言はんしたお前さんの事で金が濟まないから、旦那さんも案じると言はんすが、家にお金がなくてもひとりでに、たんとできることがあるぞや。

しづ　何ぢやえ、たんとお金ができるとはえ。

三太　ほしけりやあ私が出してやらう。待たんせ／＼。（トあちこち思入、おしづ不思議に思ひ、）

しづ　えゝ、何をしやるやら、阿房なことをして叱られまいぞえ。えゝもう、しんきな、お茶の支度でもしませうか。

ト　おしづ奥へはひる。三太は手桶の柄杓を持つて門口の用水桶の傍へ行き、

三太　聞き及ぶ中山寺の觀世音、無間の鐘をつく時は、海川へはまる所のお金が集まるとのこと、鐘にもせよ、石にもせよ、桶にもしろ、志すところは無間の鐘、此の世はひるにせめられても、だんないだんない大事ない。

ト　無暗に用水桶の石をたゝきながら、空を見上げて思入。屋體ばやしになり、伊丹屋十兵衞、千木箱と泥生姜をさげ、佐野松屋清兵衞女郎屋の亭主、女衒の源六附いて出て來る。

清兵　もし／＼、そこへ行きなさるは、伊丹屋十兵衞さんではないか。

十兵　（振返つて見て、）これは誰かと思つたら、佐野松屋の御亭主に判人の源六さん、お前樣は神明樣へ御參詣でござりますか。

清兵　どうして、そんな優長なことぢやない。お前の所へ來たのさ。

源六　丁度いゝ所で逢ひました、こゝは門中、
十兵　まあ、家へ行つて話しませう。
清兵　そんなら十兵衛さん。
十兵　さあ、おいでなせえ。
　ト三人舞臺へ來る。此時三太は無性に柄杓を持つて石をたゝきゐる。
十兵　これ三太手前何をしてゐるのだ、お客樣がおいでなさるに、家へはひつてお茶でも汲まねえか。
三太　わつしアいま、無間の鐘を撞くところだ。
十兵　えゝべらぼうめ、家へはひれといふに。
三太　だんない／＼、大事ない。
十兵　何をいふのだ。
　ト叱りつける。此時空より以前の鳶、舞ひさがりて、油揚を三四枚ばら／＼と落し、清兵衛、源六の頭上へ落ちる、三太あわてゝ、
三太　そりやこそ、金だ／＼。（ト拾ふ。）
兩人　なに、金とは。
　ト兩人きよろ／＼して、あたりを見廻す。源六すべつて油揚をとつて不思議のこなし、十兵衛は呆れて、
十兵　もし／＼、その油揚は鳶が落したと見えます、羽織も頭も油だらけ。
兩人　違えねえ、こりやあ油揚だ。
十兵　まあ／＼、内へおはひりなせえ。（トこれにて兩人身體を撫で／＼内へはひる。）その油揚を拾つて、何にする。捨てゝしまへ。
三太　お上さんにやらうと思つたが、こりやあ油揚だから狐に化かされたか。
十兵　しつかりしろ。（ト脊中をたゝく。）
三太　あい、しつかりした。（トしやんとする。）
十兵　あゝ、ぬけ作め。（ト引寄せて囁く。）
三太　おつと、よし。
　ト下の方へはひる。十兵衛内へはひり、門口をしめる。
十兵　おいでそう／＼鳶がさらつた油揚で、お羽織もどこもかしこも汚れました。
清兵　から十兵衛樣、羽織どころか、私が顏をよこしちやあ濟みますめえ。今考へて見りやあ、やつぱり鳶にさらはれたやうなものだ。
源六　もし／＼旦那、そのお腹立は御尤もでござります。まあ私も參りましたからは、あなたのお顏の立つやうに談じませう。

ト此時奥よりおしづ小土瓶に茶碗二つ、口取の菓子鉢を持つて出來り、

しづ　源六さん、親方さんも御同道で、ようござんした。

源六　あゝ花魁ぢやあねえ、お上さん。すつぱりと、廓詞がぬけましたね。

しづ　はい、親方さん、まだ御挨拶もいたしませぬ、どなた樣も御機嫌ようおいでなされまするか。この節は何かとお世話になりまして、今に御恩は忘れませぬ。まあお茶一つ。

清兵　あい〳〵。

トおしづ兩人に茶を出す。兩人とつて、源六思入あつて、

源六　ときに十兵衛さん、今日はちつと野暮な事を言ひに來ました。ほかのことでもない、こゝにゐる勝山さんの身の代、聞けばお前の主人の家の娘、是非身請がしたいといふ故、忠義な事實銘な人だと思つたから、この方樣へもだん〳〵お願ひ申して、二百兩の所を百兩金取つて殘金百兩貸して上げたも、こりやあほんの男づく、達引といふものでござりますぜ。かう今までべん〳〵と引張るわけがやアありさうもねえもんだ。お前方は人を馬鹿にしなさるのかえ。

ト角目だつて言ふ、十兵衛思入あつて、

十兵　もし源六さん、お話しづくのことだから、御損亡をかけるやうな私でもござりませぬ、商人の店先、私も大なり小なり暖簾をかけてゐる眞面目な酒商賣、不義理を致すやうなことは、天道樣をかけて致すことぢやあござりませぬ、問屋の仕切り何やかや、手延びになつてお氣の毒でござります。

ト言譯に困るこなし、おしづ以前よりふさいだる思入あつて、

しづ　親方の手前を思へばこそ、源六さんもかれこれとおつしやるもの、實にこちらでも朝夕苦勞致してをりますること、どうぞお前のおとりなしで、いつ幾日といふ手堅いことにいたしましたら、私の心積りもござりまする。な、親方さんえ。

清兵　（煙管の吹殻をたゝきながら、）源六をこゝへおいて言ふぢやあねえが、奉公人を女護の島ほど抱へておく佐野松屋清兵衛、今まで勝山がことに何一つ不足もなし、第一勤めがいゝから、とてものことに好いた所へやるのが、双方によからうと思ふから、十兵衛さんに身請をさ

して丁度半年、私やあかう見えても涙もろいが、又銭金のことなら容赦も勘辨もねえことは、此の勝山がよく知つてゐる。その又おれを不義理にするとは、勝山といひ源六も、目先の見えねえものぢやあねえか。

源六　十兵衛様、あの通り親方の言はつしやることを、無理か無理でねえか、默つてゐりやあ分からねえわな。此の百兩の金も、相手が十兵衛だ、石に判だと思ふから私が請合つて、貸して上げた百兩、今日の明日のとべんべんだらり、旦那へ對して私が中途でやりくつたやうに思はれて、痛くねえ腹を探られるやうなものだから、旦那をお連れ申して、野暮に大きな聲をしても、白い黒いを分けにやならねえ。

十兵　だん〳〵のび〳〵になつたは、申譯もない御無沙汰、かれこれ申したところが、御承知もなりにくうございませうから、どうぞ當月晦日まで。

清兵　いや、その晦日も十四日も聞き飽きた、安請合に請合つたとて、大まい百兩といふ金がさうちよつくらにできるものかな。吉原から小三里の道を歩いて來たからは、十兵衛は手短にかうしませう、お前の金ができるまで、勝山を家へ預からう。金ができたらいつ何時でも、駕籠を持つて迎ひに來なせえ。それが手附かずの話だ。

源六　なるほど、こりやあ近道だ。十兵衛さん、その積りにしやせう、それがいゝ〳〵。

ト源六立ちかゝるを十兵衛思入、おしづ兩人の間へはひり思入あつて、

しづ　もし〳〵そのやうにおつしやらずと、又御相談のいたしやうもござりまする。親方さん、源六さん、廓へ行けなら參りませうが、どうも今とおつしやつては、なあ十兵衛さん。

十兵　そりやあもう耳を揃へて百兩の、金がなければ連れて行かうとおつしやるが、さう自由にもなりますまい。

清兵　そりや又どうして。

源六　何故ならない。

十兵　さればでござりまする。身の代金は二百兩、内金百兩お渡し申してござりますぜ。

清兵　その百兩取つてあるから、勝山をこゝへよこしたではないか。

十兵　さゝ、それぢやによつて、十兵衛がしつかりと預かりました。

源六　して後金の百兩を、べん〳〵だらりと引つぱるから、

玉を連れて返るのに、それでもこつちが誤りか。

十兵　誤りどころか、得手勝手といふものだ。

兩人　そりや又何故に。

十兵　玉を引上げ、渡した金の百兩は。

兩人　や。

十兵　清兵衞さん、あまり勝手がすぎませうぜ。

源六　もし／＼親方、こいつアだいぶ手重くからんでまゐりますぜ。

清兵　源六、何もかも胸にある、百兩位はほしきやア今でも返してやらあ。

源六　そんなら金子を。

清兵　佐野松屋の清兵衞、百や二百の端金は、ちよつと出るにも御所持だわ。（ト胴卷より包金を出し）さ、これを取つたら言分あるまい。

十兵　ありますね。

兩人　まだあるかえ。

十兵　半年あまりの雜用ざらひ、お前の出やうがそでないから、耳を揃へて貰ひたい。

清兵　どういへばかういふと、横ツたふしに出かけたな。

十兵　何もよこしまは申しません、あまりと言へば因業故。

源六　なに因業だえ、因業でも巾着でも、取らにやあならねえ身請の金、耳を揃へて請取らにやあ、代官所へ引立てゝ、砂利を摑んで恐れながらの根くらべ。

清兵　ぐづ／＼言はずと、引立てろ。

源六　さあ、勝山さん、歩みなせえ。（トおしづへ手をかけるを、十兵衞へだてゝ）

十兵　さうはならねえ。

兩人　ならずば金か。

十兵　さあ。

兩人　引立てようか。

十兵　さあ、それは。

兩人　金を濟すか。

十兵　さあ。

兩人　さあ／＼／＼。

ト詰めよつておしづを引立てにかゝる。この以前より尾花才三郎下手より出で門口に窺ひゐて、この時つかつかと内へはひり源六を突廻し、清兵衞をへだてゝ、

才三　其方達は內儀を捉へて、こりや何とする。

源六　（呆れて、）見りやあお若いお侍、

清兵　何とするとは知れたこと、貸した金の濟方に、私が

連れて行くのさ。

源六　それを不承と思ふなら、百兩といふ金を立てなせえ、よもやお金はむづかしさうだ。

清兵　大小さしたお侍、めつたに口出しはできますまい。

才三　（思入あつて、）いかにも、金子遣はさう。

兩人　そりや、あのまことに。

才三　後とも言はず、唯今呉れう。

兩人　えゝ。（トびつくりする。才三郎懷中より包金を出し、）

才三　掛矢形の封印なれば、中改めずと受取りやれ。

清兵　まことに百兩、見ず知らずのあなたからは受取りにくい、なう源六。

源六　左樣々々、十兵衞さんも男なら、百兩出して貰ひませう。

才三　こりや町人、身が所持の金子は不通と申すか。

兩人　さうではなけれど。

才三　然らば金子受取つて、宛名は十兵衞、請取が申受けたい。

清兵　さうおつしやることならば、唯今請取を認めませう。それ源六、（ト矢立を渡す。源六紙入より紙を出し、さらさらと認め清兵衞へ渡す、清兵衞讀んで紙入より實印を出し、三判押して、）へい、身請の殘金百兩の請取、お渡し申します　これで金子は濟みました。（ト金を懷中する。）

源六　長居はおそれ、旦那、急いで汐留から船としませう。

清兵　むら田がおれの馴染だ、源六行かうか。

源六　皆さん、おやかましうございました。（ト兩人門口へ出る。）

才三　兩人待て。（ト思入あつて言ふ。）

源六　へい。御用でございますかえ。

才三　殘金百兩相渡せば此方は身請の客ぢやぞ。

兩人　へい。

才三　その身請の客の店先で、遊女屋渡世なすものが、立騷いで濟まうと思ふか。

兩人　へい。

才三　そのまゝには歸さぬぞ。（トきつと言ふ。）

兩人　えゝ。（びつくりしてへたる。）

才三　と申す所なれど、言はゞ目出度き身請故、このまゝに差し許すぞ。

兩人　それはけつこうな思召し。

才三　えゝ、きり〳〵とうせをらう。

兩人　へい〳〵〳〵。(トあわてゝ門口へ出て)

清兵　やれ〳〵嬉しや、得手からいふ終ひは酷い目に逢ふものだ。それをこのまゝ打たれもせず、

源六　濡手で百兩しめるとは、もし旦那、お禮がしつかりござりませうね。

清兵　此の禮はお定まり、五分の禮だ。

源六　いや五分とは有難い。

清兵　その禮はこれだ。(ト以前蔦のさらひし油揚をつまんで出す。)

源六　この油揚が禮とは。

清兵　はて、五分(昆布)に油揚といふわ。

源六　えゝ、油揚とは一兩かえ、あんまりひどいね。

清兵　それぢやあいつそ何にもやらず、五分たゞ(昆布鰹)とはどうだ。

源六　いや、惡い洒落だ。はゝゝゝ。

ト兩人足早に花道へはひる。十兵衛後を見送りて、

十兵　若旦那、何とお禮を申しませうか、思ひがけない大まいの百兩、あなた樣より拜借致しまして、面目次第もござりませぬ。

しづ　兄弟とはいひながら、今は流浪の才三殿、お前の金を借受けには、どうも私が濟まぬわいな。

才三　姉者人、その心遣ひは御無用になされませ、今更いふに及ばねども、お前が幼いその時に、氏神の祭禮の折から勾引されて苦界の勤め、故主の娘と十兵衛殿が身請なしたる姉者人、後金の催促に詮方盡きたる今日の手詰、見るに忍びず用立てたる百兩は、紛失なしたる寶の茶入詮議の爲めの用意金、まだ手がゝりのあるではなし、その心遣ひは無用になされませ。

しづ　兄弟の義理を思ひ、その志しは嬉しいが、今にも寶の詮議して在所知れなば金の入用。

才三　それぢやというて現在の、姉者人に二度の勤めがさせられませうか。寶は身のさし合せ、一寸延びれば廣い世界、それがしとても流浪の身の上、殿へお髮を上げたを幸ひに、今より町髮結と姿を替へ、窃に寶の詮議をなさん。もし手がゝりのことあらば、その時必ず十兵衛殿。

十兵　其の儀はお氣遣ひ下されますな。私も後金の百兩の心當りのないではござりませぬ。其の仔細と申しまするは、元私は大津の生れ、親共は身貧な暮しの黑木賣り、兩親ともに殁りし後弟を連れて御當地へ立越え、私は親

旦那様へ若黨奉公、弟の彥三は村木町の白木屋へ養子に遣はし、私は朋輩どもと口論いたし御暇を願ひしに、有難い親旦那の御助力にて酒屋渡世の身から一身、稼ぎ溜めたる百兩にて、身請なしたる女房が後金の心當は、以前親どもが召使ひましたる藤助と申す者、唯今にては京都にて相應なる暮しをして、書狀の便りもいたしますれば、それへ賴つて百兩の金借用いたす心積り、兩三日の中には上京致さんと存じましたが、直に明朝出立致しませう。これおしづや、明日早く旅立するから、留守を必ず賴むぞや。

しづ　そりやもう家のことは必ず案じなさんすな、然し用意もなければ、明日といふのもあんまり急で、せめて二三日支度して、曆を選んで立たしやんせいなあ。

十兵　いや／＼、もし寶の手がゝりが急に知れまいものでもなし、思ひたつたが最上吉日、是非とも明日は早く旅立ち。

才三　そんならどうでも、立たつしやりますか。道中無事に戻られるやう、神明樣へ參詣して來ませう。（ト下手へ來て）然し、あんまり性急で、なれぬ旅では。

ト此時奧より三太丸盆に茶碗を三つ載せ持つて出る。

三太　もし、なれた風味の甘酒、祭り祝ひに一つおあがらんかえ（ト三人の前へ出す）

十兵　おゝよく氣が附いた。ひとよ酒といふからは、今宵を直に立祝ひ。

しづ　暫しの別れ、奧でゆつくり。

三太　うまいな／＼

十兵　三太、おぬしも呑んだか。

三太　お初穗をやらかしました。

十兵　すばやい奴め（ト思入あつて）ほんに、才三樣へおみやげを（ト以前の千木箱を出す）

才三　千木箱は飴でござるか。

しづ　雨では今宵は、

才三　定めし、しつぽり、

十兵　旅の支度を、

三太　立振舞に、

ト三太十兵衞の前へ顏を出す。十兵衞頭を打つ。才三郞は門口を明ける。これを木の頭。

才三　降らねばよいが。

ト才三郞空を見上げ十兵衞頭へ手をあげる。おしづ十兵衞の手を持つて顏をそむける。これをキザミ、唄や

かなる唄にて、よろしく、

ひやうし幕

二幕目　芝片門前文彌内の場

（役名——座頭文彌、白木屋彦三、坊主小兵衛、筑田喜藏、髮結才三郎、佐野松屋清兵衛、女衒源六、綿屋の若い者與助、座頭でく市、こぶ市。文彌母おりく、文彌妹お菊、同妹おいち等。）

（文彌内の場）——本舞臺一面の平舞臺、所々へ瓦をおきしこけら葺の屋根。正面三尺の佛檀、これに綴切の袱紗打敷にかけあり、此の脇一間反故貼りの障子。下手は折廻し鼠壁、上の方葺下しの下屋、いつもの所門口、下の方後へよせて裏長屋の雪隱。下座の前黑塀、門口に「もみりやうぢ鍼治灸點、文彌」といふ木札。總て、芝中門前文彌内の體。こゝに文彌母おりく、世話姿の拵にて綿を摘みゐる。傍に綿屋の若い者與助煙草を喫みゐる。下手に文彌妹おいち、素麵檀の上にて手習をしてゐる。此の見得稽古

唄にて幕明く。

りく　もし與助さん、この十袋は明日まで待つて下さりませ。

與助　あい、明日中でようござります。摘賃は此間のと一緒に七百五十持つて來ました。

ト財布より錢を出しておりくに渡す。

りく　これは有難うござります。

與助　おいち坊、よう手習の精がでますの。

いち　いえ〳〵、私や一向精はでませぬわいな。

與助　いや〳〵、いつ來て見ても、よう精が出ます。

りく　仕合せと手習ひが好きでござります。お恥しいことながら私は手習ひが嫌ひで、一字一點讀めませぬ故、せめて子供等には手を書かせたら、姉めも小さい時から仕込みましたお蔭には、人なみには書きまする。親の慾目かおいちめも、年よりは良うできますやうに思はれます。

與助　できるとも〳〵、なか〳〵十歳や十一で、このやうに書くものはない。

りく　有難うござります。これ、與助さんがお褒めなさる、精を出さねばならぬぞや。

いち　あい、よく精を出しますから、どうぞ私にもお金さんのやうなお机買うて下さんせいな。

りく　おゝ、春になつたら、よいのを買うてやらうわいの。

（ト花道より小兵衛出來り門口へ來て、）

小兵　婆アどん、今歸つた。（ト内へはひる。）

りく　何と思うて歸らしやつた。

小兵　何と思つて歸るものだ、おれが家だから歸つて來たのだ。

りく　あんまり、おれが家〳〵といふて下さんすな。こゝの家は文彌の名前、何一つ持つても來ずに、あんまり大そうなことを言はしやんすな。

小兵　言はねえでどうするものだ、十年此方餓鬼めらの足手を延ばした其の上に、うぬにも暑い寒いめさせず、餓じいめをさせねえのは、誰が蔭だと思やあがる。

りく　えゝもおいて下さんせ、そりやこつちで言ふことぢや、賃綿摘んだり人仕事したり、夜の目も寢ずに精出して、子供を始めこなたまで、私が過しておいたのぢやわいな。

小兵　僅な仕事を鼻にかけて、亭主の箔を剝がしやあがるな。

（ト小兵衛鐵砲笊より秤を出し、これを振上げ打たうとするを與助留める。）

與助　これはしたりどうしたものだ、若い者ぢやアあるめえし、よい年をしてお互ひに、夫婦喧嘩は見ともない。もうよい加減にしなせえな。

りく　いえもう、人樣の笑ひ草になるのが厭でござりますゆゑ、言ふまいとは思ひますけれど。

小兵　言ひたくなくば何故だまつてゐねえ、この梅干婆アめ。

りく　なにを、この藥罐親仁め。

與助　これさ〳〵、もうよいかげんにしなせえと言ふに、この子が怖がつてゐるわな。さういつまでも言つてゐられると、私も歸るに歸られねえ。中にはひつた不承に五合買はうから、それで了簡して下され。

りく　いえ〳〵、お前さんにお錢を遣はしましては、濟みませぬわいな。

與助　なにさ、たんとは買はない、酒が五合に肴が二百、兩方でたかゞ一朱、（ト財布より一朱を一つだし小兵衛の前へおき、）これで了簡して下せえ。

小兵　こんなことをなすつちやあお氣の毒でござります、併し折角の思召し、お貰ひ申しておきます。(ト金をいただき、)婆アどん、中なほりにお角力酒屋へ行つて、何ぞ見つくろつて來て下せえ。
りく　えゝも忙しいのに、よく人を遣つてからに。
　ト言ひながら味噌漉を持ち行きかける。
與助　どれ、そこまでいつしよに行かう。
小兵　これは與助さん、とんだ御厄介になりました。
與助　もう喧嘩は止しにしなせえよ。(トおりく與助門口へ出て、)いや、困つた代物だ。
りく　あれだから喧嘩は絶えませぬ。
與助　尤もなことだ。さあ行きませう。
　ト兩人花道へはひる。
小兵　よくつべこべとしやべりやあがる婆アだ。コレお市燗のできるやうに、奥へ行つて火を起しておいてくれ。
いち　あい／＼。
　ト稽古唄になり、おいち奥へはひる。花道より筑田喜藏、浪人裝にて出來り、
喜藏　文彌といふ座頭の家が、小兵衞の家だといふことだが、どうぞゐてくれゝばよいが。(ト本舞臺へ來り門口より内を覗き、がらりと明けて、)小兵衞家にゐたか。(トづッとはひる。)
小兵　喜藏様か、びつくりした。
喜藏　此間から突當てようと、手前が後を追つて歩いた。
小兵　何ぞ用でもあつてかえ。
喜藏　用も用、大用だ。(ト上手へ住ひ、)外でもない、此間手前に頼んだ彼の品は、幾何の質に入れたのだ。
小兵　彼の品とは何かえ、お前の盜んだ茶入のことかえ。
　ト大きな聲でいふ。
喜藏　あこれ、しづかに言へ。
小兵　あの花形の茶入なら、百兩に置きやした。
喜藏　なに百兩においた、いや太え奴だな。持主に半金渡し、どこの國にか五十兩上借りをする奴があるものか。
小兵　ないとは言はれねえ、こゝにありやす。
　ト煙草を呑みながら、煙管にて鼻をたゝく。
喜藏　いけしやあ／＼とした奴だ、どうしてくれう。
　ト喜藏悔しき思入。
小兵　どうともお前の勝手にしなせえ、堅氣な者の代者なら、僅一分の上借でも、言立によりやあ盜人同然、それとこれとは違ひやす。然も佐々木の家の重寶、直足の附く、

代物を承知で質に置くから、まさかの時に一緒に行く氣、拔きやあ首仕事、五十兩ぢやあ安いものだ。

喜藏　すりや、盜物故高をくゝり、上借をしたといふのか。なるほどこれは惡い奴だ。(ト佛壇の袱紗を見て、)あの佛壇の打敷に、茶入を包んだ袱紗だが、何で家へ殘しておいた。

小兵　あれを附けてやつたところが、羽織の紐と同じことさ、百にもふめやあしねえ故、そこで婆アの氣休めに、打敷代りにやつたのさ。

喜藏　流石は年の功だけあつて、百の錢にも拔目はないな。仕方がない、五十兩はきれいにおれにくれてやるが、おれも酒と假宅で、此の頃はちやんころなし、改めて十兩ばかり小遣ひを貸してくりやれ。

小兵　そりやあありさへすりやお貸し申しますが、上借をした五十兩は、半月ばかりに取られてしまひ、二朱の金にも困る仕儀、丁度幸ひお前を玉に、十か二十になる仕事があるが、半口乘つてくんなさらねえか。

喜藏　そりやあ金にせえなることなら。して、その仕事は。

小兵　家の婆アが盲目めに官位を取つてやりてえと、喰ふものも喰はねえで溜めた金が十か二十、私にかくして出來た樣子、盲目を騙して引出す積りだ。

喜藏　どういふ法でその金を。

小兵　そりやあ私が胸にあります。然しこゝで話しもなるめえ。

喜藏　どこぞで一ぱいやりながら、

小兵　あら筋を話しませう。

喜藏　そんなら小兵衞。

小兵　若旦那、さあ行きませう。

ト稽古唄にて兩人下手へはひる。花道より文彌の姉おきく島田娘の拵にて、袋に入りし三弦を抱へ出來る。後より女衒の源六つき出來り、花道にて、

源六　もし姐さん、それぢやあお前の家は向うかえ。

きく　はい、あれが私の家でござんすわいな。

源六　揉み療治の看板の出てある家だね、よし〳〵、後方親方を連れて證文に來ます。

きく　どうぞ只今も申します通り、廓へ行くといふことは文彌にはおかくし下され、お屋敷へ御奉公に參ります積りに、おつしやつて下さりませいな。

源六　そりやあ必ず案じなさんな、わつちも親方も俄な案番が好き故、ちつとに狂言心がありやすから、りやん

、この積りで逢ひに來やす。

きく　左樣なれば、また後程。

源七　面談いたすでござらう。(ト肩を張つて堅く言ひ、)おきやアがれ、もう侍になるやつサはゝゝゝゝ。

ト源六は引返してはひる。おきくは舞臺へ來り、

きく　かゝさん、今歸りましたわいな。(ト内へはひる。)

いち　(奥より出來りて、)姉さん、今日はお早うござんしたな。

きく　おゝおいち、かゝさんは奥にゐやしやんすか。

いち　いゝえ、かゝさんは父さんのお酒を買ひに、行かしやんしたわいな。

きく　すりや父さんが歸らしやんしたとか。えゝも折の惡い、何處にゐやしやんすぞいな。

いち　今までこゝにゐやしやんしたが、見えぬからは又どこぞへ。

きく　どうぞ行つて下さんすればよいが。

トおきく案じる思入、合方にておりく味噌漉と德利をさげ、口小言を言ひながら出來り、門口を明けおきくを、小兵衛と思ひて、

りく　さあ、呑みたくば呑んだがよい。(ト肴と德利を突出す。)

きく　(びつくりして、)母さん、私やお酒は嫌ひぢやわいな。

りく　おゝ娘か、ほゝゝゝ、今親父殿といさかうた故、腹立まぎれに見違うたわいの。これおいち、親父殿はどこぞへ行たか。

いち　あい、内にはゐやしやんせぬわいな。

りく　どうぞもう、歸つてくれねばよいが。(トおきくに向ひ、)それはさうと、今日はどうであつたの。

きく　あい、悦んで下さんせ、今日はいつもよりお客も多く、さる旦那樣から御祝儀をお貰ひ申しましたわいな。

(トおきく帶の間より巾着を出し、紙包の金と錢を出す。)

りく　それはよいことをしやつたの、わしも今日は綿の摘賃、草双紙の綴代、何やかやで一分あまりになつたわいの。(ト佛檀の下段より小文庫を出し、内より錢と金を出し見せる。)

きく　どうぞ早うお金を溜めて、文彌の官位がとつてやりたい。忘れもせぬ三歳の年、私が抱いてつい落し、石に打附け情なや兩眼ともに潰せしあの子、せめて望みの官位でもとつてやらねばこの姉の、どうも義理が濟まぬわ

いな。
きく　はて、それとても約束事、その替りには若い身で恥も厭はず茶見世へ出て、淨瑠璃を語つて人樣に、合力受けるも文彌の爲め、そなたの薬で今日のお入れ、十五兩餘になつたわいな。
　ト文庫の金包へ金を一つにする。
きく　とはいへ、座頭の官位でさへ、百五十兩入るとのこと。
りく　身貧な暮しで大まいの、
きく　金の出來よう當もなし。
りく　はて、何としたら、
兩人　よからうなあ。
　ト兩人思入、おきく思ひ出せしこなしあつて、
きく　これはしたり、私としたことが、大事の撥を茶店の床几へ忘れて來たが、かゝさんお前太儀ながら、ちよつと行て來て下さんせいな。
りく　おゝ、あの撥を失うては、明日から生業の障りになる。つい一走り行て來ようわいの。
きく　ついでながら身替りの地藏樣へ、私の替りにお參り申して來て下さんせいな。
りく　おい〳〵。歸りに神明前の泉市樣へ寄つて、草双紙をとつて來る程に、ちつと遲うならうわいの。
　ト言ひながら門口へ出る。
きく　そんならゆるりと、行てござんせいな。
りく　どれ、行て來ようわいの。
　ト四つ竹節になり、おりく花道へはひる。おきく文庫を佛檀の下へしまふ。又稽古唄になり、花道より髪結才三郎手拭の片褄下駄がけ、鬢盥をさげ髪結の拵にて出來り、直に門口へ來て、
才三　をばさん、お家かね。（ト門口を明ける。）
きく　おや、髪結の才三さんかえ。母さんは今愛宕下まで行きましたわいな。
才三　さうでございますか。（ト内へはひり）おきくさん、御面倒ながら、どうぞ油手拭を洗濯して下さりませ。
きく　はい〳〵畏りましたわいな。
才三　嘸油染みてお困りでござりませうが、一人者の悲しさ洗人がござりませぬから、お賴申します。
きく　ほんにお一人では嘸お困りでござりませう、早うよいお上さんをお持ちなさんせいな。
才三　いくら持ちたくつても、誰も女房になるものがござ

りません。（ト佛檀の袱紗へ目を附け思入あつて、）もしお菊さん、ぶしつけなことを言ふやうだが、お前さんのお家に合しては、あの佛檀の打敷は立派な切でございまするが、ちよつと拜見いたしたうございます。

きく　あい、これでござんすかえ。

　ト袱紗を取つて見せる。

才三　（裏表を見て、）こりやあ結構な品だ、表は古代の鴛鴦切、裏は燃えたつ飛龍紋、まさしくこれは、（ト思入あつて、）異なことをお聞き申しまするが、この打敷は久しくお家にござりますか。

きく　いえ、その袱紗は此間父さんが、どこでやら買うて來なさんしたのぢやわいな。

才三　むう、して親御さんの御生業は。

きく　さあ、父さんの生業は。（ト言ひ兼ねる。）

いち　紙屑屋でござんすわいな。

才三　へゝい左樣でござりますか。こりやあ結構な品だ、大切になされませ。（トおきくに返し、）左樣なら御面倒でも、早く洗つて下さりませ。

きく　直に洗つてあげますわいな。

才三　（門口へ出て、）はい、おやかましうございました。

（ト合方にて、花道附際まで行き思入あつて、）はて心得ぬ今の打敷、世にも稀なる鴛鴦切は紛失なせし花形の、まさしく茶入を包みし袱紗、此家の内にあるといふは、もしや寶の盗賊か。

　ト振返り見る途端に、おきく門口を明け見て、

きく　まだおいでなさんせぬか。

才三　いえ、唐櫃の掃除をしてゐました。どれ、もう一精出しませうか。

　ト稽古唄になり、才三郎合點の行かぬ思入にて考へながら花道へはひる。おきく後を見送り門口を閉め、

きく　これおいち、そなたにちつと頼まにやならぬ事があるわいの。

いち　姉さん、わたしに頼みとはえ。

きく　さ、そなたに頼みは。（トあたりへ思入あつて、）奥でとつくり話さうわいの。

いち　そんなら姉さん。

きく　妹おじや。

　ト寺鉦になり、おきくおいちの手を引き奥へはひる。

　寺鉦か打上げ床の淨瑠璃になる。

〽世の中の善きも惡しきも見えぬ眼に、突く杖の木は直

なれど、心ゆがみし座頭の坊、孝子文彌を右左り、なさけ容赦もあらけなく、

トこゝへテンツヽを冠せ、花道より座頭文彌下駄にて杖を持ち、これもでく市こぶ市の二人同じく座頭ゝ拵へにて、文彌ゝ引立てゝ出來る。後より白木屋彦三羽織着流し町人の拵にて、捨ぜりふにて留めながら出來り、花道にて、

こぶ　やいゝゝ汝は憎い奴だ、市名も取らぬ分際で四分の者に突きあたり、ろくすつぽうの詫もせず、

でく　盲人の法を知らぬからは、誰が弟子だか師匠へことわり、きつと仕置をせねばならぬ。

文彌　そのお腹立は御尤もでござりまするが、突きあたりしはあなた方より。いえ、私の不調法、幾重にもお詫いたしますほどに、どうぞ御了簡なされて下さりませ。

彦三　どういふ譯か知らないが、最前から二人して可哀さうに打ち打擲、もうよい加減にお前方も了簡しておやんなさいな。

こぶ　えゝこの人は大きなお世話な、仲間の法ですることだ、素人の知つたことぢやあない。

でく　了簡しろならしまひものでもないが、たゞ了簡がなるものか、いけ馬鹿々々しい。

兩人　退かつしやいゝゝ。

ト兩人又杖で打つを、彦三留めて、

彦三　これさゝゝお前方もさりとは執着い人達だ。いかに眼が見えぬとて、このひがひすな座頭殿をめつたむしやうに打敲き、ひよつと打ちどこでも惡くつて、もしものことがあつたなら、假令官位のある身でもその分には濟みさうもないもの、人の留めるその内によい加減に了簡しなさいな。わしも中へはひつて詫の一つも進ぜませう。どうぞ了簡して下さいな。

〽詫と聞いては二人とも、元より眼のなき座頭の坊

こぶ　そりや、何と言はつしやる、わしらが了簡することなら、お前が酒を買はしやるとか。

でく　どこのお方か知らないが、さりとは眼の明いた御挨拶、お前に免じて、

兩人　了簡しませう。

彦三　すりや了簡して下さるとか、それは早速忝けない（ト紙入より金を出して一分紙に包み、）少しばかりだが、これで歸りにいつぱい呑んで下さりませ。

トでく市に渡す。

でく　(探り見て、)これは／＼有難うございます。
こぶ　これ／＼、いくらある／＼、りやんこか／＼。
でく　どうして／＼、額だわ／＼。
こぶ　なに額だ、どれ／＼。(ト探り見て、)こいつは話せるな。
でく　晩に橋向うへ泊りに行かう。
こぶ　そのこと／＼。こりやあ旦那有難うございます。
彦三　何の禮に及ぶものか、さあ／＼早く行かつしやい。
でく　はい／＼。何とこぶ市、見ず知らずの者に一分出して下さるとは、このやうな旦那はあんまりないの。
こぶ　はりとは、氣の利いた旦那様だ。
〽慾に心のくら闇も、金の光りに座頭の坊、杖突きたてゝ急ぎ行く。(ト兩人花道へはひる。)
〽後を見送る彦三に、文彌はおづ／＼前へ出で、
文彌　これは／＼何れの旦那様でございますか、あなたさまのお蔭にて、今の難儀を脱れました。えゝ有難うござりまする。
彦三　さて／＼祝儀座頭といふものは、意地の惡い憎いもの、めつたむしやうにお前を打つたが、どこぞ怪我でもしはせなんだか。

文彌　いえ／＼、どこも何ともござりませぬ。
彦三　いや／＼、だいぶ身體に泥がついてある。
〽衣類の砂を打拂へば、(ト彦三文彌の砂を拂ひやろ。)
文彌　これは憚りでござりまする。もうよろしうござりまする。
彦三　さうしてお前の家は、この近所かえ。
文彌　はい、この向うが私の家でござりまする。
彦三　なるほど、揉療治の札が出てゐますの。
文彌　左様でござります。いやも穢うはござりますが、ちよつとお立寄り下さりませ、母にお禮を申さしたうござりまする。
彦三　なに、その禮には及ばぬことだが、お前の麁相でないことを、家の衆に話して聞かさう。
文彌　左様ならお立寄り下さりますか。どれ、御案内いたしませう。
〽勝手覺えし我家の門、文彌は彦三伴ひて、
ト文彌本舞臺へ來りて、
文彌　母さん、今歸りました。
〽聲に姉妹立ちいでゝ、(ト奥よりおきくおいち出來りて、)

きく　おゝ文彌戻つたかいの。
いち　兄さん、だいぶおそうござんしたな。
文彌　姉さん、妹、して母さんは。
いち　今愛宕下まで行かしやんしたわいな。
文彌　おゝさうであつたかさ、お旦那様、これへお通り下さりませ。
トこれにて彦三内へはひる。
きく　これはどなた様でござりますか、ようおいでなされました。
彦三　御免なされませ（ト上手へ通る。）
〽お菊はふつと彦三の、となり見ればしとやかに、由ありげなる當世風、てもよい殿御と見とれゐる、文彌はそれと氣も附かず、
トこの内彦三は上手へ住ふ。おきくは彦三を見てうつとりと見とれてゐる。
文彌　（思入あつて、）これ姉さん、あなたにお禮を申して下され。今家へ歸る道にて、四分の衆に突當られ、おのが麁相をこつちへ塗りつけ、市名をとらぬ身を以て何でわしらに突當つたの、詫の仕やうが惡いのと杖をもつて打ち打擲、酷い目に逢ふ所をこの旦那様の御挨拶で、無事に歸つて來ましたほどに、とうお禮を申して下され。
きく　それはまあ、何と御禮を申さうやら。（ト彦三をちつと見て恥しき思入）あなた、有難うござりますわいな。
彦三　いやも、同じ盲人のその中でも、祝儀座頭に撿校や勾當なぞが貸金の催促に歩く故、意地の惡い者とは聞けど、あまりと言へば無理難題、見兼ねてわしが中へはひりやう〳〵、濟ましは濟ましたが、見なさる通り着物もよごれ、綻も切つたれど、必すこつちの惡いのではない程に、そのことを話さうと、それ故一緒にまゐりました。
きく　それはまあ御親切に、有難うござりますわいな。
文彌　これ〳〵姉さん、まだその上に四分の衆に、御酒代迄もあなた様が、お出しなされて下されました。母さんがお留守故、姉さん、お前二人前、ようお禮を言うて下さりませ。
きく　あい〳〵、お禮が申したうてならぬわいの。これこれおいち、そなたもお禮を申しやいの。
いち　あい〳〵。
きく　重ね〴〵のあなたの御恩、有難うござりますわいな。
文彌　有難うござります。

いち　有難うござりますわいな。
きく　まだ〳〵そのやうなことでは濟まぬ。あなた有難う
　ござります。
文彌　いやも、有難うござります。
　トおきく文彌いちこちして、とゞ兩人向ひ合ひ、
兩人　えゝ有難うござります。(ト互ひに辭儀をする、おい
　ち見て、)
いち　兄さん、そりや姉さんぢやわいな。
きく　ほんに、文彌か。
文彌　姉さんであつたか、はゝゝゝ。
　へこれも他生の縁ならめ、
彦三　いやも、そのやうに禮を言はれては、逆上せ上つて
　なりませぬ。
文彌　これおいち、お茶でも上げぬかいの。
いち　あい〳〵。(トおいち茶を汲み、茶臺へ載せて出す
　な。)
きく　いえ〳〵、私が上げるわいな。(ト茶臺をとつて恥か
　しさうに、)あなた、お茶を一つお上りなされませいな。
彦三　いやも、必ずかまうて下さりますな。(トこの内文彌
　あたりを探り、煙草盆を探り取つて、)

文彌　これ〳〵おいち、お煙草盆をあげぬかいの。
いち　あい〳〵。(トおいち取つて出さうとするをおきく引
　きとつて、)
きく　私があげるわいの。はい、お煙草をおあがりなさり
　ませいな。
いち　えゝも、構うて下さるなといふに。
いち　(おきくに隱して、そつと茶を汲みて、)はい、お茶
　一つお上りなさりませいな。(ト茶を出す。)
彦三　(取つて、)これは〳〵、まだありますのに。
きく　(また茶を汲んで、)も一つおあがりなさりませいな。
彦三　またお茶でござりますか。もう〳〵このやうには呑
　めませぬ。
きく　それでは私のは、お厭でござりますか。
彦三　いえ〳〵、さうではないけれども。
文彌　これはしたり姉さん、もうよい加減になされませ。
　彼方が御迷惑の樣子ぢやわいの。それはさうと旦那樣、
　母が歸られましたなら是非お禮に上りませうが、あなた
　樣はどちらさまでござりますか、お名前を承りたうご
　ざりまする。
彦三　それはいと易いことなれど、なにこれしきの事に、

お禮を受ける覺えもなければ。
きく　いえ／＼あなたのお名前を、わたしもちつと。どうぞ、お聞かせなされて下さりませいな。
彦三　そのやうに言はるゝを、言はぬのも却つていかゞ、わしは本材木町の白木屋の養子、彦三といふ者ぢやが、必ず禮には來て下さるな、却つて迷惑しますわいの。
文彌　すりや、あなたは材木町の、白木屋の若旦那、
きく　彦三樣とおつしやりますか。
トおきく素麪櫃の上の手習草紙へ彦三の名を書留める、彦三もおきくへ思入あつて、
彦三　いや先刻からよほどの間、得意まはりがおそなはれば、もうお暇いたしませう。
文彌　でもござりませうが今暫時、何はなくともお煮花でも。
彦三　いえ／＼、先刻から何ばいも／＼、お茶は御馳走になりました。
きく　左樣ならば、もうお歸りでござりますか。
彦三　これを御縁に、この邊へまゐつた折はおたづね申さう。
文彌　どうぞ、お立寄りなされて下さりませ。

ト彦三立上る、おきく本意なき思入、おいち彦三の草履をなほし、
いち　はい、お履物。
彦三　これは憚り、ト彦三門口へ出て、おきく思入あつて、あ、あたら花をば。
きく　え。
彦三　いやさ、話しにその中まゐりませう。
〽心殘して彦三は、見返り／＼歸り行く。
ト彦三思入あつて行きかけ、振返りおきくと顏見合せ、心を殘して花道へはひる。
〽影見ゆるまで延上り、見送る姉を見えぬ目に、知らぬ文彌はこなたへ向ひ、
トおきく門口の柱へすがり、うつとりと向うを見送りゐる。おいちは煙草盆茶碗を片附けゐる、文彌探り探り上手へ向ひ、
文彌　もし姉さん、信心はしようもの、今日の難儀を彦三樣の、お情故に助かりしも神や佛の皆御利益何と有難いことではござりませぬか。もし姉さん／＼、なぜ物を言はつしやりませぬ。
いち　もし、姉さんは門口に、今のお方を見送つてゐなさ

んすわいな。
〽言ふに盲目の勘もよく、扨はと悟る弟に、姉はうつとり心も附かず、
ト此中文彌扨は彦三に心有るかといふ思入、おきくは延上り、影の見えぬ思入にて、
きく　あゝ姿といひ心といひ、てもまあよい男ぢやなあ。
文彌　姉さん、よいとは何が。
きく　さあ、よいといふたは、お天氣ぢやわいな。
文彌　はあゝ、さうでござりましたか。いや、よいと申せば彦三様は、器柄といひ、よい男でござりませうな。
きく　よいとも／＼、とんと錦繪に書いた、彦三郎のやうぢやわいの。
文彌　それでお前も。
きく　え。
文彌　いや、彦三郎は贔屓でござりますな。
きく　いくら贔屓に思うたとて、私などが及ばぬこと。殊には廓へ。（ト帶の間より書置の文を出し思入。）
文彌　や。（ト合點の行かぬ思入。）
きく　さあ苦勞忘れにせめて一幕、どうぞ見たいものぢやわいな。

〽お菊は胸のもつれ髪かき上作らしほ／＼と、外面に出て妹を招けばさとくも走り出で、
トおきく思入あつて門口へ出て、おいちを招く、おいち心得つか／＼と門口へ出て、
いち　姉さん、何でござんすえ。
〽言ふをおさへて囁けば、
そんなら、さつきの話しの後を。
きく　内では文彌に憚りあれば、何かは隣りで、妹おじや。
（ト兩人下手へはひる。）
〽手を引連れておとゞいは、隣りの家へ忍び行く、知らぬ文彌はこなたへ向ひ、
文彌　もし姉さん／＼、あゝ又門口ではないか。
〽言ひつゝ門口探り見て、
こりや門口でもないが、もしや今の彦三様のあとでも追うて行かれたか。おいちや／＼、はあゝこれも一緒に行つたさうな。あゝ人の心は知れねども、彦三様には姉さんもどうやら心のある樣子、とはいへあなたは、白木屋の若旦那とあるからは、所詮及ばぬことなれど、男と違つて女の身は氏ならで乘る玉の輿、どういふ縁で末始終願ひの叶ふまいものでもない。私も願ひの官金を早う溜め

て官位を取り、最前いおめた四分の奴等を見返してやりたいものだ。えゝ、見返す賤はなかつたもの、はゝゝゝは丶。どれ、汚れた着物を着替へませうか。

〽勝手覺えし戸棚の内、着替への布子取出す、拍子に落ちる黒羽織。

ト文彌戸棚より布子を出す、この時黒の單羽織落ちる、文彌取上げ、

こりやお師匠樣から貰うた羽織、へトちよつといたゞき傍へおき、〔い〕や布子より、今日はまだ溜つた金を見なかつた。どれ、一寸お目にかゝらうか。

〽文彌はあたりに人のなき、折を幸ひ佛檀より官金取出し算へ見る、身の樂しみも寸善尺魔、喜藏小兵衞のわるものが諜し合してあわたゞしく、門の戸開けて驅込む小兵衞、逃がしはせじと喜藏が引附け、

ト此中文彌思入あつて佛檀より以前の文庫を出し、中より金を出し算へながら嬉しき思入。此中下手より小兵衞、喜藏出來り、門口より窺ひ囁き合ひ、わざとバタバタと足音をさして、小兵衞内へ逃込むを喜藏引つとらへて、

喜藏　うぬ、逃げるとて逃がさうか。

小兵　どうか御免なされて下さりませ。

〽聲にびつくりあたふたと、文庫を羽織でうち隱し、ありあふ黒の羽織を

ト文彌あわてゝ文庫の蓋をなし、あり合ふ黒の羽織を冠せ、

文彌　おゝ、さういふ聲は、おゝ親父樣かえござりませぬか。

小兵　文彌か、面目ない〳〵。

文彌　こりや、どうなされたのでござります。

喜藏　どうも致さぬ、此奴めは身が紙入を拔きとつた。

文彌　えゝ、すりや親父さまには。

喜藏　盜人をひろいだ。

〽聞くに文彌は小兵衞にすがり、

文彌　これ親父樣、何か樣子は知らねども、せつば詰つたことあつて貧の盜みでござりませうが、情ないことして下されましたなあ。

〽わつとばかりに泣きふせば、小兵衞はわざと哀れげに、

小兵　これ文彌、とんだ權太のせりふだが、常が常故この小兵衞が慾にふけつて盜みしかと、思ふであらうがさうではない、これまで婆アや子供等に苦勞を掛けたも取る年に、眼が覺めて見りや面目なく、せめて我身の言譯に、

親子三人喰ふものも喰はずに溜めると噂に聞く、その官金の足しにもと思つた所が出來ぬは金、所詮この身はわるものと名をとつたる上からは、お上のお仕置受けるとも、そなたに官位が取つてやりたく、盜めば直に天の網かゝりや繫がるそなたにまで、苦勞をかけるが面目ない。

〽身をかきむしる後悔も、噓僞りと文彌は知らず、

文彌　すりや親父樣には是まで、うつて替つて私を不便と思うて官金の、足しに盜みをなされしとか、その思召しが千萬兩、もう／＼金子は入りませぬほどに、盜みし品をお返し申し、お詫申してこの後は、さもしいことはふッつりと、思ひとまつて下さりませ。

〽淚ながらに眞實の異見、してやつたりとうなづき合ひ、

ト文彌小兵衞にすがりいふ。小兵衞、喜藏うまいといふ思入。

小兵　おゝそなたの異見に附いて、盜んだ品はお返し申さう。もしお侍樣、今お聞きなさる通りの譯せつないことでござりますれば、どうぞお許しなされて下さりませ。

喜藏　盜んだ品を返すことなら、悴に免じて許してくれう。

小兵　それは有難うござりまする。サア お受取り下さりませ。

〽怪しの紙入取出せば、喜藏は中を改めて態とびつくり仰天なし、

ト小兵衞古ひし紙入を喜藏に渡す、中を改め見て、

喜藏　さあ、ないわ／＼、金入の中に入れおいた金子が見えぬが、扨は手早くもこかしをつたな。

小兵　めつさうなことおつしやりませ、こかした覺えはござりませぬ。

喜藏　なに、ないことがあるものか。

文彌　して、その金子はいかほどでござりました。

喜藏　さあ、その金高は、（ト喜藏いくらに言はうといふ思入、小兵衞は二十兩と言へと二本指を出す、喜藏呑込み）おゝ、入れておいたは二十兩だ。

文彌　えゝ（ト びつくりなす、小兵衞心得思入あつて）

小兵　いえ／＼、金入の中にござりましたは、百疋小判と文錢ばかり、金といつてはござりませぬ。

喜藏　おゝそのほかに封金にて、高野へ納める祠堂金が二十兩入れてあつた。さあ、きり／＼と出してしまへ。

小兵　いくら出せとおつしやつても、盜まぬものは出されませぬ。

喜藏　うぬ盜人たけ／＼しいと、出さぬといつてその分に

おかうか。
〽我手の平を打叩き、音を聞かする打擲に、小兵衛は苦しき聲を出し、
ト喜藏自分の手をたゝき、小兵衛を打つ體に見する。小兵衛打たれる思入にて、
小兵　あゝ痛い〳〵、さう打たれては死にます〳〵。どうぞ堪忍して下さりませ。
喜藏　そんなら金を出してしまへ。
小兵　それぢやといふて。
喜藏　出さずば、うぬ、まッ二つに。
〽鯉口ならせば文彌はおどろき、
文彌　まあ〳〵お待ちなされて下さりませ。（ト喜藏を留め）これ親父樣、命に替へる寶はない、取つたら取つたと詫言して、早う金をお出しなされませ。
小兵　さあ、取つたものなら出しもせうが、元より取らぬ二十兩、達つて取つたとおつしやるなら、此身のめんばれ、すつぽりと、切つて疑ひお晴らし下され。
喜藏　むゝ、よい覺悟だ、どれ眞二つにいたしてくれう。
ト喜藏又鍔音をさせる。
文彌　あゝ、これお侍樣、必ず早まつて下さりますな、私には義理ある親、殺さしましては。
ト文彌喜藏を留める。兩人うまいといふこなしあつて、
喜藏　むゝ、義理ある親故殺しては濟まぬとあるなら待つてもやらうが、取られし金はいかゞ致す。
文彌　その二十兩は私からあなたへお返し申しませう。
喜藏　取られし金さへ返すことなら、此の方とて事は好まぬ。さあ、その金子を受取らう。
文彌　たゞ今差上げますでござりまする。（ト文彌思入あつて）もし旦那樣え、あなた樣へ私がお願ひがござります、と申すは外でもござりませぬ、唯今上げます二十兩の内五兩ほども足りますまいがその金とてもおろそかに溜めた金ではござりませぬ。目の不自由な私に官位が取つてやりたいと、お年寄られし母さまがすゝぎ洗濯縫仕事、その片手間に賃綿や草双紙の綴さへも廻らぬ糸のきしみがち、見兼ねて姉が茶見世へ出て、一錢二錢の合力受け語る哀れた淨瑠璃も、身につまさるゝ三の切、これもみんな我身故と、眼は見えねども心に見え、こぼるる涙呑込みて、吹く笛の音もかれ〳〵に、苦勞身にしむ秋の夜の風も厭はず療治にあるき、親子三人夜の目も寐ず稼ぎ溜めて、朝夕の煙の代に半なり、殘るは僅か端錢

昨日は五十今日は百徽塵積つて山とやら、やうやう溜めた十五兩、(ト文庫より錢と金を出し、布子と羽織も列べて、)足らぬところは私が着替布子に師匠から貰うた黑の夏羽織、薄い世帶のその中で、年月溜めた此の金を親の爲めとて一時に、出すを不便と思召し、これにてどうぞ親父さまの命を助けて下さりませ。もし、お願ひでござりまする。

へこの年月の艱難も水の哀れや官金に、布子を添へてふし拜む文彌が心ぞいぢらしゝ、

ト文彌布子の上へ金をおき喜藏を拜む。兩人うなづきて、

喜藏　木綿布子にべんべら羽織、五兩の質には高いものだが、そちが心が不便故、これで命は助けてくれる。

文彌　すりやお助けなされて下さりますか、ちえゝ有難うござりまする。

へ騙らるゝとも知らずして、悦ぶ我子を尻目にかけ、小兵衞はハツと空涙、

ト文彌悦ぶ。喜藏金をとつて懐へ入れる。

小兵　はあゝ。(ト泣く眞似をして、)あゝ世の中におぬしのやうな、孝行な者がまたとあらうか、親甲斐もないこの小兵衞を親と思うてこの年月、艱難苦勞して溜めた金もをしまず着類まで、添へて助けてくれるとは、子とは思はぬこれ文彌、そなたの眼には見えまいが、おりや手を合してをがんでゐるわいの。

ト文彌の鼻の先へ足を出し、ながむ。

文彌　あゝ勿體ないことおつしやりませ。親のことを子がするはこりや世間の當り前、それを禮をおつしやつては、却つて罰があたりまする。

小兵　なんの、これが罰どころか、をがまずにはゐられぬわいの。

ト尻を捲つて文彌の鼻の先へ出す。文彌拂ひのけようとして尻を探る。小兵衞おどろき飛退く。

喜藏　あゝ盗みをひろぐ人でなしの、子には稀なる親孝行、五兩足らぬもこのまゝに、許してくれるも子のお蔭。

ト喜藏門口へ行く。

小兵　その子の爲めと盗んだる、紙入故に目串がぬけず、騙りとらるゝ二十兩。

喜藏　どうしたと。(トきつと言ふ、文彌眞中にて喜藏を留め。)

文彌　あもし、何事も私を不便と思うて。

喜藏　む丶、そちに免じて許してくれる。

文彌　有難うござりまする。

喜藏　あ丶、命冥加な親仁だなあ。

〽命冥加と言ひ捨て逃足早き門の口、小兵衛は衣類を小脇に抱へ、拔足さし足立出でて、

ト喜藏門口へ出る、小兵衛布子と羽織を引抱へ門口へ出て、

小兵　喜藏さん、うまく行きやした。

喜藏　さうよ、思つたよりうまく行つた。

小兵　然し、高野へ納める祠堂金とは、あんまりまるむきであつた。

喜藏　何だ、布子と羽織を持つて來たのか、可愛さうにおいてくれればい丶のに。

小兵　どうで官金を取つたからは、もう家へは歸らねえ。

喜藏　四百がものでもとらねえのは損だ。

喜藏　いや、慾どうしい奴だ。

小兵　はて、年を取ると誰でもさうだ。

〽始終立聞く文彌はびつくり、(ト文彌何心なく門口にて二人の話を聞きびつくりして)

文彌　扨は騙りであつたるか、や丶丶丶。

〽尻邊にどうと倒る丶文彌、聲におどろき兩人は、後をも見ずに走り行く。

ト文彌はあきれてどうとなる。外の二人は驚き尻を端折り逸散に花道へはひる。文彌は起上りて、

あ丶これ、待つて下され、親父さま。

〽駈出す拍子門口の柱へばつたり仰向に、はずみを打つて倒れしが、起上つて齒噛みをなし、

ト文彌つか／＼と行き、門口へ突きあたり倒れ、起上つて悔しき思入。

え丶、所詮追ひかけ行つたとて、眼の見えぬ悲しさは鼻の先にとられても、それと知れぬ身の因果、いかになさぬ仲ぢやとて、あまりと言へば情ない、かういふことゝ知らぬ故、母さまや姉さまの、いくせの思ひでやう／＼と溜めて下された十五兩、斷りなしに遣うては濟まぬ事と思うたれど、義理ある親の命づく、どうも子として見てゐられず、よしや後にて母樣にお叱り受けなば其時に、我身の命を捨て丶もと覺悟極めて遣ひし金。あ丶眼かいも、見えぬ者をだまし、騙りとるとは親父樣、お前は鬼か蛇かいの。

〽身をかきむしろ悔み泣き、かくとは知らず立歸る姉は

不思議と門口より、内の様子を窺ひゐる、文彌はやうやう泣く涙を拭ひ、

ト此中文彌よろしく思入。下手より以前のおきく、おいち出來り、門口にて内の様子を窺ひゐる。

あゝ此の事を母さまや姉さまに言うたなら、何故父様のいふことを眞實にしたと仰しやらうが、よい衆の身の上なら、僅な金であらうけれど、その日暮しの身の上では又と出來よう當もなし親兄弟の丹精を無足にした申譯、口でまだ〳〵言はうより、いつそ淵川へでも身を沈め、さうぢやさうぢや。

〔けつさうかへて駈出るを、おきくは門の戸開けて入り、

トおきく此時内へ入りて、

きく　いや、その覺悟には及ばぬわいの。

文彌　や、お前は姉さん。〔トびつくりなし逃げようとする。〕

きく　あゝこれ逃げるに及ばぬ、門口で様子はあらまし聞きましたが、必すきな〳〵思やんな。父様に騙られしその金よりも輪をかけて、たんとお金ができたほどに、死ならなどゝいふ悪い了簡出しやんなや。

文彌　それぢやというて母様や、お前が折角溜めた金、どうもわしや言譯がない。

いち　もし兄さん、姉さんが又澤山お金を上げると言はしやんす故、そのやうなこと言うて下さんすな。私や悲しうなつてならぬわいな。

〔涙ぐめば、

文彌　おゝよう言うてくれた、嬉しいぞよ。とはいへ私に姉さんが、今の金に輪をかけて下さるとは、そりや偽り、私に力をおとさすまいため。

きく　いえ〳〵、偽りではさら〳〵ない、今に百兩渡さうわいの。

文彌　えゝ、〔トびつくりなし〕そりやまあどうしてその金が。

きく　さあ、まだそなたには話さねど、さるお屋敷の奥様へ拙い藝の淨瑠璃がお耳に入つて所望され、今日お屋敷へ上る積り、貧しい暮しに支度もなかろと、衣類はもとよりさし物まで、皆お上から下されしまだその上にお手當とて、金子百兩下さる約束、今に駕籠にてお屋敷から迎ひの衆が來る筈ぢやわいの。

文彌　そりやまあほんの事でござりますか、これといふのも日頃から、親を大事兄弟を憐れんで下さるお心故、天

道樣の皆お惠み、そのあまりにて此身の仕合せ、えゝ有難うござりまする。

へ嘆きの內の悅びも裏表なる姉弟、嬉しいに附け悲しいに附けて淚ぞさきだてり、折からこゝへ吉原から駕籠をつらせて佐野松屋、

ト花道より佐野松屋淸兵衞、女衒の源六附添ひ、後より駕籠舁四手駕籠を擔ぎ出來り、

源六　はい、御免なさいまし。

淸兵　あゝこれ源六、屋敷から來た積りぢやあないか。

源六　ほんに、さうであつた。（ト大きな聲して）賴まう賴まう。

いち　あい、どちらからおいでになりました。（ト門口を明ける。）

源六　私かえ、身共は、屋敷から迎ひに參つた。

きく　（門口へ出て來て、）これは／＼むさくろしい所へ、ようおいで下されました。さあ／＼あれへお通り下さりませいな。

淸兵　左樣なら御免なせえ。（ト言ひかけるを源六袖を引く。）いや、罷り通る、許しやれ。

ト兩人おきくと頷き合ひ上手へ通る。文彌思入あつて、

文彌　もし、姉さん、どなた樣がおいでなされました。

きく　今言うたお屋敷から、迎ひにおいでなされたのぢやわいの。

文彌　それはまあようおいで下されました、私は文彌と申す盲人にて、卽ちお菊の弟にござりまする。

淸兵　（侍の思入にて、）すりや、その方がお菊殿の舍弟でござるか、以後は入魂に賴みます。

源六　もし旦那、上手さうな按摩さんだ。いや、座頭殿でござる。

きく　これおいち、お茶をあげぬかいの。

いち　あい／＼。（ト茶を汲み、兩人へ出す。）

淸兵　いや、かまやるな／＼。

文彌　して姉樣が御奉公に出まするのは、どなた樣のお屋敷でござりますな。

源六　あい、奉公に出るのは吉原さ。

文彌　えゝ。

淸兵　あいや、吉原の近所にて、えゝ、見返り播磨守と申す大名でござる。

文彌　へゝえ、吉原の近所に、そのやうなお屋敷がござりましたかな。

源六　あるとも〱、吉原の近所故、世間では吉原御殿と申すわ。
清兵　然も、尾州侯の五軒長屋に習ひ、五十軒などゝいふがあれば、
源六　また、世繼長屋、稻毛長屋などゝいふお長屋もあるて。
文彌　へゝえ、左樣でござりますか、してあなた方は。
清兵　私でござるか。いや、身共でござるか、身共は稻荷九郎助と申す奧用人でござる。
源六　拙者は朝日如來次と申す、御錠口番でござる。
文彌　これからは私もお屋敷へ出ますれば、御懇親にお願ひ申しまする。
源六　ときに姐さん。いやお菊どの、遠方のことなれば、支度を早くなされ。即ちこれは上より下さる裲襠小袖、
　ト手拭をとつて出す。
きく　これは〱結構な品を、有難く頂戴いたしますわいな。
清兵　まづ何は兎もあれ、ものゝ取極なれば、請狀を致すでござらう。(ト懐より年季證文を出す。)
源六　文彌殿は名前主のことなれば、印形を出さつしやい。
文彌　かしこまりました。(ト文庫の内より印形を出し渡す。清兵衞證文へ判を押し)
清兵　文言はよむに及ばぬ、お定りの年季證文いや奉公人請狀、約束の手當金即ち百兩渡し申す。
　ト胴卷より百兩包みを出し、おきくに渡す。
きく　これは有難うござります。さあ文彌、これはそなたへ。(ト百兩を文彌に渡す。)
文彌　や、こりや姉さん、小判でござりますな、生れて初めて百兩といふ金を持つて見ました。えゝ有難うござりまする。(ト金を頂く)もし姉さん、何はなくともお前の身祝ひ、お二人樣へ御酒一つ。
きく　それも調へておいたわいの。これおいち、その鯨の鹽燒をこゝへ持つて來やいの。
　トおきくは母おりくの買つて來た、味噌漉の中の肴へ思入する。
いち　あい、このぬたでござんすかえ。
きく　あ、それではない、こちらぢやわいの。
　トおいちに呑み込ませる。
いち　あい〱
　ト呑込み、八寸の膳の上へぬたの小皿を載せ出す。お

きく五合徳利の酒を燗徳利へうつし、土瓶へ入れる。

源六思入あつて、

源六　いや、これは御丁寧な、御無用になされればよいに。九郎助殿御覧なされ、この鯛の鹽燒は眼の下一尺八寸もございませう。

清兵　いかさま、これは見事なことだ。

源六　こちらは何だ、ひらめの刺身に口取物、臺重は鮑に初茸、此又鮭の照燒は唾のたまるほどうまさうだ。

清兵　こゝらでこんな料理をするには、神明の車屋であらう。これは〳〵大そうな御馳走だ。

きく（徳利を出し、）さあ、お燗がよろしうございます。お一つお上り下さりませ。

清兵　どれ、お辭儀なしに御馳走になりませう。

きく　おいら、お酌をしやいなう。

いち　あい〳〵。（トおいち酌をする、兩人よろしく呑む。）

文彌　お口には合ひますまいが、澤山召上つて下さりませ。

清兵　いやも、御酒と申しお肴と申し、申分はござらぬ。

源六　ちよつとお近附にけんじ天皇と致さう、いや、仕らう。（ト文彌に猪口をさす。）

文彌　私は一向不調法でございます。（トよろしくのんで）是は御返盃にいたしまする。（ト源六へさし、）御用人樣へ伺ひまするが、姉はお屋敷へ上りまして、何御奉公を勤めまする。

清兵　おゝ、姉御はお仕立がよいゆゑ、ぶッつけ仲の町へ出す積りだ。

文彌　何とおつしやります。

清兵　いや、仲の町ではない、中奥へ出す積りだ。

文彌　へい、お側でございますか。

源六　左樣さ、突出しの時には、蕎麥も配るのさ。

文彌　いづれ其中母と一緒に、御禮ながら上りませうが、お年寄樣は何とおつしやいます。

清兵　あゝ、家での年寄は遣手のお爪。

文彌　へゝえ、お爪さまとおつしやりますか。

源六　いや〳〵お年寄とはお局の事、おゝお局ならば、岩藤どのと言ひます。

文彌　左樣でございますか、して御中老樣は。

清兵　中老はおますにおきん。

源六　あ、もし、何をおつしやります。中老は尾上どのでございます。

文彌　それでは、芝居でいたします、鏡山のやうなお名で

ございますな。
源六　さあ、お局と中老は、何處の屋敷でも同じ名でござる。
文彌　左樣でござりまするか。
ト此中おきくはら〳〵と思入あつて、
きく　まあお話は後にして、も一つお上りなされませいな。
清兵　いや〳〵先刻から數獻過し、殊のほか酩酊いたしました。
源六　身共は殊に肴をあらし、ゲツプウの出るやうだ。
清兵　もはや夕景におもむけば、支度がよくば同道いたさう。
きく　はい、もうよろしうございますわいな。
源六　(思入あつて、)いや、これは見事々々、今までとはうつて變り、御殿模樣の鹿の子入り、やの字姿は又格別だ。
〽聞くに文彌は、ぞく〳〵悦び、
文彌　あゝその見事な御殿風を、一目なりとも見たいものぢや、これおいち、嘸やそなたは羨しからう。
いち　いえ〳〵私や、(ト言ひかけるをおきく目で押へる、)あい、姉さんのあの裝を、お前にちよつと見せたいわいの。
文彌　あゝ見たうて〳〵ならねども、見ることならぬ因果の身、せめてのことに探つてなりと。
〽立寄る文彌にお菊はびつくり、四邊見まはし佛檀の打敷取つて膝に當て、
ト文彌探り寄る、おきくびつくりして、佛檀の以前の袱紗をとつて膝にあて、
文彌　これ、こゝを探つて見やいの。
〽手を持ち添へて膝の上、袱紗の模樣をさぐらすれば、
文彌　(思入あつて、)これはまあ、結構さうな縫模樣、一目なりとも見たいものだ。(ト文彌膝の所に顏を寄せて、)もし姉さん、この小袖は抹香の匂ひがしますの。
きく　え。こりや抹香ぢやない、匂ひ袋ぢやわいの。
〽弟をくろめる詞のあや、傍であぶ〳〵くるわの亭主、
清兵　さあ〳〵太う酩酊致したれば、日の暮れぬ中に同道致さう。
きく　はい、唯今參りまするほどに、暫く門口でお待ち下さりませいな。
清兵　然らば御馳走の醉ざまし、風に吹かれて相待ち申さう。

源六　後のいつぱいが利いたかして、ひよろ〳〵と致すやうだ。

〽わづかな酒にひよろ〳〵と、醉うた裝して門の外、後におきくはしよんぼりと、せき來る淚呑込みて、

きく　これ文彌、わしが御奉公に出るからは、母樣のお力はおいちが年が行かぬ故、眼は見えいでもそなたばかり、どうぞ今の百兩で官位をとつて、これまでにいぢめた衆を見返した上、言ふまではなけれども、お年寄られた母さんを、大事にかけてたもいの。

文彌　そりやもうお前がない後は、眼は見えいでも母樣の、お世話はわしがしますほどに、必ず案じて下さるな。

きく　就いてはおいちも母さんや、この兄さんに世話やかさず、素直に御用をたしませうぞや。

いち　あい、母さんや兄さんの御用は素直にいたします程に、春になつたら腰折の人形買うて下さんせ。

きく　おゝ、買うてやりませうとも〳〵。春にならずと此の頃に、よいのを買うて屆けるぞや。

いち　嬉しうござんす。

きく　そんなら私やもう行きますぞ。

文彌　あゝ、これ、一目母さんに、その姿を見せて行かしやんせ。

きく　兼て母さんは御存じ故、逢はいでもだいじない。殊には段々取る年に淚脆うなつた故、定めて家にゐやしやんしたら、生別れでもするやうに、(トホロリして)結句逢はぬがよいわいの。

文彌　いかさま、こゝに母さんがゐられたことなら、泣かつしやろ、私も悲しうて、名殘りをしうござります。

〽文彌が泣けば妹も、共に泣く音の哀れさを、身に知る雨の袖袂、

ト文彌おいちしく〳〵と泣く。おきくも名殘をしき思入にて、

きく　あ、もう〳〵、そのやうなこと言うてくりやんな、心が殘つて惡いわいの。どれ、日の暮れぬ内行きませう。

文彌　あゝこれ姉さん、お前は常に癪持なれば、お師匠樣に貰うたる熊膽入りのこの丸藥。(ト文庫より藥包みを取出し)これをお前に上げるほどに、形見と思うて下さんせ。(トおきくに渡す。)

きく　あゝこれ、形見とは氣にかゝる。

文彌　あいや、形見ではない、そりや餞別。

〽何の心も附かずして、門出を祝ふ餞別を形見と言ひし

一言は、後にぞ思ひ知られける、
ト此中おきく心にかゝる思入にて門口へ出る。おいちつか／＼と行つて、
いち　姉さん、もう行かしやんすか（ト袖にすがる。）
きく　さつきのことを頼むぞよ。
いち　あい。はあゝゝゝゝ。（ト泣くを、
きく　あ、これ。（ト目で押へる、おいち口へ袖をあてる。おきく清兵衛に向つて。）これはお待遠でござりましたわいな。
清兵　いざ、お支度がよくば、それ、鋲打これへ。
源六　はあ。
〽氣轉四つ手の駕籠の垂れ、上ぐる間おそしと乘りうつれば、
ト おきく心の急く思入にに駕籠に乘る、文彌門口へ送り出て來て、
文彌　そんなら姉さん、御機嫌よろしう。
きく　そなたも達者で。
文彌　あゝ、どうやら死別れでもするやうに。
いち　私も悲しうござんすわいな。
清兵　あ、これ、目出度い門出に。

源六　涙は不吉。
きく　弟、さらば。（ト駕籠の垂をばらりとおろす。）
清兵　それ、乘物上げい。
源六　はあゝ。
〽はツとばかりにかき上ぐる、駕籠におきくは忍び泣き、廓をさして急ぎ行く。
ト若い者駕籠を舁上げ、清兵衛・源六せり立て花道へはひる。
いち　おゝ、もう表が暗うなつた。どれ、灯しの支度をしませうか。
〽とつかはおいちが奥へ行く、後に文彌は金おしいたゞき、
文彌　あ、姉さんのお蔭にて、思ひがけないこの百兩、母さんにお目にかけなば、嘸お悦びなさることであらう。早うお歸りなされればよいに。
〽待つ間ほどなく母親が、歸る日暮の急ぎ足、（ト花道より以前のおりく足早に出來り。）
りく　やれ／＼日が短かうなつた。今しがた七つを打つたに、もう足許が暗うなつた。（ト言ひながら門口へ來り。）あい、今戻つたわいの。（ト内へはひる。）

文彌　や、母さんお歸りなされましたか、お待申してをりました。
りく　待つてゐたとは、何ぞ用でも。
文彌　さあ、外のことでもござりませんが、姉さんがお屋敷へ、御奉公においでなされました。
りく　なに、おきくがお屋敷へ奉公に出た。
文彌　お前さまも、御存じぢやござりませぬか。
りく　いや／＼そのやうな事は知らぬ。今聞くが始めてぢやわいの。
文彌　はて、合點の行かぬ、御存じのやうに言うてゞあつたが。
りく　して、その先は何樣ぢや。
文彌　さあ、吉原の近所にて、見返り播磨守樣といふお屋敷ぢやわいの。
りく　はて、そのやうなお屋敷は、聞いたこともないわいの。
文彌　それでも先のお屋敷から、立派な刺繍のお小袖やお手當金も百兩下され、而も鋲打の乘物でお迎ひにおいでなされました。嘘でない證據は、此の金。
ト文彌金を出し、りくに渡す。

りく　刺繍の小袖で鋲打に乘るのは立派な御奉公、殊には大まい百兩のお手當までも下さるとは、願うてもない身の仕合せ、それを私に隱すは不思議、こりや、たゞ事ではないわいの。
文彌　えゝ。（トびつくりなす。）
りく　して／＼證文へ、判でもしやつたか。
文彌　はい、請狀とやらへ判をしてやりました。
りく　その證文の文言は。
文彌　お定まりぢやと申します故、つい承はらずにしまひました。
りく　えゝ目かいも見えぬ身を以て、譯も聞かずに證文へ、何故印形をおしてやつた。母が歸つた上の事と言ひ延べてはおかなんだ。お屋敷なればよけれども、どんな所へおきくをば、連れて行たやら知れぬわいの。
文彌　すりや、お屋敷ではなかつたか、ほい。
〽はつとばかりに氣も半亂、どうとなりしが起上り、程は行くまい、後おひかけて。（と行かうとするを、おりく留めて。）
りく　えゝ、とりのぼせて、これ文彌、目も見えいで何處をあて。

文彌　それぢやというて。
りく　はて、待てと言はゞ待ちやいなう。
〽争ふ中へ妹おいち、文たづさへて立ちへだて、
と文彌行かうとするをおりく留める、此の時奥よりおいち文を持出で、兩人を留めて、
いち　あゝもし、母さんも兄さんも、必ずお案じなされますな、姉さんの行先は、私が知つてゐますわいな。
文彌　おゝおいち、そなたが知つて居やるとか。
りく　して、行く先は何處なるか。
兩人　早う言うて聞かしやいの。
いち　あい、姉さんの行先は、このお文に書いてありますわいな。
〽差出す文を文彌は取上げ、
文彌　えゝ、この文を讀んだなら、定めて様子が分からうが、何をいうても見えぬ此眼。
りく　眼は見えながらこの母は、皆目讀めぬ盲目同然。
文彌　こりやどうしたら、
兩人　よからうぞいの。
〽途方に暮るれば、おいちはさかしく、
いち　もし母さん、私が讀んで上げませう。

文彌　あゝさうぢや、そちばかりは眼が見える。早う讀んで聞かしやいの。
りく　どれ、灯りを點けてやらうわいの。
〽母はこち〳〵火打箱、燈火つくれば書置を、おいちは開き聲張上げ、
いち　「一筆書き殘しまゐらせ候、左候へば弟文彌事幼き時に我身が背負ひ緣より落し石にて打ち、終に三つの年よりして盲目となり候故、物の色さへ知らぬ不便さ。成人するに從がつて過越し方を思ひ出し、盲目となせし身の詫に、せめて官金調へて行末樂に致させ度く、御前様にも御苦勞かけ、丹精いたし候へども、はか〲しく調ひ申さず、いかゞはせんと思ふ折節、今日愛宕下にて御祝儀を下されし御方は、吉原の遊女屋にて佐野松屋の旦那様故、切ない譯をお話し申し、百兩に此身をば苦界へ沈めまゐらせ、何卒この金子にて、文彌に官位を御取り下され候やう、くれ〲も願ひ上げまゐらせたゞ心にかゝり候は眼の不自由な弟に、まだ年行かぬ妹を殘し、御前様にお世話かけ候段、それのみ心ぐるしく存じまゐらせ、また〲申し置き度きこと御座候へども、はかどらぬ筆に書殘しまゐらせあら〲目出度くかしく、御母様へきくより。」

〽傍の二人は呆れはて、
文彌　扨は屋敷へ奉公と、僞り言うて姉さんには、苦界へその身を沈められしか。
りく　おゝ、出かしたとは言ひながら、なぜ一言此の母に相談かけてくれぬぞい。
文彌　おゝさうぢや、この金持つて姉さんを廓から取り返さん。（ト行かうとするをおりく留めて）
りく　あゝこれ、そなたは知るまいが、印形なした上からは、たとひその金倍にしても返さぬのが廓の法。
文彌　すりやもう取返すことはならざるか。目が見えぬばつかりに、現在姉を廓の勤め。あゝ、この眼が明きたい明きたい。
〽悔み歎けば母親が、
ト文彌眼を明きたき思入、おりくこなしあつて、
りく　その明きたがる兩眼を、つぶせし姉が言譯なれば、志しを無足にせず、官位を取るが姉への孝行。
文彌　とは言へ、座頭の官位さへ、百五十兩入るとの事。
りく　その足らずめは京都へ上り、そなたの師匠一老さまへ、お願ひ申さばかなふは必定。
文彌　そんなら、これから京都へ上り、あ、その行く道の路用の金が。（ト當惑の思入）
りく　それぞ幸ひ、溜めたる金を。
文彌　さあ、その金は親父さまに、騙られましてござりまする。
りく　えゝ、すりや、あの人でなしに、やゝゝゝ。
〽聞いてびつくり母親が、呆れ果てたる表の方、
ト此中下手より以前の才三郎出で、門口にて窺ひゐて、此時、
才三　いや、その道中の路用の金は、わしがお貸し申しませう。
〽言ひつゝはひる才三を見るより、（トおいちを見て）
いち　や、そなたはさつきの才三さま。
文彌　縁もゆかりもない者に、
りく　路用の金を貸さうとは。
才三　唯は貸さぬ、質がとりたい。
文彌　そりや、いかなる品を。
才三　あの佛檀にかけてある、鴛鴦切の袱紗が望み。
りく　すりや、あの袱紗を。
才三　五兩の質に預かりたい。
〽金とりだせば母親が、袱紗をとつて才三に渡し、

りく　ト才三郎懐ろより金を出しおりくの前へおく、おりく佛檀の袱紗をとり、才三郎に渡して、
りく　はて、物すきな、何で袱紗を。
才三　望むはこつちの詮議の當。
文彌　え。
才三　さあ、まとまらずともその金を、路用になして、少しも早く。
文彌　えゝ有難うございまする
〽えゝ有難やと親と子が、勇み悦ぶ表口、隙もあらばと窺ふ小兵衛、おいちはそれと目早く見附け、
ト此内下手より以前の小兵衛うそ／＼と出來り、門口を覗く。おいち見て、
いち　あれ、父さんが。
文彌　えゝ。トおどろく拍子に、懐中より金包をばつたり落す。」
小兵　落ちたはまさしく。
ト小兵衛つか／＼とはひる。文彌金の上へべつたりと坐り、
文彌　いえ、何でもござりませぬ。
ト才三郎小兵衛を見て、

才三　寶の盗賊〽ト捉へようとする。
小兵　南無三。ト此時おいち行燈を吹消す。」
〽闇はあやなし
ト才三郎小兵衛にかゝるを、おりく支へる。小兵衛は門口を出る、文彌探り寄つて、門口をしやんと締め、ホット思入。双方よろしく、三重、時の鐘にて、
幕

三幕目

鞠子宿藤屋の場
宇都谷峠殺の場

（役名――伊丹屋十兵衛、座頭文彌、提婆の仁三、薩摩侍鹿子島新吾、大阪者太郎兵衛、日光の百姓出津村の勘太、江戸ッ兒がら熊、藤屋の亭主四郎兵衛、江戸ッ兒消炭の鍋、どんどろ坂の兵藏。藤屋の女房おむら、同下女おいね、同おせん等。）

（藤屋店先の場）――本舞臺三間の間常足の二重、正面藤屋といふ紺の長暖簾。上手間平戸の戸棚、下手

茶壁、講中の掛札。上の方一間海鼠壁、丸の内に御泊宿鞠子宿藤屋と記しあり。下の方一間出格子、總て東海道鞠子宿藤屋店先の體。二重に藤屋の女房おむら、掛硯りを控へ帳面を附けてゐる。下女二人は留女に　、一人の田舍道者を引張りゐる見得にて幕明く。

いね　もし、あなた、お泊りぢやありませんか。

せん　奥座敷が明いてござります。

兩人　さあ、お泊りなされませいな。

道者　こりやあ美しい姐え達、喰ひ物はどうでもいゝが、晩にお酌をしてくれるか。

せん　いえ〳〵鞠子の宿で名代の藤屋、そのやうなことはいたしませぬわいな

いね　女郎衆なら呼んであげますぞえ。

道者　馬鹿なことを言つたものだ。長旅をするものが、そんな事をしてなるものか。

いね　左樣なら外へ行つて、お泊りなされませいな。

道者　えゝ野暮な奴だな。

ト下女二人の背中をたゝき、下手へはひる。

せん　えゝ、好かない道者面だよ。

むら　おいねや、奥の八疊は江戸のお二人連と、大阪のお方ばかりかえ。

いね　いえ〳〵京のお方も、薩州のお侍樣も、御一緒でござりますわいな。

せん　それにまだ年の若い按摩さんが、おいでなさんすわいな。

むら　江戸のお方は、勇み衆故、間違ひのできぬやう、時時座敷を氣をつけてくりやれ。

いね　そりやもう如在はござんせぬ。今も見舞うてまゐりましたわいな。

ト馬士唄になり、花道より百姓勘太、草鞋菅笠にて小さな包を背負ひ出來る

せん　あなたお泊りぢやござりませぬか。ト袖を引く。

勘太　夜通し歩くわけにもいかねえから、泊りは泊るが定宿がある、駄目なこんだ引かつしやんな。

せん　どちらが御定宿でござりますか、手前は鞠子の藤屋でござります。

いね　お風呂も丁度わいてをります、お泊りなされませいな。

勘太　えゝ此の女どもは油斷のなんねえ、おれが定宿がそ

の藤屋だ、どうしてそれを知りをつた。おれを泊めてえと思つて、鞠子の宿の藤屋でござるなど〻、其の手は喰はない、おいたがえゝ。

いれ　何で嘘を吐きませうぞいな。あれ御覽なさいまし、鞠子宿藤屋と壁に記してござりますわいな。

勘太（壁をよく〳〵見て、）はあ、そんなこゝが名代の藤屋かな。實は定宿でもなんでもないが、後の立場で教はつて來たのた。

むら　それはようおいでなされました。まあおかけなさりませいなあ。これお茶を持つて來なよ。

ト奥にて「あい」と返事して、小女盆へ茶をのせ持來り、おせん盥へ水を取る。

小女　お茶をおあがりなされませ。

むら　お荷物はこちらでお預かり申しませう。

いれ　お笠はこれへかけておきますぞえ。

せん　おみ足をお出しなされませ。

むら　直にお風呂を召しますか。

いれ　御飯を直に召上りますか。

ト皆々口やかましくいふ。

勘太（耳をおさへて、）あゝこれ〳〵、さうべちやくちやと言はれては、逆上せてなんねえ。どうぞ靜にして下せえ。ときに旅籠錢はいくらだ。

むら　はい、東海道はお定り、二百文でござりますわいなあ。

勘太　晝辨當はつきますかね。

むら　お望みなら差上げませうわいな。

勘太　大きさはどの位だな。

いれ　どのやうにでも、結んで上げませうわいな。

勘太　梅干と澤庵をいれて、尺二寸廻り位に結んで下せえ。

せん　かしこまりましたわいな。

勘太　それ極めたら草鞋を脱ぐべい。（ト草鞋を脱ぎ足を洗ひながら、）間違はぬやうにして下せえ。

せん　いえ〳〵、間違ひはいたしませぬわいな。

勘太　好いのなら、間違つてもだいじない。

小女　この人は慾ばつた人だ。

むら　これにしたり、お客樣に向つてどうしたものだ。さあ、あなた奧へおいでなさいまし。

勘太　どりやお世話になり申さう。

むら　これ、御案内申しや。

小女　あい〳〵。

ト小女先に立ち勘太奥へはひる。と花道より十兵衞脚絆草鞋一本差し、合羽をつけし割掛の荷を擔ぎ菅笠を手に持ち出來りて、

十兵　やれ／＼日が短くなつた。今日は府中まで行けるだらうと思つたが、鞠子泊りで丁度好い。

いね　(十兵衞の近寄るのを見て、)もし、お泊りぢやござりませぬか。

十兵　あい、泊るのだが、一人旅だがいゝかえ。

いね　あなた方なら、よろしうござりますとも。

せん　さあ、おあがりなさりませいな。

十兵　それぢやあお世話になりませうか。

いね　お荷物をこちらへ遣はされませ。

せん　お泊りでござりますよ。

ト　おむら出て、十兵衞の荷物をおいねより受取る、十兵衞腰をかける。おせん盥を持來り、草鞋をとり十兵衞の足を洗ふ、奥より小女茶を汲んで來る。

小女　はい、お茶をおあがりなさりませ。

十兵　あい、おかたじけ(ト取つて呑む。)

むら　今日はお天氣でよろしうござりましたが、どちらからお立でござりました。

十兵　掛川から立ちましたが、大きにおそくなりました

むら　いえ／＼それではお早うござりましたわいな。お客様にお氣の毒でござりますが、今晩はお泊りが多うござりまして、お座敷が込み合ひます故、お合宿にお願ひ申したうござりますわいな

十兵　そりやあだいじござりませぬ。私も一人だから、賑やかなはうがよろしうござります。

ト足を洗ひ上る。

むら　お一人故、お大事な品はお預かり申しませうわいな。

十兵　なに荷物の中は着替ばかり、お預け申すほどの品でござりませぬ。

いね　お風呂がよろしうござりますが、直におめしなさいますか

十兵　ちと風氣故、湯は止しませう。

いね　左様なら、お座敷へ御案内致しませうわいな。

十兵　どれ、草臥を休めようか

三人　さあ、おいでなされませいな。

ト宿場の騒ぎ唄にて、この道具廻る。

〔藤屋座敷の場〕――本舞臺一面の平舞臺、正面床の間、上の方一間次の間仕切りの襖、下の方一面に障子立きり、角行燈をおいてある。こゝにから熊、消炭の龜江戸ッ子の勇み装にて、しがみ火鉢にあたり茶を呑みゐる。上手に薩摩侍新吾大髻の頭にて、懐中鏡にて鬚を拔きゐる。此の脇に大阪者太郎兵衛小さな板にて底まめの藥をねつてゐる。下手に勘太煙草を呑み、この傍にどんどろ坂の兵藏江戸近在の若い者の拵へにて、小楊枝を遣ひゐる。この模様にて道具留る。

熊　もし大阪の肥つたお方え、お前何を練んなさるのだ。
龜　えゝ意地きたなしめ、喰物なら、喰はうと思つて。
太郎　いや、わしは底まめをとがめて、えらう難儀をしましたさかい。吹殻を練つて附けますのぢや。
熊　底まめなら、いゝ藥があつたッけ。
太郎　さよかな、どないな藥がありますな。
熊　節分の柊を黒燒にしてつけるといゝ。
勘太　はあゝ、柊が底まめの藥になりますかな。
熊　なるどころか、底まめでも手の豆でも、豆一通りの妙藥だ。
新吾　こや／＼若い者、豆一通りの藥とあるからに、四つ目屋の代りには相ならぬかな。
熊　そりやあもう、豆と名のついたものなら、何豆でもきゝます。
兵藏　何で柊がそんなにきくだんべい。
熊　知らねえか、豆なら柊、（豆殻柊）と言はア。
龜　株ウ言つてやあがらあ。
皆々　はゝゝゝゝ。（ト笑ふ、新吾腹を立つて）
新吾　うぬ、武士たるものを嘲弄いたして、ふとかい奴だ、頭打ち斬るぞ。
熊　はあゝ、眞平御免なせえ。びんた打ちきられてたまるものか。
龜　これだから、つまらねえ口をきくなといふのだ。もし旦那、どうぞ御了簡なすつて下さりませ。
新吾　以來きつとたしなみをらう。
ト睨みつける。この時奥より提婆の仁三上方商人の拵へにて、手拭を持ち、湯上りの體にて出來る。
仁三　どなたもお風呂がようわいてをりますが、どうでござります。
太郎　おゝ京のお方、どこへおいでおやと思うたら、風呂

へ、おいでゞあつたかな。

仁三　今よう空いてをりますが、お這入りなされませぬか。

太郎　いや、私は底まめをとがめて、よう風呂へ這入りませぬわいの。

熊　もし、底まめの藥なら。

亀　また四文と出かけるか

勘太　なるほど、お江戸のお方は性懲もないことぢや、はゝゝゝ。

　ト下手よりおいね先に十兵衛出來り、

いね　もし皆樣、お狹うござりませうが、もうお一人お願ひ申しますわいな。

新吾　こや／＼、外の者の頼みなら罷りならぬ所なれど、おぬしが頼み故承知いたす替り、わい共が頼みも承知いたすであらうな。

いね　そりや魚心ありや、水心でござりますわいな。ほゝゝ。さあ、あなた此方へおはひりなされませいな。

十兵　へい、どなたも御免なされませ

仁三　さ、御遠慮なう火鉢のねきへお寄りなされ。

十兵　有難うござりまする。

いね　左樣なら、皆樣お願ひ申します。

新吾　こや／＼、わい共が頼みも承知であらうな。

いね　知りませぬわいな。

　トおいね奥へはひる。から熊十兵衛を見て、

熊　亀や見ねえ、この旦那は江戸ッ兒だな

亀　さうよ、江戸に違えねえ。

熊　どうでも江戸面は違ふな、きりゝしやんとしまつてゐらア。

亀　これ、わき國の人もゐらあ、あたり障りになることを言ふなえ。

熊　言つてもいゝや、違ふから違ふと言ふのだ、上方の贅六などゝ一つになるものか。もし旦那え、お前さんは江戸でござりませうね。

十兵　左樣でござります、私は柴井町の者でござります。

熊　有難え、江戸ッ兒が來たので話しが出來らア。もしわつちらア神田竪大工町で、大工でござりますが、何事も胸に思つてゐることができず、がら／＼するのでがら熊と申します。又この野郎はつまらねえことをぶつ／＼と憤りやすから、消炭の亀と言ひやす。地震この方長い錢をとつたところから伊勢參宮に出かけやしたが、京、大

阪で、耗つてしまひ、つまらなく江戸へ歸る道さ、何と
皆さん、今夜は落し噺しの三十石のやうに、國々の噺で
もしようぢやござりませんか。
仁三　はあゝ、そりやよい思ひ附ぢや、どうで宵から寐ら
れもせず。
太郎　さよぢや、どこの方か知れもせぬ方と、こないに合
宿するといふも、いはゆる他生の縁とやらぢや、なあ申
し。
勘太　さうでござる。一樹の影のいちごの流れとかいふこ
とがござる。
兵藏　そりやあ爺さん、權現堂の切れた時かね。
勘太　大方さうだんべい。
十兵　これはつんぼウ話しだの、あはゝゝゝ。
新吾　こや〳〵、お手前は大阪の者ぢやさうなが、大阪は
どの邊でござるな。
太郎　私でござりますか、大阪心齋橋通り、南へ入り北へ
下る東へ三軒目で、加賀屋太郎兵衛と申しまする。
新吾　はあゝ、太郎兵衛かゞやと申すはお手前がことか。
太郎　御常談おつしやりますな。
十兵　(勘太に向ひ、)もしお前さんはどちらでござります
る。
勘太　わしやあ日光男體山の麓、土井遠江守樣御城下より
三里の在、出津村百姓どんどろ坂の勘太郎と申します。
十兵　はあ、日光在でござりますか。してお上りでござり
ますか、お下りでござりますか。
勘太　伊勢參宮に上りでござります。
熊　おい、そつちの勇みの兄イ、何處だ。
兵藏　おらか、おらあ江戸さ。
熊　何だ、江戸だ。受取りにくい江戸だな。
龜　引を立てにやあ、通用はむづかしい。
熊　兄イ、お前江戸は何處だ
兵藏　竹の塚さ。
熊　道理でをかしいと思つた。もしお侍樣え、あなたア
どちらでござります。
新吾　わいどもは薩州鹿兒島アの者なるが、劍道修業の爲
めに日本六十餘州、武者修業にありく者なアるが、執心
なら一本まゐらうか。(ト熊の鼻の先へ鐵扇を出す、熊び
つくりして)
熊　まつぴら御免なさいまし。(ト此中仁三日記帳を附けて
ゐる。十兵衛見て)

十兵　もし、そこに帳をつけておいでなさるお方、お前様はどちらでござりまする。

仁三　はあ、わていでござりますか、わていは京都下立賣松原上る所で、小間物を生業致します、仁兵衞と申しますものでござります。

熊　もし、京のお方え、帳はいつでも附けられらア、こゝへ來て話でもしなせえな。

仁三　はゝ有難うおますが、日記を附けます故、その晩に附けませぬと、つい附落してなりませぬ。それにまだ當宿へ状をことづかつて參りました故、ちよつと屆けて參りまして、ゆつくりとお話しいたしませう。

熊　それぢやあ早く行つて來なせえ。

仁三（帳面を懷ろへ入れ、手紙を持つて、）さよなら、直行つて參じます。どなたもお話しなされませ。

ト下手へはひる。

新吾　こや／＼、若いの、宵の間に盲目がをつたではなかつたか。

熊　あい、飯は宵に喰ひやした。

新吾　えゝこや、盲目が、をつたではなかつたといふこつちや。

熊　分らねえ、めしは喰つたといふに。

十兵　あゝもし神田のお方、その盲目とおつしやるは盲人のことでござりまする。

兵藏　盲人とは何のことだ。

爺　大方唐人の親類だらう。

兵藏　盲人とはめくらのことだ。これでも引をたてずば通用はしますべいか。

熊　附目でいふから分らねえ。

太郎　ほんに、あの宵にゐられた按摩さんは、何處へ行かれたらう。

勘太　たしか、隣り座敷で療治をしてゐましたつけ。

熊　如在ねえ、唯は通さねえな。（ト奥へ向ひ、）おい、按摩さん按摩さん。

文彌（奥にて、）はい／＼、お療治なら今しまひますと參ります。

熊　面白え話があるから、そんな引けたことを言はねえで、早く來なせえ。

文彌　唯今しまひますと、直まゐります。

熊　もし、柴井町の旦那え、何處が何だのかんだのといつても、江戸ぐらゐなとこはございませんね。

十兵　そりや江戸ばかりいゝといふ譯もないが、誰しも故郷ほどいゝ所はないもので、大阪の方は大阪、京の方は京、江戸で生れたものは實に江戸がいゝのさ。

熊　いゝの何のといつて、較べものになりやあしねえ。もし大阪の肥つたお方え。

太郎　いやも、その肥つたお方は置いて貰ひたいな。

熊　そんなら、どぶつなお人かね。

龜　なほ惡いや。

熊　もしお前、江戸へ行きなすつたことがあるかしらねえが、江戸から見りやあ、京大阪なぞはくだらねえ所だ。

龜　これさ、くだつてもくだらなくてもいゝぢやあねえか、腹を立つと惡いわえ。

熊　腹を立つたつてかまふものか、江戸に較べりやくだらねえ所さ。

太郎　なるほどお前の言はしやる通り、私も今度お江戸見物して來ましたが、實にえらいとこぢやて。

熊　天下のお膝下だ、えらからうが。

太郎　いやもうえらい犬の糞ぢや、どこもかしこも犬の糞で、あれがほんの武藏國江戸ぢやない、嘔吐ぢやがな。

熊　なんだ、この土左衛門め、途方もねえことを言やあがるな。これ、犬も喰へものがあるから糞もたれらあ、茶粥ばかり喰やあがつて、鰻の頭を賞翫するとことは譯がちがわア。初鰹が三分しても片身は犬にくれてやらあ。惡くごた／＼ぬかしやあがると、横ぞツ方を蹴破つて風穴を明けるぞ。

太郎　いや、どえらいたんくわぢやな。

熊　何がどうしたと。（ト熊立ちかゝるを、皆々捨ぜりふにて留める。）

十兵　これさ、つまらない事を言募つて喧嘩をしてはみつともない。お互ひの旅のことだ、まあ／＼不承しなさい不承しなさい。

熊　何さ、大きな聲をしたくもござりやせんが、あんまり江戸馬鹿にしやがるから。

龜　これ、いゝかげんにしろえ、柴井町の旦那が、口をきいておいでなさらあ。

熊　旦那、大きに有難うござりまする。

勘太　いやも、誰でもめい／＼の國を惡く言はれると、腹の立つものぢや、然し何處がえゝの、彼處がえゝのと言うたとて、えいと言うたらわしらが國、日光を見ぬ中はけつこうとは言はれぬ。

十兵　これはしたり、又お前が初めなさるか。

新吾　わい共いまだ日光は見ぬが、結構なのは國元の武者小路、江戸の大名小路よりはるかに立派だや、噓だやと思ふなら、今から薩州へ行て見て來るがいゝ。

熊　誰が見に行く奴があるものか。

組　えゝ、だまつてゐろと言ふに。

十兵　さあ〳〵、もう〳〵喧嘩はしつこなし〳〵。

ト合方きつぱりとして、奥より文彌、風呂敷包みを腰へ結び、さぐり乍ら出來り、

文彌　だいぶ、お賑やかでござりますな。

熊　おゝ按摩さん來なすつたか。さあ〳〵こつちへ出ねえ出ねえ。

文彌　はい、出ましてもよろしうござりますか。

熊　いゝどころか、座頭の中座敷、すいと出なせえ。

文彌　左様なら御免なされませ。（ト前へ出る。）

熊　按摩さんといふものは、勘のいゝ者だが、お前なぞはまあどこがいゝと思ひなさる

文彌　はい、どこもよろしうござりまする。

熊　おつウ、胡麻をするの。

文彌　いえもう胡麻とやらではござりませぬが、眼の見えませぬ一徳は、どこでも同じことでござりまする。

新吾　こりや座頭の坊の申す通り、關東の若い者なぞも、盲目であつたらよかつたに。

熊　大きにお世話だ。

勘太　いや、この按摩さんは如在ねえ按摩さんだ。

十兵　どうか療治も上手さうだ、ちつとばかり肩をつかんで貰ひたい。

文彌　かしこまりましてござりまする。

十兵　どなたも御免なされませ。

文彌　（十兵衛の後へまはり肩を揉みながら、）旦那、お前さんは江戸でござりますな。

十兵　あい、わしは柴井町さ。

文彌　はあ、柴井町の旦那といふはお前さんでござりましたか。それぢやあ私は御近所でござります。

十兵　お前どこだえ。

文彌　片門前でござりまする。

熊　もし柴井町の旦那え、この按摩さんで洒落ができました。

十兵　はあ、何といふ洒落が出來ました。

熊　按摩旅を見ず、といふのだ。嬶、どうだよからう、眼

が見えねえから按摩旅を見ずさ。
亀　そりやあ分つたが、心は何といふのだ。
熊　分らねえ野郎だ、いつでも隣の娘がさらつてゐらあ、鳴は瀧の水、按摩旅を見ず。
亀　あんまにわりい洒落だな。
熊　悔しくば誰でもやつて見ねえ、これでも随分苦しんだものだ。
太郎　私も一つ洒落ませう。あんまと首尾よく寶藏へ忍び込み、とはどうだね。
熊　べらぼうに長い洒落だ。
兵藏　短く言へば、あんまの天人かね。
熊　面白くねえの。
勘太　そんなら、座頭附けてあんま（も）をくふといふのはどうだんべい。
熊　こりやあ小父さん、下にはおけねえ。
勘太　二階へでも上るべいか。
熊　どうとも勝手にしなせえな。
新吾　わいども、一つ洒落申さう、あんまに杖ない胴慾だとは、どうぢや／＼。
十兵　これは秀逸でござります。
熊　旦那も隅にはおけねえわえ。
新吾　然らば眞中へはじけ出ようか。
熊　はじけ出られてたまるものか。
皆々　はゝゝゝ。
文彌　あんまり皆さんが、あんま／＼とおつしやるので私は嚔をしつゞけで。ハックショ。どうか風を引いたやうでござります。
十兵　旅で煩らつてはいかない、振出しでも呑みなせえ。
文彌　ありがたうござりまする。
太郎　ときに、もう寐ながら話しとしてはどうでござりませう。
兵　それがようござりまする。私などは無口だから、默つてゐたせいか、睡くなりました。
熊　何にしろ、床をとつて貰はう。
ト　から熊手をたゝく、奥よりおいねおせん出來り、
兩人　はい、御用でござりますか。
熊　おら達はどこへ寐るのだ、床をとつてくんな。
せん　はい／＼かしこまりました。あなたと大阪のお方とお侍樣はこちらへおいでなされませ。
太郎　どうでも江戸さんとは、のがれん仲かな。

熊　又寝ながら喧嘩をしやせう。
勘太　これ、わしどもはどこへ寝るのぢやな。
いれ　お前さんは按摩さんと御一緒に、このお隣りへお休みなされませ。(ト十兵衛に向ひ、)あなたは京のお方と、こゝへお休みなすつて下さりませ。
十兵　あい／＼承知しました。
兵蔵　おらあどこへ行くのだな。
せん　お前さんはお江戸でござりますから、お江戸のお方と御一緒がよろしうござります。
兵蔵　有難え、江戸は江戸連れだとよ。
亀　何でもいゝから、早く行つて寝よう。
両女　さあ、おいでなされませいなあ。
ト宿場の騒ぎ唄にて、わや／＼とおせん先に新吾、太郎兵衛、熊、亀、兵蔵等下手へはひる。おいれは勘太郎を連れて上手へはひる。この中始終文彌、十兵衛の肩を揉んでゐる。
十兵　やれ／＼、大風の吹いたあとのやうだ。
文彌　やうやく靜かになりました。
十兵　ときに、按摩さんもういゝ、しまひな。
文彌　いえまだ、下を揉みませぬ。
十兵　下はいゝから早く行つて休みなせえ。それ、五十あるよ。(ト財布より錢を出し渡す。)
文彌　いえ、これでは多うござりまする。
十兵　なに少しばかり、とつておきねえ。
文彌　それは有難うござりまする。
いれ　(出來りて、)さあ、按摩さん、お前はこちらへござんせいなあ。
文彌　はい／＼。左様なら旦那様、お休みなされませ。
十兵　大きに御苦勞であつた。
いれ　どれ、手を引いて上げようわいな。
トおいれ文彌の手を引き上手屋體へはひる。下手よりおせん夜着蒲團を持つて來て敷き、
せん　旦那、お床を延べましてござります。お休みなされませいなあ。
十兵　あい／＼、京のお方はまだ歸んなさらねえか。
せん　はい、まだお歸りなされませぬわいな。
ト言ひすてゝはひる。時の鐘鳴る。十兵衛床の上へ上り、鼻紙を出して枕へ當てながら思入あつて、
十兵　あゝ世の譬にもある通り、旅は辛いものだといふに、とりわけ辛いこの十兵衛、せつぱつまつた金の無心

に、わざ／＼京までのぼつたところ、當にしてゐた藤助が死んで間もなき初七日に行合はして、向うよりこつちが先へ力落し、南無阿彌陀佛もしんそこから、つい二七日三七日と二十日餘りも逗留したれど、馴染も薄い女房に金の無心を言はれもせず、詮方なさにすご／＼と歸りは歸つて來たけれど、家へ歸つて女房に京三界まで駈け歩き、其の算段ができぬかと思はれるのが面目なく、江戸へ段々近附くのが却つて苦勞に夜の目さへ、合はぬ此身の胸算用。あゝ寐つかれずとも横になり、どれ、足でも休めようか。

ト十兵衞夜着を着て寢轉ぶ。下手の障子を明けて仁三出來り。

仁三　もうお休みなされましたか。

十兵　（床より顏をあげて、）御免なせえ、今寐ました、だいぶおそうござりましたな。

仁三　いやもう、夜といふものは知れにくいもので、手紙一本でいかう暇どりました。

十兵　さあ／＼、早くお休みなさい。

仁三　どれ、ふせりませうか。

ト仁三寐轉ぶ。時の鐘。ばた／＼になり、下手より新吾おいねを追ひかけ出來り袖を捉へて、

新吾　おのれ、逃げるとて逃がさうか。

いね　あれ、お放しなされませいな。

新吾　いや／＼放さぬ／＼、おのれ武士たる者に約束の變替いたいて、濟まうと思ふか。

いね　いえ／＼、そのやうなことを申した覺えはござりませぬわいな。

新吾　なに、ないことがあるものか、それが不承知なことならば、こゝへ今夜泊りはせぬわ。

いね　いえ、もうどのやうにおつしやりましても、私は存じませぬわいな。

トおいね新吾を振拂ひ奧へ逃げてはひる。新吾捨ぜりフにて追ひかけはひる、仁三顏を上げて、

仁三　いやも旅籠屋といふものは、とつともう夜通しさうざうしいものぢや。もし江戸のお方、お休みなされましたか、もし／＼。あゝ晝の勞れでよう寐られたやうぢや。（ト床の中で腹這ひに起き、十兵衞の寢息を考へ、）どりや一服喫みませうか。（ト煙草をつぎ、火入れへ手をかざし見て、）あゝ火入の火が消えてしまつた、くさいが行燈でつけようか。（ト行燈の灯で點けようとして火を消

しこりやしもうた行燈まで消してしもうた。
ト時の鐘、凄き合方になり、仁三起上り脚絆を穿き身拵へをする。十兵衛頭をあげ窺ひゐる。仁三抜足をして十兵衛を跨ぎ、上手へ行かうとして十兵衛の包みに躓づき、取りのけようとするを十兵衛此の包みを押へゐて、ぐつと引く。仁三びつくりなして逃げようとするを十兵衛捉へようとし、仁三振拂はうとして立廻り十兵衛仁三を押へて、
十兵　盗人が這入りました。皆さん起きて下さい。御亭主灯りを、早く〳〵。
トばた〳〵になり、下手より藤屋の亭主四郎兵衛手燭を持ち、おむら其外以前の人々、思ひ〳〵の寐起の装にてうろたへながら出來り、
皆々　どろぼう〳〵。（ト捨ゼリフにてあちこちなす。）
熊　どろぼうはどつちへ逃げやした。
新吾　わいども頭打ちきつてやらうと思うたに。
十兵　いや、お案じなされますな、盗人は私が押へてをります。
太郎　やあ、こりや關東のお方か。
勘太　お手柄でござりました。
四郎　これは〳〵江戸のお客様、よつたり押へて下さりました。
むら　皆さん、お座敷に粗相はござりませぬか、お改め下さりませ。
太郎　さうぢや〳〵、めん〳〵の荷物を改めねばならぬ。
（ト皆々よろしく荷物を改める。）
新吾　やあ、ないわ〳〵、わい共の大小がない。
太郎　さうおつしやれば、わしが越中褌が見えない。
熊　大方この野郎が盗んだに違えねえ。
亀　構ふことはねえ、たゝきしめろ〳〵。
兵藏　梓しばりにして、肥溜へたゝッ込め。
ト皆々わやわやいふ。
四郎　まあ〳〵、お靜になされて下さりませ。
勘太　何にしろお侍様の、大小がなくなつては大變だ。
新吾　武士たるものゝ魂を、盗むといふがあるものか、ふといい奴め、覺えてをれ。
ト有合ふ枕にて仁三の頭をうつ。これにて額へ疵つき、仁三手拭にて押へる。
十兵　これはしたり旦那様、額へ疵が附きました、手あらいことをなされますな。

新吾　やあ、大小を盗んだ故、打殺してもだいじない。
むら　あゝもし旦那様、あなたのお腰は後へまはつてをりますわいなッ
新吾（後へ廻りし大小を前へ廻し、）やあ、これは後にあつたか、然らば何も粗相はない。
太郎　たゞ、私が褌が見えぬばかりぢや。
四郎　もし、お前様の鉢巻にしておいでなさるのは、そりや褌ぢやござりませぬか。
太郎　やあ、こりや手拭と間違つたと見える。
十兵　それぢや此奴が盗んだは、私が所持の包みばかりか。
（ト風呂敷包みをとつて見せる。）
熊　何にしろ太え奴だ。どんな面だか、面を見てやらう。（ト仁三の顔を上げ見て、）やあ、こいつア宵に泊つた上方者だ。
太郎　いや、油断もすきもならぬことぢや。
四郎（前へ出て、）いえ、皆様御苦勞をかけまして、甚だ申譯もござりませぬが、今日は據なく、私が留守故、かやうな者を泊めましてござります。（トおむらに向ひ、）これだから平生言はないことぢやない、おれが留守なら氣を附けろと言つておくのに。
むら　それぢやというて、商人風のお方ぢやもの、盗人と知れるものかいな。
四郎　その盗人と知れぬ者を、知るのが旅籠屋生業ぢや。
むら　知れぬものを知れとは、そりやお前が無理ぢやわいな。
四郎　うぬ、亭主に口答へするか。
十兵　これさ／＼御亭主、夫婦喧嘩は後にして、早く盗人の片を附けて下せえ。
四郎　はい／＼、よろしうござります。皆様への申譯に、簀巻にして阿部川へはふり込みます。
熊龜　こいつア面白い、手傳つてやらう／＼。
仁三（顔を上げ、江戸口調にて、）もし、どうぞ堪忍して下さりませ。今日から心を改めまして、決して盗みはしませぬから、命ばかりはお助けなすつて下さりませ。
十兵（これを聞き、合點の行かぬ思入にて、）もし、皆さんお聞きなさいましたか、上方者だと思つたら、こいつア江戸ッ兒でござります。
勘太　ほんに、今の言葉のやうす。
太郎　江戸なまりに違ひない。
仁三（思入あつて、）へい、何をお隱し申しませう、生れ

は江戸でござりますか、身性がわるさに喰ひ詰めて、せうことなしに故郷を立退き、今では、五十三次でほんのよすがの旅稼ぎ、護摩の灰でござります。

新吾　やあ、扨はおのれは護摩の灰か、當年四十三歳に罷りなれど、護摩の灰は初めて見た。

十兵　五十三次を股にかけて、稼いで歩く護摩の灰が、着替ばかりのこの包みを、何で目がけて盗んだのだ。

仁三　いえ、私が目がけましたは、お前様の荷物ぢやあござりませぬ、襖をへだてゝ隣りに居る座頭さんの包みでござりますゝ。實は神奈川からつけて來たが、どうもこれまで間が悪く、今夜といふ今夜こそ仕事をしようと思ひのほか、柴井町の旦那様の荷物へ足のさはつたが、此身の不運捉へられ、悪いことはせぬものと、眼が覚めましてござりまする。

十兵　むゝ、そんなら隣りの座頭どのゝ、包みを目がけて附けて來たのか。

仁三　今夜で三晩めでござります。

熊　うぬ、眼も見えねえ按摩のものを、取らうとは太え奴だ。

亀　江戸ッ児の面を汚しやあがつた代り、袋だゝきに敲きしめるぞ。

四郎　あもし、まあ／＼お待ち下さりませ、こゝで打殺しでもいたしますと私の迷惑、皆様のお腹癒せには、簀巻にして阿部川へどんぶりとやりますから、どうぞお静になされて下さりませ。

仁三　（十兵衛に向ひて、）もし、柴井町の旦那様、盗人とは申しながら何一品とりませねば、あなた様のお執成で、どうぞ命の助かりますやう、お慈悲でござりまする、お願でござりまする。

ト　な／＼といふ、十兵衛思入あつて、

十兵　何と皆さん、憎い奴でござりますが、御連中に何一品無くなつたものもなければ、所謂罪を憎んでその人を憎まずとやら、どうか御堪忍なすつて、助けてやつては下さりませぬか。

太郎　いやもう、捉へたお前がその心なら、堪忍せいで何としませう。

勘太　兎角世の中は堪忍が第一、されば昔奈良の堪忍と駿河の堪忍とが相談して、中に天神が寐てござつたといふ譬がある。

兵蔵　何を言はつしやるのだ。

十兵　もし、鹿兒島の旦那樣、あなたも御堪忍下さりますか。
新吾　わいども了簡のならぬところなれど、お手前に免じ了簡致し申す。
十兵　神田のお方もよろしうございませうな。
熊　簀卷にするなら手傳つてやらうと思つたが、皆さんが御承知なら、御多分にやあ漏れますまい。
十兵　ときに宿の御亭主、皆さんも御承知故、お前もどうぞ了簡して助けてやつて下さりませ。
四郎　いえもう、お前樣の御挨拶と言ひ、皆樣が御得心なら、何の邪を好みませう。
むら　そんなら、お助けなされて下さりますか、やれ〱嬉しや、家から科人を出すことかと、大てい案じたことぢやござりませぬわいな。
四郎　これ、よく聞けよ、皆樣方が御不承知なら、いやでもおうでも簀卷にして、阿部川へ打込む所、危い命を助かつたも、柴井町の旦那を始め、皆樣方のお蔭故、よくお禮を申すがよい。
仁三　（皆々へ向つて）へい、柴井町の旦那樣、どなた樣も此御恩一生忘れはいたしませぬ。えゝ有難うございまする。（ト仁三ひれ伏す。十兵衞思入あつて）
十兵　人間僅五十年、半分寐て暮す時は二十五年の命だから、この後心を改めて、だいじに命を持つがいゝ。
仁三　（顏を上げ、淚を拭ひて）いえもう、これに懲りぬことはございませぬ。簀卷にされて阿部川へ打込まれて御覽じませ、罪の深みに浮みもやらず、底の藻屑となるところ、旦那樣のお情であぶない命を拾つた上は、惡い心は阿部川へ簀卷にして流してしまひ、今日から此身は生れ替り、心ゆがまぬ肩に棒、當てゝなりとも堅氣になり、三尺店でも持ちましたら、きつと御禮に上ります。
十兵　なにその禮には及ばねど、これからこなたが心を入替へ、堅氣になるのが何より禮、必ず人とならつしやい。
仁三　あゝしんみも及ばぬそのお詞、有難淚がこぼれます。（ト淚を拭ふ。）
四郎　いや、夜更とは言ひながら、油斷のならぬ壁に耳。
むら　夜明けぬ中に少しも早く。
仁三　さやうなれば、皆樣方。
十兵　緣があつたら
仁三　その內お目にかゝりませう。
ト仁三しな〱と下手へ行き、ちよつと舌を出し、肩

で笑つて下手へはひる。

四郎　扨々柴井町の旦那様、あなた様のお蔭にて、何一品とられもせず、

むら　此のやうな有難いことは、ありませぬわいな。

勘太　いやも、御亭主より泊り一同、厚うお禮を申さねばなんめえ。

太郎　同じ江戸さんでも、から熊さんとはえらい違ひだや。

熊　何だ、えらい違ひとは、どう違ふといふのだ。

新吾　まあ、物に譬へて見ようなら、鼈にお月様、下駄に焼味噌かな。

熊　どつちが鼈で、どつちがお月様だえ。お前等が鼈さ。

兵藏　そりやあ言はずとも知れたことだ。

熊　何だ、この竹の塚め、鼈とは誰がことだ。

ト立ちかゝるを、皆々留める。

十兵　これはしたり、又つまらねえことを言つて、喧嘩をするのか。

四郎　まあ／＼、お靜になされて下さりませ。

太郎　お前方は寄ると觸ると、言ひ爭うては喧嘩ばかり。

新吾　物に譬へて見ようなら、犬と猿のやうだ。

熊　どつちが犬で、どつちが猿だえ。

十兵　また始めたのかな。

新吾　さあ、お手前がきやつきやつといふから、猿でもあらうかい。

勘太　なるほど、思ひなしか猿に似てゐるやうだ。

熊　何だ、猿に似てゐる、この唐變木め、途方もねえ事をぬかしやあがる。有難くも尊くも江戸の大芝居の役者で、中村鴻藏といふ大立者に似てゐるのだ。

太郎　そないな役者がありますかいな。

熊　あるかないか、目を明いて見やがれ。

四郎　まあ／＼お待ちなされませ。その鴻藏といふ役者があるかないか存じませぬが、まあ、あるとして御了簡なされませ。

熊　何だ、あるとしてとは、をかしな口上だね。

むら　まあ、さうしうござります。家の人は芝居が嫌ひ故、役者はとんと存じませぬが、その鴻藏は能い男で、私なぞは大贔屓でござりますわいな。

熊　いや、お上さん、お前は眼の明いた人だが、御亭主は盲目同然だ。なんであんな御亭主を、持ちなすつたのだ。

四郎　これは御挨拶だ。

十兵　いや、盲目と言へば、隣り座敷の按摩さんはどうしましたらう。
太郎　この騒ぎに出て來ぬとは。
勘太　どうかいたしはしませぬか。
ト勘太襖の隙より覗く。これにてこの道具少し廻りて、上手の屋體を見せる。内に文彌すつぽり蒲團をかぶり寐てゐる。
はあ、蒲團をかぶつて寐そべつてゐ申す。
十兵　まさか、寐入つてもしまい。
熊　どれ、行つて起してやらう。
ト熊上手の障子屋體へはひり、蒲團を引きめくる。内に文彌包みを抱へ、うつむきゐて、
文彌　あゝ、どろぼうがはひりました〳〵。
ト慄へゐるを、熊手をとつて、
熊　これさ、もうどろぼうはゐねえよ。
勘太　安心してこつちへござらつしやえ。
文彌　はい〳〵左樣なら、もう盜人はをりませぬか。やれやれ嬉しや、それで落着きました。
トさぐり〳〵眞中へ出る。
十兵　それぢやあお前もさつきから、寐てゐたのではなかつたか。
文彌　どういたして、寐るどころぢやござりませぬ。最前からの樣子をば襖越しに聞きまして、怖うて怖うてなりませぬ故、蒲團をかぶつてをりました。いや手前の申すことばかり申して、柴井町の旦那樣え、あなたのお蔭で助かりました、有難うござりまする。
十兵　定めて聞いてゐなすつたらうが、お前をつけて來たさうだが、何と怖いことぢやないか。
文彌　皆樣方と違ひまして、目の不自由な私故、一倍怖うござります。どうぞ柴井町の旦那樣え、あなたのお供へ寐かして下さりませ。
十兵　さあ〳〵遠慮なしに、こゝへ來て寐なさい。
文彌　有難うござります。
四郎　ときに皆樣方、まだ七つ前でござりますれば、御安心なされて、一寐入りお休みなさあませ。
むら　どうぞ明朝は、御ゆるりとお立ちなすつて下さりませ。當所の名物でござりますれば、とろゝを差上げたうござりまする。
新吾　わいども、とろゝは大好物、麥飯なれば猶えいが。
熊　おれもとろゝは大好きだ。

太郎　左様なら柴井町の旦那。
勘太　お蔭で難をのがれました。
兵蔵　大きに有難うござりました。
十兵　明朝お目にかゝりませう。
四郎　さあおいでなされませ。
　ト皆々下手へはひる。後十兵衞、文彌殘り、
十兵　さあ／＼按摩さん、こつちへ寄んなせえ。いや、按摩さんといふと言ひ悪いが、お前の名は何と言ひなさるえ。
文彌　はい、私は文彌と申しまするが、して、旦那様には何とおつしやります。
十兵　私は伊丹屋十兵衞といつて、居酒屋生業をしてゐます。
文彌　へえ、十兵衞様とおつしやりますか。
十兵　聞けばお前は片門前だといふことだが、旅稼ぎに出なすつたのか。
文彌　いえ、師匠の用事がござりまして、京へ上ります者でござりますが、覺えたこと故療治をしながら參ります。
十兵　何にしろ、眼の不自由な身で、京まで行くは物騒なことだ。

文彌　左様でござりまする。こつちは少しも存じませぬが、今の奴も神奈川からつけて參つたさうでござります。
　トこれにて十兵衞南無三といふ思入あつて、
十兵　こりやとんだことをしたわえ。
文彌　どゝ、どうなされました。
十兵　あゝ下司の智慧は後からと、今こゝの家の亭主が簀卷にして阿部川へ流すと聞いて不便になり、合宿衆に詫言して護摩の灰を助けてやつたが、神奈川から鞠子まで附けて來たとあるからは、路用を遣つて來た仕事、これから心を改めて、盗みは一切しませぬと、涙をこぼして言つたのも大方此の場を退かう爲め、先へ廻つてこなたをば、待伏せなすに違ひない。早くこゝへ氣が附いたら、彼奴を縛つて問屋場へ四五日の中預けて置き、その間にこなたを立たせればよかつた。今更言つても死んだ子の年、えゝ悔しいことをしたわえ。
　ト十兵衞悔しき思入、この内文彌苦勞なることなしにて、
文彌　そりやお前様のおつしやる通り、待伏せしてをるに違ひはござりませぬ。ひよつと彼奴にこの包みを取られた時は、生きても死んでも。

十兵　え。

文彌　いえ、行くことも歸ることもなりませぬ。もし伊丹屋の旦那様、あなたは御了簡深いお方故、どうか此の難儀をば、脱れやうはござりませぬか、お考へなされて下さりませ。

十兵　さあ、別に考へやうもないけれど、人によつては七つ立とか六つ立とか、又泊りも何時と極めてする人があるが、お前は是れまでどうしやつたえ。

文彌　はい、目の不自由なる故、朝は大概五つ立、暮れは七つ半に泊ります。

十兵　むゝそれぢやあ彼奴は神奈川から、こゝまでこなたをつけて來る中、立や泊りも知つてゐやう。どうで綱を張るからには五里六里と先へは行くまい、一里か二里の近い所に、五つに立てば一時早く六つから待つてゐるであらう(ト思案して、)それぢや文彌さんからしなせえ、今夜ももう七つ前後、直に今から立つたなら、夜が長いから夜の中に五里ぐらゐは行かれやう。夜が明けたなら駕籠に乘り、酒手を惜しまず急がしたら、九里と十里の違ひにならう。さうしたことなら脱れられやう。

文彌　(思入あつて、)なるほど先へ乘越しましたら、どうか脱れられませう。それに附けても旦那様、お慈悲深いをお見かけ申してあなたへお願ひがござりまする。眼の不自由なその上に、東海道は始めて故、とてものことのお世話序に、どうぞ京まで御一緒にお連れなされては下さりませぬか。

十兵　それはお前が言はずとも、わしが上りのことならば一緒に連れて行つて上げるが、何をいふにもこつちは下り右と左りに仕方がないが、長い道中は兎も角もつい鼻の先の岡部へ行くに、二里九町といふ丁場にて宇都谷といふ峠があるが、眼明なら知らぬこと杖一本つき外せば、崖から谷へ眞逆さま、眼前人の難儀をば見捨てゝ行くは本意でない、わしも心の急く旅なれど、折角お前の頼み故その峠だけ送つて上げよう。陰德あれば陽報ありと、お前を助けておいたなら、惡く此の身に報いもしまい。

ト十兵衛文彌を助けたら、その報いで金ができやうかとの思入。文彌嬉しく、

文彌　それはまあ御親切に有難うござりまする。あなたのやうなお慈悲深い、お方に出逢ふも信心致す神や佛の皆お助け、首尾よく京へ上りまして江戸へ歸りましたらば、どのやうなお禮でもいたしませうほどに、お連れな

されて下さりませ。

十兵　なに、それにやあ及ばない。峠まで送つて進ぜるから必ず案じなさんな。

文彌　それなら送つて下さりますか、えゝ有難うござりまする。(ト文彌悦ぶ、十兵衞手をたゝきて)

十兵　女中衆々々。(ト呼ぶ、奥よりおせん出來り)

せん　はい、何ぞ御用でござりますか。

十兵　いや、ちと急な用があつて、早立をせねばならぬ故、梅干でも澤庵でも早いが御馳走、有合せでよいから、湯漬を二膳出して下さい。

せん　はい、かしこまりました。

トおせん奥へはひる。この中十兵衞、文彌は脚絆など穿き、支度をする。

文彌　あゝ、何だか心がわく／＼と、忘れでもせねばよいが。

十兵　よく氣を附けて、支度をしなさい。

文彌　はい／＼。(ト脚絆を穿きしまひ、手をたゝき)女中衆々々。

せん　(奥より出來り、)はい、御用でござりますか。

文彌　今頼んだ湯漬はまだかな、早くして下さい。眼の惡い者を連れて行くのだから。

十兵　これはしたり、眼の惡いとはお前のことだ。

文彌　ほんに、さうでござりました、はゝゝゝゝ。

ト合方にて奥よりおせん膳部を二膳持ち、おいれお櫃と土瓶を持ち來り、兩人へ出す。

せん　まだ御飯を炊きませぬから、お茶漬でござります。

いれ　お急ぎ故、お煮花を上げますわいな。

十兵　私は茶漬が嫌ひ故、茶をかけずに下さい。

兩人　はい／＼。(ト兩人給仕をし、十兵衞文彌飯を喰ふ。)

十兵　これ、しづかに喰ひなさい、急く時には支へるものだ。

文彌　なに、大丈夫でござりまする。(トいふ内に、文彌せきこんで胸に支へし思入にて苦しむ。)

いれ　胸へお支へなされましたか。

せん　お茶でもおあがりなされませいな。

十兵　それだから靜に喰ひなせえといふのだ。(ト背中をたたく、これにて胸の通りし思入。)

文彌　あゝ、ひどい目に逢うた。(トおせん茶を汲んで出す、文彌とつてぐつと呑み)あツつゝゝ。

いれ　まあ、お靜におあがりなされませ。

文彌　どうして、靜にしてゐられるものか。
ト文彌又急いで飯を喰ひ、胸へ支へ苦しむ。)
十兵　また支へたのか。(ト背中を叩くを木の頭。)
文彌　はあ、もう一膳下さい。
ト箸をしやに構へ、茶碗を出す。十兵衞よく喰ふとい
ふ思入にて、
ひやうし幕
ト山おろしにてつなぎ、直に引返す、
(宇都谷峠の場)――本舞臺正面高二重、この後更に
高き二重一面に叢心に岩組、杉の立木には蔦絡みあ
り、上手前の方に古びたる辻堂。向う一面に遠山を
望み、夜の遠見。下手に、宇都谷峠蔦の細道といふ
古びたる榜示杭。總て東海道宇都谷峠の體。時の鐘
山おろしにて幕明く。と上、下より)△の狩人二人
出來りし、
○やあ、山中の五郎平ぢやないか。
△おゝ、さういふは鹿谷の四郎介か、もう何時であらう
な。
○一番鷄が鳴いたから、七つでもあんべい。
△この間はさつぱり逢はなんだが、替ることもなかつた
か、ちよつと尋ねに行かうと思ふが、晝出るのがおつく
うでな。
○さうよ、狩人と泥坊は晝出ることのないもんだ。
△いや、泥坊と言へば、此頃は海道筋は物騷だといふこ
とだ。
○そりやあ用心せずばなるまい。
△何の、取られるものもないくせに。
○から見えても大金持だ。
△はあ、疝氣でかな。
○違ひない、はゝゝゝ。
△どれ、夜明までにもう一働きしようか。
○そんなら五郎平、
△早く歸らつしやい。
ト上、下へ別れてはひる。時の鐘、合方、微めて山お
ろし、梟の聲にて花道より十兵衞、小田原提灯を提げ
て先に立ち、後より文彌風呂敷を斜に背負ひ、菅笠を
持ちて出來り、
十兵　これから路が險しいから、氣をつけて歩きなせえ。
文彌　有難うござりますか、眼は見えませぬが、杖がある

だけ大きに歩き好うございます。
十兵　私が先へ立つて行くから、よく提灯で見て來なせえ。
文彌　いえ、私は提灯があつてもなうても、同じことでござりまする。
十兵　ほんにさうであつたな。（ト兩人話しながら本舞臺へ來り、文彌石に躓き草鞋の紐切れる。）あゝこれあぶない、躓いたのか。
文彌　はい、躓く拍子に力がはひつて、草鞋の紐を踏み切りました。
十兵　そりやあ、大變なことをした。買ふにも家はなし。（ト思入あつて、）よし〳〵こゝに錢さしがあるから、これで結んでおきなせえ。
ト十兵衞財布より緡を出し文彌に渡す。
文彌　はい〳〵、どうか療治ができればようございますが。
十兵　ゆつくりと直しなせえ、その中一服やつてゐるから。
ト十兵衞提灯を辻堂の軒へかけ、緣側へ腰をかけ、摺火打にて煙草をのみゐる。文彌草鞋の紐を緡にて結びながら、
文彌　まだ新らしい草鞋の紐が、ぷツつり根から切れるといふのは、どうやら心にかゝることぢや。
十兵　何の氣にすることがあるものだ。險岨な路を歩いては草鞋は直に切れるわな。
文彌　なるほど、さうでございませう。
ト文彌草鞋をなほし穿く。
十兵　どうか、それで穿けさうか。
文彌　まづ間に合せに結びつけました。
十兵　そりやあよかつた、さあ〳〵こゝへ來て、一服喫みなせえ。
文彌　有難うございました。（ト手拭にて手を拭き、煙草入を出し煙草をつぎ、）一つおかし下さりませ。
十兵　そりやあさうと文彌さん、さつきから聞かうと思つたが、神奈川から護摩の灰がお前をつけて來たといふが、背負つてゐる包みの中には、何ぞ大事なものでもあるのかえ。
文彌　（思入あつて、）へい、御親切な旦那樣故、何をお隱し申しませう、背負つてをります包みの中には、金がはひつてをりまする。
十兵　いや失禮なことをいふやうだが、お前が持つてゐる金ならば、僅な金であらうのに、何でそれを神奈川から

護摩の灰がつけて來たか。
文彌　旦那樣方の御身分では、僅な金でござりませうが、私などの身にとりましては、大まいの金でござります。
十兵　む、大まいの金とは、いくらそこに持つてゐなさる。
文彌　へい、百兩持つてをりまする。
十兵　えゝ。(トびつくりして)はて、大そう持つてゐなさるの。(トぞつとして、金のほしくなりし思入にて)してまあ、お前は何しに京都へ。
文彌　はい、今出川の惣錄へ、官位を取りにまゐりまする。
十兵　あゝ、若いとは言ひながら大まいの金を持つて、眼も見えぬ身で唯一人、東海道を上らうとはさりとはあぶないことだの。
文彌　いえもう、人の氣の附かぬやう、汚れ腐つた古襦袢の中へくるんでおきまする、もし途中にて泥坊に出逢つた時は身ぐるみ脫ぎ、路用も別に胴卷へ五兩入れてござりますれば、それを渡して襦袢だけ呉れろといふたら氣も附くまいと思ひの外、神奈川からつけて來るとは餅は餅屋、怖いことでござりまする。

十兵　かういふ怖い目をせずに、江戸で官位はとられぬものか。
文彌　いえ江戸でも官位はとれますが、わざ／＼京まで參りますは、今出川の惣錄で今一老を勤めまするは、この文彌が師匠にて、もし官位でも取るならば五十や七十の金ならば貸してやらうと言はしやる故、此の百兩に五十兩借りて官位を取る積り、それ故どうも私が、參りませねばならぬ仕儀、連があつては却つて邪魔と、人の心の附かぬやう、泊り／＼で療治をいたし、一人で京へ上ります。
十兵　さういふ譯なら仕方がない。私も知らぬが盲人の、官位は高いものださうだ。譬にもいふ撿校千兩、して百五十兩で取る官位は、何といふ官位だね。
文彌　へい、座頭の官位でござりまする。
十兵　はあ座頭の官位が百五十兩とか、唯一口に座頭の坊と口ではいふが、百五十兩とは、はて高いものだな。
文彌　いえもう知らぬお方は、盲人の中では座頭が低いやうにおつしやりますれど、なか／＼以て容易に官位はとれませぬ。
十兵　はて、とんだものだ。ト此中十兵衞始終文彌の包み

へ思入あつて金のほしきこなし、知らぬ先は兎も角も、聞いて見ればけんのんなのはこなたが背負つてゐるその百兩、今夜のほどは脱れても、その百兩を盗まれたら、こなたは何とする心だ。

文彌　この官金を盗まれますれば、私が運もこれまで、生甲斐もないことなれば、淵川へでも身を投げて死ぬより外はございませぬ。

十兵　いや／＼、そりやあ悪い了簡、人間一生は塞翁が馬、悪い事のあつた後ではまたよい事のあるものだ。よしや金を盗まれても死なうなぞとは思ひなさんな。其又金に利息をつけ、禮狀添へてこなたの所へ返しに來ないものでもない、死は一旦にして安しとやら、必ず死なうと思ひなさんな。これぱつかりは私が意見、仇に思つて聞かつしやんな。

文彌　御親切な御教訓、きつと忘れはいたしませぬ。有難うござりまする。

十兵　とんだ意見で大きにおくれた。さあ白まぬ中に少しも早く、

ト時の鐘。十兵衛軒の提灯をそつと消し袂へ入れる。文彌杖をついて行きかゝるを、十兵衛思ひつきて風呂敷包みを取らうとする、文彌びつくりしてその手にすがり、

文彌　こりや十兵衛様、な、な、何となさつしやります。

十兵　（ぐつとつまり、）さあ、此の行先でこのやうな、護摩の灰が出やうも知れぬ。氣を附けて行かつしやい。

ト包みを放す、文彌胸を撫でおろして、

文彌　あゝ、私や又ほんまのことかと思うて、びつくりいたしました。

十兵　（これでは行かぬといふ思入にて、）いや文彌さん、こなたにちつと頼みがあるが、何と聞いては下さるまいか。

文彌　へい、御恩になつた旦那樣、身にかなうた事ならば。

十兵　すりや、聞いて下さるか。

文彌　して、そのお頼みとおつしやるは。

十兵　さあ、頼みといふは外でもない。その百兩の金が借りたい。

文彌　えゝ。（ト文彌びつくりなし、逃げようとするを十兵衛捉へて、）

十兵　さゝその驚きは尤もだが、まあ私が言ふことを一通り聞いて下され。（ト誂への合方になり、）何を包まう、私

は元さる屋敷の若黨にて友朋輩と喧嘩なし、既に命にかかはるところ旦那樣のお情で命助かり町家の暮し、その御主人の娘御が勾引されて廓の勤め、御恩送りに身請せし金の殘りにつまりし所、その金貸して下されたは、その娘御の御舍弟にて金は殿より預かり金、一つよければ又二つと借りたる金を調達せねば、御舍弟樣の御難儀故、金の工面に京都までわざ／＼上ればその先の、主人が死んだ後へ行き、鶍の嘴にすご／＼と歸る途中で入用の金を持てゐるこなたに逢ひ、どうも見のがすことがならず、いつそ取らうか借りようかと最前からとつおいつ、種々の思ひで言ひ出す無心、長うとは言はぬ程に、僅三月か四月の中私に貸して下さらば、その百兩に利に利を添へて、きつとこなたに返さうほどに、無理なことだが文彌殿、どうぞその金貸して下され。

ト十兵衞思入にていふ、文彌術なき思入にて、

文彌　段々の入譯を聞けば聞くほど切ない譯、貸せとおつしやる此の金は、護摩の灰につけられて今宵取られてしまふところ、お前樣のお蔭にて無事に我手にある百兩、義理にもお貸し申さねばならぬ金をば義理をかき、お斷りを申しますは、あなたよりもこつちに又切ない譯のあつてのこと、三歳の年より眼の見えぬ私を不便に思はれて母や姉の艱難苦勞、この百兩の官金も姉が苦界へ身を沈め、私にくれたる身の代金、官位もとらず途中にて人に貸したの盗まれたのと言うては江戸へ歸られませぬ、さうなる時には御意見を背いて死なねばなりませぬ。もし十兵衞さま、旦那さま、お慈悲深いあなた故、こゝの所を幾重にもお聞分け下さりまして、どうぞお許し下さりませ。

ト文彌思入にていふ、十兵衞も氣の毒なる思入にて、

十兵　さういふ譯の金と聞いては、よしや貸さうと言はれても義理にも是は借りられぬ。今言つたことは水にして、聞かぬ昔と思つて下さい。

文彌　（嬉しき思入にて、）すりや旦那さまには、この金を思ひきつて下さりますか。

十兵　おゝ思ひきるとも／＼、すつぱり思ひきりました。

文彌　えゝ、それで安心いたしました。

十兵　とてものことに安心ついでに、私はこゝで別れませう。

文彌　そりや又何故でござりまする。

十兵　一旦無心を言ひかけたれば、私が送つて行つたなら、

こなたは却つて怖からう、丁度こゝは峠の下り口、これから先は足場もよければ氣をつけて行かつしやい。

文彌　そんならどうでもあなたは。

十兵　別れて歸るがこなたの安心。

文彌　とは言へどうやら。

十兵　怪我せぬうちに。

文彌　え。

十兵　急がつしやれ。

ト十兵衛花道へ行きかけ、思入あつて拔足にて下手へ返り窺ひゐる。文彌花道の附際まで行き、向うへ思入あつて、

文彌　旦那樣、大きに御厄介になりました、お靜においでなされませ。もし十兵衛樣、旦那樣。(ト向うへ思入あつて)あゝ、もうおいでなされたやうだ。(ト思入あつて)人の心は知れないものだ。眼の見えぬ身を不便に想ひ、ここまで送つて下されしお慈悲深い十兵衛樣が、打つて替つて百兩の官金貸してくれとの頼み、聞けば餘儀ないお主の爲め、以前が武士とあるからは、もし切り取りでもさつしやらうかと、思へばどうやらぞつとして、身の毛もよだつやうであつた。これから下りとあるからは、夜明けぬ中少しも早く、道を急いで、おゝさうぢや。

ト時の鐘、山おろし。少し凄みの合方になり、文彌上手へ行きかゝる。十兵衛後より脇差を拔き、切らうとして惡いといふ思入二三度あつて、トヾ後から思ひきつて一刀あびせる。文彌これを知らず二足三足行き、がつくりとなり、糊紅肩先へ滲むを、文彌探り見て、びつくりして、

やあ、こりや。(ト倒れる。)

十兵　文彌どの、堪忍して下せえ。

ト又一刀切る。文彌起上りちよつと立廻つて、

文彌　や、こりや十兵衛樣、いやさ十兵衛どの、こりやこなたは私を殺して、此金を取る氣だな。

十兵　わッつくどいつ入譯を話したとても貸さぬは道理、さら〳〵無理とは思はねど、その百兩の金がないと大恩受けたお主の難儀、道にそむいたことながら私も以前は若黨奉公武士の祿を食んだからは、切取りなすも武士の習ひ、お主の爲めには換へられぬ。その替りには一周忌おそくもこなたの三年までには、金こしらへて身寄を尋ね、敵と名乘つて討たれる心、京三界まで駈け歩き都合のできぬその金を持つてゐたのがこなたの因果、欲しく

なつたが私が因果、因果同志の悪縁か殺す所も宇都の谷峠、しがらむ蔦の細道で血汐の紅葉血の涙、此の黎明が命のをはり、許して下され、文彌どの。

ト又一刀切りつけ、包みを奪ひ取り、中より財布を引出すを文彌しつかと捉へて、

文彌　すりやこなさんはこの金を、取らうばかりに深切らしく、眼界の見えぬ私を連出し、人里放れし宇都の谷にて、殺して金を取る氣だな、斯ういふことのあらうとは知らぬ江戸には母人や廓へ行かれし姉者人が、今日は彼處明日は何處と、指折り算へて待ちわびるその陰膳の高盛が、枕飯と聞かれたら、嘸や歎きはいかばかり、これ皆こなたがする仕業、かゝる非道な心と知らず、世に頼もしき人と思ひ、佛頼んで地獄とやら、こなたは鬼か獄卒か、呵責の刃受くればとて、やはかこの金渡さうか。

十兵　おゝその恨みは尤もだが、こなたを連出し殺さうなどゝ、初手から企んだことではない。

文彌　えゝ聞かぬ／＼、欲にふけつて盗みをするのぢや。伊丹屋十兵衞は人殺しぢや、誰ぞ來て下されゝ

ト文彌大きな聲するを、十兵衞口を押へて、

十兵　ふゝこれ、聞譯のない文彌殿欲にふけつておごたらしう何でこなたが殺されう、お主の爲にする殺生、約束事とあきらめて許して下され／＼。

ト手を放し、又切りつける。

文彌　伊丹屋十兵衞は人殺しぢや／＼。（ト財布をかせに兩人立廻り。トヾ文彌したゝかに切られ）えゝ、殺さば殺せこの恨み、生替り死替り、五百生が其間蟲けらにまで生を替へ恨みを晴らさでおくべきか。

ト風の音になり、文彌すつくと立ちて物凄き體、

十兵　むゝ、恨まば恨め、お主の爲め、もうかうなつたら是非がない。

ト文彌を切倒す、文彌よろぼひながら財布を持つたまま辻堂へ逃込む。十兵衞續いてはひる。横手板羽目の崩れ穴より、吹替の座頭糊紅にて這ひ出で、後向にて縁より落ちると、其穴より十兵衞財布を口に啣へ半身出し、刀を振上げきつと見得、又吹替とちよつと立廻り、よき所へ切倒し止めをさし、ほつと思入。財布の金を押しいたゞき懐へ入れ、刀の血糊を拭ひ鞘へをさめなどして、座頭の死骸を見て不便なといふ思入にて、

あゝ人の心は飛鳥川、流れ寄つたる合宿で、眼界の見え

ぬ不便さに、こゝまで送る親切もお主の爲めに入用の金子を所持なすばつかりに、うつて替つて非道にも、おれが手にかけ殺すとは、人の心も大空も替り易いが慣ひとは、はてあぢきなき世の中ぢやなあ。（トホロリとして涙を拭ひ。）せめて死骸は往來の、人の目褄にかゝらぬやう。

ト文彌の死骸を辻堂の蔭へ入れ、血の附きし手を手拭にて拭き、その手拭を捨てようとして思入あつて袂へ入れ、菅笠割掛を取つて行かうとする。此の時上手藪を押分け、提婆の仁三頬冠りにて十兵衞をきつと見、つか／＼と出て腰を捉へ引戻す。十兵衞びつくりして振拂ひ、行かうとするを立廻つて菅笠と荷物をよき所へおき、仁三手拭をとり兩人きつと見得。仁三十兵衞の懷より財布を引出し、これをかせに立廻りよろしくあつて、十兵衞財布をとり懷中に入れ、仁三を捉へようとする。そのはずみに腰の提煙草入を仁三に取られる。十兵衞手早く荷物と菅笠とを持ち、つか／＼と花道へ行く途端に、どんと本鐵砲の音するに、十兵衞笠をかざしちよつと下にゐる。仁三見事に尻ギバをするな木の頭。十兵衞ほつと思入あつて、

あゝ、狩人か。

ト十兵衞割掛を肩へかけるをきつかけに、鷄笛、馬土唄、山おろしになり、仁三胸を明け、腹をいぢつて見てホッと思入。十兵衞は花道へはひる。双方見合つてキザミ、

ひやうし幕

四幕目

材木町白木屋の場
裏借屋才三内の場
柴井町伊丹屋の場

（役名――伊丹屋十兵衞、文彌の亡靈、白木屋彦三、坊主小兵衞、筑田喜藏、髮結才三郎、白木屋十兵衞、番頭丈八、座頭こぶ市、下剃萬次、白木屋の若い者松六、同杉八、丁稚善太。十兵衞女房おしづ、白木屋お駒、下女おかつ等。）

（白木屋の場）――本舞臺三間常足の二重、白木屋といふ掛暖簾、正面赤壁、狀差し、眞中暖簾口、押入

上手一間千本格子の屋體、いつもの所門口、下手種種の材木、板割の書割、天水桶、總て白木屋店頭の體。二重に番頭裝の丈八、帳合をしてゐる。舞臺に杉六、松六若い者の裝にて、煙草を喫みゐる。角兵衞獅子の鳴物にて幕明く、

松六　こう杉八、こつちの家の聟さんは柴井町の伊丹屋十兵衞樣の弟で、小さい時から貰ひ受けて、行く行くはお駒さんと妻す積りで旦那樣はおいでなさるが、算筆と言ひ男ぶりなら言分のない聟さんを、どういふことかお駒さんが嫌ひなさるは、分らねえぢやあねえか。

杉八　さうよ、あの又美しいお駒さんを、聟の彥三さんの方でも嫌つて、此間から花川戶の假宅佐野松屋の花魁、古今とやらに惚れ込んで、たしか今日で三日居續けをしてゐさつしやるは、どういふ了簡であらうの。

松六　何でも今に大もめが、できねばよいと思つてゐるのよ。

杉八　いやも、家のごたつくのは厭なことだなう。

丈八　これ〳〵手前達は、寄ると觸ると內外の人の噂ばかりする。惡い癖だ。さあ〳〵一服喫んだらば早く河岸上をしてしまはぬか。

松六　はい〳〵、今行くとこでござります。

杉八　さあ〳〵來さつしやい〳〵。

ト兩人下手へはひる。花道より丁稚善太、髮結裝い才三郞臺盥を提げ、後より萬次下剃にて毛受と砥石を持ちて出來り、

善太　さあ〳〵髮結さん、早く來てくんな〳〵。

才三　今行くよ、橫町の伊勢屋をしまつて直に行くから、番頭さんにさういつておいてくんな。

善太　何さ、番頭さんぢやあねえ、お駒さんが襟を剃つて貰ひてえから、早く呼んで來いと言ひなすつた、早く來なせえ來なせえ。

才三　お駒さんが呼んで來いとか、それぢやあちよつくら行かざあなるめえ。こう萬や、手前先へ伊勢屋へ行け。

萬次　あい、先へ行くから、早く來なさいよ。

才三　今直に行くよ。

萬次　お駒さんぢやあ、直にやあ來られまいの。

才三　無駄を言はずと、早く行けよ。

善太　さあ、早く來なせえ。〔ト萬次は花道へ戾つてはひり、善太は才三をひつぱり舞臺へ來て〕はい、番頭さん、番頭さん、髮結さんを連れて來ました。〔ト門口へはひり

ながら大きな聲にて言ふ。)
丈八　このべらぼうめ、大きな聲でびつくりさせをつた。
才三　番頭さん、今日は結構なお天氣でござります。
丈八　おゝ髮結どんか、待つてゐた、髭だけちよつとやつて貰ひたい。
才三　お前さんかえ。こう小僧どん、お前お駒さんが呼んで來いと言つたぢやあねえか。
善太　番頭さんだといふと、髭におそれて來ねえから、お駒さんが呼ぶといふ計略はこの善太、何と膽がつぶれたか、ばた〳〵ばつたり。(ト不器用に見得をする。)
才三　えゝ忌々しい、一ぱいはめられたか、仕方がない。さ、やりませう。(ト剃刀を磨ぎにかゝる。)
丈八　仕方がないとは御挨拶だ、小僧水を汲んで來い。
善太　あい〳〵。
ト丈八眞中へ坐る。善太金盥へ水を汲んで來る。才三捨ゼリフにて髭を剃りにかゝる。奥よりお駒振袖、娘の裝、下女おかつ附き出來り、
かつ　髮結どん、先刻にからお駒さんが待つておいでなさるに、何をしてござんしたえ。
才三　おかつどんか、何だお駒さんが待つてゐなさるえ、そりや私ぢやあござりますまい、外の者だらうね。
お駒　才三さん、いえ才三どの、さつきにから待つてゐるに、外の者とは何のことぢやぞいの。
丈八　もしお駒さん、お前さん髮結を待つてゐるとおつしやるが、何の御用でござります。
お駒　さあ、その用といふはな。
かつ　お駒さんが御用とは、襟が剃つて貰ひたいとおつしやつてなあ。
お駒　さあ、その襟よりはまだほかに。
才三　何だ、襟が剃つて貰ひたいえ、嘘ばかり。私ぢやあねえ、聟さんの彦三様にたんと剃つてお貰ひなされませ。
お駒　そりや何を言はしやんす、どうして私が彦三さんに。
丈八　お駒さん、お前はあの聟さんは、お厭かいな。
ト　お駒の方を向かうとする。
才三　どつこい、髭を剃つてゐる中は、こつちの首も同然自由にやあなりません。
ト顏を持つてこつちへ向かせる。
善太　えゝ、いゝ氣味だ〳〵。
丈八　何をこいつが。

才三　これさ、動いちやあいけませんよ。
かつ　もし才三殿、お駒さんのお心を知つてゐながら、何を言はしやんすぞいな。
才三　お駒さんの心がえ、私アよく知つてゐます。浮氣者の情なし、初めの中は兎や角と親切らしく言つたのを、眞面目に受けたが大きな間抜け、こつちの思ふ半分も先ぢやあ思つてくれないのが、浮氣女のみんな持前、ねえもし番頭さん。
丈八　それ〳〵、いくら男の方で思うても、そこらあたりの女子の方ではつん〳〵と、ちつとはこちの心の中を、汲んでくれたがよいぢやござりませんかえ。
　ト又お駒の方を向かうとする。
才三　これはしたり、さう動かれちやあ、切りますよ。
丈三　おつと切られてたまるものか。(ト正面を向く。)
お駒　いえ〳〵、そんな恨みを受ける覺えはござんせぬ。私が心の言譯を。
かつ　あもし、それをこゝでおつしやつては、た、邊りに人目。(ト言つては惡いとの思入。)
才三　何の人目どころか、許嫁の聟さんだもの、隨分仲をよくなさるがいゝのさ。

お駒　あれ、またあんな。(ト思入。)
丈八　これ〳〵才三、聟樣の彦三樣とお駒さんが仲のよいのが、何で貴樣は腹が立つのだ。
才三　いゝえいさ、聟さんばかりならようござりますが、お駒さんにやあ此の頃また蟲がつきましたよ。
丈八　なに、蟲がついたとは。
才三　あい、蟲さ。(ト才三元結をひねつて、)こんな蟲がついたのさ。(ト丈八の襟へ入れる。)
丈八　あゝ氣味の惡い。これ、てんがうせずと、早う剃らぬかいの。
才三　はい〳〵、ぢつとしておいでなさい。
かつ　もし、才三殿。えゝも、言ひ度うても。
　ト丈八へ思入、才三丈八の耳を兩手で塞ぎ、
才三　おかつどん、何が言ひたいのだ。
かつ　その言ひたいのはな。(ト言ひかける、丈八思入。)
丈八　これさ〳〵、何故おれが耳を押へるのだ。
才三　いえさ、耳が剃れたか、押へて見たのさ。
丈八　てんがうせずと用がある、早く剃つてしまつてくれ。
才三　はいもう、眉毛を剃付けるとしまひでござります。

丈八　危いから目をしつかりと塞いでおいでなさい。
丈八　よし／＼、それしつかりと瞑つてゐるぞ。（ト丈八目を塞ぐ。）
かつ　もし丈八どの、それでは何處も見えまいがな。
丈八　どうして、さつぱり見えはしない。
かつ　見えぬその間に。（ト思入あつてお駒才三へ囁く。）
お駒　かうぢやわいな。
才三　そんなら、今夜私の家へ。
お駒　必ずその時私が言ひわけ。
かつ　待つてゐて下さんせえ。
才三　はい、合點でござります。（ト浮かれて、丈八の片眉毛を剃り落す、善太見て、）
善太　やあ、番頭さんの眉毛が半分なくなつた、ハアイハアイ。（ト手を拍つて笑ふ。）
丈八　何、おれが眉毛がどうした。（ト撫でゝ見ておどろき、）やあ／＼こりや、眉毛が半分紛失した。
才三　ほんに、これは思はぬ粗相、眞平御免なされませ。
丈八　やい／＼おのれは／＼、白木屋の白鼠忠義一途の番頭たるべき丈八が眉毛を半分剃落して、濟まうと思ふか。
才三　いえもう申譯もない不調法、然し眉毛が片方残りましてもをかしなもの、とてものことに兩方ながら剃落してあげませうか。
丈八　白痴面め、おのれ人を嘲弄してゐるか。うぬどうしてくれう。（ト立ちかゝる、善太見て。）
善太　やあ、をかしい、片方の眉毛で力みをる、これがほんのかた／＼かただ。（トツケをうつ眞似をする。）
丈八　おのれまでが同じやうに、たゝきのめしてくれう。
善太　そりや、怒つた／＼。
ト善太逃げて奥へはひる。丈八算盤にて才三郎を打たうとするをお駒とめて、
お駒　これ丈八、わしが才三殿に襟を剃つてくれと頼むはずみに、そなたの眉毛をつい落した故、私が詫言するほどに、堪忍してたもいなう。
丈八　いえ／＼、お前さんが詫をなさるが一倍腹が立ちます。お放しなされませ／＼。
かつ　これ／＼丈八殿、髮結どんもさうぢやというてなれば、もう堪忍してやらしやんせ。
丈八　いや／＼、了簡ならぬ／＼。
才三　もし／＼、どうぞ御了簡なされて下さりませ。
かつ　あれ、あのやうにあやまつておやわいな。さあ才三

どの、お前は早く歸らしやんせ。

才三　はい〳〵左樣なら、私はお暇いたしませう。（ト才三鬢盥を持ち門口へ出る。）

お駒　これ才三どの、必ず晩に。

丈八　なに、晩にとは。

才三　いえさ、晩ほどお詫にまゐりませう。

ト才三花道へはひる。三人は捨ゼリフよろしく、奥より善太出て、

善太　おかつどん〳〵、旦那樣がお呼びなさる、早く來なせえ〳〵。

かつ　あい〳〵忙しない、今行くわいな。

トおかつ、善太奥へはひる。

お駒　これおかつ、わしも一緒に行くわいなう。

ト行かうとするを丈八とめて、

丈八　どつこい、逃がさぬ〳〵、ちよつとお待ちなされませ。

お駒　丈八としたことが、こゝ放しやいなう。

丈八　いえ〳〵放されませぬ。お前樣に言はねばならぬことがござります、下においでなされませ。

お駒　いえ〳〵、そなたに何も聞くことはないわいなう。

丈八　お前さんがなうても、私の方にたんとござります、まあ下においでなされませ。（トお駒を無理に坐らせて、）もしお駒さん、お前さんはおいとしいな〳〵、小さい時から許嫁の彥三樣はお前を嫌ひ、この頃は假宅へ居續け、山の宿の佐野松屋の古今といふ女郎に陷り、内を外なる身持放埓、親旦那も今に愛想を盡かし、追出しなさるは知れたこと、あんな水臭い男は思ひ切り、心立のよい聟をとつて、親旦那に樂をさせるが、孝行といふものでござりますぞえ。

お駒　なるほど、そなたの言やる通り、不束な私故嫌うてござんす彥三樣、疾うから私や思ひきつてゐるわいな。

丈八　そんならお前には、聟さんを思ひ切り、外に思ふ男でもござりますかえ。

お駒　さあ、恥しいことながら、私が思ふは、つい、こゝらに。

丈八　私が思ふは、つい、こゝらにとは（トいろ〳〵思入あつて）もしお駒さん、思ふ男といふは、この丈八でござりますかえ。

お駒　何のそなたに、阿房らしい。

丈八　なに、阿房らしい。といふて外に男は見えず、やつ

ぱり私ぢや〳〵。えゝ有難い忝い。さういふお前の心と知らず、もう言はうか〳〵と口までぞろ〳〵出かけても、言出し兼ねてをりました。有りやうはお前の顔を見る度に、氣も心もうき〳〵として、どうもなることぢやござりませぬ。あらうことか白木屋の番頭とも言はれる者が、どうぞ此の戀かなひますやうにと、夜々芝の神明様へ跣足參りをいたしました。その御利益でお前の方から、氣があるとは、えゝ有難い〳〵。

　トお駒の袖を捉へるを、お駒振拂つて、

お駒　えゝも何のことぢや、惡いことしやんな。

　トお駒逃げるを追廻す。花道より彦三少々醉つたる體にて出來り、門口へ來て、わざと咳拂ひをして内へはひる。丈八心附かずお駒と心得彦三を捉へる。

彦三　これ、丈八、何をしやる。

丈八　(びつくりして、)や、お前様は若旦那様。

お駒　(びつくりして、)ほんに、あなたはいつの間に。

彦三　お駒どの、商人の店先で不行儀千萬。いやさ、番頭殿とお樂しみぢやの。

お駒　いえ〳〵、どうして私が。

彦三　いや〳〵、お樂しみ〳〵、はゝゝゝ。何ぢややら私も醉つて、さつぱり分らぬ。これお駒、水一つたも。

お駒　あい〳〵。(ト奥へはひる。)

彦三　これ番頭殿、そのやうに面目ない顔せずと、私が戻つたと、親父さまへお報せ申してたも。

丈八　はい〳〵かしこまりました。折角うまくやりかけた所を、惡いところへ。

彦三　どうしたと。

丈八　どれ、お報せ申してまゐりませう。

　ト丈八奥へはひる。お駒水呑茶碗を盆へ載せ、持つて出で、

お駒　はい、お冷水を持つて參りました。

　ト前へ出す、彦三取つて、

彦三　おゝ大儀〳〵、(トぐつと呑み、)あゝ醉覺めの水、甘露甘露。

　ト思入、奥より白木屋庄兵衛老けたる拵へ、羽織着流しにて出で、

庄兵　何ぢや、悴が戻つたとか。(ト言ひながら住ふ、)

彦三　親父さま、唯今歸りましてござります。

庄兵　おゝ彦三戻つたか、見れば酒機嫌の様子、得意廻りに一昨日から出て、今日で三日戻らず、そりやも若い者

のこと故、假宅にでもゐるのならばよけれども、日頃實體なそち故、もし神隱しにでもなりはせぬかと、たいてい案じたに、よう無事で戻つて來やつたの。

彦三　親父樣、私はあんまりようも戻りませぬ。

お駒　（思入あつて、）もし若旦那、父樣があのやうに機嫌ようおつしやるに、あんまりようも戻りませぬとは、何事でござりますえ。

彦三　はて、知れたこと、家にゐては親父樣の澁い顏や、そなたの愛想のない顏を見るが厭さに、得意廻りをかこつけに此頃の夜泊り日泊り。勿體ない、十年以來御恩を受けた親父樣、いや恩を受けたとはいふものゝ、こつちから頼んだといふではなし、そつちの勝手で小さい時から養子に貰はれ、何一つ不足なく育てられたは世間いつたい、こりや當然といふもの。その上望みもないこのお駒と夫婦にすると言はれるがいやで〱、そなたの顏を見る度に、むしづの出るほど厭でござります。何の阿房らしい、この身代の一つや二つ貰うたとて、町人は一夜撿校、もしもの事でもある時は、箸も持たぬ乞食も同然、それ故片時も此の家にゐることが、私はいやになりましてござります。（ト思入にていふ。庄兵衞思入あつて、）

庄兵　これ彦三、最前からの惡口雜言、酒の上ぢやと思うて聞いてゐたが、そんなら眞實娘や親に。

彦三　ふッつり愛想が盡きました。

お駒　もし彦三さん、御酒の上とは言ひながら、言ひたいがいな愛想盡し、そりやも不束な私が、御氣に入らぬは知れてあれど、何の恨みで父さんに、愛想が盡きて此の家をお前は眞實出やしやんすのかいな。

彦三　おゝ出るとも〱。何の隱さう、吉原の佐野松屋の古今といふ女郎に馴れなじみ、引くに引かれぬ深い仲、此家を出てその女郎と夫婦になり、假令肩へ棒を當てゝしつけぬ生業してなりと、氣儘に浮世が渡りたうござります。どうぞ親父樣、私を御離緣なされて下さりませ。

庄兵　成程娘が氣に入らすこの親にも愛想が盡きて、家にゐるが厭ならば離緣しまいものでもないが、柴井町にゐるそちが兄御、伊丹屋十兵衞殿から貰うた忰なれば、十兵衞殿に逢つた上、はて、厭なものなら不緣のもと、勝手に暇をやりませう。

彦三　そんなら私の、望みの通り。

庄兵　おゝ、離緣せいで何とせうぞい。

彦三　それ聞いて、落付きましてござります。

ト花道より十兵衞羽織袴にて出で、舞臺へ來り、家へはひらうとして門口に窺ひゐる。此中奥より丈八、おかつ出て、

丈八　もし旦那樣、お前樣やお駒さんに、愛想が盡きたといふ道樂息子の彦三殿、定めてお前樣も愛想がお盡きなされましたならば、何の十兵衞殿に御相談は入りませぬ。望みの通り、とつとゝ追出しておしまひなされませ。

彦三　誰かと思へば丈八殿、こなたにも今までは何かと世話になりました。急に此家が厭になり、離緣を望む彦三を、とつとゝ追出せとは忝い、鹽から先へ言ひませう。

かつ　もしお駒樣、樣子は殘らず承りました。日頃おやさしいお心に打つて替つた若旦那樣、御離緣なされたいとおつしやるは、もしやあなたの。

お駒　あゝこれ、不束な私に愛想の盡きるに御道理なれど、日頃から御不便がる父樣を捨てゝ家出をしたいとおつしやるは。

かつ　どうも合點がまゐりませぬ。

彦三　はて知れたこと、親父樣始め內外の者に愛想が盡きて離緣して出て行くに、仔細もございもあるものか。

丈八　いや呆れたものだ。大恩のある親旦那にふて勝手の罰あたり、傍に聞いてゐてさへ憎しくつて憎しくつてなりませぬ。私が一走り迎ひに行つて、十兵衞どのを呼んで來ませう。

ト丈八立ちかゝる。十兵衞門口にて聞いてゐて思入あつて、

十兵　あいや、お迎ひには及びませぬ。伊丹屋十兵衞、丁度これへ參り合せてをります。

ト門口をあけて十兵衞はひる、皆々見て、

彦三　ほんに、お前は兄者人。

庄兵　おゝ十兵衞殿、いつの間にござつた。さあ／＼こちらへ入らつしやれ／＼。

ト十兵衞通らうとして丈八を見て、

十兵　これは番頭さん、此間は御目にかゝりませぬ。

丈八　十兵衞樣、よくおいでなされました。ずつとお通りなされませ。（ト氣の毒さうにいふ。）

十兵　左樣なら御免下さりませ。（ト十兵衞よきところへ住ひ、）扨庄兵衞樣、その後は久々お目にかゝりませぬ、御機嫌よう。お駒さんにもお變りなく、お目出度うござります。

庄兵　十兵衞殿にもお達者で、お互ひに悦びます。こなた

には大阪からいつ戻られました。

十兵　へい、やう／＼一昨日歸りましたばかり、私旅行中は何かと御厄介にあづかりまして、御禮の申上げやうもござりませぬ。

庄兵　いやも、別條なく戻られて、このやうな目出度いことはござらぬ。さうして大阪表の用向は調へて戻られたかな。

十兵　有難うござります。右の金子は思ひがけなく、いえ、もう首尾よく調達いたして歸りました故、御禮旁々今日上りまして、唯今お店先で委細は承りました。詳しい樣子は存じませぬが、十一の年から御恩になつた、あなたへ對して彦三めが唯今のふて勝手、このお家に愛想が盡きて離縁したいなどゝ、まるで氣違ひ同然な奴、打ち打擲も致し度うござりますが、こゝでいたさばお家の恥、私が宿へ連歸りまして、きつと性根をたゝきなほしますが、もし役に立たぬ根性ならば十兵衛に思案がござりますれば、どうぞ私に弟めをお預けなされて下さりませ。

庄兵　いかにもこなたへ預けませう、何をいふにも若い者のこと、とつくりと彦三の了簡を聞いた上、厭のものならば厭のやうに、兎も角相談しませう、直に彦三を連れて行かつしやれ。

十兵　有難うござります。これから同道いたして歸ります。やい弟、おのれはまあ天魔の見入りしか、情ない恐しい根性になりをつたな。まあ何事もこゝでは言はぬ。さ、おれと一緒に柴井町へ歸りをれ。

彦三　行きますとも／＼。愛想の盡きた家に半時たりともゐるのは厭だ、大手をふつて出て行きます。

丈八　あれ、あの通りの無頼漢、十兵衛さん、とつとゝ早く連れて行かつしやれ。

十兵　はい／＼、いやもどなたもお腹の立つは御尤も、もしお駒さん何れ一兩日の内お詫に上ります。ほんにお前さんに上げようと、駿河細工の縫箱を買つて來て、急いで忘れてまゐりました。その時持つてまゐりまする。旦那樣へよろしうおつしやつて下さりませ。

お駒　そんなら、もうお歸りでござんすか。日頃に替る彦三さん、合點の行かぬ今日の仕儀。

かつ　どうやら御樣子のありさうな事、憚りながら十兵衛樣、御思案なされて下さりませ。

十兵　御親切に有難うござります。さあ弟、御挨拶申して

行きをらぬか。

彦三　出て行く家へ何の挨拶、然しこれまで養育の恩も送らず、剰へ心にもない、いや、どうとも勝手にするがいい、顔を見るのもふつ〳〵いやだ。

ト言ひながら門口へ出る。

十兵　(も門口へ出て、)こりや、口數利かずと行きをらぬか。

彦三　でも、挨拶をしろとお前が。

十兵　えゝ、口强情な。左様ならば旦那樣。

庄兵　十兵衛殿、しづかに行かつしやれ。

丈八　(門口へ來て、)さあ、きり〳〵と歸つて貰ひませう。

彦三　ゐろと言つても、ゐるものかえ。

十兵　はて、默つて行けといふに。おやかましうございます。

ト思入あつて行きかける。彦三つぶやくを叱りながら兩人花道へはひる。

丈八　やう〳〵行きをつた。もし旦那樣、あのやうな惡い奴は追出しておしまひなされまして、そこらあたりにゐます實體な孝行な聟さんを、お取りなさるがようございます、なあお駒さん。

トそつとお駒の手を取る、お駒振袖にて丈八をたゝく、庄兵衛思入あつて、

庄兵　これ丈八、最前私が屋敷方へ送つた、材木の帳面を調べかけておいた、わがみ奥へ行つて調べておくれ。

丈八　はい〳〵畏りました、どうで私が貰ふこの身代、お駒さんも得心で。

庄兵　や。

丈八　いや、とつくり帳の調べをいたしませう。

ト奥へはひる。

庄兵　これ、娘こゝへ來や。

お駒　あい。(トもぢ〳〵してゐる。)

庄兵　はて、こゝへ來やれといふに。(ト合方になり、お駒おかつと顔見合せ、お駒傍へ來る。)これ娘、わがみは何と思やるか、日頃孝行にした彦三が、この頃の身持放埒、離緣を望む心底は何か樣子のありさうなこと、わがみは彦三が家を出ても淋しいことはないか。これ、默つてゐては分らぬ。どうでもわがみは彦三が氣に入らぬか。

お駒　はい。(ト苦しき思入、おかつはさう言つては惡いといふ思入。)

庄兵　十二の年から養子に貰うたあの彦三、夫婦になるの

が厭になつたのは、もしや外に好いた男が、いや、そんなことがあるまいものでもなけれども、まゝにならぬが浮世の中、これ、親一人子一人ぢやぞよ。外に便りのない此の親に、必ず〳〵苦勞をかけてたもるなよ。

かつ　御尤もでございます。お駒樣に限り、そのやうなことはございますまいけれど、また私がとつくりと、お心の內をお尋ね申して見ませうわいな。

庄兵　女房が死んでから氣儘に育てた一人娘、あまい親ぢやと笑はせてたもるなよ。

お駒　もつたいない、父さんのお言葉、

かつ　必ず仇に思召しまするな。

お駒　ほんに思へば世の中に、

庄兵　苦勞は絶えぬものぢやなあ。

ト時の鐘にて、よろしく道具廻る。

（裏借家才三内の場）――本舞臺三間の間平舞臺、正面崩れたる鼠壁、錦繪などを貼りし襖を立てたる一間の押入。上手一間折廻し崩れ壁。下手一つ竈、勝手道具あり。よき所に神棚、いつもの所門口。此の外崩れし板塀、總て材木町裏借家の體。こゝに角行燈を灯し、才三以前の裝にて寢轉び、下剃萬次と合卷を見てゐる。さんげ〳〵にて道具留る。

才三　さつき伊勢屋で借りて來た草雙紙は、龜井戸の國貞の繪で面白さうだ。

萬次　こりや種員の弟子の柳水亭種淸の作で、五月雨濡仲町、小三金五郎さ。

才三　ほんに草雙紙で思ひ出した。今夜横町の寄席が大寄で、玉輔、扇橋、馬生三人の掛合噺だ、手前四つまで聞いて來ねえか。

萬次　そいつあ有難え、本當にやつておくんなさるか。

才三　なに、嘘をつくものか、さあ行つて來さツし。（ト叺煙草入より百錢をだしてやる。）

萬次　こりや有難え。お前酒をさう言へと言ひなすつたから、買つておいたが、お客でもあるのかえ、こゝにあります。そんなら行つて來ますよ。

ト萬次はよき所へ德利をおいて、花道へはひる。才三思入あつて、

才三　いつぞや殿樣のお眼鏡にて、表向御追放と僞り、紛失なせし御家の重寶花形の茶入、詮議せよと有難きお指圖、お髮を上げたを幸ひ町髮結となり、今日は淺草明日

は深川と、所を替へて茶入の詮議、寶紛失の夜より行方知れざる筑田喜藏が中間小兵衞、たしかに寶の紛失も彼等が仕業に疑ひなし、この程芝にて計らずも、茶入の袱紗は手に入りしが、まだ兩人が行方知れず、どうぞ早く詮議の手蔓に、取りつき度いものぢやなあ。

ト思案の思入。花道よりおかつぶら提灯をさげ、お駒の手を引き出來り、

お駒　そなたの教へた通り、琴の御師匠さんへ行くと父さんに嘘いうて家を出たが、早う才三さんに逢はせてたもいなう。

かつ　向うの角の長屋が才三樣のお家でござります。さあおいでなさりませ。(ト兩人舞臺へ來り、門口より覗き、)もし才三さん、お內でござりますか。

才三　おゝおかつどんか、さつきから待つてゐました。

ト門口を明ける。

かつ　よう待つてゐておくんなさいました。お駒さま、おはひりなされませ。

ト兩人內へはひる。才三は門口へ掛金をかけて二人よろしく住ふ。

才三　よくおいでなすつた。さあ、こつちへおいでなさい。

お駒　才三さんお前に逢はうと、父さんに嘘いうて、やうやう家を出たわいな。

才三　こんな汚ない所へ、お坐りなすつたことはあるまいが、まあゆつくりとお話しなさい。

かつ　却つてこれがお駒さんの、お樂しみでござりますわいな。

お駒　才三さん、お前も知つてござんす通り、此間から彦三さんの夜泊り日泊り、今日久しぶりで戾るや否や父さんや私へ愛想盡し、離緣してくれいと言はしやんす所へ兄さんの十兵衞さんがござんして、連立つて家を出て行かしやんしたわいな。

才三　そんなら彦三殿は、白木屋の家を出る所存で、兄十兵衞の所へ行つたと言やるか。

かつ　日頃親御樣へ御孝行な彦三樣、俄にお心の變つたは、お駒樣とお前樣の仲を御存じの上の、御離緣ではあるまいかと存じます。

才三　彦三殿の兄の十兵衞は、元私が父樣の家來なれば二人が仲を覺り、主筋の義理を思ひ浪風立てず離緣する彦三が實の心底、盃こそせね幼きより、許嫁せし彦三が女房お駒、言はずと知れた密夫の才三、添ふに添はれぬ

二人が惡縁。

お駒　そんならお前は、彦三さんの義理を思ひ、私を捨てるお心かいなあ。

才三　捨てる心はなけれども、浮世の義理が立たぬわいなう。

お駒　情ないこと言はしやんす。今更お前に捨てられては、私や死ぬより外はござんせぬわいなあ。

　ト才三にもたれて泣く。

かつ　お小さい時お屋敷へお上りなされて、彦三樣とお許嫁のことは御存じない故、才三樣も深いお仲におなりなされたことなれば、親旦那樣へお話し申して、仕樣もやうもござりませうほどに、必ずきな〳〵お思ひなされまするなえ。

萬次　（ばた〳〵にて花道より走り出來りて、）おい〳〵才三さん、もう寐なすつたか、大變だ〳〵。

　ト門口をたゝく。

才三　何だ、萬次か、大變とは何のことだ。

　ト兩人を後へ寄せ、門口を明ける。

萬次　大變といふのはね、橫町の髮結の親方の家に夫婦喧嘩があつて、皆々行つてゐるからちよつと顏を出しなさい。（ト手を取り、引つ張る。）

才三　なに、親方の所に喧嘩がある、今こつちにちつと用があるから、手前いゝやうに言つてくれろ。

萬次　いゝえ、それぢやあ惡いから、ちよつとおいでなせえ〳〵。（ト引張る。）

才三　仕方がねえ、行くよ。今穿物を穿いて行くわ。

萬次　穿物は何でもようござります、さあ早くおいでなせえ〳〵。

才三　忙しねえ男だ、今行くといふに。

　ト才三穿物を搜す振りにておかつに囁き、門口へ出る。萬次引張り花道へはひる。お駒おかつ見送り門口をしめる。時の鐘になり、花道より筑田喜藏五十日鬘頰冠り着流し大小にて、小兵衞は白髮鬘一本差にて出來り、

喜藏　裏家住居の才三が家へ忍んで來てゐる白木屋の娘、日頃の思ひを晴らさうといふ、小兵衞めが思ひ付き。

小兵　當百四枚で丁稚の野郎をうまく欺し込み、才三めを釣り出させ、あとへこつそりしけ込む魂膽、ちつとも早く行かつしやれ。

　ト兩人舞臺へ來り、門口より窺ひ囁き合ひ、そつと門口を明けてはひる。内の兩人見て、

かつ　どなたでござります、此方の主人は出られまして、私共は餘所の者でござります。

小兵　(門口へ掛金をかけて、)やかましい、默つてうしやあがれ。

兩人　(兩人をすかし見て、)あれ、盜人か。(ト大きくいふ、喜藏刀を拔きて、)

喜藏　聲をたてると、一突だぞ。(ト刀を突立てる。)

兩人　えゝゝゝゝ。

ト逃げようとするおかつを小兵衞引附ける。喜藏はお駒の帶を捉へる、帶ずる〱と解ける。

喜藏　腰元小牧、筑田喜藏を見忘れはしまい、久しぶりであつたなあ。

ト帶の端を捉へきつと思入、お駒喜藏を見ておどろき、

お駒　や、ほんにお前は喜藏さん、どうしてこゝへ。

かつ　そんならもしや、お駒さんが忍んでおいでを聞きつけて。

喜藏　佐々木の屋敷にゐる中から、附けつ廻しつ口說いても、得心しない腰元小牧、尾花才三にうつぼれて、追放された後を慕ひ、屋敷を下つて親の家、才三も今は町髮結ひ、二人が仲のむやくしさ、いつか一度は此の念を晴らさうと思ふ中、今夜手前が家を拔け、此の家へ忍んで來ると聞き、贋迎ひをかけ才三めを、旨い手段で追ッ拂ひ、これからおれの隱れ家へしよびいて行つて自由にするのだ。

お駒　えゝ、かういふことゝ知つたなら、此家へ忍んで來まいもの。これおかつ、どうせうぞいなう。

かつ　よろしうござります、私がついてゐます。めつたに手籠にはさせませぬ。

小兵　やかましい、邪魔をしやあがるな。

かつ　いえ〱、そこ退かしやんせ。

小兵　えゝ、うるせえ奴だ。

ト小兵衞おかつを蹴倒す、おかつ脾腹をあてられ、ウンと倒れる。

お駒　あれ、おかつが。(ト立ちかゝる。)

喜藏　おつとしてゐろといふに。

ト引きすゑる。小兵衞こなしあつて、

小兵　もし喜藏樣、邪魔のない中女めを、早くしよびいて行かつしやりませ。

喜藏　おゝ合點だ。さあ、おれと一緒にうしやあがれ。

お駒　いえ／＼、何でおのれの自由にならうぞ。
喜藏　えゝ、やかましい。
ト喜藏お駒をかい込む。お駒あれえ／＼ともがく、喜藏懐より手拭を出し猿轡をかける。小兵衛は門口に窺ひゐる。その中おかつ心附き、これを見て、
かつ　お駒さまは、やらぬ／＼。
ト喜藏の足にすがり附く、小彦衛臺所より薪を持來り、おかつの帶際をとつて引据ゑ、
小兵　邪魔をしやあがると、からだぞ。
ト小兵衛おかつを續けうちに打つ。これにておかつ苦しみ、喜藏の足を放す。此間に喜藏お駒を抱へ門口を出ようとする。花道よりバタ／＼にて才三走り出來り門口を明けようとして明かぬ故内の樣子を窺ふ。内より喜藏門口を明けるを才三すかし見て、
才三　おゝ、お駒を手籠に、何者なるぞ。
喜藏　誰でもねえ、筑山喜藏だ。
才三　なんと、ト才三内へ入り、喜藏を附廻し、お駒を圍ひ、おゝ珍らしや筑田喜藏、扨は屋敷にゐる中より、心をかけし腰元の、お駒を手籠めのこの場の有樣。
喜藏　いかにもうぬが言ふ通り、思ひをかけたお駒故、何といつても連れて行くのだ。
小兵　此の家へ忍んで來ることを、ちらりと聞いたを幸ひに、下剃野郎の贋迎ひで、汝を釣出しその後の明巣へしかけて寢鳥をさす、小兵衛樣の指金だ。腹が立つなら勝手にしろ、
才三　おゝ存分にする。まだ其の上に、二人の者に詮議がある。トつか／＼と行き押入より一腰を出す。
小兵　こりやをかしい、何で二人に、
兩人　詮議があるとは。
才三　仔細は其身に覺えがあらう、佐々木の重寶花形の茶入、盜み取つたる筑田喜藏、此のほど芝にて手に入れたる鶯切のこの袱紗。ト二幕目で手に入れし袱紗を出して見せ、この小兵衛が持參と聞いたるからは、二人が仕業に疑ひあるまい。さあ眞直に、白狀いたせ。
トきつと言ひかけ、ぶる／＼震へ出す。
お駒　もし才三さん、何でお前はそのやうに。
才三　やゝ、折も折とて此の病ひ、えゝゝゝ。
ト身體を押へ悔しき思入、兩人見て、
小兵　何だ／＼。やい才三、何でぶる／＼ふるへるのだ。
才三　此程よりの瘧の病ひ、寶詮議の緒に取付きながら、

身動きならぬこの業病、思へば／＼口をしい。

ト震へる思入、小兵衛聞いて才三を蹴倒し足にて踏む。アレとお駒寄るな喜藏引附けきつと見得。

小兵　さあ野郎、動かれるなら動いて見ろ。詮議々々とぬかしても、身動きはなるめえが。

喜藏　やい才三、無念口をしいか、いゝ態々、我が尋ぬる花形の茶入は、この喜藏様が盗んだのだ。

才三　すりや推量に違ひなく、汝等兩人が仕業よな。

小兵　盗んだ譯を言つて聞かさう、よく聞きやあがれ。御旦那喜藏様が預かりの、御納戸金二百兩遣ひ込んだを、われが親尾花六郎左衛門に、見出されて殿へ披露したばツかり、喜藏様は門前拂ひ、それが無念さ、六郎左衛門が預かつてゐる寳の茶入、ひん盗んだ越度にて六郎左衛門は腹を切り、くたばつたので意恨は五分々々、とてものことに惚れてゐる、以前の家來庄兵衛が娘のお駒を取持つのも、おれが手で茶入を質に入れた金を山分にした恩返し、仔細といふはこの通りだ。憎まば憎め遠慮はねえぞ、こりや敵役の當然だわ。

ト踏みにじる。才三その足を取つて跳ね起き、小兵衛を投げのけ、きつと見得、喜藏驚き、

喜藏　や、才三郎がこの體は。

才三　おゝ癪の病ひと言つたは僞り、企みの次第を聞かう爲め、茶入の盗賊二人とも繩打つて屋敷へ引く、さあ尋常に覺悟なせ。

喜藏　そんなら病ひと言つたのは、茶入の在所を聞く手段か。

小兵　（立上りて、）それ知られた上からは、生けてはおけぬ、覺悟ひろげ。

才三　小癪な一言、茶入の在所を白狀なせ。

喜藏　面倒な、疊んでしまへ。

ト三人刀を拔き、よろしく立廻り、トゞ才三喜藏を一刀切る、喜藏ハツと苦しむ。お駒盥の剃刀を取り喜藏へ突いてかゝる。小兵衛たぢ／＼となり、正面の壁へ行當る。これにて壁ばら／＼と壞れると、小兵衛はその壞れより後へ逃げてはひる。才三はその後を追かけてはひる。此中お駒は喜藏と立廻りあつて、

喜藏　こりやお駒め、故主の喜藏を切る氣だな。

お駒　夫の助太刀、覺悟しや。

喜藏　小癪な女め、くたばつてしまやがれ。

ト兩人立廻つてきつと見得になり、件兩人立廻りの中

にお駒も傷を負ふこと、ト〻お駒喜藏、脇腹へ剃刀を突込む、喜藏ハッと苦しむ、この模樣にて道具廻る。

（借家裏手の場）――本舞臺三間一面屋根附の崩れたる鼠壁、上の方松の立木、下手崩れたる屋根を見せたる物置、總て今の借家裏の體。上手に才三刀を振上げ、下手に小兵衞傷を負ひたる體にて刀を差附けてゐる。

才三　さあ小兵衞、茶入の在所、きり〳〵白狀してしまへ。

小兵　いや知らねえ、覺えはねえ、よしまた知つてゐるとても。うぬに知らせてなるものか。

才三　言はずばかうして。（ト小兵衞を一刀切る。）

小兵　人殺しだ〳〵。

ト聲を立てる。才三小兵衞の口を押へ、立廻つてきつと見得。これより兩人立廻りあつて、才三小兵衞を切下げる、小兵衞苦しみ倒れる。才三落ちたる煙草入を見附け、中より出かゝりし書物をとり、開き見て、

才三　や、こりや是茶入の質入切手、これさへあれば、え忝い。（ト煙草入のまゝ懷中する。時の鐘にて後の壁の崩れより、お駒剃刀を持ちて這ひ出る、才三見て、）や、お駒には傷を負うたか。

お駒　才三さん、茶入の在所は知れましたか。

才三　今小兵衞が取落したる、煙草入に入れあつたる、寶の茶入の質入切手。して喜藏めは。

お駒　假令惡人なればとて、現在故主の喜藏殿を、我が手にかけしは主殺し、その言譯は。

ト剃刀を喉へ突き立てる。

才三　すりやお駒には、命を捨てゝ。

お駒　惡人なれども喜藏殿を、手にかけたる上からは、親へ難儀のかゝらぬやう、此の身を捨てゝ。

才三　あつぱれ心底、それでこそ武士の娘、寶の茶入手に入れて、殿へ差上げ、その上にて後より追付死出三途。

お駒　いえ〳〵、此の場の罪は死行くこの身に引受くれば、お前は寶を手に入れて、御歸參なされたその後に、幾萬歲の御壽命過ぎ未來はどうぞ。

才三　云ふにや及ぶ、未來永々替らぬ夫婦。

お駒　そのお詞が未來へ土產。

才三　心殘さず成佛しやれ。

お駒　嬉しうござんす。

才三　見捨てゝ行くは本意ならねど、片時も早く寶の質受、

(ト行きかゝる。)

萬次 (窺ひ出て、)うぬ、才三め。

ト才三へかゝる、才三よろしく引附ける。お駒思入あつて、

お駒 これが別れか。

才三 ふびんやお駒。

お駒 早うお前は。

才三 合點だ。

ト才三萬次を投げのけ、逸散に花道へ走りはひる。お駒落入る。これにて道具廻る。

(柴井町伊丹屋の場)——本舞臺三間常足の二重。正面鼠壁、眞中暖簾口。上の方障子屋體。下の方三尺の袋戸棚、へだて四つ目垣、此の脇小庇附の伊丹屋勝手口といふ腰高の本障子。總て柴井町居酒屋裏手の體、上手の屋體に、十兵衛女房おしづ病鉢卷にて病み勞れし體、木綿夜具の上に括り枕にもたれてゐる。二重に以前の十兵衛行燈を點けてゐる。時の鐘門附の合方にて幕明く。

しづ 旦那殿、また日が暮れるのかいな、あゝ日の暮れるのが厭でならぬわいな。

十兵 それでもどうも仕方がねえ、そんなことを言はずとも精出して藥を呑んで、早くよくなつてくれろよ。

しづ いくら藥を呑んだとて、どうで助からぬ私の病ひ、此の苦しみをしようより、一日も早く死にたいわいな。

十兵 馬鹿なことを言つたものだ。假令死にたいと言つても、命があれば死なれるものぢやあねえ。病ひは氣から起きると言ふから、氣をはき／＼持つがいゝ、何ぞ喰ひてえものでもねえかの。

しづ いえ／＼何も喰べたうはござんせぬ。えゝ早う死にたいわいな。

十兵 はて、困つたものだなあ。

ト暖簾口より以前の彦三出來りて、

彦三 兄者人こゝにござりましたか。姉者人お粥でもあがらぬか、拵へて來ませうか。

しづ 彦三どの、もう／＼必ず構うて下さるな。

十兵 今も何ぞ喰へと言へば、何も厭だ兎角早く死にたい死にたいとばかり、實におれも當惑するよ。

彦三 御尤もでござります、其の御苦勞なさる中へ、又御苦勞をかけまする私の不行跡、面目次第もござりませ

ぬ。
十兵　兄弟の仲に何そんな、氣の毒なことはなけれども、合點の行かぬ汝が心底、小さい時に白木屋へ貰はれ、十二の年から大恩受けた養ひ親の庄兵衞どの、常から孝行な者、實體な者と不便をかけられたおぬしが、打つて替つた今の仕儀、是には何ぞ樣子がなくてはならぬ筈、兄弟の仲に遠慮はないほどに、包まずかくさず其の仔細を、言つて聞かせてくれまいか。
彦三　事を分けたる兄者人のお詞、假令どのやうなことがあらうとも言ふまいと思うたなれど、言はねば明りの立兼ねる此の身の言譯、一通りお聞き下さりませ。(ト思入あつて)何をおかくし申しませう、十二の時から大恩受けた庄兵衞樣、末は夫婦と約束のお駒どの、お前の故主尾花の御子息才三郎殿と言交し今は互ひに深き仲、この彦三がある時は言はずと知れた畜犬も同然、一人は恩ある養父の娘、相手は縁ある故主の御子息、この身さへ退く時は浪風立たずと思案を極め、心にもない身持放埓、愛想を盡かされ離別の望み、こゝに一つの難儀といふはふつと馴染んだ吉原の佐野松屋の古今といふ女郎、ほんの座興に二度三度、今では退くに退かれぬといふ其の譯は、弟の行方を尋ぬる古今、頼る方なき女の一人身、力と頼むと切なる心底、據なき義理詰故、色には染まねど孝心の道につながる惡緣は、定りごとゝ兄者人、お許しなされて下さりませ。
十兵　詳しい樣子を聞いて見れば、こりやさうなければならぬところ、大恩のある白木屋の家へ疵を付けず離緣をするとは、若い者には似合はぬ心底、出かしました〳〵。
　ト此の樣子を聞きおしづ思入あつて、
しづ　彦三殿が小さい時から、許嫁のお駒どのと言交したは私が弟才三郎、それ故科もない身に疵を附け離緣する彦三殿、面目ないやら切ないやら、そんな事を聞くに就けても、一日も早く死にたいわいの。
十兵　又そんな愚痴を言ふと、一倍病ひが重くなる。苦勞の絶えぬは浮世の中。さうしてその古今とやらの弟といふは、何處の何といふ者ぢやぞ。
彦三　その古今といふは芝の片門前で、至つて貧しう暮した者、文彌と云つて盲目の弟に官位が取らせ度く、佐野松屋の家へ百兩に身を沈め、その百兩の金を持つて、弟の文彌は京都へ上つたそれ限りで、風の便りも音信もなく、行方が知れぬ、苦しい話し。

十兵　(聞いてぎつくり思入あつて、)何といふ、そんならその古今の弟は、文彌と云ふ座頭、あの文彌といふか。

彦三　左樣でござります。

十兵　えゝゝゝ、(トびつくりする。彦三合點の行かぬ思入。)

彦三　兄者人、何故そんなにびつくりなされます。

十兵　おれがびつくりしたのは、(ト思入あつて、)おゝさうだ、その古今とやらが、無賴りないことであらうと思つて、それでびつくりしたのだ。(ト言ひまぎらす。)

しづ　あれ、また肩がつかへて來た、苦しや〱。

ト苦しき思入。

彦三　姉者人、私が肩を揉んであげませう。

しづ　あ、彦三殿、どうで助からぬ病ひ、捨てゝおいて下さんせ。

彦三　でも、そのやうに切ないのを。

十兵　いや〱おぬしが揉んでは却つて氣がつまる、おれが揉んでやるから、おぬしは店へ行つて、藥を煎じて來てやつてくれ。

彦三　はい〱、どれ藥を煎じて來ませう。

ト彦三は暖簾口へはひる。

十兵　(上手へ來て、)どれ〱おれがそろ〱擦つてやらう。おゝだいぶ支へて來た、これぢやあ切ない筈だ。いつたいそなたの病ひは、こゝが斯うといふ取りとめた事のない、名の附けやうのない病ひだと醫者殿の話し、何でも氣をしつかりと持ちさへすれば、斯ういふ病ひはなほるものだ。

しづ　いくら氣をしつかり持つても、毎晩〱夜中になると、枕許へ血だらけな座頭が來る故、怖い怖いと思ふので、こんな病ひになりました。

十兵　(びつくりして、)なに、毎晩々々座頭が來る、さうしてそりやあいつ頃から。

しづ　十月の二十日の晩から。

十兵　なに、十月二十日の夜から。南無阿彌陀佛〱。

ト小聲に言つて眼を拭く。

しづ　あゝ切ない、肩がつかへて苦しい〱。

ト苦しき思入。時の鐘。花道より座頭こぶ市、安下駄を穿き笛を吹きながら出て、

こぶ　按摩鍼の療治。

ト呼びながら舞臺へ來る。十兵衞聞付けて、

十兵　丁度いゝところへ按摩が來た、餅屋は餅屋だ、揉ん

で貰ふがいゝ。おい按摩さん〳〵。
こぶ　はい〳〵、お呼びなさいましたか。
十兵　おい此方だ、療治をしてくんな。
しづ　（これを聞いて、）いえ〳〵旦那殿、私や按摩と聞いてもぞつとする。止しにして下さんせ〳〵。
十兵　何だ、按摩はいやだ、そいつアおえねえ、折角呼んだからちつとばかり。
しづ　いえ〳〵、どうぞ堪忍して下さんせ。
十兵　さうか仕方がねえ。おい按摩さん、折角呼んだが病人が厭だといふから、氣の毒だが錢はやるから歸つてくんなせえ。
こぶ　いえ私あ錢貰ひぢやあなし、たゞ錢はお貰ひ申しません、然し口明だからたゞ歸るは厭でござります、どなたでもようござりますから、ちよつとでも揉ませて下さいまし。
十兵　何だ口明だから、縁起が惡いから揉ませてくれろ、なるほどこりや尤もだ、そんなら仕方がねえ、おれをちつとばかり揉んで下せえ。こちらへはひんなせえ。
しづ　旦那どの、私は座頭さんは見るも厭、そこの障子をしめて下さんせ。
十兵　おい〳〵。（ト屋體の障子をしめて、）今藥ができるから、ちつとの中辛抱してゐるがいゝ。（ト十兵衛二重下手の障子を明け、勝手口へ來り障子を明けながら、）さあ按摩さん、あぶねえよ、手を出しな。
こぶ　はい〳〵、有難うござります。
ト十兵衛按摩を中へ入れ、障子をしめて二重の横手へ出る。この時こぶ市手をひかれながらよき所へ連れられて來る。
十兵　座頭さん、大きに御苦勞、一服お呑みなせえ。
こぶ　（思入あつて、）はい〳〵、お療治をしまつてにしませう。
十兵　さうか、おれも一昨日旅から歸つて、まだ草臥がぬけねえから、足をちよつと揉んで下さい。
ト枕を出して横に寐る。こぶ市足を揉みにかゝる。
こぶ　もし旦那、今御病人があるとおつしやつたが、お上さんでござりますか。
十兵　さうさ、女房が病氣で困るのさ。
こぶ　それは嘸お困りでござりませう、そして一昨日旅から歸つたとおつしやりますが、どちらへおいでなさりました。

十兵　據ねえ用で、上方へ行つて來ましたが、一人旅といふものは面白くないものさ。
こぶ　いえも、一人旅は不自由なものでござります。
十兵　座頭さん、お前上方の方へ行きなすつたことがあるかえ。
こぶ　はい、上方まではまゐりませぬが、駿河までは參りましたよ。（ト言ひながら段々強く揉む思入。）
十兵　あいたゝゝゝ、痛え〳〵。座頭さん、もうちつと靜かに揉んで下さい。
こぶ　はい〳〵、かしこまりました。
十兵　座頭さん、お前駿河はどこまで行きなすつた。
こぶ　はい、宇都谷峠まで行きました。
十兵　や、（トびつくり思入、こぶ市膝のあたりをぐつと摑む思入。）あいたゝゝゝ、あゝ痛え〳〵。（ト飛び起き、）座頭さん、お前めつぽふかいな、ひどい揉みやうをするぢやあねえか。
　ト薄ドロ〳〵、寐鳥、凄き合方になり、こぶ市スッポンにて文彌に替り、足を撫つてゐる十兵衞の手をきつと取つて、
文彌　まだ〳〵こんなことぢやあない、骨は骨、皮は皮、揉んで〳〵揉み殺すのぢや。（トきつといふ。）
十兵　（見ておどろき、）やゝ、唯の座頭と思つたに、扨はそちは文彌だな。
文彌　宇都谷峠の、恨みの一念思ひ知れ。
十兵　おゝ尤もだ〳〵、主人の爲めに據なく、そなたを殺して取つた金、口惜しからうが文彌殿、親兄弟もあらうから、その人達へ恩金は、利に利を添へて戻さうから、こらへて成佛して下され。
文彌　いゝや浮ばぬ、成佛せぬ。恨みを晴らさでおくべきか。
十兵　おゝ尤もだ〳〵、許して下せえ。こらへて下せえ、南無阿彌陀佛々々。
　ト大ドロ〳〵にて文彌十兵衞をさいなむ思入あつて、文彌後退りにて消える。十兵衞ハアッと苦しみ倒れる。暖簾口より彥三藥鍋を持ち出で、思はず十兵衞に躓きびつくりして、
彥三　や、お前は兒者人、どうなされた。もし兒者人、兒者人。（ト引起す、と十兵衞心附きて、）
十兵　南無阿彌陀佛々々々々。（ト眼を閉ぢて思入。）
彥三　是さ兒者人、氣をしつかり持たつしやりませ

十兵（眼を開きて、）おぬしは彦三か。
彦三　兄者人、どうなされました。
十兵（氣を替へて、）おれとしたことが、女房の介抱でがつかりして、持病の積が起つたのだ。
彦三　さうして、もう積はなほりましたか。
十兵　もうさつぱりとよくなつた。
ト言ひまぎらしてほつと思入。
しづ（障子の内にて、）あゝ切ない、苦しや／＼。
彦三　あれ、姉者人が。
十兵　また苦しいか。（ト障子を明けて介抱し、）これもやつぱり文彌が祟り、いやさ、たゝいてやらうか。あゝ情ないことだなあ。
ト時の鐘、ばた／＼になり、花道より番頭丈八走り出來り、舞臺へ來て裏口の障子へ行當り、
丈八　あゝ、居たわ／＼、これ／＼、こゝを明けて下さい下さい。
彦三　はい／＼、どなたぞか、明いてをります。（ト行つて障子を明ける、これにて丈八ばつたり内へ倒れる。）えゝびつくりしました。や、そなたは丈八ぢやないか。
丈八　はい、丈八でござります。あわてゝさつしやりまするな／＼。あいたゝゝゝ。
十兵（も來て、）これは丈八殿、何の御用で今時分。
丈八　今時分來たその用は、大變でござる／＼。
兩人　なに、大變とはどのやうなこと。
丈八　大變といふは、娘御のお駒さんが才三の家で、主人の息子筑田喜藏と中間の小兵衛を殺し、自分も喉を突いたれど急所をよけて死にきらず、御役人方へ委細の樣子を白狀した故、疵人なれど主殺しなればお駒さんは囚人白木屋の家は亂ちき騷ぎでござるわいの。
十兵　そんなら、お駒どのは主殺しの囚人とな、やゝゝや。
彦三　詳しい仔細は知らねども、かういふ事のないやうにと、此の身一つに思案を極め、離別したのも水の泡となつたか、ほい。
ト當惑の思入。ドロ／＼になり、文彌行燈よりよろしく現はれる。おしづこれを見て、
しづ　あれまた座頭が、あれえ。（ト苦しみ、どうとた
彦三　なに、座頭とは。
ト彦三の眼には見えぬ思入、十兵衛駈けより介抱し、
十兵　これおしづやアい、氣をたしかに持つてくれ。これ、

弟、水を一口、早く〳〵。

彦三　はい〳〵。

ト彦三茶碗へ手桶の水を汲む。此時丈八何心なく文彌を見附けて、

八丈　や、幽靈だ。

ト着物を頭からかぶる。これにて彦三持つてゐる茶碗を落す。十兵衛文彌を見て手を合せるを、一時に木の頭。

彦三　とんだ、粗相をした。

ト合點の行かぬ思入にて四邊を拭く。十兵衛は口の内にて念佛を唱へる。文彌は段々正面の壁へ薄くなる仕掛け、これをキザミ、大ドロ〳〵にてよろしく、　ひやうし幕

五幕目大切

柴井町伊丹屋の場
品川宿海禪寺の場
鈴ケ森提婆殺の場

（淨瑠璃）古今彦三の名を假宅に　心中玉露白

小袖（宮本浦中）

（役名）——伊丹屋十兵衛、提婆の仁三、文彌の亡靈、白木屋彦三、尾花才三郎、文彌母おりく、桂庵婆お百、彌次馬の喜太、居酒屋の若い者彌太、丁稚三太。十兵衛女房おしづ、佐野松屋古今等。

（伊丹屋の場）——本舞臺上手へ寄せて三間常足の二重、正面紺暖簾左右腰羽目、此上に短冊の貼出し、下手九尺平舞臺、酒肴と書きし三尺の立障子、内に小皿物を載せし臺、盤臺に鮪いどて、軒口に河豚、蛸などをつるし後に酒樽。舞臺前下手に三人の仕出し、○△□床几へ腰をかけ、小皿物にて酒を吞みゐる。下手に番公肴をこしらへゐる。若い者彌太、丁稚三太角盆を持ち給仕をしてゐる。總て柴井町居酒屋の體。角兵衛獅子にて幕明く。

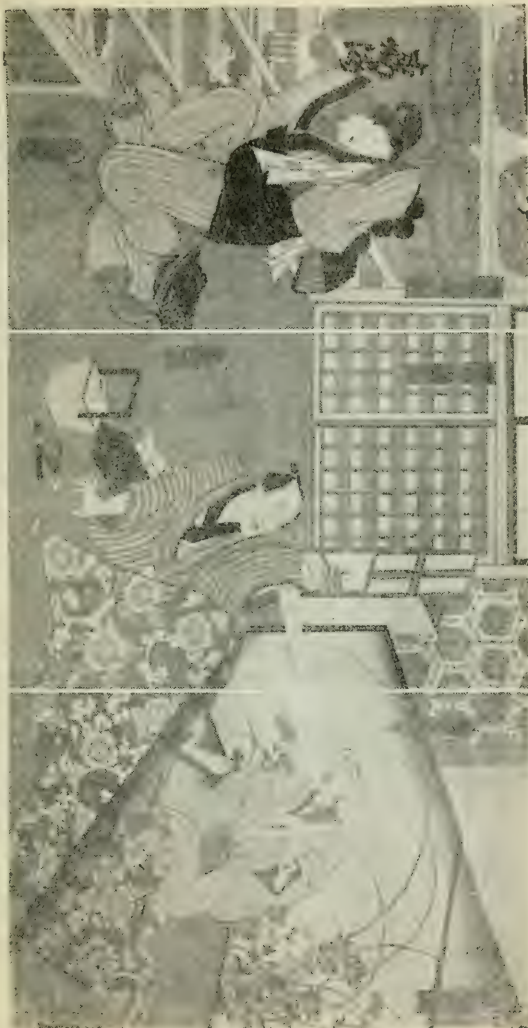
彌太　おわいひ〳〵。

○　おい〳〵小僧どん、ぬるいから熱くしてくんな。

三太　はい〳〵。（ト燗銚子を取つて、）中臺のお二人さん、お燗なほしだよ。

△　おい〳〵若い衆、鮪鍋をもう一枚と、刺身を少しばか

文彌の亡靈（龜戸豐國筆）

おしづ（菊五郎）　　重兵衞（龜藏）　　文彌の靈（小團次）

り作つてくんねえ。
彌太　はい／＼入口のお二人さん、鮪鍋が一枚にお刺身が一人前出ます。
番公　あい／＼、鮪鍋はお二人前だの。
彌太　知れたことだアな。
○　もし、お前さん方は、大師へでもおいでなすつたのかえ。
△　いえ、私等は海晏寺の紅葉を見に行きましたのサ。
□　今日はお天氣がいゝから、嘸賑やかでござりましたらう。
△　いやも、大そう人がでました。
○　いや、大そう人が出るといへば、四五日後に材木町の白木屋のお駒といふ娘が、引廻しに出たといつて、見物が大そう噂をしてをりました。
△　私なぞも見に行きましたが、お慈悲なもので、死んだ故捨札ばかりで濟みました。
三太　もし、その白木屋はこつちの家の親類でござります。
○　はあゝ、こつちの家の親類か、めつたなことは言はれないものだ。
△　惡く言はねえでよかつた。

彌太　はい、お肴ができました。
三太　お燗もよろしうござります。
ト彌太鍋と刺身を持つて來る。三太鐵銚子を持つて來る、皆々捨ぜりふにて酒を呑みゐる、甚九の合方角兵衛獅子の鳴物にて、花道より提婆の仁三そぼろなる裝の半纏を引かけ、額に疵のある惡漢の拵、酒に醉つたるこなし彌次馬の喜太同じくそぼろなる裝、素面にて仁三を肩へかけて出來り、
仁三　これ、そんなに引張るな。下馬の直が下らあ。
喜太　あぶないから一緒に來いといふことよ。
仁三　べらぼうめ、おらあ醉やあしねえ。（ト言ひながら居酒屋を見て）こう待ちや、こゝで一ぺえやつて行かう。
喜太　今角力酒屋で呑んで來たばかりぢやあねえか。もういゝ加減にしや。
仁三　酒ばかりはいゝ加減にできるものかえ、もう五合引つくり返さにや浸み足らねえ。
喜太　おらあ呑まねえから堪忍してくれよ。
仁三　手前呑まざあ、飯でも喰はツし。
喜太　先へ行くのにおそくならあ、歸りにしやな。
仁三　まあ、いゝから入れよ。

彌太　あゝ、おわらひ〳〵。（ト呼立てる）
仁三　何だ、おわらひ〳〵、べら棒め、をかしくもねえことが笑へるものか。
彌太　いえ左様ぢやございませぬ、手前は居酒屋でございますから、おはひりなさいましと、申したのでございます。
仁三　入れと言はなくつても、今入るとこだ。
彌太　店は込みやつてをりますから、奥へいらつしやりませ。
仁三　大きにお世話だえ、どこへ行かうとおれが勝手だ。
トひよろ〳〵する。
喜太　これサ、店は込んでゐるから奥へ行けよ、若い衆が困らあ。
仁三　手前おつゥ肩を持ちやあがるな。
トひよろ〳〵して○の足を踏む。
○　あいたゝゝ。
喜太　それ見ろ、人様の足を踏んだ。もし、喰え醉つてゐますから御免なさいまし。
○　なに、よろしうございまする。
仁三　よくなくつてどうするものだ。足を出してゐるから踏んだのだ。大事の足なら踏んべしよつて懐へでも入れておけばいゝに。
喜太　これさ、詰らねえことを言ふな。うぬが粗相をしておきやあがつて。もし、どうぞ堪忍して下さいまし。
○　その御挨拶には及びませぬ。ほんの出合頭でございまする。
仁三　おつゥ言やあがるな。
喜太　えゝ、默つてゐろといふに。
ト兩人二重へ上り胡坐をかき、懐から手を出しあたつてゐる。
彌太　御酒はいくつかけませう。
仁三　いくつといつて高が二人だ、四升も五升も呑みやあしねえ。まあ二合かけて下ッし。
彌太　お肴は何にいたしませう。
仁三　何にすると言つたつて、何があるか知れるものか。先づお肴を承はらうか。
彌太　お暖かなものでは、鐵砲鍋に鮪鍋、お刺身に煮肴、はしらのお吸物にはだのぬた、鯨の魚田もできまアす。
仁三　よくしやべる奴だな。もう一ぺん言つて見や。

彌太　お暖かなものでは、鐵砲鍋に鮭鍋、お刺身に煮肴、はしらのお吸物にはただのぬた、鯨の魚田もできまアす。
仁三　先づ、はしらのお吸物にしよう。(ト向うの肴を見て)こう若い衆、向うに吊してあるなア何だ。
彌太　へい、鐵砲でござります。
仁三　お臺場へでも持つて行けばいゝ。(ト又見て)あの隣りの首縊りを見たやうな、赤いものは何だ。
彌太　あれは、蛸でございます。
仁三　なに、蛸だ。(ト目を据ゑて見て)若い衆、あの蛸の足は何本ある。
彌太　御常談おつしやりますな。
仁三　知らねえから聞くのだ、何本あるよ。
彌太　八本でござります。
仁三　疣はいくつある。
彌太　そりやあ知れませぬ。
仁三　分らねえ奴だな。
喜太　手前が分らねえのだ。
仁三　あの柱の脇に立つてゐる、禿頭は何だ。
三太　番公さん、お前を禿頭だとよ。
番公　これでも昔は青かつた。
仁三　おい、昔青い禿頭は、ありやあ何だ。
彌太　あれは番公でござります。
仁三　番公の煮附はできねえか。
彌太　御常談をおつしやりませ。
喜太　これ、忙がしいや、早くさう言つてやりやな。
仁三　それぢやあ先づ、はしらのお吸物に鮪の刺身、鐵砲鍋にはただのぬただ。
彌太　かしこまりました。奥のお二人さんは、はしらのお吸物に鮪のお刺身、鐵砲鍋にはただのぬたで二合かゝりますよ。
番公　あい／＼合點だ。
仁三　おい／＼若い衆、この野郎は呑まねえから、飯をいつしよに持つて來て下ツし。
彌太　はい／＼。
喜太　おい飯はいゝよ。おらあ今喰つて來たから。こう手前豪氣に手を廣げるが、おれの懐を當にするな。おらあ一文もねえよ。
仁三　いゝと言ふことよ。手前にはごは背負はせやあしねえ。落着いて飯でも喰え。

ト彌太吸物刺身などを盆へ載せ、燗銚子を提げ來りて、

駒太　へい、お待遠でござりました。

仁三　待遠どころか、べらぼうに早かつた。

喜太　さあ、おらあ吞まねえから、大きいものでさつさとやれ。

仁三　酒はづれはしねえものだ。一ぺえ吞め。

喜太　吞まねえといふことよ。

仁三　野暮な奴だな。(ト仁三茶碗を出す、喜太ついでやる、仁三ぐつと吞んで)あゝ、いゝ酒だ。(ト刺身を喰ひ)喜太や喰つて見ろ、このきはだはめつぱふにうまい。

喜太　そりやあ芝肴だ、わけはねえ。

彌太　へい、お誂へでござります。

ト河豚鍋を持つて來る。兩人捨ぜりふにて酒を吞む。仕出も此うち酒を吞みながら仁三を見て氣味惡き思入、

仁三　何だ、人の面アぢろ〳〵見やあがつて、おれが面がをかしいか。

喜太　誰も何とも言やあしねえ。

仁三　なに、言はねえことがあるものか。

トこれにて仕出はそこ〳〵にしまつて、

△　さ、おい、若い衆、こゝはいくらだえ。

彌太　三百七十二文でござります。

○　こつちはいくらになるえ。

彌太　四百二十四文でござります。

○　あい、勘定はこゝへおくよ。

△　八文足らないが、一朱でまけてくんな。

彌太　へい、よろしうござりまする。まあお靜かにおいでなさいまし。(ト皆々門口へ出る。)

○　いやも、とんだ生醉が來やあがつたので、うまい酒をまづくした。

△　何だか、風の惡い奴だ。

○　あんな奴には、掛り合はないことだ。

仁三　何だと。

三人　そりや聞えた。逃げろ〳〵。

ト皆々下手へ逃げてはひる。

仁三　此奴らア待ちやあがれ。(ト立ちかゝるを)

喜太　これさ、うつちやつておけよ。

仁三　なに、彼奴らに掛り合ひをつけて、勘定でも吹ッかける處よ。(ト言ひながら酒を吞み、河豚鍋を喰つて)この鐵砲はめつぱふにうめえ、だまされたと思つて喰つて見や。

喜太　おらあ河豚は喰はねえ。
仁三　何故喰はねえのだ。
喜太　命がをしいや。
仁三　しみツたれたことを言ふな。どうで疊の上ぢやあ死ねゝえ身體だ。
喜太　これ、何をいふのだ。（ト喜太仁三の袖を引く、仁三思入あつて、）
仁三　おい〳〵若い衆、もう二合かけて下ッし。（ト燗銚子を出す。）
彌太　はい〳〵。（ト受取り、はひる。）
喜太　まだ手前呑むのか。
仁三　いゝやア、うつちやつておけ。ドレお燗の來る中寐て待たうか。
ト仁三ひどく醉ひし思入にて、下の方へ寢る、喜太思入あつて、
喜太　もし若い衆、堪忍してくんねえよ。ひどく喰え醉つてゐるから。
彌太　いえ、どういたしまして。
喜太　（仁三をゆすぶりて、）これ、起きろよ〳〵、先へ行くのがおそくならあ。起きろと言つたら起きねえか。（ト又ゆすぶり、）いめえましい、とう〳〵寐てしまつた。（ト有合ふ障子の衝立を仁三の前へ引寄せ身體を隱し、）おい若い衆、お邪魔だらうがちつとのうち、こゝへ寐かしておいてやつてくんねえ。おらアちよつと行つて來るとこがあるから、もし此の野郎が起きたなら、先へ行つたといつて、そして勘定を取つてくんなせえ。
彌太　かしこまりました。
喜太　それぢやあ若い衆頼んだよ。
彌太　よろしうござりまする。
喜太　どれ行つて來ようか。（ト甚九の合方にて喜太は下手へはひる。後時の鐘になる。）
彌太　とんだ居殘りをおいて行かれた。（ト表へ思入あつて、）おゝ今の間にすつぱり日が暮れた。
番公　灯りの支度をしたがいゝ。（ト是にて彌太、三太灯棚と店の八間へ灯りを點ける。）今夜は肴がよく賣れたから、もう仕舞つてもいゝのだが、旦那に悪いから看板へ灯りを入れておくがいゝ。
三太　あい〳〵。（ト表の行燈へ灯りを入れる。）
彌太　おい、金公、今夜はたしか湯が早仕舞だつたの。
番公　增上寺で御法事が始まつたから、今夜から早仕舞だ。

彌太 それぢやあ今の中、一風呂へえつて來ようぢやあねえか。
番公 生酔ひはいゝかえ。
彌太 大丈夫、眼の覺める氣遣ひはねえ、もし眼が覺めたら六百二十四文だから、小僧貰つておいてくんな。
三太 あい〳〵。六百二十四文だね。
彌太 忘れるなよ。さあ行つて來よう。
ト彌太、番公の兩人は下手へはひる。
三太 どれ、洗ひ物でもしておかう。
ト三太下手にて徳利、皿などを洗つてゐる。四つ竹節にて花道よりお百肩入の半纏、布子、紺の足袋垢擦りの附きし手拭を被り、桂庵婆アの拵にて、文彌の母おりくを連れ出來り、
お百 をばさん、お前の行く所は向うの酒屋だよ。
りく 左樣でござりますか。
お百 まあ行つて御覽、どんなにいゝお家だらう。(ト言ひながら本舞臺へ來り、)はい、御免なさいまし、おや小僧どん洗ひ物か、嘸冷たからうの。いつもながらよくお働きだ、お前のやうに働く者はこの柴井町に一人もないよ、ほんに小僧どんの親玉といふのだ。また鮪の胴骨があつたら、葱の背みと除けておいておくれよ。ときに旦那はお家かえ。
三太 あい、奥にゐなさるよ。
お百 大門のお百婆アが雇女を連れて參りましたと、ちよつとさう申しておくれ。
三太 あい〳〵。(ト奥へ向ひ、)もし旦那え、よくしやべる桂庵の婆アさんが參りました。
十兵 おい〳〵今そこへ行くよ。(ト合方になり、奥より十兵衞煙草入を提げ出來り、)おゝ、おつかあおいでか。
お百 (腰をかけて、)旦那、此間はお眼にかゝりませぬが、めつきりお寒うなりましてござりまする。お障りもござりませんでお目出度うござりまする。先日は澤庵を有難うござりまする。早速かくやに致しまして、お前さん、親父どんと二人で久しく樂しみましてござりまする。ほんに此間の若い衆はどうでござりまするか、お前さん、ふだんお世話になります旦那の所故、どうぞよい奉公人をと搜しましたところ、お前さん、あの若い衆はまことにまめでそして正直で、お前さん、よく働きます。こちらのお家へ惡い奉公人をお世話いたしては濟みませぬ。まだお前さんお禮も申しませなんだが、先達は親父

どんが溜川までお使に參りましたそのお禮に、お金をお貰ひ申しまして有難うございます。まことにあんなことをなされましては、お前さん、お氣の毒でございまする、まあお聞きなすつて下さりませ、お前さん、御存じのお酒好故お貰ひ申して歸りますとお前さん、直に五合買つてくれと申しますから、お酒は旦那で濟酒でもお貰ひ申して呑むがよい、それよりはそのお金で褌でも買ふがよいと申しましたを、お前さん、たうとうお酒にして了ひました。まことに／＼困り者ぢやあござりませぬか、お前さん、酒を呑むお錢はござりますが、褌を買ふお錢がござりませんで、お前さん、お恥しいことでござりますが、三年この方褌無しでござりまする。お前さん、勿論たゞの褌では間に合ひませぬ。お前さん、越中褌にいたしましても、二布なければできません、お前さん、御存じはござりますまいが、大の疝氣持で、睾丸が大きうござりますから、お前さん。

ト お百首を振り／＼しやべる、十兵衞呆れし思入にて、

十兵 こう／＼おつかあ、もういゝ／＼。なるほど小僧が、おしやべりだと言つた筈だ、實にお前は口まめだ。

お百 いえ／＼、これでも皆さんが、無口だ／＼とおつしやります。

十兵 いや、無口どころか八口位だ、はゝゝゝゝ。

お百 ほんに私としたことが、自分の勝手なことばかり申しまして、お前さんの肝腎のお話をいたしませなんだ此間お頼みなさいました、雇女のよいのがござりましたから、お前さん、直に連れて參りました（ト おりく へ思入あつて）このお婆さんでござりますが、以前は相應に暮したお人でござりますが、お前さん、不仕合せで此間から月雇女に出なさいますが、年をとつてゐなさいます故、臺所の世話はしたくないと申してゞござりますが、その代りお裁縫はどんなことでも出來ますわいな、

りく （思入あつて、）これは／＼旦那樣でござりますか、お初にお目にかゝります。年を取りましてござります故お役には立ちますまいが、どうかお使ひなされて下さりませいな。

十兵 あい／＼。年恰好も丁度よければ、そつちさへよく頼みたい、今言ふ飯を炊いたり、水を汲んだり、臺所の用をするものは他に爲手があるし、又裁縫もたいがい外へ出せば、小僧の仕着衣綻び位はして貰はずばなるまい。唯お前に頼むに內の者が眼が惡い故、手水に行つた

り何やかやするに、男の手では氣がおけて却つて病氣に障る故、その世話をして貰ひたいのだ。

りく　それは嘸お困りなさいませう、私も年久しく眼の悪い者の世話を致しましたが、それは〳〵手のかゝるもの、慣れましたことなれば、ようお世話いたしませうわいなあ。

十兵　どうぞ面倒を見てやつて下さい。都合がよくば、今夜からゐて貰ひたいが、どうだらうね。

お百　直にゐて貰ひたいと、旦那様がおつしやるが、お前の方の都合はえ。

りく　はい、何も用事はござりませぬから、直に居りましてもよろしうござります。

十兵　それぢやあどうぞさうして下さい。

りく　かしこまりましてござります。

お百　これ、をばさん、こゝのお家は大事のお得意、お前氣を附けて勤めておくれよ。お定りは一分二百だが、湯錢はもとより、そりや古いものゝ一枚位は、お心の附かない旦那ぢやあないから、必ず大事に勤めておくれよ。左様なら、明日宿書は持つて上りまする。おや私としたことが、お上さんのお見舞も申さず御免なすつて下さいまし、小僧どん又澤庵の出しおきがあつたら、かいやにするから除けておいておくれよ。をばさん大事にお勤めよ。旦那おやかましう。はい、左様なら。

トお百よろしく思入あつて、花道へはひる。三太後を見送り、

三太　よくしやべる婆さんだ。

十兵　いつもながら幕なしには困る。さあ、をばさん此方へ上んなせえ。

りく　左様なら、御免なされませいな。

トおりくは二重眞中へ上る。

十兵　今聞けば、をばさん、お前も眼の悪い人の世話を、久しくしたと言ひなすつたが、お前の家に眼の悪い人でもあつたかえ。

りく　はい、悴が眼が悪うござりました。

十兵　むゝ、そし息子といふのは盲人かえ。

りく　左様でござります。三つの年に怪我をいたし、兩眼ともつぶしまして、按摩をいたしてをりました。

十兵　して、お前の家はどこだえ。

りく　片門前でござりまする。

十兵　え、〔トぎつくり胸に思ひ當る思入あつて〕して、そ

の息子さんの名は何と言ひなさるえ。

りく　はい、文彌と申しまする。

十兵　えゝ、(トびつくりなし、)思ひがけない。してその息子は。(ト十兵衛は因果が廻り來たかとの思入こ)

りく　(涙を拭ひて、)お話し申すも涙の種、お聞きなされて下さりませ。その悴文彌ことは、しかも昨年十月初め、官位を取りに京都へ百兩持つて上りましたを、今に歸つて來るであらうと一月待ち二月待ち、待つに甲斐ない一年越し、何の便りもござりませねば、占やら巫女やら御鬮籤も幾度か取りましたれど、心の迷ひに生死知らず、その官金も文彌の姉が苦界へ沈めし身の代金、便りに思ふ姉弟二人に別れてその後は、十一になる妹と年老い朽ちし私ばかり、足手纏ひの妹を知邊へ預けて雇女奉公、惜しからぬ身をながらへて、苦勞致すも文彌が生死を聞いて死にたうござります故、旦那樣、御推量なされて下さりませ。(トおりく涙を拭ひゐる。十兵衛術なき思入こ)

りく　あゝ年とりし身に尤もだ。何にしろ氣の毒なことだが、してそのお前の息子どのが、金を入れておいたのは、鬱金か財布かえ。

十兵　はい、私が着てをります、この小紋の餘り切で、財布を縫うてやりましたが、それへ入れてまゐりました。

十兵　(ぎつくり思入あつて、)はあ、小紋の財布か、それぢやあその息子殿は、所詮再び歸るまい、一年この方便りのないは、たしかに所持の官金故、間違ひがあつたに違ひない、旅へ出た日を命日に、訪ひ弔ひをしてやんなせえ。(トホロリと思入、おりくはワッと泣き伏し、)

りく　左樣なら、悴めは死にましてござりませうか

十兵　萬に一つ無事か知らぬが、まあ死んだらうと思はれる

りく　あゝ、自由になりますことならば、此の身と替つてやりたいに、後へ殘るは子供故死ぬにも死なれず憂目を見ますは、何たる因果でござりませうぞ。

十兵　頼りに思ふ子に別れ、嘸お前も便りなからう、ふとしたことで思ひがけなく、さあかうして、雇女におくといふのも、何ぞの縁であらうから、これから此方の家にゐて女房の世話をして下さい。その替りには私がまた、文彌さんになり代りお前の世話をしようから、雇女に來たと思はずにお前の家にゐる積りで、暇があつたら寺詣り物見遊山も氣任せに、行きたい時に行きなさい、小遣錢も上げるから心を樂に持ちなさい。

りく　馳走もない私を御親切に、そのやうに言うて下さる旦那様、嬶や娘が聞きましたら悦びますでござりませう、便りのできますことならば、文彌にもこの事を言うて聞かせたうござりまする。

十兵　あゝ、その文彌さんのことは言ひなさんな。これからお前を親と思つて私が世話をしますから、必ず〳〵案じなさんな。さうしたことなら少しは佛も、

りく　え、

十兵　いやさ、佛いぢりは年寄の役、線香でも上げてやんなせえ。

りく　何から何まで有難うござりまする。

トおりく手拭にて涙を拭ひ、ひれ伏す。十兵衛不便なといふ思入。此の時衝立の蔭に寝てゐる仁三眼を覺めし思入にて、

仁三　あゝ――(ト伸びをしながら起上り、衝立を除けて、)あゝ、好い心持に醉つてぐつすりやつた。小僧、水をいつぺえくんな。

三太　はい〳〵。(ト下手より朝顏茶碗へ水を汲んで持つて來る。)

仁三　(取つて呑んで、)あゝ、うめえ〳〵。(ト呑みほして、)この水の味ばかりア、下戸の奴等に一生知らねえ。(トあたりを見て、)喜太郎め、先へ行きやがつた、おほかた勘定はしやあしめえ。(ト十兵衛に向ひ、)もし、旦那、火を一つ貸しておくんなせえ。

十兵　さあ〳〵、お附けなさい。(ト煙草盆を出す。)

仁三　(雁首で引寄せ煙草を喫みながら、)もし旦那、勘定はいくらでござります。

十兵　はい。これ小僧、店の者は何處へ行つた。

三太　湯が早仕舞だから、拔けない中にはひると言つて行きました。

十兵　あの、それぢやあ、御勘定はいくらだか。

三太　いえ、その生醉の勘定なら、六百二十四文でござります。

十兵　これはしたり、お客様をどうしたものだ。御免下さりませ。形ばかり大きくても、まだ子供でござります。

仁三　なに生醉だから生醉だといふのだ。子供は正直でいい。それぢやあ勘定は六百二十四文だね。

十兵　左樣でござります。

仁三　どうぞ御面倒でも、お剰錢をおくんなせえ。

十兵　はい、二朱でござりますか、一分でござりますか。

仁三　二朱でも一分でもいゝ、金はお前に預けてあらア。
十兵　何もお預かり申した覺えはござりませぬが。
仁三　なに、ねえことがあるものか、去年お前に預けておいた、百兩の中で六百二十四文引いて、殘りをわつちに返してくんなせえ。（トきつといふ。）
十兵　（ぎつくりして、）や、（ト思入あつて、）これ、をばさん、奥に病人一人ゐるから、奥へ行つて世話をしてくんなせい。小僧や、をばさんを案内しろ。
三太　はい／＼。
りく　左様なら、御免下さりませ。（ト合方にて三太先におりく附いて奥へはひる。十兵衞仁三に向ひて、）
十兵　もし、御酒の上かは知らないが、此方に何も預かつた覺えのないに預けたとは、どこで私に預けなすつたのだ。
仁三　何處でもねえ、宇都谷峠で。
十兵　やあ。（トびつくり思入。）
仁三　何と覺えがあらうがな。
十兵　むゝ。
仁三　十兵衞さん、お久しうござりやした。
ト世話に言ふ。

十兵　むゝ、さういふこなたは。
仁三　忘れなすつたか十兵衞さん、去年の十月鞠子の藤屋で簀卷にされて、阿部川へ打ちこまれるを、お前さんの情で其の晩助かつた、私ア提婆の仁三といふ旅を稼ぎの護摩の灰さ。
十兵　（仁三の顔をとつくと見て、）額の疵にその時の面差變つて見忘れたが、言はれて見れば覺えある、鞠子で一つに泊つたお人。
仁三　こゝにお前がゐようとは、夢にもおらア知らなんだ。今日友達の附合で、喰つた上へ又喰ひ、たうとう倒れてお店の邪魔、醉が覺めたか聞いた聲、はて誰だらうと延上り、見りやあ尋ねてゐたお前、どこでどう廻りあふか、悪いことは出來ねえものだ。（ト家の内をぢろ／＼見て、）三間間口の居酒店、思つたよりやあ立派な暮し、これぢやあ金を預けておいても、まあ安心といふものだ。
十兵　最前から聞いてゐれば、二言目には十兵衞に金を預けたと言ひなさるが、私にはどうも合點が行かない。
仁三　とぼけなさんな十兵衞さん、宇都谷峠の辻堂でうめえ仕事をしてゐながら、知らねえ顔をしなさんな。
十兵　宇都谷峠の辻堂でうまい仕事をしたなぞとは、そり

やあいつたい何の事だ。
仁三　何のこツたもねえものだ。しらで言つたらお前の爲めに惡からうと思ふから、隱してやるのにそつちから、白ばツくれりやあ言つて聞かさう。あの晩藤屋を追出され。せう事なしに宿はづれの賽の神の古宮でごろりと寐たが寐附かれず、煙草をくらつてまじ／＼と、夜の明けるのを待つところへ、通りかゝつた二人連、ばれた仕事の埋草に、覗いて見りやあこなたと座頭、こいつアおれをはく氣だなと、後から附いて行つて見りやあ、情ごかしで峠へ連出し、ばつさりやつて而も百兩、護摩の灰も及ばねえ素人衆にやあいゝ肚胸だ、長い短い言はねえから、山分けにして五十兩、きれいにおれにくんなせえ。
十兵　又しても／＼、此の身に覺えもないことを、こりや言ひかけをさつしやるな。
仁三　むゝ、それぢやあお前はどうあつても、知らねえと言ひなさるのか。
十兵　さあ、知らぬことは何處までも。
仁三　いゝや、知らねえとは拔けさせねえ。たしかな證據を見せてやらう。
　ト仁三腰より夾の提煙草入をとつて、十兵衛に突きつける。十兵衛びつくりして、
十兵　や、その煙草入は。
　ト取りにかゝるを、仁三持ちかへて、
仁三　どつこい、それから御覽じろツさ、黑棧留の三度形、而も金具は八重酸漿、定紋附の道中提、この煙草入はお前のだらう。
十兵　その金物はいくらもある、鹽町仕入れの安煙草入れ、こりやあ世間にまゝある品。
仁三　それぢやあ、これも知らねえとか。
十兵　この十兵衛が所持といふ、たしかな證據のないものを。
仁三　よく知らねえといふ人だ。こう、これを見な。（ト煙草入の段口より請取を出して）此の煙草入の段口に、入れてあつたは京から江戸へ、手紙を出した島屋の請取り、名宛は伊丹屋十兵衛樣、かういふたしかな證據があつたら、知らねえとは言へめえが。
十兵　むゝ、（トぎつくり思入あつて）八重酸漿の紋附は鹽町仕入の金物故、私ばかりとも言へないが、その請取があるからは、いかにも私が煙草入、したがそりやあ京から歸りに、たしか伊勢路で落しました。

仁三　その落したといふのが、もう目串の拔けねえ初まりだ。いくらこなたが白をきつても、地藏の顔も三度形、この飛脚屋の請取ぢやあ知らねえとは言へめえが、後前揃はぬ言葉の文、夢か現か宇都谷でいかに座頭を殺せばとて、人を盲目にした仕方・所に蔦の細道だがさりとは太え膽ツ玉、夜盜の上に人殺し、その兇狀も八重腰溪、この段口の上らぬ中命替りの煙草入、五十兩ぢやあ安いものだ、默つて言ひ値で買ひなせえ。

　トきつといふ十兵衛思入あつて、

十兵　そりやあ落した煙草入を、拾つてわざ〳〵この江戸まで、持つてござつたこなさん故・それ相應の禮ならばしまいものでもないけれど、身に覺えねえ人殺し、泥坊なぞと脅されてはその禮さへもできませぬ。といつたらそれを證據にして、訴人をすると言はれうが、私は兎もあれこなさんは、商人めかして旅かせぎ、叩いたならばどのやうな埃りが立たうも知れぬ身の上、いらざる人の世話よりも、おのが頭の護摩の灰、追つた方がよささうなものだ。

仁三　（尻を捲り、十兵衛に詰寄り、）やかましいやい、默りやあがれ。そりやあ汝が言はねえでも江戸を喰詰め旅へ出て、護摩の灰をするからア、夜盜かッさき家尻切り時代な文句ア言ひたくねえが、暗え所へも幾度か、ひゞあかぎれの切れた身體、どうで始終は刀の錆、犬の餌食になるおれと、おぬしア一緒に入る氣か　ト手強く言つて氣を替へ和らかに）そりやあ惡い了簡だ、譬にもいふ此世の地獄、素人と違つて私らア、行きやあまんざら猫目通りで、干物の頭を嬉しがり、噛おるやうなこけでもねえ、娑婆にゐるより樂々と一疊敷に住居して、髪は日髪にしいつけその掛つた着物を着る株だが、それでも行く氣は少しもねえ、ましてお前は素人のこと、こゝあ一番考へものだぜ。（ト和らかに十兵衛の顔を見る、十兵衛ちつと思案の思入、仁三又手強く、）これ默つてゐちや分らねえ、否とか應とか挨拶しろえ、背負つて立たれぬ兇狀持でも、うぬ等に頭を押へられ此のまゝ素手ぢやあ歸られねえ。さういふ羽目になつたからにやあ、汝が惡事を言ひつけて案内がてら一緒に行かう。おれが身體を捨てたところが高が無宿の喰詰者、三間間口の居酒店奉公人の四五人も、使ふ旦那と板附に列んで掛りやあ本望だ。さあ、この二品を證據にして訴人をするぞ、覺悟しろ。

　ト仁三きつとなつて立上る、十兵衛思入あつて、

十兵　そんならどうでもこなさんは、その二品を證據にして、この十兵衞を訴人する氣か。
仁三　知れたことだ。(ト十兵衞を見る。十兵衞當惑の思入、仁三思入あつて和らかに、) とさあ見ず知らずの者ならば、言はにやあならねえところだが、鞠子の宿で命をば助けられたお前故、打明話しをしなさりやあ、殺した科も私が背負ひ、五十の所は二十でもうんといふのが根が江戸ッ兒、今日ア私も喰詰めて長く江戸にもゐられぬ身體、九州路に知邊があるからそれを賴つて行く積り、何をいふにも路用に困り、どうしようかと思ふ矢先、思ひがけねえお前に逢つたは、こゝで路用を借りろといふ、天道樣の言はゞお指圖、寐覺の悪いこの二品、いくらかくらは言はねえから、路用の金を貸して下せえ。
十兵　むう、すりや、鞠子の宿で逢つたを緣に、路用を貸してくれとあるなら、そりや貸すまいものでもねえ。
仁三　そんなら貸してくんなさるとか、そいつア有難い。首尾よくそれで九州まで、脫れて行きやあ仕合せだが、もし又途中で捉りやあ宇都の谷峠で座頭を殺し、金を取つたも私が仕業と、どうで斬られる身體だから、御恩送りに背負つて行きやす。その替りにやあさうなつたら、見舞くらゐは入れてくんなせえ。
十兵　何にしろこなさんも、いつがいつまでさうしてゐたら、トゞの仕舞は身の詰り、これから下へ行つたなら心を入替へ堅氣になり、生業でもさつしやるがよい。澤山のことはできまいが、少し位は用立てませう。
仁三　そりやあ有難うござります。實に私も九州へ行きやあ堅氣になる氣だが、持つて生れた病ひ故又もや彼方で悪事をして、江戸へ逃げて出て來たら、お邪魔ながら二階へでも匿つておいてくんなせえ。その時必ず十兵衞さん、見ねえ顏はならねえよ。
十兵　そりやあ私も男だから、碎けてお前が賴みなさりやあ、世話をしめえものでもない。
仁三　さうお前が言つてくんなさりやあ、下へ行くにも氣が丈夫だ、善は急げといふからにやあ今夜直に立ちたいが、先立つ物は路用の金、二三十兩貸してくんなせえ。
十兵　かうなつた上は得心づく、いかにも貸して進ぜませうが、生憎金が今手許に。(ト言ひかけるを、)
仁三　いゝ常談を言ひなさんな、この屋臺骨で二十や三十、なにねえことがあるものか。
十兵　さあ、見かけは五十や百兩には困らぬ顏をしてゐて

も、内證で質におくのが商人、二季の拂ひや五節句に困る時には神奈川の、伯父のところで融通をすれば、旅へ出かけを幸ひに、私と一緒に神奈川の伯父の所まで行つて下さい。三十兩が五十兩でも金を借りて進ぜませう。

仁三　そりやあ思召は有難いが、神奈川までは一晩泊り、お前に足を運ばすのが。

十兵　丁度ほかに用事もあれば、今夜の月を幸ひに、これから行つたら黎明には、神奈川迄は行かれよう。

仁三　それぢやあお前に旅立を、遮られて行くやうだ。

十兵　まあ何にしろ支度をする中、一ぺいやつて待つて下さい。

仁三　丁度さつきの持越しで、熱くしてやりてえところだ。

十兵　酒も肴もそこにあるから、心置きなく呑みなせえ。

仁三　そいつは何より有難い。（ト十兵衞仁三を切つてしまはうといふ思入にて立上り、）

十兵　その呑む酒が。（ト末期の水といふ心、）

仁三　え、（ト振返り顏を見合せる、十兵衞氣を替へて輕く、）

十兵　醉はつしやんなよ

ト唄になり兩人よろしく、此の道具廻る。

（伊丹屋奥の場）、一本舞臺三間の間、平舞臺、正面暖簾口、上手は佛檀、地袋戸棚、下手鼠壁、上手折廻し障子屋體、いつもの所門口、下手勝手口、こゝにおしづ眼病みの體にて床の上に夜着にもたれてゐる。おりく背中を擦りゐる、此の見得にて道具留る。

しづ　もし、をばさん、大きに開いて來ましたから、もうようござんすわいな。

りく　そのやうに御遠慮なされましては、却つてお目にさはりますわいな。（ト擦りながら、）してまあ、あなたは何日からして、このやうにお煩ひなされましたぞいな。

しづ　さあ、忘れもせぬ去年の十月、而も二十日の明方より風邪を引いたが初にて、一年あまりのぶら〳〵病ひ、かてゝ加へて風眼にて、此間より兩眼とも、明くことならぬ盲目同然。

りく　それに嘸まあ、御不自由でござりませうわいな。

しづ　今聞けばお前の息子さんも、眼が不自由でござんしたさうな。

りく　左樣でござります。三つの年に目を潰し、長々苦勞

おかけし上へ、行方知れずになりましたが、大方死におましてござりませう。

しづ　頼りに思ふ子に別れ、無力なうござんせうな。

りく　御推量なされて下さりませいな

トやはり合方にて、奥より十兵衛出來りて、

十兵　おゝ雇女のをばさん、御苦勞であつた。つい忙しいので忘れてゐたが、まだ藥が一帖殘つてあつた、どうぞ煎じてくんなせえ。

りく　かしこまりましてござります。煎じやうは常の通りでござりますか。

十兵　お定りの一ぱい半入れて、一ぱいに煎じるのだ、生薑が二片入りますよ。

りく　はい〳〵。どれ、お煎じ申しませうわいな。

トおりく枕頭にある藥包を持つて奥へはひる。十兵衛おしづの傍へ來て、

十兵　おしづ、どうだ少しはいゝか。

しづ　はい、大きによろしうござりますわいな。

十兵　そりやあ何にしてもいゝことだ。そりやあさうと、おれは今夜急な用で神奈川まで行つて來ねばならぬ故、家を氣を附けてくれよ。

ト戸棚より紺の脚絆、一腰を出し、脚絆を穿きかける。おしづこれを聞き扨はといふ思入あつて、

しづ　もし旦那え、今夜神奈川へおいでなさんすは、どうぞ止しにして下さんせいな。

十兵　いや、おれも夜る夜中行き度くもないが、是非行かねばならぬことだ、丁度雇女の來たを幸ひ、あのをばさんに頼んでおけば、何も不自由なこともあるまい。直歸つて來るから氣を附けてゐてくれ。

しづ　いえ〳〵どうあつてもお前さんは、片時も放されぬわいな。

トおしづ側ひ寄り、身拵へする十兵衛の袖を捉へ留める。

十兵　それだといつて、免れられない急な用で行くことだ何も女郎買ひにでも行くといふのぢやあなし、わる留めをするにやあ及ばない。

しづ　いえ〳〵留めねばならぬわいな、それとも達つて今宵の内行かねばならぬことならば、私もいつしよに連れて行つて下さんせいな。

十兵　そりやあおしづ分らねえといふものだ。達者なものなら知らないこと、病人を連れて何處へ行かれるもの

だ。

しづ　（むつとせし思入にて、）なるほどさうでござんせう。病みほうけた私をば連れて行く氣はござんすまい。

十兵　こりやあ汝あ、あぢなことをいふなア。

しづ　さあ言はねばならぬ十兵衞殿、お前は私を置き去りに捨てる心でござんせうがな。

ト　きつと言ふ。

十兵　（思入あつて、）何を馬鹿なことをいふのだ。今でこそ女房なれ、以前は恩あるお主の娘御、假令どんなことがあらうとも、汝を捨てゝ濟むものか。

しづ　いえ〳〵、さうではござんせぬ。お前は捨てる心でござんす。

十兵　とは又何故。

しづ　お前の心が水臭い故。

十兵　なに、水臭いとは。

しづ　連れ添ふ女房の身の大事、なぜ明かしては下さんせぬ。

十兵　何と言やる。

ト　稽古笛の入りし合方になり、おしづ探り〳〵佛檀の下段より小紋の財布を出し、

しづ　お前の心が水臭いと、いふのは卽ちこれでござんす。

ト　財布を十兵衞の前へ出す、十兵衞びつくりして、

十兵　やゝ、これをどうして。

ト　思入、おしづ思入あつて、

しづ　いつぞやお前が上方から戻つてから、佛檀の下段は決して明けるなと、言はしやんすほど見度うなり、夫の言葉を背いてはそでないことゝ思ひながら、お前の留守に下段の內明けて見ればこの財布、何故これが見せともないか不審な事とそのまゝに、樣子も聞かず二年越し、最前按摩女のおばさんが話を聞けば財布の合紋、扨はいつぞや上方にて調達なせしといふ金は、眼かいも見えぬ文彌殿を。

十兵　あゝ、これ。

ト　仁三、おりく〳〵憚る思入、おしづ小聲にて、

しづ　お前は殺して取らしやんしたかと、ぞつと身の毛も立つ怖さ、隱すことほど現はるゝと、お前の命にかゝはる財布、絡む紐の女房に何故隱しては下さんす、現在殺せし文彌殿の母御が來た故身の大事と、眼界も見えず病みほうけし私を捨てゝ逃げようとは、思へば情ないこと

おやなあ。

卜おしづは十兵衞に縋り泣く、十兵衞は表と裏へ憚る思入あつて、

十兵　その恨みは尤もだが、これには深い樣子のあること、仔細をいふにもこの財布、裏と表に鵜の眼鷹の眼、逃げも隱れもせぬほどに、今夜一夜やつてくれ、あとでとつくり仔細を話さう。

卜言ふにも構はずおしづ十兵衞を捉へゐる。合方段々凄みになり、おしづへ文彌の亡靈の乘りうつりし心にて、十兵衞を恨めしさうに見上げて、

しづ　えゝ恨めしい、お前はなあ、私がこの眼の潰れしも元はと言へばお前故、文彌殿がいくせの思ひで調へたりし官金を、取らうばかりに邪慳にも宇都谷峠で殺害なせし、その一念に此の身の苦しみ、而も十月二十日の夜、明方近き小夜風にふるへ附しが病の因、つひにこの眼の潰れしも文彌殿の一念で、わが身を苦しめこなさんにみじめを見する怨靈の祟り、晝夜六度の熱の差引、骨は骨皮は皮、揉み碎かるゝ苦しみも、これも誰故こなさん故、えゝ恨めしい十兵衞殿。

卜おしづ物凄くいふ、十兵衞ぞつとせし思入にて、

十兵　あゝこれ、おしづ何をいふのだ、そなたは熱に浮かされたのか。

しづ　何の熱に浮かされよう、大事の／＼夫故、片時こなたの傍放れず、みじめを見せねばならぬわいなう。

十兵　えゝ、病ひの業とは云ひながら、つまらぬことを言つてくれるな。

卜十兵衞おしづをぢつと抱きしめ、仁三とおりくへ憚る思入、おしづ振拂つて立上りきつとなり、

しづ　いゝや言はねば腹が癒ぬ、宇都谷峠で文彌殿を、殺害なせしは伊丹屋十兵衞。（卜言ひかける。）

十兵　（おしづの口を押へて、）えゝ又しても入らぬ口、此身に覺えもないことを、夢か現か情ない。

卜ぢつと思入、おしづ振拂ひ、

しづ　十兵衞は、人殺しぢや／＼。

卜これにて十兵衞捉へゐるを振拂ひ、ちよつと立廻つておしづの口をぐつと押へ、

十兵　あゝ、お主の娘でなくばなあ。（卜おしづ十兵衞の手を振拂はうとするを、十兵衞抱締るはずみに口を押へし手過つて喉へかゝりぐつと締める。これにておしづ眼を明き苦しみ十兵衞をきつと見る。十兵衞びつくりし、

やゝ、こりや女房を。(ト手を放す、おしづよろ〳〵としてよろしく倒れる。)手が廻つてか敢ない最期、ホ、ホイ。

ト十兵衛びつくりしてどうと倒れる。

仁三　(奥にて、)十兵衛さん、まだかえ。(ト十兵衛この聲を耳にし、二枚折屏風でおしづを隠し、)

十兵　あい、今そこへ行きますよ。(トばた〳〵にて、奥より彌太走り出來り、)

彌太　もし旦那、雁女婆が裏口から、血相かへて駈出しました。

十兵　扨は大事だ。

彌太　(屏風の内を見て、)や、こりやあお上さんが。

十兵　あゝこれ、(ト抑へて囁く。)

彌太　すりや、雁女の跡追つかけ。

十兵　ちつとも早く。

彌太　合點だ。

ト時の鐘にて、彌太逸散に花道へ走りはひる。奥より仁三出來りて、

仁三　さあ、支度がよくば行きやせうぜ。

十兵　大きに待遠であつた。

ト脇差を取つて立上る。此時薄ドロ〳〵にて上手障子屋體へ座頭の影うつる。仁三見て、

仁三　や、あの人影は。

十兵　(見て、)行燈の破れさ。

ト行燈をぐるりと廻す。破れ穴あり、これにて人影消える。

仁三　どうやら座頭に。

十兵　え。

ト仁三ぞつとして身震ひをする。これといつしよに、十兵衛脇差をしやんと差す。これを道具替りのしらせ。

仁三　あゝ、風でも引かにやあいゝが。

ト仁三尻をぐるりと捲り、小楊枝を使ふ。十兵衛屏風の内を見て愁ひの思入よろしく。時の鐘の送りにて、此の道具廻る。

(品川街海禪寺の場)――本舞臺三間正面黒幕、卒塔婆を結込みし玉椿垣、正面低き草土手、種々の石塔上手に小高き石地藏、草井戸柳の立木、舞臺上下、眞中に石塔、下の方草土手の淨瑠璃臺。總て南品川海禪寺墓所の體。雨車雷の音にて道具納まる。とばた〳〵にて花道より古今島田鬘、白の小袖、淺葱

のしごき赤合羽を着て竹の笠をかざして出る。あとより彦三同じく白の小袖淺葱の帶おしよぼからげ、毛氈を肩へかけ俵を返り走り出る。と突然ドンと落雷のしたる音して舞臺の柳の木に火花を散す、古今花道へどうと倒れる、彦三介抱して、

彦三　古今、心はたしかか。

古今　彦三さん。

彦三　これ。

ト留める。これより富本連中の淨瑠璃になる。

〽心中と噂を白の晴小袖、帶も淺葱の縁ぞと放れぬ手と手彦三が、肩にかけたる毛氈は何處やら寒き秋の雛、古今の髮も寐亂れしよさの枕にひゞきたる砧の槌も末枯れて、葉末に消ゆる草の露、置きまどはせて佇めり。

ト兩人よろしく舞臺へ來る。

これ、古今、恐しい今の雷で、持病の積でも起りはせぬか。

古今　いえ〳〵、どうで死ぬる此身なれば、怖いことはござんせぬ。

彦三　思へば浮世に捨てられた二人が身の上、死出三途の晴着にと、對に仕立てた白小袖。

古今　蓮の臺で女夫の樂しみ、早う殺して下さんせいなあ。

ト思入。本釣鐘。

〽更渡る鐘の音くらき夜嵐に今死ぬる身も肌寒く、ぢつと寄添ふ眼もうるみ、愚痴な女に未練な男、こんな因果な惡縁を出雲とやらの神さんが結び違へて馬鹿らしい。添ひ遂げられぬ仇仲で何故このやうに可愛いと、力の限り抱きしめ涙果てしはなかりけり。

彦三　今更いふも愚痴なことだが、白木屋を家出せう爲め心にもない吉原通ひ、ふつと上つた佐野松屋、そなたの顏を見てびつくり。

古今　いつぞや芝で弟の、難儀を救うて下さんしたその時に、いとしらしい親切なお方ぢやと、思ひこがれた彦三樣。

彦三　樣子を聞けばそなたの身の代百兩の、金を持つて出た弟の、文彌の行方を尋ぬる力と賴まれ、退くに退かれぬ浮世の義理。

古今　馴染重ぬる其中に、色や浮氣を取りおいて、眞實惚れて片時も、思ひきられぬ互ひの因果。

彦三　白木屋を離別したその後は兄貴の家に掛り人、金のできやう當もなく紋日物日もそなたの身揚り。

古今　呼ばるゝだけは呼びとめても、お前と深うなつてより、馴になるお客は放れ、果は二人が身の詰り、彦三の生死も定まらず、生きて甲斐ない私が身の上。

彦三　思案工夫もせん方盡き、一緒に死なうと覺悟を極め、この品川の海禪寺は彦三の菩提所、こゝで死ぬるが本望故、弟子になると嘘言うて、座敷を借りて最期の支度。

古今　首尾よく廓を拔け出て、一緒に死ぬのは嬉しいが、後に殘つた母さんに歎きをかける不孝の罪。

彦三　ふとした事の義理詰から、かうした仕儀になつたのも、

古今　前生からの約束事。

彦三　思へば、深い。

兩人　惡緣ぢやなあ。

ヘ顏と顏とをすりよせて、そもや初會の其夜から、男ばかりか氣にほれて、やるせないほど呼びたさに、焦れてかけたる待人の來ぬに木櫛の恥かしく、心で解けた結島田、まだ年のある其中に女夫にならばどうしてと、算へ暮して灸すゑる日まで互ひに言交し、悦ぶ甲斐も情なや、冥土とやらへ早く行て添ひとげるのが樂しみと、思ひつめたる女氣に男心の亂れ燒刄になまる風情なり。

トよろしく思入あつて、

彦三　よしなき歎きに時移り、人目にかゝらば互ひの身の上。

古今　早うお前の手にかけて下さんせいな。

彦三　覺悟はよいか。

古今　南無阿彌陀佛。

ヘいざと二人が座をしめて、覺悟ながらも憐れた同志、輪廻の絆しめからみ、これが此世の別れかと、またもや手に手散る月の雲間に浮名殘るらん。

トこれにて富本連中を消し、彦三は一腰を拔き、

彦三　南無阿彌陀佛。

ト古今の胸先を突かうとする。ドロ／＼にて彦三の腕痺れる思入、彦三又突かうとすると、ドロ／＼にて兩人ちよつと放心する。正面の石塔の水鉢より、文彌の亡靈現はれ、陰火燃える。これにて兩人心附き、四邊を見て、

はて心得ぬ。思はず腕の痺れしは、やつぱり未練の氣おくれか。覺悟はよいか。

古今　さあ／＼早う。

彦三　南無阿彌、

ト又突かうとする。ドロ〳〵にて文彌の亡靈刀を留める思入。彦三思はず刀を落すを古今見て、

古今　未練でござんす彦三さん、死におくれる其中に、追手の者に捕へられなば二人の恥、いつそ私が。

ト落ちたる刀を取つて死なうとする。始終ドロ〳〵、文彌留める思入。古今刀を落す、彦三見て、

彦三　やゝ。最期を急ぐ際となり、二人の腕が痺れるは。

兩人　はて合點の行かぬ。

ト心得ぬ思入。文彌の亡靈思入あつて、

文彌　おなつかしや姉者人、緣につながる彦三殿、死なうといふは無分別、こゝばかりに日は照らず、何處の裏にも身を忍び、頼りない母者人や幼い妹の身の上を、必ず必ず頼むぞや。

ト手を合せる、これにて兩人初めて文彌の亡靈を見ておどろき、

彦三　やゝ、さういふ聲は。

古今　弟文彌、どうしてこゝへ。

文彌　必ず〳〵二人の衆、どうぞ短氣をとゞまつて、呉れと頼むは母者人や妹がこと、名殘りは盡きじ早おさらば。

ト ドロ〳〵烈しく、文彌の亡靈卒塔婆の中へ消える。

兩人びつくり思入あつて、

彦三　扨は今のは、弟文彌が亡靈にてあつたるか。

古今　そんなら弟は長旅にて、此の世を去りし亡魂の、

彦三　この場へ現はれ思はずも、二人が最期をとゞめしか。

古今　不便な弟が、

兩人　身の上ぢやなあ。

ト思入、禪の勤めばた〳〵にて、花道よりおりく走り出で舞臺へ來り、兩人に躓きびつくりして、

りく　もし〳〵御免なされませ、心の急きます者でござります、お許しなされませ。

ト此時月出る。古今おりくをすかし見て、

古今　や、お前は母さんぢやござんせぬか。

りく　（びつくりして、）ほんにそなたは娘のお菊、よい所で逢ひましたなあ。

古今　思ひがけない、どうしてこゝへ。私や恥しい〳〵。堪忍して下さんせいなあ。

彦三　（思入あつて、）いつぞや芝にて文彌殿が、難儀を救ひしその時は、而も留守にて逢はざりしが、扨は古今が母御なるか。

りく　さうおつしやるはその時に、悴文彌が御恩になつた彦三様、思ひがけないと申さうか

彦三　面目ない姿でお目にかゝりました。

りく　合點の行かぬ、彦三様といひ娘がその裝、そんなら、二人は　さうしてこゝには

彦三　この彦三が菩提所、品川の海禪寺、

古今　どうしてこゝへ夜夜中、お前は一人ござんした。

りく　私にもさつぱり合點が行きませぬ。これ娘悦びや。今日といふ今日文彌の敵が知れたわいの。

古今　何と言はしやんす、弟の敵が知れたとはえ。

彦三　して／＼それに、何處の何者。

りく　さあ、その譯といふは今日晝間、柴井町の伊丹屋十兵衞といふ居酒屋へ、雇ひ奉公に行たところ、その十兵衞といふが、駿州宇都谷峠で、文彌を殺した奴でござるわいの。

兩人　えゝゝゝゝ（トびつくり思入）

りく　不思議なことには、十兵衞の佛檀の下に文彌が持つて出た、小紋の財布が匿してあつたので、敵といふが知れた故、そなたに早う知らさうと吉原へ行く道を違へ、さまよひ來た此の墓原、思はず二人に逢ふといふも、これもやつぱり文彌が導き。もし彦三様、娘古今に力を合せ、文彌の敵十兵衞を、討たせてやつて下さりませ。

トこれにて兩人心苦しき思入。

古今　そんなら文彌は、宇都谷とやらで、人手にかゝり敢へない最期、その弟の敵といふは、

彦三　縁につながる彦三の實の兄、十兵衞殿であつたるか、ホイ（ト當惑の思入）

りく　何とおつしやる、あの伊丹屋の十兵衞といふは。

古今　力と頼んだ彦三さんの、兄さんでござんすわいな、

りく　えゝゝゝゝ（トびつくりする。彦三思入あつて）

彦三　深い様子は知らねども、御主の爲めに、十兵衞殿、なくてかなはぬ金の入用、扨は宇都谷峠にて金を持つたる弟文彌を、金がほしさに手にかけて、奪ひとつたに疑ひなければ、現在文彌の敵ながら、この彦三の兄なれば助太刀かなはぬ弟の敵。さあ古今、兄の代りに彦三を、此の場に於て潔よく討つて未來の弟が、迷ひを晴らして呉れいやい。

古今　いえ／＼／＼、敵の弟彦三さん、知らぬこと故力と頼み、夫婦の縁まで結んだお前、どうして敵と討たれませう、とても添はれぬ敵同志、冥土へ行つて弟へ、その

言譯をするほどに、お前の手にかけ私をば、早う殺して下さんせいな。

彦三　いや〳〵それでは道ならず、やつぱりそなたが彦三を。

古今　いえ〳〵私を、彦三さん。

彦三　いや、そなたが。

古今　いゝえお前が。

兩人　早う殺して下されいの。

ト兩人刄を互に突附ける。おりく聞いて、

りく　いつぞや芝にて文彌の難儀を、助けられたる恩義と言ひ、娘古今が力と頼み、夫婦の縁を結んだと聞くからは、討つに討たれぬ文彌の敵。

古今　知らぬことゝて助太刀を、頼んだ夫は敵の弟。

りく　思ひまはせば淺ましい、血で血を洗ふ、

古今　夫婦兄弟。

彦三　因果同志の、

三人　寄合ひぢやたあ。

ト三人手を取りハア、と泣く。此の見得寺鐘にて、よろしく道具廻る。

（鈴ヶ森の場）――本舞臺向う一面の黒幕、藪疊み、眞中に題目の大石塔、上手に石地藏、下手にお駒の捨札、所々に松の立木。總て鈴ヶ森夜の體。時の鐘、雨車、波の音にて道具留る。と上手より以前の十兵衛半合羽、脚絆、草履、一本差し、小田原提灯を提げ、仁三尻端折り番傘を相合にさし出來りて、

十兵　今までいゝ天氣だつたが、ばら〳〵降りでまつくらになつた。

仁三　もう何時だらうね。

十兵　さうさ、品川が引過だから、九つ半でもあらうか。

仁三　夜が更けたせゐか、べらぼうに寒い。

十兵　どうか、雨もあがつたやうだ。

ト雨車止み、仁三傘をすぼめ、下手の捨札を見て、

仁三　まつくらで知れねえが、この捨札は何だしらぬ。

十兵　なに、そりやあ材木町の白木屋の娘の捨札だ。

仁三　あゝ噂のあつた主殺しかえ。

十兵　存命ならば磔刑だが、死んだが增しか捨札ばかり。南無幽靈頓生菩提俗名お駒南無阿彌陀佛々々。

トちよつと捨札へ回向する。

仁三　お前知る人かえ。

十兵　あい、私が弟の縁により、白木屋は親類さ。
仁三　この捨札を見るにつけ、悪いことはしたくねえ、どうで始終に廻しの上、ばつさりやられて板附と覚悟はしてゐるけれど、紙幟や捨札を見ると、身の毛がよだつやうだ。あゝ鶴龜々々。
ト身震ひする。
十兵　誰しも命はをしいものだな。〔ト十兵衛わざと提灯の明りを消し〕南無三、躓いて灯りを消した。
仁三　こいつアまつくらで、歩きにくい。
ト仁三行きかける。十兵衛後から一腰を抜き切らうとする。仁三刀の光りに振返り十兵衛と顔見合せる。十兵衛ひらりと刀を後へ匿す、仁三これを見て、
十兵衛さん、お前さん何で抜きなすつた。
十兵　え、さあ灯りがありやあいゝけれど、くらやみぢやあ険難、それ故脅しに抜いたのだ。
仁三　いや、さうぢやアあるめえ。お前おれを切る氣だらう。
十兵　なんと。
仁三　神奈川まで行つたなら、金を貸さうと連れ出して、人通りなき鈴ケ森、文彌もどきにばつさりと。こゝでおれを切る氣だらうが、その手は喰はねえ、止しにしやれ。
ト仁三傘を持ちきつとなる、十兵衛思入あつて、
十兵　むゝ、さう推量の上からは、何を隠さうお主の為、文彌を殺して奪ひし百兩、一旦は役に立てし故再び金の才覚なし、身寄の者に返せし、敵と名乗つて討たるゝ心、まだその金も揃はぬ中、我身の大事を知つたるこなた、無心合力したところが一度や二度ではよも聞くまい、度重なれば現はるゝ悪事千里の人殺し、お上の成敗受くる時は、金も返さず身寄の者に討たるゝこともかなはぬ故、神奈川までと連出したは、こゝで此方を殺さう為め、訪ひ弔ひはせうほどに。
ト十兵衛下にゐて言ひかける。
仁三　おきやあがれ。〔ト十兵衛を蹴倒す、十兵衛どうと倒れ兩人きつと見得〕うぬ大それたぺてんしめ、上部は堅氣の商人風、内證稼ぎの人殺し、その身の悪事を隠さうとおれをこゝで斬る氣だらうが、うぬらが腕ぢやあ殺されねえ、もうかうなつたらうぬが身も、娑婆と冥土の生き別れ、提婆の仁三が引導を渡さぬとても駒の上、抜身の槍の供揃へ、天下いつぱい浄玻璃の鏡に寫る紙幟、その身の素性を散し書、所も名におふ鈴ケ森、犬の餌食にな

りやあかれ

ト兩人きつと見得。

十兵　さういふそなたを先駈に、冥土の旅の一里塚、此の松並木の露霜と覺悟極めて往生しやあかれ。

仁三　何を小癪な。

ト波の音になり、十兵衞拔いて切つてかゝる。仁三傘にて立廻り、仁三上手の地藏を蹴倒し墓石を小楯に上へ上り傘を開き、十兵衞下より刀をさしつけきつと見得。鳴物替つて仁三一刀切られて倒れ、十兵衞上手に刀を振上げて見得、これより仁三糊紅になり手負ひの立廻りよろしくあつて、トヾ十兵衞仁三を切倒し、とどめに咽喉を突く。仁三突かれたまゝに十兵衞の髻を摑む、此時十兵衞立上る、仁三咽喉へ刀の立ちしまゝ一緒に立上る、十兵衞摑みし手をもぎ放す。仁三よろよろとして刀をさしたまゝ仰向けにばつたり倒れる。十兵衞ほつと思入あつて、

十兵　不便ながらも十兵衞が悪事を知つたがそなたの不運、やがて冥土で言譯なさん、成佛得脱してくりやれ。南無阿彌陀佛々々。

ト回向なし刀の血糊を拭ひ、シヤンと差し行かうとするのばた〳〵にて上手より彦三、古今出來り十兵衞に行當り、ちよつと立廻つて十兵衞眞中に兩人左右に別れ、きつと見得。この時二十日の月出で、三人顏を見合せびつくりして、

彦三　やゝ、兄者人か。

十兵　さういふそちは、弟彦三。

古今　そんならお前が十兵衞樣か。

十兵　して、この女中は。

彦三　廓で馴染を重ねし古今。

十兵　すりや文彌殿の姉なるか、して〳〵二人が此のなりは。

彦三　廓の金にはつまるの慣ひ、若氣の至りに忍び出で、心中なさんとせしところ。

古今　亡き弟にとゞめられ、一先姿を匿さんと、大磯在へ行く途中。

十兵　折も折、時も時、こゝで逢ひしは此身の願ひ、何を隱さうお主の爲めいつぞや宇都の谷峠にて、そなたの弟を殺せし十兵衞、敵を討つて佛へ手向けよ。まつた弟彦三は兄弟ひとつでない證據、この場で古今に助太刀致せ、些殘念なは文彌殿を殺して取りし百兩を、返せし上と思

ひしも、才覺ならぬ今日の今、これぼつかりが心殘り。

ト ばた／＼になり、上手より尾花才三郎廊下下大小、中間箱提灯を持ち出來り。

才三 やあ十兵衞こゝにありしか、首尾よく茶入の質受なし、本地へ歸參の尾花才三、殿のお覺え目出度くして、拜領なせし金子百兩これで先頃その方が、我へ返せし百兩も又もやそちへ返し與ふぞ。

ト 才三郎懷中より袱紗包みの證文を出し渡す。十兵衞開き見て、

十兵 やゝ、こりや金子と思ひのほか、これなる古今が年季證文。

才三 その金高も即ち百兩、それを古今へ渡しなば、そちが望みもかなふ同然。

十兵 すりや才三樣にも一部始終を。

才三 唯今妹に承つたり。

十兵 扨は女房おしづには。

才三 一旦死せしも我所持の、身替り不動の利益にて、姉者人には蘇生なしたり。

十兵 はあゝ忝い、今ぞ此の身の本望成就、文彌殿の官金も元はそなたの身の代金、此の證文は百兩替り、いざ此の上は弟の敵、二人が討つ目當も敵討つ、これ晴れて、さあ立上つて我を討て。

彥三 とは言へ、現在兄者人。

古今 縁につながる私が、どうして。

十兵 討たねば古今彥三とも、文彌へ義理が立つまいが。

兩人 それぢやというて、

十兵 きり／＼討たぬか。

兩人 さあ、

十兵 さあ、

三人 さあ／＼／＼。

十兵 (思入あつて) 討たずば、いつそ。

ト 十兵衞腹へ刀を突き立てる。

才三 やゝ、こりや十兵衞には。

兩人 早まつたことして下されたなあ。

十兵 悔むは無用、十兵衞が命を捨てるは豫ての覺悟、これにてどうぞ文彌殿を、殺せし罪は許して下され。

才三 あつぱれ健氣なそなたが生害。

彥三 浮世の義理とは言ひながら、

古今 思へば果敢ない、

兩人 縁ぢやなあ。

才三　古今が身請濟む上は、彦三諸共白木屋の、家名相續いたせし上一子出來なば伊丹屋の、後見なして家名を立てよ。

十兵　殘る方なき御計らひ。

兩人　ちえゝ忝い。

ト此時黑裝束の捕手四人ばら〳〵と出て、

捕手　人殺し、動くな。

十兵　何を。

ト此時樂屋頭取出て、

頭取　先づ今日はこれぎり。

と目出度く打出し

蔦紅葉宇都谷峠（終り）

花街模樣薊色縫

四幕

箱根權現犬坊丸初春參籠に近江八幡曾我兄弟めづらしい名代對面

奉掛寶前に木太刀の額は八重垣何某工を忍ぶ淺山が
手練を家の戀聟に思ひは殘るお雪が位牌へお柳が譲る
あの世の杯結ぶ妻木の逸之進は老の一途に子ゆゑの
闇廓を拔けし心中も誰白浪の四つ手網かゝりやつなが
る求女殺しまだ前髮に行先は賽の川原の石地藏に敵紋
三と繁之丞が忠孝ふたつの白刃と白刃修羅の街や地獄
谷鬼の女房に氣まぐれな坊主がへりの十六夜おさよ科
の次第に清吉が身を捨札に書殘し下人塚の腹きりの孫
には迷ふ門心が後世の菩提を搭十郎は隱し目附のしも
をとこ大小さすが大寺正兵衞三千兩の盗人も妻のお藤
が貞節に惡心たちまちひるがへして善人さかえる合卷
仕ぐみふるき趣向をはぎあはせ仕立直せし春着の新物

行丈長短一座拙

清心(五世菊五郎)おさよ(先代高助)——芳幾筆

十六夜清心（龜戸豐國筆）

清心（小團次）　白蓮（三十郎）　十六夜（粂三郎）　船頭（權十郎）

花街模樣薊色縫（十六夜淸心——四幕）

序幕

由井ヶ濱の場
稻瀨川の場

（淨瑠璃朧夜に聞き物に、男女の影法師、梅柳中宵月（淸元連中））

役名　極樂寺の所化淸心後に鬼あざみ淸吉、俳諧師白蓮實は盜賊大寺正兵衞、花賣佐五兵衞後に無緣寺の墓守西心、寺澤塔十郎、渡船の船頭三次、足輕市介、扇屋の十六夜後に鬼あざみ女房おさよ、寺小姓戀塚求女、極樂寺の小坊主致月、其他。

（鎌倉花水橋袂の場）本舞臺眞中に二間の紙張りの飾小屋、軒口に輪注進を釣してあり、下の方に柳の大木、上の方に番小屋、後ろに淺黃幕、よき所に柳の立木、總て鎌倉花水橋の體。こゝに足輕市介、木綿紋附の布子一本差にて、棒の尖へ草鞋を下げたるを擔ぎ、同じく權次、傳八の三人立つてゐる。この見得通り神樂にて幕明く。

權次　これ市介、今日はこの花水橋へ、女犯の坊主が引出されて來て追放に遭ふぢやあねえか。

傳八　それだから廣小路に、晒し者の小屋ができてゐる。

市介　さればさ、こりやあ飾り小屋の居殘りだ。

權次　何で輪注進があると思つたが、それぢやあ[illegible]つたのか。

傳八　さうして今日の女犯の坊主は、どこの寺の坊主だな。

市介　手前知らねえか、極樂寺の役僧で、淸心といふ坊主だが、大磯の扇屋の内の十六夜といふ女郎に馴染んで、たうとう終ひは追放だ。

傳八　然し、坊主だつて野郎だつて、元は同じ人間だから、女を嫌ふ筈がねえ。

權次　これから見りやあ、おらが宗旨の親鸞樣は通り者だ。肉食妻帶をお許しなされてあるとは、何と有難い宗旨だ。

やあねえか。
市介　それから見ると、此方等は、遙に勝つた名僧知識、楊枝を賣るか草鞋を賣らにやあ、鰯のぬたで酒も呑めねえ。
傳八　そりやあ手前の言ふ通り、おれなどは後月から二月越しの名僧知識だ。
權次　何にしろおれが宗旨で、何處ぞで一ぺい飲まうぢやねえか。
市介　久しぶりだから附合ひてえが、何をいふにも一文なしだ。
傳八　そりやあ案じるな、あゝ言ふから權次が錢を出すだらう。
權次　なにおれがあるものか、錢がありやあ一人で飲まア。
市介　それぢやあ手前傳八があてか。
權次　いや、手前の草鞋があてだ。
市介　これを飲まれてたまるものか、やつとのことで作り溜めた、二百だけのこの草鞋、晩に寐酒に一合買ひ、夜鷹を百で引込む積りだ。
傳八　そいつあいめえましい話だ。
權次　何でもいゝから一合買へ、後はおれが飲込まあ。
市介　その飲込みが險難だ。
傳八　ぐづ／＼言はずに來いといふに。
市介　えゝ、惡い奴につかまつたな。
ト傳八は市介を引張り、權次附いて上手橋の方へはひる。ト花道より花賣り佐五兵衞、鼠の着附腰衣の小坊主教月の手を引き出來り、花道にて、
教月　これ佐五兵衞どの、清心樣のござるところは、まだよほどあるかいの。
佐五　いえ／＼遠くはござりませぬ、ついそこに見える橋詰へ、今に引かれてござりませう。
教月　そんなら向うで待つてゐませう。
佐五　さあ／＼轉ばぬやうにござりませ。（ト兩人舞臺へ來り）今後の番屋で聞けば、もう引かれてござるのにきつう間はないとのこと、獄屋へおいでなされてより久しうお目に懸らぬが、嘸お窶れなされたらう。これから何處へおいでなさるか、せめて御身の片附と思つた金も手に入らず、もしやと思つた悴が方も、今に沙汰がないからはこれも出來ぬと極つた、あゝ金は世間にないと見える。
教月　これ佐五兵衞どの、お金はないがお錢なら、こゝにお布施があるわいの。（ト懷より金包の錢を出す。）

佐五　あゝいや／＼今何も入りはせぬ、落さぬやうに持つてござれ。いやもう引かれてござりさうなものだが。（ト向うを見て）噂をすれば影とやら、あれ／＼向うへ。

数月　清心様がござるかい。

佐五　おゝおいでなされまする、邪魔になつたら叱られませう。片蔭へ寄つてござりませ。

ト兩人は下手番小屋の蔭へはひる。時の太鼓に説教やうの合方になり、花道より菖蒲革の足輕二人一、二、六尺棒を持ちて先に立ち、後より清心月代を延ばしたる坊主髪淺葱の着附にて繩にかゝり、黒四天の捕手二人これを持ち、寺澤塔十郎半纏打割羽織大小にて附き、その後より中間二人陣笠床几を持ち附添ひ出來り、直に本舞臺へ來り、捕手は眞中に筵を敷き、

捕手　下に居らう。

ト これにて清心筵の上へ住ひ、繩取後に控へる。寺澤上手へ床几にかゝり思入あつて。

塔十　極樂寺教善弟子清心。

清心　はツ。（ト辭儀をなす。）

塔十　其方事出家たる身を以つて、大磯宿扇屋抱女十六夜と申す遊女に馴染み、酒色に多くの金銀を使ひ捨て候段、重々不屆きに就き刑に行ふべきを、格別のお慈悲を以て、鎌倉谷七郷お構ひにて、追放申しつくるものなり。

清心　はツ。

塔十　有難くお受けいたせ。

清心　一子出家なす時は九族天に生ずとて、亡き父母の菩提の爲め剃髪なせしこの清心、我師教善の教へを受け、これまで二十五年の間日夜勤行なしたるも、いまだ凡俗の輪廻放れず色道に迷ひ入り、つひにお上のお仕置かむり、今ぞ本心に立返り初めて眼覺めし我心、重き刑罪御赦免あつて、追放仰せつけられし御仁惠のほど、成程か有難う存じ奉りまする。（ト辭儀をなす）

塔十　それ、縛を許し遣はせ。

捕手　はツ。（ト清心の繩を解く、塔十郎思入あつて）

塔十　扨、これまでは役目の表、某事もその以前は極樂寺の教善老に、素讀の教へを受けたる者、申さば其方とは相弟子同然、それ故餘所には思はねど、何を言ふにも先達極樂寺へ盗賊入つて、賴朝公より奉納ありし三千兩盗みし者の行方知れず、それ故汝に疑かゝり一度拷問なしたれど、覺えなき言譯相立ち、女犯の罪にて則ち追

放、常に汝が才智をば老師にも褒められて、十五年が
その間教諭なしたる甲斐もなく、嘸殘念に思はれん、ま
だ年若なことなれば心を改め修行なし、老師の恥辱を雪
かすば、まことの僧とは言はれまい。

清心　御親切の御教諭有難う存じまする、一先これより當
所を立退き、いかなる深山幽谷の荒れたる寺も厭はずに、
この身を寄せて修行なし元の出家に立歸り、再びお目に
かゝりませう。

塔十　その時こそは某が谷七郷のお構ひ、上へ、御免を願う
た上、目出度く再會いたすであらう。

清心　まづそれまでは御機嫌よろしう。

塔十　汝も堅固に修行いたしやれ。

清心　有難うござりまする。

塔十　最早役目相濟めば、上へこの由申上げん。

ト　立上る。清心思入あつて、

清心　左樣なれば寺澤樣。

寺澤　清心長居はならぬぞ。

清心　はツ。(ト辭儀をなす。)

寺澤　家來まゐれ。

ト　時の太鼓になり、塔十郎先に中間等附いて花道へは
ひる。トぱた〳〵になり、下手より佐五兵衛、數月、
走り出來りて、

佐五　清心樣、お達者でござりましたか。

兩人　お目出度うござりまする。(ト兩人清心に縋る。)

清心　おゝ誰かと思へば十六夜が親父、新發意の數月か、
ようたづねて來てくれたなあ。

ト　これよりしんみりとしたる合方になり、清心兩人を
見て嬉しき思入、佐五兵衛は窶れし姿を見て涙をこぼ
し、手拭にて拭きながら、

佐五　あゝ僅お目にかゝらぬ內、この世の地獄といふほど
な、獄屋の住居にこのお窶れ、思へば〳〵おいとしい、
かゝるお姿にいたしたも元の起りは皆娘、思案の外とは
申せども十六夜故に御追放、どうもそれが濟みませぬ、
お許しなされて下さりませ。(ト手を合せ拜む思入。)

清心　あゝそのやうに言はれては、わしがそなたへ面目な
い、何の十六夜が科であらう、出家の身にてあるまじき
色に迷ひしばつかりに、縄目の恥を受けたるは、誰を恨
まんやうもなし、これ皆愚僧が心一つ、まさしく佛の御
罰なり、必ず心にかけてくりやるな。

佐五　それぢやというて このやうな、見る影もないお姿

清心　あゝこれ〳〵、何事も斯くならぬ前、今更言うて返らぬことぢや。（ト氣を替へ、教月が頭を撫りながら、）これ教月、よう顔見せてくれたな

教月　あい、今日お前様が御追放になり、遠い所へおいでと聞き、いつお目にかゝられるかこれ限りになるか知れぬ故、お経を教へてお貰ひ申した、お禮にこれまでまゐりました。

清心　それは〳〵感心な、よく尋ねて來てくれた、そなたは、僅一二年、これまで長の年月に久しう教へた者もあれど、扨々人は薄情にて、落目になれば誰一人尋ねてくれる者もない、そなたばかりぢや、嬉しいぞよ。

佐五　いやもう年に似合はぬ教月どの、佐五兵衛そなたが行きやるなら一緒に連れて行てくれと、昨日からのお頼み、今朝も疾うから、さあ行かうまだか〳〵とせりたてられ、わしが連れられてまゐりました。

ト教月懐より紙包の布施を出して、

教月　これは少しばかりでござりますが、此間から、葬式や、法事のお布施の貰ひ溜を、お小遣ひに上げまする。お遣ひなされて下さりませ。（ト出す、清心嬉しき思入にて、）

清心　何にも言はぬ忝ない、僅か十か十一の頑是ない心に然ほどまで追放に遭うて困らうと、わしが思うてくれるお布施、忝ない〳〵。（トいたゞいて、）志しは清心がこの通りいたゞきました、然し、寺の住持になる我兒弟子なれど、これ、何れへなりとも尋ね行き合力受けて旅立つに、この布施には及ばぬほどに、これはそなた持つて歸りや。

教月　いえ〳〵お前様に上げませうと、折角溜めたこのお布施、どうぞ受けて下さりませ。

清心　志しは受けるほどに、これはそなた持つて行て、好きな本でも買ふがよい。

教月　いえ〳〵、假令何とおつしやつても、これは持つては歸りませぬ。

清心　それぢやというて、これを受けては。

ト兩人お布施を突きやる、佐五兵衛思入あつて、

佐五　あゝ、もし〳〵清心様、折角あの様に言はつしやるもの、教月どのゝ志し受けてお上げなされませ、所詮お返しなされても、受取らつしやることぢやござりませぬ

清心　そんならそなたの志し。

教月　お受けなされて下さりますか。

清心　忝なく貰ひまする。

教月　えゝ有難うござりまする。

清心　（お布施を懐へ入れ、）佐五兵衛どの見さつしやれ、年よりませた利口な教月、これに附けても思ひ出すは我が來し方の物語り、生れは下總舟橋在漁夫の倅であつたれど、一人の兄が十歳の年神隱しに逢ひ行方知れず、それを氣病に兩親とも引續いて果敢ない最期、世に頼りないわしが身に亡き兩親のその爲めに極樂寺の弟子となり、子供の折はよい出家になるであらうと師の坊が、あけくれ言はれし我身がこの仕儀、そなたは利口な生れ故、成人なさば一筋に佛道修行に心を委ね、惡しき道に迷ふまいぞ。一度は知れまい二度はよいと度重なればその果は、佛菩薩がお許しなされぬ、つひには上のお咎め受け、御恩になりし師の坊へ、恥辱を與へその罰にて、その身も居所立所なく、これまで積みし勤行も一時に空しく、譬へに言ふ實に千日に刈つた茅、この清心がよい手本、どうぞその身をまつたうに一ヶ寺をも持つやうに、必ず辛抱しませうぞ。

教月　有難いその御教諭、よう辛抱いたします。

佐五　今清心様がおつしやつたこと、大きうなつたらお守りなされ、よい御出家にならつしやりませ、おゝ教月どので忘れてゐたが、娘があなたに上げてくれと昨日よこしたこの小袖、穢れし衣類を脱ぎすてゝ清くお着替へなされませ。（ト風呂敷より小袖を出す。）

清心　すりやその衣類を十六夜が、われにこしらへ呉れしとか。

佐五　はい、お小袖、襦袢、帶、手拭、草履までござりまする。

清心　あゝ遊里に稀な志し、忝く貰ひます。

佐五　さあ、少しも早く穢れし布子、きれいにお着替へなされませ。

清心　いや、このまゝ着るも穢い故、洗湯にて身を淨め、さつぱりと着るであらう。

佐五　いかさま、それがよろしうござります。して、あなたにはこれより何處へ。

清心　人目にかゝるも面目なき故、今宵の内に當地を立退き、一先京地へ足を留め、心を改め修行なし、まことの出家になる心、不實なものと思はうが、かゝる仕儀故十六夜にも唯何事もこれまでと思ひ諦らめくれるやう、そなたから言うてくりやれ。

佐五　あゝそれはよい思召し、實は出家の御身分にあるま

じきことながら、濡れた袖故是非もなく、あゝ惡いこと
ぢやと思つてをりましたが、雨降つて地固まると、これを
幸ひふッつりと思ひ切らうとおつしやるは此の上もない
御分別、さりやもう娘もこれ限りに上方へおいでなされ
たと聞いたなら、嘸やさぞ本意なく思ひませうけれど、
それもいとし可愛いと思ふみんなあなたのお爲故、假令
何と申さうとも親の高下で、わしが彼女には思ひ切らせ
ます、必ずお案じなされまするな。

清心　實は一目逢ひたけれど、逢うたら未練が出ようと思
ひ。

佐五　お逢ひなされぬはうがよろしうござります、然しこ
のやうに申しましたら、極樂寺にゐる間は知らぬ顏で娘
に逢はし、今の身になつた故逢はさぬなどゝ清心樣、決
して思うて下さりますな。如來樣かけてこの佐五兵衞そ
んな心にござりませぬ。

清心　そなたの心は知つてゐる、何でわしが疑はう。（ト時
の鐘鳴るに思入あつて）最早暮れるに間もあるまい、い
つまで言うても名殘りは盡きぬ、少しも早く歸られよ。

佐五　もうお暇いたしませうが、どうやらこれぎり逢はれ
ぬやうで、

教月　お名殘りをしう存じます、

清心　いかさまこれが一年や二年で歸ることにも行かず、

佐五　長い月日のその内には、

教月　老少不定の世の中に、

清心　これが名殘りにならうやら。

ト教月の手を取り思入

佐五　あゝ忌はしいことおつしやりませ、鶴龜々々。

清心　そんなら目出度く、

佐五　その内お目に、

兩人　かゝりませう。（ト立上る。）

教月　左樣なれば清心樣。

清心　よう經文を覺えませうぞ。

教月　有難うござります。

佐五　さあ、行きませう。

ト唄、時の鐘にて佐五兵衞教月の手を引き、思入あつ
て花道へはひる。清心見送り思入あつて、

清心　あゝ我身に附けても教月が月よりませし志し、あれ
にて行かば行く〳〵はよい出家になられんが、愼み難き
は色慾戒、あゝわしがやうにならねばよいが。（ト思入あ
つて）最早黄昏、暗きを幸ひ人の目つまにかゝらぬ内少

しも早く、（ト風呂敷包みを持ちて立上り）とはいへ思ひ切つたれど、三年この方馴染みし十六夜、二日なりとも、（ト思入あつて手にてあたりを拂ひ、）あゝ、煩惱の犬追へども去らず、南無阿彌陀佛々々。

トちつと思入、寺鐘にてこの道具廻る。

（百本杭の場）――本舞臺三間の間中足の二重石垣の蹴込み、下手へ寄せて百本杭の波除、舞臺前一面に流れの心、二重上の方に辻堂の後ろを見せ、下の方は柵矢來、見越の松、總て百本杭の體。時の鐘通り神樂にて道具留る。と、ばた／＼にて、辻番より夜鷹ふが／＼のお金、逃出て來るを、以前の足輕市介追かけ來り（、

市介　これ／＼お八重、今の百を返してくれ。

お金　何であれを返すものか、昨夜もたゞで來たぢやあねえか。

市介　假令昨夜は借にしても、二十四文の所を百取られてたまるものか、今夜はきつと錢が入るかどうかあれを返してくれ。

お金　そんなたけいたことを言はずと遊んでおいでな。

市介　どうして／＼、今も言ふ錢の入ることがあるのだから、中々遊んではゐられねえ。

お金　遊んで行けずば、明日の晩おいでな。

ト行きかゝるを市介捉へて、

市介　人がこんなに頼むのに、手前は錢を返さねえか。

お金　何でお前に返すものか。

市介　うぬ、返さぬかしやあ、ちよつとからして。（トお金の襟際を捉へるを、お金男の思入にて）

お金　何をこしやくな。（ト兩人よろしくをかしみの立廻りあつて、百錢を奪ひ合ひて落す）おや／＼大變、お錢を落した。

市介　なに、落したと。

お金　半分上げるから搜しておくれ。（ト兩人にて搜し、淨瑠璃の觸書と百錢とを拾ひ上げる）

市介　錢もあつたが、こんな物を拾つた。

お金　何でお錢になるものか、早く讀んでお見な。

市介　おれに首尾よく讀めりやあいゝが。（ト觸書を開きて）「淨瑠璃名題――、淨瑠璃太夫清元――、三絃清元――、相勤めまする役人岩井粂三郎、市川小團次」

お金　何のことだ、そりやあ淨瑠璃の觸書だ。

市介　さあ約束だ、半分よこせ。
お金　何で半分やられるものか。
市介　うぬ、取らねえでおくものか。
お金　いゝ加減に強情を言ひねえな。
市介　おゝその強情で思ひだした。いよ／＼この所浄瑠璃初まり、
お金　其の為め強情。(口上)
市介　おきやあがれ。
ト波の音通り神楽にてお金上手へ逃げてはひるを、市介下手より追かけてはひる。これにて下手の柵矢来を打返し、山台の上に清元連中居列び直に浄瑠璃になる。
〽朧夜に星の影さへ二つ三つ四つか五つか鐘の音も、もしや我身の追手かと胸に時打つ思ひにて、廓を抜けし十六夜が、
ト本釣鐘、合方にて、花道より十六夜袱紗帯部屋着の女郎装にて、手拭を冠り走り出来り、花道へ留まり思入あつて、
〽落ちて行方も白魚の船の篝火に網よりも、人目厭うて後前に心おく霜川端を、風に追はれて来りける。ト十六夜花道にて振あつて本舞台へ来り、思入あつて、〽

十六　嬉しや今の人聲は、追手ではなかつたさうな。父さん始めわたしまで御恩になりし清心様、今日御追放と聞いた故、ぬしに逢ひたく廓を脱け、こゝまで来ごとに来れども、行先知れぬ夜の道、どうぞお目にかゝられゝばよいが。
〽暫し佇む上手より梅見帰りか船の唄、〽忍ぶなら／＼、闇の夜はおかしやんせ、月に雲の障りなく、しんき待宵十六夜の、うちの首尾はえゝよいとの／＼、〽聞く辻占にいそ／＼と雲足早き雨空も、思ひがけなく吹きつれて、見交す月の顔と顔。
ト十六夜思入あつて行かうとする、上草履の鼻緒切れ、これを直さうとして、面倒だといふ思入にて草履を流れへ打込み、上手へ行かうとする、この時上手より清心色気のある無地の着附に黒の頭巾を冠り出来り、行き違ひ、互ひに避け合ひ、月出で両人顔を見合せ、
清心　や、十六夜ではないか。
十六　清心様か。
清心　あ、悪い所へ。(ト行かうとするを、捉へて、)
十六　逢ひたかつたわいなあ。
〽縋る袂もほころびて、色香こぼるゝ梅の花、さすがこ

なたも憎からで、

ト十六夜清心に縋りつく、これにて清心是非なき思入にて、

清心　見ればそなたはたゞ一人　夜道厭はず今頃に、廓を脱けてどこへ行くのぢや。

十六　何處へとは清心樣、昨日父さんのお話に御追放の上からは、もう廓へもこれまでのやうにおいでもなさんすまい、ひよつとしたなら其の座から、何處へおいでなさらうやら知れぬと聞いてなつかしく、長い別れにならうかと、思へば人の言ふことも、心にかゝる辻占ばつかり、いつその事と暮合に廓を脱けてやう／＼に、お前に逢ひたく來ましたわいな。

清心　（思入あつて、）最早そなたに逢はれまいと、思つてゐたに測らずも、こゝで逢うたは盡きせぬ縁、如何なる過去の宿縁やら、見る影もない清心を、斯くまで慕ふそなたの親切、今日も今日とてこの小袖、送つてくれたばつかりに身幅も廣き清心が、知邊の方へ行かれるわい。

十六　知邊の方と言はしやんすが、さうしてお前はこれから何處へ

清心　さ、何處といふ當もなけれど、追放に逢ふ上からはこゝに足は留められず、一先當地を立退いて京に知邊の者あれば、それを頼つて行く心。

十六　そんならわたしもとも／＼に、連れて行つて下さんせいな。

清心　未來をかけたそなた故、連れて行きたきものなれど、行かれぬわけはこれ十六夜、ふとした心の迷ひより、女犯の罪に追放の刑を受けたるこの清心、我身ばかりか幼きより、御恩を受けし師の坊の名まで穢せし勿體なさへたゞ何事もこれまでは、夢と思うて清心は、今本心に立返り、

そなたのことを思ひきり、京へ登つて修行なし出家得道する心、そなたも廓へ立歸り、まだ年季さへ長いとやら、よい客見立て身を任せ親へ孝行盡すが第一。

十六　そりや情ない清心樣。

〽今更いふも愚痴ながら、悟る御身に迷ひしは、蓮の浮氣やちよつと惚れ、浮いた心ぢやござんせぬ、彌陀を誓ひにあの世までかけて嬉しき袈裟衣結びし縁の珠數の緒を、たま／＼逢ふに切れよとは、佛姿にありながらお前は鬼か清心樣。聞えぬわいなと取縋り、恨み嘆くぞまことなる。

トこの内十六夜よろしくあつて清心に縋り泣く、清心もぢつと思入あつて、

清心　この清心をさほどまで思うてくれるは嬉しいが、これが似合ふといふではなし、わしは形相さへ人並ならず、見る影もない所化上り、今大磯で評判のそなたを連れて行かれうぞ、外に男もないやうに、あの十六夜も物好と何れも様がお笑ひなさる、世の譬にも言ふ通り、釣合はぬは不縁の元ぢや。

十六　そりやもうよその女郎衆は、苦界の勤めの樂しみに浮氣なこともござんせうが、わたしや一生身を任す男といふは心一つ、この身ばかりか父さんまで、常々からのお心添へ、その御親切の清心樣、死なば一緒と思うてゐるに、お情ない今のお言葉、どうでもあなたにわたしをば、連れて退いては下さんせぬか。

清心　さあ、それとてもそなたの爲め、少しも早く廓へ歸り、勤を大事にしやいの。

　トこれにて十六、思入あつて、

十六　そのお言葉が冥土の土產、

〽岸より覗く靑柳の、枝もしだれて川の面、水に入りなん風情にて、

南無阿彌陀佛、

〽すでにかうよと見えければ、清心あわて抱き留め、

　ト十六夜前の川へ身を投げようとするを清心縋り留めて、

清心　あゝこれ待つた。早まるな。

十六　いえ〳〵放して、殺して下さんせ。

清心　これはしたり、そなたを殺せば親父どのまた弟がわしを恨み、女犯の上に重なる罪、それを知りつゝそなたをば、どう見殺しにならうぞいの。

十六　さあ、その後前を考へれば、猶々生きてはゐられぬ此身。

清心　そりや又何故、どういふ譯で。

十六　勤する身に恥かしい、わたしやお前の。

清心　え。(ト思入あつて)そんならもしや、愚僧が胤を。

十六　あい、二月でござんすわいなあ。(ト恥しきこなし。)

清心　ほい。(ト當惑の思入。竹笛入りの合方になる)

十六　さあ、それぢやによつて廓へ歸りわたしや勤めがならぬ故、淵川へこの身を投げて死ぬ覺悟、不便と思はゞ一遍の、御回向お願ひ申しまする。

　ト思入にて言ふ、清心是非なき思入。

清心　このまゝ別れて行く時は、そなたばかりか胎の兒まで、闇から闇へやらずばならず、とあつて一緒に伴はゞ、〽廓を脱けしそなた故、捉へられなば勾引し、再び繩目に遭はねばならず、是非に及ばぬ今宵の仕儀、殺すも不便連れても行かれず。こりやもうおれもともどもに。

十六　一緒に死んで下さんすか。

清心　外に思案はないわいの。〽ほんに思へば十六夜は、名よりも年は三つ増し、ちやうど十九の厄年に、我身も同じ二十五のこの曉が別れとは花を見捨てゝ歸る雁、〽そこは常世の北の國、〽これは淨土の西の國、頼むは彌陀の御誓ひ、〽なまいだ〳〵なむあみだ、〽これがこの世の別れかと互ひに抱き月影も、おぼろに霞む雨催ひ。

ト この内兩人名殘りの思入にて死ぬ覺悟をなし、トゞ手を取交しつゝと顔を見て手を取り寄添ふ、淨瑠璃の切、時の鐘にて兩人ほぐれて立上り、

此の世で添はれぬ二人の惡緣。

十六　死ぬと覺悟極めしうへは、

清心　廓の追手に逢はぬうち、

十六　手に手を取つてこの川へ、

清心　浮名を流す心中に、

十六　明日は浮世の話し草、

清心　斯くと噂を聞かれたら、

十六　嘸父さんが後での歎き、

清心　それも前世の約束と、

十六　先立つ不孝を、

清心　ゆるして下され。

兩人　南無阿彌陀佛。

〽西に向ひて合はす手も凍る餘寒の川淀へ、ざんぶと入るや水鳥の浮名を後に、

ト 兩人よろしく思入あつて河の中へ飛び込む、水の音激しく水煙りぱつと立つ、三重波の音にてこの道具廻る。

（稻瀬川西河岸の場）――本舞臺正面二間の水門、左右高き石垣、此上草土手、松の立木、舞臺は河中の模樣、總て稻瀬川西河岸の體。眞中に白魚の篝火を焚きし網舟ありて、四つ手網を下し、船の中に俳諧師白蓮實は大寺庄兵衞、きめ頭巾縞の被布山刀一本

作者原作名題

作者年臺本裏署名

差にて煙草を喫みゐる、船頭三次棹をさし船を繋ひてゐる、この見得船の騒ぎの端唄、波の音にて道具留る。

三次　もし旦那、どうか本降りになりさうだつたが、いゝ鹽梅にあがりやした。

白蓮　然し、まだ安心はならねえ、雲足が早いから、もう一降りかゝるだらう。この一潮で切り上げよう、かゝればかゝるほど止められねえ。

三次　いゝ所を二三番受けたら、手をしめておしまひなさい、もう四つに近うございます。

白蓮　おゝもう四つに近いか。夜はよつぽどつまつたな。それぢやあ鯔治の終はねえ内、野暮なやつだが飯とせう。

三次　そいつあ有難うございます、旦那は御酒がいけねえが、二枚がけ位な大きな奴へ、熱燗をぶつかけて、ぐつとやつた心持は、あゝ堪らねえ、咽喉がぐび／＼する。

白蓮　然し鰻は酒呑にやあ、しつこくつていけねえ。

三次　なにさ、なまこや洗へものを好んで食ふのは意氣がりさ、まあ早え話が肴でも女でもあつさりとしちやあうまくねえ。何でもしつこくこつてりと、噯に出にやあうまくございませぬ。

白蓮　それぢやあ三次が小塚原の馴染は、二枚がけの熱燗だな。

三次　當てられました、いつぞや旦那にお目にかけてえが、潮前河豚を踏んづぶしたやうな、ごくお粗末な御面相だが、又言ふに言はれぬ味がございます。

白蓮　こう／＼、受負は何を喰はせる。

三次　えゝ、今鯔治で鰻を上げます。

白蓮　そいつあ御馳走だの。

三次　さういふ旦那も遊び好だが、あの扇屋の十六夜さんは、座敷はつんとしてゐなさるが、面白みはございますか。

白蓮　さうよ、面白みのないでもないが、もう少し愛敬がほしいな。

三次　それぢやあちつとお口に逢ひませんね。もし旦那、もうようございますぜ。

白蓮　おゝ手前の話でさつぱり忘れた。（ト立上り、四つ手網の繩を引き思入あつて）こいつあ何か引かゝつたわえ、おれにやあ重くつて上らねえ。

三次　何ぞ芥でもかゝりやあしねえか、旦那お退きなせえ。（ト網を引き）なるほど、こいつあべらぼうに重い、（ト

ぐつと綱を引上げる。とこれに以前の十六夜かゝりゐる。)おや、何か引かゝつてゐますぜ。

白蓮 (十六夜を見て、)むゝ、こりや女だ

三次 なに、土左だえ。

白蓮 いや、まだ身を投げて間もねえ様子、どうか助けてやりてえものだ、御苦勞だが引上げてくれ。

三次 とんだものがかゝりやあがつた。(ト兩人して十六夜を船へ上げ介抱して、)なるほど、こりやたつた今飛び込んだばかりだ。

白蓮 ほんに此の色艶も。(ト十六夜の顔をぢつと見て、)や、こりや扇屋の十六夜だ。

三次 なに、十六夜さんだえ。ほんに違えねえ、十六夜さんだ。

ト白蓮袂入より氣附藥を出し、十六夜の口へ入れる、三次柄杓にて川の水を汲み、十六夜の口へ入れ、白蓮は抱へて胸を押しながら、

白蓮 これ十六夜、氣をしつかりと持て。

三次 十六夜さん〳〵。(ト呼び生ける。これにて十六夜うんと心附く、)しめた〳〵、息を吹返した。

白蓮 これ心が附いたか、氣をたしかに持て。(トきつといふ、十六夜心附きて、)

十六 あい、氣はたしかになりましたが、わたしや死なねばならぬもの、どうぞ殺して下さんせいな

白蓮 これ十六夜、何で死なにやあならねえのだ

ト これにて十六夜心附き、白蓮を見てびつくりなし、

十六 や、思ひがけない白蓮さん、そんならお前に。

白蓮 さあ、どういふ譯か白魚の折も四つ手にかゝつたは、神や佛のこりやお助け、まだ命數の盡きぬおぬし、この結構な世を捨てゝ死なうといふは惡い了簡、何故あつて死なねばならぬ。

十六 さあ、それは。

白蓮 佛隣者の白蓮と人にも知られた此の身、假令何處の誰ぢややら知らぬ者でもこの網へ、かゝつたからは助けにやおかぬ、ましてこれまで馴染のおぬし、死なねばならぬといふ譯を、どういふ譯か話して聞かしやれ、品によつたらおれも男、どこがどこまで引受けておぬしが難儀を救つてやらう。

三次 もし十六夜さん、旦那があのやうにおつしやるから惡い裁きはなさらねえ、包まず譯をお話しなせえ。

十六 さあ、その譯は。

白蓮　膝とも談合、話して聞かしやれ。

ト端唄の合方になり、十六夜思入あつて、

十六　今更お話し申すのも恥しうござんすが、此間から時候にあたり、店を退いてをりましたを、内證の旦那お上さん、お爪どんと三人して、ふて寐をするの何のと言うて、わたしを打つたりたゝいたり、何ぼ苦界の勤めでも寐てゐるほどの煩ひに、どうまあお客に出られませう、出ねば手酷い遣手の折檻、責殺されて死なうよりいつそのこと一思ひ、淵川へ身を投げて死ぬるがましと廓を拔け、稻瀬川へ身を投げて、死ぬる覺悟でござんしたわいな。

白蓮　はてさてそれは詰らねえ、さりとは一途な狹い了簡死なすとどうともならうのに。

十六　それぢやというて、勤めの身故。

白蓮　さあ勤めの身故金を積み、身請をしたら濟むことだ。

十六　え。(ト思入。)

白蓮　今もおれが言ふ通り、思ひがけなくこの網に、おぬしがかゝつて上つたは、おれに助けろと神や佛の言はゞお指圖、おぬしが身請をしてやるから、三日なりともおれに從へ、情人があるなら改めて兄弟分の盃して、里になつて添はしてやらう。聞きやあ親父もあるぢやあねえか、この年まで育つたは誰がお蔭だと思つてゐる、おのれ一人で育つたやうに、死なうといふは第一不孝、まあ死ぬことは止めにしやれ。

十六　何とお禮を申さうやら御親切な今のお言葉、ほんに涙のこぼれるほど有難うござんすが、どうもわたしや生きてゐては。(ト腹の子がといふ思入。)

三次　これさ〱十六夜さん、そりやあお前惡い了簡、今旦那が何とおつしやつた。由良之助のせりふだが、情人があるなら添はしてやらうと、あれほどまでにおつしやるに、死なにやあならねえといふからは、外に譯がなくちやあならねえ。

十六　いえ〱外に譯というては。

三次　さあ、譯がなけりやあうんと言つて、まあこの船に乘んなせえな。

ト十六夜思入あつて、腹の子を産むまで生きてゐようといふ心の思入あつて。

十六　お前までがとも〱に有難うござんす、そんならわたしや身輕になるまで。

白蓮　え。

十六　いえさ、身性にならば父さんが、嘸や悦びなさんせう。
白蓮　得心ならば明日とも言はず、今夜の中に三次をやつて、廓の方は附けてやらう。
十六　然しお前に多くのお金を。
白蓮　なにさ、高の知れたお奴しが身請、何にしろづぶ濡れで、家まで行くが冷たからう、柳橋の若竹でお銀が着物を借りて着せよう。
三次　若竹の姐さんのなら、丁度ようござりませう。
白蓮　そんならやあ川岸へ附けてくりやれ。
三次　合點でござります。
ト三次繋ひを解く、櫂入れて波の音、十六夜川の中へ思入あつて、
十六　たしかにぬしは。（ト清心へ思入。）
白蓮　どうしたと。（ト十六夜氣を替へて。）
十六　さあ、ぬしにはたしか、お上さんが。
白蓮　あつてもいゝわえ、圍つておくわ。
十六　それが知れたら。
白蓮　はて、氣の弱い。
三次　もし、出ますぜ。（ト棹を突張る、これにて船動く。）

十六　あれえ。（トよろ／＼として白蓮にこけかゝる、白蓮十六夜を抱き留める。）
白蓮　わるくねえな。（ト三次これを見て。）
三次　とりかぢイ。
ト大きく言ふ、波の音、賑やかな唄にて、この道具廻る。
（元の百本杭の場）――舞臺は元の百本杭の場に戻ると、床の淨瑠璃（竹本）になる。
〽行く空も薄墨流す雨雲に、鐘に沈めど清心はなまじ見えし水心、死ぬに死なれず波際の百本杭に纏り附き、
トこゝに清心濡れたる裝にて百本杭に取附き、思入あつて二重へ上り、
清心　あゝ、いくら死なうと思つても身が浮いて沈まれず、此身には下總行德生れ、幼い時より海邊に育ち習ふとなしに覺えた水練、それが今の害となり死におくれたか、あゝ情ない。
〽恨めしさうに川の面、清心つく／＼打ちながめ、
それにはひ替へ十六夜は、水に溺れて死んだであらう、
いまだ形は定まらねど、腹に宿りし我胤も、
〽共にはかなや冥土の旅、我も後より死出三途、手に手

を取つて渡らんと、賽の河原で幼兒が、積む石ならで清心は小石拾うて袂へ入れ、浮かぬ心に引替へて浮きたつ囃子上手より、梅見戻りの遊山船、

トこの内清心石を拾ひて袂へ入れ、此の身を投げようといふ思入、この時上手の揚幕へ丸物の屋根船を出し内にて賑やかな騷ぎ唄する、清心これへ思入

せめてあの世は迷はぬやう、觀念なすにかしましい、三味線の音が耳に入り、邪魔になつてならぬわい。

〽兩手を合せ西の空、曇る涙の春雨も、身にふりかゝる憂き事と、さすが求女は白浪の傘のしづくを打拂ひ、

ト杭にもたれ向うの船へ思入、花道より寺小姓求女、振袖一本差下駄がけにて傘をさし出來りて、

求女　今打ちしは後夜の鐘、宵の内にと思うたに俄の雨に雨具はなし、傘を求めて思はぬ暇入り。

清心（騷ぎの耳に入る思入にて）あゝ人の歎きも知りをらず、面白さうな遊山船、死なうと覺悟しながらも、耳へ入つて黄泉のさはり。

求女　昨日聞けば父樣が今日につゞまるお金の入用、どうか調へ上げたいと、思へど甲斐ない小姓の身。

清心　人の盛衰貧福は、前生からの約束にて、力づくにも及ばぬもの。

求女　據なう大江家の主水樣へお願ひ申し、御養生のお手當金。

清心　あれあのやうに面白う藝者幇間を伴うて、騷いで暮すも人の一生。

求女　少しも早う父樣に、これを上げたらお悦び。

清心　その日の煙りも立て兼ねて、襤褸を纏ひ門に立ち、手の内乞ふも一生にて。

求女　急ぐとすれど折惡しく、思はぬ雨に持病のなやみ。

清心　又このやうに身を投げて、死なうといふもこれも一生。

求女　頼む木蔭もなき故に、猶更癪はをさまらず。

清心　死ぬに死なれぬ心の迷ひ。

求女　急げど道は捗らず。

清心　こりやどうしたら、

兩人　よからうなあ。

〽心々のちぎれ雲、塞がる胸の晴れやらで、又もや雨となりふりも癪に亂るゝ求女が苦しみ、

トこの内清心杭にもたれ船の騷ぎに聞きとれる思入、求女は苦しき思入にて、やう〳〵舞臺へ來り胸を押へ

て、
求女　もし〳〵。(ト清心の背中をたゝくに、清心びつくりして)
清心　誰だ〳〵。
求女　はい、わたくしでござりまする。
清心　わたくしとは誰だ。
求女　往來のものでござりまする。
清心　見れば年端も行かぬ若衆どの、どうさつしやつたのだ。
求女　持病の積が起りまして、一足も歩けませぬ、御無心ながらお藥がござりますなら、お貰ひ申したうござりまする。
清心　うつかりとしてゐる所を呼ばれた故、迷ひの者かと思つた。然しまあそれは無難儀であらう、藥を持つてゐることなら進ぜたいものなれど、わしはたつた今、川から、いやさ、川向うまで二町も行かねば藥屋とてもないところ、はて困つたものだなあ。
求女　あいたゝゝゝゝ。
清心　あこれ、そのやうにさし込むなら、藥はないがその替り、胸を押して進ぜませう。

求女　それは有難うござりまする。
清心　どれ、どこらがさし込みますな。
〽苦しむ求女が懐へさし込む手先に金財布、
ト求女苦しむを清心抱き起し懐へ手を入れ、財布へ手の障りし思入にて、
これ若衆どの、こりや何でござる。
求女　そりや金でござります。
清心　よほどの嵩でござるの。
求女　はい、五十兩でござりまする。
清心　えゝ。
〽聞いて思はずゆるむ手に、うんとばかりに反りかへれば、
ト清心びつくりして手を放す、求女反りかへり倒れる。
あゝこれ反つては惡い〳〵、氣をたしかに持たつしやれ。
〽手拭取つて川水を汲んで氣附に飲ませんと、
ト求女を介抱して、
若衆どのいなう、若衆どのいなう、氣をたしかに持たつしやれ。
〽と呼生くれば、(ト求女心附きて)
求女　はい、大きによろしうござりまする。

清心　少しは胸が開きましたかな。
求女　御親切な御介抱有難うございます。
清心　さうしてまあお前は大まいの金を持つて、夜夜中どこへ行くのだ。
求女　さあ、この金はわしが親父が御恩になつたそのお人の、落目を貢ぐ大事の金、殊には今宵につゞまるせつぱそれ故夜道も厭はずにまゐりましたが、折悪しう持病のなやみに思はぬ暇入り、嘸待侘びてございませう。
清心　あゝさうであつたかいな。然し金を持つて夜道は物騒、これから二町行くと、四角に辻駕籠があるによつて駕籠に乗つて行かつしやれ。
求女　有難うござります。
〽會釋こぼして立上れば、
ト辭儀なし求女立上る、清心思入あつて、
清心　思ひがけなくこのやうに言葉交すも川添の、この青柳の一樹の蔭。
求女　一河の流汲合ふも、盡きぬ緣の稲瀬川。
清心　結ぶ氷も一夜に。
求女　別れて末は白浪の。
清心　何處の誰やら。

求女　御緣があらば、
清心　又重ねて、
求女　おさらばでござります。(ト行かうとするを、)
清心　もし。(ト袖を引く)
求女　何でござりまする。
清心　(思入あつて)氣を附けて行かつしやい。
〽本意なく放す求女の袖、振合ふ他生の因果同志、別れてこそは行過ぐる、後見送りて清心が、胸に思案のとつおいつ、
ト求女思入あつて下手へはひる。後に清心いろ〳〵思入あつて、ト下手へ追かけはひる。と、ばた〳〵になり求女逃げて出るを清心追ひかけ出る。
〽なんなく捉へ引出す財布、求女はその手に縋り附き、
ト清心求女を捉へ、金財布を引出す、求女その手に縋りて、
求女　やゝ、こりやこの金を取る氣ぢやな。
清心　さあ、そのびつくりは尤もだが、癪に苦しむ胸先をさする拍子に金財布、手にさはつたが互ひの因果、悪いと知つて我と我が、心に異見はしたれども、思ひ切れずこの無體、悪い者に見込まれたと無理なことだがあきら

て、どうぞその金貸して下され。

求女　えゝ、すりや親切な介抱は、情ごかしに此の金を、取らう企みであつたるか。

清心　さういふ心は少しもない、年の行かない身の上に、たゞでもあるか雨上り、不便なことゝ思つた故介抱なしてやつたれど、金を持つたがこなたの不運、これさへなければわしもまたこの悪心は起らねど、最前からの遊山船人の榮耀が羨しく、道に缺けたる邪曲非道、嘸やこなたの心では、鬼坊主とも思はうが、あの世は無間地獄へ落ち、呵責の責を受けるとも、此世で榮耀榮華をして、娑婆の淨土で樂しむ心、理を非に枉げても借りねばならぬ。

求女　さう聞く上はやみ〳〵と、おのれにこの金渡さうか。

〽用意の一腰拔打に切つてかゝるを清心が、有合ふ傘にてちやうと受け、拔けつくゞりつ打合ふ折柄、又も聞ゆる騒ぎ唄。

トこの中求女脇差を拔き切つてかゝる、清心傘にて受ける立廻り、文句の切にて船の騒ぎ唄になり、清心上手へ逃げる、求女切らうとして杭を斜に切落す、又立廻つて脇差を打落し突く、求女たぢ〳〵として件の杭にて咽喉を突き糊紅になり、

求女　人殺しぢや、人殺しぢや。

清心　もうかうなつたら、是非がない。

〽言へど應答も亡き人と知らぬ絆の財布の紐、首に絡みて斷末魔、蕾のまゝに散りて行く最期のほどぞ哀れなる

トこの内財布を引合ひ、求女の首に絡みてよろしく苦しみ落入り、ばつたり倒れる。

これ若衆どの〳〵。や、こりや事はきれたか、やゝゝゝゝ、（トびつくりし、竹笛入りの合方になり）非業に死んだ十六夜が親にこの金惠みなば、開ひ弔ひも心のまゝと思ひ附いたがそなたをば、殺して取つたこの金が、何の供養にならうぞい。（ト金を投げ捨て、求女の脇差を見て思入）さうぢや、水で死なれぬわしが身體、この脇差で死ねといふ、草葉の蔭から十六夜が、やつぱりわしを導くのか。これ若衆どの、そなたを殺した言譯は、そなたの刀で自殺なし、水死なしたる十六夜や、そなたと共に死出三途、これぞ因果の罪ほろぼし、さうぢや〳〵。

ト端唄になり、清心その刀にて腹を切らうとする。この時月出て清心氣の替りし思入にて、

然し待てよ、今日十六夜が身を投げたも、又この若衆の金を取り、殺したことを知つたのは、お月樣とおればか

り、人間僅五十年、首尾よくいつて十年か二十年がせいきり、襤褸を纏ふ身の上でも、金さへあれば出來る樂しみ、同じことならあのやうに、騒いで暮すが人の徳、一人殺すも千人殺すも、取られる首はたつた一つ、とても惡事を仕出したからは、これから夜盗家尻切、人の物は我物に榮耀榮華をするのが徳、こいつアめつたに、死なれぬわい。

〽忽ち替る清心が、これぞ惡事の双葉にて、後にはびこる鬼薊、話草とぞ、

ト脇差を川の中へ打込み、求女を捉へ、

それ、水葬禮だ。

〽なりにける。

ト求女を川の中へ入れる。これにて雨車になる。

あゝ又降つて來たか。

ト時の鐘にて、上手より以前の白蓮下駄がけにて、十六夜世話裝同じく下駄がけにて、番傘を相合にさし、ぶら提灯を持ちて出來り、清心に行當り提灯を消し、時の鐘忍び三重、清心びつくりして財布を落す。

白蓮　や、今の音は。

清心　え。

ト兩人探り合ひの立廻り、後へ以前の船頭三次出てこの中へ入り、足に障る金財布を取上げ透し見て、

三次　や、こりや百錢と思ひのほか。

トこれを聞き、清心三次を引捉へて財布を取る。三次それをと寄るを、肘にて當てる。この間に白蓮は十六夜の手を引き花道へ行く、清心財布を口に銜へ三次を轉す、これと一緒に白蓮傘を持ちかへるを木の頭。清心財布をいたゞきにつたり思入、兩人は花道へはひるこれをキザミ、浪の音、佃にて、

ひやうし幕

二幕目　初瀬小路妾宅の場

（俳諧師白蓮實は大寺正兵衞、道心者西心、下男杢助實は寺澤塔十郎、船頭三次、俳諧師扇藕、道具屋銀七。白蓮妾おさよ、白蓮妻お藤、下女およね、下女お虎。）

（妾宅次の間の場）――本舞臺三間の間常足の二重、

正面更紗の暖簾口、上下腰張の茶壁、三味線二挺かけてあり、上の方に障子屋體、例の所門口、下の方路地口、總て初瀨小路白蓮妾宅次の間の體。こゝに下男杢助爼板に鴨の骨を載せ庖刀にてたゝきゐる、傍に鴨頭三次煙草を喫みながら見てゐる。よき所に八百善形の燭臺を灯しあり、この見得鞠唄通り神樂にて幕明く

三次　杢助どん、御苦勞だの。

杢助　なに、こりやわしらが食ふのだから、御苦勞なことはねえ、旦那様とお妾は笹身の附いた正身ばかり、骨と皮は、お下に出てお米どんと、わしが食ひ物さ。

三次　えゝちくしやうめ、澁りッ皮のむけたお米どんと、つッつき合つて食ふのだな。これがほんのちんちん鴨、何にしろ一羽にしちやあ、がうぎに骨が澤山あるの。

杢助　なにさ、わしが食ふのだから、思ひ入れ身を打ちこんでおいた。

三次　こいつアおれも突ッ込みてえな。

ト花道より俳諧師扁福道行振を着、木劍をさし、道具屋銀七同じく俳諧師の拵にて出來り、

銀七　ときに扁宗おれが拵は、俳諧師と見えようか。

扁福　大丈夫おれが受合ふ、どこへ出しても俳諧師、榛になる氣遣ひはねえ。

銀七　長く話をしてゐる中に、道具屋にならにやいゝが、

扁福　そこは和尚が引受けて、ワキをつけるから案じなさんな。

銀七　何にしろ金滿で、いゝお妾のあるのが當だ。

扁福　隨分わかつたお人だから、出入をすれば損はない。

銀七　さあ、ちつとも早く行きやせう。

ト兩人本舞臺へ來りて、

扁福　御免なせえ、旦那はお家かね。

杢助　おゝ誰かと思つたら扁福様か、家にゐさつしやる。はひらつしやれ。

扁福　それは丁度よかつた、さあ先生こちらへ。

銀七　御免なせえ。（ト兩人内へはひる、三次見て）

三次　これは先生おいでなせえ。

扁福　おゝ網船の三公か、この節は白魚はどうだね。

三次　この間の南風から、だいぶ上手へ上りやした。

銀七　白魚も子持になつちやあ話せやせんね。

ト黄色な聲をする。

杢助　もし扁福様、そのをかしな聲をする人は、何だね。

扇福　これはわしが朋友で、當時名うての俳人故、そこで旦那へお近附に、今夜ちよつと同道したのさ。

銀七　早く御主人にもお目にかゝりたし、美しい代物も拜見したい。

扇福　これさ。あんまり口を利きなさんな。

銀七　道具屋が出るかね。

扇福　えへん〳〵。おゝこりや杢助どの、鴨のお料理だねうまいやつだが冬季の物だて、一夜明けては冷たくても、比良魚のお刺身が書抜さ。

銀七　大きにさうでごツす、つんと鼻を通されちやあ、實に涙がこぼれやす。

杢助　ほんに、涙がこぼれるといやあ、わしらが國などゝ違つてべらぼうに鳥の高い所だ、直後の藪なぞに澤山ぎやあ〳〵言つてゐるに、今日も魚屋の新公が、いかく高く賣りやあがつた。

三次　おきやあがれ、そりやあ踵をねらふのだ。

銀七　いや、そのうぶな所が妙でげツす。

扇福　秀逸々々。

お米　（奥より下女装にて皿を持ちて出來り、）これは先生ようおいでなされました。

扇福　おゝお米どんか、よい春だの。

お米　お目出度うござります。

杢助　これお米どん、何ぞ用か。

お米　骨がたゝけたらよこせと、旦那樣がおつしやいました。

杢助　え、（トびつくりして、）なに骨をよこせ、いつも上つたこともねえに。

お米　いつもは上らぬが、けふは上るとおつしやいました。

杢助　扨は身を入れたのを見られたか、あゝ悪いことはしねえものだ。

三次　こいつあ一番上壺を食つたな。

杢助　えゝいま〳〵しい。

お米　又皆樣にも御遠慮なく奥へいらつしやいませと、旦那樣がおつしやいました。

三人　それは有難うござります。

三次　杢助どんの思ひのかゝつた、鴨の骨を御馳走にならうか。

杢助　どうとも勝手にさつしやい。

銀七　先づそれよりはお妾の君を。

扇福　えゝ、無駄な口を利きなさんな。

お米　さあ皆様御一緒に。
三次　そんなら先生。
扇福　どれ、御同道いたさうか。
ト両人は奥へはひる、杢助残りて、
杢助　折角うまくして喰はうと、身をどんと入れておいたに、あの人數であらされては、わしが口へはむづかしい組板でもねぶつてやらうか。
ト組板を恨めしさうに見てゐる。ト花道より白蓮妻お藤御新造の拵にて、下女お虎附添ひ小田原提灯をさげて出來り、
お藤　これお虎、きつとそなたの推量の通り、旦那様はおさよの所に、おいでになるに違ひない。
お虎　ほんに結構な御新造様を、毎晩巣守りにして憎らしい旦那様、何でも臺所へ踏込んで、思ひ入れ言つておやりなさりませ、ぜんたいあなたがお心好し故、こんな事がおこります。
お藤　それ故今日はそなたといふ、加勢を連れて言ひに來たのぢや。
お虎　わたくしが喋りましたら、どんな女でも負かしますさあ／＼早くおいでなさりませ。（ト本舞臺へ來り、門口を開け）杢助どん、杢助どん。
杢助　あい／＼誰だ、本宅のお虎どのか。
お虎　御新造様がいらつしやいましたよ。
杢助　なに、御新造様がおいでなされた。おゝ、これはよくいらつしやいました。
お藤　（内へはひりて）杢助、旦那どのはおいでゞあらうの。
杢助　はい。いえ、おいでなさりませぬ。
お虎　なにおいでなされぬことがあるものか、一昨日から今日で三日家へお歸りなされぬもの、ほかへおいでになる所はない、隠さずと言はしやんせいな。
杢助　いえ／＼決して嘘言は吐きませぬ、此方へおいではなさりませぬ。
お藤　（思入あつて）おいでなさらずばなさらぬでよいが、これ杢助、まことに旦那様にも困りますよ、年始もろく／＼済むや済まぬに、毎日も／＼夜泊り日泊り、とんとお歸りなされぬ故、用は足らず家は淋しゝ、（ト杢助へ思入あつて）それに附けてもわしがそなたに頼みがあるが、何と聞いてはくれまいか。
杢助　はい、どんなことか知りませぬが、わしに頼みとお

つしやりますは。
お藤　さあ、その頼みといふは。
　ト杢助の手を捉へる、杢助びつくりして振拂ひ」
杢助　いえ、そのお頼みは聞かれませぬ。
お藤　何故わしが頼みは聞かれぬのぢや。
杢助　はて知れたこと、わしは一年二兩二分の奉公人、まだ一年になるかならず、首尾よく三年勤めねば七兩二分出來ませぬから、めつたに間男にはなりませぬ。
お虎　えゝ、押の強いことを言はしやんせ、何で御新造樣がそんなことを。
杢助　はあ、それぢや間男ぢやあござりませぬか、そんなら頼みを聞きますべい。
お藤　(紙入れより金包を出し、)杢助、こりや少しばかりだが、わしが年玉、煙草でも買やいの。(ト遣る。)
杢助　(開き見て、)こりや一分でござりますね、こんなに煙草を買つてどうしますべい、わしが喫むのは一山八文。
お虎　ほんにお前も野暮な人、煙草を買ふとも、買はぬとも御新造樣の思召し、お貰ひ申しておくがよいわね。
杢助　それぢや、郷里への土産にしますべい。然し燒金ぢやねえかな。

お虎　燒金をお前に上げるものかね。
杢助　あんまり氣前がいゝから油斷がならねえ。
お藤　(思入あつて、)これ杢助、頼みといふは外でもない旦那にいつからおいでなさつたか、隱さずと言つて聞かしや。
杢助　はい、決して言ふなと言ひつかりましたが、一分貰つちやあ言はずにやあゐられませぬ。實は一昨日からござつて、いやはやたまげたことさ、まだろく／＼日もくれねえ内から。
　ト言ひかけ、お藤を見て思入あつて口をつぐむ。
お虎　これ何も遠慮するには及ばぬ、隱さずと言はしやんせ／＼。
杢助　毎晩々々酒宴だが、難儀なものは杢助さ、やれ八百半へ行つて來い、やれ杢助豆腐屋へ行つて來い、やれ杢助三ツ割がなくなつたわのと、いやもうわしは粉になります。
お虎　ほんにさう使はれてはたまるまい、さうして御酒を上つたあとで、嘸旦那樣と、
杢助　あい、お妾樣と、
お虎　えゝ腹の立つ、お妾どのと言はしやんせ。

杢助　そのお姿どのと旦那様と、
お虎　どうなされたえ。
杢助　先づ煙草にしますべい。(ト煙草を喫む。)
お虎　御新造様お聞きなされましたか、腹の立つことではござりませぬか。
お藤　そりやもうそれ者の果ぢや故、手事とやらがあらうわいの。
お虎　えゝ、聞くほど腹の立つ、これだから御新造様、わたくしが御異見を申すのに、女子のたしなみたしなみと、何にもあなたがおつしやらぬ故、こんな目にお逢ひなされまする、わたしや悔しい、悔しいわいな。
杢助の胸倉を取りて振廻す。
杢助　あゝ、これ／＼喉佛様がつぶれる、放してくれ／＼。
お虎　さあ、放してやるから今の先は。
杢助　もう先はありませぬ。
お虎　えゝこなたまで馬鹿にして、旦那様も旦那様だ、芝蝦の天ぷらぢやアあるまいし、さう引附けてばかりでござらずとも、好ささうなものだのに。
杢助　然し、それも無理ではあるまい。御新造様に較べて見ると、泥龜にお月様。

お藤　あい、わたしや泥龜さ。(ト腹の立つこなし。)
お藤　杢助などの目にさへも、較べて見れば泥龜とお月様ほど違ふおさよ、旦那どのゝ現をぬかし家へお歸りなされぬも無理ではないが、家の爲よしやお氣に障らうとも言はねばならぬ女房の役。
お虎　御遠慮なしにおつしやりませ。
お藤　とはいへ言ふたらわたしをば、悋氣深い女子ぢやと、蔭で人が譏るであらう。
お虎　でも、言はずにはをられませぬ。
お藤　(氣を替へて、)まあ何事も後方に。杢助、そなたの部屋を貸してたも。
杢助　穢い所を御承知なら、隠れておいでなさりませ。
お藤　そんなら杢助。
杢助　御新造様。(トお藤奥へ思入あつて、)
お藤　あ、思へば／＼。(ト氣を替へて、)案内してたもや。
ト唄になり三人上手へはひる。これにてこの道具廻る。
(奥座敷の場)＝本舞臺三間の間常足の二重、正面床の間、この上に文臺を載せあり。この下簞笥、置繪の銀襖、上の方に障子屋體、この前に石の手水鉢

續いて四つ目垣、春季の下草、梅の立木、例の所枝折戸、上下建仁寺垣、總て妾宅奧座敷の體。こゝに白蓮、着流し白き毛織の下半纏にてなり、以前の扁福、銀七、三次居並び、廣蓋に平鍋、鉢の物など取散しあり。お米酌をしてゐる酒宴の體。端唄にて道具留る。

扁福　ときに旦那、これはわたくしの朋友で、大俳諧の執心故、今晩連れて上りました。

白蓮　これは〱ようこそおいでなされた、何分お心安う。

銀七　どうぞ扁福同樣に、お引立を願ひまする。

白蓮　してお名は何とおつしやります。

銀七　へい、わたくしは、なに、寶井其角。

白蓮　あのお前樣が。

扁福　いえ〱、その其角の弟子の又弟子で、

銀七　へえ、寶井其角にならひまして、丸井四角と申します。

白蓮　それは面白いお名でござりますな。

三次　然し、顏を見りやあ丸くもなし四角でもなし、たゞ散蓮華を見たやうで、眞中の凹んだ顏だ。

お米　ほんにあなたは、吉六のやうでござりますなあ。

銀七　これは御挨拶、吉六と二幅對とは、ちとお鑑定が違ひイすね。

扁福　これさ、無駄口を利かつしやんな。

三次　そりやさうとおさよさんは、どうなさいました。

扁福　ほんに、先刻からお見えなさいませんな。

銀七　少しも早くお目見得がしたい。

白蓮　さつき本屋の彌三郎が封切を持つて來たが、大方それを見てゐませう。

お米　はい、左樣でござります、もう二三枚讀んでしまふとおつしやりました。

銀七　封切に見惚れてとは、もしや笑本の新版ではないか、ちと氣がもめの吉祥寺。

扁福　これさ、そんな洒落は野暮やお七だ。

白蓮　いや、いつのまにか洒落は御上達だ。

扁福　面目次第もない。

ト端唄になり、奧よりおさよ派手なる妾の拵へにて出來り、

さよ　これはどなたも、ようおいでなされました。

扁福　いや、おさよ樣、いつもながらお見事々々。

さよ　扁福さん、なぶつて下さんすな。（ト言ひながら白蓮

の側へ住ふ。)

三次　もし、花魁おやあねえおさよ樣、この間仲見世で扇屋の遣手に逢ひましたが、二階中でお噂を申しくらしてをりますと言ひました。いやよく喋る婆アさんで、逃げるにやあ逃げられず、まことに恐れ入りました。

さよ　さうでござんしたか、今度お逢ひなら、尋ねて來るやうに言うて下さんせ。

三次　はい、清正公樣へまゐる時、お寄り申すと申しました。

扁福　ときにおさよの君へお引合せ申すは、わたくしの朋友。

銀七　丸井四角と申します者、お心安う。

さよ　はい、此方からお願ひ申します。

お米　さあ皆さん、お杯はどちらでございます。

扁福　いや、お杯はこゝでございますが、もう澤山でございます。

さよ　何もございませぬが、お燗のよいので、も一つお上りなされませいな。

銀七　いえ〳〵、御遠慮いたしませぬて。

白蓮　いや、御酒がお厭とあるならば、四角先生に何か一句お願ひ申したいものだ。

銀七　これは御主人のお言葉でござるが、今晩はちと胸が痛へて。

扁福　そんな勿體をつけずと、何ぞ一句おやんなせえ。

ト文臺を持つて來てなほす。

銀七　これは甚だ迷惑な。

ト言ひながら文臺をひねくりゐる。

扁福　さあ、四角先生、發句を早く。

銀七　承知しました。(ト考へる思入あつて)先づ日いつぱい銀二兩でげッす。

扁福　これさ、十七文字だよ。(ト銀七の袖を引く。)

銀七　なに、十七匁え、さうはふめねえ、高い〳〵。

白蓮　なに、高いとは。

扁福　いやさ、高いと言つたはこの間の短册、それ十哲が九枚まで。

三次　なに短册が九枚ぞろひ、そいつあかうせいだね。

扁福　いや、お前もなか〳〵隅へはおけねえ、十哲を御存じとは御風流なことだ。

白蓮　先生、もうそろ〳〵花の世界でございますな。

銀七　ときに、十哲先生お杯はどうだね。(ト三次へ杯をさ

す。)

三次　杯とは有難え、こいつが來ちやあいよ／＼花見だ。

さよ　もし旦那さん、今年は龜井戸の藤から、木下川の杜若を見せておくんなさいましな。

白蓮　おゝ三次を連れて、一日行かう。

三次　なに、龜井戸かね、そいつあ面白え。

銀七　それから天神の裏へ拔けの吾妻の森にどうだね。

三次　裏背戸と來ちやあ獨じめだ。

扇福　兎角花時分は降りに困るて。

三次　いや雨は眞平だ、坊主を消しやす。

扇福　これは御挨拶。

銀七　それから前は花菖蒲だね。

三次　花菖蒲ならおいでなせえ、ちよつと一めえ引きやせう。

扇福　もし、船しう、お言葉の中だが、菖蒲に引といふ縁語はいゝが、一めえとは何のことだね。

三次　はア、お前花をしながら一めえを知らねえのかえ。

扇福　花の座も月の定座も心得てゐるが、一めえばかりは。

銀七　何のことだか分かりやせん。

白蓮　こりやあお二人の花と三次が花とは違つた話だ、先づ蒔きなほしにするがいゝ。

三次　それぢやあ手八かね。

お米　三次さん、もうお飯かえ。

白蓮　また話が間違つた、はゝゝゝゝ。

杢助　(奥より出來りて、)もし旦那様、おさよ様の親父様がおいでゞございます。

白蓮　おゝ、おさよの親父が來たか。

さよ　杢助どの、わたしの部屋へおいて下さんせ。

杢助　へい、如在なくさうしました。

扇福 銀七　お客様なら、お暇にいたしませう。

三次　わつちも御一緒に行きませう。

白蓮　まゝ、よいではございませぬか。これ三次、手前何ぞ用ぢやあねえか。

三次　へい、ちとお借り申したうございます。

白蓮　おゝ、いくらばかり。

三次　お氣の毒でございますが、五兩お借り申したうございます。

白蓮　何にするのだ。

三次　へい、この間化かされました、狐の穴を塡めるのでございます。

さよ　たゞ気味の悪い、お前狐に化かされなさんしたか。
扁蝠　どんな狐だか知らないが、穴を塡めるに五両とは、
銀七　よつぽど大きな穴と見える。
三次　また話が間違つたかね。
白蓮　何でもいゝからこれを持つて行け、然しもういゝ加減にするがいゝ。（ト紙入より五両包んでやる。）
三次　こりやあ有難うございます。おさよ様旦那へよろしく。
白蓮　（金を紙包みにして、）折角初めてのおいで故、穢くともお泊め申し、歌仙でも巻きたうござるが、今お聞きなさる通り、おさよの親父がまゐつたれば、又後してのことにいたしませう。どうぞ今夜は大磯で御一泊下され、これは少しばかりでござるが、お駕籠賃を呈します。
ト扁蝠、銀七へ金包みを遣る。
銀七　これは〳〵初めて上りまして、このやうな御心配を受けましては。
扁蝠　殊に又わたくしは、毎度お恵みにあづかりますに、これを頂戴いたしては、甚だ恐入りまする。
白蓮　いや、この頃にお点を願ひますから、朱料にお納め下され。

扁蝠　それは有難うございます。（ト金をいたゞき、）定めて拝見事でございませう。先度の巻はどうでございまする。
杢助　（前へ出て、）いやもう生のせゐか、燃えなくて困りきりました。
銀七　これは怪しからぬ殺風景、こちらとはかまが違ひますな。
杢助　なに、いつもの釜で焚きました。
さよ　又杢助どんが分からぬことを。
お米　分からぬ人でございますな。
杢助　なに、をかしいことがあるものか、まきはどうだといふから、生で燃えねえと言つたのだ。
白蓮　おゝこりやあ手前の言ふのが尤もだから、そつちの方へ引込んでゐろ。
三次　そりやあさうと、先生達は大磯は何處へおいでなさるか、お送り申しませうか。
扁蝠　いや、大磯より小磯の彼女へ、両吟で行く積りだ。
三次　大萬か、畜生め。
銀七　たゞ恐れるのは、焼場の匂ひさ。
ト此の時杢助鍋の蓋を取つて、
杢助　嬉しや、鴨の骨が残つた。（ト大きな聲をする、皆々

（びつくりして）
皆々　えゝ、びつくりした。
白蓮　いやもうかれこれ四つでもあらう、小磯へおいでなら早いがお徳だ。
扇禰　左様でござります、道が淋しうござりますから、早くまゐりませう。
銀七　大磯へ行くと違つて、田圃だけ難儀だ。
三次　然し先生はお駕籠だらう。
扇禰　どうして／＼、小磯へ駕籠で行つて合ふものか。
三次　それぢやあ駕籠賃をお貰ひ申して、やつぱり歩いて行くのかね。
銀七　君を思へば徒はだしさ。
杢助　いや、慾ばつた奴だ。
扇禰　左様なれば旦那様。
銀七　おさよ様。
さよ　早くおいでなさんして、お楽しみなさんせ。
扇禰　いや、こちらは苦しみでござりまする。
銀七　たゞ、先方を悦ばせますのさ。
白蓮　いかさま。さうでござりませう。
銀七扇禰　はゝゝゝゝ、どれお暇いたしませう。
三次、さあ、おいでなさい。
ト端唄にて両人花道へはひる、杢助門口まで送り出て、
杢助　をとゝひ來い。
お米　これはしたり、聞えるわいな。
杢助　なに、聞えたとて構ふものか。
白蓮　これ杢助、無駄な口を聞かねえで、おさよが親父にござれと言やれ。
杢助　へい、畏まりました。
さよ　お米はこゝを片附けておくれな。
お米　はい／＼。（ト酒肴を片附ける、杢助奥に向つて）
杢助　さあ、西心様、こちらへおいでなされませ。
ト奥にて今は西心となれる佐五兵衛の聲にて、
西心　まつぴら御免下されませ。
トしんみりとした端唄の合方にて、奥より佐五兵衛の西心坊主装にて頭陀袋、手甲、脚絆、網代笠を持ち出來り、下手へ出て笠をおきて、
旦那様、よい春でござります。
白蓮　西心どのござつたか、さあ／＼これへ／＼。
西心　有難うござります。
さよ　父さん、ようござんしたな。

西心　お、娘が替ることもなうて目出度い〱。
お米　お茶をお上りなさりませ。
　ト茶を汲んで持つて來る。
西心　必ず構うて下さりますな。（ト茶碗を取り思入あつて）旦那樣、年寄の癖でいつも同じ事を申すやうでござりますが、杖柱と思ふこのおさよ、親の爲めの勤め奉公、苦界の辛さに思ひ詰め、廓を脱けてめつさうな、稻瀨川へ身を投げて死なうとしたを折よくも、旦那樣の網船で、お救ひなされて下されたは、阿彌陀樣より有難いお慈悲深い思召し、苦界の勤めが辛ければ、樂にしてやらうとて直に廓の身請をなされ、下男下女を使はせて、何不自由のない今の身の上、あゝ娘は仕合せ者、果報やけでもしひよつと夭死でもせねばよいと、よいにつけ惡いにつけ案じられるは親心。その親までも緣に連れお貢ぎ下さる御親切、何とお禮を申さうやら、これこの通り明暮に阿彌陀樣より先きへ、あなたを拜んでをりまする。（ト珠數を出して泣く。）
白蓮　又親父どのゝ株の禮、もう〱その禮は言つて下さるな、知らぬ者でもかういふことは助けたいがおれが氣性、まして馴染のおさよが事、恩に被るわけはない。さうこなたが來る度々、そんなに禮を言はれては、おれが方で却て迷惑、假にも親子の因みを結ぶは、前生からの緣づくだ。
さよ　ほんに不思議な御緣にて、何から何まであなたのお世話、ようお禮を言うて下さんせ。
西心　いやもう、言葉でお禮は申し盡されませぬ。（ト嬉し涙にむせる思入あつて）あゝ年寄と申しますものは、悲しいことでも嬉しいことでも、涙が先で困りまする。
　ト涙を拭ふ。
杢助　まだ涙より先へ、水ツ鼻がでませうが。
お米　まだ口出しをしなさんすか。
西心　いや、これは杢助どのに當てられました。
白蓮　して、親父どのには何故剃髮いたされた。
西心　はい、ちと菩提を弔はねばならぬものがござりまして。
さよ　父さん、それは誰の菩提を。
西心　さあ、そなたが弟の。
さよ　え。
西心　いやさ一昨年死んだ、婆の菩提に、髮をおろして佛三昧、その日〱はお惠みで何の苦勞もござりませぬ、

朝から晩まで有難いところへお參りでもするのが役、安樂なことでござりまする。

さよ　見れば父さん旅支度で何處ぞへお出なさんすかえ。

西心　さあ、追々暖になつて來る故、善光寺へ參詣せうと、それ故今晩お禮やらお暇乞に上つたのぢや。

白蓮　なに、善光寺へ行かつしやる、そりやあいゝこつたが、然し彼地は名代の雪、三月にさつしやればいゝに。

西心　いえ、もう大がい雪も片附きましたらう。

杢助　どうして／＼、わしらが國の雪といふものは、五月でなくちやあ解けはしねえ、今のやうに淚をこぼしたり洟をたらしたりすると、直に氷柱がぶらさがるて。

白蓮　又杢助が御大そうに、噓半分の國自慢か、はゝゝゝ

に。（トこの時四つの鐘鳴る。）

西心　ありやもう四つでござりまする、どれお暇いたしませうか。

さよ　この頃は物騷なといふこと故、泊つておいでなされませいな。

白蓮　ほんに、明日こつちから門出度く出立さつしやるがよい。

西心　左様なら、御厄介になりませうか。

お米　それがよろしうござりますわいな。

西心　いや、物騷なと申しますれば、鬼薊とかいふ泥坊が、所々へ入つたさうでござります、いやそれで思ひ出したが、去年極樂寺へ入りまして、賴朝樣から納めた祠堂金を、三千兩そつくり盜んだ泥坊が、今に行方が知れぬさうでござりますが、運のよい奴でござりますな。

トこれにて白蓮ぎつくり思入。杢助白蓮へ眼を附ける白蓮思入あつて、

白蓮　そいつは大方上方か、九州筋へ逃げたであらう。

西心　何にいたせ、こなた樣なぞはお金が澤山ござるから、御用心なされませ。

さよ　ほんに、氣味の惡いことでござんすな。

杢助　油斷のならぬは、泥坊ばかりは上邊からは知れぬもの。

白蓮　た。

杢助　いや西心樣、臺所でいつぱいやりませうか。

西心　それは何より有難い、旦那樣の前よりも氣がつまらなくて、却つてうまい。

杢助　ときに鴨の骨は上りますか。

西心　いえ、唯今では大精進。

杢助　しめたり、それではおれ一人。
西心　左様なれば旦那様。
白蓮　ゆつくりと休まつしやい。
西心　どれ、御馳走になりませうか。
　ト端唄にて西心先に杢助鍋を持つて附き、奥へはひる。
お米　もう四つを打ちましたから、お床を延べませうか。
さよ　あい、さうして下さんせ。旦那お片附にしませうか
ら、こちらへおいでなさんせ。
白蓮　だいぶ床急ぎだの。(トお米は上手の屋體へ入る。お
さよは煙草をつけて出す、白蓮喫みながら、)今夜は寒い
から着替へずに寐ようか
さよ　それがようござんす。
お米　(上手より出來りて、)はい、よろしうござります。
　白蓮トおさよ上着を脱ぎ細帯をしめ、身支度をする、
　お米手を附きて、
　左様なら、御機嫌よろしう。
　ト端唄の合方にてお米は奥へはひる、おさよ思入あつ
　て、
さよ　さあ、おやすみなされませいな。
　と立上る、白蓮おさよの腹へ眼を附けて、

白蓮　こう氣のせいか、手前腹が大きいぢやあねえか。
さよ　え、(トびつくりして袖にてかくし、)わたしのお腹の
大きいのは、生得でござんす。
　ト顔を背ける、白蓮腹へ眼を附けながら兩人上手の屋
　體へはひる。と奥より杢助あたりを窺ひながら出來り
　床の間の脇差をそつと持來り、拔放し灯にてとくと見、
　うなづき鞘へをさめ、元の所へおき下手へ來り、
杢助　まだ酒が殘つてる筈だが。
　トあたりへ思入あつて奥へはひる。時の鐘靜かなる端
　唄になり、屋體よりおさよ出て下着の上へ上着を羽織
　り、手水鉢にて手水を遣ひ、簞笥の抽出より位牌珠數
　香爐を出し、文臺の上へ載せ、茶碗に水を汲み手を合
　せて、
さよ　春譽清心信士成佛得脱、南無阿彌陀佛々々。
　トなかみ回向をなす。この内上手障子屋體を明けて白
　蓮窺ふと、奥よりはお藤窺ひゐる。白蓮思入あつて、
白蓮　おさよ、何ををがむのだ。
さよ　え、(トびつくりして仕舞はうとするを、)
白蓮　あゝこれ、仕舞ふには及ばねえ。
さよ　それぢやといふて。

白蓮　はて、遠慮せずにをかむがいゝ。（ト前へ出る。）

さよ　旦那さん、堪忍して下さりませ。

ト泣き伏す。白蓮思入あつて、

白蓮　毎晩おれが寐息を考へ、そつと床を脱けだして、位牌に向つて神妙に回向をなすは親兄弟か、但しは勤めをしてゐた内言交した男の爲か、包まずおれに話して聞かしやれ。

ト白蓮煙草を喫みゐる、おさよ思入あつて、

さよ　これまでお隱し申したなれど、お目立まする上からは何をか包み申しませう、果敢ないこの身の一通りお聞きなされて下さりませ。（ト胡弓入りの合方になりて）この位牌は二世までも言交したる我情人、名も清心と言はれまして佛の道に入つたお人、廓通ひの罪科に繼目の上に御追放、其の折わたしは清心どのゝ胤を宿して身重になり、苦界の勤めも末々はならぬ我身に廓を脱け、後や前の考へなく、どうでこの世で添はれずばと清心どのと諸共に、死なうと覺悟死出の山、三途の川も手に手を取り越えて行く氣に稻瀬川へ、此の身は捨てゝも捨てられぬは、浮世の義理のあなたのお情、御介抱にて命も助かり廓の身請もして下され、まだその上に父さんまでお貰ぎ下さるお志し、世にも稀なる御親切に身重も隱しお寐間のお伽、それがせめてもの御恩返し、多くのお金で廓から身請をなされしわたし故、身體はあなたにお任せ申せど心の内はその時に、入水なしたる清心どのへ仕へる心の尼法師、いつぞはお暇お願ひ申し、菩提の爲めに國國の尊き御寺拜まんと、こしらへおきし袈裟法衣、これ御覽下さりませ。

ト箪笥の抽出より白の着附墨の衣手甲脚絆を出し、白蓮に見せる。お藤もこれを聞いて涙を拭ひ、白蓮感心の思入にて、手に持ちし煙管を捨て、

白蓮　いや、感じ入つたそなたの貞節、傾城に眞實なしとは譯知らぬ、野暮な口から行過ぎたとは、新内節の名文句、あゝどんな人だか清心どのは、死んだあとまでこれほどに思はれるとはその身の仕合せ、嘸これまでは義理故におれと寐るのが辛かつたらう、この貞節を見る上はこれから、同一夜着に寐ても、佛を抱いて寐るのも同じおれも男だ望みの通り、暇をやらう。

さよ　えゝ、すりやお暇を下さんすとな。

白蓮　おゝ剃髮なして心のまゝに、夫と思ふ清心どのゝ跡懇に弔ふがよい。

さよ　えゝ有難うござりまする。

ト奥より佐五兵衛涙を拭ひながら出來りて、

佐五　旦那樣、始終の樣子は次の間で、涙ながらに承はりました。命をお助け下されたまだその上に身請の御恩、それもろく／＼報いもせぬに、尼になり度く思ふなら、暇をやらうとおつしやります、結構過ぎたあなたの仰せ何とお禮を申さうやら、えゝ有難うござりまする。

白蓮　何の／＼、金は世界にいくらもあるもの、この貞節は十千萬兩金を積んでも買はれねえ。

佐五　そのやうにおつしやつて下さりますほど、勿體なうてなりませぬ。これおさよ、そちはおれが娘には生れ優つた志し、喩や草葉の蔭にても、入水なした清心どのが悦んでござるであらう。

さよ　旦那樣のお情で、世間晴れて清心どのゝ菩提をこれから訪はるゝ嬉しさ、善は急げといふからは、今宵直に髮をおろし尼になりたうござりますわいな。

佐五　おゝ幸ひ明日は月こそ替れ、清心どのゝ命日なれば。お經は知らねど出家の姿、おれが剃つてやりませう。

さよ　どうぞさうして下さんせいなあ。

白蓮　そんなら今夜剃髮なすか。

さよ　はい、お許しの出た上からは、

佐五　佛に仕ゆる日頃の願ひ、

白蓮　とはいへ惜しき緣の黑髮、

佐五　剃らば明日より花もなく、

さよ　身は青柳の青道心、

白蓮　出家堅固に、

さよ　旦那樣、

白蓮　おさよ。（ト兩人顏見合せ、ホロリと思入。）

佐五　どりや、剃刀をあてゝやりませう。

ト唄になり、佐五兵衛涙ながらにおさよの手を引立てる、おさよ件の着附法衣を持ち奥へはひる。と奥にてお藤わつと泣く、白蓮びつくりして奥を見て、

白蓮　そこで泣くのは誰だ。

お藤　はい、わたくしでござりまする。

白蓮　そちはお藤か、どうしてこゝへ。（トお藤出來りて。）

お藤　あなたがお歸りなさらぬ故、忍んで今宵參りましたは男を蕩す憎い女と恨みを言はうと存じましたに、思ひのほかにおさよの貞節、まだ年若な身を以て女子の操を立て通し、尼にならうといふ心に恨みも晴れて眞實の姉か妹のやうに思はれ、わたしや可愛しうてなりませぬ。

かういふ譯とは知らぬ故、これまであなたに御異見を言うたはどうぞ旦那様、お許しなされて下さりませ。
白蓮　日頃おぬしが兎や角と異見がましく悋氣をするも、尤もだとは思へども、今も聞いてゐる通り、賴り少ねえあれが身の上、かういふと言譯らしいが色氣ばかりといふではねえ、死なうとしたを助けた故、貢いでやらにやあならぬ仕儀、これからはおれも亦夜泊り日泊り止にして家にゐるから案じるな。
お虎　(奥より出來りて、)御新造様嘸お嬉しうござりませう、憎い〳〵と思うたお妾が坊主になつてしまふからは、これからはあなたの世界、わたしまでもとも〴〵に、嬉しうて〳〵ならぬわいな。
お藤　これはしたりどうしたもの、そのやうな事を言やつて、わたしでも言はせるかとおさよどのに聞えて見や、顏向がならぬわいの、ちとたしなんで口を聞きやいの。
お虎　おや〳〵御新造様、そりや何をおつしやります、わしは氣が弱くて言へぬ故、そなた思入れ言うてくれと、おつしやつたぢやござりませぬか。
お藤　まだ〳〵言やるか、だまらぬかいの。
お虎　それぢやと申して、あれほどあなたが。
お藤　まだ口答へをしやるのか。旦那様、まことに口を利き過ぎますから、三月は暇をおやりなされませ。
お虎　こりやまあどうしたといふのだらう。
　ト奥より杢助とお米出來りて、
杢助　もし旦那様々々、おさよ様が髮を剃り、尼法師にならつしやりました。惜しいことぢやあございませんか。わしがこんな不器用者故常不斷旦那様に叱られるのを、おさよ様が蔭になり日向になりお詫をして下さるのみか、酒が殘つたこれを飲みやれ、肴が殘つたこれを喰べれと、お情深いお心立、いかに菩提の爲めだとて、尼になるとは惜しいこと。
お米　杢助どのゝ言ふ通り、取分け足らぬわたくしを、お米かうせいあゝせいとお目をかけて下されたおさよ様がお髮をおろし、諸國修行においでなされ、長いお別れになりますとは、悲しいことでござりますわいな。
杢助　おゝこなたも悲しいか、おれも悲しい。
　ト兩人泣く。白蓮思入あつて、
白蓮　おゝ尤もだ〳〵、惚いやうだが手前達より涙をこぼさぬおれが心、賤な女に別れても三百落した心持、まし

ておさよは、（ト言ひかけお藤の顏を見て、）こりや御新造の前では差合であつた、はゝゝゝゝ。（ト笑に涙をまぎらす思入。奧にて西心の聲して、）

西心　さあ〳〵、娘早く來やいの。

ト奧より西心先に、おさよ墨の法衣、手甲、脚絆、淺葱の帽子を冠り出て、恥かしさうに下手へ俯向き住ふ、西心思入あつて、

さよ　旦那樣、西心めが剃刀で、目出度く剃髮いたさせました。

西心　願ひの通り尼となり、浮世を捨てるもあなたのお蔭。

さよ　有難うござります。（ト皆々おさよを見て泣く、白蓮不便なといふ思入あつて、）

白蓮　お藤見やれ、僅な内にさつぱりと、替り果てたる墨染姿。

お藤　爪繰る珠數の玉よりも、淸いお前の貞節に、わたしや感心しましたわいな。

さよ　お恨みのあるわたくしに、有難いそのお言葉。

西心　とてものことに親父がお願ひ、ぶしつけなことながら、斯うなる上は娘をば、御新造樣の妹にはなされては下さるまいか。

お藤　おゝ夫は何より易いこと、思ひたつたが吉日なれば後とも言はず今こゝで、盃をして遣りませう。

西心
さよ　すりや、お聞屆け下さりますとか。

お藤　お虎、その杯をこれへ。

お虎　畏りました。

ト杯、銚子を持つて來る、お藤杯を取上げる。

お藤　妹なればわしから先へ。

ト杯を出す、お虎酌をする、お藤呑んでおさよにさす、おさよ呑んで、

さよ　憚りながら。（トお藤へさす、呑んで、）

お藤　これで今日から姉妹。

西心　親父が望みもかなひまして、

さよ
西心　有難うござりまする。（トおさよ思入あつて、）

さよ　もし皆さん、今までのお世話になつたお禮やら、又二つにはわたしが形見、（ト懷より紙に包みし簪をお米に、櫛をお虎にやり、）古びたれど櫛、簪、これをさして下さんせ。杢助どのは男のこと故、少しなれども置土産。

ト金包を杢助にやる。

お米　そんならこれをお形見に。

お虎　わたくしにまで下さりますとか。

杢助　止さつしやればよいに、又お金。こりやあ煙草を買

ひますのかね。

お米　何を買ふともお前の好、おさよ様からそれはお形見。

杢助　えゝ有難う、

三人　ございまする。

さよ　思ひ出す日があつたなら、お念佛を言うて下され。

三人　はあゝゝゝ。(ト泣く。)

西心　さ娘、お暇しようか。

白蓮　親父どの、ちよつと待つて下せえ。(ト紙入より金を出し、紙に包みて)言はゞ目出度き法の旅立、少しなれどもこれは餞別。(ト金包を西心にやる、西心取上げて)

西心　これをお貰ひ申しましては、

白蓮　はて、行く先とても定めなき、長の旅路のことなれば、頼みになるは路用の金。

西心　何から何まで。

西心 さよ　有難うございまする。

お藤　何はなくとも明日の朝、赤の御飯を炊かうから、祝うて出立して下され。

さよ　お志しではございまするが、この姿を人様にお目にかけるも恥かしければ、

お藤　聞けばそなたは身重とやら、女子の大役案じらるれば、どこへなりとも落附いたら、わたしの所へ手紙でなりと。

さよ　きつとお報せ申します。

西心　左様なれば、

西心 さよ　御機嫌よろしう。

白蓮　二人も無事で。

杢助　又鎌倉へお歸りを、

皆々　お待ち申してをりまする

ト西心おさよ平舞臺へ下り、門口へ出かける。時の鐘。思入あつて、

西心　行方定めぬ長旅に、

さよ　これが別れにならうやら知れぬ浮世の仇櫻、

白蓮　派手な姿の盛りの花も、

杢助　夜半の嵐にあらねども、

お藤　散りて行く身は墨染に、

さよ　替りし頭を旦那様に、

西心　ト西心おさよの頭巾を取り、青頭を見せる。白蓮これを見て、

白蓮　扨も殊勝な。(トおさよと顔見合せる。)

さよ　あれ、(ト恥しき思入にて、傍にある西心の網代笠を冠る、これを木の頭。)お恥かしうござりまする。

ト笠を冠りしまゝ白蓮を見る、白蓮はお蔦に感心なことだといふ思入、皆々よろしく、本釣鐘の明六つ、烏笛、鳥追の合方にて、

ひやうし幕

三　幕　目　　雪の下白蓮本宅の場

(役名――鬼あざみ清吉、白蓮實は大寺正兵衛、下男杢助實は寺澤塔十郎、夜蕎麥賣り仁八、合長家どん七、同勘六、捕手。十六夜おさよ、正兵衛女房お藤。)

(白蓮内の場)――本舞臺三間の間常足の二重、障子欄間、網代の蹴込、正面瓦燈口太鼓張の襖、右手地袋戸棚、左手腰張りの茶壁上の方に障子屋體、例の所屋根附の門口、下の方後へ下げて九尺の玄關、間平棧に戸閉あり、三十郎(白蓮役)の替紋の高張提灯、總て鎌倉雪の下白蓮本宅の體。こゝに夜蕎麥賣り仁八弓張提灯を前におき、この後に合長家のどん七、勘六鐘と太鼓を傍へおき住ひゐる、この見得鞠唄にて幕明く。

仁八　お頼み申します。

どん勘六　お頼み申します、お頼み申します。

仁八　このやうに呼ぶに御返事のないは、どなたもおいでなされぬか知らぬ。

どん　こなたの娘のお虎どのが、一昨日の晩駈落をしたが外に女中衆がないと見える。

仁八　お妾の方に一人あつたが、これはお虎と仲が悪くつて、下つたといふことだ。

勘六　それぢやあ嘸こちら様でも、御無人でお困りだらう。

仁八　何にしろ、もう一ぺん呼んで見よう。

三人　お頼み申す、お頼み申す。

ト奥にて「どうれといふ」杢助の聲して、奥より杢助出來りて、

杢助　おゝ、誰だと思つたら、お虎どんの親父どのか。

仁八　これは杢助どのか、お前には禮を言はねばならぬ、お虎が駈落をいたした故嘸御用が多からう、まことにお

氣の毒でござります。

杢助　いやもう、お虎どのではひどい目に遭ひます、朝むつくり起きて飯を炊くから、夜ごろりと寐るまでは、水も汲んだり米も磨いだり、買物もしたり使もしたり、何でもかでも杢助々々、實に二人前の働きだが、給金でも喰物でも二人前はくれねえ、こんなうまらねえ事はねえ。

仁八　わたくしがどうかしてをりますと、お禮の仕樣もござりまするが、何を申すも夜蕎麥賣り、その日その日の仕込みに追はれ、長じけでもくひますと、三文の錢にも困ります。

どん　たゞ憎いのはお虎どの、父さんにも難儀をかければ御主人樣にも難儀をかけ、

杢助　またその上に長屋の者にも、鉦太鼓で歩くやうな、こんな難儀をかけまする

勘六　さうして行方が知れたかな

仁八　三日此方捜しますが、今に行方が知れませぬ、何でもこれは男があつて逃げましたと見えまする。

どん　世間には物好な人が多くあるかして、

勘六　あんなでゞふくを連れて逃げるとは、どんな男でござりませう。

仁八　杢助どのは朝夕に傍にござつたことなれば、何ぞ怪しいことはござりませなんだか。

杢助　何も怪しいことはなかつたが、旦那樣のお妾であつたおさよどのゝ親父どのが、今では名越の無緣寺に墓守をしてゐるが、その寺の穴掘にべらぼうに淨瑠璃の好な奴があるが、御新造樣のお使にそこへ行つて歸つて來ると、淨瑠璃の噂をするが、もしその坊主が情人ぢやあねえか。無緣寺へ行つて聞いて見さつしやい。

仁八　そんなことかも知れませぬ、今言はしつたおさよどのは尼になつて、諸國修行に出られたと聞きましたが、歸られましてござりますか。

杢助　さあ、親子連で出かけたが、聞けば箱根の裏道で、惡漢どもにおさよどのを連れて行かれて、親父どのは仕方なく／＼歸つて來て、今いふ名越の無緣寺へ墓守に入つたのさ。

仁八　(思入あつて、)あゝわしも娘をなくしたので、思ひやらるゝその親仁、嘸寐覺が惡からう　子は三界の首枷でござりまする。

　　ト奥よりお藤御新造の拵にて出來りて、

お藤　おゝお虎が親父どの、ようござつたの。

仁八　これは〳〵御新造様、まことに申譯もござりませぬが、今に行方が知れませぬ、お間をおかゝせ申しまして、済まぬことでござります。

お藤　いやも、間のかけるは仕方がない、どうぞ早く知ればよいが、嘸そなた心配であらう。

仁八　御推量下さりませ、今日で三日駈歩き、生業もいたさぬ上に、小遣錢をつかひまして、これから又始めますに、仕込みの元手に困ります、これといふのもお虎故、不孝な奴でござります。

トこれを聞きお藤思入あつて、懐の巾着より金を出して紙に包み、

お藤　それは嘸困るであらう、これは少しばかりぢやが、元手とやらにしたがよい。(ト遣る。)

仁八　これは〳〵有難うござりまするが、お間をおかゝせ申した上、これをお貰ひ申しましては。

お藤　少しばかりぢや、取つておいたがよい。

仁八　でも、勿體なうござります。

杢助　はて、御新造様から下さるお金、煙草でも買ふがよい。

仁八　へえ、有難うござります。

どん　ときにもうお暇にして、向う川岸をぐるりと廻らう、

勘六　又お貰ひ申したお金をあてに、どこぞで一ぱいやらうではないか。

杢助　えゝ如在ねえ、直に附込んだな。

杢八　あゝこなた衆へお禮がてら、一合づゝ買ひませう。

どん　酒と聞いてはこたへられぬ。

勘六　もうお暇しようではないか。

杢助　えゝ呑みたがる奴等だな。

お藤　これはしたり、失禮千萬な。

仁八　左様なれば御新造さま。

お藤　知れたら直に知らして下され。

仁八　畏まりました。(ト三人門口へ出て)

どん　迷兒の〳〵、

三人　お虎やアい。

杢助　えゝ、こゝで呼ばずともの事に。

三人　迷兒やアい。(ト鉦太鼓をたゝきながら花道へはひる。)

お藤　はんにお虎もどこにゐやるか、親の苦勞をするにも構はず困つたやつではあるわいの。それはさうと今しがた、誰か來たではなかつたかいの

杢助　はい、伊勢屋の小次兵衛どのが、此間の五兩を書替へ十兩にしてくれと、頼んでまゐりました。

お藤　おゝさうであつたかいの。

杢助　それから芝居者だといふ奴が四五人連でまゐりまして、連印でお借し申した五十兩、初日まで待つてくれと斷りにまゐりました。

お藤　あゝよし／＼、旦那樣へさう申さうわいの。

杢助　いやも利息も持たずにしやあ／＼と、お先煙草にわしが煙草を、いくら呑んだか知れませぬ。あんな奴が來ちやあ、一分買つてもたまらねえ。

お藤　そのやうなことを言ふものではない、無くばわしが買つてやらうわいの。

杢助　そりやあ有難うございますが、今度からもうお貸しなされますな、芝居者くらゐ狡い者はござりましねえ。

お藤　そんな憎まれ口を利かずと、居睡りでもせぬやうにしやいの。

杢助　合點でござります。

ト好みの端唄通り神樂になり、花道よりおさよ毬栗の延びし雲半纏がけ世話裝、清心――今は鬼あざみ清吉世話裝三尺帶、尻端折り、兩人とも頰冠りなして出來り、花道にて、

清吉　こうおさよ、手前が世話になつてゐた、白蓮の家は何處だ。

さよ　大きな聲をしなさんな、向うだよ。

清吉　むゝ、いゝ家だな、高張附の玄關構へ、名目金の貸附所だな。

さよ　何だか知らねえが、大そう金があるよ。

清吉　それが何よりこつちの附目だ。

さよ　ほんに緣といふものは、おつなものだの、死んだとばかり思ひきつて、坊主にまでなつたわたしが、髮を延して、死んだお前とかうして一つになるといふなあ、どうしたといふのだらう。

清吉　これがほんの腐れ緣だ、おれも手前故にやあ構を喰ひ、頭は段々延びて來るが、種はすつかり耗つてしまつた。其所からふつと氣が替り、惡いことは覺え易く僅一年經たねえ中に、肩書の附く身體になつた。朱に交はりやあ赤くなると、いつか手前も板の間かせぎやら、ゆすりやら、いゝ稼ぎ人になつたなあ。

さよ　こんなこともわたしの家ぢやあ、株のやうになつてゐたが、意氣地がねえからしなかつたが、お前がやれこ

れ勧めるから、こはん〳〵ながらするやうなものゝ、然しほんの附焼刃、さぞ皆さんのお心ぢやあ止せばいゝにと思召すだらう、それを思ふと氣恥かしいよ。

清吉　そりやあおれだつて同じことだ、ゆすりかたりや盗み人は鼻が高いか眼が大きいか、凄みな所がなくちやあいけねえ、見るかげもねえけちな小野郎、それせえもまだ一つ竈、ほんの肚胸でやる仕事だ。手前もおれも縁あつてから一つになつたからにやあ、互ひに力になり合つて、今年やあ一番稼がうぜ。

さよ　まあ手始めに向ふへ行つて、旦つくにぶツつかつて見よう。

清吉　おれも一緒に入らうか。

さよ　お前は門に待つてゐねえ、わたしが先へしかけるから。

清吉　えゝ、黒人ツぽくなつて來たな。

ト両人本舞臺へ來る。この内お藤は行燈の傍で本を見てゐる杢助は居睡りをしてゐる。おさよ清吉に囁き、門口から、

さよ　はい、お頼み申します〳〵。

お藤　これ杢助、御案内があるぞよ。

杢助　はい（トびつくりして寝起き）どうれ。

ト大きな聲をして目をこすりながら門口を明ける、おさよ腰を屈め辭儀をする、杢助見て、

手の內なら今日は出ねえ、明日が出日だから四つ前に來い。

さよ　いえ、お手の內ではござりませぬ、旦那様か御新造様にお目にかゝりたうござりまする。

杢助　旦那樣か御新造樣に逢ひたい、途方もないことを言ふ奴だ。手の內はない、通れ〳〵。

さよ　どうぞ、さうおつしやらずと。

杢助　えゝしつこい、通れといふに。（トおさよを突く、おさよ思入あつて）

さよ　なんだね杢助どん、あんまり手荒くしておくれでないよ。

杢助　なに杢助どんだ、杢助どんもよくできた、乞食に近附があるものか。

さよ　ねえことがあるものか。（ト手拭を取る、杢助見てびつくりなし）

杢助　や、おさよどのか。もし御新造様、おさよどのがまゐりました〳〵。

お藤　なに、おさよが來やつた。（ト立上り）おゝよくたづねて來てくれた。さあ〳〵、こつちへはひりや。

さよ　御新造様、まつぴら御免なされませ。

トおさよやさしく辭儀をしながら内へはひり、下手へみすぼらしく住ふ。

お藤　まあ、どうしやつた、案じきつてゐた、あれぎり居所が知れぬ故、常不斷旦那様と噂ばかりしてゐたわいの。

さよ　有難うござります、旅へ出まして父さんにはぐれ、それから惡い人の手にかゝり、まことに難儀をいたしました。

お藤　おゝさうであつたか、道理こそ替り果てたるそなたの姿。

杢助　わしが見違へたのも無理ではあるまい。

お藤　さうしてあの折は身重であつたが、どこで身二つになりやつたぞいの。

さよ　箱根山にをります内、首尾よう小兒を產みましてござりますが、乳が細うござります故、里に遣はしてござりますわいな。

お藤　それは仕合せなことであつた。して生れたその子は。

さよ　はい、男の子でござります。

お藤　おゝそれは〳〵目出度いことぢや、そなたの親の西心どのが聞かれたなら嘸悦び、早う知らしてやりたいものぢやわいな。（トこれを聞き思入あつて）

さよ　まだ父さんに逢ひませぬが、それならこちらへ上りますか。

杢助　この間から度々來なさる。

さよ　左様でござりましたか、これも旅で別れたぎり故、どこに今はござんすやら、居所さへも存じませぬわいな。

杢助　今では名越の無緣寺といふ、千人塚のある寺に墓守をしてゐなさるよ。

さよ　それは有難うござります、お蔭で居所が知れました。早速たづねてまゐりませう。

お藤　おゝ早うたづねて行くがよい、親の身ではどのやうに案じてゐるか知れぬわいの。

さよ　まことに考へて見ますると、不孝なことでござりまする。

お藤　まだまあ先も長い體、これから孝行にしやいの。

さよ　有難うござります、さうして旦那様はお家でござりまするか。

お藤　おゝ、奧に樂寐をしておゐやわいの。

さよ　左樣なれば御新造樣、ちとお願ひがござりますが、お聞きなされては下さりませぬか。
お藤　何だなおさよ改まつてお願ひの何のと、姉妹分の杯をしたからは、そなたは妹わしは姉、遠慮なく言やいの。
さよ　其のお願ひと申しまするは、鎌倉へまゐりましても頼ります所もござりませねば、どうぞお邪魔でもわたくしを、臺所の隅へなりと、お置きなされて下さりませ。
お藤　おゝそれは何より易いこと、親父どのゝゐる所とてお寺の内のことなれば、女を置くわけにも行くまい、こちそなたの家と思ひ、心置なくゐるがよい。
さよ　御親切に有難うござります。
お藤　然し以前が以前故、ちとわたしの氣が揉めるわいの、ほゝゝゝ。
さよ　御新造樣、御常談ばかり。いえまだその上に、もう一人お願ひ申したうござりまする。
お藤　もう一人とは連のお人か。
さよ　はい、左樣でござります。
お藤　そりやどこにゐなさるのぢや。
さよ　表にをりまする。
お藤　何故こちらへお連れ申さぬのぢや、杢助お呼び申して來や。
杢助　はい、畏まりました。（ト門口へ出て、清吉を見て）おさよどのゝお連はお前かえ。
清吉　あい、わたしでござります。
杢助　はて、わりい風な。さあ、こつちへ入らつしやれ。
清吉　御免なせえ。
ト手拭を取りて清吉内へはひる、お藤見てびつくりし氣味の惡き思入。
お藤　そんならお前が。
清吉　へい、おさよが連の者でござります。
お藤　杢助、旦那樣をお呼び申してくりや。
杢助　はい、畏まりました。
ト立ちかゝる、この時奥にて）
白蓮　いや、來るにやあ及ばぬ、今そこへ行かうよ。
ト奥より白蓮黑のきめ頭巾、被布、釣瓶形の煙草盆、煙管の入りし煙草壺を持ち出來り、
おゝおさよ來たか、久しぶりであつたな。
さよ　これは〳〵旦那樣、いつもながら御機嫌よろしう、お目出度うござりまする。
白蓮　あい〳〵。（ト言ひながらよき所へ住ひて）おさよも

達者で仕合せだ。

さよ　有難うございまする、唯今御新造様に承はりますれば、又々親父が上りまして御厄介になりますさうでござりまする。

白蓮　なんの、厄介といふほどのことでもない。

お藤　もし旦那、今おさよがまゐりまして、此家へおいてくれと申します故、泊めてやらうと思ひましたら、あのやうな連のお方があるさうでございますが、どういたしませうね。

杢助　喰ひつぶしは少ねえがいゝ、飯を炊くおれが難儀だ。

白蓮　やかましい、口出しをするな。（ト清吉に向ひ思入あつて）あゝそんなら、お前がおさよの連かえ。

清吉　へえ、左様ならあなたが旦那様でございますか、これは初めましてお目にかゝります、どうぞお心易うお願ひ申します。

白蓮　これおさよ、このお方は親戚の衆か。

さよ　はい、これはわたしの、（ト思入あつて）亭主でござります。

白蓮　え、亭主だと。（ト思入。）

お藤　そんならおさよは、夫を持ちしか。

杢助　あゝ似た者は夫婦とて、坊主の亭主に坊主の女房。

白蓮　何にしろ、それはまあ身が堅まつていゝことだ。

清吉　御迷惑でも旦那様、女房の縁でわたくしも、どうぞおいて下さりませ。

白蓮　そりやあ品によつたらば、おいて上げまいものではないが、してこなさんの名は何と。

トこれにて清吉思入あつて、

清吉　御新造様とこのさよと姉妹分の上からは、旦那様とわたくしも言はゞ兄弟、弟故包み隠さず申しますが、（ト左りの腕を捲り、鬼薊の彫つてあるを見せて）御覧の通りこの腕に鬼薊が彫つてあるので、鬼薊とも言ひますりやあ、根が清心といつた坊主故、鬼坊主とも渾名をいふ、清吉といふ坊主がへりさ。

トこれを聞き皆々ぎよつと思入。

白蓮　あそんならおさよが情人であつた、清心といふ御出家が、今名の高い鬼薊清吉であつたるか。

清吉　左様でございまする。

お藤　さうしてお前の生業は。

清吉　なに、生業かえ、根が遊び人でございますから、これが稼業といふこともございませぬ。先づゆすりかたり

ぶつたくり、俗に言やあ盜人さ、習ふより慣れろと
やらで、わつちにつれて今ぢやあおさよも、板の間ぐら
ゐに稼ぎやす。ト此邊より段々凄みに言ふ。）

さよ　あれさ、そんなことを姉さんの前で、案じなさるか
らお言ひでないよ。

清吉　ほんに、いゝ妹をお持ちなすつて、仕合せなこと
だ。

杢助　そんなら二人は泥坊か。（ト大きな聲をする。）

清吉　えゝ、大きな聲をするなえ、盜人は言はれえでも知
れた事だ、惡い人にでも聞かれて見ろ、直におれに繩が
かゝらあ。さうなる日にはこゝは鋪、手前達まで引合だ
ぞ。

杢助　それだといつて泥坊だから。

白蓮　これ杢助、返してもいらぬ口出し、默つてゐやれ。

杢助　へゝい。

　ト杢助清吉に眼を附ける、おさよ思入あつて、

さよ　姉さん、いつぷくおくんなせえな。

お藤　あゝ、煙管がこゝらに。（トあたりを搜す思入。）

さよ　無けりやあ旦那お貸しなせえ

白蓮　さあ、喫みやれ。（ト煙管の入りし煙草壺を出す。お
さよそれを喫みながら。）

さよ　毎晩喫んだ旦那の煙管、久しぶりでの御馳走にわた
しやあ往時を思ひ出すよ。（ト吸附けて出し。）旦那、いつ
ぷく上げようかえ。

清吉　これ、亭主の前で吸附煙草、ふざけたことをしやあ
がるな。

さよ　七兩二分取つて上げらあ、默つておいでよ。

清吉　どうして〳〵、旦那にやあ御恩になつた手前の身體、
日外アお禮を申さうと思ひ思つてやつと來やした。前後
見ずの無分別に此女を連れてどんぶりと、稻瀬川へ身を
投げたその時旦那の網へかゝり、助かつたが、此女の仕
合せ、直に廓の方を附け、親父の世話までして下すつた
その親切に引替へて、泊瀬小路の妾宅で毎晩々々を伽をさ
して、腹さん〴〵なぐさんだ揚句の果がお爲ごかしに、
死んだ男の菩提を訪へと姉妹分の氣休めに、僅な路用を
手切にくれ、坊主にして突出すたあ隨分酷ひ仕方だね。

さよ　きつとお禮は申します。

白蓮　（思入あつて、）いや、その禮は受難い。おさよが何
と言つたか知らぬが、こなたの菩提を弔ふ爲め剃髮した
いとおれへの賴み、死んだ男に操を立て、あゝ女郎には

感心なと思つた故に望みをかなへ、高金出して請出した
その身に暇をやつたのは、そつちは何と思ふか知らぬが、
わしは随分男の積りだ。
さよ　なるほど、口は調法なものだ。さう聞くと尤ものや
うだよ。
お藤　（これを聞きむつとして、）これおさよ、口は調法と
は何のことだ、剃髪ばかりか姉妹の杯したもそつちか
ら親父どのゝ頼み故、わたしが妹にしてやつたを、よも
や忘れはせまいがの。
杢助　おゝそれ〳〵、その時宵に御新造から煙草の錢と一
分貰ひ、又こなたから形見と言つて二分貰つたは忘れは
せぬ。しめて三分今もつて褌に包んで持つてゐる、嘘な
ら出して見せようか。
　トこれに構はず、おさよお藤に向つて、
さよ　もし姉さん、よくそんなことをお言ひだね、非業に
死んだ男の爲め坊主になつて菩提を訪へと、往生づくめ
で剃らしてしまひ、妹分にしてやるから困つた時はいつ
でも來いと、情ごかしに突出したも元はと言やあお前の
嫉妬、お藤でそれからぐれ出して、どんな苦勞をしたか
知れねえ、なんぼわたしがお心好しでも、さう言ひかけ
をなすつちやあ、姉さんとは言はさないよ。
お藤　えゝまあそなたはいつの間に、そんな心になつたの
ぢや、何でわたしがそなたに剃髪、すゝめさせよう譯が
ない。
さよ　なに、ねえことがあるものか、嫉妬故にさせたのだ。
お藤　假令何と言はうとも、わたしやそなたに。
さよ　いえ、お前だ〳〵、お前に坊主にされたのだよ。
　ト大きな聲をする。
清吉　えゝこれ、やかましい、靜にしねえか。ゆすりかた
りのやうで見つともねえ、大きな聲をするなえ。
白蓮　お藤、おぬしも默つてゐやれ。
お藤　それぢやというて。
白蓮　はて、言ふだけ無駄だわえ。
清吉　もし姉さん、堪忍してやつておくんなせえ、つまら
ねえことを言ひ合ふのも姉妹だと思ふからの心安でござ
ります、これから何年一緒にゐて、お世話になるか知れ
ねえ身體、然し唯、喰ひつぶしてゐられめえ、お玄關
番でも勤めやせう。
さよ　ほんに、こんな頭にされた此のうめくさにやあ、も
し旦那可愛がつて貰はにやあ合はねえよ。（ト白蓮の顔を

見て思入、なんだなお前、眞面目な顔をして、今でこそこんな姿に、愛想が盡きたか知れねえが、これでもお妾でゐた時に、お側をした仲ぢやあねえかな、そんな怖い顔をせずと、笑ひ顔をしてお見せな、

ト肩にかけし手拭を取つて白蓮の顔を打つ、お藤むつとして、

お藤　あれまあ、あんなことを（ト立ちかゝるを、）

杢助　あもし、默つておいでなされませ。（ト留める。）

白蓮　むゝ、そりやあ以前の恩により、二人とも此の家においてやるまいものでもないが、御室の御所の貸付所、見る通りの玄關構へ、どうれといつて取次に毬栗頭で出られもしまい、いつたん約束したからは、厭とは言はぬがその頭が、人並になつたなら、尋ねてござれおいてやらうわ。

清吉　へん、氣の長いことを言ひねえな、明日が日知れねえ二人が身の上、こゝに居候にゐてえからつて、この髪の延びるまで、まごまごしてゐられるものか。

さよ　さういふ身性のわたし等故、家へおくのが怖いのか、そんなに恐れることはねえ、姉妹分になつたからは、もしもの時は口一つで連れて行かうと行くめえと、そりやあ此方の了簡さ、氣まづいことをしなさりやあ、いやでも一緒に抱込むよ。

清吉　これこれ一緒に連れて行くの抱込むのと、そんな野暮なことを言ふなえ、今時は流行らねえ、行きやあ隱居と立てられて、見舞品の精進を喰ふ樣だが、呆れるだけは行きたくねえ、これが地金だ察しずと、寺へおいておくんなせえ、それともこんな頭故玄關附にや不釣合なら、延びるまで旅へ行くから、路用を貸しておくんなせえ。

ト清吉思入、白蓮こなしあつて、

白蓮　むゝ、その頭の延びるまで旅へ行くとあるならば、澤山のことは出來ないが草鞋錢ぐらゐなら、貸すといふのも面倒故、熨斗を附けて祝ひませう。

さよ　それでこそ同胞の誼、澤山祝つておくんなせえ。

白蓮　然し、當つて碎けろだ、いくらほしいかその額を、

清吉　さうさ、これから何處といふ當もなけりやあ、草鞋錢も端金で貰つちやあ足らねえから、熨斗を附けて百兩くんねえ。

お藤
杢助　えゝ、（トびつくりする。）

白蓮　むゝ、たつた百兩でいゝのか。

清吉　えゝ、
白蓮　易いことだ。お藤、手箱を持つて來やれ。
お藤　はい。
ト戸棚より手箱を持つて來る、白蓮錠前を明け内より百兩包みを出し、
白蓮　さあ、望みの通り百兩。
ト清吉の前へ出す、清吉びつくりし、おさよと顔を見合す、
清吉　こりやあ思ひがけねえ。(ト金を取る。)
杢助　やあ、草鞋錢といふのは百兩か、でも高い草鞋だな煙草の錢に一分貰つたを、大そうなことゝ思つたら、いやはや魂消たことだなあ。
トこの内清吉とおさよはよく呉れたといふ思入、清吉ふと百兩包の封印を見て合點の行かぬ思入。
清吉　や、この包みの封印は。
白蓮　えゝ。(トぎつくり思入。)
清吉　こりやあ極樂寺の印形だが、此の金は何處から出やしたね。
白蓮　さあ、それは。
清吉　こいつあ話が面白くなつて來たわえ。(ト思入あつて)此の金があるからにやあ、百兩ばかりの目くされ金草鞋錢にやあ入らねえわえ。ト白蓮の前へ投出す。
白蓮　して何ほど欲しいといふのだ。
清吉　三千兩貰ひてえ。
白蓮　なんと。
清吉　まだこのおれが極樂寺で役僧をしてゐた時分、覆面頭巾に拔身で押込み、賴朝公から奉納の祠堂金の三千兩盜んだ奴の行方が知れず、その疑ひでおれが縛られ、つひにやあ女犯が露はれて谷七郷を構への追放、いはゞ敵のその盜人、今日が日までも知れねえで惡事に運のいゝ奴と思つてゐたが知れねえ筈だ、定紋附の高張に玄關構への貸附所、御室の御所の家來分、帶刀をする旦那衆が大泥坊とは御詮議なさる御代官でも御存じあるめえ。
ト思入にて言ふ、白蓮ぢつと思入。
さよ　おや〳〵、それぢやあ旦那が三千兩極樂寺で盜んだのかえ。人は見かけに寄らねえものだ。道理こそ金の遣ひぶりがいゝと思つた。然しこれから兄弟なり、又仲間なりわたしらも、氣がおけなくつてとんだいゝ、男は男夜働き女は女相應に、姉さんこれから連立つて、板の間稼ぎに歩かうね。(ト思入、この内杢助腹の立つ思入に

て〕
杢助　うぬこの坊主返りめ、言はしておけばさま〴〵なことを、何處の國にか旦那樣を、三千兩取つた泥坊なぞと何を證據にぬかすのだ。
清吉　やかましいやい、椋鳥め、證據のねえことをいふものか。
杢助　して〳〵證據は何が證據だ。
清吉　證據といふは外でもねえ、頼朝公から納つた祠堂金の三千兩、封印捺したはおれが役、知らねえ者が見た日にやあぶつこぬきの三文判、字性も朧に分からねえが、寺にゐたゞけ餘に見えすく證據の三千兩、この封印があつたからにや目ぐしは拔けねえ大泥坊、睨んだ事ア五分でもすかねえ、僅七分か一寸のこの封印がたしかな證據印形捺して請合はう。
ト これを聞き、杢助扠はといふ思入あつて、わざと立ちかゝり、
杢助　まだ〳〵そんな僞りごと、どこの判やら知れぬものを言ひかけをして、盗人呼はり、出る所へ出れば分かることだ。うぬ、ふん縛つて連れて行くぞ。
清吉　面白え、縛るなら縛つて見ろ、おれを突出しやあ夫婦は元より汝等まで、珠數繋ぎにして引いて行くぞ。
お藤　でもまあ、あんな憎いこと、
杢助　うぬ、どうして、くれう。
ト 立ちかゝるを白蓮留めて、
白蓮　これ〳〵杢助、手前達の手に合ふやうな、そんな安い人ではない、然し何と言はうとも此方に覺えがないことなれば、惡い事も恐ろしい事もない、手前達は構はずと奧へ行つてくりやれ。
杢助　いえ〳〵行きませぬ、旦那一人おいては、どんなことをしようもしれぬ。
白蓮　はて、惡い人は人だけに又分かりのいゝものだ、案じずと行けよ。
杢助　それだといつて。ト 言ふを白蓮留めて〕
白蓮　これ〳〵お藤、おぬしもこゝで話を聞くと、却つて案じられるから、杢助と一緒に奧へ行つて、こゝへ來ないやうに留めておいてくれ。
お藤　でも、あなた一人こゝへおいては。
白蓮　ちつとおれが了簡があるから、案じずと行つてくれ。
お藤　どうやら、それでも。
白蓮　はて、行けといつたら行かねえのか。(ト白蓮きつと

言ふに、兩人是非なく〕
お藤　杢助來や。
杢助　はい。〔ト淸吉を見て〕いけ太え奴だなあ。
　ト唄になり杢助白蓮と淸吉へ眼を附け、思入あつてお藤と共に奥へはひる。時の鐘。白蓮立上り暖簾口より奥をとつくと見て上下へ思入あつて、眞中へ住ひ、
白蓮　淸吉、惡いことはしねえものだなあ。
淸吉　なんと。
白蓮　いかにも手前が推量の通り、賴朝公から極樂寺へ、佛のための祠堂金三千兩納つたとちらりと聞いた地獄耳、その晩しかけておれが盜んだ、人の物は我物と濡手で安房から上總下總、常陸をかけて寺々へ仕事に入つて肩名に呼ばれ、而も大寺正兵衞といふ、おれも以前は盜人だ。
　ト白蓮頭巾を取り、五十日鬘になる、淸吉おさよ思入。
淸吉　むゝ、そんならお前が噂に聞いた、大寺正兵衞といふ盜人かえ。
さよ　ほんにお前が泥坊とは、わたしやあさつぱり知らなんだよ。
白蓮　そりやあ素人にやあ話せねえが、盜人一代一晩に三千兩にはおろかなこと、千兩でもかためちやあめつたに盜めるものぢやあねえ、そこでこゝが止時と仲間の者にも分けてやり、足を洗つてその金から思ひ附いての貸附會所、五兩十兩貸す金も難儀な者にやあ利息も取らず、月限なしにしておく故、佛々と人にも言はれ、今ぢやあ道に落ちたものせえ見向もしねえ堅氣になり、誰一人疑ふものなく、枕を高く寐てゐたが天道樣が許さねえ、うつかり出した先刻の封金、外の者なら不知をきり、どこまでも言ひ張るが、見咎められたは名にしおふ今で名うての鬼薊、脫れぬことと故明したが譬にもいふ壁に耳、もう浮々とこの土地におれも足は留められねえ、旅へ出かけて、元の盜人、から打ちまけて言ふからにやあ隱しやあしねえが、三千兩も手許にあるは二百か三百、殘らず手前にやらうから、娑婆にゐる內一日でも旨えものでも澤山喰ひ、してえことをするがいゝ、必ず身にやあ附かねえから、堅氣にならうと思ふなら、この正兵衞がいい手本だ。
　ト手箱より二百兩出し、以前の金と一つにして淸吉の前へ出す、淸吉、おさよ顏見合せて思入。
さあ、此の金を持つて歸つてくれ、それともおれがどめ

、てゞもおくと思つて不承知なら、手前もおれもこれまでだ。手前が抱くかおれが抱くか、一緒に入つて末始終板附に並んでかゝらう。

ト思入にて言ふ、兩人は感心の思入にて、

清吉　おさよ聞いたか、がうぎなものだな、遣ひ殘りの三百兩殘らず出して持つて行けとは、さりとはいゝ膽ッ玉だ、これから見るとけちな根性、おさよが緣から置いてくれと厭がらせの揚句の果、百と言つたら半分か少くつても二十や三十、取れる仕事と見込んで來たが、端金を當にして强請に來たおれが腹とは、これほどにも違ふものか、あゝ面目ねえ〳〵。

さよ　お前よりわたしが尙正兵衞さんにやあ面目ない、何にしろ此の金も素人なら知らねえこと、いはゞ仲間の上からは、唯貰つちやあ歸られめえよ。

清吉　おゝさうだ〳〵違えねえ、今聞きやあこれから又旅へ出るといひなさりやあ、先だつものは路用の金、志しは貰ひました。（ト金をいたゞき、）金はお前に返します。

ト白蓮の前へ出す。

白蓮　その遠慮にや及ばねえ、旅をするのに二百兩の三百兩のと邪魔な路銀を持たずとも、行く先々で仕事をすりやあ、唐天竺まで行かれる身體、こりやあそつちへ持つて行つてくれ。

清吉　そりあやわつちだつて同じこと、一人と違つて夫婦稼ぎ、決して困りやあしねえから、こりやあそつちへ納めてくんねえ。

白蓮　さうでもあらうがおれも正兵衞、一旦出したこの金を、どう引込ませられるものか。

清吉　お前もさうならわつちも淸吉、この金は貰へねえ。

白蓮　はて、さう言はずと、

清吉　いや〳〵こりやあ斷りだ。

ト兩人金を突合ふ、おさよ思入あつて、

さよ　爭ふものは中よりと、こりやあわたしが捌いて上げよう。正兵衞さんもあゝ云ひ出しちやあ、所詮止さうと云ひなさるめえ、これを貰ふとは言はねえのは知れてる故、こゝはわたしが中を取つて、一旦貰ふと約束をした百兩を草鞋錢に此方へ貰ひ、殘りはお返し申さうぢやあねえか。

白蓮　むゝ流石はおさよいゝ裁きだ、兎やかう言ふも面倒だから、二百兩はおれが取るから恩には被せねえ百兩は淸くそつちへ受けてくりやれ。（ト二百兩を取り百兩を淸

吉の前へ出す。)
清吉　折角お前の志し無足にするも濟まねえから、それぢ
やあこりやあ貰ひやす。(ト百兩を取る。)
さよ　これで互ひに心も濟み、中へ立つたわたしが嬉し
さ。
清吉　然し、百兩氣の毒だ。
白蓮　まだそんなことを言ふか。おゝ入物がなきやあ胴巻
を遣らうか。
(ト地袋戸棚から絹の胴巻を出す、清吉思入あつて。)
清吉　さうさ、胴巻にも及ばねえが、何ぞ入物がほしいも
のだ。
さよ　お前腹帶にしてゐる、守袋の中へ入れねえな。
清吉　ほんに、こいつあ三つ兒に淺瀬だ。
(ト懐より鬱金木綿の守袋を出す。)
さよ　いゝことを教へてやるに、負けをしみなことばかり。
白蓮　なるほど、こりやあいゝ思ひ附だ。
清吉　えゝ、べらぼうに詰つてゐる。(ト中より守りをふる
ひながら出し、舞臺へ守りばらつと散る。)
さよ　えゝ勿體ねえ、お守りをこぼした。
(トおさよ拾ふ、清吉は守袋の中へ金を入れる、白蓮
守りを見て、)
白蓮　清吉、手前は法華宗か。
清吉　親の代から法華さ。
白蓮　道理で經宗の守りばかりだ。中山の劔難除に、駒木
の腹帶、柴又の一粒御符、下總のものが多いな。
清吉　あい、わつちが生れは行徳で鹽濱の漁夫の忰、親譲
りの堅法華だが、おつなもので信心も生れ故郷が、懐し
く、あの界隈のが多いのさ。
白蓮　(思入あつて。)むう、それぢやあ生れは行徳か。
清吉　七歳の年に兩親に別れ、鎌倉にゐる伯父の世話で菩
提の爲めに坊主にされ、極樂寺の弟子になつたが、これ
でもなつた一しきりやあ、名僧知識になる心だつた。
さよ　ほんにこれまで正兵衛さんと、一つにゐたこともあ
つたが、お前の生れは何處だやら。
白蓮　おれもやつぱり船橋生れで、親父は漁夫が稼業だつ
た。
清吉　はて似たこともあるものだ、こんなことから印籠と
守袋を證據にして、兄弟の名乘りをするなあ、狂言に
あるこつた。
白蓮　同じ行徳とありやあなつかしいが、手前の親父は何

といつた。

清吉　これ〳〵、こゝにありやす。（ト取散せし守りの中より臍の緒書を取出し、開いて、）今はむかしの臍の緒書、下總國行德漁夫清次悴清吉。

白蓮　（それを聞き思入あつて、）それぢやあ親父に三日月の、額に疵はなかつたか。

清吉　あゝありやした〳〵、大和田の宿と喧嘩の時、額に受けたといふことだ。

白蓮　そんなら手前はおれが弟だ。

清吉
さよ　え。（ト兩人びつくりして、）なんと言ひなさるえ。

白蓮　あゝ思ひ出しやあ二十年前、而も手前が三歳の時神隱しになつた、おりやあ惣領、（ト思入あつて、）臍の緒書を出すのも面倒、清太郎といつたはおれがことだ。

清吉　そんならお袋の話に聞いた、お前はおれが兄貴かえ。

さよ　思ひがけねえことだねえ。

白蓮　假にもおさよと兄弟の緣を結んだこのおれが、やつぱり實の兄弟とは。

清吉　こいつあ兄貴、芝居のやうだ。

ト三人よろしい思入。

白蓮　あゝ考へて見ると、浮世ほど分からねえものはねえ二十年から別れてゐて不思議に廻り逢つたのも、その弟が二世までと言交してるこのおさよを、圍つておいたが緣のはし。

さよ　亭主に繋がる兄とも知らず、圍はれたのを種にして置いてくれろと厭がらせ、強請り取つたる金包み、

清吉　その百兩の封印から、極樂寺で盗んだる三千兩のもくが割れ、

白蓮　包み隱した盗人を明かせばあかの他人でなく、胤腹一つのおれが弟。

さよ　それ故こゝに兄さんの居られぬやうになつたのは、いはゞ訴人も同然なれど、

清吉　今更言つても仕方がねえ、かういふ羽目になるのも時節、

白蓮　思へば親父が殺生の、報いか知らぬが二人とも、

さよ　どうで始終は天の網、

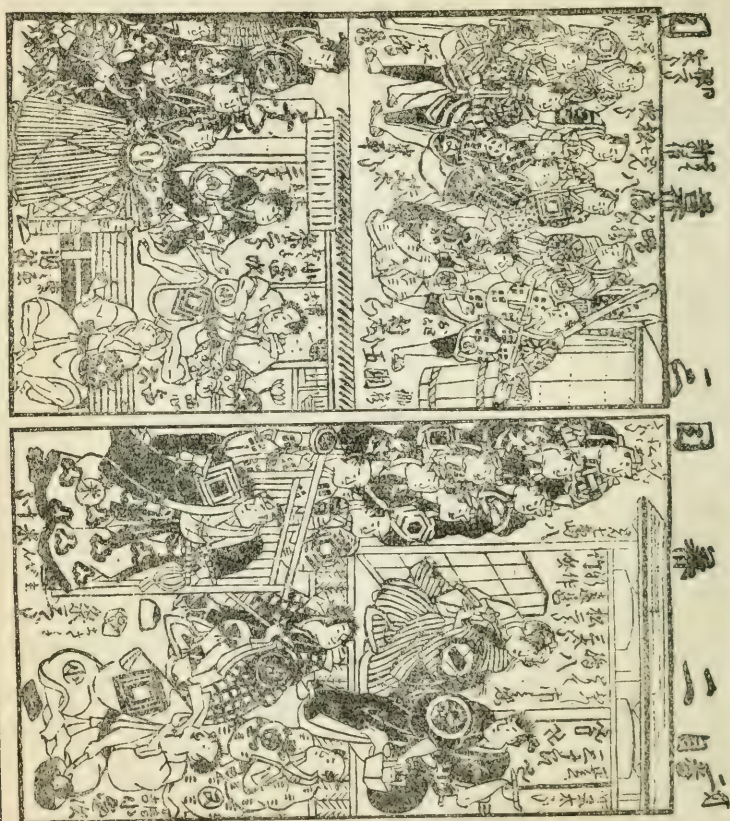
清吉　どちらが先へ切られるか。

白蓮　殘つた者が切首へ、

さよ　手向ける水も缺茶碗、

清吉　罅の入つたる身體故、

白蓮　今日逢つたのが形見にて、
さよ　婆婆の名殘にならうやら、
清吉　互ひに知れねえ危ふい身の上、
白蓮　結局の終ひは刀の錆、
さよ　疊の上ぢやあ、
清吉　兄貴、
白蓮　弟、
三人　あゝ死なれねえなあ。
　ト三人よろしく思入。ばた／＼になり、奥より以前のお藤走り出來りて、
お藤　もし旦那どの、今杢助が湯へ行くと裏口から出て行きます故、拔けたであらうと留めたれど、振拂つて行つた樣子、どうも合點が行きませぬわいな。
白蓮　むゝ常から馬鹿げたその内に、見所のある彼奴の了簡、裏からこつそり拔けて出たは、もしや彼奴は廻し者か。
お藤　え。
清吉　さう聞く上は油斷がならねえ、いつぞやおれが構への時言渡しの役人が、瓜を二つの彼奴が面付、こいつあ早くふけ支度を。

白蓮　いや、おれよりやあ足弱連れ、手前ふけてくりやれ。
さよ　いよ／＼、かうなる上からは、どう見のがして行かれよう。
清吉　今にも捕手が來たならば、命限りに働いて、かなはぬ時は兄弟一緒に。
白蓮　そりやあ手前惡い了簡、おれよりやあ先が長い、ふけろと云つたら早くふけろ。
さよ　まあ、それよりやあ姉さんを。
　トこの内お藤思入あつて、
お藤　いえ／＼、わたしやお前方より先へこの場を。（ト行きかける。）
白蓮　こりや女房、何處へ行く。
お藤　奥で聞いた二人が身の上、この通りを代官所へ。
　ト行くを白蓮留めて、
白蓮　むゝ、扨は此身の訴人をする氣か。
お藤　あい、夫婦一つでない證據に。
　ト振拂つて行くを清吉留める、白蓮傍の一腰を取り直に拔いて、
白蓮　うぬ、人でなしめ。
　トお藤を斬下げる、これにてどうとなる。

稿下當時の繪番附の一部

さよ　や、こりや姉さんを、
清吉　ばらしたのか。
白蓮　生けておかれず、ばらすのだ。
　トお藤這ひ寄り苦しき思入にて、
お藤　さあ、足手まとひのわたしを殺さば、お前は捕手の來ぬうちに。
清吉　やゝ、そんなら姉御は切られる覺悟か。
お藤　一緒に行けば道の邪魔、後に殘らば繩目を受け、お前の詮議にどのやうな憂目に合ふも知れぬ故、訴人というて駈出したは手にかゝつて死ぬ覺悟、わたしがなければ身一つに、心殘りもござんすまい、少しも早う落延びて、命全う隱れ住み、逆ながら命日にはお前の手づから水一つ、どうぞ手向けて下さんせ、あの世で待つてをりますわいなあ。
白蓮　おゝ出來した女房、よくおれが手にかゝつて死んでくれた、禮は冥土で逢つて言ふぞよ。
さよ　思へば果敢ない姉さんの、この最期をば女の鑑。
清吉　あゝ素人にやあいゝ覺悟だ。
お藤　さあ、苦痛をするだけ思ひの種、少しも早う。
白蓮　言ふにや及ぶ、（トお藤の胸先を取り、）南無阿彌陀佛。
　ト胸を突く、お藤手を合せ落入る、おさよ見てハアと泣伏す。と花道の揚幕にてドン／＼と捕物の鳴物になる。
清吉　や、あの物音は、
白蓮　たしかに捕手だ。（トお藤を放す、おさよ介抱をなす血を拭ひながら、）さあ、手前達も支度をしろ。
清吉　合點だ。（ト門口へ掛金をかける、おさよ以前の二百兩を取つて、）
さよ　兄さん、さつきの金が。
白蓮　おゝ邪魔ながら持つて行かうか。
　ト以前の胴卷へ入れ懷へ入れる、この内花道より李助の寺澤塔十郎野袴打割、大小、鉢卷、草鞋、十手をさして先に立ち、後より三階黑四天の捕手六人一、二、三、四、五、六、附きて出來り、門口にて内を窺ひ、捕手の三四の二人は下手へはひる。
おさよ、火鉢をこゝへ。
さよ　あい。
　ト手焙りの火鉢を持つて來る、白蓮手箱の内の證文を火鉢に入れる、これにてぱつと燃える。

清吉　や、火に打ちこんだ書物は。
白蓮　これこそ貸した金證文、後に殘らば人の難儀
清吉　さすがは兄貴。
ト この内後より廻りし捕手の三、四の兩人、白蓮、清吉を目がけて、
兩人　捕つた。
トかゝるを身を躱しちよつと立廻り、兩人を一時に當て、白蓮清吉に囁く。
清吉　これから二人が落合ふ所は、
白蓮　小袋坂の地藏堂。
ト表へ聞えるやうに言ふ、塔十郎思入。白蓮小聲にて、
裏からこつそり。
さよ　そんなら兄さん。
ト捕手心附きて「捕つた」と兩人にかゝるを引附け、
白蓮　ちつとも早く。
清吉　合點だ。
ト捕手を投げつけ、おさよを連れ奥へはひる。この時門口の戸をばら/\と毀し、塔十郎先に捕手内に入り白蓮を取卷き、
捕手　動くな。(ト白蓮塔十郎を見て)

白蓮　むゝ、扨は下男の杢助は合點行かずと思ひしが、廻し者にてあつたるか。
塔十　いかにも、汝が身の素性不分明故下男となり、此家に入込む某は、盜賊詮議の役目を蒙むる、寺澤塔十郎といふものなり、最早遁れぬ汝が惡事、さあ尋常に繩にかかれ。
白蓮　斯く露はれる上からは、幾人切つても兇状はたつた一つのおれが命、片ツぱしから覺悟なせ。
塔十　何をこしやくな、それ、搦めとれ。
捕手　はツ、捕つた。
トドン/\にて白蓮へ十手にて打つてかゝる、白蓮一腰を抜き切拂ひ、烈しき立廻りになり、トゞ捕手奥へ逃込む、塔十郎鎖を持ち白蓮へ打ちかけ、兩人鎖と刀にて面白き立廻りあつて、兩人よき見得、これにてこの道具廻る。
(裏手の場)——本舞臺三間の間眞中に一間中窓、左右窓下とも網代のしたみ、上下建仁寺垣、梅松の立木、總て奥座敷裏手の體。こゝに清吉七口を拔き、おさよを後に圍ひ立身にて、左右には捕手取卷きゐ

る、ドン／＼にて道具廻る、と捕手十手にて打つてかゝる、清吉めつた切りに切りちらして立廻り、おさよは竹箒にて捕手の額を突く。よきほどにばたばたになり、上手より白蓮拔身を持ちて出來り、この中へはひり切りちらす。これにて捕手上下へ逃げてはひる。三人顔を見合せて、

清吉　兄貴か。

白蓮　弟、首尾よくいつた。（ト兩人血を拭ひ鞘へをさめる。）

さよ　そんならこれから、

白蓮　道を違へて、

清吉　合點だ。

ト此の時捕手兩人白蓮清吉にうぬとかゝるを立廻つてどん／＼とあて清吉おさよはつか／＼と花道へ行き、白蓮は東の假花道へ行く、この時正面の中窓を打ち破り、塔十郎半身出し、

塔十　取逃がしたか。

白蓮　えい。

清吉　ト石を取つて打附ける、塔十郎ちよつと身を引くと、この石あてられたる捕手に當り、一時に轉るを木の頭。

この間に、さうだ。

ト早めたる合方、時の鐘の送りにて双方花道へ出る、塔十郎窓から見送る。この仕組よろしく、　ひやうし幕

四幕目

名越無縁寺の場

同表門捕物の場

（役名――鬼あざみ清吉、大寺正兵衞、藤山繁之丞、墓守西心、無縁寺の穴掘鋤藏、夜蕎麥賣り仁八、船頭三次、湯灌場買どら市、合長屋どん七、同かん八、正兵衞手下。十六夜おさよ。下女おとら、其他。）

（無縁寺墓場の場）――本舞臺三間の間上の方一間の湯灌場、正面は墓場入口の木戸、左右黒塀下の方丸井戸、所々に石塔だいぶあり、よき所に柳の立木、總て名越無縁寺墓場の體。こゝに穴掘鋤藏寺男の拵へにてをり、これを夜蕎麥賣仁八、合長屋のどん七

勘六引附けゐる、これな下女お虎留めてゐる、この見得禪の勤にて幕開く。

鋤藏　これ／＼、こなた衆はおれを捉へて、どうするのだ。

仁八　どうするものか、勾引だから、代官所へ連れて行くのだ。

どん
勘六　歩びやがれ。

お虎　これ父さん、腹の立つのも尤もだが、〽どうぞ許して下さんせと、

鋤藏　〽手を合せてぞ頼みける。

仁八　いや／＼いくら拜んでも堪忍ならねえ、どこの國にか穴掘のくせに、人の娘を引拂ひ、湯灌場へ匿しておき疵物にするといふがあるものか、代官所へ連れて行かねばならぬ。

どん　これ／＼こなたのお蔭ぢやあ、長家の者も此間から幾日暇をつぶすか知れねえ。

勘六　この返報にやあ代官所へ勾引と訴へて、暗い所へやらにやあならねえ。

兩人　さあ歩びやあがれ／＼。

鋤藏　あこれ／＼二人の衆待つてくれ、〽これが連出したといふ譯ではなし、わしが義太夫に惚れこんで駈込んで來たこのお虎、それをとらへて勾引とは聞えませぬとぞ歎きける。（ト淨瑠璃を語る。）

どん　えゝ、何ぞといふと〽ぼ淨瑠、聞きたくもねえわえ。

勘六　これに又惚れたといふは、お虎もよつぽど物好だ。

お虎　なに物好なことがあるものだ、そりやあもう淨瑠璃を語るものは、〽太夫を初め素人にも上手な者はいくらもあれど、大がい節が同じやう、この鋤藏どのゝ淨瑠璃は、お寺に居たゞけお經に似て三味線よりも鐃鈸、磬や木魚によく合つて、類のない淨瑠璃故惚れたが無理ではあるまいと、親の頭を押へけり。

仁八　えゝ汝までが同じやうに、出たらめ節のその淨瑠璃親を馬鹿にしてをるのだ、もう了簡がならぬわえ。

鋤藏　〽もう了簡がと熱くなり、おこる親父が禿頭。

お虎　〽藥罐の煮え立つ如くなり。

仁八　まだそんなことをぬかしをるか。

どん　さあ、代官所へ、

三人　歩びやがれ／＼。

ト引立にかゝる、葬禮の鳴物になり、花道より船頭三次尻端折にて先に立ち、後より單衣をかけし早桶を、

正兵衛の手下一、二草履にて擔ぎ、この後よりどら市湯灌場買の装にて鐵砲笊を擔ぎ附添ひ出來り、直に本舞臺へ來り、この中へはひり、

三次　これさ〳〵、何だか知らねえが、間違ひなら了簡しねえ。

手一　腹も立たうがお寺のことだ。

手二　佛に免じて往生しねえ。

三人　いや〳〵了簡ならねえ〳〵。

鋤藏　〽了簡ならずばどうなりとも、打ちたゝかれる身の覺悟。

どら　これさ〳〵鋤藏どの、この衆が留めてゐるのに、まあ待たつしやい〳〵。

鋤藏　おゝ、こなたは湯灌場買のどら市どのか。

三次　どういふ譯か知らねえが、わつちもこゝへ來合したからにやあ、默つちやあゐられねえ。

お虎　御親切は嬉しいが、言うても聞かぬあの親父、うつちやつておいて下さんせ。

三次　(顔を見て、)おゝ、さういふお前はお虎さんか。

手一　ほんに頭の所にゐた。

三次　あゝこれ、頭ぢやあねえ貸附所にゐたのだ。さうしてこりやあどういふ譯だな。

どん　もし、この間違ひはお虎どんが穴掘といゝ仲になつてゐて、父さんを置去りにして逃げて來たものだから、それでやかましく言ふのだ。

三次　それぢやあお父さんがおこるのも尤もな譯だ。

どら　然しこれも好き合つた仲なら仕方がない。

手二　何にしろわつちらが仲人に入るから、

三人　了簡してやんなせえ。

仁八　そりや、世間にないことでもござりませんが、どこの國にか穴掘と、

手一　情事をする奴が、

三人　あるものでござりますか。

どら　その腹立は尤もだが、そりや、父さん悪い了簡。わしも年中寺方の湯灌場を買つて歩くが、表店を立派に張つてゐる古着屋さんより錢になります。穴掘り〳〵と安く言へど、大がいの生業より錢になるのはわしが請合ふ、お前聟にとんなさりやいゝに。

鋤藏　〽ほんにお前の言ふ通り、お寺で三度の飯は食ひ、着物は死人の皮を剝ぎ、又小遣錢は穴掘賃、法事のお布施で澤山あまり、

お虎　へまだその上に饅頭や强飯は年中喰べ放題、思へばこんな生業は廣い世界に又無い故、惚れたが無理ではござんすまい。

ト兩人節を附けて口三味線にて言ふ。

仁八　えゝ親の心子知らずと、穴掘を辛に取つたと長家中へ言はれるものか。

どら　はて、穴掘りだらうが隱亡だらうが、當時は慾の世の中だ、去年のやうにころりでも流行りやあ錢金の置所がねえ、それを當にやんなせえな。

仁八　えゝ縁起でもねえことを言はつしやい、又ころりが流行られてたまるものか

三次　何にしろ話し合ひでどうとも方のつくことだ、わつちも見なさる通り葬式を持込んで來て、いつがいつまでかゝり合つてもゐられねえ、仲人の役だ一升買ふから、一ぺいづゝ呑みやつて話をしなせえな。

ト三次煙草入より一分出し、仁八に渡す。

仁八　そりやあ有難うござりますが、見ず知らずのお前様に、

三次　なに、お前にやあ初めてだが、お虎さんとは近附だ、

どん　これ父さん、折角あの衆があゝ言ひなさるから、まあ一ぺい呑まうぢやねえか。

勘六　酒と言はれちやあ聞きのがしがならねえ。

三次　わつちが一緒に行きてえが、佛をおいても行かれねえから、二人を替りにやりますから、どこぞで笑つてくんなせえ。

勘藏　これは〳〵三次樣とやら、とんだ所へおいでなすつて、御厄介になりまする、へその替りにはその佛の穴は深く掘つて上げます。

三次　さあ〳〵無駄口はいゝにして、わしらも一ぺい呑みてえ所だ。

手二　機嫌をなほして早く來ねえ。

三次　屑屋さん、お前も一緒に行きねえ。

どら　いや、わしやあ喰氣より慾氣のはうだ、お臺所へ行つて買物をしにやならねえ。

三次　それぢやあ父さん、腹も立たうが兎角老いては子に從へだ、了簡してやんなせえ。

仁八　これは御親切に有難うござります

お虎　左樣なれば三次さん。

三次　少しも早く

皆々　これから酒屋へ。

鋤藏〽打連れてこそ。
ト禪の勤めになり鋤藏三重を語り、お虎口三味線にて、仁八、どん七、勘六、手下一、二附いて下手へはひる
どら八は三次へ眼を附けて上手へはひる。時の鐘、合方になり、三次邊りを窺ひ思入あつて早桶の傍へ寄り、小聲にて、

三次　もし、頭々、無窮屈でござりませうが、晩までだから辛抱なせえ、人相書が廻つた故晝の内はうつかりと駕籠にもお乘せ申されねえから、とんだ故人南北だが、そつからわつちが新狂言に早桶といふ思ひ附き、丁度上州から歸つて來た、顏の知れねえ二人の奴等、日雇取りにこしらへて、擔がせて歩くから人の氣の附く氣遣ひはねえ、今夜の闇を幸ひに、暮れたらそつと擔ぎ出し、燒場まで、行くと思はせて夜通しにやツつけやせう。
ト三次早桶へ耳を寄せ、何か聞く思入あつて、
え、何かえ、頭の弟の淸吉さんかえ、捕られたといふ噂も聞かねえから、旅へ出かけなすつたに違えねえ、ぬしのことだから如在なく山越に逃げなすつたらうが、姉さんが一緒だから足が附かにやいゝが。(ト思入あつて)何にしろ湯灌場へ擔ぎ込んでおきてえものだ。

どら　(後へ出て、)もし、お困りなら、わつちが片棒擔いで上げようか、
三次　(思入あつて、)そいつあ有難い、お氣の毒だがお頼み申します。
どら　何の造作もねえことだ。ト兩人して早桶を擔ぎ湯灌場へ入れ)いや、べらぼうに重い佛だ、何でも立派な男と見えるね。
三次　なに、男ぢやあねえ女さ。
どら　女といふ目方ぢやあねえが、それとも金でも入つちやるねえか。
三次　え、(トぎつくりこなし、どら市思入あつて)
どら　もし、わしやあどら市といふ湯灌場買ひだが、直をよく買ひますが賣つちやあくんなさらねえか。
三次　なに、賣れとは何を。
どら　この早桶の佛をさ。
三次　え。
どら　物を言ふ死人は珍らしいから、買つて行つて直賣りをする氣だ。
三次　なんと
どら　それとも賣らざあ買ふめえが、一旦見込んだこの代

物、利分をくんねえ讓つてやらう。

三次　なに、この佛の利分をくれ、おつなことをお前言ひなさるの、寺の乞食や燒場の隱亡、出していゝ酒手なら言はねえでもくれてやらあ、ちよつと片棒擔いだから一ぺい呑ましてくれろと言やあ、話を附けねえこともねえがをかしなことを言はれちやあ、三文でも出すものかえ。

どら　そりやあ眞の佛ならこんなことを言やあしねえが、物を言ふ佛だから口塞げをくれろといふのだ。ちよつと一肩擔いでも中は大方こんな玉と、秤の目よりおれの目で、ふんだらそれが定直段、三分五厘違やあしねえ。嘘なら佛を出して見せろ。

三次　さあ、そりやあ。

どら　よもや佛は出せめえが。

三次　出せねえこともねえけれど、佛を出してもつまらねえ。まあそれよりやあ不承でも、これで一ぺい呑んでくんねえ。(ト叺煙草入より一分出してやる。)

どら　なんだえ、一分ばかりの目くされ金、こんなものは入らねえ。(トたゝきつける。)

三次　うぬ、さうぬかしやあ了簡ならねえ。

どら　了簡ならざあ、どうともしろえ。

三次　しねえでどうするものか。

ト有合ふ卒塔婆を取つて打つてかゝる、どら八は秤の棒にてたゝき合ひ兩人立廻つて、トゞどら八花道へ逃げて行くを三次追ひかけはひる、これにて道具廻る。

(墓守庵室の場)――本舞臺三間の間常足の二重、丸太の柱、藁葺屋根、竹の本緣附、正面鼠壁、暖簾口、上手に佛壇、内に佛具よろしく飾りあり、この前に白木の位牌、香爐、花、供物など並べあり、上の方一間湯灌場の後ろを見せ、下の方千人塚の石塔この後卒塔婆を結込みし藪疊、總て無緣寺墓守庵室の體。こゝに西心鼠の着附、頭巾を冠り、佛前へ灯を點けてゐる。この見得木魚入りの合方にて道具なさまる。

西心　あゝ年々年齡を取るにつけ、一年經つは夢のやうだ去年百本杭で殺された求女が明日は祥月命日、何者の仕業やら今に於て殺し手も知れず、何であのやうな孝行者が非業な最期を遂げたかと、いくら諦めても諦らめられなんだが、當で散つたも定業か、この春は彼岸に當つた團子でも拵へてやらずばなるまい。(ト思入あつて上手

を窺ひ）先刻から蘭塔場で、穴掘の鋤鍬が女子を連れて來たといふて、やかましいことであつたが、濟んだと見えて靜になつた、どれお念佛でも唱へてやりませうか。
ト西心佛檀へ向ひ珠數を爪繰り回向の思入。花道より清吉先におさよ抱子を抱きて出來り、
清吉　こうおさよ、坊主は寐たか。
さよ　やうやくすやすや寐入つたよ。
　ト清吉抱子を覗いて見て、
清吉　可愛さうに、この小僧も惡い親を持つたので、生れた日から他人の手ばかり、たまたま親の手へ歸りやあ、何處を當と家もなく、夜夜半まで連れて歩かれ、嘸これが身でも難儀だらう。
さよ　それにわたしが初めて故、どうしていゝやら樣子は知れず、いつそこのみじめを見せるくらゐなら、どんな所でもいゝから遣つてしまひたいよ。
清吉　いくら遣りてえと思つたとて、里にせえ取手がねえもの、おれが子だといつて誰が貰ふものか、さういつて捨てゝしまふのも可愛さうだ。
さよ　まあ仕方がねえ、行く所まで此の兒も一緒に連れて行き、一日でも私しの手で餘計に世話をしてやらうよ。
清吉　何でこんなに兒ばかりア　可愛いものだか分からねえ。
さよ　そこが親子の情合だね。
清吉　まあ、何にしろ父さんをたづねて見よう。（ト本舞臺へ來り、内を窺ひ思入あつて）はい、御免なせえ、西心さんの家はこちらでございますか。
西心　はい、これでござるが、どれからござつた。
さよ　父さん、わたしでござんす。
　ト門を明け内へはひろ、西心見てびつくりなし、
西心　おゝこりや娘、清心樣。でも思ひがけない。
清吉　（外へ思入あつて）いやも、こなたに逢ふのも面白ねえ。
西心　何の面目ないことがござりませう。さあさあこつちへ上らつしやりませ。
　トこれにて清吉おさよ二重へ上ろ、西心捨ゼリフにて茶、煙草盆を出し、
　扨その後は、久々お目にかゝりませぬが、御機嫌ようて、お目出度うござります。
清吉　こなたも達者で何よりだ。
さよ　お前がこゝにゐなさんすも聞いたなれど、ついそれ

と尋ねて來られぬ身の上故。

西心　おゝその事は詳しう聞いた。娘は元より清心樣、どうしてそんなお心にならしやりました。今世の中に名の高い鬼薊といふ泥坊が、(ト言ひかけ、四邊を憚り小聲にて、)あなたと聞いたその時のこの西心の驚ろきは、どのやうでござりませう、いかなる事でお心からお姿まで、そのやうに替り果てたことぢやら、あゝ情ないことでござります

清吉　さうこなたに言はれると、穴へでもおらあ入りてえ、たゞ何事も因縁づくと、父さんどうぞ許してくんねえ。

西心　勿體ないことおつしやりませ、こんな身の上にならつしやつたも元はといへば娘故、おゝ、娘といへばおさよには、箱根山で惡漢に連れて行かれて別れたきり、あれからどこにどうしてゐて、この鎌倉へは歸つて來たぞ。

さよ　さあ、箱根山から惡漢に連れて行かれたその先は、小地獄谷といふ所で、一寸法師や鷄娘、片輪者を買込んで鎌倉へ賣る見世物師、地獄婆アと名の高い何でも引込むぐれ宿さ、直にわたしを山向うの宿場へ賣らうとしたところ、身重なり坊主なり直打のないのがわたしが仕合せ、子を生むまではこの髮も延びるであらうと家へおかれ、怖い／＼と思つたもいつしか馴れて半年越し、たうとうそこで此の子を生み肥立つた故に折を見て、この鎌倉へ逃げて來ようと思ふところへ折よくも、山神祭りのその晩に良人に出逢つてその場から、故郷へ逃げて歸つて來たのさ

西心　おゝさうであつたか、それはいかい難儀をしたであらう、おれもその折そなたを取られ、生きてゐても詮ない故、直に谷へ飛込んで死なうとは思つたが、志しの佛もあり、どうかしたなら又そなたに逢はれることもあらうかと、死後れて悄々とこの鎌倉へ歸つて來て、緣を求めて無緣寺の墓守とまでなつたわい。何は兎もあれその孫を、おれにちよつと見せてくりやれ。

さよ　さあ、初孫の顏を見て下さんせ。

ト出すを西心抱上げ見て、

西心　おゝこれはよい子ぢや／＼。おさよ、男か女か。

さよ　あい、男の子でござんす。

西心　おゝそれは何より手柄ぢや／＼、あゝ親子とて爭はれぬ、清心樣に生寫し、おゝ今逢つたばかりのこの祖父に笑ひをる、可愛い奴ぢや、も一つ笑へ。

ト西心抱子をあやし、餘念なき思入。

清吉　何の役にも立たねえものだが、孫は可愛いものだと見える。

西心　こりや又別の味でござる。あゝおさよ、ぐつすりやつたわえ。

さよ　お祖父さんにとんだ御馳走だつ。

ト抱子を取り、襁褓をあてかへる思入。

清吉　そりやあさうと、早速に聞きてえはお前の身の上、おさよが世話になつてゐた白蓮とかいふ金貸は、おれが兄貴で、やつぱり盗人、縁につれてこの詮議をこなたもされたに違ひないと、おさよと二人で案じてゐた。

西心　おゝお前方が逃げたといふ翌日直に、下男でゐた塔十郎様へわしは呼ばれ、御詮議に逢つたので、白蓮様やお前様、おさよが替つた身の上を、聞いてびつくりいたしました。したが元より知らぬこと故、繩目の恥も身に受けず、そのまゝ許され歸つて來た。

清吉　そりやあ何より仕合せだつた、さうでもねえ、どのやうな憂き目に逢つちやあゐねえかと、今日逢ふまでは二人とも、どんなに案じてゐたか知れねえ。

西心　それは有難うござります。

さよ　まあ何にしろこのやうに、親子夫婦孫までも一つに寄つて一晩でも、話をするが互ひの仕合せ。

清吉　ほんにいつぞや手前もおれも、身を投げた時死んでしまやア、今父さんには逢はぬわけだつ。

西心　わしも箱根で死んだ日には、可愛い孫の顏も見られぬ。

清吉　假令どんな苦勞をしても、生きてゐにやあつまらねえ。

トこれにて西心求女を思ひ出せし思入。

西心　なるほど、お前様のおつしやる通り、死ぬ者貧乏でござります、同じ同胞でありながら、はかなく死んだ弟が不便さ。

さよ　え、そんなら弟の佐之助は。

西心　今までそちにも隱してゐたが、明日が即ち一周忌。

さよ　たつた二人の同胞だのに、何故知らしては下さんせぬ。

西心　さあ、病み煩ひで死んだのなら、死目にも逢はすけれど、非業な死をば遂げた故。

さよ　えゝ、そりやまあ何處で、

西心　どういふ譯で。

清吉　世にも哀れなあれが身の上、まあ一通り聞いて下さ

れ（ト一つ鉦の入りし合方になり涙を拭ひながら）而も去年清心様が御追放にならるゝ時、お身の片附お手當にお金をどうぞ上げたいと、思へど甲斐ない貧乏暮し、その才覺に歩きし折、稱名寺へ小姓にやつた求女にふつと道で出逢ひ、その話をしたところ、どうか都合しませうと言つたを力に待てど暮せど、來ぬのは金ができぬ故と思ふ所へ近所の衆が、求女の死骸が百本杭に浮いてゐると、聞いてびつくり足も空に行て見れば、むごたらしう切りをつて、川へ捨てたる浮死骸、是非もなく／＼引取つて葬りは葬りましたが、意趣斬か物取りか今に様子が分かりませぬ。何にいたせ年さへも十四か十五の蕾の花殺しをつたは何者か、おのれ敵が知れたなら、むしやぶりついて、殺してやらうと、その悔しさといふものは、今日で丁度一年經てど、寐た間も忘れはしませぬわいの。

と涙に咽せて咳き入る。おさよ泣きながら背中を撫る
この内清吉術なき思入あつて、

清吉　そんならいつぞや、百本杭で。

西心　えゝ、あなた御存じでござりますか。

清吉　いやさ、噂に聞いた若衆の死骸、あゝ不便なことであつたなあ。（ト思入）

さよ　いつぞやお前が妾宅で、菩提の爲に剃髪したと言はしやんしたのは弟の、菩提の爲でござんしたか、何故あの時にこの事を、わたしに言つては下さんせぬ。

西心　さ、それに隱して知らさぬは、この歎きを見せまい爲め。（ト思入あつて、）丁度幸ひ清心様へ、お願ひがござります。（ト白の卒塔婆と硯箱を持つて來て、）お所化に書いて貰はうと、墨も磨つておきました。菩提の爲めにこの卒塔婆を、お書きなされて下さりませ。

ト清吉の前へ出す、清吉思入あつて、

清吉　いや、この卒塔婆はおれが書いては、却て佛の爲めにならねえ。

西心　そりやまた何故でござります。

清吉　さあ、以前なれば兎も角も、鬼と名のつくおれが書いては、追善供養にならねえから、所化に書いて貰ふがいゝ。

西心　そんなことをおつしやらずと書いて下さればよいに、仕方がない、明日誰ぞ所化に書いて貰はう。

ト卒塔婆を鼠壁へ立かけておく。おさよは子を抱きしまゝ佛前へ線香を上げる、清吉花道の方へ思入あつて、

清吉　やゝ向うから侍が、たしかにこゝへ來る樣子。

さよ　もしやわたしら二人が詮議か。
清吉　何にしろ險難だ。
西心　そんなら暫時奥に隱れて。
清吉　もし、詮議なら、
西吉　裏からこつそり。
西心　あ、これ。
と四邊へ思入、時の鐘、清吉おさよは思入あつて奥へ入り、西心は案じる思入にて花道の方を見てゐる。と花道より仁八五合德利を提げて出來り、後より蔭山繁之丞打割羽織、大小袴にて忍び提灯を持ち出來り花道にて、
繁之　ちと物がたづねたいが、無緣寺と申すは、この寺でござるかな。
仁八　左樣にござりまする。
繁之　たづねたい墓がござるが、して墓所はいづれでござるな。
仁八　墓所は右でござりますが、向うに墓守がござりますから、それでお聞きなされませ。
繁之　これは親切に忝ない。
ト兩人本舞臺へ來り、仁八直に内へはひりて、
仁八　西心どの、最前は御地内を騷がしました、これは少しばかりだが一ぱい飲んで下され。
西心　おゝ、このやうな心配はよさつしやればよいに。
仁八　ほんの心ばかりだ、受けて下され。
西心　それは何より忝ない。（ト德利を取つて）もし、そこにおいでなされまするは。
仁八　おゝ、あの旦那は、何か墓を尋ねたいとおつしやつた。
西心　左樣でござりますか。（ト繁之丞内へはひりて）
繁之　早速ながら三日以前、當寺へ大江の屋敷より、葬りしものがござるかな。
西心　はい、一昨日の夜ござりました。
繁之　その墓所はいづれなるか、承はりたくまゐつたて。
西心　はい、御案内いたしませう。
トこの内仁八繁之丞の顔を見てゐて、
仁八　憚りながらあなた樣も、大江の御藩中でござりますか。
繁之　いかにも、大江の藩中でござる。
仁八　わたくしの僻目か存じませぬが、あなたは蔭山武太夫樣の御子息樣ではござりませぬか。

繁之　どうしてそれが。
仁八　お提灯の紋所に見覺えのある旦那の俤、何をお隱し申しませう、わたくしは元お家にゐた、又助といふ中間でございまする。
繁之　はて扨それは思ひがけない
西心　いやもし、それなる旦那様、至つて穢うはございますが、まあこれへお上りなされませ。
繁之　然らば許しやれ。
ト二重へ上り、飾りある位牌を見、思入あつて上手へ住ふ、仁八下手へ住ひて、
仁八　不奉公をいたしました故、その後御機嫌も伺ひませぬが、大旦那様にはお替りはございませぬか。
繁之　親共事は昨年中、不慮なることにて過ぎなされた。
仁八　え、左様でございますか、して、不慮なることゝは。
繁之　以前の家來(故)に申し聞かすが、下總結城の浪人にて八重垣紋三と申すものを、我姉の聟となせしが、仔細あつて父を討ち一度逐電なしたれど、二度我に討たれんと覺悟極めし甲斐もなく、お家の重寶綠丸がその夜紛失いたせし故、疑ひかゝつて終に切腹、汚名を受けしが殘念なと、死ぬる末期に我への遺言、敵同志といひながら、一旦因みを結びし兄弟、それ故夜に入り人目を忍び當寺へ參詣いたしてござる。
仁八　それは〳〵、とんだ事、嘸お力落しにございませう。
西心　いや、お話の中へ言葉を出すは失禮でございますが、今おつしやりました紋三様は、八重垣流の達人にて流を苗字にお呼びなさるゝ紋太夫様の御子息にて、劍術の爭ひより朋輩を殺害なし、立退れたお方でございますが、御切腹なされましたとは、てもお情ないことでございましたな。
繁之　すりやその方は紋三どのゝ、知る人にてあつたるか。
西心　はい、わたくしの女房が、お乳を上げたお子様でございます。
繁之　はて扨、それは不思議な緣ぢやな。
西心　そんなら一昨日葬りしが、紋三様でございましたか、知らぬこととて一遍の御回向さへしませなんだ、南無阿彌陀佛々々。
仁八　(この内思ひ出せしこなしにて、)いや、いつぞやお屋敷の裏手をば蕎麥を擔いで來ました折、二十四五な侍が塀を破つて拔身で出たが、たしかにあれが紋三様、し

て又短刀の紛失は、
繁之　やはりその夜のことであつた。
仁八　扨はあの夜蕎麥を食つた、若い男が短刀を腰にさしてをりましたが、
繁之　それぞまさしく尋ぬる盗賊。
仁八　もしや彼奴が鬼あざみか。
西心　え。
仁八　油斷のならぬことでござる。
繁之　それにつけて承はりたいは、それなる位牌の俗名に、戀塚求女と記しござるは。
西心　はい、わたくしの悴でござりまする。
繁之　むゝすりや疵養生に五十兩、若殿より惠みを受けしは、そなたの悴であつたるか。
西心　え、そんなら悴は五十兩大江樣から頂戴せしとか、それぞまさしく我頼みし清心樣へ上げる金、それ故命を取られしか、思へば不便なことをいたしたよなあ。
繁之　いや、思はぬ話に暫時の暇入り、夜更けぬ内に紋三殿の墓へまゐつて本堂にて、回向を頼んで立歸らん。
西心　左樣なればわたくしが、お墓をお教へ申しませう。
繁之　氣の毒ながら、案内頼む。

仁八　どれ、わたくしめも御一緒に。
西心　かうおいでなされませ。
ト唄、時の鐘にて西心先に提灯を持ち、繁之丞仁八下手へはひると、下手より鋤藏肩衣を引掛け、横板へ紙で貼りし人相書を持ち出來り、
鋤藏　西心どの／＼、代官所からこのやうな人相書のお觸が廻つた、門の柱へかけておけと御住持から言附けだ。なんぼ取らるゝものがないとて、明ツぱなしは不用心な、買物にでも行つたか知らぬ。（ト言ひながら觸書を見て）なんだ大寺正兵衛人相書、あゝこりやあ極樂寺で三千兩祠堂金を盗んだ泥坊、何處に隱れてゐるか知らぬが、人相書で搜されては今に捉まるに違ひない。〽人の物をただ取つて長生せうとは惡い了簡、天道樣がお許しなされぬ。
ト鋤藏節を附けて語る、下手より西心出て來り。
西心　おゝ鋤藏どの、何ぞ用か。
鋤藏　あい、大寺正兵衛といふ泥坊の人相書、門へ出しておけとの言附、御苦勞ながら明日から出入れはこなたの役。
西心　それは用が殖えて迷惑なことぢや。見れば立派な肩

衣かけ、又淨瑠璃かな。
鋤藏　表の師匠にさらひがあつて狐火を語る故、是非聞きに來て下され、師匠からも言傳ぢや。
西心　それは樂しみなことだ。後に行つて聞きませう。
鋤藏　今夜中で聞事は戸和太夫市作で白木屋の引廻し、それに續いてはわしが狐火、ちよつと聞いて下され。〽回向せうとてお姿を、靈にはかゝせはせぬものを、田町で買つた反魂丹、
西心　や、そりやちと文句が違つたやうだ。
鋤藏　いやいや決して違ひはせぬ、違はぬ證據は反魂丹が一包二十四孔だ。
西心　とんだ口上茶番だ、はゝゝゝ。
鋤藏　〽そんなら今にごされやと、言ひ捨てゝこそ急ぎ行く。(ト淨瑠璃を語りながら下手へはひる)
西心　はゝゝゝ、下手なくせに鋤藏めが義太夫に凝り固り、岡目で見ると馬鹿げたものだ。(ト人相書を取上げ見て)あ、この人相書はおさよとおれがお世話になつた、白蓮樣、(ト四邊を見て)思ひがけないことぢやなあ。
(ト合方になり、奧より清吉とおさよ出來る、西心見て、)
おゝ嘸窮屈であつたらう、思ひがけない人が來て、ろくろく話もできぬわいの。
清吉　どうで今夜は久しぶり、夜通し寐ながら話しませう。そりやあさう今と聞けば、八重垣紋三樣といふは、おさよのお袋が乳を上げた若旦那樣かえ。
西心　おゝこのおさよの上に一人兒があつたが、水兒で死に、乳が澤山ある所から、乳母奉公に五年ほど行つてゐたが八重垣樣、その乳を上げた若旦那が、腹を切つて死なしやつたとは、あゝおいとしいことぢやわい。
清吉　緣といふものは、どこにどう引張つてあるか知れねえ、まだ鎌倉にゐた時分伯父の話で不斷聞いたが、清次といつたおれが親父は、その八重垣樣にゐた若黨、酒の上で失敗つて漁夫になつたといふことだ、(ト思入あつて)あゝ考へて見りやあ見るほど、こいつも濟まねえことだらけだ。
さよ　そんならお前の父さんも、八重垣樣にゐなさんしたのか、さうして見ると母さんといはゞ朋輩同然な、その子が二人夫婦になるとは、おつなものだね。
西心　から入組んだ筋合を結び合すとは出雲の神樣も、芝居の作者と同じことだ
清吉　違えねえ、芝居と言やあ狂言でも、人相書はよく出

るものだ。(ト言ひながら人相書を取上げ見て、)おれが兄貴もこのやうに、人相書で搜されちやあ、もう長いことはねえわえ。

さよ　ほんに聞く事も見る事も、心にかゝる事ばかり、かうしてゐてもそは／＼と、少しも氣が落附かない。

清吉　そりやあ此間から、逃げつかくれつとつくりと、夜の目も寐ねえせゐだ。

西心　今夜はゆつくりこの庵室で、枕を高く寐るがよい、おれは表の師匠どのに義太夫のさらひがある故、ちよつと顔を出して來る。酒もこゝに五合ばかり貰つたのがあれば飮むがよい、どうで歸りは九つ時分、それまでしつぽり水入らず、寐るなら夜具はこゝにあるぞよ。

ト戸棚へ思入。

さよ　あい／＼、有難うござんす。

西心　そんなら、わしは行つて來ますぞ。

さよ　ゆつくりと行つて來なさんせ。

西心　(門口へ出かけ思入あつて、)然し用心、表はしつかり。

清吉　あい、合點だ。

西心　どりや、狐火でも聞いて來ませうか。

ト唄になり、思入あつて下手へはひる。時の鐘。清吉は竹簀戸へ掛金をかける。おさよ枹子を寐かし、有合ふ燗徳利へ酒をうつし、居爐裏の土瓶へ入れ、燗をする。

清吉　又雲行が惡くなつて來たが、明日降らにやあいゝ。(ト言ひながら二重へ上り、机の上の位牌を見て、)蕭露月照童子、あゝこれが手前の弟か、知らねえことゝて、南無阿彌陀佛々々。

トこの内おさよは有合ふ膳へ徳利、猪口、丼物などを並べ、

さよ　さあ、お燗ができた、一つお飮みな。

ト猪口を出す清吉茶碗を取つて、

清吉　面倒だ、大きいものがいゝ。

さよ　まあ、ゆつくりとお上りな(ト清吉ぐつと飮み乾せる。)あれさ、をしみはしないよ。

清吉　もう一ぺいくれ。(ト茶碗を出す。)

さよ　いゝかえ、お前そんなに飮んで。

清吉　何だかをかしな胸持だから、酒でも飮んだら開からうと思つて。(ト又ぐつと飮み、)さあ、手前もこれでぐつとやれ。

さよ　わたしや弟のことを聞いたので、癪が起りさうだから、今夜は止さうよ。
清吉　それぢやあ、これでお納杯にしよう。
ト又一ぱい飲む、この時抱子泣く。
さよ　おゝ泣くな／＼、夢でも見たか、犬の子々々。
ト清吉抱子へ思入あつて、
清吉　あ、蟲が知らすか。
さよ　え。
清吉　いやさ、蟲でもかぶりやあしねえか。
さよ　又すや／＼と寢てしまつた。此間に二人樂々と、ちつとの内でも寢ようぢやないか
清吉　むゝ寢たけりやあ手前先へ寢ろ、おらあ寢られねえ。
さよ　そりや又何故でござんすえ。
清吉　（立つて机の上の位牌を持つて來て）その位牌へ對して。
さよ　え、そりや何故に。
清吉　手前の弟は、おれが殺した
さよ　えゝ
トどうとなる、この音に抱子泣出す　清吉は外を憚り窺ふ、おさよは抱子をたゝきいける

清吉　去年手前と川へ飛込み、死なうとしたも餓鬼の折疊えた泳ぎが邪魔になり、死ぬに死なれず上つた時、舟の騷ぎが耳に入り、同じ人に生れたら榮耀榮華がその身の德、持つて生れた果報でも盜みをすりやあ出來る樂しみ、ふつと浮んだ惡心に、現在おれが身を思ひ親父の所へ持つて行く金とも知らず殺した次第、おれが惡事のこれが初まり、知らねえ内は仕方もねえが、仇同志と知つた日にやあ、佛へ對して寢られねえ。
さよ　そんなら弟を殺したは、つながる緣のお前であつたか。（トびつくりする、又抱子泣く。）おゝ、泣くな／＼。
トいぶりつける
清吉　今父さんが悔しさは、一年經てども忘れぬと聞いた時、その苦しさ、濟まねえことゝ思ふ矢先、おれが親父や手前のお袋、故主であつた八重垣のその御子息の難儀となつた、綠丸の短刀を盜み取つたもおれが仕業、またその上にこのやうに、人相書で兄貴が詮議、元はと言やあ強請に行つた、これもおれから露顯したのだ。
さよ　それもこれも知らぬ前、今更言つても仕方がねえ、そんな弱い心ぢやあ、この兒の末が見られないよ。
清吉　どうで惡事にちゞまる命、これまで非道の働きにお

れを恨んでゐる人は、今父さんのいふ通り、寐ても覺めても忘りやあしめえ。人の物を盜みながら長生きせうとは悪い了簡、天道樣が許さぬと穴掘めがぬかしたは、時に取つての辻占に、死ならと覺悟極めたからにやあ、おれを殺して敵を取り、紋三樣や弟へ、首を手向けて父さんの、どうぞ恨みを晴らしてくりやれ。

ト短刀を出し、おさよの前へ出す。

さよ　そりやあさうでもあらうけれど、今更お前が死んだとて褒める人は一人もねえ、あの心なら盜みをば止せばいゝにと笑はれ草、一旦鬼と言はれたからは、どこがどこまで鬼になつて、死ならなどゝいふやうな、未練なことをお言ひでないよ。（ト抱子をいぶりながら）おゝたがよたがよ。

清吉　手前が何と言はうとも、兇狀持のおれが身體、生きてゐちやあ父さんにまだこの上どのやうな、難儀をかけめえものでもねえ、さうなる日にや猶々濟まねえ、ちつとも早く死ぬのが言譯、おれより手前が鬼になり、弟の敵を殺してくれ。（ト短刀を突附けるを振拂ひ）

さよ　えゝつまらねえことを言ひねえな、假令敵同志にしろ夫婦となりやあ二世三世、なんでお前が殺されよう。（ト抱子泣く）おゝ泣くな〳〵、手前の父は分からねえあんなことを言つて困らせる。さあ達つて殺せと言ひなさりやあわたしが先へ行かにやあならねえ、知らねえことゝはいひながら、現在お前の兄さんと一つ枕に寐たからは、死なにやあならぬといふことは、疾うから心は附いちやあゐれど、可愛さうにこの兒をば他人の手にかけにやあならねえ、そればつかりで死なずにゐるに、お前も不便と思ふなら、そんなことを言つておくれでないよ。

ト抱子を清吉に突附け見せる、清吉も不便なといふ思入。

清吉　そりやあおれだつて同じことだが、この小倅が不便につけ、嘸父さんが悔しからうと、子を持つて知る親心、どうも生きちやあゐられねえから、手前の手にかけ殺さにやあ、一人で死ぬからその小倅を、おれと思つて育ててくれ。

さよ　お前が死んで何のつけ、後に殘つてゐられるものか、わたしが先へ今死ぬから、お前この兒を育てゝおくれ。

ト抱子を清吉の前へ突附け、短刀を取るを清吉留めて、

清吉　えゝいゝ加減に馬鹿言へ、おれに餓鬼が育てられる

ものか。

さよ　それだといつて男の子は、男に附くがあたりめえ。

ト抱子顔りに泣く

清吉　えゝ可愛さうに、これ、泣くな。

ト抱上げる。この間におさよ短刀を抜き、

さよ　この間に早く。

ト死なうとするを、清吉片手で留めて、

清吉　えゝこれ危ねえ、放さねえか。

さよ　いえ〳〵、わたしやあ死なにやならねえ。

トおさよ死なうとする、清吉抱子を下におき、泣くを兩人氣にしながら立廻り、機にておさよの肩先を切下げどうとなる、清吉びつくりして、

清吉　やゝ、こりや手が外れて肩先に。

さよ　嬉しや、これでわたしが先へ。

清吉　えゝ、短氣なことをしてくれたなあ。

ト松蟲の入りし合方になる。

さよ　さあ、お前に先へ死なれたら、後に殘つてどのやうなみじめを見ようも知れぬ身の上、一度ならず二度までも親に苦勞をかけるのも、不孝と知れど存らへては、どうで始終は繩目に逢ひ、歎きをかけねばならぬ故、いつそのことに親の家、こゝで死ぬのがまだしも孝行、お前はこれから逃延びてその子をどうぞ育てゝおくれ、頼みといふはこればかり。

清吉　いくら手前の頼みでも、おれが先へ死なにやあたらねえ、この身に罪を背負ひながら、何ぼ餓鬼が不便でもまご〳〵してゐられるものか、おれも直に死なにやならねえ。

さよ　そんならお前も今こゝで、死ぬと覺悟を極めたら、その兒もどうぞ共々に

清吉　そりやあ言はずと知れたこと、後へ殘して父さんによけいな苦勞をかけるより、一緒に殺して連れて行くわ。

さよ　思へばいつぞや稻瀨川へ、身を投げた時二人とも、

清吉　死んだらこんな憂目も見めえ、なまじ命があつたばかり、

さよ　横に車で世を渡り、この身に積みし惡の數々、

清吉　引くに引かれず今日明日と、廻る因果も丁度一年、

さよ　非業に死んだ弟の、

清吉　而も逮夜に今こゝで、

さよ　二人が死ぬも約束事、

清吉　思へば果敢ねえ、

両人　身の上ぢやなあ。（トよろしく思入、抱子泣く）

清吉　お丶泣くな／＼、（トた丶きつけながら、）これ、とても死ぬならこの事を、書殘しておきてえから、苦しからうがちつとの内、辛抱して待つてくれ。（ト抱子の泣くをぢつと見て、）お丶澤山泣け、澤山泣け、手前も今殺してやるから、もう此の世の泣き終ひだ

さよ　あ丶苦しい／＼、水を一つ飲ましておくれ。

清吉　手負に水を飲ましちやあ、（ト思入あつて、）然し、どうで死なにやあならねえ身體、この世の別れ水、（ト擔手桶の水を柄杓に汲みて、）心殘さず一ぱい飲みやれ。

さよ　あ丶嬉しうござんす。（ト柄杓に縋りぐつと飲み、うつとりとなる、清吉耳へ口を寄せて、）

清吉　これおさよ、今後から行くぞよ。（トこれにておさよ心附き、）

さよ　小僧は何處に。

清吉　これ、こ丶に。（ト見せる。）

さよ　あ丶もう、顏が見えねえよ

ト抱子の頭を探り、につたりと笑つてそのま丶落入る、清吉うとなり子をた丶きつけながら泣く。この時隣家の二階にて、

呼ビ　一東西々々　戀娘昔八丈鈴ヶ森引廻しの段、始まり左樣、」

ト呼ぶ、これにて床の淨瑠璃になる

〽人の身の捨所とや名に古りし鈴ヶ森の仕置場所、青竹にて矢來を構へ、側にきらめく拔身の鎗、この世からなる地獄の責、思はしくもまた恐ろし丶、

トこの内清吉抱子を抱へ寐かし、おさよの死骸を二枚折の屏風にて隱し、短刀をよき所へおき、思入つて、

清吉　折も折、時も時、隣りで語る淨瑠璃は、白木屋お駒が引廻し、この身の果は木の空と思ひのほかに今日こ丶で、馬にも乘らず疊の上、身を捨札に罪科を野末にさらさず、死ぬのが仕合せ、たゞ不便なはこの小僧、いはゞ同類添へに命を捨てるも同じこと、惡い親に抱込まれ、切られて死なにやならねえぞよ。（ト抱子へ思入あつて、）人の來ぬ内惡事の次第を、せめて一筆西心どのへ。（ト人相書を取つて、）幸ひこ丶に人相書、紙をへがしてこの板へ身の言譯を書殘さん（ト抱子の泣くをた丶きつけながら、）お丶ちつとの間だ、泣いてくれるな／＼。

〽子を思ふ闇より闇に目もわかず、たゞさへ暗き父親が、

トこの内清吉抱子を寐附け、以前の硯箱を持つて來て、

筆を取り、抱子を見てこれを殺すのかといふ思入、ホロリとなし、紙をへがし書きかけ、
〽涙に見えぬ道筋を、現ともなく走るとて夢路を歩む心地してやう〳〵、彼處へたどりつき、
ト書置を書きしまひ、思入あつて卒塔婆を立てかけし上の鴨居の珠數を取つて首にかけ、その跡の釘へ札の紐をかけ、これにて捨札と見ゆる心、
身の言譯のこの書置、後でとつくり讀んだ上、西心どのにも弟を殺した罪を水にして、紋三樣へこなたからお墓へ詫をして下せえ。ト抱子泣く故抱き上げ〽西も東も知らねえ小僧が、此頃にねえ泣聲は、産神樣が教へるか。
〽今日が親子の一世の別れ、せめて最期の暇乞ひ、
ト清吉抱子の顏へ頰をあて、頭を擦りなどして、
先長い手前をば、殺してえ氣は少しもねえが、兩親ともに死んだ後祖父さんの手で育つとも、あれあの小僧は鬼薊清吉といふ泥坊の子だと人に言はれたら、一生出世はできねえ身體、それ故殺してしまふのだ、當歳ながらおれが胤、未練に泣かずと往生しろ
〽見れば嚴しき竹垣に、さも恐ろしき拔身の槍、これで我子を殺すかと思へば胸も張裂く苦しみ、

ト清吉抱子を片手に提へ、短刀にて突かうとして突兼ねる思入よろしくあつて、短刀を捨て、抱子をぢつと見て、
今殺されるも知らずして、にこ〳〵笑ふ愛らしさ。
〽蝶よ花よと撫でし子を、科人にして殺すとは、よくよく深い前世の因果、
これにて思ひあたりしは、弟求女を初めとして、これまで多くの人を殺し、その親達の歎きをば今日といふ今日身に知つて、殺しともないこの小僧、手前勝手と笑はゞ笑へ、どうまあ刄があてられよう
〽未來は奈落へ落つるとも、どうぞ娘が助かるやう、お慈悲ぢや願ひ上げますと、愚に返りたる親心、
トこの內清吉抱子を遣ひ、よろしく思入あつて、
後に殘して死にますから、行末賴むは西心どの、
〽さあ〳〵こちへと手を取つて、暫く傍に介抱なす。
ト清吉抱子を下へ寐かし、ほつと歎息なさし思入
死ぬる覺悟も恩愛に、黃泉の障りはこの坊主
〽思ふことかなはねばこそ憂きことの戀と義理との雙たづな、不便やお駒は夫の爲め斯る憂き身の縛り繩、顏さし入るゝ懷をもれて流るゝ淚橋、屠所の羊の歩みより果

敢なき身ぞと観念し、力なく〳〵引かれ来る。
トこの内清吉白木の机に香爐花立を載せ側に置き、肌を脱ぎ、短刀を手拭にて巻き、腹を切らうといふ思入
いくら言つても返らぬ愚痴、どうで盗みをしたからは。
〽果はかうした浅ましい、この世からなる劔の山、
ト清吉思入あつて短刀を腹へ突立て、糊紅になり、
〽身を切裂かれ憂き恥をさらすも定まる因縁づく、
ト苦しきこなしにて、
〽一世と契りしその人と、一世を限る親子の名残り、
トおさよの死骸へ寄らうとする。抱子泣く故這ひ寄りて苦しみながらたゝきつけ、延上りて屏風の内を見る。
〽延上りても竹垣の隙間隠れの人群に、眼も泣き腫れて見え分かぬ、
トこの内死骸と抱子へ思入あつて、苦しきこなし、
〽折もこそあれこなたなる群集押分け両親は、竹垣に縋り附き、
トこの時上手湯灌場の羽目を壊し、白蓮事大寺正兵衛着流し一本差にて出る、下手より西心出で、両人清吉の側へ寄りて、
白蓮　やれ早まるな、弟清吉

西心　こりや何故に。
両人　この生害。
清吉　仔細はそれなる書置に。
白蓮　なに、書置とに
西心　たしかに、それでござります。
ト觸書の札へ思入、白蓮見て、
白蓮　むう「下総の国行徳無宿鬼薊清吉、書置の事一、この清吉事いまだ清心といひし出家の折、遊里へ通ひ女犯の罪にて追放受けし其の折柄、縁につながる弟と知らず、我が身の為めに才覚なしたる金子五十両盗み取り、過つて殺害に及び、其の後大江の邸へ忍び、緑丸といふ短刀を奪ひ、故主八重垣紋三郎様へ盗賊の疑ひかけ、又兄正兵衛が積悪露顕、女房おさよが敵同志故、義理を立ての最期まで、元の起りは我がなす業、その他悪事は数知れず、今といふ今先非を悔い、三方四方へ申訳に、たつた一つの命を捨て、町人ながら左より右の肋へ引廻し千人塚に於て相果て候ものなり。」（ト読終りて）すりや清吉にはそれ故に、先非を悔いての生害なるが。
西心　死なずと仕様もあらうのに。
両人　早まつたことをしてくれたな。

〽縋り歎けば顏を上げ、

清吉　求女といひおさよといひ、非業な最期もみんなおれ故、腹も立たうがこれ父さん、(ト腹へ指さし)これで堪忍して下せえ。

〽言ふに母親うろ〳〵と、娘が姿見るよりも前後不覺に取亂し、

ト西心二枚屛風の内を見て、はあと泣かうとし、よろしくあつて

西心　えゝ情ないこの姿、今更二人が死んだとて、求女が生きて返りはせぬ、何故それよりも包み隱し、心の内で不便と思ひ、後懇に菩提をば弔うてやつては下さらぬ、いか賴りに思ふ二人を先立て、よい年をして後に殘り、いかなる因果者のやうに後指をさゝるゝが、おりや口をしい、口をしい、何故に死んでは下さつた。

清吉　あゝこれ〳〵父さん、その歎きは尤もだが、

〽必ず〳〵泣かずとも、娘でも何でもない、ありや前生の敵ぢやと歎きを止めて下さるが、少しは冥土の罪ほろぼし、(ト清吉よろしく思入あつて、)たゞ此の上のお賴みには、兩親のないこの坊主、どうぞお前の手しほにかけ、まことの人にして下せい。ト懷より金の入りし鬱金の守袋入れの胴卷を出し、)守袋に入れた百兩は、求女が金の五十兩、殘りは小僧が養育金

ト西心抱子を抱き上げて、

西心　おゝ孫がことは案じさつしやるな、わしが育つてく〳〵は、立派な人にしてやります。

白蓮　思ひがけなく我も亦、この浴灌場に隱れてゐて、にしおりかゞみの弟が、末期の際に廻り逢ふその嬉しさも、情なや、人相書にて行方をば津々浦々迄詮議さるれば、明日をも知れぬ身の上だが、一日なりとも娑婆にゐる内言ひおくことがあるならば、この正兵衞に言つておきやれ。

清吉　言ひおくことは何もねえが、この世の別れ兄の手で、介錯なしてこの首を、あの佛前へ供へて下せえ。

白蓮　いかにも介錯なした上、望みに任せ佛前へ、そちが首を手向けてやらう。

清吉　又父さんは短刀を、蔭山樣にお渡し申し、紋三樣の疑ひが、晴れるやうにして下せえ

西心　おゝ、それはわしが呑込んだ。

清吉　これにて心殘りはねえが、たつた一目坊主めが、笑ひ顏を見て死にてえ。

〽今死ぬる身の今までも、おぼこ娘のあどなさを思ひやりつゝ兩親は、前後不覺に打倒れ、泣音濱邊に打寄する波に波ます如くなり、

ト この內西心抱子を淸吉に見せる、淸吉苦しさを怺へてあやす思入。これを見て白蓮西心愁ひのこなし、ト ぐわつと泣く、ばた〳〵になり、下手より三次網襷尻端折り、非人と見える拵へ、手下の一二同じ拵にて、竹槍を持ち出來りて、

三次　頭こゝにゐなすつたか。

白蓮　やゝ、三次を始め、此の體は。

三次　先刻頭を入れて來た早桶の內を、湯灌場買ひに見咎められて仕方なく、こゝを連出しばらしたが、

手一　惡事千里と頭の噂。

手二　ぱつとした故竹槍で、

三人　防ぐ積りでこの支度。

白蓮　それではうか〳〵もうこゝに、足を留めてはゐられねえ。

淸吉　少しも早く介錯なし、この鎌倉を落ちて下せえ。

白蓮　言ふにや及ぶ。

淸吉　父さん、お前はこの短刀を、蔭山様へ。

西心　おゝ合點だ。

ト 糊紅を拭ひ鞘へをさめる。ばた〳〵にて、下手より繁之丞出來りて、

繁之　持參に及ばぬその短刀、繁之丞が受取らん。

西心　いかにもお渡し申しませう。

ト 短刀を出す、繁之丞改め見て、

繁之　はゝお、これぞまさしく綠丸、これにて紋三が汚名も晴れ、ちえゝ忝ない。

白蓮　いでこの上は弟が介錯。(ト刀を持ち淸吉の後へ廻る、淸吉思入。)

三次　そんならこれが、

淸吉　この世の別れ、

西心　せめては後世を安樂に。

ト 西心鉦を出し、片手に抱子を抱きいぶりつけながらたゝく。繁之丞は上手捨石へ腰をかけ、下手に手下の一、二竹槍を持ち、三次は墓手桶を持ちて控へゐる、白蓮刀を出すとこれへ水をかける、淸吉苦痛を怺へ畏まる、これを皆々見て、

白蓮　あ、惡に强さは善にもと、

繁之　武士も及ばぬ。

西心　この生害。

清吉　介錯したら、この首を、

白蓮　望みの通り佛前へ、

清吉　まツこのやうに、

白蓮　むゝ。

ト刀を振上げる、清吉は側にある白木の机を取つて、兩足を持ち机へ首を載せる、これを一時に木の頭、

清吉　供へて下せえ。

トよろしく思入れ、西心は鉦をたゝき念佛を唱へる、白蓮は名殘を惜しむ思入れ、本釣鐘にて、　ひやうし幕

ト引阿けると、えいと太刀音し、後捕物の鳴物ドンドンにてつなぎ、直に引返す。

(表門の場)――本舞臺上の方透木門、この下に潜り門、續いて門番所、左右は練塀、門番所の脇に小高き用水桶、總て無縁寺表門の體。上下に垂をおろせし四つ手駕籠二挺あり、駕籠舁二人〇へ立つてゐる禪の勤めにて幕明く。

〇　こう相棒、八と權とはどうしやアがつたらう。

△　草鞋を買ひに行つたぎりだが、どこぞで片足上げてや、あゐねえか。

〇　てつきりそれに違えねえ。(ト駕籠へ向ひ、)もし旦那、相棒を呼んで來ますからちつとの内お待ち下さりませ。さあ、お願ひ申したら搜して來よう。

△　いめえましい世話のやけた奴だ。

ト兩人上手へはひる。と潜門より手下の一、二早桶を擔ぎ出來りて、

一　なんでもこれから夜通しに、腰越から山手へ入らう。

手二　それに今夜は宵闇だから、ふけるにや丁度いゝ。

手一　ちつとも早く名越を越さう。

手一　合點だ。

トこの時上下より、黑四天の捕手四人出で、

捕一　捕つた。(ト十手にて打つてかゝる。)

手一　こりや何となされまする。

捕二　その早桶に隱れ忍ぶは、配符のまはつた大寺正兵衞。

手二　それ知られたら。

ト息杖にて打つてかゝる、禪の勤めになりちよつと立

廻つて、手下の一、二花道へ逃げて入る。と捕手は早桶を擔ぎ後を追つて入る、時の鐘、誂への合方になり、潜門より白蓮鼠の着付黒の法衣、網代笠、無縁寺といふ弓張提灯を持ち出来り、捕手の後を見送り思入あつて、

白蓮　寺といふ名に今日までは、死人と見せて早桶に隠れてゐたも底が抜け、四つにかゝつた縄よりも又菱結にからまれて、暗い所へ投込に悪事は重いさし擔ひ、命を棒に振るところ、三次が施主の計りに立ち、首尾よく脱れた今夜の葬式、こいつあおれも浮まれるわい。

ト時の鐘、左右の駕籠の垂を上げると、内は黒四天の捕手二人づゝゐて白蓮を窺ふ、白蓮これを見てぎよつとなし提灯の灯りを吹消す。捕手つか／＼と出て、捕つたと十手にて打つてかゝる。白蓮笠を投捨て、ちよつと立廻り、捕手組附き捕押へる、白蓮はね返し、着附法衣取れて以前の装になり、つか／＼と花道へ逃げて行くと花道の揚幕より、同じ捕手四人出て、そいと十手を振上げる、これにて是非なくぢり／＼と本舞臺へ来ると、以前の捕手と共に八人にて立廻り、門番所の屋根、四つ手駕籠を遣ひ、捕物の立廻りあつて、

トゞ捕手は花道へ逃げてはひる、白蓮思入あつて、
最早脱れぬ我命、此の場に於て潔よく
ト腹を切らうとする。門の内より西心抱子を懐へ入れつか／＼と出てこれを留め、

西心　あもし、正兵衛様、待つて下さりませ。
白蓮　や、そちは西心、何故我を、
西心　さ、お留め申すはこの坊主、わたくしとても老の身に、明日をも知れず亡き後は、力と頼むはあなたばかり、
白蓮　むゝ、我とても親もなく、兄弟もなく正兵衛が血筋は甥のこればかり、
西心　それ故死ぬる命を延はり、どうぞこの子の行末を、
白蓮　とはいへあたりを、捕手が囲めば、
西心　これから寺の裏手を越え、
白蓮　廓を横に火葬場へ、
西心　少しも早く。
白蓮　むゝ、一先づこの場を落ち延びん。（トこの時捕手四人出て取囲み、）
捕手　捕つた。
白蓮　何を。

ト眞中に白蓮事大寺正兵衞、下手に西心、捕手棒に列び、よろしく。

幕

十六夜清心（終り）

三人吉三廓初買　七幕

一富士を契情の　山形に比

一重（九重）姉妹異見

二羽鷹を辻君の　異名に較

一歳（十二）同胞馴染

三茄子を小林の　譫語に准

一臈（別當）兄弟對面

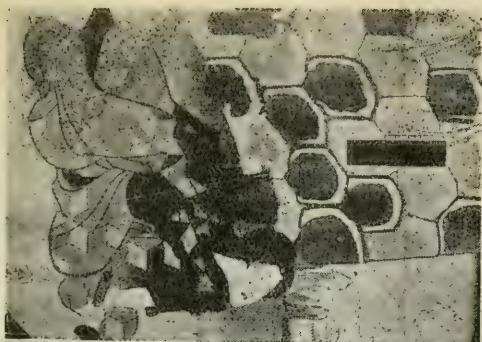
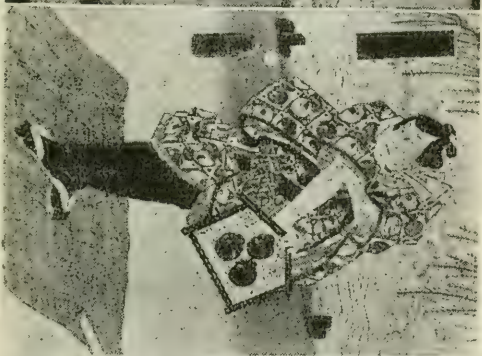
八百屋お七の名を假てお嬢吉三が振袖姿誰も娘と夕まぐれに手に入る金の一包明けて名のれば弟の難儀を白　十
髪の土左衛門爺が罪亡しの後生ねがひに佛久兵衛が子故の迷それと悟つて丁子屋の亭主が情におしづまで察　千
へしのんで相の山哀はつもる泡雪に　庚
通客文里が恩愛斷
吉例曾我初夢ハテめづらしい緣　小
日三夜地獄宴の榮
小姓吉三の名を忍ぶお坊吉三が浪人　猿
姿未な巧の朝ぼらけに落せし證據の封じ文明けて言はれぬ妹は犬の祟りに　拾
に和尚吉三が引導渡せし身替り首も釜屋武兵衛が訴人故四鳥にかゝる四つ辻の櫓の太鼓うち寄つて覺悟を死　道
出のとりべやま袂をしぼる春さめに
俠客傳吉が因果譚

役人替名

（作者筆役割附）

三人吉三（龜戸豐國筆）

お坊吉三（權十郎）

和尚吉三（小團次）

お孃吉三（粂三郎）

三人吉三廓初買
（三人吉三——七幕）

序幕

荏柄天神社內の場
同松金屋座敷の場
笹目ヶ谷柳原の場
同新非橋の場

（役名——木屋の手代十三郎、安森の若黨彌次兵衞悴彌作、海老名軍藏、紅屋の悴與吉、紅屋與兵衞、鷺ノ首の太郎右衞門、研師與九兵衞、夜鷹の妓夫けんのみ權次、夜鷹茄鯛のおいぼ、同虎河豚のお蝶、同婆アおはぜ。安森の一子森之助。文里女房おしづ、辻君おとせ、木屋の下女おちせ、非人等。）

（荏柄天神社內の場）　本舞臺上手へ寄せて額堂、この前に梅鉢の紋の附いたる鐵の用水桶、額堂の內に出茶屋、下手に石の鳥居、石の玉垣、梅の立木、總て荏柄天神境內の體。茶屋の內に○△□◎の町人、中間等四人腰かけてゐり、茶見世の亭主茶を出してゐる、この模樣大拍子にて幕明く。

亭主　皆樣よう御參詣でござります、お茶を一つお上りなされませ。

○　なんと、今年は天氣都合がいゝので、盛り場は仕合せなことぢやないか。

△　さうとも〳〵それにこの天神の境內は見晴しがいゝから、きつい繁昌だの。

□　こう、繁昌といへばこの頃噂の高い、笹目ヶ谷の柳原に、おとせとかいふがうぎにいゝ夜鷹が出るぢやあねえか。

◎　手前はまだ知らずか、美いの醜いのといつて夜鷹にやあ勿體ねえ、交り見世の新造でも、あの位なものは少ねえぜ。

◎　そいつあえら物だの。

□　それで聞きねえ、去年の大晦日の日にやあ三百六十手を賣つて、そこで一年が三百六十日だから一年と名を附けたといふことだ。

○　もし、そりやあ、ほんまの話でござりますか。
◎　お前方も試しに行つて見たがいゝやな。
△　そいつあ一晩ひやかしに出かけませう。
◎　とても行くなら、早く行から。
□　こう、先驅はならねえせ
○　私どもゝ戻り路に、その夜鷹ををがみませう。
△　をがむといへば、早く參詣しようぢやあないか。
○　話にうかれて、肝腎のお參りを忘れたやつさ。
□　そんなら一緒に行きませう。
亭主　まあお靜においでなさりませ。
○　茶代はそこへおきましたよ。
皆々　さあ行きませう。
ト皆々鳥居の內へはひる。花道より鷺ノ首の太郎右衞門高利貸の拵にて、後より研師與九兵衞町人裝にて、刀の風呂敷包を擔ぎて出來る。
與九　おいおい、そこへ行きなさるのは、太郎右衞門さんぢやあねえか
太郎　よう、研屋の與九兵衞さん、研與九さんか。
與九　お前のあとを追つかけて歩いてゐたわな。
太郎　私も亦おぬしのあとを、あとをと搜してゐたのだ。
與九　何にしろ額堂で、話しをしようぢやあねえか。
太郎　そんなら、向うで。
與九　さあ來なせえ。（ト兩人茶見世へ來り腰をかける、茶屋の亭主茶を出す）ときに太郎右衞門さん、此間からお前に話をした丸印の一件はかういふ譯だ。おれが出入屋敷で、當時この武張つた世の中で一刀流の達人と人も知つたる鎌倉昵近のお武家の、海老名軍藏樣といふお方が、急に庚申丸といふ短刀をおたづねなさるのだ。所でおれがその短刀をかぎ出して、おれが世話で賣る積りだが、その金にちつと手づかへたから、こなたを賴んだあの百兩の金子、今そのお方が藤の兩替屋で取引をする積りだから、どんなに氣を揉んだか知れぬわな。
太郎　そりやあおれも承知だから、お前を搜して來たのだが、その百兩の金は持つて來たが、いくら心安い仲でも金錢は他人だ、まづ禮金が五分で利息が五兩一分といふところだが、金が大きいから十兩一分で、こいつが二兩二分禮金が五分で、五兩よ、まづ七兩二分はてん引で、この證文の月が切れると罰金を取るが、そこは手前も承知だらうの。
與九　おつと皆までいふべからず、そこは研屋の與九兵衞

だ、お前の金を借りるからは利の高いのは合點だ。おれも随分高利では、苦勞した人間だわな。

太郎　それさへ承知ならこゝで金を渡さうがの、七兩二分はてん引だよ。

與九　はて承知だといふことよ。お前もよつぽど慾肥りだの。

太郎　知れたことよ、酒を呑まねえから他に肥りやうがねえわさ。

與九　何にしろ海老名樣のおいでまで、松金屋で一ぱいやらうぢやあねえか

太郎　そいつあ妙だ、然し晝前ではなるまいの。

與九　はておれも研屋の與九兵衛だ、落附いておいでなせえ。

太郎　そんなら旦那

與九　さあおいでなせえ

ト兩人上手へ入る。花道より文里女房おしづ、人柄のよき世話女房の拵にて、後より下女おちせ風呂敷包みを持ち、丁稚三太おしづの子鐵之助を背負ひて出來り、

しづ　これおちせや、今日はいつもと違うて、坊は家へおいて來たほどに、天神樣へおまゐり申して戻りには、初瀬の觀音樣へ行つて、何ぞ土産を買うて行きませうわいな。

ちせ　ほんにそれがよろしうござりませう、おゝ三太どのお前にも何ぞねだつて上げようわいな。

三太　なんの、おれよりはお前の好きな金龍山でも。

ちせ　えゝも、何ぞといふと私ばかり、

しづ　又爭ひをしやるかいの、さあ、おまゐりをしませうわいの。

三太　もし、お上さん、この梅の盛りを御覧なされませ、見事なことではござんせぬかいなあ。

しづ　おゝ見事に咲きましたわいの。花でさへこのやうに春を違へず開くのに、何の因果でこのやうに、(トおちせと顏見合せたが、氣を替へて)お茶を一つ貰うてたも。

ちせ　はい／＼畏りました。(ト茶を汲んで來て)もしお上樣、旦那樣は今日も武者小路のお座敷から、まだお歸りがござりませぬが、お遅いことでござりますな

三太　どうで今夜も化粧坂のお座敷だから、歸る氣づかひはございません。

しづ　またそのやうなことを言やるか、口出しをしやると

聞くこつてはないぞや。

ちせ　まことに、三太どのはおしやべりで困りますよ。

しづ　さあ／＼、神さんへおまゐりしませうわいの、

ト上手より紅屋與兵衛更けたる町人裝にて出來り、おしづを見て、

與兵　お丶娘、天神樣へおまゐりか、見れば今日は坊が見えぬが、どうぞさつしやつたか。

しづ　いえ／＼今日はちと外へ廻らねばならぬ故、家へ殘してまゐりましたわいなあ。さうして父さんには何處へおいでゞござんすぞいなあ。

與兵　ちつと生業用があつて切通しまで行くのだが、そなたにいろ／＼話しもあり、わざ／＼逢ひに行かうと思つてゐたところ、つい立ちながら話しもできぬ丁度食事時分ぢや、松金屋へ行てゆつくり話さう。お丶おちせに三太か、お丶御苦勞々々。

ちせ　いつもお達者で、おめでたうござります。

しづ　そんなら一緒に參じませうわいなあ。

與兵　さあ行きませう

ト與兵衛鐵之助の手を引きて先に立ち、皆々附添ひ上手へはひる。花道より海老名軍藏武張つたる拵にて出來り、後より門弟四人從ひ、安森の一子森之助を圍みて引立て出來り、舞臺へ森之助を引きすゑる。

軍藏　こりや／＼門弟衆、そのわツぱめは如何いたしたのでござる。

門一　先生お聞き下され、この小童めはちつぽけた形をして、身共が鞘當をしたら、挨拶を致せと吐かしをる故

門二　形に似合はぬこしやくもの、あまり面憎く存じました故。

門三　こまツちやくれた餓鬼が言分。

門四　以後の見せしめ、存分に致さうではござらぬか。

門一　（森之助の刀を拔き取り見て）いづれも御覽なされ、鞘當致せしの挨拶のと、口は立派に利く奴が、豆腐も切れぬ竹光でござるわ。

門二　大脅しにもなりはいたさぬ。こんなことを言ひかけて、物取いたす巾着切かも知れませぬ、

門三　こんな奴が油斷がならぬて。

門四　いつそこの場でひつくゝつて。

ト門弟の三、四兩人森之助の兩の手を取らうとするを、森之助ぐつと捻ちあげて、

森之　假令中身は竹光でも腰に帶せば武士の魂、手籠にな

されしお侍様、その分には致されませぬぞ。

ト兩人を左右へ投げ退け、きつとなる。

軍藏　なるほど、形に似合はぬ逞しき小伜、して其方は何者の伜だ。

森之　お尋ねにあづかりまして名乘るも便なきことながら、安森源次兵衞が伜森之助と申す者でござりまする。

軍藏　なに、安森が伜とな、いや親子とて爭はれぬ、何處やらが似てをるわ、はて氣の毒なものだなあ。

門一　元は鎌倉昵近で、刀劍目利の達人と、自慢顏したその罰で、

門二　賴朝公より預りの、庚申丸の短刀を盜人入つて奪ひとられ、その越度にて切腹なし、

門三　家は斷絶それからは、母親妹ともぐに微な暮しをすると聞いたが、

門四　謠をうたつて袖乞ひの長々の浪人者か、見れば見るほど、

皆々　みじめな態だ、むゝはゝゝゝ。

軍藏　こりやその筈でもあらうわえ、お上の祿を食みながら、目利々々と目を掠め、刀の賣買道具屋武士、潔白な侍はこの如く御奉公勤むるも、こりや天理と申すもの、この軍藏も遺恨ある源次兵衞、その腹癒せに短刀は身共が竊かに、いや、身共の前をも憚からず、慮外な小伜不便ながら手打にせねば、身が一分が立たぬわえ。

森之　小身ながら私も武士の伜でござりまする、お手打とあるからはお相手になり、その上で命はあなたに差上げませう。

軍藏　いゝ覺悟だ、子供を相手に大人氣なけれど、あまり口が立派故、望みに任せ命を取るぞよ。

森之　御念には及びませぬ。

軍藏　いづれも、この小伜を引出さつせえ

四人　心得ました。

ト門弟四人森之助を無慙に引立て前へ出す、軍藏刀を拔く、此時花道の揚幕にて、

彌作　暫く〳〵、暫くお待ち下されませう。

トばた〳〵になり、安森の若黨彌次兵衞の伜彌作、古き紋附を着たる若黨裝にて走り出來り、

まづ〳〵暫くお待ち下さりませ、何か樣子は存じませぬが、よたけもないこの子供、お手打にもなさるゝ權幕、見ますればお歷々のお武家樣、どうぞこの場の所はお詫言を申しまする。お助けなされて下さりませ。

門一　やい／＼、むさくろしい態をしろいで、
門二　先生の前をも憚からず、
門三　横合から入らざる詫言、
普々　すつこんでをらぬかえ。
彌作　ではござりませうが、そこを何卒御了簡
軍藏　いゝや了簡ならぬ、彼れが口より相手になると、子供ながらも申した故、是非とも相手にいたさにやならぬ。
普々　えゝ邪魔な奴め、退きをらぬか。
彌作　いづれも樣、まあ／＼お待ち下されませ。
軍藏　して／＼われは何者だ。
彌作　何をお隱し申しませう、私は安森の若黨蜆次兵衞が悴彌作と申しまするもの、可愛さうにこのお子のみじめな装を御覽じませ（トホロリと思入あつて）お話し申すも涙の種、親御源次兵衞樣にはお預りの短刀を盗まれたる申譯に御切腹、つひにお家は斷絶にて浪人なして微なお暮し、お袋樣の手しほにてお育ちなさるゝその内に、御老病とは申しながら、痩せる世帶に子供の介抱、つひには苦勞をなされ死に、又お兄樣の吉三樣には御放蕩にて御行方知れず、お姉樣のお元樣には母御樣の御病氣に、藥の代も内證の貧の病ひにその身をば吉原の勤め奉公、今では丁子屋の一重とて全盛なれど勤めの身の上、かゝる手段もないまゝに私親子が血の涙で、お世話を致すこのお子樣、しがない活しの其中でも、どうぞ紛失の短刀を詮議し出しお家の再興、身を粉に碎く我々親子、以前の誼を思召し、お許しなされて下さりませ。
門一　えゝ聞きたくもねえ長談議、われの尋ぬる短刀も疾うにこつちが。
軍藏　こりや、（ト押へて）不便には存ずれど、どうあつても了簡ならぬ。
森之　さあ軍藏樣、覺悟は極めた、森之助お相手になりませう。
彌作　これはしたり森之助樣、又そのやうなことをおつしやりますか。このお子樣が何とおつしやりましても、お相手にはなりませぬ、その替りには私を御存分になされまして、それで御了簡なされて下さりませ
軍藏　了簡ならぬ所なれど、左樣に頼むそちが心底、えゝよいわ、以前の誼だ汝が替りとあるから、聞入れてもくれうわ。
彌作　左樣なら私で御容赦なされて下さりますか、えゝ有

難うござりまする、

門一　さあ下郎め、望みの通り名代に、

門二　不足ながらかうしてくれるわ

ト門弟二人彌作を引立て前へ突出し足蹴にする、彌作起上らうとするを二人の門弟彌作の肩へ足をかける、彌作きつとなつたが思ひ返してぢつとしてゐる。

門三
門四　えゝ、張合ひのねえ

ト又前へ蹴倒す、彌作起上らうとするを軍藏持つたる煙管を逆手に持ち、彌作の眉間を割る、森之助これを見て立寄らうとするを彌作留め、そのまゝ俯向になる。

軍藏　安いものだが、これで了簡いたしてくれるわ。

門一　主が主なら家來まで、あのみすぼらしい裝わえ。

門二　ときに先生、彼奴等にかゝつて餘ほどの暇どり、時刻もよろしうござらう。

軍藏　いかさま、松金屋で待ちわびてをるであらう。

四人　そんなら、先生、

軍藏　どりや、參らうかえ、

ト軍藏先に立ち、皆々上手へはひる。

森之　これ彌作、堪忍してくれ、おりや悔しうて〱ならぬわいの。

彌作　あゝ御尤もでござりまするが、あの軍藏といふ奴が、並大抵の奴ぢやござりませぬ。この敵はきつと私がとりますほどに、必ずお氣遣ひなされまするな、あゝ世が世の時であらうなら、指でもさゝせることぢやござりませねど何を申すも今の成行、又來る春もござりまするほどにお案じなさることはござりませぬ、さあ〱、親父めも嘸案じてをりませう、私がお供いたして參りませう。(ト森之助の手をとり塵を拂ひて立上り、肩入の紋所へ血汐の附きしを見て思入あつて、)あゝ世の盛衰とは言ひながら、木綿布子の肩入へ殘る形見の御紋付、着物は垢に染むるとも心を汚さぬこの彌作、いかにお主の名代に手籠めに逢ふとは云ひながら、眉間に受けしこの疵もたゞ堪忍が大事故胸を擦つて怺へしが、血汐をあやした海老名軍藏、思へば〱、

ト無念の思入にて、思はず森之助の手を固く握る。

森之　あいたゝゝゝ。(ト叫ぶ、彌作これにてびつくりして氣を替へ、)

彌作　さ、まゐりませう。

ト兩人上手へ行きかける思入にて、道具廻る。

（松金屋座敷の場）―本舞臺常足の二重、上手障子屋體、正面床の間、下手後へ下げて建仁寺垣、遠州透しのある庭附の門、いつもの所枝折戸、下手に梅の立木。總て松金屋座敷の體。こゝに紅屋與兵衛、おしづ住ひ、おちせ料理を載せし廣蓋を片寄せてゐる。

しづ　これおちせ、あの三太はどこへ行つてゐるであらう、困りものぢやの。

ちせ　いえ／＼大方そこらにをりませう。私が見てまゐりませう。

與兵　大儀ながらさうしてくりやれ

ちせ　畏りました、どりや行てまゐりませう。

　ト下手へはひる。

與兵　これ娘、今更改めいふも異なものなれど、そなたの夫文藏殿、世間の噂耳へはひり、聞けば文里とやらいふて二年此方廓通ひ、内を外に遊び歩いて、假令有德な身代でも廓の金には詰る慣ひ、うか／＼する間に家藏をたふしてしまふは知れたこと、それも若い者でもあれば、又心のしまる時節もあれど、四十歲に近い文里殿一人身でもあることか子供も二人ありながら、四十といへばもう初老、譬にもいふ四十下りの色事とやら、ありやもうなほる氣遣ひはない。こゝらが思案の極めどき、そなたもまだ老い朽ちた身ではなし、一つも年の若い内思ひきつて別れてしまひ、身の片附もせねばなるまい、まあよう考へて見たがよいぞや。

しづ　お前がそのやうに御心配なさるゝのは有難うござんすが、つい一通りに申しますとそのやうなものなれど、主人も屋敷勤め故、多くは役人衆への權門に厭と言はれぬ仲間の附合、また、たまさかは氣晴らしに行かしやんすこともあれど、私や子供をふりすてゝ女郎藝妓に見返るやうな、そんな心でないことは、年來連添ふ夫ぢやものよう知つてをりまする。よし又まことの放埒でも、一旦夫と定めた文藏殿、子まで生したる二人の仲、假令離はれ去られうとも、別れる心はござんせぬわいなあ。

與兵　そなたの爲めを思ふ故、事を分けてこの親が、これほどいふのも聞入れぬか。

しづ　假令お前樣のお言葉背き、御勘當を受けましても。

與兵　あの勘當受けても、別れることは。

しづ　お許しなされて下さりませ。

　ト泣伏す。與兵衛思入あつて手をうち、

與兵　あゝ感心なものだ、見上げた、娘、それでこそ天晴貞女、假令どのやうな貧しい暮しをするとても、夫に附くが女の操、いやもう年寄つたこの親も恥入るわい。さささもうよい、その貞節な詞を聞く上は、おれも安堵ぢや、子供のあるこなた小遣錢にも困るであらう、澤山はないがこれをやるほどに、心おきなう遣うたがよい。

ト腹卷より紙に包みし金を出し、おしづに渡す。

しづ　いえ／＼それには及びませぬ。もし困つたその時は、おねだり申しまする。

與兵　いや／＼これはおれが心ばかりぢや、孫に何ぞ買つてやつてくりやれ。（ト無理に押しやる。）

しづ　そんならお貰ひ申しますわいなあ。

與兵　觀音樣へまゐるなら、おれも一緒に參詣しませう。

ト手をたゝく、女中出來りて、

女中　これはお客樣、お構ひ申しませぬ、何ぞ御用でござりますか

與兵　大きに長居をしました。勘定を渡します。

ト紙入より金を出し紙に包みて渡す。

女中　これは有難うござります、これではお剩錢がさんじますわいな

與兵　いや／＼、剩錢はお前煙草でも買うて

女中　それは有難うござります、御新造よろしく、旦那樣へ。

ト女中廣蓋を持ち奥へはひる。下手よりおちせ、丁稚三太鐵之助を背負ひて出來る。

しづ　これはしたり三太、何處へ行つて遊んでゐたのぢや、ちと氣を附けたがよいぞや。

與兵　いや／＼、叱らぬがよい／＼

ト此内おちせおしづと與兵衞の履物をなほし、皆々門口へ出る、奥より女中出て、

女中　まあお靜においでなされませ。

與兵　大きにお世話になりました。

しづ　さあ行きませうわいな。

ト鳥追通り神樂になり、皆々花道へはひる。女中は奥へはひる、と奥より軍藏先に門弟四人、後より太郎右衞門、與九兵衞等附いて出來り、

軍藏　扨、今日は與九兵衞、何かと世話であつたな。

與九　いえもう、何も家業でござります、お望みの短刀さへお手に入りますれば、私は本望でござります、へゝゝへゝ。えゝ即ちこの人が、太郎右衞門でござりまする。

何分この以後ともお目かけられて下さりませ。

太郎　へい／＼／＼、研屋の與九兵衞殿とは入懇に致しまする、鷺ノ首の太郎右衞門と申しまする金貸渡世、生れは浪花の遊女町で、誰知らぬものもない烏の醵金、高利一通りの損料なら、恐らく私の持前の夜具から、蒲團、帶、合羽、後家、尼、人の女房まで、段々の貸しやうは私が家の損料もの、もしもそんな御用なら頼ましやんせ、〽お頼みあれと言ひ入るゝ。（ト義太夫のやうに語り）あんまりしやべつて、おゝしんど、どなたか私に茶々ひとつ。

與九　えゝいゝ加減にしなせえな、いや、よくしやべる男だ。

軍藏　いや氣輕で面白いわえ、門弟衆太郎右衞門に、酒を一つ勸めて下され。

ト門弟の一手を叩く、女中酒肴を持來る

門一　さあ／＼太郎右衞門とやら、一つ呑みやれ／＼。

門二　拙者がお酌をいたさう。

太郎　へい／＼有難うはござりまするが、先づ生業が肝腎與九兵衞殿委細はさつき話した通り、この金子をお渡し申して下さい。

與九　おつとよし／＼。（ト百兩包みを受取り、封印を改め見て）こりや封のまゝで間違ひもあるまい、先生即ち白金お受取り下さりませ。

軍藏　たしかに受取り申した。

ト軍藏百兩包みを胴卷へ入れ懷中し、紙入より紙に包み少し金を出し、

これ、與九兵衞先刻話しの禮金ぢや、あの者に渡してくりやれ。

與九　畏りました、太郎右衞門殿禮金ぢや、たしかに渡しましたぞ。（ト太郎右衞門に渡す。）

太郎　有難うござりまする。まづこれをお貰ひ申しまして、又女に騙される元手ができました。もと私は用事もござりますれば、御免を蒙りまして、お先へお暇いたし度うござりまする。

與九　はてまあ、いゝではないか

太郎　今のお金で歸り道に、ちよつと彼女の顏が見たいわ。

與九　北國ならば一緒に行かうか

太郎　ところがこゝから筋違に、柳原の土手下で。

與九　扨は夜鷹の一年か。

太郎　おつと、船中にて左樣なことは申すべからず　左樣

ならば旦那樣、いづれもさま。

四人　御苦勞々々。

ト太郎右衞門門口へ出る、與九兵衞立ちかゝりて、

與九　そんなら太郎右衞門さん、柳の下で。

太郎　やっ

與九　おしげりよ。

太郎　とんだ蝙蝠だ。(ト花道へはひる。)

門一　ときに先生、もう木屋文藏方より短刀を、持參致して見えさうなものでござる。

三人　だいぶおそいことではござらぬか。

軍藏　いやもう見えるであらう、まあ待合す間與九兵衞一つ吞みやれ。

與九　有難うございます。

軍藏　ときに與九兵衞、あの短刀の紛失より十年あまりも相立つに、どういふ手から廻り廻つて文藏方へまゐつたのであらう。

與九　いえ、お聞きなされませ、妙なことがあるものでござります。二月ほど後のことでござりましたが、川浚ひの人足が川の中から掘り出したと私に見せましたが、少し見所がござりますから、何はなしに二分で買ひまして、少し研いで見ますると、金色と言ひ燒刄と云ひ、一通りの物ではないと思ひまして、當時の目利でござります故、木屋文藏に見せたところ、五十兩なら引取ると申します故、二分の物が五十兩、直にその場で賣りましたが、僅二月たつか、し惡錢は身に附かずとはよく申したもの、たゝぬにみんな耗つてしまひました。所であとで聞けば、お前樣が豫てお尋ねなさる品とのこと、早くそれと聞いたなら、直にあなたへ上げますもの、と云つたところが、後の祭り、あの文藏が手に入つたばつかりで、もう百兩と値が定まつて、さる大名へ賣れたとのこと、それからあなたがお賴み故、元賣主のことでございますから、やうのことでこつちの手へ讓る積りでござりまする。

軍藏　川へ沈んだ短刀が廻り廻つて、おれが手へはひるといふも、これも緣の深いのだ。何を隱さうあの短刀は、安森源次兵衞が紛失させた一腰なれど、今身共が手より上へ差上げるその時には、一足飛の立身出世、そこで貴樣を賴んで高利の金で求めるのだ。

與九　首尾よくまゐつたその上では、たんまりお禮を。

軍藏　言ふまでもない、望み次第ぢや。

門一　與九兵衞、うまい罠に取りついたな。

與九　今年は初春早々から、どうか運がなほつたわえ。この鬮に乘つてこれからは、金の棒でも掘出さねばなりませぬ。

ト流行唄になり、花道より木屋の手代十三郎箱入の短刀を風呂敷に包みしを持ち出來り

十三　春になつてもそは〳〵と、用が多いせいか日が短いやうだ。今日海老名樣がこの松金屋においでなさるとのこと、どうぞおいでなさればよいが。（ト枝折戸より內を窺ひ腰を屈め）へい、御免なされませ、木屋文藏が手代十三郎でござります。

與九（見て、）よウ木屋の手代十三郎殿、さあ〳〵旦那樣も先刻よりのお待兼だ。さあこつちへ入らつしやれ〳〵。

十三　左樣なら御免なされて下さりませ。

與九　軍藏樣、これが即ち木屋の手代十三と申しまする者、お見知りおかれ下さりませ。

十三　不調法者でござりまする、何分御贔屓をお願ひ申しまする。

軍藏　さあ〳〵十三とやら、そのやうに堅くいたしては話ができぬ、遠慮なくこれへまゐれ。して、約束の短刀は持參いたしたか。

十三　へい即ち持參仕りましてござりまする。（ト風呂敷を解き、箱のまゝ軍藏の前へおき）御免下さりませ

軍藏（取つて改め見て、）なるほど庚申丸に相違ない、即ち約束の代金渡すであらう。（ト以前の百兩包みを出し）改めて請取りやれ。

十三　有難うござりまする。たしかに頂戴仕りました。お請取を差上げませう。（ト腰より矢立を出す。）

與九　なに、汝へ旦那から直々にお渡しなさる金子、なに請取にやあ及ばねえ、先づこれで御用も調つたといふもの、十三郎今日はゆつくり一口頂戴致すがいゝ

十三　有難うござりますが、ちと今日はお屋敷樣へ廻らねばなりませぬし、それに御酒は一向不調法でござりますし、今日はお預け申しまするでござりまする。

門一　さうでもあらうが先生が、折角の思召だ、是非一つ呑みやれ〳〵。（ト無理に杯をさす。）

十三　實に御酒は食べられませぬ。

門一　野暮を申すな、色事でもするものが、酒が呑めぬといふことがあるものか。

門二　身共が酌を致さう、是非一つ呑んでくりやれ。

門三　これ〳〵十三、皆樣のおすゝめだ、一つ呑め〳〵。

十三　左様なればお杯ばかり頂戴致しまするでござります
る。(ト杯を受ける、と門弟は無理に酌をする、十三郎一
ト呑んで、與九兵衛様、憚りながら。
與九　これさ〳〵どうしたものだ、あまり見事だ、も一つ
お押へだ、改めて〳〵。
十三　それでは實に困ります。
皆々　我々どもが酌では、呑めぬと申すのか。
十三　左様ではござりませぬ。
門一　まあ〳〵いゝわ、も一つ受けろ、呑めずば助ける者
もあるわ、さあ〳〵お酌だ〳〵。
ト又無理に酌をする、十三郎迷惑なる思入。
門二　これ〳〵十三、ちと酒の肴に娘子供にほれられた話
をしやれ。
十三　どういたしまして、そのやうなことは一向存じませ
ぬ。
門三　嘘言を申せ、たしかな所を見屆けておいたわ。
門四　だいぶお酌人なぞに情人があるさうだ。
門一　さあ話を聞いてあやかりたい、どうだ〳〵。
十三　御冗談ばつかりおつしやりまする、まことに食べら
れませぬ口で、御酒を頂戴いたしまして、胸がどき〳〵
いたしまする。與九兵衛様どうぞ私は、お許しなされて
下さりませ。
與九　まあよいではないか、そんならどうでもお暇いたす
か。
十三　旦那様、皆様、失禮ではござりまするが、お先へお
暇頂戴いたしまする。與九兵衛様よろしく御禮をお願
ひ申します。(ト立上るを與九兵衛止めて、)
與九　あゝこれ十三殿、もう日が暮れるに物騒だ、提灯を
持つて行かつしやい。(ト手をたゝき、)女中衆々々、提灯
を一つ下さい。
十三　いえ〳〵それには及びませぬ、月夜でござりますか
ら有難う存じまする。(ト又行きかける。)
與九　これさ、どうしたものだ、無提灯で歩くものではな
い、そして歸り道は淋しい道だ、是非提灯は持つて行く
がよい。
ト此内女中松金屋と印したる小田原提灯を持來り、
女中　へい、お提灯を。(ト與九兵衛に渡し奥へはひる。)
與九　おい〳〵。さあ〳〵、これを持つて行かつしやい。
十三　折角の御親切、お借り申して參りまする、左様なれ
ば御免なされて下さりませ。(ト門口へ出て、)あゝ今のお

酒で寒くなつた。(ト花道へはびろ。)

門一　これ與九兵衛、何で嫌がる提灯を、無理に持たせてやつたのだ。

門二　貴樣もよつぽど粹興者だ。

門三　うつちやつておけばよいに。

與九　そこは研屋の與九兵衛、無駄に持たせてやりはいたしませぬ。

四人　そんなら、何ぞ役にたつのか。

與九　ちつと趣向がござりまするて。

四人　して、その趣向は。

與九　趣向といふは、もし、(ト軍藏始め皆々に囁く。)

四人　すりや、提灯を目印しに、非人どもを語らつて、

與九　細工はりう〳〵仕上げの出來を御覽じませ。

軍藏　はて、惡い事には拔目のない奴だわえ。何にいたせ明日鎌倉表へ差上ぐれば、寶物には花とやら、この短刀へ磨きをかけてくりやれ。(ト短刀を與九兵衛に渡す。)

與九　畏りましてござりまする。この短刀を研ぎあげて、鎌倉御所へ差上ぐれば、

軍藏　身共は立身、遺恨あるあの安森は生涯埋れ木、

門一　われ〳〵とても先生に、

門二　附き從へばとも〳〵に、

門三　榮耀榮華のし飽きをして、

門四　一生暮す活計戲樂、

與九　この鬮を外さず大締に、一つ此處で締めませうか。

軍藏　何でも物は祝ひからだわ。

ト皆々立上り、よい〳〵〳〵と手を打つ、奧にて、

大勢　はあい。(ト大きくいふ。)

軍藏　へヽ、おきやあがれ。

ト賑やかな流行唄になり、軍藏與九兵衛に囁く、四人は四邊を窺ひ、この道具廻る。

(笹目ヶ谷柳原の場)――本舞臺一面に屋根をおろし、緣をあげし床見世、下の方片附けし出茶屋、大樹の柳澤山にあり、總て笹目ケ谷柳原の體。こゝに以前の太郎右衛門におぼ、おてふ、おけぜ等三人の夜鷹喰つてかゝつてなり、妓夫けんのみの權次これを留めてゐる。

三人　いえ〳〵、了簡ならねえ〳〵、坊主にしちやあ了簡ならねえ。

太郎　これ〳〵何にしろ頭を放してくれ、痛え〳〵。

權次　（中へ割つて入り、）これさ／＼、お前方もどうしたものだ。いつも馴染の顏の知れたお客ぢやねえか、何にしろどういふ譯だか聞かせなせえな、人が見ても見つともねえわな。

てふ　おい／＼權次さん聞いてくんねえ、この野郎はおいら達が久しい馴染の客人だが、

いぼ　今夜私等を出しぬいて、おとせさんの所へ行つた故、こんな性悪は見せしめの爲めだ、

はぜ　くり／＼坊主にした上で、瘤の一つもこせえにやあ腹が癒ねえよ。

權次　そりやあお前方が尤もだ。旦那お前があんまり性悪をするからだ、この妓達を出しぬいておとせさんを買はうとは、張と意氣地は吉原でも柳原でも替りはねえわな。

てふ　もう權次さんうつちやつておいておくれ、存分言はにやあ腹が癒ぬ、もし土佛の太郎さんどぶ太郎どん、今權次さんのいふ通り、全盛な花魁でも私がやうな夜鷹でも、勤めといふ字に二つはない、あのおとせさんに見替へられ、そりやもうおとせさんは年は若し、飯田町ぢやあないけれど中高の器量好し、私はこんなおたふくだが、見返られては顏が立たない。

いぼ　何を言つても分らないこんな人に恥やかうと、口數をきくのは無駄だ、何にも言はずにおはせさん、坊主に早くしようぢやないか。

はぜ　坊主にするにも剃刀がないから、一摑みづゝ引つこぬかうぢやないか、まづ小鬢から拔き始めよう。

兩人　それがいゝ／＼。

ト三人太郎右衞門にかぶりつき、頭の毛を拔かうとする、太郎右衞門逃廻りて、

太郎　あゝこれ／＼待つてくれ／＼、たんともねえこの毛をば、引ツこぬかれてたまるものか、許してくれ／＼。

てふ　いや／＼許さぬ／＼、一摑みづゝ毛を拔いて、

三人　坊主にしろ／＼。

太郎　こいつはたまらぬ／＼、逃げるが勝だ。

ト四人追かけ廻る。此の前方に折助出來りてともに追廻しながら、權次と共に皆々上手へ駈けてはひると花道より紅屋の悴與吉、町人の拵にて出來り、後より十三郎提灯を持ちて出來り、花道にて、

十三　それへおいでなされまするは、紅屋の若旦那與吉様ではござりませぬか。

與吉（すかし見て、）さういふそなたは、木屋の手代十三殿か。

十三 へい、左樣でござりまする。してまあ、あなたは今時分、どちらへおいでなされまする。まあ何にしろ、そこまで御一緒にまゐりませう。おあぶなうござります。

ト十三郎先に立ちて本舞臺へ來る。

與吉 別に案じることでもないが、今日親父樣が、荏柄の天神樣が惠方にあたるとおつしやつて、おまゐりにおいでなされた內、お屋敷から急な御用が出て、今までお待ち申しても、あんまりお歸りが遲い故、お迎ひがてらお話しも申したし、それでこつちへ來たのぢやわいの。

十三 左樣でござりますか、まあこの暗いのにお手代衆でも、お連れなされればよいのに、一人夜道はあぶなうござります。

與吉 このやうに遲うなる積りではなかつたが、つい一二軒寄り道があつた故、思はず遲うなりましたわいの。

十三 お父さまのお迎ひなれば、なるたけ道をお急ぎなされませ、この提灯を差上げますほどに、少しも早うお歸りなされませ。

與吉 それはまあ忝いが、私が提灯を借りましては、お前がやつぱり困るわいの。

十三 いえ／＼私は暗くてもだいじござりませぬ、それについ先の古着店まで參りますれば借ります所もござりまする。御遠慮なしにお持ちなされませ。

與吉 そんなら借りてもだいじござりませぬか。

十三 然し、道を氣を附けておいでなされませ。

ト蠟燭の芯を切り與吉に渡す、此內後の夜鷹小屋よりおとせ夜鷹の拵にて出で、十三郎たちつと見てゐる。

左樣なれば若旦那。

與吉 十三郎殿、いづれ其內。

十三 お早うおいでなされませ。

ト與吉は提灯を持ち上手へはひる。十三郎下手へ行かうとするを、おとせ出て十三郎の傍へ行き、恥かしさうに「もし」と袖を引く、この時月出で兩人顏を見合せ、思入あつて、

私を留めたのは、何ぞ用でもござりますのか。

とせ どうぞお遊びなされて下さりませ。

十三 なに、遊べとは。むゝ、そんならお前は。

ト扨は夜鷹かといふ思入、おとせは恥しき思入にて顏を隱す。

この頃人の噂をする、親孝行な辻君などのとかいふ娘は、もしやお前のことではござらぬか。

とせ　はい、私でござりますわいな。

十三（月影にてすかし見、思入あつて、）人の話に違ひなく、なるほど美しい娘御ぢやが、定めて樣子のあることであらうけれど、なんでこのやうなさもしい世渡りをさつしやるのだ。

とせ　お尋ねにあづかりまして、お話し申すも恥かしながら、このやうな賤しい業をいたすのも、いたづらではない申譯、たつた一人の父さんを養ふ爲めにあられもない、恥しいこの世渡り、お察しなされて下さりませ。

十三　親孝行とは聞きたれど、若いに似合はぬ賴もしいこと、私も親がある身なれば人事とは思ひませぬ。これはあまり少しぢやが、その親御の好きな物でも買うてやつて下され。（ト金を紙に包みやる。）

とせ　これはまあ有難うござりますれど、通りがゝりのあなた樣に、さもしいお話をお聞かせ申し、唯お貰ひ申しては、どうも心が濟みませぬ。

十三　それは志して上げる金、濟むも濟まぬも入らぬから、まあ取つておきなさい。

とせ　それでは、どうも私の心が、

ト十三郎おとせの顏を見入つてゐて、

十三　初めて逢つた一年どの、親孝行と聞いた故心の内の優しさに、

とせ　賤しい姿で恥しい、私やあなたに思はずも、

十三　えゝ、

とせ　御親切にあまへまして、ちとお願ひがござりますが、お聞きなされて下さりますか。

十三　いかなる願ひか知らねども、袖振り合ふも他生の緣、

とせ　お聞きなされて下さりますなら、こゝは往來、あの小屋で、

十三　その話をば聞きませうか。（ト此時月隱れる）

とせ　思はぬ雲で宵月を、

十三　隱すは幸ひ、

とせ　さあ、ござんせいなあ。

トおとせ先に十三郎附いて上の方へはひる。と上手より以前の與九兵衞尻端折り頰冠りにて出來り、後より非人四人ほど從ひ來り

非一　もし、わつちらへお賴みとは、

三人　どういふ仕事でございます。

與九　頼みといふは外でもない、今この所を年の頃は二十歳ばかりで色の白い、すつぺがしの青二才が松金屋と書いた、小田原提灯を付けて通るが、その提灯が目印だ、其奴にちと遺恨がある故、見附次第にどし打に打ちすゑて貰ひたいのだ。

非一　こう〳〵今旦那の話しの二才は、たつた今こゝを通つて提灯に、

非二　松金屋と書いてあつたぜ。

非三　てつきり、彼奴に違えねえ。

非四　遠くは行くめえ追つかけて。

與九　骨は盗まぬ、まんまと野郎をやツつければ、酒手はたんまりしめさせるわ。

非一　そりやあ大丈夫だ、氣遣ひをなさいますな。

非二　少しも早く追附いて。

與九　必ず、ぬかるな。

皆々　合點だ。

ト皆々上手へ逆散に走りはひる。引違へて、以前の太郎右衛門片鬢ぬかれて逃げて出來り、後より三人の夜鷹追つかけ出る、折助も附いてわや〳〵と出來る。

太郎　あゝこれ〳〵、片こ鬢ぬいたら了簡してくれ〳〵。

三人　いやだ〳〵兩方ともぬかねえ内は、了簡ならねえ了簡ならねえ。

太郎　それはあんまり情ない、片こ鬢で澤山だ、あゝ小鬢が痛いわ、こびんと思つて許してくれ、許してくれ。

三人　いゝや、いやだ〳〵。

皆々　えゝ、ひつこぬけ〳〵。

太郎　えゝ、情ない、許してくれ〳〵。

ト逃廻るを三人の夜鷹追つかけ廻る、此内太郎右衛門床見世の蔭へ逃けてはひる。と、この途端に十三郎上の方より逃げて出來り、うろ〳〵してゐる、折助十三郎を見附けて太郎右衛門と思ひ、

折助　やあ、今の野郎が出て來やあがつた。

皆々　小鬢をひつこぬけ〳〵。

ト十三郎を皆々追廻す、十三郎びつくりして上手へ逃げてはひると、床見世の蔭より、太郎右衛門逃げて出來り、しどろな裝になり花道へ逃げて行く、後より夜鷹三人出來り、花道へ追ひかけ皆々はひる。

權次　これさ〳〵いゝ加減にしておきねえ、彼奴ばかりにかゝつてゐちやあ、生業ができめえぢやあねえか、ほん

たうに困つたもんだぜ。

ト花道の方を見て獨語を言つてゐる、此内おとせ上の方よりうろ／＼出來りて、

とせ　もし／＼權次さん、今こゝに若いお人は見えなんだかえ。

權次　おらあ何だか氣が附かねえ、今の騷ぎでがつかりしたわな。

とせ　どこへ行きなさんしたやら、も一度逢うて何かの話を。

權次　話しどころか、あの肥大漢の太郎右衞門が性惡をしたので、坊主にすると亂騷ぎさ。

とせ　それにしても今のお方、今の騷ぎで逃げて行きなさんしたか。

權次　逃げたどころか一生懸命さ、よせばよいのにおてふやおいぼ、あのおはぜまでいゝ年をして追ひかけて行きやしたわな。

とせ　追ひかけようにも所も聞かず、後に殘つたこの財布（ト十三郎の取落したる財布を袖にて隱し、思入あつて）中はたしかによほどなお金。

權次　なに、金え。

とせ　（びつくりして、）いえさ、おかねさんはどうしたやら。

權次　あゝ婆あお兼かえ、今夜は寸白で腰が延せねえといふことだ。

とせ　嘸お困りでござんせう、どうか尋ねて。

權次　いゝ藥でもありやすかね。

とせ　え。（ト心附き、）わたしも寸白が持病故。

權次　あの、こんなほつそりした腰にかえ。（トおとせの背中をたゝく、おとせ金財布をばつたり落す。）おや、今の音は

ト權次手をかけようとする、おとせ財布の上へ膝を突く、道具替りのしらせ、

とせ　あい、溫石でござんすわいなあ。

ト兩人よろしく、時の鐘、浪の音にて、この道具廻る。

（笠目ケ谷新井橋の場）　本舞臺正面高き土手、所所に柳の立木、上手に手摺の附きたる橋を半分見せこれに續いて高札、開帳札、下手へ寄せて火の用心を附けし箱番屋、後は向う川岸の遠見。總て笠目ケ谷新井橋の體、こゝに與九兵衞と四人の非人立つて

ゐる、

與九　どつちから來ようとも、この橋詰で網を張れば道の違ふ氣遣ひはねえ、よく後先を頑張つてくれ。

四人　合點だ／＼。

非一　噂をすれば影とやら、向うへ見えるあの提灯、

非二　たしかに三才の、

與九　必ずぬかるな。

四人　合點だ。

ト皆々上下へ分れて忍ぶ。上手より以前の與吉松金屋の提灯を持ち出來る、此内非人窺ひゐてやにはに提灯を棒にて打落し、左右よりうつてかゝる、與吉びつくりして身を躱し思入あつて、

與吉　こりや理不盡な、何とするのだ。

非一　何もかもあるものか、汝に遺恨のある者に、

非二　頼まれた故網を張り、

非三　歸り道をつけてゐたのだ、

非四　もうからなつたら籠の鳥だわ。

與吉　遺恨を受ける覺えはない、おほかたそれは人違ひ、後で後悔さつしやるな。

非一　なに、ねえことがあるものか、

非三　四の五のと面倒だ。

四人　殺んでしまへ。

ト非人皆々與吉へ打つてかゝり暗の立廻り、此中へ與九兵衛窺ひ／＼出來り、與吉を目がけて打たうとするを非人は與吉と間違へ與九兵衛を打つ、をかしみの立廻りいろ／＼あつて、トヾ與九兵衛與吉の紙入をぬき取り、逸散に花道へ走りはひる。

與吉　うぬ、盜人め、紙入を。

ト追ひかけて行かうとするを四人の非人與吉を散々に打倒し、花道へ逃げてはひる。與吉體の痛むこなし、上手よりおしづお高祖頭巾を冠り、おちせ附添ひ、三太廣小路花屋と印したる借提灯を持ちて先に立ち出來り、與吉に行當りて、

しづ　これは御免なされませ、提灯を持たせて麁相千萬、お許しなされて下さりませ。（ト與吉を見てびつくりなし）や、そなたは弟の與吉ではないか。

與吉　さうおつしやるはお姉樣でござりましたか、私はとんだ災難に逢ひまして、このやうな目に遭ひましてござりまする。（ト着物の破れしを見せる。）

しづ　それはまあ／＼危いこと。（ト三太の持ちし提灯をと

り、與吉の體を見る。)
ちせ　おゝどこもかも泥まぶれ、そしてお怪我でもござりませぬか。
しづ　まあどうしたことでこの災難。
與吉　まあ聞いて下さりませ、今日お父様が天神様へ、お參りなされてお留守のうち、お屋敷からの急の御用、是非々々お目にかゝり、お話し申さにやならぬ事がござりますゆゑ、お迎ひがてら參る途中、お前様の所の十三郎殿に逢ひまして、この提灯を借受け、急いで參る所をば狼藉者が理不盡に、打つてかゝつて此の始末、何を申すも多勢に無勢、打ちたゝいたその上に一人の男が私の紙入を引拔いて、影もなく逃失せましてござりまする。
しづ　ほんにまあ油斷のならぬ、然しまあ怪我をせぬのがそなたの仕合せ、これも信心なす神佛様の御利益ぢや。
(ト與吉の塵を拂ひやり、)そしてその紙入の中には、何か大切なものでもはひつてはゐませぬか。
與吉　いえ〳〵、何も別に大事の品はござりませぬが、金子が少々はひつてをりますばかりでござります。
しづ　お金ばかりならまあ〳〵仕方がない、幸ひ私がこの紙入、中にお金もはひつてゐるほどに、これをそなたにやりませうわいな。
與吉　いえ〳〵大したお金でもござりませず、それではどうも濟みませぬ。
しづ　何のまあ濟むの濟まぬのと他人らしい、兄弟仲にいらぬ遠慮、殊にそのお金は今日父様に天神様でお目にかかりお貰ひ申したお金故、やつぱりお前の物も同じことぢやほどに、遠慮なしに持つて行たがよい。
與吉　そんなら、父様にお逢ひなされましたか。
しづ　お目にかゝつたわいの、それから觀音様へも御一緒に參詣して、道でお別れ申して歸り道ぢやわいの、そなたも亦そのやうな裝で、今の狼藉に遭ひでもすると惡いほどに、話しながら一緒に行きませうわいの。
與吉　左様なら、御一緒に、通り町までまゐりませう。
しづ　(與吉を介抱してやつて、)さあおちせや、この提灯を消さぬやう、氣を附けて持つて行きや。
ちせ　はい〳〵、お危なうござります。
しづ　さ、行きませう。
ト皆々花道へはひる。浪の音になり、上手より彌作頬冠り尻端折りにて出來り前後を窺ひ、身拵へなして刀の目釘をしめし、思入あつて下手番小屋の蔭へ忍ぶ。

上手より以前の軍藏先に四人の門弟折を提げ酒に醉つたるこなしにて出來るを、彌作つか／＼と出て立塞がる、四人の門弟これを避けると、避ける方へ彌作行くにより、門弟の一彌作をかき退けるを、取つてポンと投げる。門弟の二おのれとかゝるをも見事に投げる。門弟の三四左右よりかゝるをやはり見事に投げる。軍藏きつとなり刀を抜きかけるを彌作しやんと留める。

軍藏　やあ、物をも言はず理不盡に、狼藉なすは、

四人　何者なるぞ。

彌作　誰でもござりませぬ、安森源次兵衞が若黨彌作めでござりまする。

門一　扨は最前天神の社内に於て、

門二　恥辱をとつたを遺恨に思ひ、

門三　こゝへ來るのを待ちぶせして、

門四　先生始め我々へ汝や仕返しに、

皆々　うせたのだな。

彌作　いや仕返しではござりませぬ。御無心あつてわざわざと、これにておいでを待受けしてござりする。

軍藏　なに、この軍藏に無心とは。

彌作　外のことでもござりませぬ、源次兵衞が科となり、家斷絶に及んだる庚申丸の一腰をあなたがお求めなされたとのこと、その短刀がこの方の手に入らぬその時は安森の家はいつまでも埋れ木、武士の情と思召し、手前の方へ短刀をお讓りなされて下されませ。

軍藏　えゝ馬鹿謂すな下司奴め、たゞでも貰つた品だと思ふか、大まい百兩といふ金を出し、手蔓を求めて手に入つた庚申丸、身共が手より上へ差上げ、それを功に此方が立身出世をする積りだ、安森の家が立たうと立つまいと、乞食をしようとも、それが身共が知つたことかえ。

門一　汝が主人の安森は劍道の爭ひで、大先生にも遺恨があるわ。

門二　家滅亡はこつちの悦び、なんでおのれにやるものか。

門三　馬鹿も大概、前後を考へて物を言へ。

門四　むだなことだ。邪魔だてするな。

彌作　それは過ぎし貴殿の遺恨、今の難儀を思召して、その一腰をば。（ト軍藏の差したる刀に手をかける。）

軍藏　やい／＼／＼、人の魂へ手をかけて、汝やあわよくは取る氣だな、いやさ盗む了簡か、盗人なれば命がねえぞ、その素ッ首はとんでしまふぞよ。（ト軍藏彌作の肩へ

足なかけ蹴倒す。)

彌作　これほどまでに事を分け、只管頼む短刀を譲らぬのみか土足にかけ、最前にても和子様の、身の難題と手出もせず、ぢつと怺へた眉間の疵、血汐をあやした紋附は主人の形見肩入の、木綿布子の破れこぐち、さつきは無難で返せしが、もうかうなつたらこつちも武士、浪人なせど安森が家來の手練神影流、鈍らぬ腕の太刀先を、ならば手柄に受けて見よ。

軍藏　やあ、口の横に切れたまゝ、さまざまのよまひ言、面倒だ、殺らしてしまへ。

四人　合點だ。

ト四人彌作に切つてかゝり、土手を使つて烈しき立廻りあつて、トゞ四人を切倒す。軍藏窺ひゐてこの時前へ切つて出で彌作と立廻つて、きつとなり、

彌作　やあこの上は軍藏殿、庚申丸を異議なくこつちへ渡せばよし、異議に及ばゞ刀の錆、覺悟を極めて挨拶さつせえ。

軍藏　やあ、ちよこざいな覺悟呼ばゝり、汝等に渡してたまるものかえ。

彌作　何をこしやくな。

ト兩人土手、小橋に取つていろいろ立廻りあつて、彌作軍藏の刀を打落す、軍藏は有合ふ開帳札を引拔き土手へ上りよろしく立廻りあつて、トゞ軍藏の肩先へあびせる。これにて軍藏たぢたぢとなり、手負ひの立廻りにて立廻りながら、よろよろとして土手より轉げ落ち下より刀をさし付ける、彌作は土手の上にてざばなするを木の頭、浪の音にてよろしく、

ひやうし幕

二幕目

兩國橋西川岸の場
大川端庚申塚の場

(役名　巾着切和尚吉三、浪人お坊吉三、旅役者お孃吉三、土左衛門爺傳吉、研師與九兵衛、金貸鷺ノ首太郎右衛門、劍術者甘縄丹平、修驗者無動院、百姓豐作。傳吉娘おとせ等。)

(兩國西川岸の場)―― 本舞臺三間常足砂地の蹴込、上手柳の立木下手は材木、向う一の橋辨天大川の遠

見、總て兩國元柳橋川岸の體。爰に侍甘縄丹平武張つた拵、修驗者無動院緋の衣頭巾篠懸達付戒刀を差し最多角の珠數を持ち詫り居る、百姓豐作手拭を冠り、脚絆草鞋の拵にて留めて居る、傍に金貸太郎右衛門仕出し共に見物して居る。此見得波の音舟の騷ぎ唄にて幕明く、

丹平　やあ留めるな〱、了簡ならぬぞ〱。

無動　どうぞ了簡して下され〱。

丹平　いや〱ならぬ〱。

豐作　もし、お侍樣、あの通り詫つて居ます。了簡のうしてやらつしやれ。

丹平　やあわいらが知つた事ではない、口出しせずとすつこんでをれ。

豐作　あゝ氣の毒なことだな。

太郎　もし〱、こりやあいつたい何うしたのでござります。

豐作　もし皆樣聞かつしやりませ、此のお侍樣へあの法印殿が突當り、詫の仕樣が惡いとて切つてしまふと言はつしやるのだ。

太郎　それは險難な事だな。

ト太郎右衛門悧りなす、修驗者思入あつて太郎右衛門に縋り、

無動　もし見掛けてこなたをお頼み申すが、どうか了簡さつしやる樣共々詫をして下され。これ拜みます〱。

豐作　こなたも爰で掛り合ひ、詫をしてやつて下され〱。

太郎　おゝ合點だ〱。いや申しお侍樣、あの樣に頼みます故、あなたへお詫を致しますが、どうか御了簡なされて遣つて下されませ。

豐作　お願ひでござります〱。

丹平　やあ又しても口出し致すか。これ身共を誰だと思ふ、伊賀袴に野太刀を差し、吸筒の酒にぶら〱とよさこいを唄ふ侍とは譯が違ふぞ。凡十五の春よりして日本六十餘州をば、普く劍道修業なし當時一刀流の達人と云はるる、此大先生に突當り、ろく〱詫も致さぬ法印、無ぞりの太刀が目にはひらぬか、久しく胴試しを致さぬゆゑ眞二つに致してくれる。

太郎　其處をどうぞ御了簡なされて。

丹平　いやならぬ〱、達てわいら、詫事致すと、重ね胴にぶつぱなすぞ。

豐作　いえ眞平御免下さりませ

丹平　さあ、法印は覺悟致してそれへ直れ。
　ト是にて修驗者思入あつて、
無動　すりや、どうあつても斬らつしやるとか。
丹平　おゝ車斬に致してくれる。
無動　愚僧は事を好まぬ故、一旦詫は致せども、聞入なくば是非に及ばぬ、修驗道の行力にて、こなたの相手になりませう。
丹平　なに、身共が相手になると申すか。
無動　いかにも相手になりませう。これ慈姑天窓で錫杖を振り、舟玉十二社大權現と、そゝり半分切見世を流して歩く法印と一つに思ふと當が違ふぞ、こなたも日本六十四州劍道修業なしたならば、我も日本六十餘州あらゆる高山に分登り、難行苦行なしたる先達、今不動明王の金縛りの法を行ふから、拔かれるならば拔いて見よ、おのれが五體は動けぬぞ。
丹平　むゝはゝゝゝゝ、傍はら痛き其一言、如何なる邪法を行ふとも妖魔を拂ふは劍の德、さあ動けぬ様に致して見やれ。
無動　云ふにや及ぶ、支度さつせえ。
丹平　心得た。
　ト丹平は下緒を取つて襷に掛け袴の股立を取る、修驗者も衣の露をとり身構へする、此內太郎右衛門百姓思入あつて、
太郎　はあゝ、そんなら法印殿も利かぬ氣で豫て噂に聞いて居る不動の金縛りとやらをさつしやるとか。
與作　是はよい所へ來合せて、珍らしい事を見ますわえ。
無動　何れもな、それにござつて、愚僧が行力見物さつしやれ。
皆々　これは見物事だわえ。
丹平　さあ、今一刀の下に命をとるが、金縛りとやらを行はぬか。
無動　おゝ今即座に汝が五體、立すくめに致してくれるぞ。
丹平　こしやくな事を。
　ト丹平刀へ反りを打ち拔かうと身構へる、無動院印を結ぶ、
無動　東方には降三世、南方には軍吒利夜叉、西方には大威德、北方には金剛夜叉、中央大聖不動明王、なうまくさんまんだ、ばさらだせんだせんだまかろしやなそはたやうん、たらたかんまん。
　ト無動院いろ／＼に印を結び突付ける、此內丹平拔掛

けては抜けぬ思入、皆々びつくりして見とれ居る。丹平無理やりに抜に掛るを、無動院なうまくさんまんだと印を結び差付る、丹平の刀しやんと納り抜けぬ思入、太郎右衛門感心なし、

太郎　成程不思議なものだわえ。

無動　何と愚僧の行力を見さつしたか。

ト無動附印を結んだ手を開く。

丹平　(刀を抜き、)うぬ法印め、覺悟なせ。

無動　こいつはたまらぬ。

ト逃散に花道へ逃げだす、丹平刀を抜いた儘追掛けて花道へはひる。此内百姓は太郎右衛門の紙入皆々の煙草入など引さらひ、上手へ逃げてはひる、

太郎　成程金縛りは不思議な物だ、印を結んで居る内は、ちよつとも抜けなんだが、其手がゆるむと直に抜けた。(ト懐を見て、)おや抜けたと云へば、紙入を抜かれたか。

ト太郎右衛門立騒ぐ、仕出し皆々も懐腰の廻りを尋ね、

やあ、こりや大變だ〳〵。

○　おゝ、ほんにわしも紙入をぬかれました。

△　お前も抜かれたか、私も煙草入を切られました。

太郎　たしかに今の百姓が、巾着切に違ひない。

□　是を思へば法印やあの侍も相ずりか。

△　何にしろ跡追かけ、見え隱れに付けて見よう。

○　それがいゝ〳〵、さあ何れもござれ〳〵(ト皆々と共に)どろばう〳〵。

トばた〳〵通り神樂にて仕出し花道へ追かけてはひる、跡時の鐘、太郎右衛門腕組をなし、

太郎　扨々つまらぬ目に逢つたわえ。昨日荏柄の天神で、てんびけに取つた利息禮金、直に子に子を產せようと紙入へ入れて置いたを、ちよろりせしめられてしまつた。考へて見ると夢の樣だが、夢なら早く覺めてくれぬか。

ト首をかたげ腕組をなし考へ居る、花道より研師の與九兵衛一腰を差し出て來り、

與九　昨夜十三が歸りを待ちうけ、百兩此方へせしめようと、思ひの外に人違ひで、引こ抜いた紙入には僅金が四五兩計り、それはみんな乞食に取られ、打たれたゞけが儲となり、つまらぬ事と思つた所、今日約束故海老名樣へ、庚申丸に研をかけ持つて行つたら飛んだ事、昨夜切られて、死なつしやつた。其所で預りの此短刀は、主がなければ、己が物、早く百兩に賣りたいものだが、只氣

掛りは口入ゆゑ、鷺ノ首で百兩を己に返せといはにやあいゝが(ト本舞臺へ來り、太郎右衛門に行當り、)これは麁相を致しました、眞平御免下さりませ。

太郎　や、さう云ふこなたは研與九ぢやないか。

與九　おゝ鷺ノ首の太郎右衛門樣か、何を立つて居さつしやるのだ。

太郎　聞いてくりやれ、飛んだ目に逢つた、昨日取つた利息と禮金を紙入へ入れて置いて、巾着切に引つこぬかれた、早速紙入に困るわえ。

與九　お困りならば上げませうか、昨夜紙入を拾ひました。

(ト前幕の紙入をやる。)

太郎　それは何より忝いが、中に金ははひつて居ぬかな。

與九　蟲のいゝ事を言はつしやる。

太郎　何ぞ金儲の口はないかな。

與九　儲の口はないが、損の口がある。

太郎　それは聞きたくないな。

與九　聞きたくなくても云はねばならぬ。昨日私が口入で、百兩貸した軍藏樣が、昨夜切られて死なつしやりました。

太郎　軍藏樣が、むゝゝゝ。(ト太郎右衛門びつくりなし、目をまはし倒れる。)

與九　大方こんな事だらうと思つた。(ト抱起し、)これ太郎右衛門樣、氣を慥に持たつしやりませ、何だ口から泡を吹いて、こりや癲癇ぢやあないか。(ト邊りにある馬の草鞋を取つて、)幸ひ爰に馬の草鞋、是を頭へ乘せて遣らう。(ト草鞋をのせ紐を結ぶ。)いや、こりや癲癇ではないと見える。何ぞ氣付を呑まして遣りたいが、あひにく何も藥はなし。(ト川の中を見て、)おゝいゝ所へ尿器が流れて來た、是で水を呑ましてやらう。

ト尿器で水を汲み、太郎右衛門の口へつぎ込む、是にてうんと心付く、

太郎　これ與九兵衛殿、軍藏樣にどうさつしやつた。

與九　人に斬られて死なつしやりました。

太郎　それでは貸した百兩は、

與九　冥土へ行かねばとれませぬ

太郎　これ迄爪に火を燈しやう〳〵溜めたあの百兩、冥土へ行かねば取れぬなら、死んで取りに行かねばならぬ、

ト與九兵衛の差して居る脇差へ手を掛ける。

與九　是はしたり太郎右衛門樣、死んで冥土へ行つた日には、首尾よく金を請取つても、此娑婆へは歸られませぬ

ぞ。

太郎　はあゝ生返つては來られぬか、それでは死ぬのはまあ止めだ。やゝ此脇差は軍藏樣が、昨日私から百兩借りて、買はしつた庚申丸、こりやよい物が目に掛つた、是を代りに取つて置かう。

ト引たくる、與九兵衛共手を押へ、

與九　いえ／＼、是は軍藏樣から私が預つた庚申丸、めつたに是は渡されませぬ。

太郎　渡されぬとて百兩の代り、之を取らずにゐられるものか。

與九　それはお前、無理と言ふものだ。

太郎　無理ならこなたが口入故、百兩まどうて己に返すか。

與九　さあそれは。

太郎　此の脇差を、預けて置くか。

與九　さあ。

太郎　さあ。

兩人　さあ／＼／＼。

太郎　何と渡さずばなるまいが。

與九　えゝ仕方がない。（ト脇差を渡す。）

太郎　（腰へ差し、）あゝせり合うたので、喉がひツつくやうだ。

與九　喉がひツつくなら是を呑みなせえ

ト腹を立て、尿器を突出す。

太郎　や、こりや尿器ではないか。

與九　さあそれは。

太郎　（ぞつとして、）最前からの樣子といひ、爰に尿器があるからは。（ト天窓の草鞋を取つて、）扨はいよ／＼つままれたか。（ト狐に化かされた思入にて眉毛を濡し、）して見ると此脇差も、棒の折かも知れぬわえ。

與九　どうしたと。

の郎　うぬ與九兵衛に化けやあがつて、どうするか見やあがれ。

ト件の庚申丸を鞘の儘振上げ、與九兵衛に打つて掛る。

與九　是は氣でも違つたのか、何でわしを打ちなさるのだ。

太郎　打たねえでどうするものだ。大方さつきの法印も、一つ穴の狐だらう。

與九　なに、法印とは何のことだ。

太郎　何のことがあるものか、早く尻尾を出しやあがれ。

ト太郎右衛門與九兵衛を追廻し、トゞ與九兵衛上手へ

逃げてはひる。太郎右衛門跡を追つかけはひる、花道より木屋の手代十三郎、羽織着流し頰冠りをなして、しなく\と出來り、

十三 今更言つて返らねど、昨夜思はぬ柳原で大事の金を持ちながら、袖を引かれてうかく\と、思案の外の夜鷹小屋、身の上話しを聞いて居る内、喧嘩々々といふ聲にびつくりなして逃出るはずみ、大まい百兩といふ金を、財布の儘に落してしまひ尋ねやうにも騷ぎの中、程經て其處へ來て見れば歸つた跡にて誰も居ず、もしや昨夜の夜鷹殿が拾ひはせぬかと暮れるを待ち、尋ねて行たれど暗黑故、誰が誰やら顏さへ知れず、察する所あの金を、拾つて今宵は出ぬ事か、こりやどうしたらよからうなあ。(ト舞臺へ來り、思入あつて、)どう考へ直しても死ぬより外の思案はない。家へ戻つて兩親に此事を話したとて、是が一兩や二兩なら、どうか都合も出來やうが、百兩といふ大金が所詮出來やう當はなし、生中御苦勞掛けやうより、いつそ此身を捨てたなら、お情深い旦那樣故、親に金を償へと仰しやつては下さるまい。其御難儀を掛けぬが言譯。とは云へ肩へ棒を當てしがない暮しの其中で十兩取の賴母子講、月々掛けるも最う何年、そちの年の明けた時、元手の足しと借下りに行く度々に其話し、着物の丈の伸びるのと年季のつまるを樂しみに、待ちに待つてる兩親に死顏見するが情ない、嘸やお歎きなさらうが、是も前世の約束と諦らめて下さりませ。(ト手を合せ拜み、)人目に掛らぬ其内に、少しも早く此川へ。(ト石を拾ひ袂へ入れ、)南無阿彌陀佛。

ト後の川へ飛込まうとする、此以前上手より土左衛門爺い傳吉、もんぱ頭巾どてら半纏紺の股引尻端折、草履に杖、信者講と印せし長提灯を持ち出かゝりゐて、此時つかく\と來て十三郎をとらへ、

傳吉 これ若い衆、待たつしやい。

十三 いえく\、死なねばならぬ譯ある者、こゝ放して下さりませ。

傳吉 知らねえ事なら仕方もないが、目に掛つたら留めにやあならねえ。

十三 其處をどうぞ見脱して。

傳吉 いゝや見脱す事はならねえ。待てと言つたら待たつしやい。(ト傳吉十三郎を引留め、眞中へ連れて來て中腰になり、)此結構な世を捨てゝ、死なうと云ふはよくく\な、切ない譯のある事だらうが、其處が若氣の無分別、

死なずに思案をしたがいゝ、どういふ譯か膝とも談合、私に話して聞かせなせえ、假令及ばぬ事なりとも、其處は白髪の年の功、何處がどこ迄引受けてお前の難儀を救つて上げよう、死なねばならぬ一通り、心を鎭めてこれ若いの、私に話して聞かせなせえな。

十三　見ず知らずの私を、御親切に仰しやつて下さりまするあなた故、隱さずお話し申しまする。私事は本町の木屋文藏の召仕十三郎と申すもの、昨日さる御屋敷へ百兩といふ商賣なし、金を請け取り歸る道柳原で袖引かれ、思はず遊んだ夜鷹小屋、喧嘩と聞いて逃げる折其百兩を取落し、もしや其夜の夜鷹殿が拾ひはせぬかと最前も、尋ねて行たれど廻り逢はず、それ故主人へ言譯に身を投げ死する此身の覺悟、折角お留め下すつたれど、大まい百兩といふ金がなければ生きて居られぬ仕儀、どうぞ見脱して下さりませ。いづくのお方かしらねども袖振合ふも緣とやら、不便なと思召さば死んだ後にて一遍の、御回向お願ひ申しまする。

ト十三郎泣きながらいふ。傳吉此内扨はといふ思入あつて、

傳吉　そんなら昨夜柳原で、（といひ掛け、傳吉四邊を窺ひ）金を落したのは、お前か。

十三　はい、左樣でござりまする。

傳吉　それぢやあ死ぬにやあ及ばねえ。

十三　えゝ死ぬに及ばぬとは。

傳吉　お前が落した百兩は、おれが娘が拾つて來た。

十三　して、おまへの娘御は。

傳吉　昨夜柳原で買ひなすつた、一年といふ夜鷹さ。

十三　え。

傳吉　大方お前が尋ねて來ようと、今夜も場所へ其金を、持つて行つたが間違つたか、何にしろ百兩に、恙がねえから案じなさんな。

十三　それは有難うござりまする。

傳吉　あゝ信心は仕やうものだ、題目講へ行つたばかりお前の命を助けたが、家に居たならやみ／＼と、老先長い若い者を殺してしまふ所であつた。これも偏に祖師の御利益、南無妙法蓮華經々々。

ト肌の珠數を出し拜む。

十三　落した金に恙なく、危い命を此場にてお助けありしあなたこそ、十三が爲の神佛、いづれ何處のお方にて、お名は何と仰しやりますか、お聞かせなされて下さりま

せ。

傳吉　お前の方から聞かねえでも、云はねえけりやならねえ名をつい年寄の後や先、私やあ本所の割下水で家業は賤しい夜鷹宿、以前は鬼とも云はれたが一年増に角も折れ、今ぢやあ佛の後生願ひ、土左衛門を見る度に引上げちやあ葬るので、渾名のやうに私が事を、土左衛門爺い傳吉といひます、見掛に寄らねえ信心者さ

十三　そんなら、土左衛門傳吉様とか。

傳吉　ちよつと聞くと惡黨のやうだが、惡い心は少しもねえから安心して家へ來なせえ、お前に廻り逢はねえけりやあ娘も歸つて來ようから、さうしたならば金を持つて、親許なり主人なり、己がお前を連れて行き、斯う／＼いふ譯であつたと、詫事をして進ぜませう。

十三　すりや、詫事迄して下さりますとか。

傳吉　佛作つて魂入れずだ、主人方へ歸る迄、世話をしにやあ心が濟まねえ。

十三　えゝそれ程迄に、有難うござります。

傳吉（十三郎を見て、）見りやあ見る程まだ若いが、お前幾つになんなさるえ。

十三　はい、十九になりまする。

傳吉　あゝ、それぢやあ娘と同い年だ。

十三　お娘御も戌でござりまするな。

傳吉　おゝ戌さ。あゝ川端に浮か／＼して、犬にでも吠えられねえ内、早く家へ行きやせう。

十三　はい、お供致しませう。

傳吉（十三郎をつく／＼と見て、）さつき一足遲く來て、己が渾名の土左衛門になつたら、嘸や親達が。

十三　え。

傳吉　いや己も惡い悴があるが、片輪な子程可愛いと、別れて居れど一日でも胸に忘れる事はねえ、必ず苦勞を掛けなさんな。

十三　はい。（ト思入。）

傳吉　さあ、更けねえ内に行きやせうか。

ト提灯を取上げる。

十三　あゝもし、それは私が。（ト提灯をとる。）

傳吉　そりやあ憚りだね。

十三（提灯を取り中を見て、）や、こりや蠟燭が。

傳吉　南無阿彌陀佛か。

十三　え。

傳吉　いや、念佛は謗法だつた。

ト十三郎先に提灯を持ち、傳吉十三郎上手へはひる。
これにて道具廻る。

(大川端庚申塚の場)――本舞臺四間中足の二重、石垣波の蹴込み、上の方に四尺程の庚申堂、賽錢箱、軒口に青面金剛と記せし額、此脇に括り猿を三つ付けし額、後ろ練塀斜に橋の見える片遠見、總て兩國橋北河岸の體。やはり波の音通り神樂にて道具廻る、と花道より辻君のおとせ、黑の氣附手拭を冠り、蓙を抱へ出て來り、

とせ　昨夜金を落せしお方は、夜目にも確と覺えある裝の樣子は奉公人衆、定めてお主の金と知り少しも早く戻したく、大方今宵柳原へ私を尋ねてござんせうと、拾うた金を持つていたれど、つひに尋ねてござんせぬは、もしやお主へ言譯無さにひよんな事でもなされはせぬか。たつた一度逢うたれど心に忘れぬいとしいお方、案じるせゐか胸騷ぎ、あゝ心ならぬ事ぢやなあ。

ト思入あつて揚幕の方を、もしや尋ねて來ぬかと見るこなし、花道よりお孃吉三島田鬘、振袖お七の拵へにて出て來り、

お孃　あもし、憚りながらお女中樣、お尋ね申したいことがござりますわいな。

とせ　はい、何でござります。

お孃　あの、龜井戸の方へはどう參りますか、お敎へなされて下さりませいな。

とせ　はい、龜井戸へお出なされますなら、是から右へ眞直に、行當つたら左りへ曲り、(ト言ひながらお孃吉三の裝を見て)とさあ委しうお敎へ申しても、お前樣には知れますまい、どうで私も歸り道割下水迄共々に、お連れ申して上げませう。

お孃　それは有難うござりますわいな。連れて參りし供にはぐれ、知らぬ道にたゞ一人怖うてなりませねば、お邪魔ではござりませうが、どうぞお連れなされて下さりませいな。

とせ　いえもう、私が家へ歸りますには、一つ道でござりますから、お安いことでござります。

お孃　左樣なれば、お女中樣

とせ　斯うお出でなされませいな。(トおとせ先にお孃吉三本舞臺へ來り)もしお孃樣、お前樣はどちらでござります。

お嬢　あの私や本郷二丁目の、八百屋の娘でお七と申しますわいな。
とせ　八百屋のお七樣とおつしやりますか。
お嬢　してお前樣のお家は。
とせ　はい私の家は割下水で、父さんの名は傳吉、私しやおとせと申します。
お嬢　して御生業は。
とせ　さあ其生業は。(ト困る思入)
お嬢　何をお商賣なされますえ
とせ　はい、お恥かしいが莚の上にて。
お嬢　あの十九文店でござりますか。
とせ　いえ、二十四文でござります。
お嬢　そんならもしや。
とせ　お察しなされませいな
ト　おとせお嬢の背中を叩く。此折懐の財布を落す。
と　お嬢手早く取上げぎつくり思入あつて、
お嬢　もし、何やら落ちましたぞえ。(ト出す。)
とせ　おゝ、こりや大事のお金。
お嬢　えゝ、お金でござりますか。
とせ　あい、しかも大まい小判で百兩。

お嬢　大層お商ひがござりましたな。
とせ　御常談ばかり、ほゝゝゝ。
お嬢　あれえ。(ト御山におとせに抱付く。)
とせ　あもし、どうなされました。
お嬢　今向うの家の棟を光り物が通りましたわいな。
とせ　そりや大方人魂でござりませう。
お嬢　あれえ。(ト又しがみ付く)
とせ　何の怖いことがござりませう、夜生業を致しますれば、人魂なぞは度々故、怖い事はござりませぬ。只世の中に怖いのは、(ト此時本釣鐘を打込む。)人が怖うござります。
お嬢　ほんにさうでござりますなあ(ト言ひながらお嬢吉三おとせの懐から、財布を引出す。)
とせ　(びつくりして、)や、こりや、此金を何となさいます。
お嬢　何ともせぬ、貰ふのさ。
とせ　えゝゝゝ、(ト驚き、)そんならお前は。
お嬢　どろばうさ。
とせ　え。
お嬢　ほんに人が怖いなう。(ト財布を引つたくる。)

とせ　それはかりは。
ト取りに掛るを振拂ふ。おとせたぢ／＼として思はず川へ落ちる。水の音波煙ぱつと立つ、
お孃　あゝ川へ落ちたか。（ト川を見込み）やれ可愛さうな事をした。（ト云ひながら財布より百兩包を出し）思ひがけねえ此の百兩。
トにつたり思入、此時後ろへ太郎右衛門窺ひ出で。
太郎　その百兩を。
ト取りに掛るを突廻し、金を財布へ入れ懐へ入れる。太郎右衛門又掛る。此時お孃吉三太郎右衛門の差してある庚申丸を鞘ごと引たくる。太郎右衛門それを寄るをすらりと抜き振廻す、此途端花道より駕籠舁垂を下せし四つ手駕籠を擔ぎ來り、是を見てびつくりなし、駕籠を捨て下手へ逃げてはひる。太郎右衛門は白刃に恐れて上手へ逃げてはひる。時の鐘、お孃吉三跡を見送りて。
お孃　はて、臆病な奴等だな。（ト駕籠の提灯で白刃を見て）むゝ、道の用心丁度幸ひ。（ト庚申丸をさし、空の朧月を見て）月も朧に白魚の篝も霞む春の空、つめたい風もほろ酔に心持好く浮か／＼と、浮れ烏の只一羽塒へ歸る川端で、棹の雫か濡手で粟、思ひがけなく手に入る百兩。
ト懐の財布を出しにつたり思入れ、此時上手にて、厄拂ひの聲して「お厄拂ひませう、厄落し厄落し」と呼ばはる。
ほんに今夜は節分か、西の海より川の中、落ちた夜鷹は厄落し、豆澤山に一文の錢と違つて金包み、こいつあ春から縁起がいゝわえ。
ト此折下手にある四つ手駕籠の垂をばらりと上げる。内にお坊吉三吉の字菱の紋付の着附、五十日鬘大小の出立にて、お孃吉三を窺ふ。お孃もお坊吉三を見てぎつくり思入、時の鐘、少し凄みの合方になり、お孃金を懐へ入れ、庚申丸を袖にて隠し上手へ行かうとする、お坊吉三思入あつて。
お坊　もし姐さん、ちよつと待つておくんなせえ。
お孃　はい、何ぞ御用でござりますか。
お坊　あゝ、用があるから呼んだのさ。
お孃　何の御用か存じませぬが、私も急な。
ト行きかけるを
お坊　用もあらうが手間はとらさぬ、待てといつたら待つてくんなせえ。

ト是にてお嬢ムヽと思入。お坊駕籠より雪踏を出し、刀を持ち出でお嬢を見ながら刀を差す、兩人顏を見合せ氣味合の思入にて中腰になり。

お嬢　待てとある故待ちましたが、して私への御用とは。

お坊　さあ用といふのは外でもねえ、浪人ながら二腰たばさむ武士が手を下げこなたへ無心、どうぞ貸して貰ひたい。

お嬢　女子をとらへお侍が、貸せとおつしやる其品は。

お坊　濡手で粟の百兩を。

お嬢　え。（ト思入。）

お坊　見掛けて頼む、貸して下せえ

お嬢　そんなら今の樣子をば。

お坊　駕籠にゆられてとろ〳〵と一ぱい機嫌の初夢に、金と聞いては見脱せねえ心は同じ盗人根性、去年の暮から間が惡く、五十と纒る仕事もなく、遊びの金にも困つて居たが、なるほど世間は難かしい、友禪入りの振袖で人柄作りのお嬢さんが、追落しとは氣が附かねえ、是から見ると己なざあ五分月代に着流しで、小長い刀の落し差し、ちよつと見るから往來の人も用心する拵へ、金にならねえも尤もだ。

お嬢　それぢやあお前の用といふのは、是を貸してくれろとか。（ト懷から手を出し財布を見せる。）

お坊　取らねえ昔と諦めて、それを己に貸してくりやれ。

お嬢　（せゝら笑ひ、）こりやあ大きな當違ひ、犬脅しとも知らねえで大小差して居なさる故、大方新身の購試し命の無心と思ひの外、お安い御用の端た金、お貸し申して上げたいが、凄みなせりふでおどされては、お氣の毒だが貸しにくい、まあお斷り申しませう。

お坊　貸されぬ金なら借りめえが、形相應に下から出て許してくれとなぜ言はねえ。木咲の梅より愛敬のこぼるゝ娘の憎まれ口、犬脅しでも大小を伊達に差しちやあ歩かねえ、切取りなすは武士の習ひ、きり〳〵金を置いて行け。

お嬢　いゝや置いては行かれねえ、ほしい金なら此方より其方が下から出たがいゝ。素人衆には大まいの金も只取る世渡りに、未練に惜しみはしねえけれど、斯う云ひ掛つた上からは容吹く風に逆はぬ柳に受けちやあ居られねえ、切取なすが習ひなら、命と共に取んなせえ。

お坊　そりやあ取れと言はねえでも、命も一緒に取る氣だが、おぬしも定めて名のある盗人、無縁にするも不便な

故今日を立日に七七日、一本花に線香は殺した己が手向けて遣るが、其俗名を名乗つておけ。

お嬢　名乗れとあるなら名乗らうが、まあ己よりは其方から、七本塔婆へ書記す其俗名を名のるがいゝ。

お坊　こりやあ己が悪かつた、人の名を聞く其時はまあこつちから名乗るが禮儀、爰が渾名のお坊さん小ゆすり騙りぶつたくり押の利かねえ悪黨も、一年増しに功を積み、お坊吉三と肩書の武家お構ひのごろつきだ

お嬢　そんなら豫て話しに聞いた、お坊吉三はおぬしがことか。

お坊　して又そつちの名は何と。

お嬢　問はれて名乗るもをこがましいが、去年の春から坊主だの、やれ悪婆のと姿を替へ、憎まれ口もきいて見たが、利かぬ芥子と悪黨の凄みのないのは馬鹿げたもの、そこで今度は新しく、八百屋お七と名をかりて、振袖姿で稼ぐゆゑお嬢吉三と名に呼ばれ、世間の狭い喰詰者さ。

お坊　己が名前に似寄り故、疾から噂に聞いて居たお嬢吉三とあるからは、相手がよけりやあ猶更に、

お嬢　此百両を取られては、お嬢吉三が名折となり。

お坊　取られねえけりやあ負けとなり、お坊吉三が名の廃り、

お嬢　互ひに名を賣る身の上に、引くに引かれぬ此場の出會。

お坊　まだ彼岸にもならねえに、蛇が見込んだ青蛙。

お嬢　取る取らないは命づく。

お坊　腹が裂けても呑まにやあ置かねえ。

お嬢　そんなら是を爰へかけ。

ト　お嬢百両包を舞臺前眞中へ置く、

お坊　蟲拳ならぬ。

兩人　此場の勝負。

ト　兩人肌を脱ぎ一腰を抜き立廻る、よき程に花道より和尚吉三、紺の腹掛股引どてら半纏頬冠りにて出で來り、此體を見て思入あつてつか／＼と舞臺へ來り、

和尚　二人とも待つた／＼。

ト　此中へ割つて入り、双方を留める立廻り、トヾ和尚吉三着て居たる半纏を取つて、兩人の切結ぶ白刃へ掛け此上へのり、双方を留め、三人きつと見得。

何ういふ譯か知らねえが、留めにはひつた、待つて下さえ。（ト手拭をとる。）

お坊　やあ。見知らぬそちが入らぬ留だて。

お嬢　怪我せぬ内に、

兩人　退いた〳〵。

和尙　いゝや退かれぬ、二人の衆、初雷も早すぎる氷も解けぬ川端に、水にきらつく刀の稻妻、不氣味な中へ飛込むも、まだ近附にやあならねえが顏に覺えの名うての吉三、いかに血の氣が多いとて大神樂ぢやアあるめえし、初春早々劍の舞、どつちに怪我があつてもならねえ。今一對の二人は名におふ富士の大和屋に劣らぬ筑波の山崎屋、高い同士の眞中へ背い仲をして高島屋が見兼ねて留めにはひつたは、どうなる事とさつきからお女中樣がお案じ故、丸く納めに渾名さへ坊主上りの和尙吉三、幸ひ今夜は節分に爭ふ心の鬼は外、福は内輪の三人吉三、福茶の豆や梅干の遺恨の種を殘さずに小粒の山椒の此己に、厄拂めくせりふだが、さとりと預けてくんなせえ。

ト　きつといふ。兩人、扨はといふ思入あつて、

お坊　そんならこなたが名の高い、

お孃　吉祥院の所化上り、

お坊　和尙吉三で、

兩人　あつたるか。

和尙　（頭を抑へて、）さう言はれると面目もない、名高いどころかほんのぴい〳〵、根が吉祥院の味噌すりで辨長といつた小坊主さ、賽錢箱から段々と祠堂金迄盗み出し、たうとう寺をだりむくり鼠布子もお仕着の淺葱とかはり二三度は、もつさう飯も喰つて來たが、非道な惡事をしねえ故、お上のお慈悲で命が助かり、斯うして居るが何より樂しみ、盗の科で取らるゝなら仕方もねえが己が手に、命を捨てるは惡い了簡、仔細は後で聞かうから不承であらうが此白刄、己に預けて引いて下せえ。

お坊　いかにも和尙が詞を立て、向うが預ける心なら、此方はこなたに預ける氣。

お孃　そつちが預ける心なら、此方も共々預ける氣。

和尙　そんなら二人が得心して、

お坊　此場は此の儘、

お孃　こなたに預けて、

和尙　引いて呉れるか。

お坊　いざ、

お孃　いざ、

兩人　いざ〳〵〳〵。

ト和尙吉三半纏を取る、兩人刀を引いて左右へ別れる。和尙思入あつて、

和尙　して二人が命を掛け、此爭ひはどういふ譯。

お嬢　元は根も葉もないことで、おれが盗んだ其百兩、

お坊　貸せといふより言ひ掛り、つひに白刄の此爭ひ。

和尚　むゝそんなら二人が百兩を、貸す貸すめえと云ひ募り、大事の命を捨てる氣か、そいつあ飛だ由良之助だが、まだ了簡が若い／＼。爰は一番己が裁きを付けようから、厭でもあらうがうんと云つて話に乘つてくんなせえ。互ひに爭ふ百兩は二つに割つて五十兩、お嬢も半分お坊も半分、留にはひつた己にくんねえ、其の埋草に和尚が兩腕、五十兩ぢやあ高いものだが、拔いた刀を其儘に鞘へ納める己が挨拶。兩腕切つて百兩の、額を合せてくんなせえ。

ト和尚吉三腕まくりなして兩人へ腕を突附ける。兩人感心の思入あつて、

お坊　流石は名うての和尚吉三、兩腕捨てゝの此場の裁き。

お嬢　切られぬ義理も折角の志し故詞を立て、

お坊　こなたの腕を、

兩人　貰ひましたぞ。

和尚　おゝ遠慮に及ばぬ、切らつしやい

ト和尚吉三腕を突出す、お坊吉三お嬢吉三と顔見合せ、思入あつて一時に和尚の腕を引き、直に二人共我腕をひく、和尚是を見て、

和尚　我兩腕を引いた上、二人が腕を引いたのは、

お坊　物は當つて碎けろと、力にしてえこなたの魂。

お嬢　互ひに引いた此腕の、流るゝ血汐を汲交し、

お坊　兄弟分に、

お嬢　なりたい、

兩人　願ひ。

和尚　こいつあ面白くなつて來た。實は此方もさつきから、さう思つて居たけれども、自惚らしく言はれもせず默つて居たがそつちから、頼まれたのは何より嬉しい。

お坊　そんなら二人が望みをかなへ、

お嬢　兄貴になつてくんなさるか。

和尚　いやならねえでどうするものだ。聞きやあ隣座は水滸傳、顔の揃つた豪傑に、所詮及ばぬ事ながら、こつちも一番三國志、桃園ならぬ塀越の梅の下にて兄弟の、義を結ぶとは有難え。

お坊　幸ひ爰に供物の土器。

お嬢　是でかための血杯。

トお坊庚申堂より供物の土器を出し、三人是へ腕の血を絞り、

兩人　まづ兄貴から、
和尙　そんなら先へ。
　ト和尙呑んでお坊へさす、お坊呑んでお孃へさす、お孃呑んで和尙へ戻す。
和尙　是で目出度く、（ト和尙呑んだ土器を叩きつけ、微塵になし）碎けて土となる迄は、
お坊　變らぬ誓ひの、
お孃　兄弟三人、
和尙　思へば不思議な此出會、互ひに姿は變れども、心は變らぬ盜人根性。
お坊　譬にもいふ手の長い、今年は庚申年に、
お孃　庚申堂の土器で、義を結んだる上からは、
和尙　後の證據に三疋の、額に附けたる括り猿。
　ト和尙庚申堂に掛けてありしくゝり猿の額を取つて二人に一つ宛遣る。
お坊　三つに分けて一つ宛、
お孃　守りへ入れて別るゝとも、
和尙　末は三人繋がれて、
お坊　意馬心猿の馬の上、
お孃　浮世の人の口の端に、
お坊　斯ういふ者があつたりと、
和尙　死んだ後迄惡名は、
お孃　庚申の夜の話し草、
和尙　思へばはかない、
三人　身の上ぢやなあ。（ト三人宜しく思入あつて）
和尙　さあ長居は恐れ二人ともに、此百兩を二つに分け、
　ト以前の百兩包を取つて出す。
お坊　いや其百兩は二人が、捨つる命を救はれし、
お孃　禮といふではなけれども、爭ふ物は中よりと、
お坊　そりやあこなたが納めて下せえ。
和尙　いゝや是は受けられねえ、是非とも二人に半分宛、
　ト百兩包を捻切り、ちよつと目方を引いて兩方へ出す。是にてお坊お孃顏見合せ、思入あつて金を受取り、
お坊　そんなら一旦受けた上、
お孃　又改めておぬしへ、
兩人　返禮。（ト兩方より出す。）
和尙　（思入あつて）むゝ夜がつきつたにべん〳〵と、義理立するも面倒だ、いなやを云はず此金は、志し故貰つて置かう。（ト和尙金を取つて鼻紙へ包む。）
お坊　それで二人が、

兩人　心も濟む。
和尙　この返禮は又其內。
お坊　思ひ掛けねえ力が出來、
お孃　祝ひに是から。（ト三人立上る。此時以前の駕籠舁兩人窺ひ出て、）
駕舁　うぬ。盜人め。（ト和尙にかゝるを左右へ突きやる。お坊お孃引附けて、）
和尙　三人一座で。
ト兩人ムヽと頷き、一時に投退け、駕籠舁起上らうとするをお坊踏附け、お孃は腰掛け抑へる、和尙は半纏を引掛ける。三方一時に木の頭。
三人　義を結ばうか。
ト三人引張宜しく波の音舟の騷ぎ唄にて、　ひやうし幕

三幕目

新吉原丁字屋の場
割下水傳吉內の場

（役名――木屋文藏、和尙吉三、土左衞門爺傳吉、お坊吉三、釜屋武兵衞、八百屋久兵衞、丁字屋の一重、九重、吉野、傳吉娘おとせ、木屋の手代十三郎、丁子屋の初瀨路、飛鳥野、花の香、花琴、花鶴、花卷、其他。）

（新吉原丁子屋の場）――本舞臺一面の平舞臺、正面床の間。此脇違ひ棚黑塗の簞笥、下手夜具棚此下二枚襖、上下折廻し塗骨障子屋體、いつもの所障子の上り口、總て丁字屋二階吉野へ屋の體。爰に臺の物白鳥の德利あり、新造花卷胴拔裝、おなか茶屋女にて爭ひ居る、傍に新造兩人部屋着の裝にて立掛り居る、この見得流行唄にて幕明く。
なか　もし花卷さん、惡ふざけも大概になさいまし。
花卷　おや、何を私が惡ふざけをしたえ、さあそれを聞かう／＼。
花琴　何だか知らぬが見ともない、まあ靜にしなんしな。
花鶴　これおなかどん、何を花卷さんがしたのだえ。
なか　もし皆さん聞いておくんなさいまし、吉野さんのお客の吉三さんが、引過に一杯呑むから、いゝのを持つて來いとおつしやつた故、態々五十間の奧田へ、いゝのを取

りにやつて、今爰へ持つて來たばかりの所、此花卷さんが呑みなすつたのでござります。それも一杯か二杯なら見ない顏も致しますけれど、御覽なさいまし、一滴もござりませぬ。（ト德利を見せ）何と腹が立ちませうぢやござりませぬか。

花琴　そりやあ花卷さんが惡うざます。何故そんな下司ばつた事をしなんす。

花鶴　お前ばかりぢやあない、花魁の恥になりんすよ。

花卷　なに、私しやあそんなことゝは知らず、今腹が痛くツてなりませんから、何ぞ藥を貰ひんせうと吉野さんの所へ來たら、あんまり吉三さんとよく寐て居なんすから、私しやあ殘り物だと思つて藥の替りに此のお酒を、ちつとばかり呑みんしたのさ。

なか　殘り物といふのがありますものかね。たつた今持つて來たばかりでござります。

花卷　殘物でないといふが、此お酒は幾ら持つて來たのだえ。

なか　一升持つて參りましたのさ。

花卷　おや／＼、まあたつた湯呑で五六杯。あれで一升かえ、高いものだねえ。

なか　花卷さん大概になさいまし、腹さん／＼呑んでしまつて、人の家の酒が少ないの多いのと、そんな事を云はれては、私共の暖簾に拘りますから、遣手衆に斷りにやあならない。さあ私と一所にお出なさいまし。

ト花卷の手を取る。

花琴　これさおなかどん、腹も立たうが春早々、花卷さんを叱らしても、あんまり手柄にもなりんすまい。

花鶴　腹も立たうが了簡しなんし。

なか　いえ／＼、花卷さんには常不斷こんな目に逢ひますから、きつと斷りにやあなりませぬ。

花卷　さあ、斷るなら斷つて見ろ。

なか　斷らなくつてどうするもんか。

兩人　はてまあ、待ちなんしといふに。

トおなか花卷を引立てようとする、これを兩人にて留める、下手より吉野胴拔しごき裝にて出て、これを留め、

吉野　是はしたりお前方は、吉三さんが寐て居なさんすに、靜にしておくんなんしな。

花卷　もし、吉野さん、聞いておくんなまし。

吉野　聞かずともようざます。今後で聞いて居りんした。

なか　もし花魁、私の申すのが無理ぢやあござりますまい。
吉野　まあよいからお前は家へ行つて、御苦勞でももう一遍持つて來てくんなまし。
なか　はい、參るのは參りますけれど。
吉野　(紙に捻つた金を出し。)こりや少しだが、お年玉だよ。
なか　(取つて。)是は有難うござりますが、お氣の毒でござります。(ト頂いて帶の間へ挾む。)
花琴　吉野さん、今文里さんがおいでなんしたから、お知らせ申しいすよ。
吉野　おや文里さんがお出なんしたか、よく知らしておくんなんした。
花卷　おや〳〵文里さんが來なんしたえ、嬉しいねえ私も行からや。
吉野　それぢやあ花卷さんも、文里さんに、
兩人　岡惚ざますか。
花卷　いゝえ文里さんがおいでなんすと、むせうに奢りなさんすから、それがいゝのざます。
花琴　それぢやあ喰氣ざますか。
花卷　どうで色氣の方はむづかしいから、喰氣の方へ凝る積りさ。
なか　道理こそ今の一升も、ぺろりと呑んでしまひなさいました。
花卷　えゝ一升も氣が強い、五合あるか無しのくせに。
吉野　またそんなことを言ひなますか。
花鶴　早く文里さんの所へお出なんし。
なか　ほんに私も早く行つて、後のを取つて參じませう。
花卷　どれ行つて、うまい物を食べようや。
　ト花卷は下手、おなかは階子の口へはひる。
花琴　もし吉野さん、何故二階中で嬉しがる文里さんを、一重さんは厭がりなんすだらうね。
花鶴　ほんに私等迄、お氣の毒ざます。
花琴　それに引替へ、吉野さんと吉三さんの仲のよさ。
花鶴　大方今夜はしつぽりと、文里さんの所へもおいでなんすまい。
吉野　なに、今直に參りんすから、宜しく申しくおくんなまし。
花琴　あい、そんなら吉野さん。
花鶴　早くお出なんし。(と兩人は下手の階子屋體へはひ

る。)

吉野　此まあ吉三さんは、何時迄寐なんすのだらう。

ト言ひながら上手の障子を明ける。内に吉三中月代前帶にて煙草をのみ居る。

お坊　べら棒め、あしかぢやアあるめえし、寐てばかり居るものか。

吉野　おや、起きて居なましたか。(ト吉三の傍へ來る。)

お坊　手前の廓詞が、やうやく聞きよくなつた。

吉野　ほんに私しやあ南から、此地へ來た其當座は、ありんすに誠に困つた。

お坊　手前も己も四年越し、苦勞ばかりして居るが、いゝ客でも引掛けて、小遣ひでもくれねえか。

吉野　そりやあお前のいふのが無理だ、元より意氣地のない上に、お坊吉三と名の賣れた惡足があるものを、何でいゝ客が付くものか。

お坊　言はれて見るとそんなものか、そりやあさうと今聞いた、文里と云ふのは、己の妹の、一重の所へ來る客だの。

吉野　あい、誠に程のいゝ客ざますが、何故一重さんは嫌ひなんすか。

お坊　爲になる客だといふことだが、さういふ客なら取留めて置いて、己にちつと貸してくれりやあいゝに。

吉野　蟲のいゝ事を言ひなます。

ト流行唄になり、喜助若い者にて階子の口より留めながら出て來る、後より長次、熊藏、金太着流しそぼろなる浪人の拵にて出て來る。

喜助　もし、お待ちなさいと申しましたら、まあお待ちなさいまし。

長次　いゝや待たれねえ、吉三に逢ひせえすりやあいゝのだ。

兩人　手前にやあ用はねえ。

喜助　それでも今日は、お出なさいませぬものを。

長次　なに、居ねえことがあるものか。

熊藏　慥に居るのを、

金太　知つて來たのだ。

お坊　や、あの聲は。(トお坊吉三三人を見て逃げようとする。)

長次　おい吉三々々、逃げるにやあ及ばねえぜ。

お坊　なに、逃げるものか。

喜助　あゝしまつた事をした。

熊蔵　是程爰に居るものを、
金太　是でも今日は來ねえのかえ。（ト喜助を突倒す。）
喜助　いえ、眞平御免なさいまし。
長次　これお坊、ちつと手前に用があつて厭がられるを合點で、のたくり込んだ蛇山長次、
熊蔵　鷲の森の熊蔵が、てつきり爰と覘つて來たのだ。
金太　穴ッ這入りを捜すのは、外れッこのねえ狸穴の金太だ。
長次　うんざりする顔だな。（ト三人よき所住ふ。）
吉野　これ喜助どん、あれ程お前に言つておくのに。
喜助　それだからお斷り申しましたけれど。（ト喜助頭を掻く。）
お坊　あゝこれ何をぐづ〳〵言ふのだ。さあみんな此方へ來て、まあ一ぺい遣らッしな。
長次　どうで馳走になる積りだ。
金太　おいお杉さん、ぢやあねえ今ぢやあ吉野さん、もし花魁、昔馴染の金太だ、何とか言つてもいゝぢやあねえか。
熊蔵　こう一分の女に出世したつて、そんなに重ッくれるな。
長次　ほんに品川ぢやあ、一つ蟹の味噌を喰合つたもんだ。知らねえ顔をしなさんな。
熊蔵　あの時分にやあ莫連だつたが、豪氣に人柄になつたな。
ト吉野脇を向き煙草をのみ居る。吉三思入あつて、
お坊　ときに三人顔を揃へて、己に逢ひに來たは何ぞ用か。
長次　用がありやこそ、突當に來たのだ。
お坊　むゝ用といふのは外ぢやアあるめえ。（ト丼の紙入より金を出し、紙に包み、）さあ是で揚屋町へでも行つて寐やれ。（ト投つて遣る。）
長次　（取上げ見て、）なんだ、三人の中へたつた三分か。
熊蔵　三人で三分無くなす智慧を出しと、川柳にやアあるけれど、三分ばかりぢやあ酒にも足りねえ。
金太　只取る金でありながら、しみつたれな事をしねえで、器用に分けてくんなせえ。
お坊　何だ手前達は凄みを付けて、是で足らざあ足りねえから、幾らくれろと言はねえのだ。
長次　こりやあ此方が惡かつた、兄い堪忍してくんねえ、それぢやあお詞に從つて、三分ぢやあ足りねえから、十兩ばかり貸してくんねえ。

お坊　なに十兩貸してくれ、こけを相手にする樣に、御大層な事を言ふなえ。
長次　言はねえでどうするものだ。兩國橋の川岸端で、馬乘袴に朱鞘の大小、劍術遣ひに己を化かし、
熊藏　家をかぶつて法印町に、居候に居たとこから、山伏姿で喧嘩と見せ、
金太　留めにはひつた百姓の間拔な裝で氣をゆるさせ、見て居る奴の紙入や煙草入を己にすらした、狂言の作者は手前、
長次　何ぼ筋を立てゝ渡したとて、一人で淺つて隨徳寺は、あんまり蟲がよすぎるから三人揃つて分前を、
三人　貰ひに來たのだ。
ト是にて吉野の邊を兼ねる思入、喜助びつくりする。此時上手障子屋體を明け、文里羽織着流しにて喜助を招く、喜助そつと上手へ行く、文里樣子を聞き思入。
お坊　これ、貸せなら貸して遣りもせうが、そんな言ひ掛りをされちやあ。
三人　なに、言ひ掛りをするものかえ。
お坊　はて野暮に大きな聲をせずと、まあ靜にいつても分る事だ。
長次　いゝや、靜に言つちやあ二階中へ、
三人　盜人をしたのが分らねえ。
吉野　あゝもし、其樣な事を言はずとも、誰も惡い樣にはしなさんすまいから。（ト吉野氣をもみ留める。）
長次　えゝ、手前の知つたことぢやあねえ。
熊藏　さあ吉三、大きな聲をするのが厭なら、
金藏　器用に分前、
三人　出してしまへ。（ト三人尻をまくり、吉三へ詰寄る。）
お坊　どうしたと、さう手前達が友達のよしみもなく爰へ來て、大きな聲をするからは、此以後己と附合はねえ了簡で言ふのだらう。友達づくなら五兩や十兩、ありせえすりやあ貸してもやるが、愛敬こぼして來たからにやあもう三分の金も遣らねえから、荒事か荒磯か鯉は此方の持前だ、汝等の聲に怖れるものか、元はれつきとした扶持人、お乳母日傘でそやされた、お坊育ちのわんぱくが異名になつた此吉三、惡い事なら親讓り見よう三升に一年増し、其御贔屓を笠に着て、形より肝が大きくなり、怖いといふ事しらねえ己だ、斯う云出したら一朱もいやだ、爰に持つてる此金を中へ上濱に地獄へ魁、三人連れて行かうから、吐胸を据ゑて一緒に行きやれ。

三人　おゝ、行かねえでどうするものだ。ト三人立掛る。)
喜助　(出て三人を留め、)まあ/\、お待ちなされませ。
三人　えゝ、汝等が知つた事ぢやあねえ
喜助　いえ私ではござりませぬ。あのお客様がお留めなされまする。
三人　なに、あの客とは。
文里　へい、憚ながら私でござりまする。
ト文里前へ出る。
お坊　(見て、)これは/\何方でござりますか、御親切に有難うござりますが、お構ひなすつて下さりますな。
吉野　もし吉三さん、ぬしが今言うた、文里さんでありんす。
お坊　それぢやあ妹一重がお客か。
文里　はい時折二階へ遊びに來る、文里といふ小道具屋でござりますが、どうぞ是からお心安く。
長次　こう/\、其挨拶より此方の挨拶。
三人　どう埒を附けるのだ。
文里　いや、どうのこうのと商人故、斯ういふ事はたゞ附けませぬが見えの場所にて其様に大きな聲をなさるのは、深い様子もござりませうが、其處を何ともおつしやらず、一口上つて御機嫌よく、お歸りなされて下さりませ。仲人役に爰で御酒をと存じますが、又もや兎やかうない様に、定めてお馴染もござりませうから、それへどうぞお出なされ、一口上つて下さりませ。
長次　そりやあ通人と噂ある、こなたが留める事だから、
熊藏　了簡なして呑みもせうが
金太　酒ばかりもをかしくねえな。
ト此内文里紙入より金を出し、紙に包み喜助に渡す。
喜助　もし、文里様から御挨拶、失禮ながらお三人へ。
長次　(取つて、)こりやあ小判で十五兩。
熊藏　一人前が五兩宛か。
金太　然し是を出しては。
文里　はて、御遠慮なしに、どうぞそれで。
長次　いや流石は名高い、文里先生。
熊藏　恐れ入つた此扱ひ、
行太　通り者には別なものだ。
文里　左様におつしやりますと、面目次第もござりませぬ。
長次　左様ならお辭儀なしに、貰ひ立ちと致します。おい兄イ、腹も立つたらうが堪忍しねえ。

熊蔵　つい播磨屋で一ぺいやつた、御酒の加減で言つたのだ。
金太　花魁後でいゝ様に言つてくんねえよ。
長次　左様なら文里先生。
三人　お暇を申します。(ト三人辭儀なして立上る。)
お坊　御挨拶故默つて居るが、此儘あいらを歸すのは。(ト立掛る。)
文里　(止めて、)はて何事も私に免じて。それ喜助、お三人をお送り申せ。
喜助　畏りました。
長次　そんなら吉三、花魁、
三人　お喧しうござりました。
喜助　さあ、お出でなされませ。
ト流行唄にて三人に喜助附いて階子の口へはひる。跡端唄の合方になり、
お坊　兼て噂に聞いて居りましたが、初めてお目に掛り早早、飛んだ御厄介を掛けて、お氣の毒でござりまする。
文里　何さ萬更知らぬ人ぢやあなし、一重さんの兄御とあるからは、見ても居られぬ繋がる縁、必ず心配なさいますな。

吉野　ほんに私やどうなることかと、案じてゐたによい所へ、
お坊　文里さまのござつたので。
吉野　波風なしに此場の納り。
お坊　有難うござりまする。
文里　(思入あつて、)其お禮には及びませぬが、聞けば以前は御身分のあるお方といふ事だが、いかに若いと云ひながら、何故あんな衆に附合をなされます。朱に交はればと譬の通り、お前にわるい氣はなくともつい染み易いが人心、此後決してあんな衆と附合はなされますな。悪い噂のある時は其身の、としかつめらしく云ふ私も、女房子がありながら斯うして遊びに参りますから、立派な口は利けませぬが、然し己が稼業を精出し餘分があらば氣保養、遊ぶ爲の遊女屋だから誰に遠慮もない譯だが、それも又凝り過ぎると果は人の物笑ひ、いやさ、物笑ひにならぬ様程よく遊びにお出なさい、吉野さんも無理留めは、決してよしになさるがいゝ。
吉野　ほんに嬉しい主の御異見、
お坊　是からきつと愼みます。
文里　いや、私とした事がつまらねえ事を言つて、大きに

お邪魔を致しました。(ト立上る。)
お坊　まあ、いゝぢやあござりませぬか。
文里　又お目に掛りませう。
吉野　そんなら文里さん。
文里　お休みなさい。(ト流行唄になり、文里思入あつて上手へはひる。)
お坊　なるほど噂にやあ聞いて居たが、行渡りのいゝほんの江戸ッ兒、何故妹が嫌ふのか、己なれば大事にするのに。
吉野　ほんに文里さんには、誰さんでも。
お坊　それぢやあ手前も。
吉野　あい、私きやあ一倍大事にするよ。
お坊　あの文里を。
吉野　いえ、お前さ。(ト顔をぢつと見て寄添ふ。)
お坊　(突退け、)おきやあがれ。(トせゝら笑ふ。流行唄にて此道具廻る。)

(一重部屋の場)――本舞臺一面平舞臺正面床の間違ひ棚、下手夜具棚此下白木の箪笥、上下折廻し塗骨障子、總て一重部屋の體。蒲團の上に以前の文里煙草を呑みゐる、此傍に一重部屋着の拵へにて硯箱を置き卷紙へむだ書をしてゐる。下手長火鉢の傍に花の香番新の拵へにて鼻紙にて火をあふぎ、新造花琴、花鶴兩人居る。此模樣端唄にて道具留る。

一重　えゝ人の氣も知らずに、あの騷ぐことは。これ花琴、又誰か筆を持つていつたのか。
花の　外山さんか、さう云つて來な。
花琴　あい外山さんが、御免なんし、つい急に入りいしたから、お借り申すと先刻禮を言ひなんした。
花の　ほんに外山さんも大概だよ。いつでも部屋の物を遣つて。これ花琴さんも花鶴さんも、今にぬしが御酒をお上りなんすから、もつと炭をついで、ちろりや何かを揃へて置きなまし。
兩人　あい――。(ト酒道具を出す。)
一重　これ〳〵花鶴、もつと行燈を明るくしな、何故こんなに暗い行燈だの。
花鶴　幾ら掻立ていしても、これより明るくなりいせん。
一重　明日から、もつと明るい行燈と取替て貰や。(ト無駄書をして引裂き、じれる思入。)
文里　これ、どうしたのだ。

一重　どうもしいせん。
文里　何だか顔附が悪い様だ、花の香や薬でも呑ませれば
いゝに。
花の　幾らさう申しても呑みなんせん。
一重　なに、私の顔付の悪いのは生れ付さ。
文里　そんな愛想盡しをやめて、一つ呑んだら氣が晴れよ
う。
一重　私しやどういふ生れやら、人に物を云はれると、腹
が立つてなりません、何も言つておくんなんすな。
文里　いやもう年の行かねえ其内は、をかしくもねえに笑
つたり、何でもねえ事に腹を立つものだ。さうしていつ
迄も、爰に居たら風を引くと悪いから、羽織でも着れば
いゝ。
花の　もし花魁、文里さんが氣を揉みなんす。花鶴さん、
何ぞ着せ申しな。
花鶴　あい／＼。
一重　えゝもう、うつとしい。(ト筆を打付け、)私に構つて
おくんなんすな。
ト一重ついと立つて下手障子の内へはひる。
文里　又癇癪か、困つたものだ

ト端唄の合方にて引違へて下手より、九重部屋着姉女
郎の拵にて出來り、
九重　おや、一重さんは。
花の　今ちよつと下へ。まあお這入りなんし。
九重　これ花鶴さん、文里さんが來なんしたと、吉野さん
に知らしておくんなんし。
花鶴　今初瀬路さんや飛鳥野さんが、知らせにお出なさん
した。
九重　おや、さうかえ。(トよき所へ來る。)
文里　おゝ九重さんか、待兼ねて居ました。
九重　よくお出なんした。久しくお出なさんせんから、み
んな待兼ねて、噂ばかりして居りいした。
文里　いつ來てもさういつてくれるので、實に己あ嬉しい
から、友達と寄ると、お前方の噂ばかりして居るよ。
九重　おや、悪くかえ。
文里　なに勿體ねえ、誰が悪く言ふものか。
ト下手より以前の吉野出來り、
吉野　九重さん、お出なんしたか。
九重　吉野さんか、文里さんがお出なんして嬉しいね。
吉野　文里さん、何とお禮を申さうやら、ぬしも宜しく申

しいした。

文里　何の禮に及ぶものかな。

吉野　いえ〳〵、ぬしのお蔭で助かりいした。

文里　こう〳〵そんなにお前に言はれると、却つて此方で氣の毒だ。もういゝ加減にしてくんねえ。

吉野　それはさうと、一重さんは。

九重　又何處ぞへ行きなんしたとさ。

文里　さあ一重に構はずお前方と、久しぶりで一ぱい呑まう。みんなの口に合ふものを、海老長へ云付けて置いたから、今に忠七が持つて來るだらう。

九重　それは嬉しうござりますね

文里　これ花琴、初瀬路さんや飛鳥野さんを呼んで來てくれ。

花琴　あい〳〵。

ト上手にて初瀬路・飛鳥野「花琴さん、今其處へ參りんすよ」と言ひながら兩人出來る。

文里　さあ〳〵、是でいつもの顔が揃つた。

花の　丁度お燗がようざます。

文里　それぢやあ一つ初めようか。

ト花琴・花鶴臺の物を出し、是より捨ぜりふにて酒宴になる、階子の口より茶屋の若い者忠七肴を持つて出來り、

忠七　もし旦那、大きに遲なはりました。

文里　おゝ忠七か。

忠七　あいにく客が落合ひまして。

文里　なに丁度よかつた。まあ爰へ來て一つ呑むがいゝ。

忠七　有難うござります。其替り花魁方のお好な者ばかり持つて參りました。

初瀬　ほんに、仲の町にも多く若い衆があるが、

飛鳥　忠七どんに限るね。

忠七　氣の利かないのが。

花の　まあ、そんなものさ。

忠七　是は御挨拶。

ト皆々わや〳〵と酒宴になる。下手よりおつめ遣手の拵にて出て來り、跡よりさしがねの狆付いて來て、文里の膝へ上る。

つめ　是は文里さん、よくお出なさいました。此頃はさつぱりと、お見限りでござりますね。

文里　何さ、此間から來たかつたけれど、仲間の市が續いたので、それで大きに御無沙汰をした。

花卷　おや／＼そんなに市へお出なんすなら、今度羽子板を買つて來ておくんなんし。

忠七　そりやあ觀音樣の市だ、旦那の市は道具市のことさ。

つめ　ほんに此子達は何時でもそんな事ばかり、これだから旦那世話がやけて困ります。

文里　然し爰が廓の命だ。(ト紙入より包んだ金を出し、)こりやあわざとお年玉。(トおつめへ祝儀をやる。)

つめ　是はいつもながら有難うござります。忠七どん宜しく。(ト狆を見て、)おや、いかなこつても、駒が旦那のお膝へ來つてさ。

花の　いつでも主がお出なんすと、直に來てねだりいす。

九重　狆迄文里さんはいゝと見えるよ。

吉野　そりやあ可愛いざますね。

喜助　(下手へ出て來り、)もしおつめどん、按摩さんが來て待つて居ますぜ。

つめ　今行かれないから、歸して下せえ。

喜助　そんな事を云はねえで、早く行つて揉んで貰ひなせえ。

つめ　それぢやあ旦那御免なさいまし。

文里　まあいゝぢやあねえか。

つめ　いえ按摩が待つて居りますから。さあ駒よ、來い來い。(ト狆を抱き下手へはひる。)

九重　折角御酒が初まつて面白くなつた所へ、おつめどんが來たからうんざりしました。

吉野　それに文里さんが合はせなますから、何時迄居ようかと思ひした

花の　御說法の話が出ると、引けものはありますね

忠七　そいつは眞平だ

喜助　大方皆さんがお困りなさるだらうと思ひましたから、按摩さんを呼込んで、おつめどんを呼出しました。

忠七　そいつあ喜ス公大當りだ。

文里　こりやあ早速、當座の褒美だ。

ト文里紙包の祝儀を遣る。

喜助　これは有難うござります

ト此時ばた／＼にて花卷駈けて來り、忠七の蔭へ隱れる

忠七　花卷さん、どうなさいました。

花卷　今廊下で與助どんにからかつたら、何處迄も追掛けんすものを。

忠七　とこに喜助どん、一拳いかつか。

喜助　何のへゝぼのくせに。
忠七　へゝぼなら何ぞ賭けてやらう。
喜助　いまお貰ひ申した、御祝儀を賭けよう。
忠七　己も先刻頂いたのがあつた。
　ト兩人紙包みの祝儀を賭ける。
花卷　こりやあ面白うざます。さあ〳〵、早くやんなまし。
　ト是より流行唄の狐拳になり、兩人振あつて喜助負ける。
喜助　えゝ忌々しい、負けたか。
初瀨　おつめどんの怨念ざます。
花卷　忠七どん、何ぞ奢んなまし、お前の様にいゝ人はないに。
忠七　まだ花卷さんの好きな物があります。
花卷　おや誰ざますえ。
忠七　新仲の丁え。
花卷　なに、新仲の丁え。
忠七　それ櫻の木の大福が、餡が澤山でいゝと言ひなすつた。
皆々　こりやあ當てられたね。
花卷　えゝ憎らしい。（ト忠七の背を打つ。）
忠七　そんなことをしなさると、とうすみさまに言付けますよ。
花卷　とうすみ様とは、冬映様のお弟子かえ。
忠七　なに、きのえねやのさ。
花卷　えゝかつぎなます。
喜助　あゝ、いゝ氣味だ。
初瀨　花卷さん。
皆々　つねつておやんなんし。
忠七　いや、いたら屋は御免でござります。
　ト忠七逃出すを花卷追掛ける、是を喜助留めながら下手へはひる。此内始終文里鬱ぐ思入。
九重　こんなにみんなが騒ぐのに、いつにない文里さんが、今日は顔の色も惡し、
吉野　どうやら鬱いで居なます樣子、
初瀨　お氣に濟まぬ事でもあらば、
飛鳥　御遠慮なしに私等へ、
花の　どうぞ言うて、
皆々　おくんなんし。
文里　（思入あつて、）さあ、此のふさぐのは名殘の惜しさ

に、

九重　え、名殘の、

皆々　をしさとは。

文里　さう親切に言つてくれるお前方へ打明けて、疾から言はうと思つて居る、私が心の一通り、九重さんを初めとして、みんなもどうぞ聞いてくんねえ。（トしつぽりとした合方になり）どういふ事の因縁か、二年此方通ふのも初手は仲間の交際で、一度が二度の西の町、雪の朝の居續けも、ふり通された此文里、笑つた顏を見た事もまだ内證の手を離れたばかり、年の行かねえ一重故氣隨氣儘も尤もだが、どうせ苦界と云ふからは好いた客ばかりはねえ。厭な客にも程を合せ、人の上に立つ者は慾を知らにやあ身が立たねえ。行末長い苦界の入譯とつくり云つて聞かしたいが、顏を見るのもいやな私故、いゝ事も惡く聞いて却つて爲にならねえから、爰は仲よしの九重さん、お前が異見をしてやんなせえ。是せえ頼めば私も安堵、もう心殘りもねえ故、思ひ切つて是から來ぬ氣、然し附合で來た時、格子迄來ようから、今迄のよしみを思ひ、よく來たと云つてくんなせえ、二年越に馴染で來た今夜が二階の見納めだと、思へば名殘が惜しまれて、それで已らあふさぐのだ。

ト文里ホロリと思入、皆々も泣きながら、

九重　そんならおぬしは今宵限、

吉野　もう此二階へは、

皆々　お出なんせぬか。

文里　來ぬといふのも是迄の、やつぱり緣であつたらうよ。

初瀨　こりやどうしたら、

皆々　ようざませう。（ト皆々泣く。）

吉野　ほんにまあ今宵限りお出なんせぬお心で、今も今とて一重さんの、緣に繋がる吉三さんの難儀を救ふお志し、こんなお方が又とあらうか、心で拜んで居りんした。

ト吉野泣く。

九重　其御親切を聞く上は、一重さんに意見をして、聞かぬ時は内證の耳へ入れても一重さんに、詫をさせねば濟みません。

文里　はて、其異見は歸つた後で、云つて聞かしておくんなせえ。

九重　いえ／＼、ぬしの居さつしやる内、

花の　どうぞ九重さん、よいやうに。

九重　わたしが云つて聞かせよう。
ト立上り下手へ來る、此以前より下手障子の内へ一重出て是を聞き居る、九重見て「や一重さんか。」といふので、一重「え」とびつくりなし逃げ出す。
九重　あれさ、待ちなんしといふに。
ト追掛けて下手へはひる。
吉野　お腹も立たうが文里さん、どうぞ今夜は私らに免じて、泊つて行つて、
皆々　おくんなんし。
文里　さうみんなに言はれると、歸るにも歸られず、といつて居れば未練の種、(ト湯呑を出し、)吉野さん一つ注いでくんな。
吉野　おや、是でかえ。
文里　二階の名殘た、滿々注ぎな。
吉野　それだといつて、
文里　はて、酒でも呑まねば居られねえ。(ト是にて吉野是非なく注ぐ。此の見得流行唄にて、道具廻る。)
(九重の部屋)――本舞臺矢張平舞臺、向ふ廊下を見たる遠見の座敷、上下折廻し塗骨障子屋體、九重部屋の體。上手に九重煙管を持ち、下手に一重俯向居る。
九重　これ一重さん、お前何と思ひなんすか、文里さんの今の詞、人に知らせもしなさんすまいが、お前の胸に覺えのある事、勿體ない程親切にしなさんすほど意地を張り、ふり通すのを此里の意氣地と思つて居やしやんすが、そりや大きな了簡違ひ、初手は厭でも眞實の心に惚れるが遊女の習ひ、取合けて又文里さんは、一座をせぬ者迄が惡く云ふ者は一人もおッせん。ちつと足が遠くなれば待遠がつて噂ばかり、お前も聞いて居なさんしたらうが、吉野さんの今の話、今宵限りもう來ぬと、愛想の盡きたお前の兄さんの吉三さんの難儀をば救ひなさんす其親切、人の事でも勿體なく、私しや涙が止りいせん。お前も以前は武士の胤、よう思案してみなさんせ。
一重　九重さんの其お詞、身に染々と嬉しうおッす、ほんに久しう來なんす中も、遂にいやらしい事もなく紋日物日の苦勞もさせず、私が氣儘を柳に受け、歸らしやんした其後では、あゝ氣の毒なと思ひしても、つい浮か〳〵と今日迄も。
九重　さあ惡くしたのは濟まぬことゝ、お前の心が附いた

なら、文里さんにあやまつて呼遂げなんすやうになさんせ、辛い勤の其中でも、姉と云はるゝ私故、妹と思うて此異見、必らず悪く聞きなまさんな。

一重　何の悪う聞きませう、お前の異見に氣を取直し、呼び申す心なれど、今更どうも此顔が。

九重　合されぬと思ふなら、何故あの樣にしなんした、浮氣な廓にも契城の、意氣地と義理がありんすぞえ。

ト九重鼻紙を顔へ當てゝ泣く。

一重　九重さん堪忍して下さんせ、今更何と云譯も、言ひおくれたる身のつらさ、顔を拭うて文里さんへ、私しやあやまりに參りいす

九重　そんなら私の異見に附き。

一重　さあ濟まぬ事と氣が附けば、今も今とて兄さんの、難儀を救うて下さんした、お情深ひ文里さん命に替へても取留めて、お呼び申す樣にしいす。

九重　おゝそれでこそまことの契情、異見を云うた私を初め、傍輩衆も嘸悦び

ト此時初瀬路、飛鳥野出て來り、

初瀬　九重さん、先刻からのお前の異見、障子の外で聞いて居いした。

飛鳥　よく一重さんも氣を取直し、あやまる樣になりんした。

初瀬　善は急げといふからは、

飛鳥　歸らしやんせぬ其内に、

九重　少しも早う文里さんへ。

一重　あい。(ト涙を拭ひ、あやまりに參りいせう。(トしなしなと立つて下手へはひる)

九重　ほんに、あんな困る子はない。

初瀬　然し、九重さんのお骨折で、

飛鳥　どうか今宵は仲直り、

九重　漸く安堵致しいした。あいたゝゝゝ。

ト癪の痛む思入。

初瀬　もし、九重さん、

兩人　どうなさんした。

九重　あんまり文里さんの事で氣をもんだ故、痛えが下りたら又癪が。ほんに苦界でござんすなあ。

ト宜しく道具廻る。

(元の一重部屋の場)になり、流行唄の合方にて道具留る。と獨吟になり、下手より一重出て來り、

上手の障子を明けようとして明け兼ねる思入あつて、障子の傍へ來て、

一重　もし文里さん／＼、嘸腹が立ちなんしたらうが、どうぞ今迄の事は堪忍して、機嫌を直しておくんなんし。もし文里さん／＼。

ト呼べども返事なき故ハアと泣き、袖を口へ當てる。是にて又獨吟になり、物を云はぬは尤もだといふ思入あつて、

二年此方お出でなんすに、遂に一度機嫌ようお歸し申した事もなく、今更私があやまつたとて、心の解けぬは無理ならず、何故今迄はあの樣に、人が褒めれば逆らうてつまらぬ意地を張通し、惡くしたのか勿體ない。思ひ廻せば廻す程、主には濟まぬ事ばかり。（ト障子の內へ思入あつて）はあゝ。（ト泣伏す、是にて文里障子を明け、煙草盆を提げ出て來り）

文里　花魁、何を泣くのだ。

一重　もし文里さん、是迄長の私が我儘、嘸お腹が立ちましたらうが、どうぞ堪忍しておくんなんし。

文里　なに、腹を立つものか、嫌がられるを知りながら、やつぱりお前の顏が見たさ、べん／＼と來たのは此方があやまり。

一重　えゝも其樣に云なんす程、いつそ死に度うござんす。

文里　つまらねえ事を云つたものだ、今仲の町で指折の花魁、文里風情の義理立に、死なうなぞとは惡い了簡、嘘にもそんな事は云ひなさんな。

一重　今更何と云はうとも、所詮お心は解けまいが、せめて私が身の言譯。（ト又獨吟になり、一重簞笥の抽出より小刀を出し、煙草箱へ小指を當てゝ小刀で切る。文里是を見て思入、一重痛みを怺へ件の指を紙へ載せ）今改めてぬしの心中、是で心の疑ひを、どうぞ晴らしておくんなんし。

文里　花魁、こりやあ指かえ。

一重　あい

文里　いや、お志しは忝いが、是ばかりは貰ひたくねえ。

ト指を取つてはふり出す。

一重　えゝ。（びつくりなす。）

文里　女郎の指を嬉しがつて貰ふ氣なら二年越し、ふられに爰へ來やあしねえ。流石年端が行かぬ故慾を知らねえ花魁と、子供の樣に思ふから惡くされるも厭はずに、無駄な金を遣ひに來たが、かういふづぶとい仕打をされち

やあ持て生れた癇に障らあ、穢體苦界といふものは三つ蒲團の花魁でも、薄一枚の夜鷹でも、己が勝手に身を賣つて勤めをする者は一人もねえ、親兄弟や夫に爲め切ない義理に沈める身體、それを思へば不便さに氣隨氣儘も廓の習ひと、柳に請けて氣に入らぬ風も素直に通してやつた。辛くするなら一筋に、何故辛くはしねえのだ。なまじ情の空涙、今になつて何の事だ。云ひてえ事も數々あれど、云へば云ふ程此身の恥、若い者でもある事か四十に近い文里故、恥を思つて何にも言はねえ、痛え思ひの此指は、何處ぞへ賣つて金にしろえ。

ト文里きつと云つて煙草をのみ居る。

一重（始終泣居て、）成程腹も立ちませう、それも私が心柄故身を恨んで居りますが、せめて一言堪忍したと、言ひなんすを聞いた上では、命も私しや惜しうおつせん。

文里　今更言つても無駄な事、おれは何にも言はねえから、お前も何にも言ひなさんな。

一重　そんならどうでも。

文里　言へば云ふ程、互ひの恥だ。

一重　はあゝ。（ト泣伏す。又獨吟になり、一重以前の小刀を取り、）さうおや（ト死なうとする。）

文里　（あわてゝ留めて、）あゝこれあぶねえ、何をするのだ。

一重　どうぞ死なしておくんなんし。

文里　えゝ怪我でもするとならねえわ。放せと云つたら放さねえか。（ト小刀を無理に引たくる。一重はハッと泣伏す。）（文里小刀を見て、）此の小刀を、どうしておぬしが。

一重　さあ、これは私が親の形見。

文里　此小刀は我親文藏様が秘藏にて、其頃花の友達に達て望まれ讓りしは、たしか安森源次兵衛様。

一重　えゝ（ト思入。）

文里　そんなら、若しや安森の、

一重　あい、恥かしながら、娘でござんす。

文里　むゝ、其安森の娘御が、どういふ譯で此廓へ。

一重　まだ其時は子供故、後々聞けば父様が御主様より預かりの、庚申丸といふ短刀を、盗み取れし越度に、御切腹故家斷絶、それから長の浪々中、母の病氣に苦界の勤め。

文里　すりや、研屋與九兵衛が世話にて買ひし庚申丸、あの短刀故沒落ありしか、知らぬ事とて其短刀一昨日海老名軍藏様へ研屋與九兵衛が百兩に賣つたが、其代金を請

取りし十三はそれより行方知れず、聞けば買主軍藏樣も
人に殺され死んだとやら、何にしろ短刀は研屋に聞いた
ら行方も知れよう、はて、とんだ話しになつて來た。

一重 そんなら失ふ短刀が、お前のお手にあつたるとか。

文里 それも一昨日賣つた故、今では何處の手にあるか。

一重 其短刀を御上に上げれば、末は弟で家再興、昔馴染
とあるからは只是迄は水にして、力となつて下さんせ。

文文 見る影もねえ男だが、江戸の氣性に後へは引かねえ。

一重 えゝ嬉しうござんす。是に付けてもまだ外にお頼み
申す事もあれば、私と一緒に奥へ來ておくんなんし。

一重 知らぬ先は兎も角も、安森樣の娘とあれば、頼む事
なら聞いてやらう。

一重 どうぞ聞いておくんなんし。(トいそ〳〵として立上
る。此時雨車になり、一重思入あつて)もし文里さん、
雨が降つて來ましたよ。

文里 (立上り櫺子の外をちよつと見て、)どうで今夜も、

一重 えゝ

文里 ふられるだらう

ト文里につたりと思入、一重憎らしいといふ思入、あ
れ又憎やの唄にて道具廻る。

傳吉内の場)――本舞臺三間の間常足の二重、正面
暖簾口上手緣起棚内に宜しく福助土の金など飾り、
此脇鼠壁神棚に札箱、備を飾り、下手佛檀付の押入
戸棚、上の方一間障子屋體、下の方一間臺所口三尺
の戸障子、提灯の皮の櫺子窓、いつもの所門口。總
て割下水傳吉内の體。爰に夜鷹のおはぜ小さな箱に
化粧道具を入れ、巳惚鏡で顏をしてゐる、傍におて
ふ半分顏を塗り、煙管を持つて叩き立て居る、下手
においぼ摺鉢の火鉢へ焚火をして、傍に五合德利皿
にうで蛸の足二本あり、茶碗にて酒を呑みゐる、四
つ竹節通り神樂にて幕明く

はぜ えゝ耳喧しい、何をそんなに大きな聲をするのだ。

てふ さういふ汝が聾だから、小さな聲ぢやあ分らねえ。

いぼ 何だか知らねえが、靜に云つても分らうぢやあね
か。

てふ こう、おいぼさん聞いてくんな、今顏をしようと思
つたら白粉が足らねえから、貸せと云へば貸さねえと云
ふ故、そんなら私が貸してやつた、錢を返してくれと云
ふのだ。

いぼ　さうでもあらうが、親方もおとせさんが歸らねえので、氣を揉んで居なさらアな。

てふ　それをわつちあ知つて居るから、言ひてえ事も言はねえのだ。

はぜ　言ひてえ事があるなら思ひれ言ふがいゝ、何ぞといふと返せ／＼と、此方こそ貸があれ、そつちから借りた覺えはねえ。

てふ　なに、ねえ事があるものか、一昨日の晩蕎麥が一杯、歸りがけに夜明しできらず汁に酒が一合、今朝も漬物屋の澤庵を、八文買ふ時四文貸し、丁度それで百ばかりだ。

はぜ　そりやあ手前が此間和田の中間に立引く時、七十二文貸があらあ、まだ其上に四文屋の、十二文といふ棒鱈を、手前に二つ喰したから、此方も百貸があるのだ。

てふ　べら棒め、あのぼう鱈は齒がなくつて喰へねえといふから、それで己が喰つてやつたのだ。

はぜ　何でもいゝから己が方へ、百返して置いて理窟を云へ。

てふ　うぬに返す錢があるものか、此方へ百取らにやあならねえ。

はぜ　幾ら取らうとぬかしても、遣らねえと言つたらどうする。

てふ　どうするものか、腕づくで取る。

はぜ　面白い、取らるゝものなら取つて見ろ。

てふ　取らねえでどうするものだ。

ト獅子の鳴物になり、おてふは長煙管、おはぜは有合ふ薪を持つて打つて掛るを、おいぼ是を割つて入り、双方を留め、

いぼ　これさ／＼、いゝ加減にしねえのか。（トおいぼ半纏を脱いで兩人の叩き合ふ煙管と薪を押へ。）待てといつたら、まあ／＼待つた。

てふ　いらぬ留めだて。

兩人　退いた／＼。

いぼ　いゝや退かれぬ退きませぬ、あぶねえ煙管と薪の中、見兼ねて留めにはひつたは、三十振袖四十島田、今一對の二人は、名におふ關のばゝあおはぜに外に嵐の虎鰒おてふ、互ひに爭ふ百の錢此貸借は夜鷹湯の下水に流してさつぱりと、綺麗に預けてくんなせえ。

ト半纏を取る、兩人別れて、

てふ　おゝ、さういふ事なら預けもせうが、

はぜ　さうして百の貸借は。
いぼ　中へはひつた私が不承、昨夜お信の床花に小錢交りで貰つた百、二つに分けて五十宛、足らぬ所は兩腕の替りに二本の鮹の足、高い物だが五十として、是で百にしてくんねえ。
ト桔梗袋へ入れし錢と鮹の足を二本出す。
てふ　流石は名代のうで鮹おいぼ、兩足出しての扱ひを、
はぜ　まさか此儘取られもしめえ。
いぼ　そんなら爰に二合ばかり、殘つた酒で仲直り、
てふ　物は當つて碎けろか。
はぜ　犬と猿との嚙み合も、
いぼ　是から兄弟同樣に。
てふ　三人寄つて、
兩人　義を結ばうか。
ト四つ竹通り神樂になり、三人酒を呑み居る。花道より權次の妓夫出て來り、直に内へはひり。
權次　こう、お前達はまだ支度をしねえのか。
いぼ　なに、しねえ所か、疾に身支舞もしてしまつて、
てふ　お前の來るのを待つて居たのだ。
權次　己あ又遲くなつたから、場所へ小屋を掛けて來た。

はぜ　そりやあいゝ手廻しだの。
權次　さうして親方は奧かえ。
三人　あい、奧に居なさるよ。
傳吉　おゝ權次か歸つたか。（ト奧より、前幕の傳吉行燈を持ち出て來り）やれ〳〵大きに御苦勞だつた。
權次　つい先から先を歩いて、思ひの外遲くなりました。
傳吉　何うだ娘の居所は知れねえか。
權次　あい少しでも當りのある所を、方々尋ねて來やしたが、どうも居所が知れませぬ。是が身性でも惡けりやあ逃げでもしなすつたと思ひやすが、親分の娘にしちやあ堅過ぎるおとせさん、そんなら氣遣へもあるめえし、それに爰に居る三人なら、おッ放して置いても大丈夫だが、野玉に過ぎた器量ゆゑ、引かつかれでもしやあしめえか。
傳吉　さあそれを己も案じられて、今日はろく〳〵飯も喰へねえ、こんな氣ぢやあなかつたが、爰が段々取る年で、先から先を考へるので、ほんに餘計な苦勞をするよ。
權次　然しこんなに案じるものゝ、昨夜何處ぞへ泊りなすつて晝間歸るも間が惡く、直に場所へ行きなすつたかも知れねえ。

傳吉　何にしろ手前達は、是から直に場所へ行きおとせが居たら誰でもいゝから先へ一人歸つてくれ。

はぜ　あい〳〵、居なすつたら年役に、わつちが先へ歸つて來よう。

權次　えゝ、おつかあ樂な方へ逃げたがるな。

はぜ　こりやあ年寄の役徳だ。

權次　さあ〳〵、支度がよけりやあ出舟とせうせ。

ト此内權次緣起棚に盛つてある鹽へ切火を打ち、門口へ蒔き、跡を三人にやる。皆々鹽を振り、權次錢箱を風呂敷にて背負ひ、

權次　そんなら親方、行つて來ます。

傳吉　行く道も氣を付けてくれ。

權次　合點でございます。

ト三人鼠鳴をして、おはぜおいぼ黑のお高祖頭巾、おてふは頬冠りをする。傳吉向うへ思入あつて、

傳吉　たゞならいゝが、から身でねえゆゑ。

權次　えゝ。

傳吉　いやさ、傘を持つて行くがいゝ。

權次　ほんに惡い雲行だ。

いぼ　水晴れは貞平だ。

てふ　ぼれねえ内に、

權次　道を急いで、

三人　さいで〳〵。

ト四つ竹節、通り神樂にて皆々花道へはひる、

傳吉　（見送りて、）あゝ案じられるは娘の身の上、大まい百兩といふ金故、ひよつと間違ひでもある時に己も兎もあれ奧に居る昨夜助けた木屋の若い衆、家へ歸すこともならずどうしたらよからうか、なるほど道に落ちた物を拾ふなとはよく言つた事だ。とんだ錢を拾つたばかり、餘計な苦勞をしにやあならぬ。あゝ早く便りを聞きてえものだ。

ト矢張り右の鳴物にて、花道より久兵衛半纏股引尻はし折にて、弓張提灯を持ち、前幕のおとせを連出て來り、

久兵　これ娘御、お前の内は何處らだな。

とせ　はい、向うに見えますが、私の家でござります。

久兵　あゝそんなら向うでござるか。是から家へ歸つても、死なうなぞといふ、無分別は決して出さつしやるな。

とせ　御親切にお留め下され、有難う存じます。

久兵　嘸親御が案じてござらう。さゝ少しも早く行きませ

う。(ト本舞臺へ來り、門口にて、)はい、ちよつとお頼み申します。

傳吉　あい、何處からござりました。

とせ　父さん、私でござんす。(ト内へはひる。)

傳吉　おゝ娘か、やれ、よく歸つて來た。

とせ　昨夜飛んだ災難に逢うて既に死んでしまふ所、此お方に助けられ、お蔭で歸つて來た故に、ようお禮を言うて下さんせ。

傳吉　これは／＼どなた樣でござりますか、娘が命をお助け下され、有難う存じます。

久兵　いやも既の事に危い所、やう／＼の事でお助け申しました。

傳吉　してまあ、昨夜の災難とは、どんな目に逢つたのだ。

とせ　さあ金を落した其お人を尋ねに場所へいた所、お目に掛らずすご／＼と歸る途中の大川端、道から連になつたのは、年の頃は十七八で振袖着たるよい娘御、夜目にも忘れぬ紋所は、丸の内に封じ文、其娘御が盜人にて持つたる金を取られし上、川へ落され死ぬ所を、此お方に助けられ、危い命を拾うたわいな。

傳吉　(是を聞きびつくりなし、)えゝ、すりや拾つた金を取られしとか。

とせ　あいなあ。

傳吉　はて、是非もないことだなあ。(ト當惑の思入。)

久兵　(前へ出て、)いや、其後は此の私が、かいつまんでお話し申さう。私は八百屋久兵衛というて百姓半分青物商ひ、昨夜東葛西から舟に牛蒡や菜を積んで通り掛つた兩國川、水に溺れて苦しむ娘御、やう／＼上げて介抱なし、我家へ伴ひ歸りし所、御覽の通りの貧乏暮し、着替の着物もない故に紡太を着せて夜通し掛り、やうやく火箱で着物を干上げ、今朝連れて參らうと思ふ出先へひよんな事、私が悴が奉公先で金を百兩持つた儘、行方が知れぬと主人より人が參つてびつくりなし、取敢ず先方へ顔を出し、それから方々心當りを、尋ね捜せど行方知れず、それ故大きに遲なはり、餘計に苦勞を掛けましたは、どうぞ許して下さりませ。

傳吉　それは／＼お前樣の、御苦勞の中で太いお世話、何とお禮を申さうやら。それに付けて此方にも似寄つた話しがありますが、して息子殿の年恰好は。

久兵　今年十九でござりますが、私と違つて色白で目鼻立もぱつちりと、親の口から申し憎いが好い男でござりま

する。

とせ　どうか樣子をお聞き申せば、金を落したお方の樣子、久兵それ故もしや言譯なく、ひよんな事でもしはせぬかと、案じられてなりませぬ。

傳吉　其お案じは御尤も、誰しも同じ親心、したが其息子殿は別條ないから安心なさい。

久兵　え、すりや達者で居りますとか。

傳吉　今お前に逢はせませう。おい十三さん〳〵。

十三　はい、只今それへ參ります。

ト奥より前條の十三郎しを〳〵と出て來る、久兵衛見てびつくりなし、

久兵　や、悴か。

十三　親父樣か。

久兵　よくまめで居てくれた。

十三　あゝ、面目次第もございませぬ。（ト俯向く。）

とせ　（見て、）や、お前はどうして此方の家へ。

十三　さあ金を失ひ言譯なく、川へ身を投げ死なうとせしを、傳吉樣に助けられ、昨夜から御厄介。

とせ　それはよう來て下さんした。是に付けても今の今迄私や死にたう思うたは、どうした心の間違ひやら、死んだら爰で逢はれぬもの。もう〳〵死ぬ氣は少しもない、鶴龜々々。

トおとせ十三郎に惚れて居る思入、傳吉扨はといふこなし、

久兵　そんなら死ぬ氣はなくなりましたか、やれ〳〵それはよい了簡。あゝ思へばいかなる緣づくか、

傳吉　此方の息子は己が助け、

久兵　お前の娘は私が助け、

十三　捨てる命は拾へども、

とせ　拾うた金は盜まれて、

傳吉　今となつては、

久兵　互ひの難儀。

十三　こりやどうしたら、

四人　よからうぞ。（ト四人思入。）

傳吉　まあ何にしろ其百兩、娘が拾つて盜まれたら、此方も脫れぬ掛り合ひ、死に身になつて共々に金の調達しようから、まあそれ迄は息子殿、行方の知れねえ體にして、私に預けてくんなせえ。惡いやうにはしめえから。

久兵　それは〳〵有難い御親切な其お詞、あまへてお願ひ申すのも、そでないことではございますか、何卒お隱し

申しませう、實の親子でない故に、此方に隔てはなけれども難儀、掛けて氣の毒なと、居憎い事もござりませうかと、それが案じられまする。お願ひ申したうござりますが、然し馴染もない貴方へ、お氣の毒でござりまする。

傳吉　なに、其氣兼には及ばねえ、こんな生業、年中人の一人や二人ごろついて居る私が家、決して案じなさらねえがいゝ。

久兵　それは有難うござりまする。

十三　そんなら私は此方の家に、

とせ　是から一緒に居さんすのか。

傳吉　おゝさ、なくした金の出來る迄は、己が預り家へ置くのだ。

とせ　そりやまあ嬉しい。

傳吉　や。

とせ　いやさ、家が賑やかでようござんすな。(トおとせ十三郎と顏見合せ、嬉しき思入。)

傳吉　そりやあさうと、此息子殿、義理ある仲と言ひなさるが、貰ひでもしなすつたのか。

久兵　いえ、拾ひましたのでござります。

傳吉　えゝ。そりやあ何處で。

久兵　忘れもせぬ十九年後、實子が一人ありましたが、子育ちのない所から名さへお七と附けまして、女姿で育てましたが、丁度五歳で勾引され、行方の知れぬを所々方々捜して歩く歸り道、法恩寺の門前で拾つて參つた此の悴、こりや失ふ悴の其替り祖師樣からのお授けと、家へ連れて歸つて見れば、守の内に入れてあつた土細工の小さな犬に、十月十三日の誕生と、書記してあつたので、戌の年の生れと知れ、十三日の生れ日は卽祖師の御緣日故、直に十三と名を付けて育てましたる此悴、實の親は何者か、どうで我子を捨てるからは、ろくな者ではござりますまい。

トこれを聞き傳吉ぎつくり思入あつて、おとせ十三郎を見て愁ひの思入。

傳吉　すりや、法恩寺の門前で息子殿は拾つたのか、はて思ひがけねえ事だな。(ト宜しく思入。)

久兵　いや、勝手ながら、私は主人方へ言譯に、是から廻つて行きますれば、もうお暇致しまする。

傳吉　それぢやあ息子殿の身の上は、私に任せておきなせえ。

久兵　何分お頼み申しまする。
十三　（前へ出て、）あゝ思ひ廻せば私は、何處の誰が胤なるか、實の親は名さへも知らず、まだ當歳の其折から此年迄の御養育、大恩受けし親父樣へ何一つ御恩も送らず、御苦勞かける不孝の罪、どうもそれが濟みませぬ。
久兵　はてそれとても約束事、必ずきな〳〵思はぬがよい。
ト久兵衞立ちかゝる
とせ　それならもうお歸りでござりますか。
久兵　はい、又お禮に上りますが、何分ともに悴がお世話を。
とせ　そりやもう私が、（ト嬉しき思入にて、）どの樣にも。
久兵　それは有難うござります。左樣なれば傳吉殿。
傳吉　久兵衞殿。
久兵　（門口へ出て、）悴。
十三　はい。（ト門口へ來る。）
久兵　（顏を見て、）煩はぬ樣にしやれ。（トホロリとして門口をしめる。唄になり久兵衞涙を拭ひ花道へはひる。）
傳吉　折角娘が歸つたらと、思つた金も鶍となり、今更仕樣もねえ譯だが、然し金は世界の湧物、明日にも出來ぬものでもねえ、まあ案じずと二人共昨夜からの心遣ひ、奧へ行つて寐るがいゝ。
とせ　そんなら父さん十三さんと、奧へ行つてもようござんすか。
傳吉　あゝいゝとも〳〵、若い者は若い者がいゝ、年寄ちやあ話が合はねえ。
とせ　さあ十三さん、父さんのお許し故、是から奧でしつぽりと、いえ、今宵はしつぽり降りさうなれば、寐ながら話しを。（ト嬉しき思入にて、十三郎の袖を引く。）
十三　いえ、まだ私は睡うござりませぬ。
とせ　睡らなくとも私と一緒に。
十三　ではござりまするが。（ト行きかねる思入。）
傳吉　睡くなくば炬燵へでも、當りながら話したせえ。
とせ　あれ、父さんもあゝ言はしやんすりや。
十三　そんなら、御免下さりませ。
傳吉　どうで夜具も足りねえから、睡くなつたら其儘に、炬燵へ直に寐なさるがいゝ。
十三　有難うござりまする。
とせ　ほんに、此樣な嬉しい事が。（ト嬉しき思入
傳吉　（見て、）あゝ、何にも知らず。
兩人　えゝ。

傳吉　早く寐やれよ。

ト唄になり、おとせいそ／＼として十三郎の手を取り奥へはひる。傳吉跡を見送り溜息をつき、ぢつと思入。四つ竹節通り神樂になり、花道より和尚吉三前幕の裝、頬冠りにて出來り、

和尚　昨日思はず大川端の、庚申塚でお孃お坊の二人と、兄弟分になつた時、己によこした此百兩、こいつばかりは、滿足に貰つた金だ。然しおいらが持つてゐる金だから、どうで淸くもあるめえが、己が爲にやあ淸い金だ。久しく親父にも逢はねえから、まあ半分は親父に土產、こんな根性でも親父が事は案じられらあ。おつなものだな。（ト門口へ來り、）あい、御免下さい。（ト門口を明ける。）

傳吉　誰だ。

和尚　とつさん己だよ。（ト手拭を取り內へはひる。）

傳吉　おゝ吉か、何しに來た。

和尚　何しに家へ來るものか、お前も段々取る年だから、替る事でもありやあしめえかと、ちよつと見舞に寄つたのだ。

傳吉　そりやあ奇特なことだつたが、おらあ又無心にでも來たかと思つた。

和尚　父さんそりやあ昔のことだ。今ぢやあ何處にくすぶつて居ても、鹽噌に困る樣なことはねえ。寐て居て人が小遣ひを、持つて來て吳れる樣になつた。是と云ふのも親のお蔭、是迄度々無心を言ひ何の中にも義理とやら、小遣ひでも上げてえと思つた壺に目が立つて、昨夜ちつとばかり、勝つたから、それを持つて來やしたのさ。

傳吉　いや其志しは忝いが、勝つたといふ其金も、噂の惡い手前故おらあどうも安心ならねえ。大方五兩か十兩だらうが、そりやあ手前のことだから、己に難儀は掛けめえが、端た金で其時に、苦勞をするのはおらあ厭だ。志しは貰つたから、金は持つて歸つてくれ。

和尚　（むつとして、）そりやあお前が言はねえでも、百も承知二百も合點、えゝ幾つになつても小僧の樣に己を思つて居なさるだらうが、三年立ちやあ三つになりやす。久し振で尋ねて來るに、まさかわつちも五兩や十兩の、端た金は持つて來ねえ。

傳吉　なに、端た金は持つて來ねえ。

和尚　ちよつとしても、そりや、五十兩あるよ。（ト懷から前幕の金を出し、傳吉の前へはふり出す。）

傳吉　(取上げて、)すりや、あの是を。(トびつくりなす。)

和尚　又入るなら、持つて來やせう。

ト和尚吉三かます煙草入を出し、煙草をのみ居る。傳吉は此金が欲しき思入あつて、どうで盜んだ金だから止さうといふこなし

傳吉　僅五兩か十兩の端た金と思ひの外、こりやあ小判で四五十兩、丁度此方に入用の、さあ欲しい金でも貰はねえ、以前と違つて惡事を止め、今ぢやあ信者講の世話役に、お題目と首ッ引故、そでねえ金は貰えねえ。

和尚　何故貰えねえと言ひなさるのだ。親の難儀を貢ぎの爲、子が金を持つて來るのは、言はずと知れた親孝行、お上へ知れりやあ辻々へ、張札が出て御褒美だ。何でそでねえと云ふのだらう。

傳吉　いや御褒美が出て辻々へ、張札が出りやあいゝけれど、もう百兩と纒まれば此江戸中を引廻し、其身の惡事を書記した、捨札が出にやあならねえわ。端た金でも取るめえと思つた所へ五十兩、猶々こりやあ貰えねえ、早く持つて歸つてくれ。(ト金を吉三の前へ突戻す。)

和尚　そりやあ父さん分らねえといふものだ。假令此金でくれえ込み、明日が日首を取らるゝとも、お前に難儀を掛けるものか、堅氣な人なら怖からうが、根が惡黨のなれの果、びく／＼せずと取つて置きねえ。

傳吉　いや／＼こりやあ取られねえ、と云ふのは若い時分にした惡事が段々報つて來て、今も今とて現在の。まだ此上に此金を、取つたらどんな憂目を見ようか、あゝ恐しいこと恐しいこと。

和尚　何だなそんな愚痴を云つて、取る年とは云ひながら、お前もけちな心になつたの。それぢやあどうでも此金は、入らねえと云ひなさるのかえ。

傳吉　さあ今も己が云ふ通り、なくてならねえ百兩の土臺に据ゑる五十兩、唾の出る程欲しいけれど。

和尚　ほしけりやあ、取つて置きなせえな。

ト又金を傳吉の前へ置く。

傳吉　いや／＼此金ばかりは取られねえ、早く持つて歸つてくれ。

ト金を取つて吉三にはふり付ける。吉三むつとなし、

和尚　えゝ入らざあよしねえ上げますめえ、惡黨ながら一人の親、ちつとも樂をさせてえから、わざわざ持つて來た金も、氣に入らざあよしやせう。

ト吉三金を取つて懷へ入れる。

傳吉　さあ〳〵外に用もねえことなら、手前が居ると目障りだ。ちつとも早く歸つてくれ。

和尚　歸れと云はねえでも歸りやす、何時迄爰に居られるものか。

傳吉　其根性が直らずば、此後家へ來てくれるな。

和尚　なに、來いと云つたつて來るものか。

　ト云ひながら腹を立てし思入にて門口へ出る。

傳吉　おゝ、來てくれぬ方が孝行だ。

和尚　（門口へ出て思入あつて、）以前は名うての惡黨だつたが、あゝも堅氣になるものか。（ト門口にて、）それぢや、父さん。

傳吉　何だ。

和尚　首にならにやあ逢はねえよ。

　ト門口をぴつしやりとしめる。時の鐘、誂の合方にて吉三花道へ行掛け懐の金を出し、どうぞして遣りたいといふ思入あつて頬冠りをなし、門口へ歸る。此内傳吉も思入あつて暖簾口より奥を窺ひ、

傳吉　二人ながら昨日からの、勞れでぐつすり寢入つた樣子。（ト平舞臺へ下り、よき所へ住ひ、）あゝ寢て居る姿を見るに付け、思ひ出すは此身の惡事。（ト誂へ合方になり門口の吉三是を聞き窺ひ居る、）可愛や奥の二人は知らずに居るが双生子の同胞、生れた其時世間を憚り、女のがきは末始終金にしようと家へ殘し、藁の上から寺へ捨てた男のがきがあの十三、廻り廻つて同胞同士枕を交し畜生の交りなすも己が因果。而も十年跡の事、以前勤めた縁により、海老名軍藏樣に頼まれ、安森源次兵衞が屋敷へ忍び、御上から預りの庚申丸の短刀を盜んで出たる塀の外、吠付く犬に仕方なく其短刀でぶつ放したが、はづみにそれて短刀を川へ落して南無三寶、其夜は逃げて明る日に素知らぬ振で行つて見りやあ、切つたは牝の孕犬、遂に短刀の行方も知れず、考へて見りやあ一飯でも貰ふ恩を忘れずに門戸を守る犬の役、殺した己は大きな殺生、其時嬶が孕んでゐて、産れた餓鬼は斑の樣に、身體中に痣のあるので、初めて知つた犬の報い、一伍一什を女房に話すと直に血が上り、生れた餓鬼を引抱へ川へ飛込み非業の最期、それから惡心發起して罪亡しに川端へ、流れ付いたる土左衞門を引揚げちやあ葬るので、渾名になつた土左衞門傳吉、今ぢやあ佛になつた故死ぬる命を助けたる十三が双生兒に又候や、犬の報いに畜生道、惡い事は出來ねえと思ふ所へ吉三が來て、己へ土産の五十兩

なくてならねえ金なれど、手に取られぬは段々と此身に報ふ是迄の、積る悪事の〆高に算用される閻魔の帳合、はて恐しい事だなあ。

ト傳吉宜しく思入にていふ。此内門口の吉三頷づき、下手臺所の口より二重へ出て、佛檀へ件の百兩の金包みを載せ、思入あつて又元の門口へ出て是でいゝとの思入あつて、花道へ行きかける。矢張右の合方にて花道より武兵衞羽織ばつち尻端折頬冠りにて出で來り、花道にて行合ひ、吉三は花道へはひる。

武兵 はて、今摺れ違つて行つた奴は、傳吉の悴の慥に吉三、おとせを女房に貰ひてえが、あいつが兄故玉に疵だ。

(ト揚幕の方を見て、吉三を見送り思入。)

傳吉 (思入あつて、)あゝ是を思ふと非業ながら、死んだ嬶がまだしもだ。(ト言ひながら佛檀へ線香を上る。)

武兵 どれ、傳吉に逢つて掛合はうか。

ト武兵衞本舞臺へ來る。此内傳吉佛檀の金を見付け取上げて、

傳吉 やあ、こりや今の金。(ト是れにて武兵衞頬冠りをした儘そつと門口を明ける、傳吉是を見て、)うぬ、まだ其處に居やあがつたか。

武兵 え、(トびつくりして後へ身體を引く。)

傳吉 此金持つて、(ト武兵衞に金包を打付け、門口をしやんとしめる。是を木の頭、)をとゝひうせろ。

ト門口を押へる、武兵衞は百兩包を拾ひびつくり思入、四つ竹節通り神樂にて、 ひやうし幕

四幕目

新吉原日本堤の場
同丁字屋二階の場
廓裏大恩寺前の場

(役名 ―土左衞門爺傳吉、浪人お坊吉三、釜屋武兵衞、紅屋息子與吉、研屋與九兵衞、損料屋利助、丁子屋の一重、文里女房おしづ、吉野、おとせ、花の香、花琴、花鶴、やりてお爪 新造花巻、手代十三郎等。)

(新吉原日本堤の場)――本舞臺三間後小高き土手、向う土手下の遠見、上下葭簀張の出茶屋、總て新吉

原日本堤の體。よき所に床几を直し、爰に地廻りの仕出し〇△□の三人立掛り居る。通り神樂にて幕明く。

〇 こう手前達は知つて居るか、此頃大層安い見世が出來たぜ。四百の轉寐で湯豆腐に酒一本、おまけに湯へ入れるといふのだ。何とすてきぢやないか。

△ そいつは滅法安いものだ、併し廓となると氣が張つていけねえ、行きやあ滿更そればかりでも歸られねえから、是非一枚一本と來るから、やつぱり小塚原がいゝのよ。

□ 小塚と云やあ此間、五人一座で押上つた所がみんな醉つて大騒ぎ、其中で喜三の野郎が厭みをしやあがつて、忌えましい野郎よ。

□ そりやあさうと、是から何處ぞへ、泊りを付けようぢやあねえか。

〇 手前勤めはあるのか、

□ 馬鹿をいへ、女が本物だ。

兩人 こいつは大笑ひだ、はゝゝゝゝ。

三人 さあ〳〵、行かう〳〵。

ト矢張右の鳴物にて三人上手へはひる。花道より與九兵衞羽織ぼつち尻端折にて出て來る。少し後より利助損料屋にて、縞の風呂敷を肩へ掛て出て來り、花道にて、

利助 もし〳〵其處へ行きなさるのは、研屋の與九兵衞さんぢやないか。

與九 おゝ誰かと思つたら損料屋の利助さんか、お前何處へ行きなさるのだ。

利助 何處へ行くにも氣が氣でなく、お前をどんなに搜したか知れやあしない。

與九 あゝ、此間借りた代物のことでかえ。

利助 さうさ、今日で五日になるが料錢はよこしなさらず、うちへ行けば留守で分らず、お分又例の肚胸で、代物を曲げなさりやあしないかえ。

與九 これさ何ぼ己が惡い顏でも、年中人の物を預かる所屋生業、人の代物を曲げる樣なことでは、稼業が出來ない。そんなやけな事はしない。

利助 そりやあもうなんぼお前が惡い人でも、生業が生業だけ、よもやと思ふけれど貸してから今日で五日沙汰なしにして置かれては、おいらだつて案じようぢやあないか。

與九 成程それは尤もだ、何しろ向うの茶見世へ行つて話

しをしよう。

ト矢張右の鳴物にて、兩人舞臺へ來り、床几へ掛け、

利助　さうしてあの代物は、いつたいどうなつて居るのだ。

與九　あれはかういふ譯だ、實は己が借りたのではない、何を隱さう今では下谷に逼塞をして居る、本町通りの小道具屋、以前己が得意先であつた、木屋文藏といふ人に頼まれたのだが、今では以前に替る貧乏暮し、實は己も不安心なれど、昔のよしみに否とも云はれず、無據貸した譯よ。

利助　あゝ、そりやあ今此廓で、文里々々と人の云ふ、丁子屋の一重といふおいらんの、間夫だと噂のある人の事ぢやあないか。

與九　さうよ、其文里の女房が年始に出るに、困るといつて賴むから、それでお前に借りたのだが、己も氣掛りだから如在なく、今日も催促に行つた所が留守さ、何でも見え掛りに脫がせようと方々搜して步く所さ。

利助　何にしろそいつあ飛んだ者に貸した。然しながら與九兵衞さん先の相手は見ず知らず、お前を見込んで貸した代物、私に損は掛けまいね。

與九　何のつけ貴樣に損を掛けるものか、何でも此方の方へ其女房が來たといふから、お前もちつと掛り合ひだ、土手下の吉本で、一ぺいやつて一緒に搜して下さい。

利助　その吉本は私も馴染だ。

與九　馴染とあれば、丁度幸ひ。

利助　それぢやあ直に行きませう。

ト兩人上手へはひる、花道より文藏女房おしづ、人柄のよき世話女房の拵にて出で來る。八百屋久兵衞付添ひ出で來り、花道にて、

久兵　もし御新造樣、あなたは今日どちらへ、お出なさるのでござります。

しづ　今日は無據用事があつて、廓の丁子屋迄參るわいの。

久兵　左樣でござりましたか。丁度幸ひ私も此近所迄參りがけ、其處迄お供致しませう。

しづ　おゝさうであつたか、それはよい處で逢ひましたわいの。

久兵　まづ何に致せ往來中で、ろく／＼に御挨拶も致されませぬ。向うの茶見世へ行つて、御休息なされませ

しづ　ほんに、さうして行きませうわいの。

ト矢張右鳴物にておしづ先に久兵衞付き舞臺へ來り、

久兵衛手拭にて床几の塵を拂ひ、
久兵　御新造様、是へお掛けなされませ。（トおしづ會釋して床几へ掛る。此内久兵衛自身に茶を汲持來り。）生憎茶屋の者も居りませず、おぬるうはござりませうが、お息つきにお茶一つお上りなされませ。
しづ　もう私に構はず、そなたも休息したがよいわいの。
久兵　へい／＼、左様なら御免なされませ。（ト久兵衛下手の床几へ住ひ。）扨改めてまだ御挨拶も致しませぬが、旦那様お子様方にもお變りはございませんか。只蔭ながらお案じ申して居るばかり、手前にかまけまして、存じの外の御無沙汰を致しましてござりまする。
　ト久兵衛丁寧に辭儀をなす。
しづ　親切に忝うござる、仕合せと皆息災でござんす。其の内にも私なぞは知つての通りの病身なれど、今の身の上になつてから、ほんに何處共云ひませぬが、是が御方便とやらであらうわいの。
久兵　左様でござりまする、昔に替り只今ではお家の事はあなたの手一つ、もしもお前様にお煩ひでもござりましてはそれは／＼大變でござりまする。其様にお達者におなりなされたは、矢張信心をなさる、神佛の御利益でござりませう。
しづ　ほんにそなたの云やる通り、御利益でもあらうわいの。（ト少し愁ひのこなし。）其神佛の御利益なら、私が身は厭はねど今の貧苦に引替へて、昔の身分に立返り、早うそなた衆の悦ぶ顔が見たいわいなう。
久兵　仰しやる通り然うなりましたら、どの様な悦びでござりませう。（ト思入あつて。）それに付けても申譯もなきは、悴十三郎が不始末にて失ひました百兩の金、段々と延引致し、只今にては以前に替る御身分故、どうぞして一日も早くと存じもすれど、御存じの通りの貧乏暮し何を云うても大まい百兩、心に絶間はござりませねど、つい延引致しまして申譯もござりませぬ。
しづ　それはもう云はいでも、そなた衆親子の心をば主がよう知つてござんす故、決して惡くは思ひませぬ程に、都合次第に持つて來たがよいわいの。
久兵　有難い其お詞、お主様が貧苦に迫り、御艱難遊ばすを見捨て置くは悴が不忠、それさへあるにお金の恩借。
しづ　是はしたり其様な事を、きな／＼と思ひ續け、煩ひでも出ようなら、常から孝行な十三郎案じるは知れてある、必ず苦勞にせぬがよいぞえ。

久兵　其樣に仰しやる程、猶々どうも濟みませぬ。
しづ　はて濟まぬというて仕樣がないわいの。
ト通り神樂鳥追唄になり、上手より與九兵衞、利助出で來り、おしづを見て、
與九　もし木屋の御内儀、お前の行方を一ぺんと尋ねました。(ト云ひながら前へ出る。)
しづ　お前は研屋の與九兵衞樣。
與九　おゝいゝ所で逢ひました。今日も家へ行つた所、錠がおりて誰も居ず、たつた一日と云はつしやる故、借りて上げた身の廻り、今日が日迄も音沙汰なしで、こりやあ一體どうさつしやる積りだ。(ト與九兵衞ずつと床几へ腰を掛け、居丈高に云ふ。)
しづ　御催促を受けまして面目次第もござりませぬが、一日のお約束で拜借を致しましたれど、不斷出つけぬ女子の事故、出ます次手にそれからそれ、無沙汰のかどを濟まさうと存じまして、遂々延引になりましたが、全く麁略に致す心ではござりませぬ。申して上げぬはこちらの不念、どうぞもう一兩日の中。(ト云掛けるを)
利助　あゝもし/\、それぢやあお前がお借主かえ、私しやあ損料屋の利助と云ふ者でござりますが、そりやあ幾日でも貸すのが生業だが、料錢も入れず、さうぐん/\と引張られては生業になりませぬ、
與九　お前方に口入をしたばかりで、己迄が面皮をかいて、こんな馬鹿/\しい事はない。
兩人　さあ/\脱いで貰はう/\。
ト大きく云ふ、此内始終おしづは久兵衞へ面目なき思入、久兵衞も氣の毒なるこなし、
しづ　あなた方の仰しやる所は御尤もでござりまするが、左樣なれば今日一日お貸しなされて下さる樣、お前樣からあのお方へ、どうぞお頼みなされて下さりませ。
ト手を突き與九兵衞へ賴む。
與九　どうして/\、假令此人が貸さうと云つても、もう己が不承知だ、貸す事はなりませぬ/\。
利助　私しやお前に見ず知らず、與九兵衞さんに貸した代物、當人があゝ云ふからは、もう片時も貸されねえ。
兩人　さあ/\、脱ぎなせえ/\。
ト兩人おしづに立掛る、おしづは脱ぐまいと三人爭ふを、久兵衞支へておしづを圍ふ、兩人見て、
與九　これ/\とつさん、貸した物を取らうといふに、邪魔をしてはいけませぬ。

利助　お前方の知つた事ぢやあない、往來の者なら通らつせえ。

兩人　さあ〳〵、退いてゐな〳〵。

ト又おしづへ掛るを、久兵衞支へて、

久兵　まあ〳〵待つて下さりませ。何か樣子は存じませぬが女儀の事なり殊には往來、どうぞ待ちにくうもござらうが今日一日の所を待つて上げて下され。私がお願ひ申しまする。(ト是にて兩人何うしようといふ相談のこなし。此内久兵衞はおしづを介抱しながら)御新造樣、私が惡い樣にははからひませぬ程に、落着いておいでなされませ。

しづ　久兵衞殿、面目なうござるわいの。(ト俯向き居る。)

與九　もし、お前が達て頼みなさるものだから、損料屋さんに待つて貰ふ樣に云ひませうが、只はどうも云はれない、今日で五日の損料を、殘らず爰で拂ひなせえ、さうした事なら頼んで遣らう

與兵　そりやもう隨分拂ひませうが、して其損料は何程でござりますな。

利助　さうさ、身ぐるみ一緒で一日が三分といふのを一朱引いて、二分二朱宛、五日で丁度三兩二朱、たつた今貰ひませう。

久兵　これは高いものだなあ。

利助　惡くすりやあ着逃を喰ふから、其處らの差引勘定して、澤山取らにやあ生業にならねえ。

與九　さあ、待つて遣るから料錢を拂ひなせえ。

久兵　さあ、其損料は。(ト久兵衞當惑の思入にて、もじもじして居る。)

與九　お前、金はないのかえ。

久兵　はい、爰に持合せはしかも小錢で、二百四五十より外はござりませぬ。

ト云ひながら懷より財布を出し中より錢を出し見せる。

與九　えゝ何の事だ、すつ込んで居やあがれ。

ト久兵衞を突倒す。

利助　飛んだ交返しで暇がいつた。さあ此上はおかみさん。湯もじ一つになつて下せえ。

ト利助おしづに立掛る。

しづ　其處をどうぞ。(ト利助に縋つて頼む。)

利助　それぢやあ、勘定しなさるか。

しづ　今と云つては、どうも爰に。

與九　但しは着物を脱ぎなさるか。
しづ　さあそれは、
兩人　さあ、
三人　さあ／＼／＼。
兩人　あゝ面倒な、脱ぎなせえ。
　ト兩人又おしづに掛るを久兵衛支へる、與九兵衛は久兵衛を引附け、利助はおしづを引立てる。此以前より、上手へ紅屋の伜與吉窺ひ居て。
與吉　いや其勘定は、私がして進ぜませう。
兩人　どうしたとえ。（ト是にて皆々ほぐれ、與吉床几へ住ふ。）
しづ　（與吉を見て、）そなたは弟、あゝ面目ない／＼。ト
　おしづ其儘控へる。）
與九　もし／＼、お前何處のお方か知らないが、外の借貸とは違ひますよ。悪く口を利きなさると、目串は抜けませぬぞ。
利助　大概の事なら見ぬ振で、行きなさるのが上分別、それともお前が料錢を、見事此場で拂ひなさるか。
與吉　（思入あつて、）なるほど私が年が行かぬから、飛んだ口を利出して、跡で後悔しようかとお前方の其御異見、然し御念には及びませぬ、滿更お前方にも損を掛けまいから、まあ落着いて居なさるがいゝ。
與九　そりやあ大きに有難うござります。
利助　お禮から先へ申して置きます。
與吉　（こなしあつて、）もし姉樣、疾から返さう／＼と心に思へど遂それなり、日外お借り申した此紙入、（ト懷中より紙入を出し、）長く大きに有難うござりました、是はお前にお返し申しまする。其中にはお前から小遣ひに下さつた、お金も入つて居りまする。それで勘定してお遣りなされませ。
　ト與吉紙入をおしづに渡す。
しづ　それぢやと云うて、そなたにこれを。
與吉　はて借りた物を返すのに、いらぬ御遠慮なされますな。（トおしづに呑込ませ、）少しも早く、それで勘定なされませ。
しづ　（紙入を頂き、）弟何にも言はぬ嬉しいわいの。（トおしづ手早く紙入から出し、紙に包み、）さ與九兵衛殿、三兩二朱渡しまする。慥に請取つて下さんせ。
與九　是は大きに有難うござります。（ト金を改め見て、思ひ掛けない料錢が、耳を揃へて三兩二朱、利助さん、結

構なお得意ぢやあないか。
利助　いやもう是なれば、いつ迄もお置きなされませ。もし縞柄がお氣にいらずば、御召縮緬でも結城紬でも、好いものと取替へて差上げます。
與九　實は私もお世話になつた、文里樣がお困りなさるとの事故、御口入をしたのだ。若し又御用がござりましたら何なりともお口入れを致しますから、旦那へ宜しくおつしやつて下さりませ。
久兵　ても、薄情な人達だなあ。（ト呆れしこなし。）
與九　久兵衛に、）これはお前さん、只今は大きに失禮を致しました。
久兵　皆さんへ宜しくおつしやつて下さりませ。
與九　そんなら利助さん、そろ／＼出掛けよう。
兩人　こりやあ大きに、お喧しうござりました。
ト行掛る。
與吉　あゝもし／＼、ちよつと待つておくんなさいまし。
兩人　まだ何ぞ御用がござりまするか。
與吉　お前方の方は勘定取れて、言分はありますまいね。
兩人　何言分がござりませう。
與吉　其方になければ此方にある。とさあ親父なれば言ひませうが、見なさる通りの若輩者、よし又若氣の向う見ずにお前方を打擲したら此場の花は咲くにもしろ、立者衆の眞似をする樣で何れも樣の思召し、斯ういふとをかしいが物に出過ぎぬ氣質故、お前方も私で仕合せ、怪我のないのを儲けにして、少しも早く歸りなさるがよい。
兩人　へい／＼、歸りますとも／＼。（ト兩人よき所迄行き。）
與九　なるほどさつぱり氣が附かなんだ、云はれて見ると違ひない、いつもいじめた其後は、打たれるのが當りまへな仕組みだ。
利助　其處を一番新らしく此儘はひる其上に、此料錢の儲けの金で、重箱へ行つて鯰でも喰ひませう。
與九　鯰とは有難いが、實は今夜誘はれて、廓へ附合はねばならねえから、己は爰で別れよう。
利助　遊びならまだ早い、鯰で精ぶん付けて行くがいゝぢやあないか。
與九　待たせるだけ罪になるわな。
利助　あんまりもてもしまいに、止しなさればいゝに。
與九　これは御挨拶。

利助　それぢやあ、これでお別れかね。

兩人　大きにお喧しうございました。(ト通り神樂鳥追唄になり、兩人足早に花道へはひる。)

しづ　これ弟、いかに貧身であればとて、面目ない今の始末、どうしようと思うた所、そなたが見えたばかりに、さのみ恥もかゝずにしまひ、このやうな嬉しいことはないわいの。

久兵　御新造樣のおつしやる通り、よい所へあなた樣がおいで下されました故、實に私迄安心致しましてござりまする

しづ　ほんに此恩は忘れはせぬ、忝いわいの

與吉　何そのお禮に及びませう。とはいふものゝ其以前は、本町で指折の小道具生業、ふとした事から文里殿が廓通ひに身上仕まつれ、それから終には見世をしまひ、逼塞なして幽なお暮し、今も今とて往來中で恥をかくのもお厭ひなされず、文里殿へ操を立て太い御苦勞なさるのが、おいとしうございまする。(トホロリと思入あつて、)何故この樣な事なれば、家へ行つてはおいでなされませぬ、便りないあなたならよけれども、紅屋と云ふ里がありながら、見捨ておきさうもないものぢやと、世間の人に言はれゝば、内の暖簾に疵が付きまする。殊更貧身の弟へ、何御遠慮がござりませう、何故其樣に隔てゝは下さりまする、お恨みに存じまする。

しづ　私がやうな者でも、姉と思へばこそ親切によう言うてたもつた。さりながら私の身は一旦木屋へ嫁入るからは、假令何の樣な難儀をしても、夫に從ふが女房の常、又此樣な惡い耳を、父さんにお聞かせ申すは不孝故、それで家へは言うては遣らぬ、必ずそなたを隔てるのではないほどに惡う思うてくれぬがよいぞや。

久兵　其御苦勞を聞くにつけ、少しも早く調達して、お返し申し度い百兩の金、私共親子故御苦勞をなさるかと、思へば生きては居られませぬ。

しづ　これはしたり、又其樣な事を言やる、今弟が言ふ通り里へ言うて遣ればどうかなれど、言つてやらぬは今も言ふ親へ惡い耳を聞かさぬ爲、まさかの時は言つて遣ればよいほどに、其事は案じぬがよいわいの。(ト與吉紙入より金を出し紙に包み、)

與吉　姉樣是は少しばかりなれど、お小遣ひになされて下さりませ。(ト出す、おしづ其まゝ突戻し、)

しづ　いや／＼是は受け難い、今も今とてあの樣に世話に

なりし其上にて、是迄貰うては濟まぬわいの。

與吉　只今も申す通り、其御遠慮が惡うござりまする。他人に貰ふといふではなし、弟の私が上げまする物、納めてお置きなされませ。

しづ　そんならそなたの詞に任せ、是は貰うて置きませうわいの。(トおしづ金をしまふ。)

與吉　もし、お前樣には今日は、どちらへおいでなされまする。

しづ　さあ聞いてたも、其方も知つて居やる通り、丁字屋の一重といふ傾城に文里殿が馴染を重ね、身重で居ると聞いた故、明暮案じる女子の大役、殊には勤の身の上なれば身二つになつたとて、手しほに掛けて育てもならず、幸ひ私に乳もあれば、萬一落したら其幼兒は、私が引取り世話しようと、其事で今廓へ行くところぢやわいなあ。

與吉　(感心のこなしにて、)悋氣は女の愼みなれど、現在夫を寐とられし女郎の許へ態々と。

久兵　世間に女子も多けれど、あなたの樣には、氣は持てますまい。

しづ　これも夫の爲なれば、嫉む心はござんせぬ。(ト時の鐘鳴る。)最早入相、そんなら私は日暮れぬ内に行きませう。

與吉　隨分道を氣を付けておいでなされませ。

しづ　そなた家へ歸つても、今日の事は父さんへ、沙汰なしにして下さんせ。

與吉　それはお案じなされまするな、申すことではござりませぬ。

久兵　御新造樣、私もこれでお別れ申しまする。

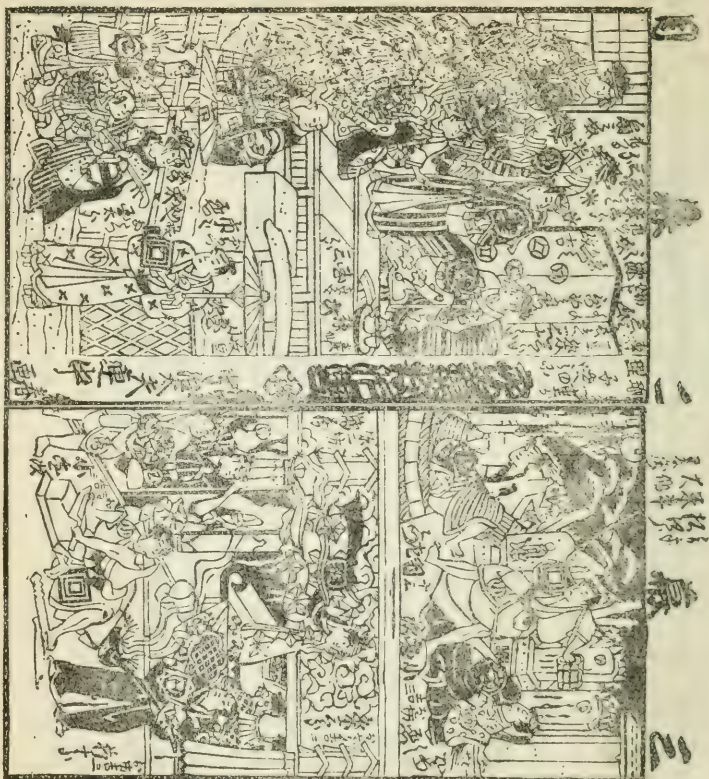
しづ　久兵衞殿、大きに御苦勞でござんしたいわいの。

與吉　左樣なればお姉え樣。

しづ　そんなら弟。

久兵　お二人樣。

三人　又お目に掛りませう。(ト唄になり、おしづは上手、與吉は花道へはひる。久兵衞殘り、思入あつて、)

久兵　いかに浮世とは云ひながら、移れば替るお身の上、木屋文藏と云はれては何御不自由もない分限、其御新造が今のお恥辱、それも仕樣がない事か立派なお里がありながら、あの御樣子では今日迄も、まだ御無心も仰しやらぬお堅い氣性の文里樣、是に附けてもわしが養子、十三郎が失ひし百兩の金子さへ御催促もなされずに、いつでもよいと情のお詞、假令よいとおつしやつても、どうも

稿下當時の繪番附の一部（五幕目と六幕目）

今の様子を見ては、こりやもう打捨てはおかれぬ。膝とも談合傳吉殿へ委しい話しをした上で、急に調達せねばならぬ。どれ、暮れぬ内急いで行きませう。

ト時の鐘になり、久兵衞下手へはひる。通り神樂鳥追唄になり、花道より釜屋武兵衞ばつち尻端折にて出て來る、跡より傳吉半纏股引尻はしをりにて出來り、花道にて、

傳吉　武兵衞様、よい所でお目に掛りました。ちよつと向うの茶見世迄來て下さりませ。

武兵　どんな用か知らないが、ちつと心の急く事がある。明日では惡いのかえ。

傳吉　何さ手間は取らせません、直分る事でござりまする。

ト言ひながら兩人舞臺へ來り、床几へ腰を掛ける。武兵衞氣のせくこなし、

武兵　さあ、父さん氣がせいてならぬ、早く言はつせえ。

傳吉　其用と云ふのは外の事でもござりませぬが、豫てお前様が私共のあまッちよをくれるなら、望み次第金を出さうと言ひなすつたが、金を取つてもなくなり易く、彼女さへありやあ其日々々を樂にして暮されるから、今迄は辛抱しましたが、此節ちつと金が入用だが、何と娘を百兩で買つておくんなさらねえか。

武兵　そりやあちつとおそ蒔唐からしだ、此間中に貴様の娘おとせに惚れて、百兩が二百兩でも出す氣だつたが、くれぬと云ふから、癇癪で一晩廓へ行つた所、丁子屋の内の一重といふ女郎を買うたが又別なもの、其處で己も乘が來て、今ぢやあ馴染んで末始終は、女房に持たうならうといふ仲だ。

傳吉　もし／＼もうようござります、其のろけに又ゆつくり聞きませう、年寄は氣が短けえ、むだな事を言はないで、眞劍な事をいつておくんなせえ。

武兵　いや無駄ぢやあない眞劍の話しだ。先度も已に無心を言ふから、これ見さつせえ此金を（ト懐より胴卷の百兩を出し）今夜其一重に遣つて、女房約束をする積り、斯うならねえ前ならば、又話し合もあつたれど、今ぢやあ百兩は扨ておき、一兩も出せねえ。

ト百兩を見せびらかしてしまふ。

傳吉　人じらしな事をしちやあいけません、無い物なら仕方がねえが、それ程持つて居なさるぢやあござりませぬか。

武兵　いやさ、あつても是は今言つた、丁字屋の一重といふ女郎に遣る金、どうして貴樣に貸されるものか。

ト是にて傳吉少しむつとしたるこなし。

傳吉　いゝ加減になさいましな、わつちも土左衞門傳吉だ、無ければならぬ百兩の金。よくせきな事だから、先刻から手を下げて頼むぢやあござりませぬか。

ト武兵衞も少し腹の立つこなしにて、

武兵　いくら頼んでも、無駄だからよさつせえ。（ト知らぬ顏をして居る。傳吉思入あつて）

傳吉　譯をお話し申さねば、私風情の貧乏人が何うしてそんな大金が入るだらうと、お疑ぐりは御尤もでござりますが。何をお隱し申しませう、私の一人の悴めが奉公先の引負で、濟さねばならぬ切ない義理、今日此金が出來ぬ日には、首でも縊つて死なにやあなりませぬ。それも年寄の事だから死ぬのは厭ひはしませぬが、さうなる日には三方四方、難儀の上に難儀を掛け、實にそりやあ浮べませぬ。これもやつぱり子故の闇、無理な事だが此お願ひ、どうぞ叶へて下さりませ。

ト武兵衞の袖をひかへ頼む、武兵衞袖を振拂ひ、

武兵　えゝしつこい、出來ぬといふに。（ト言ひながら武兵衞すつと立つ。是にて床几轉り、傳吉下へどうと倒れる。武兵衞はついと上手へはひる。傳吉下に居た儘ホツト溜息をつき、

傳吉　こりや、思案をせにやならぬわえ。

ト腕を組み、きつと思入。時の鐘にて此道具廻る。

（丁字屋二階の場）――本舞臺三間正面上の方三尺の床の間、眞中に違ひ棚、下手油單を掛けし夜具棚、此下黒塗の簞笥、上下一間の障子屋體、花道の附際へ二階の手摺を出し、すべて一重部屋の模樣。爰に一重胴拔女郎部屋着の裝、以前のおしづに煙草を吸つけ出して居る、下手に花の香番新、花琴花鶴の新造、火鉢にて茶を拵へゐる。此模樣流行唄にて道具廻る。

一重　ほんにおかみさんよう來て下さんした、久しうお見えなさらぬ故、お鹽梅でも惡いかと、此中からお噂ばかり申しくらして居りましたわいな。

しづ　私も疾からちよつと閒を見て、來ようとは思うて居たれど、何やかやと忙しなく、それ故に存じながら御無沙汰をしましたわいの。

花の　實に花魁も毎日々々、あなたの事ばかりお案じ申して、ちよつと人でも上げてくれろと仰しやつてゞござりましたが、物日々々で私も忙しく、それ故人も上げませぬが堪忍してくんなまし

花琴　此間も花魁がお文を上げるとおつしやつて、便り屋どんに頼みましたら、あひにくお宅の邊へ便りがないと、それで御無沙汰になりんしたわいな。

しづ　どういたして、其御無沙汰はお互ひのことでござんす。

花鶴　（茶を汲み持來り、）お茶一つ、おあがんなんし。

しづ　どうぞ構うて下さんすな。（ト花鶴湯呑へ茶を汲み、一重の前へ置く。）

一重　もうお前方はよいほどに、早う見世の支度をしなんし。

花鶴　そして花魁、あなた身仕舞はようござんすかえ。

花の　それは私がして上げるほどに、早う見世へ行きなんせ。

花鶴　そんなら花の香さん、頼みんしたぞえ。

花琴　左樣なればおかみさん、緩りと是に。

兩人　花魁お先へ。（ト兩人階子の口へはひる。跡三人殘り。）

しづ　ほんにまあ賑やかなこと、苦界とは言ひながら此樣な所で暮すは一生の德、女子でさへ斯う思ふもの、殿御達の來たがるは、是を思へば無理ではないわいなあ。

一重　それに付けても文里さんは、久しうお見えなさらぬが、お替りはござんせぬか、此間から夢見の惡さ、お案じ申して居りまする。

しづ　有難うござんす、別に替る事はなけれど、何を言ふにも今の身の上、人に顏を見らるゝも面目ないと、家にばかりをられまする。

花の　それにこちらの方も茶屋へ遠慮で、お出なさんせぬけれど、ちよつと格子迄も來て下さんすりやようござんすなあ。

しづ　少しでも都合がよくは、茶屋の方へは少々なりとも勘定をして、それに又お前もたゞならぬ身の上故、逢ひたいと言うてぢやけれど、自由にならぬはお金の才覺。（ト少し涙ぐみて言ふ。一重も愁ひの思入。）

一重　産は女子の大役なれば、ひよつと是限りにでもなつたならば、此世でお目に掛られぬ故、一目逢ひたうござんすわいなあ。（ト言ひさして泣伏す。）

しづ　えゝもそんな忌はしい事、あゝ鶴龜々々〳〵と袖を拂ひこなしあつて、懷より守を出し〕是見さしやんせ、お前の産に怪我のないやう、今日も淺草の觀音樣でお腹帶を頂いて來た程に、是さへあれば心丈夫に思うてゐさしやんせ。

一重　（涙ながら顔を上げ、）御親切に有難うござんす。ほんにお前樣の樣なお方が、又と一人ござんせうか、云はば憎まにやならぬ私を、それ程迄に思うて下さんすお志し、忘れは致しませぬわいな。

しづ　何のまあ憎いことがござんせう、こちの人をいとしがり、世にある昔は知らぬ事、今は此身になりさがれば愛想づかしは遊女の常、それをお前に限りては以前に勝る今の眞實、褒めてこそ居れ惡うは思はぬ、ほんに私しや妹のやうに思うて居ますわいの。

一重　不束な私をば、其樣に思つて下さんすお志し、女郎の癖かしらねども私もお前さんの心に惚れ、實の姉さまの樣に思うて居りまする。

しづ　ほんに思へば思はるゝでござんす。又お前が身二つになつたなら、其幼兒は私に預けて下さんせ、また乳も澤山出れば、どうぞ私が育て度いわいなあ。

一重　有難うござんす、どうせ私も勤の内は、手しほに掛けて育てもならず、他人の乳を賴まねばならぬ所、お前さんなら私も安心して居りまする。

花の　花魁も其事ばかり、いつそ苦勞にして居なさいましたが、それではまあ嘸お嬉しうござんせう、それに又私共は何にも知らず、お産の時はどうしたらよからうと、今から苦勞になりまする。

しづ　案じるより産むが易いと、其心遣ひには及ばねど、何でも產月迄は身體が大切、食物に氣を付けて決して高い所へなど手をあげては惡いぞや。

花の　それはお案じなされまするな、內證のおかみさんがそれは〳〵よく氣を付けて下さいまする。此間も私を呼んで、腰へ灸をすゑてやれ、必ずかるはずみな事をさせてはならぬと、度々私へ仰しやつてゞござんす。

しづ　はゝ、それではお前の身重の事、內證とやらでも知つて居さしやんすのかえ。

一重　旦那さんもおかみさんも御存じにて、產月前になつたなら直に根岸の別莊へ、病氣の體で行つて產めと、おつしやつてゞござんす。

しづ　それはまあ、よい御主人で一つの安堵ぢやわいな

あ。
　ト又流行唄になり、下手より忠七茶屋の若い者にて出來り、
忠七　もし花魁、武兵衞さんがやかましくていけませぬ、ちよつと顏をお出しなすつて下さりませ。
一重　(じれしこなしにて、)えゝもう、うつとしいぢやあないかね、なんとか言つて置いてくんなまし。
忠七　どうして、何と言つたつて歸る／＼と言つて、なかなか聞きやあしません、あゝいふ甚助な客には、消炭は實困りますよ。
一重　歸ると言ふなら、歸し申すがいゝぢやありませんか。
花の　あゝもし花魁、それでは惡うござんす、それに今夜はかのを、持つての筈ぢやありませんか。
　ト一重へ金を持つて來たらうとこなし、一重頷き、
一重　あい、今行きんせうわいなあ。
　ト花の香立つて、鏡臺を持つて來て一重の前へ直し、衣桁の補襠を取つて着せる。此内忠七おしづを見て、
忠七　おや、あなたは、文里樣の御新造ではござりませぬか。
しづ　忠七どの、大目に見て下さんせ。
忠七　是はよくいらつしやりました、久しくお目に掛りませぬが、文里樣にもお變りはござりませぬか。
しづ　有難うござんす、いつもお前の噂をして居なさんすわいなあ。
忠七　惡くではござりませぬか。
しづ　何でお前を。
花の　ほんに忠七どんの樣な人はござんせぬ。
忠七　もし花の香さん、そんな事を言つて下さいますな、二階を留められると困ります。
花の　おや、きつい己惚だねえ。
一重　(支度を仕舞ひおしづに向ひ、)お前さん直行つて來る程に、少し待つて居て下さんせ。
しづ　いゝえ、私ももうお暇しませうわいなあ。
花の　まだよいではござんせぬか、丁度御時分時でござんす。(ト一重に向ひ、少し小聲になり、)もし花魁桅田屋へでもさう言つてやりませうか。
一重　さうさ、それがようござんせう。
しづ　(花の香立掛るを引留め、)何かしらぬが、私はもうさうしては居ぬ程に、必ず心配して下さんすな。

花の　まあ宜しいではござりませんか。
一重　今宵はこちらへ、お泊りなさんせいなあ。
しづ　いえ〳〵子供が家で待つてゐるわいなあ。
忠七　なにお子さん方より旦那様が、お待兼ぢやあござりませんかえ。
しづ　ほゝ、そりや昔のことぢやわいなあ。
忠七　然し、こりやあ花魁の前では、禁句でござりましたねえ。
一重　忠七どん、あんまりなぶつて下さんすな。
　ト少しつんとする。
忠七　是は粗相、眞平御免なすつて下さいまし。もし此新造さん、どうぞ旦那へ宜しくおつしやつて下さりませ。
しづ　主もお前の家へ、濟まぬと言つて居やんすが、何れ其内少しなりとも入れる程に、お前も家へよく言うて下さんせ。
一重　（聞き思入あつて、）其事ならお案じなさんすな。今夜少し心當りがござんす故、首尾よういたら忠七どんの方は、私が道を明けませうわいな。
しづ　お前にも是迄色々世話になりながら、苦勞を掛けては濟まねども、出來る事ならよい様に。

　ト此内一重花の香に囁く、花の香立上り、菓子簞笥と人形を持來る、一重菓子を紙に包み、
一重　是はつまらぬ物なれど、子供衆にお土産に上げてくださんせ。（ト件の人形と菓子を出す。）
しづ　是はまあ何よりな物、嘸悦ぶでござんせう（トおしづ人形と菓子を仕舞ひ、身繕ひして立上る。）
一重　然し夜道を、お一人では。（ト心遣ひの思入。）
忠七　いえ、お案じなさいますな、私が大門迄お供致し、お駕籠でお歸し申しまする。
一重　どうぞ、さうして上げて下さんせ。
しづ　何の、それには及びませぬわいの。
忠七　いえ、お駕籠でお歸りなされませ。
一重　左様なれば御機嫌よく、
しづ　お前も寒さを厭ひなさんせ。
花の　どうぞ、文里様へ宜しく。
しづ　大きにおやかましうござんした。
忠七　どれ、御案内致しませう。（ト流行唄にて、忠七先におしづ階子の口へはひる。一重花の香殘り、）
花の　もし花魁、（ト一重に囁き、）ようござんすかえ、それも文里さんの爲でありんすぞえ。

一重　それは私も承知でありんす。
花岑　（下手より出て來り、）もし花魁、武兵衛さんがやかましくていけません。花巻さんが困つて居なさいますから、早くおいでなすつておくんなまし。
一重　（腹の立つこなしにて、）えゝも、忙しないことでありんす
ト一重ずつと立つて裲襠をさばく、花の香は一重の後より裲襠の襟を直してやる。花岑は上草履をよき所へ直す。三人此模樣宜しく、流行唄にて道具廻る。
（丁子屋二階の場）　本舞臺三間正面通しの襖、上の方二間襖にて見切り、此上隣座敷の心、下手折廻し一間の障子屋體、總て廻し部屋の模樣、よき所に臺の物など取散しあり、爰に以前の武兵衛立掛り居るを新造花巻抱留めて居る、遣手お爪、研屋與九兵衛下書裝新造花鶴皆々留めて居る。此の見得所作の切にて道具留る。
皆々　まあ〳〵、お待ちなさいまし〳〵。
武兵　いゝや留めるな、歸るぞ〳〵。
ト立騷ぐをおつめ留めて、
つめ　お前さんをお歸し申しては、遣手の私が濟みませぬから、どうぞ待つて下さいまし。
與九　みんな斯うして留めて居るから、もういゝ加減に了簡しなさい〳〵。
花巻　お待ちなんしと言つたら、待つてくんなまし。
花鶴　花巻さんが困りんすから、待つて上げてくんなまし。
武兵　花巻でもしつぽこでも、斯う云出しちやな了簡ならぬ、何處の國にか客ッから己を揚げぼしにしやアがつて、面も出さねえで濟まうと思やあがるか。
與九　それはお前ばかりではない、己も宵から枕と首引だ。仕方ねえから、了簡しなせえ。
つめ　斯う申しては濟みませぬが、生憎お客が落合ましたものだから、ついお粗末になりまする。どうぞ御免なすつて下さいましよ。
與九　込合候節は前後御容赦は、何生業でもお定まりだ。
つめ　ほんに花魁もどうしたのだらう、いゝ加減に來なさるがいゝぢやあねえか。
武兵　來て貰はなくつても困らねえ、もう歸るから留めるな留めるな。（ト又立掛るを花巻留めて）

花卷　おまはんも聞分が無いぢやありませんか、そりやあ花魁に當りはありませうが、何も私に科はありますまいぢやあないか

武兵　べらぼうめ、斯うなつて何奴此奴の、何で容赦があるものか。

花卷　それだつてわちきも、名代に出ておまはんを歸し申しては、あんまり手がない樣で、外聞が惡うざます、此中低の鼻が、猶々低くなりますからさあ

ト花卷少しじれて泣聲になつて云ふ。

つめ　此妓も骨を折つてをりますし、内證へ知れても濟みませぬから、どうぞ待つておくんなさいましよ。

武兵　濟むも濟まねえもあるものか、何と云つても歸るのだ、放せ〳〵。

ト又立掛るを皆々捨ぜりふにて留める、此時一重に新造付出で來り、一重武兵衞の後より留め。

一重　外聞の惡い、おまはんどうしたと言ふのだねえ。（ト是にて武兵衞一重の顔を見て、ぐにや〳〵となり。）

武兵　どうするものか、歸るのよ。（ト柔らかにいふ。）

一重　なぜそんな事を言ひなますの。（ト一重武兵衞を無理に下に置く。是にて皆々下に居て、おつめ一重に向ひ。）

つめ　お前さんも、まあどうなすつたのでございます、何ぼお客が落合つても、ちよつと顔でもお出しなさるがいゝぢやアありませんか。お馴染の武兵衞さんだからよけれ、外のお客で御覧じまし、遣手の私が濟みませぬ。

ト叩き立て言ふ。

一重　堪忍してくんなまし、實は斯うする譯ぢやあないけれど、彼方の座敷の長話で、つい遲うなりんした、惡く思うておくんなんすな

與九　何ぼ流行子のお前だと云うて、さう勿體を付けて客をじらすものぢやあない、罪になるわな。

花卷　實に花魁どんなに困りましたらう、ほんに〳〵、甚助で、（ト云掛けて口を押へて。）いえ、じんじやうで柔形な、武兵衞さんの樣な客人だと、わちきなら命でもほんに遣る氣になりますする、馬鹿らしいぢやアありませんか（ト花卷脇を向いて舌を出す。一重は武兵衞に向ひ。）

一重　主もまあ大概ぢやアありませんか、宵にあれ程迄、今夜は茶屋のお頼みで、義理一遍の客人だから、少し手間が取れませうが、あちらの座敷をしまつてからすこし話しがありますと、申して置いたではありませんか。

ト是にて武兵衞心の解けしこなしにて、

武兵　それだと云つて寄ッから少しも顏を出さないで、こんな者を名代に押付けておかれては、何ぼ己でも腹が立つ。（ト是を聞き花卷腹の立つこなし。）

花卷　おや武兵衞さん大概にしなまし、散々わちきに氣を揉ませこんな者もすさまじい、何ぼ私の顏が足の裏に似たと云つて、あんまり踏付にしてくんなますな、馬鹿馬鹿しいじやあつくやあ。

一重　これはしたり花卷さん、いゝ加減にしなましよ。

花卷　それだと云つてあんまりだから、悔しくツてなりせん。（ト大聲にて泣出す。）

つめ　えゝ此子はどうしたといふのだ、己等の前でお客へ對し、ふざけた事をしなさりやあ、此分にしちやあ置かれねえ。（トおつめ煙管を持つて立掛るを、與九兵衞留めて。）

與九　こう／＼折角座敷が靜になつて、是から旨く吞直さうと思つた所で、折檻されては此場の興がさめるから、どうぞ了簡して遣つて下せえ。

　トおつめ呟きながら下にゐる。

武兵　こりやあ己が惡かつた。（ト紙入より金を出し、紙に包み。）中直りに花卷さん、煙草でも買つて下せえ。

　ト花卷の前へ投げて遣る。

つめ　およしなさいましよ、癖になりますわね。

花卷　（金を見て、）おや／＼是は大きに有難う、ほゝゝゝ。（ト笑ひながら金をしまふ。）

與九　いや呆れたものだ。泣くかと思へば直に笑ふ。まことに重寶な顏だ。

花卷　いえ、私の泣くのは癖でありんす。

新造　おやまあ、どうしたらよからう。

花卷　花魁、武兵衞さんへ宜しく。

　トおつめ新造兩人に向ひ、

つめ　お前方はもうようござんす、早う見世へ行きなさんせ。

花卷　そんならおつめどん、賴みましたぞ。

新造　どれ、見世へ行きませう。

　ト兩人立上る。花卷も立上り、

花卷　もし、私あ髮部屋に居るから、かのが格子へ來たらちよつと知らしてくんなましよ。

つめ　花卷さん、見世で買喰はならねえよ。

花卷　おやおつめどん、總知らずだねえ。

與九　何だかちつとも分からない。

花巻　じれツたいんだよう。(ト大きく言ひ、)皆さん、おや
かましう。
三人　左樣なれば御機嫌よう
ト三人下手へはひる、跡合方になり、此内始終一重は
煙管を突き、おつめ思入あつて、
つめ　もし花魁、お前さん先刻から何を鬱いでゐなさいま
す。私も遣手の役目だから言ふのは知つて居りますが、
外の者の居る前で言はれたらばお前の恥、そこを思つて
大目に見れば、いゝかと思つてふてなさるが、もう大概
にしなさいましな。
與九　これ／＼そりやあ云ふだけ野暮だ、此一重には文里
といふ惡足のあることは、此廓は言ふに及ばず世間の人
迄知つて居るのだ。どうして外の客が手に付くものか。
武兵　それを馬鹿のろくなつて來るのは、云はゞ此方が間
抜といふもの、逆も嫌がられる位なら、爰ばかり女郎屋
といふではなし、此廣い廓内、外へ榮を替へて遊ばうよ。
一重　もし武兵衞さん、人を疑ぐるも大概にしなさんせ、
二言めには文里さんの事を言はしやんすが、切れてしま
へば未練もなし、又一人の男を守れぬは替る枕の勤の習
ひ、それを兎や角う云はしやんすは、あんまり分らぬで
はありませんか。
つめ　それ程文里さんの事に就いて思ひ切りのいゝお前さ
んなら、何故鬱いでゐなさいます、替る枕が常ならば、
お客を大事になさいましな。
一重　お前達が其樣に私の事をいひなんすが、勤めは苦勞
にはなりいせん。私ぢやとて親もあり、兄弟もござんす
から、鬱ぐ事もありいせう。
與九　いや／＼これは大笑ひだ。金を出して遊びに來て、
親兄弟の述懷を並べ立つて言はれては、こんなうまら
ないことはない。
武兵　(思入あつて、)いや／＼こりやあ此方が惡かつた、
其親兄弟の話しに就いては、先度一重が己への無心、一
人の弟が道樂で何かむづかしい、譯のある金を遣つた其
穴を、是非とも埋めねばならぬから、母親が氣を揉むの
で其身の年季を入れねばならぬと、涙をこぼして己への
頼み、それ故百兩持つて來たが、おぬしの心を疑ぐつて、
實は今迄出さずに居たが、さう事が分るからは、此百兩
はおぬしに遣らう。(ト懷より、胴卷の百兩を出す、)ちと
受けさせるやうだけれど、以前己が世話をした女があつ
たが、その親父、土左衞門爺い傳吉といふ者に、先刻途

中で無心を言はれ、貸さにやあならぬ義理なれど、それをことわり此百兩、おぬしに遣らうと持つて來た、何と、心中者ぢやあねえか。

つめ　ほんにまあ御親切な、よく／＼に思へばこそ、誰が百兩といふ金を下さるお方がござりませう、是ほど實のある武兵衞さんを、粗末にすると罰が當りますよ。

一重　有難うござんす、お前さんへ此樣な事をお願ひ申しては濟みいせんが、知つての通り是ぞといふ爲になるお客はなし、お願ひ申すはよく／＼な、事だと推してくんなまし。

與九　然し其百兩は結納替り、今日からしてはお前の身體、勤めの內でも女房同然、武兵衞さんの云ふ事は、是から何でも聞かずばなるまい。

武兵　そりやあ假にも大まい百兩、此の儀只は遣られねえ、其方からも己に又慥な心中立てゝ見せやれ。

一重　心中立てろと言はしやんすが、浮氣らしい事をするより互ひにまことの心と心、是が何より誓ひでござんす。

與九　それは何より胡亂なものだ、その賴みにする心といへば、嘘をつくのが生業だもの、何の當になるものか。

一重　お前迄が私の心を、疑ぐつてゐなさんすは、誓を立てろと言ひなんすのかえ。

武兵　いゝやそれはおぬしが不承知なら、かれこれに言はねえが、ちつと氣障な事があるから、それで己も斯う言ふのだ、忘れもしまい此間、おぬしが腕の入黑痣、ちよつと見せろと手を取つたら、そんな野暮な事をするなとけんもほろゝの挨拶故、それなりに濟ましたが、今夜は一番流の身の塵芥のねえ所をそゝぎ上げ、水際立て貰ひたい。

つめ　なるほどこれは武兵衞さんが、氣にお掛けなさるも御尤もでござんす、花魁こりやあ面晴に、さつぱりとした心中を、お立てなさらずばなりますまい。

一重　それ程まで私の心を、疑ぐつて居なんすならようざんす、慥な心中を目に掛けませう。（ト有合ふ鏡臺の引出しより剃刀を出し、煙草箱へ小指を當て）さうぢや。（ト切らうとするを、武兵衞あわてゝ留め）

武兵　こりやあおぬしは、どうするのだ。

一重　私が心の誠をば、お目に掛けるのでござんす。

武兵　いやそんなことで指は切れねえ、しら／＼しい野暮をするな。（ト剃刀をもぎ取り、）可愛いおぬしに指を切ら

せ、片輪にしてつまるものか。
一重　さうして其心中は、どうすればよいのでありんす。
武兵　己が望みは外にある。（ト言ひながら一重の手を取り、袖をまくり。）さ、この文里二世の妻を消し、己が名を其通り、彫替へて貰ひたい。
　ト きつといふ。一重思入あつて、
一重　それぢやというて
與九　それぢやあ文里に、心が殘るか。
一重　さあそれは。
兩人　さあ。
三人　さあ〳〵〳〵。
武兵　きり〳〵と返事をしろ。（トきつと言ふ、一重當惑のこなしにて思入あつて。）
一重　もう金は入りいせん。
武兵　どうしたと、
一重　假令今は切れたにせよ、お世話になつた文里さんの、お名を金故消しましては、世間の手前がありんすから、金はお貰ひ申しんすまい。（ト件の百兩を突戻す。）
つめ　そりや何を言ひなさいます、お客へそんな事を言つて濟まうと思ひなさんすか、遣手の私が濟まぬわいなあ。
一重　えゝも、濟むも濟まぬもいりいせん。
　ト 脇を向き知らぬ顏をして居る。
つめ　てもまあ、呆れたものだねえ。
武兵　それ程入らぬ金ならば、どれ〳〵持つて歸りませう。
　ト 金を懷へ入れ、立上るをお爪留めて、
つめ　まあ〳〵お腹も立ちませうが、私の方から又お詫の、致し樣もございますから、どうぞ待つて下さりませ。
與九　こう〳〵留めなさんな〳〵、歸すも歸さぬも、あの女の了簡にあることだ。
一重　おつめどん、歸ろと言ふなら歸し申すがようざんす。
武兵　歸らなくつてどうするものか。（ト立蹴に臺の物を引くり返し。）阿魔め、覺えて居ろ。
　ト 枕を持つて立ちかゝるを、與九兵衞是を留める、一重脇を向き煙草をのみ居る。おつめはちらかしたる皿小鉢を片附け居る。此模樣流行唄にて、道具廻る。

（丁字屋二階の場。）本舞臺三間正面上の方三尺の床、下手上に地袋のある違ひ棚、上下一間の障子屋體、總て以前の部屋の隣座敷の體。よき所にお坊吉

三中月代寐卷裝にて腕組なして居る、吉野胴拔女郎の拵へ煙草を吸付けて居る。此見得端唄の合方にて道具留る。

お坊　先刻から隣の樣子、馴染の客へ一重が無心、其金高も大まい百兩、何であんなに金が入るか。

ト合點の行かぬこなし。

吉野　なに、ありやあ斯うざます、お前も知つてゐなさんす文里さんといふお方が、今ではしがない暮しになりんした故、方々は塞がるし其道も明けたり、又文里さんに貢ぎなさんす氣で、あの厭な武兵衞の機嫌を取つて居なさんすのでありんす。

お坊　そりやあ何にしても氣の毒なことだ、さういふ身分になり下るも、元はと云へば妹一重、己も以前は妹の緣でお世話になつたこともあつた。及ばずながらどうかして、恩返しをして上げ度いものだ。

ト お坊吉三思案のこなし。

吉野　私も都合が出來るなら、どうぞして上げ度いが、南と違つて此方へ來ては是ぞといふ客もなし、人の事より私の身の上、物前每に困る故心に思ふばかりで、ほんにじれツたい樣でありんす。

お坊　又此己も其通り、いゝ目が出りやあどうでもなるが、知つての通り間が惡く、手前の世話で斯うやつて居るが、實は手前にも氣の毒よ。

吉野　何だね他人行儀な事を言つて、好で苦勞をするのだから、お前の事はどうでもいゝが、一重さんの事が氣になつて、どうしたらようおざりんせう。

ト吉野ぢつとなる、お坊吉三思入あつて、

お坊　いくら苦勞をした所が、先立つものは金なれば、知らぬ昔と諦らめて、不實な樣だが捨てておくがいゝ。

吉野　ほんにさう思ひ切るより外、仕方がありんせんね。

ト吉野吉三に寄添ふ。

武兵　(上手にて、)歸る〳〵、留めるな〳〵。

新造　それでは惡うおざりんす。

一重　歸りなさんすなら、歸し申しなよ。

武兵　歸らねえでどうするものだ。

ト流行唄になり、上手より武兵衞腹の立つ思入にて、疊を蹴立て出て來る、後より新造捨臺詞にて留めながら出て、下手階子の口へはひる。此内吉三武兵衞の後を見送り、

お坊　吉野、一重の客はあれか。

吉野　あい、あれが武兵衛といふのでありんす。
お坊　なるほど、生利らしい野郎だなあ。
吉野　きざな人だが、これはしつかり持つて居るぞ。
　ト金はあるといふこなし。
お坊　さうだらうよ、ちよつと無心に百両も手放さうといふ客だから、餘程懐がいゝと見える。あゝこれ、どうぞ仕様はねえかしらぬ。（トお坊吉三腕を組んで思入）
吉野　どうして／＼恐しい強情だから、あゝ言出しては、なか／＼聞くことではござんせん。
お坊　（此の内思入あつて、）然し今夜も彼是引過ぎ、何處へ歸るかしらねえが、此物騒だと噂のあるに、百両といふ大金を持つて夜道をするといふは、よつ程吐胸のいゝ野郎だ。さうして彼奴の家は何處だ。
吉野　たしか家は、本郷だといふことだわな。
お坊　それぢやあ家は本郷か。
吉野　あい。
お坊　むゝ本郷ならば歸る道は。（ト思入あつて）さうだ。
　トずつと立上る。
吉野　えゝもびつくりするわえ、どうしたのだえ。
お坊　南無三、己らあ飛んだことをした。今夜は友達の民がお袋の通夜をしてゐる積りだつた。さつぱりと忘れたが、今から行つてちよつと顔を出して來よう。
　トいひながら立上るを、吉野引留めて、
吉野　お前今夜は遅いから、明日にしたがようざます。
お坊　いや、今夜行かにやあ義理が濟まねえ。
　ト帶をしめながら行掛る。
吉野　そんならどうでも、行きなんすのかえ。（ト言へども吉三は始終向うへ思入あつて）
お坊　是より直に、後追ツかけ。
吉野　え。ト思入、（吉三心附き氣を替へ）
お坊　いやさ、後を氣を附けろよ
　ト云捨て階子の口へはひる　吉野も心ならぬ思入にて吉三の後を追うて階子の口へはひり、此道具廻る。本舞臺元の座敷部屋の道具へ戻る。と一重片手にて襷を押へながら湯呑にて酒を呑みゐる。新造両人一重を介抱して居る。
花琴　もしおいらん、癪の起るにお酒は悪うありんすぞえ。もう止しにおしなんし。
花鶴　お心持が悪ければ、玉屋へ袖の梅でも取りに遣りんせうかえ。（ト色々心遣ひのこなし。）

一重　もう快うおざりんすから構うてくんなますな。ほんにお前方も私の樣な者に使はるゝ故、色々な苦勞をしなさんす、堪忍しておくんなんし。

花琴　花魁としたことが、私共へ其の御遠慮には及びませぬ。

花鶴　お心遣ひをしなんすと、却つて惡うおざんすから、氣を靜めておいでなんし。

ト云ひながら兩人介抱する。

吉野（下手より出來り、）一重さん、委しい樣子は殘らず部屋で聞いてをりんしたが、折角辛抱しなさんしたも、今となつては無駄となり、實にお前のこゝろの內を、推量して居りんす。

一重　それもぬしの爲なれば、少しも厭ひはせぬけれど、あんまりな武兵衞の言條悔しうおざりんす。

ト身をもんで悔しきこなし。

吉野　尤もでおざりんすが、そんなにお前氣を揉むと、必ず體に障るから、氣を揉まずにおいでなんし。

一重　生中生きて居ようより、いつそ死にたうおざりんす。

吉野　えゝつまらない、死ならなどゝそんな氣を出しなんすな。（ト一重を介抱する。）

一重　えゝじれッたい。（ト湯呑を打付け、）どうしたらようおざりんせう。

ト泣伏す、吉野初め新造二人介抱する。流行唄には道具廻る。

（大恩寺前の場）ー本舞臺三間後一面の藪疊、此奧向う廓を見たる田圃の遠見、上下に藪疊、すべて大恩寺前通り夜の體。時の鐘にて道具留る。と時の鐘ばた〳〵になり、以前のお坊吉三尻端折一本差にて走り出で、直に舞臺へ來り向うを窺ひうなづいて頰冠りをなし、下の方の藪蔭へ忍ぶと、時の鐘端唄の合方になり、花道より以前の武兵衞出て來り、花道にて、

武兵　あの鐘は最う八つか、夜は短くなつたな。おゝ金と云やあ此春だつたが、土左衞門爺いが門ぐちで思ひ掛なく拾つた百兩、ほんに夢に牡丹餅でそれを貸出し金が殖え、僅か一年立つか立たぬに百兩位はいつ何時でも、家に遊んで居る樣になつて、今夜も一重が無心故、百兩遣つて文里が手を切らせようと思ひの外、得心せぬ故遣ら

なんだが、ふられて歸る果報者だ。（ト舞臺へ來り向うへ思入あつて）あの與九兵衞はどうしやあがつたか、察する所己をまいて、何處へか上つたと見える、何にしろ物騷だといふに、夜道に百兩險難なものだ。

　ト此内お坊吉三出て後に窺ひ居て、

お坊　險難なら、預かつてやらう。

武兵　え。（トぎよつとこなし。）

お坊　いゝや、今われがぬかした百兩を、預らうといふことよ。

　トお坊吉三一腰を拔き、武兵衞の目先へ突付ける。

武兵　はあ、大恩寺前は物騷だと、疾から噂に聞いて居たが、そんならお前は物取かえ。

お坊　おゝ知れたこと盜人だ、我が百兩持つてゐるを、確に知つて附けて來た。隱さず爰へ出してしまやれ。

　ト是にて吉三頰冠りを取る、武兵衞是非がないといふ思入。

武兵　さう見拔かれりやあ仕方がねえ。いかにも百兩持つて居るが、只此金を渡すのはあんまり智慧がない樣だが見込まれたれば命が大事、素直に百兩上げませう。

　ト云ひながら百兩出し、吉三へ渡す。

お坊　さう又綺麗に出されちやあ、取り憎いのは人情だが、命を元手にするからにやあ、さうかと云つても返されねえ、こりやあ己が貰つて置かうよ（ト金を懷へ入れる）

武兵　金は渡した其替り、命と着物は助けて下せえ

お坊　身ぐるみ脫げと云ふとこだが、金を器用に渡したから、命と着類は土産に遣らう。

武兵　そりやあ忝ねえ。そんなら是でお別れ申します。ああ、初春早々

お坊　え。（ト兩人顏見合せ思入。）

武兵　とんだ厄落しをした。（ト時の鐘にて武兵衞思入あつて上手へはひる。お坊吉三後を見送り、）

お坊　どれ、更けねえ中に行かうか。

　ト行掛るを、此以前より傳吉後に出掛り窺ひ居て、

傳吉　もしお侍樣、ちよつと待つて下さりませ。

お坊　え。（トびつくりなし、月影にて傳吉を透し見て、）己を呼んだは、何ぞ用か。

傳吉　へい、ちよつとお願ひがござりまする。

お坊　なに、己に願ひとは。

傳吉　まあ、下においでなされて下さりませ。（トお坊吉三思入あつて下に居る。）さてお願ひと申すは外でもござり

ませぬが、只今お手にはひつた百兩を、何とお貸しなされては下さりませぬか。

お坊　や、すりや今の樣子をば。

傳吉　後で殘らず、聞いて居りました。

お坊　むゝ。(トちつと思入。)

傳吉　何を隱しませう、あの百兩は私が晝から、借りよう借りようと附けてをつた金でござりまする、それがお前樣のお手にはひりまして、私も望みを失ひ、無據御無心を申すのでござりまする。

お坊　こう〳〵爺さん、そりやあたゞ取つた金故、たゞ貸せといふのだらうが命を元手に取つた金、それも餘儀ない入用故、氣の毒ながらこればかりはお斷りだよ。

傳吉　さゝ、さうでもござりませうが、私が方にもせつない譯、まあ一通り聞いて下さりませ。私の實の忰が養子先から奉公に出まして、主人の金を百兩失ひ、私が所へ引取つてある所、見なさる通りの貧乏人、大まい百兩といふ金故、盜み騙りをしたら知らず、所詮出來ぬ金なれば、其御主人といふ人が、それは〳〵よい人で、今では幽な暮しなれど失うたのは是非がないと、其日の烟りに困る身で、遂に一度催促をさつしやつた事はござりませぬ。それだけ猶更一日も、早くと思へど出來ぬは金、主人の難儀養父の迷惑、見て居られぬが實の親、どうぞ不便と思召し、無理な事だが、お侍樣、私に貸して下さりませ、娘を賣つても其金は、きつとお返し申しまする、どうぞ貸して下さりませ。

ト手を合せお坊吉三へ賴む。

お坊　そんな哀れッぽい事を言ひなさるが、此方も義理ある其人に、貢ぎ度いばかりに、彼奴を脅して取つた金、幾ら言つても無駄だから、出來ねえむかしと諦めねえ。

傳吉　御尤もではござりまするが、其處をどうぞお慈悲をもつて、

ト　お坊吉三へ縋つて賴むを振拂ひ、有合ふ石に腰を掛け、

お坊　これ爺さん、見りやあこなたも年寄だが、眉間の疵を見るに付け、堅氣と見えぬぐれ仲間、出して遣りてえものなれど、露顯すりやあもうそれ迄、身を捨札の高臺へ首を載せにやあならねえ仕事、素人ならば不便と思ひ小遣ひ位はくれもせうが、拵へ事の哀れな話し、そんな甘口な筋ぢやあ、鐚三文でも貸されねえ。

傳吉　そんなら是程お願ひ申しても、どうでも貸しては下

さりませぬか。

お坊　知れたことだ、己をたゞの者だと思やあがるか、十四の年から檻へはひり禁足なしたも幾度か、悪い事なら抜目はねえ。汝等にけぢめをくふ様な、そんな二才ぢやあねえぞ、人を見そこなやあがつたか、はッつけ親仁め。

ト此内傳吉此儘では行かぬといふ思入あつて、お坊吉三を見てせゝら笑ひ、

傳吉　小僧、もう臺詞はそれ限りか。

お坊　何だと。（トきつと思入。）

傳吉　こんな臺詞も幾度か、貸さぬとあればもう言ふめえと此の如く珠數を掛けて信心するが、もう是迄。（ト珠數を出し二ツに切つて投付け）いかにも汝が推量の通り、己も以前は悪黨だ、若い時から性根が悪く或は押借ぶつたくり、暗い所へも行飽きて今度行きやあ百年め、命の蔓のさんだんに風を喰つて旅へ出て、長脇差の附合に場業の上の立引にやあ、一六勝負の命の遣り取り、其時受けた向う疵、悪事に掛けちやあ仕飽きた身體、うぬらが様に駈出しのすり同様な小野郎とは又悪黨の質が違ふ。それ程悪い身性でも、不圖した事から後生を願ひ、片時放さぬ肌の珠數、切つたからにやあ以前の悪黨、すへよく己に渡さにやあ、腕づくでも取らにやあならねえ。

お坊　ぬ、さうぬかしやあ命がねえぞ。

トきつとなつて立上る。

傳吉　まだ餓鬼同様にひよむきもかたまらねえ分際で、ふざけた事をぬかしやあがるな。

お坊　何をこしやくな。（ト切つて掛るを、傳吉身をかはし）

傳吉　大人そばえをしやあがるな。

ト垣根の卒塔婆を取り打つて掛る。ちよつと立ち廻つてきつゝ見得、誂の鳴物になり、兩人宜しく立廻りの内吉三目貫を落す事、トゞ傳吉卒塔婆を打落され、一刀切られて糊紅になり。

人殺しだ〳〵。

ト云ひながら逃廻るを吉三追廻して切付け、トゞ傳吉を切倒し乗懸つて止めをさす、吉三ホッと思入。傳吉仕掛にて喉へ刀の通つた儘すつくと立上り、よろ〳〵となり吉三をきつと見て、ばつたり倒れ落入る。吉三刀の糊を拭ひ、

お坊　思ひがけねえ、殺生をした。

ト言ひながら刀を鞘へ納める。此時人音する故吉三下手の藪へ小隠れする。時の鐘合方になり、花道より十三郎提灯を持ち、跡よりおとせ出で來り、

とせ　私しやきつう胸騒ぎがしてならぬが、父さんはどうなさんしたか、案じられるわいなあ。

十三　もうそこら迄行つたら、お目に掛るであらうわいの。(ト提灯にて四邊を見て)何にしろ道がわるい、辷らぬ樣にするがよいぞや。(ト云ひながら兩人舞臺へ來り、おとせ糊に辷る)それ見たことか、それだから云はぬ事ではない、氣を付けて歩くがよい。(ト提灯の明りにて死骸を見付)何やら人が倒れて居るが。(トよく見てびつくりなし)や、こりや父さんが。(ト兩人駈け寄つて死骸に取付き、)

兩人　父樣いなう／＼。(ト呼生けながら、十三郎涙を拭ひ、)

十三　えゝこれ、酷たらしう父さんを、何者が殺せしか。(ト思はず四邊を見て、吉三の落せし目貫を見付け取り上げ提灯の明りにて透し見て)死骸の傍に落ちたるは、吉の字菱の片々の目貫、

ト此時上手の藪を押分け、以前の武兵衛出で、

武兵　そんなら先刻の泥坊が、落した目貫は、後日の證據に。

ト此内吉三はそつと花道へ行き、是を聞きえいと礫を打つ、此の礫提灯に當り灯り消る、是にて十三郎目貫をくはへおとせを圍ひきつと思入、藪の中より武兵衛片足踏出すを木の頭、吉三は逸散に花道へ走りてはひる。舞臺の武兵衛十三郎向うを見送る。時の鐘忍び三重にて、

幕

五幕目　根岸丁字屋別莊の場

(淨瑠璃)　一重文里が子故の闇に　夜鶴姿の泡雪　(花園連中)

(役名――木屋文里、丁子屋長兵衛、若い者喜助、醫者養仙。吉野、初瀬路、飛鳥野、花の香、花琴、花鶴、花巻、文里女房おしづ、文里娘おたつ、忰鐵之助等。)

（丁字屋別莊の場）――本舞臺四間通し常足の二重、雪の積り　本庇本緣付、正面床の間地袋戸棚腰張りの茶壁三尺口太鼓張の襖出入、此前側一面に塗骨障子、上の方雪の積りし梅の臺幹、此前に石の井筒、いつもの所枝折戸、下の方淨瑠璃臺の隣の二階家、此の下建仁寺垣、舞臺花道共雪布を敷き、總て初音の里、丁字屋別莊の體。爰に二幕目の初瀨路、飛鳥野、花卷、花琴、花鶴、禿ゆかり、たより皆々紙撚の百度緡を持ち、跣足にて庭の內を百度を踏居る、此見得一中節模樣の端唄にて幕明く。

皆々　南無妙法蓮華經〳〵

ゆか　早く花魁のよくなりますやう。

たよ　御利益をお願ひ申します。

兩人　南無妙法蓮華經〳〵々々。

飛鳥　ほんに此子達は感心だよ。嘸一重さんが聞きなんしたら、嬉しい事でありんせう。

花琴　話してお聞せ申したいが、病ひのせゐか此頃は、直に淚をこぼしなんす故。

花鶴　此子達の事を話したら、どんなに泣きなんすか知れんせん。

初瀨　そりやもう一重さんばかりぢやない、私ら迄もあの樣に、二人が眞に御祖師樣へ、お願ひ申す心根を思ひ遣ると悲しくなりんす。

飛鳥　泣顏をするは惡いから、泣くまいと思ひゝしても、つい淚が出てなりんせん。

花卷　もう〳〵そんな事をお言ひでないよ。私なぞは泣蟲だから、直に淚が流れて困りんす。

花琴　おや、お前淚が流れるかえ。

花卷　私だつて流れなくつてさ。

花琴　私やあ散蓮華の樣に、溜つてゐるかと思ひした。

花卷　花琴さん大槪におしよ、何ぼ私が中低だつて、淚が水溜の樣に溜るものかね。

初瀨　溜らない事はありんせんよ、此間花卷さんが仰むけに寐て居なんした時、橫山町の若旦那がお出なすつて、成程花卷は中低な顏だ、どの位低いか酒をついで見ろと仰しやつて、低い所へ酒をついだら、丁度二銚子半、五合入りんした。

花卷　えゝも默つて居ればいゝ事にして、五合入といふ顏が何處にあるものかね。

初瀨　外にはないが、爰にありんすよ。

花巻　私しやあもう、聞くこつちやあないよ。ト花巻立掛るを、初瀬路突く、是にて仰向けに後へひつくり返る、禿是を見て、

ゆか　おやまあ、どうしようねえ。

兩人　南無妙法蓮華經〳〵。〈ト禿兩人花巻を拜む眞似なす。花巻起上り、〉

花巻　えゝ、子供迄馬鹿にするか。〈ト雪を取つて禿に打付ける〉

吉野　〈奥より出來り、〉これさ、お前方はどうしたものだ、一重さんが昨日より今日は惡いと云ひなんすに、ちつと靜にしなんしよ。

花巻　それでも私の事をみんなが寄つて、中低だといつて。ト泣きながらいふ。

吉野　何も中低でないものを、中低だと言ひはしまひし、そんなに泣かずともいゝぢやありませんか。

花巻　それだつて私しや、くやしくつて〳〵なりいせんものを、

吉野　悔しいと云つたとて仕方がないわね、まあ、窪溜りの涙でもお拭きよ

花巻　えゝも吉野さん迄おんなじやうに、覺えてお出なんしヨウ。〈ト花巻上手へはひる。〉

吉野　ほんに花巻さんの樣に氣を持つと、苦勞がなくてようありんす。

飛鳥　あれがほんの、後生樂といふのでありんすね。

養仙　〈障子の内にて、〉あいや〳〵、送るには及びませぬ。ト障子を明け、養仙長合羽一本差し、醫者の拵にて出て來る。

飛鳥　これは養仙樣、雪の降りますのに、御苦勞樣でござります。

養仙　いや、雨と違つて雪が降ると、いつ迄も道が惡くつて、醫者などには甚迷惑だて。

花琴　もしお供さん、お歸りでありますよ。

供　はい〳〵畏りました。ト下手庭口より紙合羽を着たる供、爪掛付の下駄と澁蛇の目の傘を持出て來り、足駄を直す。

養仙　左樣なら、大事になさい。

皆々　有難うござります。

養仙　どりや、藤寺へ廻つて行かうか。〈ト合方にて養仙花道へ行く、後より吉野付いて來て、〉

吉野　もし養仙さま、お待ちなすつて下さいまし。

養仙　はあ、何ぞ用でござるか。

吉野　外の事でもござりませんが、一重さんはどうでござりませう。

養仙　あれは、所詮むづかしいて。

吉野　え、むづかしうござりますとえ

養仙　されば産後の血の納まらぬ所へ、何か心配な事があつて、氣から出た病で、俗にいふ血勞といふのぢや、愚老も旦那からお頼み故、色々と骨を折つて配劑をして見たが、どうも藥が屆かぬて、所へ此寒氣を受けて、猶々むづかしくなつたて。

吉野　えゝ、(ト びつくりなし、)こりやまあ、どうしたらようござりませう。

養仙　どうといつて壽命ばかりは、耆婆扁鵲でも仕方がない、愚老も歸りに廓へ廻つて、內證へ委しくお話し申すが、若し身寄でもあるならば、知らして遣るがようござる。

吉野　有難うござります。(ト 泣き居る。)

養仙　若し變が參つたら、早速にお人を下さい、お見舞に參るでござらう。

吉野　何分お頼み申します。

養仙　左樣ならお暇申す。

吉野　これは御苦勞さまでござりました。

養仙　さあ、八助參らう。(ト 養仙先に供付いて花道へはひる 皆々傍へ寄り、)

初瀨　もし、養仙樣は、なんと言ひなんしたえ。

吉野　所詮一重さんは治らないとさ、どうしたらよからうね。(ト 泣く。)

飛鳥　何ぞいゝお藥は、ありませんかね。

吉野　明日お張御符の張替だから、堀の內樣へお參り申し、

花鶴　よくお祖師さんへ、お願ひ申して參りんせう。

吉野　明日お願ひ申されゝばよいが。

初瀨　そんなら今宵が。

皆々　はあゝ。(ト 泣く。)

吉野　あもし、靜にしなんし、一重さんに聞えると惡うざます。

ゆか　花魁が死なしやんしたら、

たよ　私等はどうしませう。(ト 同じく泣く。)

吉野　ほんに此子達が、可愛さうだね。

ト 雪下し、雪は巴の端唄になり、花道より丁子屋の亭主長兵衛、毛織の半合羽、ぱつち尻端折、山刀をさし

爪掛の下駄蛇の目の傘をさし、喜助股引尻端折下駄がけ、風呂敷包を脊負ひ、番傘をさして出て來る。

長兵　今し方いゝ鹽梅に、雲切れがして止みさうだつたが、又強く降つて來たな。

喜助　これでは今夜は積りませう、お歸りはお駕籠でなくてはいけませぬ。

長兵　おゝ日が暮れたら迎ひに來いと、油屋へ言付けて置いた。そりやあさうと、今日文里さんの所へ使に行つたのは手前か。

喜助　いえ私ではございませぬ。與助でございます。

長兵　是非おいでなさるやう、さう申したかしらぬ。

喜助　たしかお預け申してある、一重さんのちいさいのもお連れなさるやう、さう申して參つたさうでございます。

長兵　わづかな内に零落なされ、お困りなさるといふことだが、今ぢやあどんなお暮しかしらん。

喜助　與助から承りましたが、今では今戸の瓦屋の裏で、しがないお暮しださうでございまする。

長兵　それぢやあ、お駕籠とも行くまいかの。

喜助　どうして、お傘があればようございますが。

長兵　あゝ、それはお氣の毒なことだな。（ト兩人舞臺へ來り。）

喜助　はい、旦那樣がいらつしやいました。（ト門口を明ける。長兵衛內へはひる。皆々見て）

吉野　これはまあ、寒いのに。

皆々　ようお出でなさんしたな。

長兵　あい〳〵、悪い物が降つたな。いや悪くもないが、跣足で寒いのに雪ぶッつけか。

ト云ひながら緣側へ上る。

初瀨　いえ、一重さんの鹽梅が、ちつとも早く治るやうにと、

花鳥　堀の內樣へお願ひ申し、庭の內で先刻から、

花琴　お百度を上げたのでございます。

長兵　そりやあよくして遣つてくれた。

喜助　もし旦那、子供等も一緒でございますぜ。

禿　旦那さん、おいでなさいまし。

長兵　おゝ手前達も一緒か、やれ奇特なことだ、其一心ぢやあ花魁も、今に全快するだらう。

ト奥へ聞える樣に大きく言ふ。

吉野　其全快が、あればよいが。

長兵　あこれ、其事は養仙樣に。
吉野　そんなら樣子を。
長兵　今道で聞いて來た。
ト思入、矢張右の合方にて、奥より花の香番頭新造の拵にて出來り、
花の　旦那さん、おいでなさいまし。
長兵　おゝ花の香か、どうだえ花魁は。
花の　兎角同じ事でございますよ。
長兵　嘸手前も心配だらう。
花の　いつそお目にかゝりたいと、言つて居なさいました。
長兵　おれも此間から、逢ひたかつた。（ト此内花の香障子を明けに掛る。）あゝこれ、障子を明けたら寒からうに。
花の　いゝえ、雪の降るにしては、寒くありんせんよ。
ト此内皆々も足を拭ひ上へ上り、障子を殘らず明ける。内よき所に六枚屛風を立廻しあるを、花の香明ける、内に二ツ蒲團、本夜具の上に、一重病ひ鉢卷病氣の拵にて居る。
長兵　花魁どうだ、少しはいゝかの。
一重　旦那さん、よく來ておくんなんした。

長兵　あゝ起きるにやあ及ばねえ、寢て居ればいゝに。
一重　いえ、先刻から寢て居た故、起きた方がようざます。（ト夜着に寄掛り、起直る。）
長兵　どうだ、藥は呑むだらうの。
一重　あい。
花の　いえ、兎角厭だと言ひなまして。
長兵　そりやあ惡いこツた、藥を呑まにやよくならねえぜ。
一重　どうでよくはなりませんから、藥は堪忍しておくんなんし。
長兵　むゝ。それぢやあまあ氣任せにするがいゝ
一重　もし花の香さん、何故こんなに皆さんが、宵へ來てゐなさんすのだえ。
花の　花魁が淋しからうと、旦那さんの言附で。
一重　それは嬉しうおすが、お氣の毒でありんすね。
長兵　なにさ、多く病ひは氣から出るもの、其處でおぬしが氣を晴らさうと、仲のいゝ者をよこしておくのだ。これ、其風呂敷包を。
喜助　畏りました。（ト風呂敷包を出し。）花魁如何でござりますか、つい忙しいので、お見舞も申しませぬ。

長兵（風呂敷より杉折を出し、）こりやあ花魁、養生糖といつて、桐山三了で賣る藥菓子だ、病人の喰ひ物にやあいつちいゝ、益になるから、食べなせえ。
一重　有難うおすが、どうも食べたくありいせん。
吉野　折角旦那さんがお持ちなんしたのだから、一つ厭なら半分でも。（ト一重に勸める。）
長兵　あこれ、厭なら無理にはよすがいゝが、さう物を食べねえぢやあ、藥の廻りが惡いから、治る病ひも治らねえぜ。それに付けておぬしにも云つておきてえ事がある、みんなも爰に居るこそ幸ひ聞役に聞いてくりやれ。（ト誂へ尺八の入りし合方になり、）今更言はねえでもの事だが、勤めの身にて子迄なした、文里さんのことなれば、毎日顏の見たいのを、段々溜る勘定に外の者へ示しにならねば、無據二階をせき、久しく足を留めた中も、ああ文里さんは突出しから二年此方通ひ詰め内證の爲にもなつたお方、いかに生業とはいひながら、不實な者と思はつしやらう。又女の狹い心から、無分別でも出しはしめえかと、案じたのも、四年後中萬字屋の玉菊が、新之丞といふ客故、義理に迫つて非業な最期、適れ遊女の鑑ぞと世の人毎に褒めれども、ならう事なら其樣な憂目を見まい見せまい爲め、病氣の體に此寮で、逢をさせたも有り樣は廓と違つて人目もなければ文里さんに逢はせる爲め、産れた子をば親切に内儀が引取り世話すると、聞いても聞かぬ顏をして、寐物語りに女房と喜んでゐる己が心は、無分別を出させまい爲、はて人間の一生は七轉び七起とやら、文里さんも又元の身分になつたら其時は、手かけ妾もある習ひ、おぬしを引取り世話もなさらう、己も男さうなれば、立派に支度をしてやらう、兎角命が物種だ、そりやもう傍輩初め子供等迄此寮の中を跣足詣り、其の一心でもおぬしが病ひ、治るは知れた事なれど、（ト思入あつて、）こゝが又人の覺悟、死ねないのは知れて居れど、命は限のあるものだ、己なぞはついちよつと風を引いても死ぬかと思ひ、己が死んだら斯う／＼しろと、遺言をすると直に治り、後で女房に笑はれるが、何と目出度いぢやあねえか。それだによつておぬしもまた言ひおく事でもあるならば、何なりとも己に言やれ。はて、よくなつた其時に、おぬしはこんな事を言つたと、どうぞおれに笑はしてくれよ、よ。斯ういふのもおぬしをば娘と思ふ心からだ、世間の人は遊女屋の亭主は鬼か何ぞの樣に無慈悲な者に思へども、鬼ばかり世にはねえ、

心淺ずに何なりといふことあらば云うたがいゝ。なう吉野、そんなものぢやあねえか。

ト宜しく思入あつて言ふ、一重初め皆々泣きゐる。

吉野　あゝ有難い旦那さんの御異見、みんなお前の爲なればこそ、惡う聞いては濟まぬぞえ。

一重　何の惡う聞きませう。其御親切を徒にして斯うして居るが勿體ない。少しも早くよくなつて御恩送りがしたうざます

長兵　むゝ、よくなつたらば稼いでくりやれ、寢てゐる内は入らぬ心配、それが病ひの大毒だ。（ト懷から年季證文を出し）其心配をさせぬ爲め、おぬしへ土産の年季證文、是を遣つた上からは身體の身體に遠慮はねえ、一年なりと二年なりと、よくなる迄は寢て居やれ

一重　何と申さう樣もない。

吉野　旦那さんの思召し。

初瀬　私ら迄も、

皆々　有難うおざりんす。

長兵　おゝ、まだ肝腎な事を忘れた、文里さんのお家が知れて、今日おいでなさる樣、お約束を申しておいた。

一重　そんなら文里さんが、

花の　おいでなんすとかえ。

長兵　定めておぬしも逢ひたからうし、又文里さんも一生の、いさゝ、一緒に今夜は爰へ寢て、ゆつくり話しをするがいゝ。

一重　えゝ、何から何迄。

長兵　はて己あ娘と思つて居れば、其禮にやあ及ばねえ。

花卷　（奥より前の花卷走り出で）あゝ、どうしたらよう ざませう、香煎と間違へて、振出しの粉唐辛子をお湯へ入れて呑んだので、口がひりひりしてなりんせん。

長兵　花卷の又お株で、そゝツかしい事ばかり。

花の　ちつと性を付けなんし。

花卷　おゝ辛い辛い、何ぞ甘い物を、一つくんなんし。

長兵　花魁の見舞に持つて來た、養生糖はどうだ。（ト長兵衞折を出す。）

花卷　そりや一丁度ようざます。（ト花卷一摑み取らうとするを、喜助留めて）

喜助　おつと花卷さん待ちなせえ、養生糖に唐辛子は、茶に鰒を喰ふ樣な物で大敵藥だ。

花卷　なに、敵藥でもよいよ、

喜助　お前はよからうが勤の身、旦那さんがつまらねえ、

花卷　いえ〳〵、敵藥でも死にやあしない、實は唐辛子は喰べないのだよ。

長兵　それぢやあ、養生糖は遣られねえ。（ト折を片附ける。）

花卷　えゝ忌々しい、喰べそくなつたか。

喜助　見出してやつた。

皆々　ほゝはゝゝ。（ト皆々笑ふ。是にて一重もにつこり笑ふ。）

長兵　いや、思ひがけなく花魁の、笑ひ顔を見て己も嬉しい、然し是が。

一重　え。

長兵　いやさ、こんな事でなくッちやあ氣が晴れねえ。

吉野　晴れると云へば此雪は、いつ迄降るのでありんせう。

長兵　いやもう今に止むだらう、さうしたら文里さんも出掛けておいでなさるから、冷えねえ樣に寐て居るがいゝ。

一重　あい、ちつと横になりんせう。

長兵　どれ。己も笹の雪で一口やらうか。（ト立上る。）

皆々　そんなら旦那さん、

長兵　氣を付けてやりやれ。

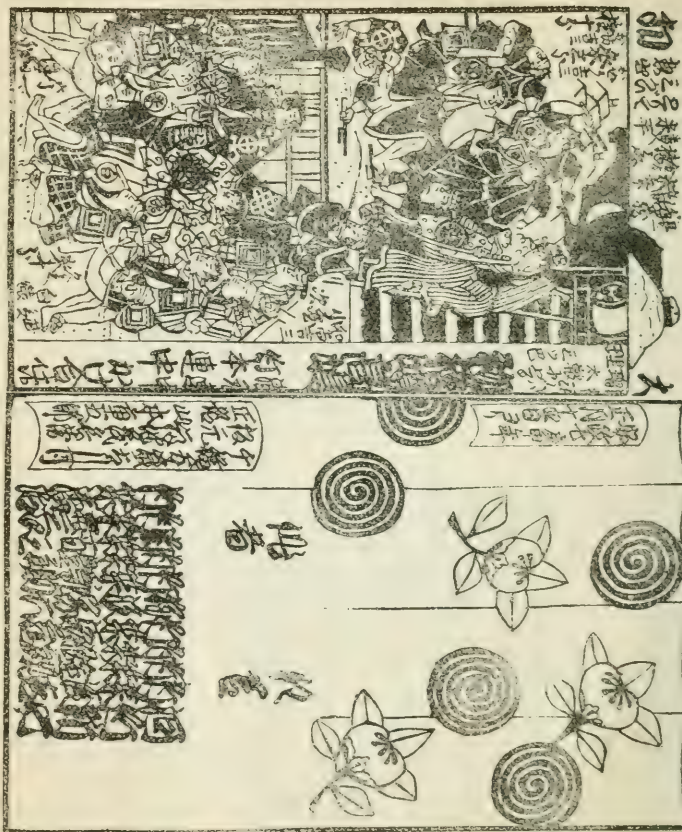
ト唄になり、長兵衞先に新造四人禿付いて奧へはひる。吉野花の香は屛風を立廻し内へはひる。花卷、喜助障子を閉めながら、

花卷　喜助づら覺えてゐろよ。（ト脊中を叩き、ついと奧へはひる、此時口紅の文を落す。）

喜助　いや、喰物の意趣はひどいものだ。（ト喜助花卷の文を取上げ見て、）花卷さんが文を落したが、どんな事を書いて遣るか、大方落し咄でよく言ふ、あばいが惡い類だらう。（ト云ひながら開き見て、）淨瑠璃名題、文里一重が子故の闇に、夜鶴姿泡雪、相勤めまする太夫、花園宇治太夫わき花園遊賀わき花園多喜太夫、三絃花園豐造上調子花園榮造、相勤めまする役人。（ト役人替名を讀み、）こりやあ今度吾妻路が花園と改名した淨瑠璃の觸書だ、それぢやあ爰に淨瑠璃があるか、さつぱりと知らなんだ。然し默つても引込まれまい。いよ〳〵此所淨瑠璃初まり、其爲口上左樣。

ト下手二階家の伊豫簾を捲上げる、内に花園連中羽織袴にて居る。と淨瑠璃になり、喜助此内奧へはひる。

〽立つ春に氣色替りて枝ながら惠みの雪に花の園色吾儘しき鶯や、哀れ文里は去年の儘綻ぶ梅の裾に綿、替らぬ

稿下當時の繪番附の一部

姿しよんぼりと、

ト本釣鐘雪おろし、雪頻に降り、花道より文里やつし裝、頰冠り尻端折安下駄を穿き、やぶれし番傘をさし懐に抱子を入れ出來り、

文里　あゝ誰やらが雜俳の句に、鶯や同じ垣根の幾曲りと初音の里ほど同じ樣に垣根のある所はない、只でさへ知れ憎いに、此雪で眞白故何處がどうやらさつぱり分らぬ、今後の酒屋で聞いたら、角から二軒目とあるからは、爰の寮に違ひない。(ト此時抱子の泣くをいぶり付けながら)おゝ泣くな泣くな、家でしつかり呑まして來たが、一里餘り抱いて來た故、呑度くなつて來たと見える、あれ泣くな/\、こりや尿がしたくなつたのか知らぬ。あゝ、ぐつすりねいたわえ。

〽野邊の綠子懐に、吹雪厭うてさす傘も濡れじと横に人の目を、忍ぶが岡の山の蔭、心細くも水濁れし流れに添うて來りける。(ト文里宜しく思入あつて、本舞臺へ來り)

はい、お頼み申します/\。

〽音なふ聲は聞馴しゆかしき人に吉野は立出で、(ト屛風の内より吉野出て、)

吉野　どうやら今のは聞いた聲だ。(ト言ひながら下駄をはき枝折戸の側へ來て、)もし、其處へお出なんしたは、

文里　吉野さん、文里だよ。(ト手拭を取る、吉野見て、)

吉野　おゝ、よくお出なんした、先刻からお待ち申して居りました。

文里　はひつてもいゝかえ。

吉野　よいどころか、さあ/\爰へ。

文里　おゝお前方に逢ふのも面目ない、此ざまだ。(トいひながら内へはひる、と抱子泣く。)おゝ今にお母あに逢はせるから、泣くな/\。

吉野　一重さんの生みなんした、梅吉さんとは其子かえ、ちよつと抱かしておくんなんし。

文里　手が悴つたら泣くだらうが、それおやあ足を拭く内頼まうか。

ト懐から出して吉野へ渡す。吉野抱いて、

吉野　おや、こりや尿をしなんしたのかえ。

文里　冷たからう。是を當てくんな。(ト袂より襁褓を出して渡す。)

吉野　でも親子とて、一重さんによく似て居なんすね。(ト吉野泣子をいぶり付け居る。文里足を拭ひながら、)

文里　ほんにお前に逢つたら禮を云はうと思つて居た、此間吉三さんが親切に金を持つて見舞に來てくんなすつたが、大まい百兩といふ金を、お貰ひ申す譯がない故お斷り申したが、何とか思ひなさりやあしねえか、よくお前から來なすつたら言譯をしてくんなせえ。

吉野　おやさうでありましたか、久しく此方へ來なさらないから、一重さんの病氣も知らしたし、又私も逢ひ度く思へども、惡い身性に。（ト鬱ぐ。）

文里　さあ、それ故此方も氣味惡く

吉野　え。

文里　いやさ、氣の毒だからお返し申した。（ト文里足を拭ひ上へ上る。屏風の内より花の香出て、）

花の　文里さん、よく來ておくんなんした、待ちきつて居りました。

文里　そつちより己が又、どんなに逢ひたかつたか知れねえ。

吉野　花の香さん、一重さんは。

花の　すや／＼寢入つて居なんすよ。（ト此時抱子頰に泣く。）

吉里　おゝたがよ／＼、何故こんなにお泣きだね

文里　そりやお乳が呑みたくなつたのだ、丁度幸ひ寮番の、上さんに乳があれば、

花の　そんなら一ばいゝ貰つてくんな。

文里　あい、たんのうさせて上げいせう。（ト花の香抱子を抱き奥へはひる、吉野屏風の傍へ來て、）

吉野　もし一重さん、文里さんがお出なんした、もし一重さん一重さん。

〽明る屏風もやつれたる、互ひの姿にふさがる胸、一重は嬉しき其人に、飛び立つ思ひも病ひの床、

ト吉野屏風を明ける、文里一重を見てこなし、一重は嬉しく起上らうとして、起兼ねる思入。

もし、文里さんがお出なんしたよ。

文里　これ一重、可愛さうに、飛んだ目に逢つたな。

一重　文里さん。

〽逢ひたかつたと胸せまり、先立つ涙にくれければ、（ト一重嬉し泣きに泣く。文里傍へ來て、）

文里　己も煩つて居ると聞いて、逢ひ度く思つて居たけれど、來るに來られぬ今の身の上、所へ御亭主から迎ひの使、飛立つ思ひで逢ひに來たが、昨日若い衆に聞いたより、おぬしは大層やつれたな。

一重　お前も僅逢はぬ内に、みすぼらしい裝にならんしたなア。
吉野　ほんに以前の文里さんの、俤はありんせん。
文里　さあ是ゆゑ何ぼ逢ひたくても、どうも逢ひに來られねえ。
一重　さうして今日はおしづさんも、一緒にお出でなんしたか。
文里　あれにも來いと云つたれど、雪で頭痛がすると云つて一緒に來ぬは、久振おぬしに話しもあらうと思ひ、粹を通して來ぬ樣子、それ故道で坊主に泣かれ、どんなに困つたか知れねえ。
一重　そんなら連れて來てくんなんしたか。
文里　おぬしに見せようと、懐へ入れて來た。
一重　嘸大きくなりんしたらう、早く見せて　おくんなんし。
文里　今ひもじがつて泣いた故、花の香が寮番へ乳を貰ひに抱いて行つた、飲ましたら連れて來るだらう。
吉野　お前に早く見せたうござんす、どんなに太つて居なんすだらう。
一重　おや、さうざますかえ。

文里　其太つたに引替へて、おぬしア大層瘦せたな。
一重　それ故身體が痛うざます。
文里　嘸是ぢやあ痛からう、どれ、己がさすつてやらうか。
〽いたはる手さへ柔らかに、積る傍から消えて行く、春のならひに泡雪も、軒の雫と鳴る鐘に、哀れを添ふる相の山。
ト此内文里一重の介抱をしながら、吉野と所詮助からぬといふ思入あつて涙を拭ふ。と、時の鐘合方雪おろしにて、花道よりおしづ一文字の網笠を冠り、安下駄を穿き、胡弓を持出で來り、後より娘おたつ芥子坊主に、手拭を頬冠りにして鐵之助を脊負ひ、破れたる番傘をさし出來り、花道にて、
たつ　もしお母さん、鐵が何か喰べたいといひますわいな。
しづ　なんの鐵が其樣な、さもしいことを云やるものか、おぬしが大方言ふのであらう。行儀の惡い、往來中で物を喰べるといふがあるものか。なう鐵、姉さんが言うたであらうの。
鐵之　あい、おいらぢやあない、姉さんぢやゝ。

たつ　えゝ此子は、何で私が其様な、さもしい事をいふものかいの。

しづ　はて、そなたの云うたにして置きやいの。

〽おしづは夫の後を追ひ、死へきざすの小鳥さく、十と五つにまだ春も、二十日を越さで冴返る、寒さ忍びてやうやうと枝折の外に佇みて、

ト此内おしづは兩人をいたはりながら舞臺へ來て、

〽慥に爰とさし覗く、内には寐ぬる文里の聲、

文里　これ一重、ちつと横になれぜいゝ。

一重　いえ此方がようざます。

吉野　ちつと待つてさすりんせう。

文里　まだ草臥ねえかいゝ。

たつ　(文里を見付けて、)あれ、お父さんが。

しづ　あゝこれ(トおたつを留め、胡弓をしやんと構へる。是にて相の山になり。)

〽ゆうべあしたの鐘の聲、じやくめつゐらくと響けども、聞いて驚く人もなし。

ト此内一重苦しき思入、文里種々介抱する。吉野は口の内せ題目を唱へ、盆の米を算へ居る。おたつは睡がる鐵之助いぶり付けながら突き思入。

文里　これ一重、だいぶ息遣ひが悪いが、差込でもするのか。

一重　あい、久し振で來たんしたお前に、案じさすまいと怺へに怺へて居たれども、所詮私しや助からぬぞえ。

文里　なに、助からねえ事があるものか、己が慾目か知らねえが、顔の色なぞは不斷の様だ、そんな弱い氣を出しちやあいけねえ。

一重　いえ〳〵、助からぬといふことは疾から。

吉野　え、そんならお前はあの疾から。

一重　お洗米さへ只一粒。

〽三度の食も見たばかり、喉へ通らぬ病ひ故、此世を申の御縁日、帝釋様のお水をば末期の水と心にて、戴いて呑む私が覺悟。

吉野　あれ、あの様な事言うて、

〽妙法蓮華けふあすと繰る珠數よりも玉の緒の、今にも切れるかなんぞの様に、祖師さん願ふ死に急ぎ、傍で聞く身の私が悲しさ。

〽推量してと共々に、なみだは雪解の行潦。

文里　お前迄が同じ様に、春早う縁起でもねえ、あゝ鶴龜鶴龜。

〽いふ表には相の山、寒さに聲もふるはれて、
〽花は散りても春は咲く、鳥は古巣へ歸れども、行きて歸らぬ死出の旅。
ト是を聞き一重思入、文里、吉野惡いものが來たといふこなし、おしづ内の樣子を窺ひ居る。おたつは此内袂より錢獨樂を出し、雪釣をして鐵之助に見せ、始終口にて手を溫め寒さを怺へるこなし、
吉野　えゝも、心に懸るあの唱歌、
一重　行きて歸らぬ死出の旅。(ト愁ひの思入これ)
鐵之　かゝ樣、寒いわいの。
しづ　おゝ寒からう〳〵、ようおとなしくして居やつた。
文里　あゝ哀れな文句につまされて、よけいに涙をこぼさせる。どれ、手の内を遣つて行つて貰はう。
〽連添ふ妻や我子とも思ひがけなく白雪に、文里は枝折の傍へ來て、
ト文里懷より財布を出し、内より小錢を出して是を持ち枝折戸の傍へ來る、おしづ二人を後へ隱し編笠にて顏を背ける。
これノゝ相の山どの、ちつと内に取込があるから、早く隣へ行つて下せえ。

〽差出す錢におしづははツと、顏を隱せば頑是なき、子供は傍へかけ寄つて、
ト文里錢を出す、おたつ傍へ來て、
たつ　や、お父さんか。
文里　やゝ、其方は。(トびつくりなす。)
しづ　文里殿。
文里　あ、これ。
〽あたり憚り目で押へ、其處に暫しと敎ゆれば、おしづは我子の口に袖、松の小蔭に忍び居る。
ト文里思入あつて其處に待つて居ろと敎へる、おしづ鐵之助の口を袖で押へ、おたつに囁き、兩人思入あつて下手へ忍ぶ。文里元の所へ來る。
吉野　もし文里さん、今の相の山は、子供を連れて來いしたのか。
文里　おゝ、なんぞ樣子のあるかは知らぬが、此雪も構はずに、可愛さうに子供を連れて、
吉野　袖乞をして歩くとは、御亭主でもない人か。
文里　いや、あつてもどうで腑甲斐ない、己の樣な者と見える。(トほろりと思入。)
一重　嘸寒いことでありんせう。(ト言ひながら一重泣伏

す）
文里　あゝ又泣くのか。
一重　何を聞いても悲しくなつて。
文里　この悲しいにおぬしより、
一重　え。
文里　いや、おぬしの身體へ明け放しで、雪風が浸みては惡い、ちつと障子をしめて置かう。
吉野　ほんに、それがようざます。
〽立てる障子の紙一重、薄き縁の別れとは、後にぞ思ひ白妙の雪は次第に、
ト文里一重を見て助からぬといふ思入、吉野障子を見て、三重雪下しにて、此道具半分廻し、下手の枝折戸上手になる。
本舞臺正面一面雪の積りし建仁寺垣、後見越の松、雪一面に積つてある。爰におしづ鐵之助を抱き、おたつ傘をさしかけ居る。
〽降しきり風も烈しく親と子が、さす傘よりも破れ衣に寒さは骨にしみ渡り、怺へるおたつは齒の根も合はず、
たつ　もし、お母さん、雪で閊へが發つたと言はしやんしたが、とうだゑぞえ

しづ　おゝよう尋ねてくりやつた、きつい事もないけれど、此寒さ故、どうもまだ。
鐵之　寒くば坊が溫ためて上げよう。
トおしづの手をとり、頬へ當てる。
しづ　おゝ、あつたかになつたわいの。
たつ　お寒ければ私の半纏を、肩へ掛けて上げませう。
しづ　あいや／＼私よりはそなたが、嘸寒いことであらうわいの。
たつ　いえ／＼私しや寒うはござんせぬ。
しづ　何ない事があるものか、齒の根も合はぬ胴震ひ、
〽不便のものやと右左り、伏見常磐の悲しみも斯くやとばかり泣沈む、折から爰へ若い者門の掃除に目に角立て、
トおしづ兩人を抱き宜しく思入、下手より喜助竹箒を持ち庭を掃除に出て來り、
喜助　これ／＼、何時迄其處に休んで居るのだ、澤山降らねえ内に行かねえか。
しづ　はい、癪が發つて困りますれば、どうぞもう少々。
喜助　いや置く事はならねえの、此間も此先の寮へそんな事を云つて子を一人置いて行つたといふ事だ。
しづ　いえ、左樣な者ではござりませぬわいな。

喜助　誰も左樣な者だと云つて居る奴があるものか、さあ
　さあ、早く行つたり〳〵。
たつ　どうぞさう云はずと、もうちつと。
喜助　えゝしつこい、ならねえといふに。(トおたつをむごく突倒す。)
たつ　あれ、痛いわいの。
しづ　えゝ可愛さうに、科もないものを。
喜助　何ねえことがあるものか、行けと云ふに行かねえかいだ。
しづ　いえ、行かぬとは申しませぬわいな。
喜助　えゝきり〳〵と、行きやあがらねえか。
〽箒おつとり立かゝれば、(ト喜助竹箒を持つて立掛る、此時文里出て、喜助を留め。)
文里　あゝこれ喜助、可愛さうにひどい事をするな。
喜助　いえ、子でも捨てられると掛合ひになります。
文里　さうでもあらうが一重が病氣、まあ靜にしたがよい。
喜助　それだと言つて。
文里　はて、待てと言つたら待つたがいゝ。(ト喜助を留める。)

鐵之　父樣、何ぞ下されや。
しづ　あこれ。(ト口を押へる、喜助びつくりして。)
喜助　や、そんならもしや。
文里　喜助、面目ないわい。
たつ　もうお父さんと云うても、ようござんすかえ。
文里　むゝ知れたる上は仕方がない。
喜助　(びつくりして手を突き。)是れは飛んだ粗相を致しました、御新造樣御免なすつて下さりませ。あゝお孃さんといひ、お坊さんといひ、
〽よいお子樣と若い者、追從たら〳〵雪の中、汗を拭うて入りにける。
ト喜助氣の毒なる思入にてこそ〳〵と下手へはひる。
〽後見送りて親と子が、三筋四筋に相の山、
鐵之　父さん冷たい、抱いて下され。
文里　あゝ抱いて遣りませう、さあおたつも爰へ手を出しやれ。
たつ　あい〳〵。(ト文里鐵之助を抱き、片手におたつの手をとり懷へ入れ溫めながら。)
文里　してまあそちは此雪に、何でそんな裝をして、どういふ譯で爰へ來たのだ。

しづ　さあ、一重さんがむづかしいと知らせの人に、お前より私が逢ひたく思へども、久しく振で行かしやんすに女房が居てはよい仲でも、話しの仕難い事もあらうと、癪を幸ひ家に居たれど、氣にする故か烏鳴き聞く辻占もよい事なく、一重さんが惡いのか、但しは梅が泣入つてひよつと蟲でも出はせぬかと、心に掛つて家に居られず、せめて門から餘所ながら様子を見ようと此おたつが、踊りに遣うた冬編笠、是幸ひと相の山、大概様子も聞いた故早う歸ればよい事を、長居をしたでお前に迄、女房が袖乞する様に、恥をかゝせし私があやまり、何と云うたらよからうぞ。

文里　むゝそんなら梅吉を案じて、そなたは此雪も厭はず爰へ來やつたのか。

しづ　あい、惡い心でせぬ事なれば、どうぞ堪忍して下さんせいな。

文里　あいや其詫言はそなたより、己が方から言はねばならぬ。ふとした事から二年越し、廓へ通ふ其内も男の高ドと諦めて家へ歸れば水雜炊、迎ひ酒のと手當して、只一言の悋氣もせず、

へいかに亭主は女房子を、養ふものとはいひながら、己が勝手に夜泊り日泊り、最うふッつりと廓へは、決して足をば向けまいと思つた事は幾度か、聞けばそなたの親達も、己にふつ／＼愛想が盡き、別れて歸れといふとの事、

へ里へ歸れば樂々と、暑さ寒さの苦勞もなく、暮らされる身を共々に、

苦勞するのも皆己故、それを恨まず梅吉迄我子に替へて世話する親切、あだに思はゞ女房の罰、今日といふ今日手を下げて、そなたに己が詫びるぞよ。

へゆるしてくれと雪の中、殘る手形の楓葉や、涙に誠の色ませば、

しづ　あゝ勿體ない女房に、何の禮に及びませう、私に罰が當るわいな。

鐵之　これ父様、睡くなつたわいな。

文里　おゝ睡くなつたら寐るがいゝ。

しづ　梅坊を私が抱いて寐るので、鐵がお前に馴染だこと。

文里　世帶の苦勞を忘れるのは、今の身では子供ばかり。

しづ　それはさうと一重さんは、どういふ樣子でござんすぞえ。

文里　勞といふ字の付く病ひに、見た所はさのみでもない

が、今傍輩の吉野に聞いたが、先刻お醫者樣の仰しやる
のに、今夜あたりといふことだ。
しづ　え、すりや、あの一重さんは。
文里　此方のものぢやアあるめえよ。
〽はッとばかりに、差込む癪、
　トおしづ頻にて取詰める。文里びつくりなせど子供故
　起されず、おたつ介抱なす。
文里　これ〳〵おしづ、どうしたのだ。
しづ　今朝から雪で寒氣の所、一重さんの事を聞いて、は
　ッと思ふたら、あいたゝゝゝゝ。
たつ　もし、私が押して上げませうか。
　トおしづの介抱をする。
文里　おぬしが力ぢやあ利くめえが、押して遣りたいにも
　此坊主、あゝ困つたものだなあ。
しづ　あゝ此の樣に差込んでは、あいたゝゝゝ。
　トおしづ苦しむ、文里片手で押して遣る。
鐵之　父さん、抱こして下され。
文里　えゝ、抱いて居るといふに。
〽足手纏ひの幼子に、如何はせんと立ちつ居つ、氣を揉
む折柄一間の内、

吉野　(上手にて、)もし〳〵文里さん、一重さんが取詰め
　なんした、ちよつと來ておくんなんし。
〽聞くにびつくりどきつく胸。
花の　花魁氣をしつかり持ちなましよ。
文里　すりや一重には取詰めたとか。ほい。
しづ　もし、早く行つて上げて下さんせ。(ト文里上手へ思
　入あつて、)行かれることなし。
文里　なに、あつちやあ大勢居るから、己が居なくつても
　いゝ。
しづ　いえ〳〵假令幾人居ようと、便りに思ふはお前一人、
　私が身に覺えがある。早う行つて上げて下さんせ。
文里　それだといつて是を見捨て、どう己が行かれるもの
　か。
たつ　いえ〳〵、私が押して居りますから、お父さんは構
　はずに。
文里　そんなら手前を頼むぞよ。(ト文里行掛るを、鐵之助
　留めて、)
鐵之　父さん、爰に居ておくれよ。
文里　おゝ案じるな、何處へも行きはしねえ。
〽行くに行かれす桓山の、兩鳥の別れ恩愛に、身をしば

らる丶血筋の縋し
ト此内文里上手へ行かうとするを、鐵之助袖に縋る故、振返り見る、おしづ苦しみ居るを、おたつ介抱して居る。是にて行きつ戻りつ宜しくあつて、
あゝあちらも氣遣ひ、こちらも氣遣ひ、こりやどうしたらよからうなあ。
ト茫然と思入、おしづも思入あつて、
しづ　あゝおたつが押してくれたので、大きに私もようござんすから、早く行つて上げて下さんせ。
ト おしづ苦しみを怺へる思入、文里も行度き思入にて、
文里　そんなら行つてよからうか。
しづ　あゝ、ようござんすから、鐵を爰へ。
鐵之　いゝや、おいらはお父さんと一緒に寐たい。
文里　おゝお父さんはお醫者樣へ行つて、お灸をすゑて來るほどに、おつかの内待つて居や。
鐵之　あい〳〵。
しづ　さ、これに構はず。
文里　おゝ、行つて來るぞよ。
〽妻子に心殘んの雪、消えぬ内にと、急ぎ行く。
ト文里宜しく思入あつて上の方へはひる。おしづ後を見送り苦しき思入
しづ　あいたゝゝゝ。
たつ　又差込んで參りましたか。
しづ　お父さんを上げようと、我慢をしたが、もうどうも。
たつ　（摩りながら雪の降り出したを見て）あれ、お天道樣も意地の悪い、又大層降つて來た。
鐵之　坊が傘をさして遣らう。
たつ　おゝ、さうしてくりやいの。
しづ　これおたつ肩を貸してたも、爰に長く居たならばお父さんの心掛り、そろ〳〵そこら迄行かうわいの。
〽我子を杖の力竹、姿は野邊に冬枯れし案山子の蓑の總毛立ち、いとゞ哀れに始終をば後に窺ふ此の家の主人、
ト おしづおたつの肩へ縋りて立上り、苦痛の思入にて行兼ねる、此時後へ長兵衛出て、
長兵　あいやおしづ樣とやら、先々お待ち下さりませ。
しづ　さう仰しやるは、一重さんの。
長兵　はい、文里樣には御恩になつた、長兵衛でござりまする。
しづ　して、私をお呼びなされしは。
長兵　いや別の事でもござりませぬが、此雪降に持病のお

悩み、何れへおいでなされますか、滿更知らぬ所でもなし、文里樣もおいでなされば、むさくろしくとも此寮で、まあお休みなされませ。

しづ　お志は嬉しいけれど、以前に替る今の身の上、御覽の通りの姿故、

長兵　其御遠慮には及びませぬ、綾羅錦繡身に纏ひ綺羅を飾つたお人でも、穢れた心でござりましては襤褸に劣る樣なもの、假令以前に替ればとて、替らぬそなたのお心は實に錦でござりまする。

しづ　それぢやと云うて、どうもお内へ。

長兵　まだそんな事を仰しやりますか、殊には一重も今夜らが、別れにならうも知れませぬから、逢つて遣つて下さいまし

しづ　さあ、其一重さんには逢ひたけれど。

長兵　其思召しなら少しも早く。

しづ　そんなら此儘。

長兵　さあ、おいでなされませ。

〽流行廓の主人とて粹もあまいも味ひしは、色香もうせぬ梅暮里の谷峨が作の二筋道、四方に其名や香るらん。

トおしづ行かうとするを長兵衛引留め、一緒に來いといふ思入、是にておしづおたつに鐵之助を脊負はせ、胡弓編笠を持つて長兵衛先に上手へはひる。と、雪下しにて道具廻り、元の舞臺へ戻る。

本舞臺元の二重の道具、床の上に文里一重を抱き、傍に吉野共々介抱して居る、上下に新造四人、禿二人泣居る、花の香同じく泣きながら藥を煎じてゐる。

一重　文里さん、私しやもう死にますよ。

文里　おゝ助かるといひたいが、此樣子ぢやあむつかしい。言置く事でもあるならば、己に言つて置くがいゝ

一重　死ぬるいまはの心掛りは、身持の惡い兒さんの事。

文里　そりやあ決して案じねえがいゝ、身持の惡いもいつか一度は、根が馬鹿でねえ人だから、直るには違ひねえ、又話に聞いて居る米子殿も親切な若黨が預つて居れば、やがて尋ぬる短刀も手に入つて、歸參が出來よう、及ばずながら己も又、相談相手になる程に、必ず／＼案じねえがいゝ。

一重　それで私しや心殘りは。おゝ此世の別れ稍苦に、どうぞ逢はしておくんなんし。

花の　寮番さんに預けてあるから、誰ぞちよつと。

花琴　あい、お連れ申して參りんせう。

長兵　（奥にて、）いや迎ひに來るにやあ及ばねえ、今其處へ連れて行かう。
吉野　あの聲は。
皆々　旦那さん。
　ト長兵衛先におしづ抱子を抱き、おたつ胡弓と編笠を持ち、鐵之助の手を引き出て來る。
文里　や、そなたはどうして。
しづ　長兵衛様のお勸め故、一重さんの顏を見たく、それゆゑ參りましたわいな。
長兵　扨文里さん、其後は久しくお目に掛りませぬが、いつもながらお替りなく。
　ト一重を吉野に抱かせ文里前へ出て、
文里　いやもう替りがなければようございますが、替り果てたる此姿、お目に掛るも面目ない。
長兵　何面目ない事がございませう、七百貫目の借錢した、藤屋の伊左衛門が此編笠、（トおたつが持つてきた笠を見せ、）手前勝手を云ふ樣だが、遣ひ果して紙衣を着ねば、粹の粹とは言はれませぬ。
文里　いえも、其お詞で肩身を廣う、是に夫婦が居られまする。

長兵　や餘計な話しはまあ後で、さあお上さん、一重に逢つて遣つておくんなせえ。
しづ　はい、有難うござります（ト一重の傍へ來て、）一重さん、私でござんす。
一重　おゝお上さんか、よく來ておくんなんした。
しづ　あゝ大層やつれなさんしたな。
たつ　伯母さん、お鹽梅はようございますか。
一重　あい有難う。もし花の香さん、子供衆になんぞ。
花の　あい／＼。
文里　あゝ、苦しい中でそんな事迄。
長兵　是がやつぱり病ひの種だ。
しづ　さあ一重さん、梅を連れて來ましたよ。
一重　どれ何處に、（ト抱子を抱かせる、一重顏を見て、）お梅かよ。
　ト顏をぢつと見て泣く。皆々是を見て愁ひの思入。
長兵　あれ、親子とて爭はれぬ、一重におとなしく抱かつてゐる。
吉野　もし文里さん、ちよつとお見なんし、乳が呑みたうありんすか、紅葉のやうな手を廣げ、いつそ胸を捜しなんす（ト文里是を聞き、たまらぬ思入にてわざと顏を背

け居る。)
一重　これ梅、私しやお前の親ではないぞえ、お前の親は
おしづさまぢやぞへ(ト子を見て泣く。)
初瀬　あれ一重さんが顏を見て、あの樣に泣きなんすに、
飛鳥　何にも知らずにこ〳〵と、笑うて居なんす梅吉さ
ん。
花の　ほんに佛樣でありんすね。
一重　其佛樣になる私、よう顏を見て置かうぞよ、はあゝ。
ト泣く。
しづ　黃泉の障りは此子であらうが、今日袖乞の姿となり
逢ひに來たが前表で、此末乞食になればとて、我子を捨
ても此梅は、私が立派に育てるほどに、必ず案じなさん
すな。
一重　それで迷はず死にまする。
しづ　何ぞ外に言ひ置くことは。
一重　言ひ置く事はなけれども、此子が大きくなつたな
ら、此書置を。
ト蒲團の下より文を出し、おしづへ渡す。
しづ　此書置を讀んで見たけれど、私しや淚で讀兼ねる。
もし、お前讀んで下さんせ。(ト文里に渡す。)

文里　あゝ己も淚で讀めればいゝが。(ト書置を開きて)「書殘す教訓の事、「そもじの母我身事は吉原の遊女丁子屋の抱にて一重と申候。文里樣に馴染を重ね終にそもじを姙て座落し候處、文里樣のお內樣が他人の手しほに掛候より、幸ひ乳も澤山に候へば、我等引取り世話致し候と、藁の上より御養育下され候、然るに其頃は文里樣も以前に替りまづしき御暮し被成候、是皆廓通ひより起りし事なれば我身をお恨みあるべき筈に、實の兄弟も及びなき程御親切になし下され候、其御恩の程海山にも盡し難く、長く御恩送りと存じ候甲斐もなく、產後の大病にて僅十九歲を一期として此世を短く相果候まゝ、そもじは我身になり替り文里樣は言ふに及ばず、大恩のあるおしづ樣へ孝行盡し申しべく候。」もし丁子屋の、どうぞ此跡を讀んでおくんなせえ。
ト長兵衛へ書置を渡す。
長兵　(開き見て、)何々、「又丁子屋の御夫婦樣は突出しの其日より一方ならず、御世話なし下され候、御恩送りも致さず、剩年のある內御損を掛け相果て候へば暑さ寒さには御機嫌伺ひにまゐるべし然し乍文里樣御夫婦が大切なれば、假令野暮者と言はれ候共、お父樣が手本な

れば廓通ひなど致すまじく候、若御苦勞掛け候ふと我身事草葉の蔭にて浮み申さず候、くれぐれ此事忘れ申すまじく候、また書殘度き事山々御座候得共、病に筆も廻り兼候儘。十が一つ教訓に書殘しまゐらせ候、あらあら目出度かしく、梅吉殿へ母一重、ト讀み文里と顏見合せ、流石以前が以前だけ、遊女に稀な此書置。

文里　そんなら疾から死ぬ覺悟で、

一重　あい、書いて置いた其教訓。

長兵　未生先の長い身で、思ひ切つたる此書置、立派な覺悟を世間の人に、話して自慢がしたいわい。

ト長兵衛宜しく思入。

一重　是で思ひ置く事なし。

吉野　風が寒くはありいせんか。

一重　屏風を立つておくんなんし。

吉野　あいあい。ト屏風を立廻し、中へはひる。長兵衛、文里思入あつて、

長兵　男も及ばぬ一重が覺悟、どうか達者にして遣りたいが、所詮あれは助かりませんぜ。

文里　明日來ようと思つたを、雪を厭はず今日來たは、別れになるを蟲が知つたか

しう　相の山の編笠を、此子に着せたくないものだ。

ト此時屏風の内より吉野出て來るを見て、

長兵　一重はどうだ、

吉野　差込がありんせんから、よい方でござんす。

長兵　よいといふのは何よりだ。

ト下座にて獅子の囃子になる。

鐵之　父樣、獅子が來ました。

文里　此雪降に珍らしい、何處か近所で、行く所でもあつて大方來たのだらう。

長兵　何にしろ縁起直しに、獅子に惡魔を拂つて貰はう。

吉野　ほんに、それがようござます。

文里　今迄陰に閉ぢられて、

しう　雪よりしめりし御座敷も、

長兵　獅子の囃子の陽氣を招き、

文里　思はず愁ひを、ト立上るを木の頭。拂ひました。

ト皆々愁ひを忘れし思入。獅子の囃子で賑やかに、

ひやうし幕

六幕目

巣鴨在吉祥院の場

〔役名——和尙吉三、お坊吉三、お孃吉三、手代十三郎、長沼六郎、堂守源次坊、おとせ、捕手等〕

（吉祥院の場）——本舞臺三間の間古びたる金襴卷の柱、天人の大欄間、上下蓮の畫の杉戸、正面大机の上に三つ具足、此後戸帳のおりし廚子、所々に古びたる幡を下げ、すべて吉祥院古寺の體。爰に堂守源次もんぱの頭巾を冠り、大圍爐裏で古びたる卒都婆を焚いてゐる、禪の勤にて幕明く。

源次　今年は節が若いせゐか、一夜明けたら猶寒い。門松へ雪が掛ると七度降るとよくいふが、今夜は又雪か知らん、暮れねえ内に卒都婆をこなん、焚木をしつかり拵へて置かう。和尙が歸りに五ンつくを提げて來て吳れりやあいゝが、酒でなけりやあ凌げねえ。おゝ寒い／＼。

ト火にあたり居る、花道よりお坊吉三頰冠り、大小尻端折りにて出來り。

お坊　天高しといへど脊をくゞめ、地厚しと云へど荒く踏まずと、よく芝居で落人の臺詞に云ふが違えねえ、其身にならにやあ知れねえが、實に段々喰ひ詰めて斯う忍んで歩いて見ると、廣い往來がせめえやうだ、兄貴が此寺に居るといふから、暇乞に酒でも吞んで、旅稼ぎに出にやあならねえ。（ト本舞臺へ來り、源次坊を見て）お賴み申します。

源次　あい、何だえ。

お坊　以前此寺に勤めて居た、辨長といふ和尙は居ませぬかえ。

源次　今湯へはひりに行きましたが、用なら爰へ來て待つて居なせえ。

お坊　それぢやあ、お邪魔ながら御免なせえ。

源次　明寺で寒いから、爰へ來て當んなせえ。

お坊　いや、當れとは有難い（ト手拭を取り、圍爐裏の下手へ住ひ、源次の顏を見て）じや、手前は漁夫の源次ぢやあねえか。

源次　ほんにお前は吉三さんか、思ひがけねえ所で逢ふものだ。

お坊　見りやあ變つた姿になつたな。

源次　わつちあ網打の七五郎が死靈の祟りで、親子共非業

に死んだ所から、漁に出るのも怖くなり、丁度體も悪いから、御覧なせえ。(ト頭巾を取つて、坊主天窓を見せ、)くり〳〵坊主に剃りこくつて、此明寺の堂守さ。

お坊　七五郎にも世話になつたが、可愛さうな事をしたなあ。

源次　何にしろお前さんにも、久し振でお目に掛つたから御酬の一つも上げてえが。

お坊　いや、己が方も和尚の土産に、樽でも提げて来るのだが、何をいふにも勝手が知れねえ、源公御苦労ながら、二升ばかり買つてくんねえか。

源次　なに御苦労のことがあるものか、酒と聞いちやあ直に行きやす。

お坊　ついでに何ぞ、是で肴を。
ト天鵞絨の丼から一分銀を出して遣る。

源次　寒いから、軍鶏でも買つて来ませう。(ト源次立上り下手から鼠鼻緒の草履下駄を出し、それぢやあわつちやあ行つて来やすが、お前爰に居なすつていゝかえ。

お坊　いや、此間から己が行方を捜して居るといふことだから、うつかり人にやあ逢はれねえ。

源次　逢つて悪くば帰る迄、須彌壇の下に隠れて居ねえ。

お坊　合點だ。

源次　どれ、一走り行つて来ようか。
ト源次花道へはいる。

お坊　(邊りを見て、)以前は立派な寺ださうだが、久しい間無住になつて見る影もなく荒果てたが、然し狐狸やお尋ね者、晝間徘徊出来ねえものが、隠れて居るにやあ妙な所だ。(ト向うを見て、)や、向うへ誰か来る様だ、うつかり爰にやあ居られねえわえ、どれ、須彌壇の下へ隠れて居ようか。
ト修彌壇の下へ隠れる。と、花道より、和尚吉三毬栗縹色の布子、鼠の帯、繻子は〻合の半纏、草履下駄にて出で来る、後より捕手四人十手を持て窺ひ出で、此後より捕手頭半纏ぶつさき大小にて附添ひ出来り、

捕頭　それ、召捕れ。

四人　はッ、とつた。
ト四人十手にて和尚吉三へ打つて掛る、和尚身を躱してたゞ右へ投退け、又二人掛るを立廻りながら本舞臺へ来り、ちよつと立廻り、四人を投げのけ下に居て、

和尚　こりや、何となされまする。

捕頭　何とするとは知れた事、三人吉三と世に名高く、悪

事を働く其の一人。以前は當寺の所化辨長、只今にては和尚吉三、脱れぬ舊惡。

四人　繩にかゝれ。（ト四人十手を振り上げ、取卷く。）

和尚　（思入あつて、）只今にては善心に立返つたる和尚吉三、舊惡故に召捕ると仰しやりますれば是非がない。いざ、繩をお掛け下され（ト和尚吉三後へ手を廻す。）

捕頭　はて逆れたそちが覺悟、其心底を見る上は、繩目はかけぬ、許してくれる。

和尚　すりや、此儘に私を。

捕頭　いや、たゞは許さぬ其替り、そちが兄弟の義を結びし、安森源次兵衞が忰武家お構のお坊吉三、又八百屋久兵衞が娘お七と名乘るお孃吉三、種々の惡事を働く故からめ捕らんと此程より、草を分て詮議致せど、一向に行方知れず、殊には又彼等が面體身共確と存せぬ故。汝に詮議を申付ける、搦め捕らば重畳なれど、手にあまらば討取つて、首にしても苦しうない。手柄次第で是迄の汝が舊惡許し上、褒美の金子遣はす間、命に替へて詮議致せ

和尚　すりや私が舊惡を、お許しあつて兩人の詮議をさせと仰しやりますか。

捕頭　いかにも。

和尚　（思入あつて、）脊に腹は替へられぬ。假令いづくに隱るゝとも元が三人一つ穴、蛇の道はへびとやら、きつと尋ねて差出しませう。

捕頭　萬一以前のよしみを思ひ、彼等を助ける其時は、汝が罪は十倍だぞ。

和尚　そりやもうお案じなされますな、身の舊惡が消えた上、褒美の金になる事なれば、其處が元が惡黨だけ、何助けますものか。して御褒美は、幾ら下さります。

捕頭　先一人前が五兩宛だ。

和尚　なに、たつた五兩か。

捕頭　五兩宛では不足と申すか。

和尚　言はねえでも知れたことさ、兄弟分のよしみを捨て、人に惡く云はれるのを承知で詮議を受合ふのは、褒美の金がほしい故、澤山はいらねえ百兩なら、詮議しだして差上げませう。

捕頭　高いものだが仕方がねえ。望みの通り遣はす間、搦め捕つてさし出せ。

和尚　金にさへなることなら、明日とも云はず今夜中に。

捕頭　然らばそちが吉左右を。

和尚　お待ちなされて下さりませ。
捕頭　承知致した。家來參れ。
捕人　はあゝ。
ト時の太鼓になり、捕手一同花道へはひる。和尚後を見送り。
和尚　お孃お坊二人とも、斯う詮議が嚴しくなつちやあ、もう、うか／＼と此江戸に、足を留めちやあおかれねえ。
お坊　（出て來り。）兄貴、歸りなすつたか
和尚　や、こりやお坊にやあいつの間に。
お坊　さつき來たが人目がある故、須彌壇の下に隱れて居た。
和尚　よく尋ねて來てくれた。久しく手前に逢はねえから、逢ひたく思つて居た所だ。二三日泊つて行くがいゝ。
お坊　いや、さうかうか／＼としちやあ居られねえ。己も段段喰詰めて、この江戸にも居られねえから、旅へでも出かけようと、暇乞ながら尋ねて來たが、どうでいつかは捕られる體、さあ己に繩を掛けてくれろ
和尚　なに、己に繩を掛けろとは。
お坊　他人の手に掛つて行かうより、兄弟分の手前の手にかゝつて己も行きてえから、繩を掛けて送つてくれろ。

和尚　はあゝそんなら今の話を聞いてか、いや手前も分らねえものだぞ、一旦兄弟になつたからにやあ親が命を捨てればとて、手前達を出すものか、そんなしみッたれた根性の和尚吉三と思つて居るか
お坊　さうだらうとは知つては居るが、どうで一度は行く體、とても命を捨てるなら、一旦兄と賴んだ故、手前の惡事を消して行く氣だ。
和尚　其志しは忝たいが、そんなまでねえ事はしねえ。褒美を百兩くれるなら搜し出さうと云つたのは、慾に迷つてする樣に氣をゆるさせて其內に、何處へなりとも逃す氣だ。とても草鞋を穿くならば近くに居ずと遠くに行つて、手足を伸ばしてゆつくりと枕を高く寐るがいゝ、聞きやあ手前は武家育ち、安森源次兵衞が伜だといふが、それに違えはねえかえ。
お坊　いかにもおらあ元は昵近、親父は安森源次兵衞といつて堅藏な人であつたが、其頃刀の目利者で將軍家から預かり、庚申丸といふ短刀を、盜まれたので言譯なく、切腹なして家は斷絕、浪人してからお袋の長の病氣に妹に、其身を賣つて苦界の勤め、高い藥の甲斐もなく遂に死なれて仕方なく、末子の弟森之助を若黨の親仁に預け

それから氣儘にくれだして、してえ三昧する内にも其短刀を尋ね出し、再び家を興さうと、心に忘れはしねえけれど、いまだにありかゞ知れねえから、己が望みは叶ふめえよ。

和尚（扨はといふ思入あつて、）それぢやあ手前は昵近の、安森源次兵衛といふ人の悴であつたか。はて、知らねえ事とて。

お坊　むゝ、手前親父を知つて居るか。

和尚　おれが親父が。

お坊　え。

和尚　いやさ、親父が噂に聞いたばかり、其代物は知らねえが、さうして其短刀の恰好は。

お坊　相州物の無銘にして、しかも燒刃に三匹の猿の亂れ燒き、丁度長さは此位だ。

　ト目貫の差添を出す。和尚取つて、

和尚　むゝ、それぢやあ長さは此位か。（ト見て、）や、吉の字菱の此目貫は、片々ねえがどうしたのだ。

お坊　そりやあ此間、大恩寺前で。

和尚　え。

お坊　犬に吠えられ追散らす、はずみに何處へか落したが、さし裏だから其儘置いた。

和尚　そいつあ惜しい事をしたな。

お坊　おゝ何だか話しが理に落ちた、早く一ぺえ呑みてえが、源次は何處迄行つたか知らぬ。

和尚　ほんに源次は其以前、手前とは馴染ださうだが、何ぞ買ひに遣つたのか。

お坊　あんまり寒いから、酒を買ひに遣つた。

和尚　そいつは惡い者に買ひに遣つたな。口がもろいから喋べらにやあいゝが。何にしろ日が暮れてゆつくりと話さうから、まあそれ迄窮屈でも、今の所へ隱れて居ろ

お坊　それぢやあ、一寐入やつて待たう。

和尚　寐るなら是を抱いて寐ろ。

　ト打敷と辻番火鉢をやる。

お坊　こいつあ有難い。

　ト木魚入りの合方になり、お坊須彌壇の下へ隱れる、此鳴物にて花道より以前の源次二升樽、軍鷄葱を提げて出て來る。跡より前幕の十三郎、おとせ附添ひ出で來る。

源次　もし、お前方が尋ねなさる、吉祥院は向うだよ。

十三　是は有難うござります、して難長殿に居られますか

な。
源次　さつき湯へ行くといつて出られたが、もう大方歸られましたらう。
とせ　憚りながら妹が參りましたと、仰しやつて下さりませ。
源次　あい／＼承知しました。(ト本舞臺へ來り、十三郎おとせは下手に、源次は閻爐裏の傍へ來り。)あい、今歸りましたよ。
和尚　おゝ源次坊、何を買つて來た。
源次　さつきお前の留守に、お坊吉三が
和尚　あこれ。(ト言つては惡いといふ思入。)
源次　酒を買つて來てくれろといふから、寒さ凌ぎに軍鷄と葱を買つて來た。
和尚　そいつあ妙だ、併したれがなくつちやあいかねえが、源次の事だから貰つて來たらうな。
源次　所がすつかり忘れて來た。
和尚　氣の利かねえ奴だな。
源次　おゝ忘れねえ內言つて置くが、今そこでお前の妹だといふのが尋ねて來たから連れて來たよ。
和尚　なに、妹が來た。

とせ　兄さん、私でござんす。
和尚　おゝおとせかよく來た。もし、こつちへおはひりなさい。
十三　御免下さりませ。(ト下手へはひり住ふ。)
源次　どれ、忘れねえ內に軍鷄をこさへようか。
和尚　手前出來るか
源次　出來なくつてさ、坊主軍鷄に二年居やした
ト軍鷄と葱と酒を持つて奥へはひる。
和尚　さあ妹、遠慮はねえ、爰へ來い。
とせ　兄さん御免なさいまし。さあ十三さん、お前も爰へ
ト十三郎前へ出て。
十三　これは初めてお目にかゝりますが、私は十三と申しまして。
和尚　其挨拶には及ばねえ、友達から聞きましたが、不思議な緣で妹と、(ト二人を見て思入。)たつた一人の妹故、可愛がつてやつておくんなせえ。
十三　いえもう、私とても便りのない者、おとせを緣に是からは、あなたを力にお賴み申します。
和尚　そりやあ兄弟になるからは、云はねえでもお前方の、力にならねえでどうするものだ。

十三　それは有難うござりまする。
和尚　して、父さんにやあ變りはねえか。
とせ　え、それならお前知んなさらぬか。
和尚　なに、知らねえかとは。
十三　親父樣には此間、人手にかゝつて敢ない御最期。
和尚　え、そりやまあ何處で。
とせ　しかも先月三日の夜、大恩寺前でむごたらしう、人に殺されなさんしたわいな。
和尚　えゝ、そんなら父さんは死なれたか、やれ可愛さうに。（ト兩人を見て）然しその方が仕合せだ。して殺した者は知れねえか。
とせ　ぬしは誰とも知れねども、死骸の傍にあつたのは。
十三　吉の字菱の片々の目貫、是が即ち敵の手掛り。（ト十三郎紙入より、吉の字菱の目貫の片々を出す。和尚見て、）
和尚　そんなら是が。（トびつくりする。）
十三　え。（トこなし。和尚は須彌壇へ思入あつて）
和尚　こりやあいゝ手掛りだ。（ト十三へ目貫を渡し、）斯うとは知らず爺さんが、金に困ると聞いた故、昔に返つて、いやさ、昔に返つて今では坊主、餓鬼の折から苦勞を掛けた、せめて不孝の恩返し、來世のくげんを助かる樣、菩提は己が弔はう。（トホロリとして）それに付けても二人が身の上、また百兩の金の入譯。
十三　お尋ねなくとも身の上を、お話し申しに參つた二人。
とせ　金の入譯段々の、せつない話しの一通り。
十三　お聞きなされて、
兩人　下さりませ。
十三　元私は木屋文藏が召仕、先達御贔屓の海老名軍藏樣といふ御武家樣へ、短刀を賣りました其代金百兩を請取り、歸る道すがら引かゝる袖に大事を忘れ、これなるおとせの小家の內、語らふ間もなく喧嘩の騷ぎ、あわてて迯げる其はずみに、取落したる百兩金。
とせ　それを私が拾ひし故、大方尋ねてござんせうと其明る夜に金を持ち、小家へ行たれど廻り逢はず、すご〳〵歸る兩國橋、道から連になつたは、年の頃は十七八で、丸の內に封文の五つ所紋の振袖着た、人柄のよい娘御、油斷のならぬは盜人にて、金を取られたその上に、私や川に突落され、死ぬ所をば緣でがな、此十三さんの親御、八百屋久兵衞樣に助けられ、危い命を拾ひました。
十三　又私はさうとは知らず、身を投げ死なうと致した

所、傳吉樣に助けられ、娘が金を拾つた故其家へ來いと聞く嬉しさ、參つて見れば右の始末、それから金の出來る迄此方に居ろと御親切な、其お詞が緣となり、媒人なしの夫婦の約束。

とせ　これから金の才覺に朝から晩迄父さんは、所々方々へ行かしやんすれど、何をいふにも百兩故、容易な事で手に入らず苦勞くげんの甲斐もなく、大恩寺前でむごたらしう、人に殺され非業な御最期、かうして居ても其時の姿が目先へちらついて、悔しうて／＼なりませぬわいな。

十三　かてゝ加へて私の主人木屋の文藏樣、ふとした事から丁子屋の一重といふ女郎に馴染み、引くに引かれぬ意地となり廓の金にはつまるのならひ、それから内は左り前段々窮く不時の物入、終には家も仕舞はれて、今では今戸に微なお暮し、どうぞして其金を少しも早く上げたいと、心に思へど出來ぬは金。

とせ　父さんのない上からは、外に賴みにする人もないてばかり二月越し、四十九日も立つた故。

十三　親父樣の敵をば、尋ねて討ちたうござりますれど、御覽の通り弱い體、助太刀をして下さる樣。

とせ　又二つには文里樣も、御難儀故に上げたいお金。

十三　御迷惑ではござりませうが、賴みに思ふはお前樣。

とせ　どうぞ二人が力となり、

十三　敵の助太刀。

とせ　金の調達。

十三　偏にお賴み、

兩人　申しまする。

ト兩人思入あつて言ふ。此内和尙も思入あつて、

和尙　手前達が賴まずとも、己には親の敵なれば討たねえでどうするものだ、またつた一人の妹につながる緣のこなたの事、金もおれが呑み込んだ、必ず／＼案じさつしやるな。

十三　そんなら二人の賴みをば、

とせ　聞屆けて下さんすとか。

兩人　えゝ、有難うござりまする。（ト兩人悅ぶ　和尙是を見て愁ひの思入あつて）

和尙　其悅びが、もう此世の。

兩人　え。

和尙　いやさ、これに付けて二人に話さにやならぬ事があるが、奧に今の坊主が居れば、是から裏の墓場へ行き、

三つがなわで相談しよう。

十三　それは〳〵忝ない、嘸や草葉の蔭にて親父様のお悦び。

とせ　少しも早う、裏の墓場へ。

和尚　後から行く、お二人は先へ。

兩人　そんなら兄さん。

和尚　湯灌場で待つて居やれ。（ト十三おとせ下手にはひる後を見送りて、）あゝ、何にも知らず睦まじく、連立つて行く二人が身の上、これといふのも親の報い。あゝ、悪い事は出來ねえなあ。

源次　（向より出來りて、）なに、出來ねえことがあるものか。

和尚　や（トびつくりなす。）

源次　それ見なせえ、すつかり出來た。

ト軍鶏の皿を出し見せる。

和尚　むゝ、こりやあよく出來た。

源次　大磨り庖丁を、どんなに骨を折つて研いだか知れねえ。

和尚　むゝ、こいつあ切れさうだ。

源次　切れるどころか、人でも切れらあ。

和尚　（庖刀を取つて思入あつて、）おゝさつぱりと忘れて居たが、御苦勞ながら源次坊、駒込迄行つて下ッしな。

源次　今ッからかえ。

和尚　暮れねえ内に行つて貰ひてえ。

源次　行けなら行きやすが、軍鶏を喰つて行きてえね。

和尚　道で喰つて行つてくれ。それ、萬の鍋が二枚に、酒が五合、殘りは使賃だ。（ト和尚一分出してやる。）

源次　おや、この額かえ、こいつあ有難い。そうして用は、何だえ。

和尚　駒込の早桶屋へ行つて、早桶に經帷子一式揃へて、二人前買つて來て下せえ。

ト一分やる。

源次　えゝ、何にしなさるのだ。

和尚　亡者の拵へで、仕事があるのだ。

源次　それぢや行つて來ますよ。

和尚　遲くなつても大事ねえよ。

源次　どうで一ぺいやつちやあ急にやあ行かれねえ。

ト下駄をはき、花道附際迄行く。

和尚　（庖刀の刄を見てうなづき、手拭に巻き、）あゝ嫌なから、殺生を。

源次　ト二人を殺さうといふ思入。
源次　え、ト振返る。
和尚　えゝ、まだ行かねえのか。
源次　急がなくつてもいゝといふぢやあねえか。
和尚　ぐづ／＼言はずと早く行けよ。
源次　あい。何だかさつぱり分らねえ。
　ト花道へはひる。
和尚　源次が研いだ庖丁で、こりや一番ひどい目にやあならねえ。
　ト禪の勤にて和尚下手へはひる。
お坊　（出來りて、）知らぬ事とて此間、大恩寺前で殺した親仁、只の者とは思はなんだが、和尚の親とは知らなんだ、其夜取つたる百兩も、妹が縁に文里殿へ見繼の爲の恩返し、又傳吉があの折にわッつ口說いつ貸せと言つたも、やつぱり同じ文里殿へ落した金を償ふ百兩、明し合つたら命をば捨てずに事の濟まうのに、言つて返らぬ互ひの因果、まだ其上に百兩も噂の惡い己が手で、出來たと聞いて文里殿も氣味を惡がり請取らず、重ッたらしく持つて來て、此入譯を聞くといふは、爰で死ねとの知らせなるか吉の字菱の目貫が證據に、和尚は己が殺したと推量したに違えねえ、知らぬ先は是非もねえ、それと聞つた上からは、未練に影は隱されねえ。どうで此身も喰詰めて、長く生きちやあゐられぬ體。とても死ぬなら此金を、親父を殺した言譯に和尚へ渡して今爰で、死なにやあ義理が濟まぬわい。
　トちつと思入。とこの時欄間の天人の彫物を取り、内よりお孃吉三亂れたる島田鬘振袖裝にて半身出し
お孃　おい、吉三々々。
お坊　はて誰か呼んだやうだが。
　ト四邊へ思入。
お孃　おい、吉三さん〳〵。
お坊　又呼ぶやうだが、何處か知らぬ。
お孃　おい爰だよ。
お坊　（お孃を見て、）や、其處にゐるのはお孃吉三か。
お孃　これ。
　ト押へ四邊を窺ふ。
お坊　そんなら手前も。
お孃　二三日跡から爰へ來て、此欄間に隱れて居た。
お坊　あゝ、手前にも逢ひたかつた

お孃　己もお前に逢ひたかつたよ。

お坊　まあ何にしろ、この下へ。

お孃　おゝそこへ行かうか。

ト お孃傍に下つてゐる幡を便りに飛下り、傍へ來て、

お坊　手前に逢つたも何日だッけか。

お孃　明暮思ひ出すけれども、

お坊　互ひに忍ぶ身の上に、

兩人　何處に居るやら、

お坊　便りもしれず。

兩人　あゝなつかしかつたなあ。

お坊　猪椎の内に居たからは、手前も今の樣子をば。

お孃　殘らず聞いてびつくりなし、生きて居られず一緒に死ぬ氣だ。

お坊　手前が死ぬとは、どういふ譯で。

お孃　譯といふのは外でもねえ、和尚吉三が妹の、金を百兩取つたのは、嬢婆の此吉三、丸の内に封文の紋が證據に我業と、和尚は知つたに違えねえ。つくぐ\〳〵罪ながら考へれど己が金せえ取らねえけりやあ、落した十三が手に這入り、波風なしに納る所、盜んだばかり其金故、和尚が親父も非業な最期、己が親父の久兵衛にも貧苦の中で苦勞をさせ、義理ある弟の十三が主人文里樣へ御難儀掛けしも、元はといへば皆己故、濟まねえことゝ思ふ矢先、今もお前が言ふ通り、どうで潔く死なれぬ體、爰で死ぬのはまだしも死花、三方四方へ言譯に、己もさども爰で死ぬ氣だ。

お坊　さう聞いて見ると尤もだが、併し手前は手をおろし殺したと言ふ譯でもなけりやあ、今死ぬにやあ及ばねえ、盜んだ金も廻り廻つて和尚へ己が返すから、手前は後に生存らへ、委しい譯を兄貴に話し今日は此身の命日に、兄弟分のよしみを思ひ、水の一杯も手向けてくれ。

お孃　そりやお手前でもねえことだ、手を下して殺さねえとて、それから事が起つたら己が殺したも同じ事、人も死ぬ時死なゝけりやあ、餘計な恥をかゝにやあならねえ。生存らへて居ろといふ何故其日に道連に、一緒に死ねといつてくれねえ。

お坊　なるほど言やあそんなもの、さう心が据つたら、くどくは言はねえ。そんなら爰で、手前も己と一緒に死ね。

お孃　それでこそ兄弟のよしみ、留められるよりおらあ嬉しい。

お坊　あ、考へて見ると勿體ねえ、是でも生れた其時は惣

領故に安森の家名を嗣がす大事の悴と、おかひこぐるみで育てられ、先祖の名だが源次兵衛は若い者に似合はぬから、四十を越えたら名を嗣げと百迄も生す心。それを此身の悪事故、まだ二十五の曉を越さずに死ぬを冥土にて、嘸兩親が恨んでゐよう

お嬢　それに引替へおらあ又、五つの時にかどはかされ他人を親に旅役者、娘姿で歩いたを女と間違へ口說かれた所でふッと筒持せ、悪い事は馴れ易く、人の物は我物と積り／＼し悪事の終り、實の親父も知つては居れど、名乘り合つたらまさかの時、苦勞を掛けねばならぬ故、逢はずに居たが此事を後で聞いたら歎くであらう

お坊　只何事も皆約束、今更言ふはほんの愚痴、なぜ其了簡があるならば盗みをしたと人每に、悪くこそ云へ褒めはしねえ。

お嬢　ほんにそりやあ言ふ通り、是がお主か親の爲、死にでもしたら若いのに、不便なことゝ言はうけれど、非業に死ぬも其身の科。

お坊　これ迄多くの金銀を、取られた人の了簡では、逆磔にも掛けてえ心。

お嬢　畳の上で人らしく、身の言譯に死んだと聞いたら、嘸や悔しく思はうか。

お坊　此世で苦患を受けぬ替り、來世は二人阿鼻地獄。

お嬢　あれあの掛軸に記しある、その身の罪は淨玻璃の、鏡に寫つて明白に。

お坊　血を吐く思ひ血の池の、淵に沈んでいだく石。

お嬢　天秤責に掛けられて、業の秤に罪科極り。

お坊　畜生道の赤馬に、修羅餓鬼道を引廻され、

お嬢　八寒地獄の氷より劍の山の錆となり

お坊　果は見る目や嗅ぐ鼻と、臺に列んで晒す首。

お嬢　今一時か半時の、

お坊　息ある内が極樂世界。

お嬢　思へばはかない。

兩人　身の上じやなあ。

ト兩人宜しく思入。

お坊　とは云へ二人が今爰で、此儘死なば何故か、

お嬢　命を捨てる仔細が分らず、

お坊　幸ひ是なる白幡へ、

お嬢　せめて一筆、

兩人　書殘さん。

ト時の鐘合方にて、お坊は白綸子の幡をとり、お嬢は

硯箱を出し墨をすりにかゝる。此見得にて宜しく道具廻る。

(吉祥院裏手の場)||本舞臺三間の間所々に石塔、上手にこはれ掛りし湯灌場、下手に同じく崩れかゝりし車井戸、柳の立木、後藪疊、日覆より、朧月をおろし、總て本堂の裏手墓場の體。爰へ以前の和尚吉三出刃庖刀を振上げ、上下へ十三、おとせ手を負ひ居る。此見得にて道具留る。と、ちよつと立廻つて和尚肌を脱ぎ切つて掛る、是にて石塔の廻りをまはり、車井戸を遣ひ立廻り宜しくあつて、トヾ兩人を切倒し、きつとなり。

とせ こりや兄さんには、氣が違つてか。

十三 何故あつて二人を、

とせ お前は手に掛け、

兩人 殺すのぢや。

和尚 おゝ氣も違はぬが二人を、生けておかれぬ其譯を、苦しからうが苦痛を怺へて聞いてくれ。ト 和尚石塔へ腰を掛け)さつき二人が物語り、委しく聞いて一々に胸に當りし覺えの證據、おとせが金を盜んだる丸の內に封文の五所紋の振袖で、娘と見せる盜人は、お孃吉三といふ若衆、又親父を殺して其場所へ、吉の字菱の片々の目貫を落した主も同じ仲間のお坊吉三といふ浪人、此二人とは去年の春義を結んだる己が兄弟、而も使つて來た故に、欄間の內と須彌壇の下へ隱して泊めてある。定めて二人が物語、敵の二人も聞いた故、不便ながらも殺すのだ、茲が素人と譯が違つて、惡黨同士の附合に敵と覘ふ手前達を殺して置いて義理を立て、お孃お坊の二人の吉三討つて敵は己が取る、惡い兄貴を持つたばかり、よしねえ命を捨てるのも、親の爲だと諦めて、無理な事だが命を呉れ。これ手を合して拜むぞよ。

ト 和尚宜しく思入にていふ。

十三 さういふ事であるならば、何しに命を惜しみませう。思へば日外身を投げて、死ぬる命を助かつたも傳吉樣のお蔭故。

とせ 私も其折死ぬ所、今日の今迄生きた故、十三さんと夫婦になり、あの世へ迄も手に手を取り、一緒に行くが此身の仕合せ。

和尚 いつそ其折死んだなら、今の歎きは見まいもの。

十三 それも定まる前世の宿業。

とせ　思へば因果な。
三次　身の上ぢやなあ。
ト　これより地藏經の樣な獨吟になり、和尚塗手桶茶碗を持つて〳〵水を汲み、兩人に水杯をさせる兩人犬の思入にて這ひ寄り水を呑む、和尚是を見て情ないといふこなし、十三思入あつて、
十三　只此上のお願ひは、十の年より御恩になつた、文里樣へ失うた金を濟して下さりませ。
和尚　其事ならば案じるな、命に掛けて百兩は、久兵衛殿へ己が渡さう。
十三　それで思ひ置事なし、迷はず往生いたします
和尚　妹も敵は己が取るから、心殘さず冥土へ行け。
とせ　なんの殘さう十三さんと、一緒に行けばあの世にて、
十三　一つ蓮に二世のかため。
和尚　其極樂へは行かれぬ二人。
兩人　なに、行かれぬとは。
和尚　親の因果が子に報い、あの世へ行けば畜生道
兩人　えゝ。
和尚　いやさ、犬畜生に劣つたる和尚吉三も惡事を止め、今は佛のあの世へ引導。

十三　其功力にて極樂へ。
とせ　二人連立つ旅立の、
和尚　行つて歸らぬ、此世の別れ。
ト　和尚兩人の顏へ手を掛け、顏をぢつと見て愁ひの思入あり。
十三　最早近づくこの身の知死期。
とせ　苦痛を助けて少しも早く。
和尚　云ふにや及ぶ。
ト　獨吟になり、和尚庖刀を振上げ兩人を殺さうとする兩人這ひ寄り苦しむ、和尚殺し兼る思入、トゞ兩人うんと倒れる、和尚庖刀を下へ打付けどうとなり泪を拭ふ、此見得寺鐘にて道具元へ戻る

（本舞臺元の本堂の場）――爰に以前のお坊お孃書置を書き仕舞ひたる體、獨吟にて道具留る。
お坊　親父を殺した一部始終、斯うして置きやあ二人が身の上。
お孃　是で兄貴の心も晴れ、
お坊　思ひ掛けねえ義理立で、
お孃　疊の上で、

兩人　死なれるわえ。
お孃　これお坊、お前は武家の息子だから、腹の切り樣は知つて居ようの。
お坊　そりやあ話に聞いて居るから、まさか死にそこなふ樣な事もしめえ。
お孃　おらあ切り樣を知らねえから、つまらなく突込んで、ひく／＼するもみつともねえ、お前己を先へ殺し、後で死んでくんねえか。
お坊　知らざあ己が殺して遣らう、何の造作もねえことだ。
お孃　それぢやあ、和尙の歸らぬ內、
お坊　ちつとも早く、ト兩人身拵へして）さあ覺悟はいゝか。
お孃　未練はねえよ。
お坊　どれ、一思ひに。
トお坊脇差を拔き、お孃の胸づくしを取り、兩人顏見合せ、突かうとする。ばた／＼になり、下手より和尙血のにじみたる白木綿の風呂敷に二つの首を包み、是を抱へ走り出て、お坊の手を留め、
和尙　やれ待つた、早まるな。
お坊　いゝや、死なにやあならぬ譯、
お孃　放して二人死なしてくれ。
和尙　いゝや放さぬ、殺しやあしねえ
兩人　それだと言つて。
和尙　やい、待てと言つたら待たねえか。トお坊の脇差を引たくり）こりや、二人は最前の、話しを聞いて死ぬ覺悟か、
お坊　いかにも、生きて居られぬ譯は、
お孃　書殘したる此書置。
ト白幡の書置を出す。和尙どれと取つて是を讀み、
和尙　流石は二人、死なうとはよくぞ覺悟をしてくれたが、もう死ぬには及ばねえ。
兩人　なに、死ぬに及ばぬとは。
和尙　お孃吉三が妹から、盜んだ金は三人が、出逢つた時に己への寸志、思ひがけねえ金故に、親父へ見繼に持つて行つたを、其時十三が主人方へ戻せば事の納るに、そでねえ金を受けねえと突戻したは親父があやまり、さすればお孃に科はねえ。お坊吉三も己が親父を大恩寺前で殺したは、則親の敵討。
お坊　何と。

和尚　仔細は十年以前の事、お坊が屋敷へ忍び入り、庚申丸を盜みしは、己が親父の傳吉だ。

お坊　むゝ、すりや庚申丸を盜みしは、おぬしが親であつたるか。

和尚　其越度にて安森の家は斷絶、親御は切腹、取も直さず其親父は敵、非業な最期も惡事の報い、二人に恨みは少しもねえ。

お坊　假令敵に當ればとて、己も現在殺せし敵。

お孃　金はお前に遣つたれど、一旦盜みし科ある此身。

お坊　殊には是迄種々樣々、つくせし惡事の重なりて、

お孃　最前來たる詮議の役人、

お坊　繩目の恥を受けるより、

お孃　身の言譯に、

兩人　死ぬのが本望。

和尚　其喰詰めた科をぬき、世間を廣く步ける樣、二人が身替り、それ。

ト十三、おとせの切首を出して見せる。

兩人　これは。

和尚　手に餘つたら首にしろと、長沼からの言附に、お孃お坊が身替り首。

ト風呂敷を明け、內より十三、おとせの切首を出す、兩人びつくりなし、

お坊　おゝ、こりや現在の妹に、

お孃　緣につながる義理ある弟、

お坊　淸い體を穢れたる、なんで二人が身替りに、

お孃　首を切るとは無慈悲な事。

和尚　いゝや二人を殺したは、無慈悲にあらぬ兄が慈悲。

兩人　とは又、何故に。

和尚　此二人は畜生故。

兩人　やゝ、なんと。

ト兩人詰寄る、和尚愁ひの思入あつて、

和尚　何を隱さう此二人は、親父が胤の双生兒にて藁の上より捨てたる十三、廻り〳〵て同胞が畜生道の交りも今も話した庚申丸、盜んだ其夜塀を越し逃出る所へ吠付く犬、聲立てさせじと殺したる犬の祟りと親父の懺悔、それと知つたら二人も如何なる因果と泣あかし、果は死ぬより外はねえ、其悲しさはどの樣と、思ひ過しに親の爲命を取れと僞つて、情なれども現在の我同胞を殺すまで、俺が心の苦しさを推量してくれ、これ二人（ト和尚吉三淚を拭ひ）せめての事に犬死をさせねえ爲に首を切り、

詮議嚴しい二人が身替り、幸ひ是なる白筆の書置、先非を悔んで死したりと持つて行つたら二人の詮議も、それなりけりに世間も晴れ、何處へなりとも行かれる體、向後己も悪事を止めれば、二人も生れ替つた積りで心を入れ替へ堅氣になり、いづくの浦に居ようとも、これら二人を不便なと思ひ出す日があつたなら、西に其日を命日に水でも手向けて遣つてくりやれ。

ト和尚宜しく思入、兩人も愁ひの思入あつて、

お坊　初めて聞いた二人が身の上、兄の情に其事を、言はずに殺すは尤もながら、

お孃　現在敵の身替りに、二人をしては心が濟まぬ。

お坊　我々二人も、

お孃　冥土の道づれ。

ト兩人脇差を抜くを、和尚留めて、

和尚　そんなら二人を此世から、畜生道の犬死さすか。

お坊　それだと云つて。

和尚　おれが心を無にするか。

お孃　さあそれは、

和尚　さあ、

兩人　さあ、

三人　さあ〳〵〳〵。

和尚　どうぞ二人が畜生の、苦痛を脱れる放生會、修羅の苦患を助けて下せえ。

お坊　是程迄に二人を、思つてくれる志し、

お孃　いかにも詞に從つて、一先此場を立退かん。

和尚　ちえゝ忝い。

お坊　（懷より百兩包を出し、）忘れて居たが此百兩、落せし金の償ひに、死んだ二人へおれが香奠。

お孃　向後悪事は思ひ切る證據は入らぬ此脇差、是は兄貴へ置土産。

ト お坊は百兩包、お孃は脇差を和尚の前へ出す。

和尚　すりや百兩に、此脇差。

ト和尚脇差を取つて抜きかけ見る、是へお坊目をつけ、

お坊　はて心得ぬその一腰、似寄りし寸に勝れし金味。

和尚　やゝ燒刄にあり〳〵三疋猿。

お坊　それぞ正しく庚申丸、どうしてこれを。

お孃　日外百兩盜みし折、途中で手に入る其一腰。

和尚　思ひがけなく今爰へ、

お孃　落せし金に、

お坊　失ふ短刀

和尚　二品揃ふ上からは、お孃は金を久兵衞殿へ、（トお孃へ金を出し）お坊は刀を、實家へ早く。

トお坊へ短刀を渡す。

兩人　そんなら是より（トドン／＼と、捕物の鳴物になる）やゝ、あの物音は。

和尚　たしかに捕手、

お坊　爰へ來ぬうち、

お孃　道を違へて、

和尚　ちつとも早く。

兩人　合點だ。

トドン／＼ばた／＼にて、兩人花道へ走りはひる。和尚後を見送り、二つの首を下へ置き思入あつて奧へはひる。花道より以前の源次早桶を二つ重ね、繩にて脊負ひ早桶の棒を手に持出て來り。ドン／＼を聞き、後先へ思入あつて直に舞臺へ來り、

源次　おい兄貴、今歸つたよ。おゝ、まツ暗でさつぱり分らねえ。おい兄貴々々（ト舞臺をうろ／＼して以前の首に躓きどうと倒れ、早桶をはふり出すと、中より經帷子に編笠など出る、源次探り／＼首に手が障る故、是を取上げ撫で見てびつくりなし）おや、こりやあ生首だ。

ト震へる、此内和尚身拵へなして出て來り、源次の傍より首を引ッたくる　これにて源次びつくりなし、たぢたぢとして又首へ手がさはる故、取上げ見て、あゝ又あつた。（ト言ひながら、和尚を透し見て、兄貴か、

和尚　えゝ。

ト源次の持つてゐる首を引たくり突く、源次突かれて早桶の中へぽんと這入る、是を木の頭。和尚は首を持ち向うを見込む。此の見得宜しく寺鐘のキザミにて、

ひやうし幕

七幕目大切　本郷火の見櫓の場

（淨瑠璃）吉三々々の三人が太鼓に廻る三つ巴　初櫓噂高島（清元連中、竹本連中）

（役名――和尚吉三、お坊吉三、お孃吉三、八百屋久兵衞、長沼六郎、釜屋武兵衞、蛇山長次、隅の龍蔵、狸穴の金太、木戸番人時助等。）

（本郷火の見櫓の場）＝本舞臺眞中に雪の積りし火

の見櫓、此前に町木戸、觸書の板札を掛け、上手も雪の積りし屋根、戸の閉りたる町家、下の方材木の書割、打返して淨瑠璃臺になる仕組、上の方雪幕を張りし出語り臺、後ろ黒幕、舞臺雨花道とも雪布を敷き、總て本郷二丁目火の見櫓雪降りの體。雪おろしさんげ〳〵の合方にて幕明く。と爰に浪人長治、熊藏、金太頬冠り一本差にて木戸の傍に立掛り居る。

長治　もし、お頼み申します〳〵。

ト上手より番太の拵の時助、火の番と記せしぶら提灯を提げ出て來り、

時助　誰だ〳〵。

長治　はい、近所の者でござりますが、今女房が蟲氣付いて、取上げ婆さんを呼びに參ります者でござります。どうぞお通しなされて下さりませ。

時助　そりやあ嘸困るだらうが、此木戸は通されぬから、早く取上爺いでも頼むがいゝ。

ト　いひながら上手へはひる。

長治　大きにお世話な事を言やあがる。

熊藏　どれ、今度は己が頼んで見よう。もし、お頼み申します〳〵。

ト木戸を叩くと、時助出て、

時助　えゝうつたうしい、又來たか。

熊藏　もし、今私のお袋が、息を引取り掛つて居りますので、此先のお醫者樣へ參ります者、ちよつとお通しなされて下さいまし。

時助　そりやあ氣の毒なことだが、通す事はならねえから、醫者樣を呼びに行くより、お寺へ知らせに行くがいゝ。

熊藏　おつゥひやかーやあがる。

金太　何でこんなにやかましくなつたか。もし、どういふ譯で宵ッから木戸を打つて通さねえのだ。

時助　それ其處にお觸が出て居るが、三人吉三と名うての惡漢、行方を御詮議なされるに付き、和尚吉三といふ者に二人を捕へて出したなら、其身の科は許してやらうとお慈悲の詞に、殘りの二人お孃お坊の首を切り、長沼樣へ持つて來た所、釜屋武兵衞といふ者が其首を知つて居て、僞首だと訴人をしたので、和尚吉三は直に縛られ、跡の二人を召捕る爲に木戸を打つて往來留め、首尾よく三人召捕れば合圖に櫓の太鼓を打ち、木戸を明けて通すのだ、幾ら何と言はうとも太鼓が鳴らねば通されぬ。

ト三人是を聞きびつくりなし、

長治　それぢやあ三人吉三の内、和尚吉三がくらひ込んだか。

熊蔵　お坊吉三が捕れると、三人が身にも拘はる事、うかうかしちやあ居られねえ。

金太　何にしろ此木戸をどうかして通りてえものだ。（ト思入あつて）もしちよつと一合買ひますが、内證で通しちやあくれめえか。

ト木戸の間より百錢を出す。時助取つて、

時助　通すことはならぬのだが、それぢやあこつそり一人宛、潛門から通らつしやい。

兩人　それは有難うございます。

ト長治木戸の潛門より内へはひる。前幕の長沼先に捕手二人出て、

長沼　怪しい者ども、それ召捕れ。

捕手　はッ、捕つた。

ト長治を十手で打ちすゑる、長治びつくりなして逃げようとするを繩を掛ける。

長沼　えゝ忌々しい。

ト兩人是を見て、

熊蔵　こいつアたまらぬ。

金太　早く逃げろ。

ト逃げに掛る、下手より同じく捕手二人出て、

捕手　捕つた。

ト立廻つて兩人を打ちすゑ、繩を掛ける。

兩人　えゝ、喰ひ込んだか。

三人　口惜しい。

ト時の太鼓になり、長沼先に捕手三人を引立て、時助附いて上手へはひる。時の太鼓打上げ、上手の淺黄幕を切つて落すと、竹本連中居並び、下手村木の張物を打返すと、清元連中居並び、掛合ひの淨瑠璃になる。

清元〽春の夜に降る泡雪は積もるとも、罪科重き身の上に、吉三々々と世を忍び派手な姿も色さめて　竹本〽去年の椿の花もろく落て行方も白妙の、清〽四つの街や六つの花、

ト本釣鐘を打込み、花道よりお坊吉三頬冠り尻端折、大小米俵を冠り出て來り、是と一時に東の假花道よりお嬢吉三頬冠り褄を端折・絲だてにて出て來り、双方一時に花道へ留る。

お坊　思ひ出せば十年以前盗み取られし庚申丸、今宵計らず我手に入り、

お嬢　義理ある弟が失ひし其代金の百兩も、廻り廻つて持

ちながら、
お坊　晝は人目を忍ぶ身に、夜明けぬ内に屆けたく、
お孃　思ふ計りに行く事の、ならぬは二人が身替り首。
お坊　水のあはれや顯れて、擒となりし和尚吉三、
お孃　助けたいにもこの如く、
お坊　我々二人を捕へんと、
お孃　行く先々の木戸を打ち、
お坊　行くに行かれぬ、
兩人　今宵の仕儀。
竹へ後見らるゝ落人に軒の氷柱も影凄く　淸へぞつと白刃にあらねども襟につめたき春風は、　竹へ筑波ならひか、　淸へ富士南、　竹へ吹雪厭うて、　淸へ來りける。
ト雪下しを冠せ、兩人本舞臺へ來り、眞中の木戸を見て、
お坊　やうやく跡の木戸を越し、やれ嬉しやと思ひしに、
お孃　又もや爰に、閉りし木戸。
へふさがる胸の晴れやらで、星はなけれど雪明り、若しやと顏を見合せて、
ト兩人困る思入あつて木戸の間より互ひに透し見て、傍へ寄り、顏を見合せ、

お坊　や、其處へ來たはお孃吉三か。
お孃　さういふ聲は、お坊吉三。
お坊　あ、これ。
ト兩人四邊へ思入。
淸へ逢ひたかつたと木戸越しに、縋る手さへも震はれて、　竹へまだ春寒く溫め鳥、放れ片野に餘所目には、　淸へ色とみよりの片翅、
ト木戸越に手を取交し、雪にこごえる思入。
お坊　和尚吉三が異見により、惡事に染まぬ白絲の心を元へ繰返し、手に入る短刀渡せし上、此江戶を立退いて家名の穢れをすゝぐ了簡。
お孃　同じ心に百兩を親へ渡して是からは、男姿に立返り、生れ替つた積りにて善を盡して亡き人の、菩提を訪はんと思ひしに、
お坊　天道樣がお許しなさらず、行くに行かれぬ四鳥の四つ辻。
お孃　脫るゝだけはと思へども、今宵の内には捕へられ、
お坊　繩目の恥に死ぬのも約束。
お孃　今更いふも愚痴ながら、
淸へ五つの年に勾引され、故郷を放れ旅路にて憂年月を

越路潟、苦勞信濃についいつか戀には迷ふ陸奧、竹〽立ちし浮名の白浪に跡を隱して此江戸で、同じ吉三に兄弟の結びし縁も薄氷、滿〽碎けてけふは散々に、落せし金の百兩は我手に入つて行く事の、ならぬは何の因果ぞや、

（ト此内お孃こなしあつて、）竹〽まだ其上に花の兄、木咲にまがふ室の梅、其身替りに捕へられ、滿〽散行く覺悟と聞くからは、魁なして救ひし上死なば諸共死出三途

竹〽たんに是迄親達へ孝行さへも白玉の身の詫ごとも冥土でと、滿〽心の根ざし哀れにも、竹〽溜る涙ぞ誠なる、

（ト お坊・お孃木戸を隔てゝ宜しくこなしあつて、）竹〽暫し歎きに沈みしが、ふつと目に附く櫓の太鼓、

ト雪おろし、時の鐘、雪しきりに降る、兩人後の櫓を見て、

お坊　むゝ、あれに掛けたる觸書に、我々二人を捕へなば、合圖に櫓の太鼓を打ち、四方の木戸を開けとある、

お孃　若し又猥りに打つ者は、曲事たりと記しあれど、どうで脱れぬ上からは、罪に罪を重ぬるとも、

お坊　四方の木戸を開かせて、首尾よく二品渡せし上、

お孃　命を捨て和尚吉三を、

お坊　助けてやらねば義理が濟まぬ。

お孃　幸ひ是に梯子もあり、

お坊　打てば打たるゝ櫓の太鼓、

お孃　やはか打たいで、おくべきか、

滿〽見上げる空に吹下す、夜風に邪魔な振りの袖、帶に挾んで褄引上げ、竹〽登る後に窺ふ捕手、

ト お孃櫓を見上げきつと思入、身拵へして梯子へかゝる。お坊は四邊を窺ひ居る。此時上下より捕手四人出て、

捕手　やあ、櫓へ登る狼藉者、そこ一寸も、

四人　動くまいぞ、

ト取捲く。兩人きつとなり、

お坊　むゝ、見咎められたら、もうこれ迄、

竹〽命一つを捨鐘と、胸に時うつ左右より、

ト兩人身拵へするを、

捕手　それ、打つてとれ。

トドン〳〵になり、捕手二人づゝ掛り、掛りてちよつと立廻り、上手へ捕手を追ひながらはひる　知らせに就き鳴物にて此道具をせり下げ、櫓の上になり、左右に屋根、雨落より霞を出し、向う打拔き町屋灯入りの遠見、子持筋の提灯をあまた見せ、道具納まる。

竹〽降積る雪に山なす屋根の上、お坊吉三は邪魔させじと、さゝゆる捕手を追ひ散らす、吹雪烈しき働きに、

ト此内お坊下手の家根へ、捕手四人を相手に立廻りながら出て來る。

竹〽打つて掛るを身をかはし小腕取つて右左り、雪に悦ぶえのころ投げ、シヤ小ざかしと前後よりむんづと組むを切拂ふ、刄風するどき屋根傳ひ、

トドン／＼にてお坊捕手と立廻りあつて、屋根傳ひに後へ捕手を追つてはひる。

淸〽裾もほら／＼やう／＼と、お孃吉三が竹梯子、登れば辷る水氷、足に覺えもなく雁の聲も亂れて後や前、

トお孃上手の屋根へ捕手四人と立廻りながら出て、ドンドンにて立廻りあつて、

竹〽あしらひ兼ねし後よりお坊吉三が助太刀に、こなたはなんなく火の見の上、撥おつとつて打つ太鼓、

ト此内お坊後から出て捕手を投退ける。お孃櫓へ上り、太鼓を打つ。お坊捕手を追込み櫓の柱へ取附ききつと見得、揚幕にてドン／＼になる。

淸〽晉に開きし木戸よりも、和尚吉三は武兵衛を討ち、遺恨の胸を開かんと、駈來る姿見るよりも、

お坊　や、あそこへ來たは、

兩人　和尚吉三か。

和尚　さういふ聲はお坊、お孃か。

ト下手の屋根へ和尚吉三出て來る。

お坊　こなたの命を救はんと、

お孃　是なる櫓の太鼓を打ち、

和尚　すりや、此木戸の明いたるは、二人が情であつたるか。

ト此時上下へ捕手四人づゝ出て、

捕手　それ、三人とも打つて取れ。

皆々　合點だ。

和尚　おゝ何をこしやくな。

ト上手の屋根のお坊、下手の屋根の和尚へ四人づゝ掛る。

淸〽雨はふれ／＼ふれ／＼小雨、濡れて嬉しき屋根の上、追ひつ追はれつ戯れ狂ふ猫の戀路の仇枕、ヨイ／＼ヨイ／＼ヨイヤサ。

ト此内よろしく立廻りあつて、

竹〽流石の捕手もかなはずして、逃るをやらじと追うて行く、

トドン／＼になり、和尚お坊上下の後へ捕手を追ひながら飛下りる。お孃櫓より下を見て、

お孃　和尚吉三を救ひし上は、少しも早く此の百兩、手渡しゝたいものだやなあ。

ト櫓の柱へ取附き下を見込む。是をきつかけに迫り上げの鳴物になり、知らせに附き此道具迫り上げ、元へ戻る。舞臺眞中へ和尚吉三と武兵衛切結ぶ形にて迫り上がりちよつと立廻つて、

和尚　おのれ武兵衛め、よくも訴人をしをつたな。

武兵　おゝ贋首だから訴人をした。

和尚　犬死させた返報は、汝が命を貰つたぞ。

武兵　こしやくな事を。

清〽切込む刄てうと受け、訴人の遺恨覺えよと、

ト和尚武兵衛立廻り、此内櫓よりお孃屋根へ下りる。捕手一人掛るを、立廻つて上手へ飛下りる。下手へお坊捕手一人と立廻り出て切倒す、三方宜しく、和尚武兵衛を切倒し、止めをさす。

竹〽難なく武兵衛を刺殺す、折から來る八百屋久兵衛。

トはた／＼になり、下手より八百屋久兵衛八百久とした弓張提灯を持出來り、お孃を見て、

久兵　や、そちや別れし倅なるか。

お孃　さういふは親父樣か。

久兵　あなたは安森樣の若旦那、此方は傳吉殿の息子とのか。

トお坊、和尚へ思入。

お坊　實はお孃が親父といふは、屋敷へ出入りの八百屋なるか。

和尚　思ひ掛けない三人に、繋がる縁の久兵衛どの。

お孃　弟が失ふ百兩が、手に入つたれば

ト懐より前幕の金を出し渡す。

お坊　又我家で紛失せし、此短刀を彌次兵衛へ、

ト懐の内に差したる短刀を出す。

久兵　すりや噂に聞きし庚申丸、百兩の金が手に入りしか。

和尚　又も捕手の來らぬ内、久兵衛殿には二品をちえゝ忝ない。

久兵　おゝ、言ふにや及ぶ。これさへあれば安森のお家再興に、木屋のお内も再び立たん。心殘れど長居は恐れ

ト金を懐へ入れ、短刀を腰へ差す。

三人　少しも早く

久兵　おゝ、合點

竹〽おゝ合點と勇み立ち二品携へ久兵衛は、飛ぶが如く
にかけて行く。

ト雪おろしばた〳〵にて、久兵衛花道迄行き、提灯を
吹消し逸散にはひる。

清〽早是迄と三人は互ひに手に手取交し、

和尚　最早思ひおく事なし、

お坊　是迄盡せし惡事の言譯、

お孃　我と我手に、

三人　身の成敗。

清〽櫓太鼓の三つ巴廻る因果と三人が、竹〽差し違うた
る身の終り、清〽惡事は消える雪解に、清〽浮名ばかり
ぞ、

ト三人名殘りを惜しむ思入あつて、和尚眞中に、お坊
お孃下に居て、三つ巴になり、差違へる。捕手出て、

捕手　動くな。

三人　何を。

トきつとなる。此時樂屋頭取出、

頭取　今日はこれぎり。

と目出度く打出し

三人吉三（終り）

勸善懲惡覗機關

八幕

表は筵の生垣に藪醫は知れし長庵が悪事は日
日に糀町井戸より深き慾心に畏犬を殺せし血
汐の赤羽根面も其夜は雨降りで忘れし傘に道
十郎が疑ひ受し身の濡衣乾く間もなき妻のお
りよが涙に暮す痩世帯同じ思ひの久八は世に
落ぶれし屑買も心掛ぬ小鏡に添へて買たる
折手本緣もしがらむ藤掛氏北主とある道之助
が元手も細き小商内大なけすりし中間の子分
の詑に忠藏が貧苦を救く情の男氣人の噂も吉
原の小夜衣連れて千太郎が逃げる途中の強異
見死ぬるを留むる手が外れてあへなき最期に
自身の白狀折から村井長庵が牢舎と聞き早乘
三次が証込み訴訟これぞ名だかき大岡政談

草雙紙の表紙繪

長庵（小團次）おりよ（菊次郎）

勸善懲惡覗機關（村井長庵　八幕）

序幕

麴町村井長庵宅の場
赤羽根十兵衛殺の場
平川天神裏門前の場

（役名――村井長庵、入入れ貝坂の忠藏、浪人藤掛道十郎、百姓重兵衛。雇婆おかん、其他。）

（村井長庵宅の場）本舞臺三間の間常足の二重、正面更紗の暖簾口、上手一間地袋戸棚。此上に藥研、藥袋積みあり、下手店石摺の襖、上の方に障子屋體、下の方一間玄關式臺附、向うやはり石摺の襖、二重と玄關の境は門ッ目垣にて見切り、玄關の柱に村井長庵といふ表札、總て麴町町醫者長庵宅の體。二重に雇婆おかん、口入婆お百源太郎單物の上へに木綿半纏病人の裝お萬小娘の裝二人とも藥取の體。この見得稽古唄角兵衛獅子の鳴物にて幕明く、

かん　どなたも大きに、お待遠でござりまする、今午後のお廻りからお歸りなすつたばかりゆゑ、もう少しお待ちなさいまし。

源太　今朝取りに上りますのを、用があつて下町へ參り遲くなつて濟みませぬ。

お百　私は先生が御見舞なされてお加減をなされますとおつしやつたから、それを頂きに上りました。

お萬　わたしのは今日御願ひ申し、初めて取りに參りました。

源太　自由がましうござりますが、お早くお願ひ申します。

かん　此頃は時候が惡く、惡い風が流行るので大そう先生もお忙しく、お藥取の絶間がないが、何をいふにも旦那お一人、御新造も無けりやあ御弟子もなし、それでわたしが雇に賴まれ、四五日後から來ましたが、かう藥取りに來られては息をつく暇がない。雇賃を三割も增して貰はにやあ勤まらない。

源太　そりやお前の御勝手だが、今日は早く歸りたいから どうぞお藥を下さいまし。

かん　よく藥をくれ〳〵と四谷怪談の小平ぢやアあるまいし、出來れば直に上げますよ。(ト上手へ入る。)

お百　今をばさんの言ふを聞けば、妾の旦那はお一人でまだ御新造がないといふが、こりやあ聞流しにはならない事だ、よいのを一人お世話をして、お禮をお貰ひ申したいものだ。

お萬　ほんに慶庵のをばさんは聞いた事を逃さないね、直に御世話をしたいとは、少しも拔目のない事だね

源太　そこは生業柄だから、御新造の御世話をして慶庵賃で藥代を差引といふ考へだらうね。

お百　とてもの事に手の筋といひたい程に當てられたが、何にしろ此間から斯う風邪が流行ては、長庵さんはお仕合せだ。

源太　そりやあ長庵さんばかりぢやあねえ、何處の御醫者も大仕合せだ。

お萬　それぢやあ神農樣よりもお醫者樣は、風の神を祭つた方がよからうね。

源太　此子もなか〳〵口が惡い

お百　そこは鐵棒お鐵といふおつかあの娘だから、口ぢやあ男もかなはないよ。

かん　(奧より藥包を持出て來り、)さあ〳〵お藥が出來ました、是が鳥屋の娘の子生薑が二片入りますよ。是が八百屋の息子さん、又口入のをばさんのは今日は加減がしてござります。

ト三人に藥包を渡す、時の鐘鳴る。

源太　おやもうあの鐘は暮れ六ツだ。

お萬　曇つたせゐか暗くなつたね。

お百　どうやら一ト降りありさうだ。

源太　降らない中に歸りませう。

お百　大きにお世話に、

三人　なりました。(ト三人は玄關口より下手へ入る、おかん後を見送り、)

かん　なんのかのといふうち、もう日が暮れてしまつた、あしたの仕掛もしておいたれば、今日のお勤も濟んだといふもの、どれ灯りを點けておきませう。

ト稽古唄になり、おかん行燈を出し灯心點ける、此唄にて上手障子屋體より村井長庵、坊主かつら黑の羽織着流し醫者の拵にて出來り、

長庵　此頃の流行風で不斷暇な長庵も朝からの藥取りに、たつた一人でほつとした。先づ今の三人で片附いた、(ト

いひながらおかんを見て）おゝ雇のをばさん、大きに御苦勞だ。
かん　いえ私よりは旦那さまは、嘸お勞れでござりませう
長庵　なに、幾人病人があらうとも、馴れた事故苦にはせぬが、こなたは日々忙しないので、骨の折れることだらう。さうして用は片附いたかな。
かん　はい、あしたの仕掛も何もかもとうに仕舞ましたから、けふは少し早くお暇をお貰ひ申したうございます。家の嫁が產み月で蟲がかぶると申しますから手傳つてやりたうござります。
長庵　それは困るであらうから、あしたの用を片附けたら早く家へ歸るがいゝ。
かん　有難うございます。
長庵　明日も早く來て下され。
かん　畏りましてござりまする。（ト此時雨車になり、おかん門口をあけて見て）おや／＼雨が降つて來た。もし旦那樣降出しましたから、お傘をお貸し下さりませ。
長庵　おゝ持つて行くがよい
かん　（下手に掛てある傘を取つて）左樣なら、又明日あがりまする。（トおかん傘をさし下手へ入る。）
長庵　雇ひ女といふ者は兎角に口のさかないもの、それゆゑ夜は家へ歸すが、後は一人で不自由なことぢや。
ト雨車、時の鐘になり、花道より藤掛道十郎羽織着流し大小、浪人の拵、下駄にて、井桁に藤といふ印の附し白張の傘をさし出來り、
道十　未だ殘暑も去り兼ねて凌ぎ難きに此雨は、まことに天の賜物ぢや。雨中ながらも下駄がけで步行の出來る樣になつたは、長庵老のお蔭ゆゑ、ちよつと今日は禮ながら音信て行きませう。（ト玄關口へ來り）頼み申す、先生は御在宿でござるかな
長庵　（出て來り。）これは／＼藤掛氏、ようこそ御入來下された。まあずつとお通りなされませ。
道十　然らば御免下さりませ。
ト傘を玄關へ置き、二重へ來る。
長庵　生憎雇の女が出まして、お茶さへも差上げませぬ。
道十　それは御無用になし下さりませ、拙者も追ひ／＼全快に赴き、夕刻より神詣を致し、御禮旁々此樣子を御覽に入れたく存じまして、お立寄り申しました。全く先生の御丹誠ゆゑ忝なう存じまする。

長庵　それは何よりの事でござる、愚老も丹誠は致したなれど、此邊迄御歩行が出來やうとは存じませなんだ、誠に大慶な事でござる。いや仕合せと配劑の藥能が見えまして、御同然に重疊でござる、申さずとも事ながら、元より醫は仁術にて、今日暮しの其爲に醫を業になす者は必ず病は治らぬもの、貧なる者に高價の藥を用ひ難いと算用すれば是賣藥同樣の業、いやしくも愚老などは我が預つた病人は是を親とも子とも思ひ、此病症に此藥が適當なりと見極めれば高價を厭はず用ふるゆゑ、必ず癒えざることはない、實に慾心を離れねば名醫にはなれぬと我師よりの申傳へ、斯く貧乏は致し居れど、療治に掛つて損得は少しも厭ひは申しませぬ。

道十　いや先生の御心底感心致してござりまする。今仰せられました表を飾る醫師のみが、世界に多うござりまするわい。

長庵　愚老などは幼年より醫道が至つて執心にて、江戸へ參つて師を選み、日夜修行致しましてやうやう醫者の數に加はり、多く病人を手掛けましたが貴殿の樣な難病は今迄療治を致しませぬが、餘程御心勞をなされた事と推察致しまする。

道十　いかにも貴老の仰せの通り、種々心勞致しました。斯く御入魂に御成る上は包み隱さず打明けて只今お話し申すでござる。（ト思入あつて）元某は鹽冶の藩中、主君不慮の御生害より大石殿を初めとして同志の者一味なし、亡君の仇を報ぜんと思ふに甲斐なき此身の不幸、健忘の病に犯され人事を忘れし身の悲しさ、遂に其夜の列に洩れ嘆ひし同志の手前といひ、亡君への申譯に切腹せんと思へども、女を見れば身は震へ本意を遂せぬ其中に家内の者に見咎められ、空しく月日の經つ中に同志の者は切腹と承つて口惜しく、有て甲斐なき武士の不具の體を悔むのみ、其後病は癒えたれど六日の菖蒲十日の菊、此上は剃髮なし亡君初め同志の者の菩提を問はんと思ひしが、一ツの障りに妨げ伴、何卒主君の御繼家へ仕官させんと思ふに附け、伴が成人致す迄剃髮をなすを思ひ止まり、流浪なして此年月苦勞致す心氣の勞れが、打つて出て病となり御厄介になりましたる、世にいひ甲斐なき我身の上、御推量下さりませ。

長庵　初めて今日承はつたる御不仕合せな御身の上、是迄長々の御心勞さこそと御察し申しまする、然し世界は譬にいふ七轉八起とやら、今に御子息が御成長なされ御仕

官なされる其時は、どの位な御悦び、必らずきな〳〵思召すな、折角御全快になる所跡戻りが致しましては、愚老の丹誠も水の泡、今迄の事は皆夢とお諦めなされまして御養生が專一でござりまする。

道十　いや拙者とした事が、御親切に任せ我身の上の長物語り、御免なされて下さりませ、以後は仰せに隨つて養生專一に致しませう。最早御藥を吞切りましたれば、序ながら御貰ひ申して歸宅致したうござりまする。

ト懷ろより服紗に包みし藥疊紙を出す。

長庵　もう少し上りますれば、必ず御全快に至ります、只今調合致しますから、暫時御休息なされませ。

ト唄になり、長庵上手へ入る。道十郎は莨を吞み居る、花道より百姓重兵衞麻の羽織、單物、脚絆、尻端折足にて白張の大黑傘を持つて出て來り、

重兵　吉原から麴町まではよつぽどの道程ぢや、暮れぬ中戾らうと思つたなれど、娘が引留め歎き居るので、つい手間取り大ぶ遲うなつたゆゑ、急いで出ると雨に降られ傘を買つて爰迄來たら、雨はさつぱりと晴れてしまつた。嘸兄貴が待つてゞあらう、早う歸つて何もかも首尾した話をして聞かさう、（ト天水桶で足を洗ひ、手拭でふき玄關へ上りながら）兄貴、今戾りました。

ト二重へ出て來る、上手より長庵藥疊紙を持出て來り、

長庵　おゝ重兵衞歸つたか、手間どつたから案じてゐたが、彼方の首尾はよかつたか。

重兵　何もかもお前樣が掛合つて置いて下すつた故、すらすらと濟みましてお梅が身の代五十兩の內で身附とやらが三兩に、判人とやら世話人とやら三治とかいふ人が判賃世話賃で五兩、都合八兩引かれまして、四十二兩受取つて來ましたが、引け道の多いものでござりまするな。

長庵　かやうな事には種々の散り金の多いものぢや、兎角身賣の習ひで仕方がない。シテ四十二兩の其金は慥に受取つて參つたか

重兵　それはしつかりと胴卷へ入れ、腹へ縛つて置きました。

長庵　むゝ、すりや懷中の胴卷に

重兵　はい、左樣でござりまする

ト長庵重兵衞の懷ろへ思入、

長庵　うつかりして盜賊に取られぬ樣にしたがよい。

重兵　命掛の金なれば、何で疎に致しませう。

長庵　娘の體に換へた金、徒にしてはならぬぞよ。

重兵　なんで徒に致しませう、其身を苦界へ沈めるやうな言はゞ邪慳な両親を、わたしが家に居なかつたら何かに附けて便なく嘸不自由な事であらう、それが悲しうござりますと、身を賣る親を恨みもせず、涙にくれて案じ居るあの孝行な娘をば辛い勤めをさせるといふは、何たる因果な事なるかと、胸に溢れる涙を呑み込み、やう／＼堪へて戻りました。（ト手拭を顔へ當て泣く。）

長庵　おゝ尤もだ／＼、嘸別れともないことであつたらう。此長庵にも實の姪こんな不便な事はない、（ト愁ひの思入あつて）あゝ長棒にでも乘る己なら、假令他借をしてなりと手助を仕様もの、力づくにも腕づくにも及ばぬ者は貧の病、こんな悔しい事はないが、然し死んだといふ譯でもなし年が明ければ元々の親子一つになることだから、それを明暮樂しみに、時節を待つより外はない。まあさう思つて諦めるがよい。

重兵　今お前樣のいふ通り、諦めるより外はない、もうその歎きはしませぬから御苦勞なすつて下さりますな。

長庵（道十郎へ向ひ、）是はとんだ粗相を致しました、藤掛氏の御出を忘れ、思はぬ失禮致しました。どれお茶なりと入れませう。

道十　いや／＼御構ひ下さるな。

長庵　いやお藥迄も忘れてをつた、これは生薑が入りますぞ。（ト藥疊紙を出す。）

道十　左樣でござりますか、（ト藥を袱紗へ包み、）何か子細は存じませぬが、だいぶ御心配の御樣子と見受けましてござりまする、手前も覺えのある事故、御察し申し上まする。

長庵　最前貴方の御物語り承はりましてござりまするが、是なる弟重兵衞が薄命なる身の上噺し、

重兵　然ししみ／＼おちかづきにもならぬあなたへ、身の上を。

長庵　いや袖振合ふも他生の縁、まあお聞下さりませ。斯く御別懇になりしゆゑ弟が薄命、此身の素性包まずお話し申しますが、元來愚老が生國は三河の國藤川在、重左衞門と申す小百姓の家に生れし者なるが、同胞とては妹一人、追々成長する中に兩親共に死去致し、田畑も少々ござれども、素より虚弱の愚老ゆゑ鋤鍬を取ること出來ず、幼年よりして醫道を好み醫者になり度き志願にて跡式を妹へ讓り、聟を取つて我家の相續させんと思へども親類縁者もござらねば村役人へ相談なし、媒人あつて近

村より此重兵衛を貰ひ受け、妹およとめあはせて二人の者へ家督を讓り、愚老は直に當地へ參り、專ら醫道の修業なし、やう／＼醫者になりまして微な暮しをして居りまする。

重兵　又跡式を引受けまして間もなく一人の娘をまうけ、悦びあれば悲しみと夫婦共長煩ひ、かてゝ加へて凶作續き、年貢の未進に仕方なく、所持の田畑を質入なし一時の難儀を凌ぎましたが、その田畑が受け戻されず、今年はいよ／＼貸方へ取られる事になつたので、それを思やから苦勞して、女房およそが血勞の煩ひ。

長庵　貧に二人が難儀をば、聞けば聞く程哀れな話し、妹の病氣も心氣の勞れに大人參と犀角を用ひぬ時は助からぬと申せど、是も亦金づく、

重兵　此難儀をば娘が聞き、わたしの體を廓へ賣り、金調へて下されと健氣な詞に力を得て、不便な事とは思へどもわしは養子の身分ゆゑ、田畑を外へ渡しては先祖は元より世間へ濟ます、脊に腹は替へられず泣きの淚で娘を連れ、江戸へ出て來て兄を頼み、掛合方をして貰ひ、今日吉原へ連れて行き娘を苦界へ沈めまして、田畑の金と藥の代に受取つて來た身の代金。モシ御客樣、切ないわしが心の内、お察しなされて下さりませ。

長庵　なんと弟が身の上は、不便な事でござりますな。

道十　段々とのお話しを承はつて身につまされ、思はず落淚致しました。

ト三人愁ひの思入。道十郎鼻紙にて淚を拭ふ。

長庵　いや飛んだ話をお聞かせ申し、お茶もろく／＼上げませぬ。

道十　決してそれには及びませぬ。（ト時の鐘鳴る）今鳴る鐘はもう五ツ、最早御暇致しませう。

長庵　只今お茶を入れますれば、もそつとお話しなされませ。

道十　いや左樣致しては居られませぬ。しかしよい折參り合せ、先生の御舍弟にお目に掛つてござりまする、

重兵　へい私もあなた樣にお近附になりましたが、もう明日は出立致し、國元へ歸りまする。

道十　それはお名殘り惜しうござるが、道中御機嫌よろしう、

重兵　あなた樣にも御大切に、御養生なされませ。

道十　いや思はぬ長座致しまして、嘸御迷惑でござりましたらう。

長庵　一向にお構ひ申さず、失禮のみ申しました。それ、
　御提灯を。
重兵　畏りました。（ト下手の提灯を取り、灯を附ける、道
　十郎立上り）
道十　いえ〳〵それには及びませぬ。
長庵　道が暗うござりますれば、
重兵　是をお持ちなされませ（ト提灯を出す。）
道十　それではお借り申しまする（ト提灯を持つて玄關口
　へ出る。）
重兵　左樣なれば御浪人樣、
道十　御緣もあらば、
長庵　又その中、
道十　お目にかゝるで、
三人　ござりまする。
　ト唄になり、道十郎提灯を持ち、傘を忘れて花道へ入
　る。重兵衞後を見送り傘を見て、
重兵　や、此傘は。
長庵　（見て）おゝそれは今の道十郎どのが、最前さしてご
　ざつたのぢやが、雨が止んでをつたので忘れて行かれた
　ものと見える。

重兵　わしが持つて行きませうか。
長庵　いや、あした屆ける序があらう。（ト元の所へ來る。）
重兵　あの御浪人も御苦勞をなされたお方と見えまして、
　此方の話しを聞かしやつて、貰ひ涙をこぼして居られ
　た。人に人鬼はないものぢや。ときに最前もいふ通り、
　お前のお蔭で娘をば吉原へ勤に遣り、金受取つて來まし
　たれば、少しも早く國へ歸り、嬶に委細を話して聞かせ
　悅ばせたうござりますから、翌日の朝六ツ立にわしは立
　ちたうござりまする。
長庵　なるほどそれもさうなれど、此間から心配して定め
　て勞れてござらうから、もう一日も逗留して勞れをやす
　めて行くがよい。
重兵　わしもさうして居たいけれど、少しばかり勞れたけ
　れど金が手に入り嬉しいので、さつぱり忘れて仕舞うた
　れば、早う戻つて質入した田畑をこつちへ受戻し、人蔘
　や犀角を嬶に呑して遣りたいゆゑ、あした立ちたうござ
　りまする。
長庵　さう思ふのも尤もだから、あした六ツに立ちなさい。
　こなたの樣な親切な亭主を持つたは妹の仕合せ、此兒も
　安心して誠に嬉しく思ひます。

重兵　いえ〳〵わしが爰に來てから不慮の難儀が重なつて、何一つ出かした事なくお前に迄も御苦勞掛け、働きのない此重兵衛、其樣に言れては穴へでも入らねばなりませぬ。(ト天窓をかき面目なき思入。)

長庵　よしない事を言ひ出して、却つてこなたに氣の毒だが、そんな事は取りおいて、翌日の立ちも早いから奥へ行つて寐たがよい。

重兵　暗い中に立ちますから、それでは先へ臥りまする、どうか寐忘れ度くないものだ。

長庵　わしが起して進ぜるから、其心配には及ばない。

重兵　それでは濟まぬが先へ寐ます。

長庵　金は大事にして居なさいよ。

重兵　胴卷へ入れてしつかりと、腹へ結へてござります。

長庵　用心をしてゆつくりと、

重兵　極樂往生しませうか。

長庵　えゝ旅立前に不吉な事を、

重兵　ほんにさうぢや、鶴龜〳〵。

長庵　さあ、少しも早う、

重兵　そんなら兄貴、

長庵　六ツが鳴つたら起しますぞ。

重兵　どうぞお頼み申します。

ト上手へ入る。此時雨車になる。

長庵　えゝ又降つて來たか。(ト玄關口へ來り、空を見て只前の道十郎の傘を取つて、)井桁の内に藤の字の此傘は、道十郎がさつき忘れていつたのだが、こりやいゝ物があつたわえ。(ト傘を持ち二重へ來り、上手の家體を窺ひ、)重兵衛どん、寐さしつたか、重兵衛どん〳〵。晝の勞れで高鼾、もうぐつすりと寐込んだわえ。(ト時の鐘、すごみの合方になり長庵障子の隙から内を覗き、思入あつて)雨が降つても明け六ツでは、東の方がしらみかけ、もう人影の見える時分、ちつとこつちの都合が惡い、何でも今夜、八幡の八ツを打つたら支度をさせ、六ツだといつて立たしても土地の勝手を知らねえ重兵衛、迂闊立つに違えねえ、さうしたならば後を附け場所を見定め裏道しに先へ駈け拔け待伏せして、首尾よくやつた其跡へ此傘を捨てゝ置けば、向うへ科の掛るは必定、醫者の匙より惡計はよつぽど廻る此長庵。(ト此時奥にて、ばつたりと音する。長庵思入あつて、)今の音は、押石か、もうなづくを木のかしら。)えゝびつくりした。

ト胸をさする雨車時の鐘合方にて、

と時の鐘にてつなぎ、尻明に直に引返す。

ひやうし幕

（赤羽根橋の場）——本舞臺一面の平舞臺、正面に眞向の赤羽根橋、上の方本屋根駒寄せ附の高札場、松の立木、下の方海鼠壁屋敷長屋の張物にて見切り、橋の下手松の立木、後ろ增上寺の黑門、樹木の茂み五重の塔土器町森元あたりを見たる夜の遠見、總て赤羽根橋南詰の體よろしく。雨車時の鐘にて幕明くと上手より赤合羽饅頭笠を冠りし中間二人、六尺棒弓張提灯を持出て來り、捨ぜりふにて舞臺を廻り下手へ入る、時の鐘。凄みの合方、橋の彼方より長庵頰冠り尻はしをり、一本差跣足、藤掛の傘をさし駈出して出て來り、後を振り返り見て高札場の蔭へ隱れると、橋の彼方より百姓重兵衛菅笠を冠り、二枚繼の蓙を引掛け、小田原提灯を提げ出て來り、橋の上にて、

重兵　から大降にならうとは思はないから出て來たが、菅笠では凌げない、それに又眞つ暗でまだ明けさうもない様子、最前打つたは六ツではなく七ツの鐘であつたと見える、早く夜が明けてくれゝばよい、こんな困つた事はない。（トいひながら平舞臺へ下りる、此時本釣鐘の七ツを打つ。）おゝ丁度幸ひ鐘がなる、何時だらう算へて見よう。（ト指を折り數をかぞへて、）や、七ツぢや、さうして見ると麹町でさつき聞いたのは八ツだと見える、まだ六ツ迄には一刻ある。はて拙とんだ事をしたなあ。

ト思案の思入、後ろより長庵窺ひ出て、腰を拔き、提灯を切落す、重兵衛ヤアと悄りする所を、長庵後ろから切下げる。

やあ人殺し、人殺し〳〵、

ト菅笠を切れて逃廻る、追廻にして切り附け〳〵、雨車にて立廻り、重兵衛の口を押へ脇腹へ突込む、潮紅になり、重兵衛立身にて苦しみ、ばつたり倒れるを乘掛つて止めをさし、白刃の血を拭ひ鞘へ納め懷中を探り胴卷を引出し、探り見てにつたり思入、

長庵　丁度時刻も寅の刻、千里一飛闇雲に後を附けたる暗まぎれ、篠突く雨に往來のないのを幸ひばつさりと夜網にあらぬ殺生も、僅五十に足らねえ金、人の命も五十年

長い浮世を長袖の小袖ぐるみで狡猾も、丸い天窓を看板に醫者といふのが身の一德、然し十德を着る長棒に所詮出世の出來ねえのは、言はずと知れた藪育ち、蚊よりもひどく人の血を吸取る惡事の[illegible]に數年馴れたる[illegible]、現在妹の亭主ゆゑ、言はゞ義理ある弟だが、金と聞いては見逃されず、手荒い療治の血まぶれ仕事、酷い殺しも金故だ、恨みがあるなら金に言へ。どれ、そろ／＼と出かけようか。(ト傘を搜し取って)あゝつめてえ、ざつしより濡れた、いや濡れぬ先こそ露をも厭へ、此傘を捨て置きやお殺したものは、

ト言ひかけ、邊りへ思入あつて、傘をはふり出す。道具替りの知せ。

いゝ智慧だなあ。

ト雨車早き合方にて此道具廻る。

(平河天神裏門の場)　本舞臺一面の平舞臺、上手へ寄せ黑塗りの冠木門、左右黑塀上手開帳の立札下手茶見世揭錢を上げ、雨戸締りある家體。正面の門片扉明掛けてある、下手に縫ぐるみの犬寐て居る、總て麹町平河天神裏門下の體。雨車合方にて道具留

ると、堀の內參り仕出し三人、[illegible]黑傘をさし長提灯を持出て來り、まだ殘暑が暑いからお參りに行くといふせりふあつて、花道へ入る、と上手より以前の長庵ずつぷり濡れて早足に出て來り、

長庵　えゝ意地惡く降る雨だ、傘がないからぐつしより濡れたが、爰迄來りやあ安心だ。(トいひながら後の方を[illegible]り、)これでよつぽど遠くなつた。

ト此聲を聞き犬目を覺まし長庵を見て、ワン／＼／＼と嚙み附くやうに吠えるゆゑ、

長庵　シツ／＼、えゝ此畜生め、吠えやあがるな。(ト道廻すがら犬吠えるゆゑ持あまし)うぬも序に(ト手早く脇差を拔き、切附ける。犬縫ぐるみさけて血綿出で、ワンワンとくる／＼廻つて倒れる。)こいつも啼かざあ殺されめえに、

ト手拭にて血を拭ひ鞘へ納め、身拵らへする。此中門の內より貝坂の忠藏半合羽尻はしをり一本差足駄がけ澁蛇の目の傘をさし、小田原提灯を提げ、朝參りの歸りにて何心なく出て來て、双方舞臺にて行合ひ思はず顏を見合せ、長庵花道へ足早に行くを忠藏思入あつて提灯を差出し、

忠蔵　はて見たやうな。

ト長庵花道にて、

長庵　えゝ、

ト礫を打ち、提灯ながつたり落す。これを木の頭、長庵下にゐる

忠蔵　あゝ白んで来たか。

ト空を見上げてこなし、烏笛早き合方にて、　ひやうし幕と幕引附けると長庵立上り、後を見返り早き合方、寺鐘にて、足早に花道へ入る。

二幕目　赤羽根辻番詮議の場

（役名）――村井長庵、藤掛道十郎、役人篠川軍蔵、同津山主水、家主杢右衛門、同九兵衛、道十郎女房おりよ、

（辻番の場）　本舞臺三間の間中足の二重家體、正面一面の板羽目、六尺棒捕縄など掛けあり、蹴込み板羽目、此前二重上下折廻し駒寄せ、突棒刺股もちりを掛け、後ろ草土手漆の立木、總て辻番の體。上手へ軍蔵野袴ぶつさき羽織、脇差、刀を傍へ置き仕ひ、下手に主水同じ拵にて控へ、硯箱を前へ置き筆紙を持ち口書を取つて居る。平舞臺上手に長庵黒羽織着流し一本ざしにて控へ、此脇に重兵衛の死骸莚を掛けあり、下手に杢右衛門羽織袴家主にて控へ居る、菖蒲革の足輕四人六尺棒を持ち警固して居るこの見得山内の時の太鼓にて幕明く、と時の太鼓を打上げ、合方になり、

軍蔵　こりや長庵。

長庵　はつ。

軍蔵　其方が姪聟重兵衛が所持の金子に、娘梅を吉原町へ賣渡せし時の代とな。

長庵　御意にござりまする。申し上げるも涙の種、重兵衛事は十年此方不仕合せの其上に、日照水損凶年續き、年貢の未進に持傳へし田畑を遂に質入なし、一時の難儀は凌ぎましたが、女房そよが血勞にて三年餘りの長患ひ、困り果てたる其所へ質入なしたる田畑の期月に、小前なれども先祖より持傳へたる事なれば、他へ渡しては位牌

を初め世間へ濟まぬと堅い心に、娘を連れ拙者方へ尋ね參り、段々との物語に餘儀なく世話する者を頼み、丁子屋方へ五ヶ年にて五十兩に賣りましたる身の代金にござりまする。

主水　すりや、重兵衞が娘を其方が世話を致し、丁子屋方へ賣つたるか。

長庵　へい外に知邊もござりませねば、宿屋にをれば日々の旅籠代も出ますれば私方へ止宿いたさせ萬端世話を致しまするも、私在所に居りますれば家督相續なすべき身分、幼年の折より醫道を好み當地へ參り修業なし、末始終帶刀でも致し度く存じまして此重兵衞を貰ひ受け、國の家督を讓りまして私は只管に醫道を勵みましたれども、商賣來らずしがない暮し、それゆゑ助力致し度く存じますれど心に任せず、せめて手足でなす事でもと其手續きに驅歩き、成たけ物の入らぬ樣致し遣はしましたるも、今日となりては水の泡、殘念至極にござりまする。何卒弟重兵衞が敵此傘の持主を、御吟味の程願ひ上げまする。

重藏　おゝ其方が願はずとも、詮議なすは此方の役目、先刻の申立てに、直さま麴町へ道十郎を召捕りに遣はしたれば、只今に參るであらう。

主水　かゝる證據の有る上は遁れ難き道十郎、篤と是にて詮議なさん。最早只今參るであらうから其方は控へ居よ。

長庵　有難うござりまする。

杢右　人は見掛に寄らぬもの、蟲も殺さぬ顏附で切取するとは太い奴。然し證據の傘がふつて直に知れるといふものは、天の御罰でござります。

長庵　是を思ふと杢右衞門殿、惡い事は出來ませぬな。

杢右　何しろ重兵衞殿は、敵が知れて嬉しからう。

長庵　嘸嬉しうござりませう、（ト莚の掛けてある死骸へ向ひ）これ重兵衞悦ばつしやい、今に御上の威光で敵を取つて下さるぞ。草葉の蔭で待つて居やれ。どういふ事か現在の血を分けた妹よりそなたを親身の弟と、力に思うて居る長庵、今朝斯う／＼と聞いた時あまりの事に惘りなし、足も地へは附かなんだが、是に附けても不便なは國に殘つた妹おそよ、一人の娘を勤に出し便りすくない身の上に、こなたが人に殺害され死んだと聞いたら歎きの餘り、女子の事ゆゑ取詰めて其儘にでもなりはせぬかと、そればつかりが案じられる。あゝ斯ういふ事のある

故か、そなたが早く立たうといふを立たしともなく留めたれど、ちつとも早く國へ歸り女房に見せて悦ばせたいと言はるゝのも無理ならねば、言ふに任せて立たしたる後ろ影が氣に掛り、どうかからうかと案じたも賴みに思ふ兄弟の別れを蟲が知らせしか、あの時留めておいたなら斯ういふ事にはなるまいに、悔しい事を致しました。

ト長庵涙をこぼしよろしく思入、此内軍藏主水囁き合ひ、軍藏是やまことと思ひ、

軍藏　こり〳〵長庵、其の歎きは尤もながら、殺害されし重兵衞が敵は今に取つて遣はす。

ト長庵平伏して控へ居る、ばた〳〵になり下手より捕手一人走り出で、

捕手　はつ、仰付けられましたる浪人藤掛道十郎、召連れましてござりまする。

軍藏　おゝそれ待兼ねた、急いで是へ。

捕手　はゝ。

ト引返して入る、說經樣の合方になり、下手より道十郎若衆流し羽織大小にて、九兵衞羽織袴同じ拵の五人組治郎右衞門附添ひ、捕手に前後を圍まれて出で來り、

捕手　下におらう。

道十　はつ（ト平伏し下手へ控へる。）

軍藏　麴町三丁目九兵衞店道十郎とは其方か。

道十　はつ、拙者めにござります。

主水　苦しうない、それへ出よ。

道十　御免下さりませ。（ト式臺へ住ふ。）

主水　其方は町役人か。

九兵　はつ、即ち家主九兵衞、

治郎　五人組治郎右衞門、

兩人　差添ひましてござりまする。

道十　や、そこにござるは長庵殿か。

長庵　おゝ道十郎殿よう來て下さつた。

道十　（不審さうにして、）はて思ひがけない、此の所に。

軍藏　其方に尋ぬるは。こりや其の傘是へ。

足輕　はつ（ト前差の傘を軍藏の前へ置く、軍藏開き見て。）

軍藏　こりや其の方が所持の傘か。

道十　いかにも、拙者の傘にござりまする。

軍藏　確と相違ないか。

道十　相違ござりませぬ。

軍藏　然らば夜前當所に於いて、それなる長庵が妹聟駿州藤川在百姓重兵衛を殺害なし、所持の金子五十兩奪ひ取りしは、其方ぢやな。

道十（びつくりして、）こは思ひ掛なきお尋ね、道十郎身にとつて毛頭覺えござりませぬが、何ゆゑに拙者めに御疑ひはござりますな。

主水　おゝ今其方が所持と申せし其傘が、重兵衛の死骸の側に有りしゆゑ、正しく道十郎が爲業なりと長庵が申すにより、其方を呼寄せしが、申譯の筋あらば逐一に申立てよ。

九兵　これ／＼道十郎殿、一ト方ならぬ御疑ひ言ひとりが惡い日にはわしまで難儀となる事なれば、心落附けとつくりと申譯をさつしやりませ。

道十　別に申譯の儀もござりませぬが、證據と成りし其傘は昨夜それなる長庵方へ、病氣全快の禮旁〻さして參りましたる處、歸宅の砌り雨も止み忘れて歸りましたるが、如何致して其の傘が其所に落ちてござりましたか、一圓合點がまゐりませぬ。

主水　むゝ、すりや其傘は長庵方に其方忘れ歸りしか。

道十　參る折には小雨が降りましたゆゑ傘をさして參りしが、雨中のつれ／＼四方山の雜談に時うつり、歸る折には雨も止みましたゆゑ、つい傘を失念致し歸宅なしてござりまするが、もしやそれなら重兵衛がさして參りし物なるかと、拙者は左様存じられまする。

主水　いかさま左様な儀もあらん、笹川氏いかゞ思召すな。

軍藏　されば道十郎が申し口尤もの様なれど、片口にては相分らぬ。こりや長庵、今道十郎が申す通り、其方宅へ此傘は忘れ置きしに相違ないか。

長庵（思入あつて、）其儀は全く僞りにござります。

軍藏　なんと申す。

長庵　彼は先達より不快にて私療治致し遣はし、全快に及びしゆゑ禮に參つてござりまするが、其折には雨止にて傘は持參致しませぬが、只今の様に申しますは跡方もなき僞りにござりまする。

道十（是を聞きせき立ち、）これ長庵殿、僞りとは何事ぞ、而も入口の片隅へ雨水きつて立掛置きしを、こなたも眼前見てござつたに、傘は持參いたさぬ杯とまざ／＼しく言はるゝは、こりや一物あつての事ぢやな。

長庵（わざと憎しき思入にて、）はて怪しからぬ事をいに

るゝわえ。さういふ人とは知らぬゆゑ、浪人暮に長の病氣、嘸や難儀と推量なし、十日の物は五日にて早く全快なす樣と、仁術施す所ぞと、價の高い藥を惜しまず肥立も早く其樣にあるける樣に誰がしました、其恩のある長庵へ恩を仇にて返すとは、ても恐しい心ぢやな。あゝ神ならぬ身の知らざれば、つい四方山の話から、是なる弟重兵衛が娘を賣つた五十兩明日は金を持參なし國へ歸ると云事を、迂濶いふたがこつちの過り、女房子のある浪人殿、こんな事はあるまいと思ふはわしが正直故、こなたは大方あの折に聞いたを幸ひ後を附け、所を放れ重兵衛を殺害なして五十兩は、こなたがとつたであらうがな、見覺のあるこなたの傘、其場にあつたは遁れぬ證據、これ天道がお免しなされぬぞ、包み隱さず白狀さつしやれ。

道十　白狀とはなにが白狀、傘は忘れ置つたれど重兵衛を殺せしなどゝは、身共かつて存ぜぬぞ、強ひて申掛け致すに於ては、其分には差置かぬぞ。

ト道十郎きつとなる。

長庵　あれ〳〵、しら〳〵とあのやうな事を申しまする。ふとい人だな。

道十　まだ〳〵申すか。（ト立掛るを、）

軍藏　兩人控へい。

道十　はつ。（ト道十郎控へる。）

軍藏　未だ善惡知れざるに、私の爭ひ控へてならうぞ。最善より兩人が申條承はるに長庵が申條いち〳〵尤もに思はるゝ、殊に道十郎が所持の傘死骸の場所に落散りありしは、慥な證據。道十郎其方にも云ひ開きの慥なる證據あるか。

道十　別に證據はござりませぬが、人を殺して金子を奪ふ左樣な企みを致す者が、後日の證據になるべき品を後へ殘して歸りませうや、そこらの所は憚りながら御賢察下されえ。

軍藏　いや其方が申譯尤ものやうなれども、あながち印のある物を取落さぬとも言はれまい、よしんば夜盜家尻切家財を盜み出る時身に附く品を取落し、それが足にて召捕られ詮議に逢ふは往々ある事、其方迚も其如く所持なす傘が死骸の傍に落散りありしを、只長庵が宅へ實參りしとばかりでは相成らぬわえ。

ト道十郎軍藏へ思入あつて覺悟のこなし、長庵嬉しき思入。

稿上當時の紋番附の一部、又々河竹新七か默阿彌

長庵　あゝ有難い其お詞、非業に死んでも即座に敵の知れしは弟の仕合せ、それに附ても此傘の側にあつたは天の助、有難う存じまする。(ト此内主水長庵へ目を附け)

主水　して長庵には、其傘を道十郎が所持なることは如何致して存じをつたぞ。

長庵　え。(トぎつくり思入)

主水　どうして知つた。

長庵　先達てのことなりしが、彼が宅へ見舞に參り夜に入つて歸宅の折借受けし、提灯の印をもつて存じなります。

主水　すりやそれ故に長庵には、一目見るより道十郎が所持の品と知つたるとか。

長庵　はつ。

主水　はて記憶のよい事ぢやな。(ト思入、軍藏は道十郎が業と心得)

軍藏　かく證據のある上は脱れ難なき道十郎、詮議中入牢申附くるぞ。

道十　すりや覺えなき拙者めに、

軍藏　覺えないと申せども、證據なければ脱れぬぞ。

道十　むゝ、

軍藏　但し存ぜぬといふ證據があるか。

道十　さあ、

軍藏　證據がないか。

道十　さあ、

軍藏　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

軍藏　どうぢや。(トきつとなる。)

道十　はつ。(ト是非なくさしうつむく。)

軍藏　それ道十郎に繩打て。

捕手　はつ、

ト立掛る。ばた〳〵になり下手よりおりよ屋敷者と見える世話女房の拵にて抱子を抱き出て、

りよ　はツ暫く、暫くお待下さりませ。(ト下手へ出て控へる、足輕立掛り)

捕手　やあ、其方は、

皆々　何者なるぞ。

りよ　はツ、私事はそれなる道十郎が妻りよと申しまする者にござりまする。

主水　こりや、女の身にてかゝる席へ何用あつて參りしぞ。

りよ　俄の御召は何事なるかと案じるに附け胸騒ぎ、見る

事聞く事氣にかゝり居ても立つても居られぬゆゑ、道之助に家を頼みこれをば連れて參りました（卜抱子泣くないぶり附け）おいたがよ。

軍藏　して其方は何ゆゑに、道十郎へ繩打つを止めしぞ。

りよ　さあ委細の樣子は小影にて承りましてござりまするが、全く夫の存ぜぬ事ゆゑ、お止め申しましてござります。

軍藏　こりや最前から道十郎も存ぜぬとは申せども、死骸の側に落散りありし、是なる傘が證據ぢやわ。

りよ　仰せではござりますれど、夫が申上げし通り、長庵殿の宅へ忘れ宿へ歸りて其事を申せしかども四ツ過ゆゑ、翌日の事と其儘に親子四人打臥まして、他行いたさぬ道十郎が、何しに人を殺しませうぞ。（卜抱子なく）おお泣くな／＼、とゝさまの大事の場所ぢや。憚ながら其傘をわすれ參りし長庵どのを、御詮議なされて下さりましたら、重兵衞とやらがさして參りたるか、又は誰ぞが（卜長庵へ思入あつて、）さして參りましたるか、何卒お上のお目鑑でお調べなされて下さりませ。

ト始終抱子泣くをだましながらいふ。長庵是を聞き、

長庵　これ／＼御内儀、こなた迄が同じ樣にわしが家へ忘れたと言ひ掛けをさつしやるが、重兵衞はかくの如く民から持つて來た雨具、桐油替りの莚蓙に重といふ字の印のある半蓙、是れを冠つて居る者が傘をさしませうか、元より持つてござらぬ傘、さして行かうやうがござらぬ。

りよ　さうこなさんの樣にいへば、どうやら道理に聞ゆれど、こつちも知らぬ身の疑ひ、その重兵衞がさゝぬなら外に誰ぞが、（卜長庵と顔見合せ思入）さして行くまいものでもない。

長庵　外に誰ぞといはるゝは、わしでもさして行つたかとこなたは思ふ樣子ぢやが、これよく物を積つて見さつしやれ、現在妹に連添ふ重兵衞縁につながる弟を、人間の皮を着て居て殺されようか、よし又金を取る程なら赤羽根迄追かけて殺して取らずと我家でどうでもして取れる金、こりや夫婦馴合つて、わしに罪を着せようと巧んで來た仕事ぢやな。

りよ　巧んで來たとはこなたの事、外の品なら知らねども忘れて置きしその傘を、證據といふが疑はしい、こなたの仕業に違ひない。

長庵　いや／＼愚老が何で殺しませう、こなたの夫に違ひ

ない。
りよ　いえさうぢやない、こなたぢや〳〵。
長庵　いや〳〵こなたの亭主だ。
りよ　いえ〳〵こなたぢや〳〵(ト抱子せはしく泣くないぶり附け)えゝ默らぬかいの、こなたぢやわいの。
トきつといふ。軍藏思入あつて、
軍藏　やあかしましい、しづまり居らぬか。
長庵　はツ。(ト恐れし思入にて平伏する)
軍藏　詮議致すは我々の役目、證據もなき事申し募り、上をを恐れぬ無禮者めが。(トおりよを叱る)
りよ　それぢやと申して。
軍藏　まだ〳〵申すか。
皆々　控へをらう。
りよ　はツ。(ト恐入つて辭儀をなす。抱子泣くを)おゝたおゝ〳〵。
ト此内道十郎は目を閉ぢ覺悟の思入、主水こなしあつて、
主水　こりや〳〵りよとやら、何樣其方申しても證據なければ水掛論、一旦繩目に逢ふとても實存せぬ事ならば申譯も立たうから、立騷すと控へて居よ。

りよ　はツ有難うござりまする。
主水　こりや長庵が家主、それへ出い。
杢右　はツ。(ト前へ出る。)
主水　長庵事月々の店賃に滯りはなきか
杢右　はツ私店子表裏十七軒ござりまして、表店が二分二朱裏店が一分一朱、掃除代が、一ヶ年三兩二分。
軍藏　こりや其樣な儀は調べは致さぬ。
主水　店賃に滯りはなきかと、それを聞くのぢや。
杢右　はい長庵事には一ト月も滯りはござりませぬ、毎月晦日にきつと持參致しまする。そればかりではござりませぬ、祝儀の強飯法事の饅頭、貰うた物はいつでも私方へ遣はしまする、一の店子でござりまする
主水　すりや店賃は月々晦日にきつと勘定致すとか、(ト思入あつて)こりやさうならでは叶ふまい。
軍藏　こりや道十郎が家主、それへ出い。
九兵　へい〳〵。(ト前へ出て)へい、道十郎事は、
トいひかけるをおりよ袖を引き頼む。九兵衞呑込み、
九兵　やはり毎月晦日々々に、きつと持參致しまする。
軍藏　しかとそれに相違ないか、僞りを申すと曲事ぢやぞ。
九兵　え、(ト悔りなし、顫へる。)

軍藏　有體に申せ。
九兵　左樣なら申上げまする、當月で五月滯りをりまする。其外米屋酒屋なぞにも餘程借がござりまする、度々斷りに參りまする。
りよ　あもし、その樣な事を。
九兵　はて曲事ぢやと仰しやれば、有體に言はねばならぬ。（トおりよ是非なき思入。軍藏主水に向ひ）
軍藏　津山氏いかゞ思召す、只今家主共の言葉にて、あらかた相分かりました。先程長庵が申し口に相違なく、道十郎長庵宅へ參り合す折柄、重兵衞とやらが五十兩の金子所持致し、未明に出立すると聞きしを幸ひ、永々の流浪ゆゑ貧苦に迫り、殺害を致したに相違ござらぬ。
主水　なにさま左樣存ずれど、未だ分明ならざれば、一先役所へ立歸り、後しての詮議に仕らん。
軍藏　先調べ中は、道十郎は入牢申し附けるぞ。（トおりよ悔りなす）それ、繩うて。
捕手　はッ、立ちませい。
道十　此期に及んで未練ござらぬ、いざ繩をお掛け下され。
軍藏　それ、道十郎に繩をかけい。
捕手　はッ、（ト脇差をぬきとり手を後へ廻す、捕手繩を掛ける、おりよ悔りして）
りよ　えゝ、こりやどうあつても覺えなき人殺しの疑ひにて、繩をお掛けなされまするか、そりや片手打でござりまする、慈悲はお上と申すのに、餘りといへば無慈悲なお裁き、
軍藏　やあ無慈悲とは何が無慈悲、人を害せし罪人ゆゑ繩を掛けるは天下の大法、達てと申さば用捨はないぞ、覺悟なせ。
りよ　御用捨なくば共々に繩かけて下さりませ。
軍藏　む、望みとあらば、
皆々　共々に、
りよ　お引きなされて下さりませ。
道十　こりや〳〵、狼狽者何を申す、只今此場でどの樣に申解くとも、是ぞといふ證據なければ言わけ立たず、一旦虚名を蒙むるとも天道誠を照す道理、いつかは明りの立つ事あらん。
りよ　さあ明りも立たうが、此儀には。
道十　はてそちが共々獄舍へ行かば、未だ幼年の道之助誰が後にて育まん、終にはそれなる巳之松に獄舍の苦艱をさせねばならぬぞ。

りよ　それでもみす〳〵。
道十　狼狽者めが。
りよ　はあゝ。(トおりよ泣く、道十郎思入あつて)
道十　これりよ、再び歸る心なれど萬一無實に落入つて、是が別れにならうとも、前世よりの因果ぞと思ひ諦め歎かずと、二人の子供を守育て、豫て尋ぬる短刀を、いやさ、短慮事をなさずといへば心を長く尋ね求め、此身の汚名を雪ぎくれよ。
りよ　はあゝ。(トおりよ涙を拭ひ)神や佛はいふに及ばす、お上のお慈悲もあるなれば、さういふ事にはなりますまいが、若しも成行く其時は、足らはぬながら武士の妻、心を鬼になり替り二人の子供を守り育て、行衛の知れぬ其の品を尋ね出して年頃の、望みはきつとかなへませう。
道十　おゝ出かした女房、それにて思ひ置く事なし、道之助が案じて居よう、少しも早う歸つてくりやれ。
りよ　いえ〳〵是が一生の別れにならうも知れませぬ、せめて道までお見送り、斯ういふ事になるならば道之助も共々に、連れて參ればよかつたに。
道十　いや却つて伜の來ぬのがまし、くわんぜなき巳之と違ひなまじ心がある故に、歎きの種であらうわえ。

りよ　とはいへ親子のことなれば、お前も逢ひたうござんせう、兒と思うて此兒が顏を、見てやつて下さりませ。
ト抱子の顏を見せる、道十郎思入あつて、
道十　あゝ果報つたない。(トほろりと思入、抱子泣立てる)
りよ　おゝ尤もぢや〳〵、是が泣かすに居られようか。
トおりよ泣伏す。
道十　えゝ何をめろ〳〵、未練者めが。
りよ　はあゝ。(ト泣く、長庵せゝら笑ひ)
長庵　いや盗人たけ〴〵しいと、實しやかな夫婦の言葉、御兩所さまに哀れと見せ命助かるト心、いや何所迄ふといか知れぬ奴、流石は不義士の鹽冶浪人、此所存では主君の大事をよそに見て逃げた筈だ。
軍藏　すりや藤掛道十郎は、鹽冶浪人であつたるか。
長庵　はッ夜討の砌り變心なし、徒黨を洩れし不義士でござりまする。
道十　あこれ、めつたな事をいはるゝな、左樣な者ではござらぬぞ。
長庵　なに、ない事があるものか、昨夜互ひの身の上話しに、こなたなんと言はれた、妻子の愛に惹かされて、列

を洩れたと言つたではないか。

道十　いや／＼其樣な事を、いつた覺えはござらぬぞ。

長庵　それでも、あの昨夜、

道十　いや知らぬ／＼。

長庵　あれ／＼、あゝ舌を二重に遣はつしやる、非義非道な金をとり、かゝる繩目の恥に逢ふも元は主君の皆罰だぞ。報いは怖いものでござる。

道十　ちえゝ。（ト悔しき思入。）

軍藏　不義士とあればいよ／＼もつて切取りたせしに極まつた、道十郎獄舍の住居女房りよも同罪ながら、乳呑子あるゆゑ情をもつて家主へ預け遣はす、しかと預かりをらうぞ。

九兵　へい／＼畏まりましてござりまする。お慈悲を持つて私方へ御預けに相成りまする段、有難い仕合せにござりまする。

主水　隨分共にいたはつて遣はせ。

九兵　畏りましてござりまする。

軍藏　長庵中條相立つ上は、構ひないぞ。

長庵　はツ、理非明白な御裁き、有難うござりまする。

主水　いや笹川氏、御待ち下されい。

軍藏　何んでござるな。

主水　長庵事も家主へ預け置かずばなりますまい。

軍藏　とはまた何ゆゑ。

主水　彼れも越度がござりますれば。

長庵　私に越度とは。

主水　こりや、夜前重兵衛は何時に出立致せしぞ。

長庵　へい八ツ、いや、七ツ半に出立致させました。

主水　假初にも、五十兩所持なす者を只一人、何ゆゑ夜深に出立させしぞ。

長庵　其儀は先刻申上げし通り、當人歸宅を急ぎますゆゑ、

主水　然らば其方途中まで、なぜ見送つて遣はさぬぞ。

長庵　折惡く風邪にて雨天の歩行を厭ひますれば。

主水　風邪にて送られずば、何故夜明をまつて立たせぬのぢや。

長庵　留めましてござりますが、何分にも急ぎますゆゑ。

主水　假令どのやうに急がうとも、僅一時か半時に何程道が違はうぞ、それを其まゝ立たせしは拔目なき長庵ながら、こりや其方が。（ト目を附ける。）

長庵　え。（トぎつくり思入。）

主水　こりや長庵が越度なるぞ。

長庵　恐れ入つてござりまする。(ト平伏する。)

主水　こりや長庵が家主、詮議中しかと其方へ預けたぞ。

杢右　へい〳〵私の一の店子、慥に預かりましてござりまする。(トこれにて軍藏思入あつて、)

軍藏　最早是にて一ト通り詮議相濟む上からは、道十郎を引立て參らうではござらぬか。

主水　いかにも左樣仕らう。こりや、道十郎幷に長庵が相長屋の者共より、其夜の次第それ〴〵に口書を取り置く間、家主共心得よ。

兩人　畏まつてござりまする。

軍藏　それ、道十郎を獄舍へ引け。

捕手　はあゝ。(ト道十郎を引立てる。)

りよ　そんならこれが。(ト寄らうとするを、足輕へだてて、)

足輕　最早側へは、

四人　かなはぬぞ。

ト是にて軍藏主水立出で、長庵上手につくばひ皆々よろしく、

道十　無實ながらも盜賊の惡名受けて假初にも、獄舍へ引かるゝ身の成行、いかなる事か天道の憎しみ受けし我不幸、思へば〳〵淺ましい。

りよ　年月積る艱難の憂目の數は過せども、邪非道は如程もたくに泣かれぬ此場の仕儀、

軍藏　汝に出でしは汝にかへると、善根すれば幸ひあり、惡事は脫れぬ天の罰、

主水　傳へ聞く周の代に大聖孔子も無實にて捕はれ給ひ、縲絏の中に苦しむ例もあり、

りよ　其濡衣を解くよしも歎きに晴れぬ日の目さへ、干す方もなき雨の夜の、

長庵　さす目印の傘が、身に還ひかゝり暗き身と、

道十　實や浮世は幻しの、其境界は秋の色、

りよ　變るも早き水鏡、とまりかねたる月の影、

道十　世に薄命な、(ト思入。)

軍藏　それ、引立てい。

皆々　はあゝ。(ト是を木のかしら。)

兩人　あゝ身の上ぢやなあ。

トおりよ抱子を突附ける、道十郎ちつと見て名殘を惜む、軍藏寄らうとするを主水隔てる、長庵うまいと思入にて肩にて笑ふ。此見得よろしく、時の太鼓、うれひ三重にて、

幕

三幕目

麹町村井長庵内の場

（役名　村井長庵、早乘り三次、伊勢屋の息子千太郎、御家定。長庵妹おそよ。）

（麹町長庵宅の場）——本舞臺上へ寄せて三間常足の二重屋體、向う更紗の暖簾口、上手三尺の床の間、此脇に百味簞笥、藥種棚、下手唐藍石摺の襖、下の方一間の玄關、右家體の傍に用水桶、後ろ黒塀、總て長庵住居の體。爰におそよ亂れたる結び髪黒繻の鉢卷をなし、やつれたる拵にて茶碗の水へ切火をうち、御符を呑み居る御家定紋付の着附、尻端折り片襷武家出と見える拵にて雜巾掛をして居る、傍に番手桶あり、此見得宜しく稽古唄にて幕明く、

定　居候もいゝが拭掃除をするので、手があれていかねえ、それに名代の麹町だ水を汲むばかりで、がつかりする。

そよ　（御符を呑んで、）もしお前さん、兄さんはどこへ行かれましたぞいな。

定　あい、先生は今湯に行きなすつた。

そよ　さうでござりますかいな。

定　お前水垢離で何を上んなさるのだえ。

そよ　胸が支へてなりませぬゆゑ、高野のお土砂を頂きましたわいな。

定　おや〳〵生きて居る者にも利きますかえ。

そよ　信心さへ致しますれば、藥よりよう利きますわいな。

定　わつちやあ又死んだものにばかり用ゆるのかと思ひました。

そよ　いやも私の體なぞは、半分死んで居りますが、どうぞ息のある其中にお屋敷へ奉公に行つて居るお梅に一ト目逢ひたい者ぢや、さうして爰から淺草迄はどの位ござりますぞいな。

定　淺草迄はまづ二里だね。

そよ　あゝ二里あつては歩かれぬが、どうぞ駕籠に乘つてなりとお梅に逢うて死にたいものぢや、どういふ事か兄さんが先の屋敷の名もをしへず、今に〳〵と二月越し連れて行てくれませぬが、おまへさん知つてなら先を敎へて下さりませ。

定　たゝその娘御の行つて居る家は、いやさ、行つて居な

さるお屋敷は淺草だといふことだ。
そよ　どうぞおまへさん居所をば、お聞きなすつて下さり
　ませいな。
定　あい／＼その中聞いて上げませう。何にしろ爰に居な
　すつては惡いから、二階へ上つておいでなさい。
そよ　はい／＼今二階へ行きますわいの。あゝお梅に早く
　逢ひたいものだや。
定　今に逢はして上げますよ。
そよ　どうぞお賴み申しますわいな。（ト下手の襖を明け
　る、內に階子ありて是より二階へ上る心定役を見送り）
定　いやこつちの親分もひどい事をする人だ、現在血を分
　けた妹が娘に逢ひに三河からわざ／＼江戸へ出て來た
　を、此二階へ投り上げてたうとう病人にして仕舞つた、
　もう一ト息煩らやあころりといつて仕舞ふのを知りつゝ
　娘に逢はさねえのは、却々己達には出來ねえ事だ、どう
　でも師匠は師匠だけあるなあ。
　トやはり門口を拭いて居る、又稽古唄になり花道より、
　長庵木刀をさし手拭を持ち、湯上りの體。酒屋の丁稚
　三太一升德利を提げ出て來り花道にて、
長庵　こう小僧、昨夜の酒は濁つてゐたが、家へ行つたら
　さう言つてくれ。
三太　さうでござりませう、ありやあ樽底でござりますか
　ら。
長庵　あんな酒をよこすと、勘定をしねえぞ。
三太　どうで下さりませんから宜しうござります。
長庵　いや口のへらねえ奴だ。（ト舞臺へ來り、直に內へ入
　り）定公、今歸つたよ。
定　こりやあ先生、お早うござりましたね。
長庵　なに、早い事もあるめえ、病家へ一軒寄つて來たの
　だ。
定　へえお前にも病家がありますかえ。
長庵　失禮な事をいふな、此間迄は惡い病氣に朝から晩迄
　歩いて居た。
定　あの時遊んで居る醫者なら、よく／＼下手なやつだ。
三太　（門口から德利を內へいれ）もし、是で三升でござ
　りますよ。
長庵　いくらでもおいて行け、節句前には拂つてやるわ。
定　こりやあ有難い、酒だね。
長庵　手前に呑ませようと思つて、一升つがせて來た。留
　守に誰も來なかつたか。

定　いえ誰も來やあしませぬが、二階の妹御が娘に逢ひたいヽヽと口つゞけに言つて居なさるが、ありやあ病氣がよくなると駈出して行きますぜ。
長庵　いくら逢ひてえといつたとて、逢はせる譯にやあいかねえから、方を附けて仕舞はざあなるめえ。こう湯へ行つて來さつし、ゆつくりやらう。
定　そいつあ有難い、なんぞさういつて來ようかね。
長庵　いや手前が行くにやあ及ばねえ、小僧を頼んでやらう。これ小僧、手前歸り掛に角へ寄つて、鰌鍋を二枚さういつてくれ。
三太　あいヽヽ。
長庵　忘れるなよ。
三太　忘れたら堪忍しねえ。
定　(手拭を持ち、門口へ出掛け、)いや此幼兒はけんのんだ、わつちが行掛けにさういつて、歸りに持つて來るとしよう。
長庵　氣の毒だな。
定　何のざふさもねえ。
三太　氣の毒だな。
定　えゝ洒落やあがるな。(ト三太の天窓を叩き三太附いて花道へ入る。)
長庵　やれヽヽ一日に詰つた、朝湯の積りで行つたがもう午だ、雇の婆に風を引かれて飯を炊くに困る時へ御家主が遊びに來たから、男替りに頼んで置いたが、段々不自由な事だ、飯の世話ばかりやあ女に限る。
ト煙草を呑み居る、稽古唄になり花道より、千太郎羽織着流しにて、以前の小僧一緒に附いて出來り、花道にて、
千太　そんなら長庵樣のお家は向ふのお家か。
三太　あい、玄關のある家でございます。
千太　よく教へて下すつた。
三太　お前掛るならおよしなせえ、あの人は下手だぜ。
千太　なに、藥を貰ふのではない。
三太　そんならいゝ。
千太　いや子供といふ者は罪のないものだ。(ト舞臺へ來り門口にて)はい、御免下さりませ。
長庵　どうれ。(ト帶を締直し、思入あつて玄關へ出で)どなたでござるな。
千太　へい、千太郎でござります。
長庵　おゝこれは千太郎殿か、よくおいでなすつた、まあ

まあ是へおいでなせえ。
千太　眞平御免下さりませ。（ト玄關より二重へ廻り來て、
兩人宜しく住ふ。）
長庵　扨朝夕は、冷氣になりましたな。
千太　大きにお凉しうなりましてござりまする。
長庵　（煙草盆を出し、）あひにく只今召仕が出まして。
千太　いえお構ひなされてくださりますな。
長庵　ときに吉原へ御出でなされますかな。
千太　はい一昨日參りましてござります。小夜衣も宜しう
申しましてござります。
長庵　左樣でござりますか、して今日は遠路の所何ゆゑお
出でなされましたな。
千太　え。（ト合點の行かぬ思入。）
長庵　なんぞ御用でもござつてかな。
千太　へい、一昨日お賴み申した事は、如何なりましてご
ざりまする。
長庵　（わざと心得ぬ思入にて、）なに、一昨日お賴みとは
御病人でもござつたかな。
千太　いえ明神下の龜の尾で、お願ひ申しました事でござ
りまする。

長庵　一向覺えござらぬが、そりや人違ではござらぬか。
　ト千太郎是を聞き、長庵がだますといふ思入あつて、
千太　はゝゝ、長庵さまとした事が、私に氣を揉ませよう
と、御常談ばかり仰しやります。
長庵　いや千太郎どの、愚老若年の者ではない、最早初老
を越したる長庵、何常談を申さうぞ。
千太　そりや貴方、ほんまに左樣でござりまするか。
長庵　人命を預かる醫者でござる、なに噓を申さうぞ。
千太　え（ト思入あつて、）一昨日龜の尾でお目にかゝつた
其時に、明後日は家へ來い、小夜衣に逢はさうと、仰し
やつたではござりませぬか。
長庵　いや龜の尾で逢つたの、小夜衣に逢はさうのと、愚
老とんと存ぜぬ事だが、いかなる仔細あつての事だな。
千太　（せきこみ、）そりやあなた何を仰しやります、小夜
衣を私が身受したいと申しましたら、客の手から身請を
すれば何百兩といふ金がなければ所詮出來ぬ事、親許か
ら掛合へば賣つた時の五十兩で家へ連れて來らるゝ程
に、五十兩遣はされば直に小夜衣を連て來て、わしが家
へ置きませうから、女房と思うて時々に逢ひにござらば身
の爲と、御親切のお詞に、五十兩の金調へ、一昨日お渡し

申しました。而も其時おつしやるには、もし又是で不足なら、十や二十のたらずめは、姪の事ゆゑ足してなりとも、つらい苦界の勤をば早く助けて遣りたいと、仰しやつたではござりませぬか。

長庵　いや是は怪しからぬ事を承はるものかな、脈體は何はぬが、御血色の樣子逆上でござると見える。ちと服藥なさるがいゝ、卽效は灸治にかぎります。

　トわざととぼけていふ、千太郎思入あつて、

千太　そんならどうでもお前さまは、御存じないと仰しやりますか。

長庵　まだ老耄も致さぬ長庵、忘却致すこともござらぬ。

千太　えゝまざ〳〵とそのよなことを、あれ程金子五十兩龜の尾でおわたし申したに。

長庵　なに金子を五十兩渡した、いやはや途方もない事を言はつしやる、受取つた覺えはござらぬぞ。

千太　なんのない事がござりませう。而も小判で五十兩。

長庵　すりやどうあつても長庵に、渡したと言はるゝか。

千太　お渡し申したに相違ござりませぬ。

長淸　左程に渡したと言はるゝには、證據がござらうな。

千太　さあその證據は、

長庵　證據があらば見せさつせい。

　トきつと言ふ、千太郎悔しき思入にて、

千太　えゝかういふ事のあるかして、請取つたといふ一札を一筆書いてと言うた時、小夜衣と夫婦となればいはゞ伯父甥、其中になんの一札がいるものぞ、それを取らうと言るゝは隔てがあつて氣まづいゆゑ、もう〳〵身請の世話はせぬと、けんさうかへて言はるゝゆゑ、よもや間違もあるまいと請取りもなく渡したが今となつては此身の過り、いかに證據がないというて、ようまあ知らぬ請取らぬと言はれた事でござりまする。（ト悔しき思入）

長庵　これ〳〵千太郎殿、そりや何を言はれるのだ、借家なれど玄關構へ仁術を施す醫者でござる、不義の富貴は浮べる雲、非道な金を貪ぼるやうな村井長庵ではござらぬぞ、誰にしてもいゝこなた相手にするも大人氣ないが、言ひ掛けをさつしやれば、其分にはして置かれぬぞ。

千太　えゝ言ひ掛とはなんの事、渡した金を請取らぬと、

長庵　又しても〳〵同じ事を言はるゝが、渡したといふ證據があるか。

千太　さあそれは、

長庵　證據がなければ、言ひ掛けだぞ。
千太　さあ、
長庵　證據があるか。
千太　さあ、
長庵　さあ、
兩人　さあ〳〵〳〵。（ト長庵千太郎の襟がみを取つて引据ゑ。）
長庵　よくも言ひ掛しやがつたな。（ト突放す、千太郎思入あつて、）
千太　金を取つた其上に知らぬといふて打ち打擲、そりやあんまりでござりませう。
長庵　あんまりとは何があんまりだ、渡しもしねえ五十兩、渡したといふ汝があんまりだ
　ト長庵煙管で千太郎の額を突く。
千太　それぢやというて、お前に渡したに違ひありませぬ。
長庵　まだそんな事をいふか、さあおれと一緒にあゆべ。
　ト千太郎の手をとり引立る。
千太　何處へ行くのでござりますな。
長庵　何處へ連れて行くものか、名主の玄關へ連れて行き、汝を縛つて突出すのだ。

千太　えゝ（ト悄りなし、怖き思入。）
長庵　まだ親掛りの身分にて、五十兩といふ金をどうして持つて居る事か、其所から調べていつたなら、愚老が明は立つだらう。さあ覺悟極めて一緒に行きやれ。
千太　さあ、どうも名主の玄關へは。
長庵　なぜ行かれないのだ。
千太　今お前樣のいふ通り、親掛りの私ゆゑ金子を調へましたのは、人に明けては言はれませぬ。
長庵　むゝ盜みでもしたのか。
千太　いえ〳〵左樣な事ではござりませぬ、三次殿といふ人から五十兩に預つた、白露の短刀を下質同樣仲間の家へ預けて借りた五十兩、親父樣へ内證ゆゑ、表沙汰になりまして家へ知れては濟みませぬ、それ故どうも參られませぬ。
長庵　それぢやあ三次か。
千太　え。
長庵　いや、さりとは〳〵ふてい奴だ。さういふ話しを聞くからは、いよ〳〵言ひ掛に違ひない、名主の玄關で金の言ひわけ白い黒いを分ねばならぬ。（ト長庵立かゝる。）
千太　どうぞそればかりは、堪忍して下さりませ。

長庵 (思入あつて、) 迷惑とあるならば了簡して遣らうから、早く歸られたがよい。

千太 (思入あつて、) ではござりませうが、此儘に、

長庵 歸られぬといふのか。

千太 さあみす／＼知れた五十兩。ト長庵を恨めしさうに見る。)

長庵 未だそんな事をぬかしやあがるか。ト木刀を持ち立かゝる、千太郎玄關へ逃出る、長庵追かけ來て木刀で打つ、千太郎どうとなる。)

面に似合はぬふてえ奴だ。

千太 (起上りて、) えゝ、なんでわたしが、

長庵 どうしたと。(ト木刀を持ち、きつとなる。)

千太 いえよろしうござりまする。(ト雪踏をとつて、門口へ出る。)

長庵 よくなくつて、どうするものだ。

ト千太郎悔しき思入にて額へ手拭を當て泣く。是をきつかけに唄になり、泣きながらしを／＼と花道よき所迄行き、後を振返り今に見ろといふ思入、ばた／＼に ていつさんに花道へ入る。長庵玄關から覗き後を見送り、

長庵 あゝもう歸つたか。いや何といつても未だうぶだ、五十兩といふ金を只取られて歸つたが、流石のおれも氣の毒だ、假長屋でも玄關附をわらかもので通り、わづか五軒か七軒の病家先から持つて來る三分禮ぢやあうまらねえ。そこで時たま古方家な荒療治にするもあつゝ、なろう事なら憎まれる敵役は仕度くねえな。

ト新内の合方になり、花道より御家定、持を提げ出て來る、後より三次頬冠り、半合羽尻端折りにて出て來り、花道にて、

三次 おい、そこへ行くのは定おやあねえか。

定 誰だ。ト振返り、見て、おゝ三次さんか、何處へ行きなすつた。

三次 二三日後から新宿へ來て、すつかり耗つて仕舞つたから、兄貴の所へ寄つて家へ歸るのだ。手前此頃はどこに居る。

定 長庵さんの所にごろついて居るのさ。

三次 むゝさうか。兄貴は家か。

定 あい、内に居なさるよ。

三次 丁度いゝ、一緒に行かう。(ト兩人舞臺へ來り、)

定 もし、三次さんが來なすつた

三次　兄貴、此間は。（ト手拭を取りながら内へ入る、御家定は下手へ岡持を置く。）
長庵　どうした三次、さつぱり來ねえな。
三次　久しく風を引いて居た
長庵　そいつはわるかつたな、（ト捨ぜりふにて、三次長庵の傍へ住ふ、御家定煙草盆を出し。）
定　どうだね淺草の方は錢になりますかね
三次　いやならねえから山の手へ、二三日後から出掛けて來たのだ。
長庵　堀の内へでも參つたのか。
三次　きのふの朝參つて來たが、さつぱり御利益がねえ。
長庵　勿體ねえ事をいふなえ。
定　どれ、御酒の仕度をしようか。
三次　定や、酒があるのか。
定　あい一升ありやす。
三次　そいつあ有難え、ときに兄貴、いつもおんなじ事を言ふ樣だが、此頃の樣に間のわりい事はねえ、出るたアとられ／＼、盆からこつちへ三十兩耗つた。なんぞ金になる事はねえかえ。
長庵　あるな。

三次　あるかえ。
長庵　いくらもあらあ。
三次　麻疹ぢやアあるめえし。
長庵　早速金になる事がある。
三次　何にしろ有難えな。
ト此中小さなひろぶたへ鰌鍋二枚、燗徳利、すましの丼、猪口を添へて御家定持ち出で、
定　まあ一ぱいおやんなせえ。（ト三次の前へ出す。）
三次　やあ骨拔鰌鍋だな、こいつあごうぎだ、（ト蓋をあけて）おゝ山椒をこぼして仕舞つた。
長庵　株をやつてゐるぜ。
定　一寸お燗を見ておくんなせえ。
長庵　どれ（ト長庵猪口を取る、御家定酌をする、長庵呑んで）丁度いゝ、名燗だ。
ト三次へさす、捨ぜりふにて酒を呑み居る、奥にて、
そよ　もし兄さん、どうぞお梅に逢はして下さい、早くお梅に逢はして下さい／＼。
長庵　逢はしてやるから、待つて居ねえ。
そよ　息のある内に逢はして下さいよ。
長庵　えゝやかましい、逢はしてやるといふに。（ト三次是

れを聞いて思入あつて、)

三次　兄貴、ありやあなんだ。

長庵　それ、一件の重兵衛が女房だ。

三次　むゝ、おめえの妹か。

長庵　さうよ。手前飯を食つたか。

三次　まだ食はねえ

長庵　定や、(鰻の)小あれい所を一分ばかりさういつて來てくれ。

定　飯附きだらうね。

長庵　しれた事よ。

定　香々たつぷりお茶をあつくしてか。

三次　御苦勞だな。

定　なに直そこだ。(ト下手へ入る。兩人酒を呑みながら、)

長庵　こう三次や、きつと金になる仕事を手前におれが頼みてえが、何と聞いてくれるだらうか。

三次　金にせえなる事なら、なんでも聞かうぢやあねえか。

長庵　手前に頼むは外の事でもねえ、今お梅に逢ひてえ逢ひてえといふ重兵衛が女房、己が實の妹だが、よつぽど分らねえやつよ、手前も判が入つて居るが、屋敷へ奉公にやつた積りで、丁子屋へ賣つたお梅だから、幾ら逢ひてえといつたつて逢はせられねえぢやあねえか。煩らつて居るからいゝけれど達者になりやあおつとして居ねえ、これが一つ暴れた日にやあ重兵衛の一件も疑ひが掛らにやあ居ねえ、そこで少し不便だが、あいつを生かして置けねえから、手前に殺して貰ふ積りだ。

三次　え、そりやあ金にせえなる事なら、何でも否とは言はねえが、他人ぢやあなしおめえの妹。こりやあ御免だ御免だ、殺すなら人手を借りず一服用ひて仕舞やあいゝに、

長庵　そりやあ氣の附かねえでもねえが、どんな酷い毒藥でも芝居でするやうに直にやあ死なねえ、其上惣身の色が變るから跡が面倒だ。

三次　それで己に殺せといふのか。

長庵　まさか己が手を下して殺す譯にも行くめえぢやあねえか。爰は兄弟分のよしみだ、己に替つて殺してくれ。

三次　外の事ならいゝけれど、是ばかりやあ御免だ。

長庵　こう手前もわからねえ事をいふぜ、此一件が暴れた日にやあ己許りが兇狀は着ねえ、手前も判があるから拔けようといつて拔けられねえぜ。

三次　そりやあ事と品に寄つたら、殺すめえものでもねえ

か。(ト大きな聲をする。)
長庵　えゝ大きな聲をするな。
三次　さうして、金儲けといふなあなんだ。
ト此時御家定下手より出て來り、玄關口より窺ひ居る。
長庵　思入あつて、
長庵　手前が三河町の伊勢五へ置いた一件の短刀を、家の息子が早乘つて仲間の家へ五十兩に預けた事を聞いたから、親父の知らねえ所が山だ、種のねえのを附込んで、今日其品を出しに行き、見世へ掛つてごたつきやあ、十や二十は大丈夫だ。
三次　そいつは旨え話しだが、きつと息子が持出したかえ。
長庵　當人の口から聞いたのだから、こんな慥な事はねえ。
三次　それぢやあ知らねえ顏をして、出しに行つてごたつかうが、なんぞ金と見える物がほしい物だ。
長庵　(有合ふ箱入りの温石を取つて、)おつといゝ物がある、病人が入れた箱入温石、此石をもう一つ買つて、すつかり封じて切餅(二十五兩包み)はどうだ。
三次　うめえ〳〵、然しおれ一人で行くよりやあ、持主だといふ侍を拵えて連れて行く方がいゝな。
長庵　そりやあ其方がいゝ。

三次　誰ぞ侍はあるめえか。
長庵　御家定を連れて行かつしな。
三次　むゝ、彼奴は以前りやんこだから、二本差は妙だ。
定　(思入あつて、)頼まう〳〵。(ト時代に言ふ。)
長庵　どうれ(トまじめに、)どなたでござるな。
定　小山定之進でござる。(ト突袖をして二重へ出る。)
長庵　おきやあがれ、定か。
三次　惡い洒落だ。
定　玄關で樣子を聞いた所から、直に侍になつたのだ。
長庵　氣の早いやつだな。
三次　しかし、頼まう〳〵は本職だ。
定　そりやあ昔取つた杵柄だ、何にしろ損料屋へ行つて身裝を拵へて來やせう。(ト行きかける。)
三次　段々御苦勞だな。
定　其替り旦那は御如在ねえ。
三次　其樣事をいふと、鼾をかくぜ。
定　惡い顏だ。(ト下手へ入る。)
三次　それぢやあ是から伊勢五へ行くから、二階の方に明日の晩にしてくんねえ。
長庵　さう急でなくてもいゝが、お梅に逢ひてえ〳〵とあ

あ口つゞけに言はれちやあ、あたり近所へ惡いから、明日手前の所へ駕籠に乘して送らして遣るから、二階へでも上げて置いてくれ。

三次　丁度そりやあいゝ事がある、小塚原へ遣つた女が鳥屋について來てゐるから、一緒に二階へ上げて置かう。

そよ　兄さん〳〵、どうぞお梅に逢はしてくんなさい。

ト いひながら襖を明けて出て來る、長庵三次に目くばせをする。三次是にてちやんと住ふ。

長庵　おゝ逢はしてやるとも〳〵、此間中から連れて行つて逢はしてやらうと思つても、病人の多いので、晝前は調合に掛り、晝から病家を見舞ふので半日明ける事が出來ず、どうしようかと思つた所、其お屋敷へお出入りの而も田原町においでなさる金貸の旦那がおいでなさつたから、其のお話をしたらば己の所へよこすがいゝ、屋敷へ一緒に連れていつて、おぬしが逢ひたがるお梅に逢はしてやらうと仰しやるよ。

そよ　え、そりや、あの、娘に逢はして下さりますとか、それは〳〵有難うござりますわいな。左樣ならあなた樣が、そのお屋敷へ御出入りの旦那樣でござりますかいな。

三次　なに、わつちやあ。

長庵　あこれ、伊勢屋の八兵衞さま、伊勢八の旦那樣、これが妹でござりまする。

三次　（思入あつて、）これは〳〵お初にお目に掛ります、わつちやあ、いや、わたしは伊勢屋八兵衞と申しまする、そんならおめえが兄貴の、兄御の、妹でござるかな。

そよ　はい左樣でござりまする。定めてお聞及びもござりませうが、連合の重兵衞が不慮な目に遭ひまして、便りに思ふは此長庵、又一人の娘のみ、まだ年も行きませず、又お屋敷の御奉公ゆゑ氣詰りと思ふに附け、此頃は夢見が惡く案じられてなりませぬゆゑ、逢ひたう〳〵たなりませぬわいな。

三次　あの子なら案じなさんな、至極達者で評判もよし、今ぢやあ小夜衣さんといふよ。

そよ　へえゝ小夜衣と申しますか。

長庵　えて屋敷ではあんな名を附けるものだ。

三次　年はいかねえが、仲の町張りだ。

そよ　仲の町とおつしやりますは、

三次　いやさ、中奥を勤めて居なさる。

長庵　（此中氣づかふ思入、）どうぞ旦那、御面倒でもお出

入り屋敷の事なれば、お連れなされて下さりませ。
三次　あゝ連れて行つて上げようとも、あすこの家は。
長庵　あこれ。（ト目で教へろ。）
三次　あすこの屋敷は、極く心安い。
そよ　兄さんに聞きましても、兎角お屋敷の名も申されませぬが、何樣とおつしやるお屋敷でござりまする。
三次　お屋敷といふは、吉原御殿さ。
そよ　吉原御殿と申しまするか。
三次　いえ吉田御殿の跡で、お名前は、なにさ、見歸り播磨樣といひます。
そよ　左樣でござりまするかいな。
長庵　先おぬしも安心だ、明暮逢ひたい〳〵といつたお梅に、翌日逢はれるのだ。
そよ　是といふのも貴樣のお蔭、えゝ有難うござりまする。
　ト三次を拜む、三次可愛さうだといふ思入あつて、
三次　あ、佛頼んで、
長庵　これ、
　ト目で押へろ。下手より鰻屋の男岡持、お櫃、香の物の丼を乘せし廣蓋を持出で、
若者　へい、お誂へでござります。（ト突出して下手へ入る。三次おそよへ思入あつて、）
三次　あ、こいつあ罪だ。
そよ　なに、罪とは。
長庵　むゝ、ト思入あつて、鰻の岡持をおそよの前へ置くを木の頭、）鰻の事よ。
　ト本釣鐘新内段切の合方にてよろしく、　ひやうし幕
と幕引附けると、直に角兵衛獅子、合方になり、尻明けに引返す。

四　幕　目　神田三河町伊勢屋の場

（役名――伊勢屋の番頭久八、伊勢屋五兵衛、甲州屋吉兵衛、早乘り三次、伊勢屋の息子千太郎、紙屑屋六右衛門、御家定、伊勢屋手代與助、同淸七、
　其他。）

（伊勢屋店頭の場）＝本舞臺四間通し常足の二重家體。軒へ山形に五の字伊勢屋と記せし紺暖簾、正面

同じく山五といふ紺の長暖簾、上手質櫃、下まひら戸の戸棚、此前に帳場格子、帳箱、下手鼠壁質の帳面通抔の書割、質物の掟書を張出し、いつもの所門口、下の方後へ下げて土藏の張物、用心土の箱、下の方柱に分銅の中へ兩替と記したる看板、すべて三河町伊勢屋質見世の體。爰に手代與助、淸七の兩人にて質物を帳面へ引合せ居る、此傍に小僧質物を疊紙へ入れて居る、下手に質置の仕出し入ゐる、此見得角兵衛獅子の鳴物にて幕明く。

與助　千三百五十七元金二分也、薩摩がすりの單衣、正兵衛仁助。後が千三百五十八元金一兩、六七の蚊屋、三布蒲團一枚、四郎助五兵衛。

ト手代兩人にて質物を帳面へ控へる。

△　もし／＼、またおいらの羽織は知れねえかえ。

淸助　まことにお待遠でござります。

△　急に折口があつて行くのだから、早くしておくんなせえ。

與助　へい／＼、畏りました。これ三太、まだ知れぬか。

三太　はい／＼知れました。（ト奥より質物の包を持つて來り、手代の前へ置く。）

淸助　へい、是は元が一分で利分が二タ月になります

△　そんなら利が八十に、元が一分、上げるよ。

淸七　へい／＼宜しうございます、

△　おいらが行つて來ると直に持つて來るから、値を下げちやあいけねえぜ。

與助　いえ鐚さへ付きませずば、何時でも一分通用でござります。

△　それから二の字崩しのどてらと、中裁の布子といふ口は、もうちつと待つてくんねえ。

與助　どうか少しでも利上をお願ひ申します。彼是二タ流になります。

△　あいつは是非請けにやあならねえ、どつちみち利上をして置きやせう。

淸七　お頼み申します。

△　ときに番頭さん、此頃は家の息子もだいぶ初めたの。

淸七　何でござります。

△　吉原の丁字屋へせつせと出かけなさるね。

與助　まことにはや困つたものでござります。

△　あゝ熱くなつちやあ、始終はむづかしいね。

與助　いえもう親指の耳へでも這入りますると、中々大層

ぎでござります。
清七　直に里方へ引戻しといふことになりませう。
へ　さうだらうよ、又此方の家の大將程慾張つたしみつたれはねえの。
與助　いやもう是は名代物でござります。
へ　世間の評判だが、おめえの家ぢやあお櫃へ錠をおろすさうだの。
清七　まづそんなものでござります。
へ　もういゝ年だらうが、本たうの金の番人だ。
與助　いやも吝い方では引けは取りませぬ。
ト此時後の暖簾より五兵衛老けたる拵着流しにて出で來り、嚏をして、
五兵　あゝ又どいつか人の噂をしやあがると見える。
そりや生爪親仁が出て來た、お暇と致しやせう。
與助　先宜しうござります（ト是にて質置は下手へ入る。）
五兵　これ／＼與助、段々と日が詰るわ、何時迄帳合に掛つて居るのだ。清七々々、さつさと調べて仕舞はぬか、だれ一人己の氣に入る奴は無いわえ。早く仕舞つたら天氣のいゝ内に敷紙へ澁でも引いて仕舞はつせえ。
兩人　はい／＼畏りました。

五兵　何を云つても畏りました／＼とばかりで、とんと埒が明かぬわえ。これ／＼長松、手前は何をして居る。
長松　今入質を繕へて居ります。
五兵　それなれば手ばしこくするものだ、そんな事で手間を取つては役に立ぬ。人並に飯ばかり喰やあがつて何を爲ても埒が明かぬ。さうして早く流の書出しを配つて來ぬか、夜になつたら十露盤も習へ、此間手前に貸した塵劫記はどうした。
長松　へい私の箱にござります。
五兵　御座りますなら、なぜ出して習はぬのだ。
長松　あれは幾ら見ましても、版が摩れてちつとも分かりませぬ。
五兵　不器用な奴だ、分らぬ事があるものか、あれは昔の塵劫記、中々紙もよい筈ぢや。
長松　それでも眞黒で少しも分かりませぬ。
五兵　そりやあ其筈だ、あの塵劫記は己が十二の年初めて奉公に出る時、古本屋で廿八文で買つたのぢや、物持がよいであらう。
長松　左樣でござります。
五兵　貴樣達もちつと見習へ。

皆々　畏りました。
五兵　これ與助、長助さんは利上げを持つて來たか。
與助　いえまだでござります。
五兵　いやあの男の樣にづるい者はない、これ小僧序に廻つて來るがいゝ、今日明日に利上をなさらぬと、流れて仕舞ひますとよく斷つて來い。
長松　はい〳〵畏りました。
五兵　これ〳〵又犬にかまつて居るなよ。
長松　はい〳〵。（ト出にかゝる。）
五兵　これさ、はい〳〵とばかりで長助の所へ寄るを忘れるな。
長松　宜しうござります。
五兵　利上をせぬと流すと云ふのだぞ。
長松　はい〳〵。
五兵　分つたか、利上をすると流すといへ。
長松　はい〳〵、利上をすると流すと申します。
五兵　えゝ分らぬ奴だ、利上をせぬと流すと言へ。えゝ何だか分らなくなつたわえ。
長松　私にも分りませぬ。
五兵　役に立たず、揃々世話のやけた奴等だ（ト煙管を持つて雁首の方を呑まうとする。）
長松　あゝもし〳〵、それおやあ逆さまでござります。
五兵　えゝ知つて居るわえ（トやはり雁首を吸ふ。）あツつゝゝ、それ見たことか燒傷をさせをつた、えゝ忌々しい。（ト小僧の天窓を打つ。）
長松　教へたり打たれたりしちやあうまらねえ。
五兵　此方がうまらねえわえ、えゝ何をぐづ〳〵して居るのだ、早く行かぬか。
長松　はい〳〵（ト門口へ出る。）
五兵　又用を間違へるな。
長松　大丈夫でござります。
五兵　えゝ口のへらねえ奴だわえ。
ト長松下手へ入る。五兵衛捨ぜりふにて小言を言つて居る。やはり合方角兵衛獅子の鳴物にて、花道より紙屑屋六右衛門着流し白足袋草履麻風呂敷を肩に掛け、秤を腰に差し出て來る。後より久八羽織着流し篤實なる拵にて紛失帳を持出て來り、花道にて、
久八　もし〳〵、其所へおいでなさりますは、飯田町の叔父さんではござりませぬか。
六右　おゝさう云ふは久八殿、何處へござつた。

久八　はい、紛失物を玄關へ寫しに參りました。いやも御同然に此稼業はこれが蒼蠅うございまする。

六右　いや、此間から御天氣の惡いので、久しく買物にも出なんだ故、今日は朝から出掛けたが商賣といふものは有難い、出さへすれば二朱や一貫の立前にはなるて、

久八　それにお前さんなどはお顔が古いから、どう致しても違ひます、モシお約束の古帳を見出して置きました。

六右　いやそれは有難い、澤山あるか。

久八　いえ十册ばかりもござりませう、兎も角も來て御らうじませ。

六右　そんならお見世まで行きませう。

久八　さうなされませ。（ト舞臺へ來り、門口にて）さあお入りなされませ。

六右　まあ／＼貴樣入るがよい、今日はお前の方がお客樣だ。

久八　そんなら御免なされませ（ト門口に這入る。）

五兵　おゝ久八、歸つたか。

久八　唯今歸りましてござりまする。

五兵　今日の紛失物のお觸は、どんな物であつた。

久八　いえ皆在來りの品ばかりでござります。

五兵　さうか、いや不正の品は取りたくないものだ、引合で物入りが何より怖いて。

久八　實に左樣でござります。

六右　へい旦那樣、御機嫌宜しうござりますか。

五兵　おゝこれは、飯田町の六右衛門殿、久しく見えぬ樣であつたがどうぞさつしやつたか。

六右　いやもう此時候の惡いせゐか一寸風邪を引きましたが、十四五日臥せりました。

五兵　此節はよッぽど氣を附けぬとやられます、わしも鬼の霍亂とやらで十日程寐ました。

六右　それはお珍らしい事でござります、然し早速お快ようござりましてお目出たうござりまする。

五兵　全快にしましたが醫者に藥禮をせねばならぬ、いやはや、とんだ大物入りをしました。

與助　久八殿、昨夜の分は殘らず元帳へ寫しました。

久八　それは御苦勞であつた、午過迄は掛らうと思うたが、思ひの外捗が行きました。

小僧　私も殘らず包みました。

久八　おゝさうか、手前もめつきり手早くなつた、段々と出世せねばならぬ、精出して勤めたがよい。

五兵　これ〳〵久八殿、さう褒めさつしやるな、大概になまけをるによつて、早いと思うても遲いと小言をいはつしやれ。

久八　はい〳〵畏りました。（ト紛失帳を帳箱の上へ載せる。）

五兵　ときに六右衞門殿、此節は反故の相場はどうでござるの。

六右　へえ先達より二匁方値が宜しうございます。

五兵　なに値がよいか、それは何よりだ、然しまだ値が上りはせぬかの。

六右　いえ〳〵只今が相場の宜しい止りでございます、是から段々下り口になります。

五兵　丁度よい時分であつた、種々古帳も奧に出してあるから見て下さい。

六右　畏りましてございます。

五兵　いやなに六右衞門殿、今更別に云ふでもないが、此方が請判でわしが家へ奉公に來たあの久八、まことに辛抱人ぢや、初めて此方が連れて見えた時は慥十二の年であつた、目見得に來た其時に上り口に落ちてあつた反故を拾つて紙縷によつて居るのを見て、此奴氣の附く奴だわえとわしが思つたに案に違はず、始末といひ辛抱といひ子供の時から目を附けた程あつて、わしが氣に適ふは久八ばかり、それに引替へあの養子に來た千太郎、いかに若年とは云ひながら、紙縷どころか半紙でなければ鼻紙も遣はぬ樣子、それに、そわ〳〵して、わしが氣に少しも入らぬのらくら者、困りはてるて。

六右　いえそれはまだお若い故でござりまする。なか〳〵御發明な若旦那御如在な氣遣ひはござりませぬ。あの久八なども根が田舍出でござりますればお間に合兼ねませうけれど、旦那樣がお仕込故どうやらかうやら人並になりましたと申すもの、是はあなたのお蔭でござります。

五兵　それは言はつしやる通り、一つは主人の仕込みによる、其所へ氣が附かねばならぬて。

久八　仰しやる通り私などは、別段に旦那樣のお引立てゞございます。

五兵　これ〳〵皆もよう聞いて置いたがよいぞ、何時が何時迄浮か〳〵しては居られぬぞ、二度の飯は二度喰つて一度宛は主人の物の入らぬやう、第一己がやかましく言ふも、皆そち達の爲を思ふのぢや、餘所事に聞いてはなりませぬぞ。

六右　いやもう此方のお若い衆は、皆御辛抱でござります。
五兵　ときに六右衛門どの、丁度時分であらう、支度をしてござらつしやれ。
六右　いえ有難うはござりますが、まだほしうござりませぬ。
五兵　いや何も遠慮さつしやるな、其替りそれだけ反故を値をよく買につしやれ。さあ〳〵わしも喰べるから、一緒にやりませう。
六右　左樣でござりますか、御遠慮なしに頂戴致しませう。
五兵　いやこなたは口果報があるわえ、今日は肴の惣菜おや、いゝ日に來合せて仕合せぢや。
六右　それは有難うござります。
五兵　これに少し悦び事があるによつて、大きな鱚が一尾附ぢや、何と此頃はわしが家も奢つて來たらうな。
六右　それは別段に好物な品でござります。
五兵　そんなら久八殿、見世は頼みまするぞ。
久八　御ゆるりと召上りませ。
五兵　さ、六右衛門殿ござらつしやれ。（ト唄になり、五兵衛先に六右衛門附いて奥へ入る。）

與助　いや旦那もいゝ氣な人だ、何の口果報な事があるものか、十で三十六文の鱚が一尾宛、
清七　それも滿足ならよけれど、腹の切れた仕舞ひ物よ。
小僧　眞實に旦那は吝嗇だね。
久八　是はしたり手前迄同じ樣に、何の樣な事があらうとも御主人の噂はせぬ物ぢやぞ。それはさうと與助殿、若旦那はまだお歸りなされぬか。
與助　下谷の御屋敷と云ふのはかこつけで、何れ吉原で晝遊びでござりませう。
清七　もし久八さん、此間參會の時に初めての女郎買ひ、それから女郎の味を覺えたかして、あれからこつちはそわ〳〵となさいまして、何も手に附かぬ樣でござります。
久八　さあわしも知らぬ顏はして居るが、若し其事が旦那樣のお耳へ入らばどの樣なお腹立、お小言ばかりで濟めばよけれど、なか〳〵むづかしい旦那樣殊に根が他人の親子故、不縁にでもなる時は富澤町の旦那樣もどの樣に御苦勞なされうも知れぬ、どうかさうならぬ中、若旦那にも御意見申し旦那のお名前でもお繼ぎなされ、見世を預かるやうになれば、わしも一遍國許へ行つて來たいと三年後から願つて居るが、どうか御辛抱を見屆けて、わ

しが願ひも叶へたいものぢや。
與助　先づ今の分では、
兩人　むづかしうございます。
久八　はて困つた事ぢやなあ。
トやはり角兵衛獅子の鳴物になり、花道より、甲州屋吉兵衛羽織着流し冠り笠を持出で來り、直に門口へ來て、
吉兵　はい御免なさい、此間は御無沙汰をしました。
ト久八帳場を出て來り）
久八　是は〳〵富澤町の旦那樣、よう入らつしやりました、先づ〳〵こちらへお上りなされませ。
ト是にて吉兵衛平舞臺へ住ふ、合方になり手代煙草盆を持つて來り、
與助　へい旦那樣、よういらつしやりました。
吉兵　もう〳〵構うて下さるな、段々と日短になつて嘸忙しなうございませう。
久八　へい何かと用事の多い事で、とんと暇がございませぬ、いつもお替りもございませいで、お目出たうござります。
吉兵　いやもう唯達者なばかりで、とんと埒は明かぬて。ときに達者といへば五兵衛殿の病氣はどうでござるな。
久八　へい有難うございます、早速全快でもう昨日あたりから見世へ出られます。
吉兵　いや達者な人ぢや、それでは相替らず小言も出ようの。
清七　いやも出るの何んのと申しまして、唯小言のみで外に御用はございませぬ。
與助　藤倉樣の御藥が餘り效過ぎまして、御全快が早いので樂が出來ませぬ。
吉兵　はゝゝいやあの小言も病ひの一つ、持まへと云ふものは仕方がない物。然し病氣が全快と聞いてわしも安堵した。ときに久八殿、流質の調べはまだ出來ぬかの。
久八　はい調べ掛けてござりますが、つい見世の忙しないので、一日々々と延びましたが、最早一兩日の内にはきつと調べて置きまする、其替り旦那樣今度の流質の口に、餘程端口が宜しうござります。
吉兵　それは何よりだ。いや久八殿流質と云へば、あの千太郎をば吉原で見掛けたといふ者が二三人もわしが耳へ入つたが、家でも明けはしませぬか。
久八　いえ〳〵それは誰ぞ人違ひでござりませう、若旦那に限りましては、そんな事は決してござりませぬ。廓所

か芝居さへ春と秋とにたつた二度、それさへ大旦那のお暇の出ぬ中は、おいでなされた事はござりませぬ、もうお若いお方には珍らしい事でござりまする。

吉兵　さう聞けば安心ぢやが、此間も廻りの髪結が江戸町とやらで見掛けたと云はれて見ると親心、何ぼ初心な伜でも年頃に、若ひよつとそんな事でもあつた日には、五兵衛殿へ濟まぬ上迚も始終が覺束ないと、案じた日には落附いても居られぬ故様子を聞きに來ましたが、いよいよ其様な事はござらぬかの。

久八　其事は決してお案じなされまするな。流石はあなたのお育柄、餘所外の息子様より堅過る程にござりますれば、浮氣らしい事は怪我にもござりませねば、御安心なされてくださりませ。

吉兵　いやもう、隨分堅い者なれど譬にも云ふ思案の外、どうもわしは。(ト案じる思入)

久八　もし旦那様、其吉原で見掛けたと仰しやりましたは是は斯様でござります、先達て仲間の參會崩れ御一統のお附合で、仲の町迄おいでの事がござりましたが、大方其時の事でござりませう。其節もお茶屋迄お附合だけ、お早うお歸りでござりました。

吉兵　いかさま其様な事であつたら、然し誰しも若い時分は皆覺えのある事、まんざら惡くもない所故一度や二度はよからうと、それからが病付きでついはまり易いもの、賴みに思ふは久八殿、必ず主と思はずに親身の弟とも思うて、もし惡い事でもあつたなら、此わしになりかはりよう云うて下され、さうして貰ふが千太郎の身の爲め、必ず共に賴みましたぞや。

久八　行届きませぬ私ではござりますが、及ばずながらお心添へも致しませうほどに、お案じくだされまするな。いやもう私が偏屈者でござりますれば、若い者や子供でも惡い噂やちと目に餘つた事がござりますれば、意見を加へて遣りますれば、仕合せと見世の者も不勤めをした者はござりませぬ、いやもううるさう思ひませうけれど、實に若い者には折々四角な事も申さねばなりませぬ。

吉兵　何に附けてもこなたのしめしがよい故に奉公人の惡い耳も聞きませぬ、不斷家でも三河町ではよい番頭殿が居られるので、五兵衛殿の仕合せと何時でも噂をして居ます、此上とも久八殿、伜の身の上、よい様にどうぞ賴みましたぞや。

久八　ひよつと惡い噂でもござりますれば、御遠慮なう御

意見も申し上げ、もう一兩年の中には御家督にもおなりなされませう、其時にはお目出度くあなた様の御安心を、お待ち申して居りまする。

吉兵　いやもう、今日は久八殿そなたに逢うたのでわしも安堵、あゝ伜もよい番頭殿がござるので身の仕合せぢや、それに附けてはわしも仕合せ、此禮は別段に言ひますぞや。いや、大きに長話をして、お前の帳合の邪魔をしました。これ久八殿、附かぬ事を聞くやうぢやが、もう幾つにならつしやる。

久八　へい月日の立つは早いもの、昨日御奉公に上つた様に存じますが、當年三十一歳になりまする。

吉兵　もう三十一になられるか、あゝ年より遙に優つた事ぢやなう。(ト吉兵衛思入あつて、)お前の年を聞くに附け、わしが惣領も算へて見れば三十一、何所にどうしてゐることやら、あ、生死さへも分らぬ身の上。

トほろりと思入。

久八　もし旦那様、其御惣領と仰しやりますは、どうなされたのでござりまする。

吉兵　いや是はちと仔細あつて、人に遣りました。

久八　左様でござりまするか。(ト是にて吉兵衛氣を替へ、)

吉兵　いや久八殿、今日はちと脱れぬ用事もあれば、直に歸りまする、五兵衛殿にも逢はずに行きます程によい様に言うて下され。

久八　まだ宜しいではござりませぬか、何時もながらお構ひも申しませず。

吉兵　事によつたら又歸りに寄りませう。(ト言ひながら門口を出る、久八送つて出て、)

久八　左様なれば旦那様。

吉兵　久八殿、(ト小聲になり、)伜が事を頼みますぞや。

ト唄になり、吉兵衛思入あつて、花道へ入る。久八宜しく後を見送り、

久八　あゝ御案じなさるも御尤も、お年頃の若旦那には此頃(ト邊りへ思入あつて、)あ、親子の情は別な物ぢやなあ。これ與助殿、淸七殿、吉兵衛様のお出で思出したが、此方衆は流質の代物を附け立て下され。

兩人　畏りました。

久八　これ〳〵次の間には旦那がござれば、めつたな事は。

兩人　畏りました。

久八　又端唄や聲色の稽古をして、旦那に聞かれぬ様にさつしやれ。

兩人　はい〳〵畏りました。
久八　小僧や、そちも一緒に行つて手傳うたがよい。
小僧　はい〳〵。
兩人　飛んだ事を開出された。ト合方にて兩人小僧附いて
奥へ入る。久八殘り思入あつて〕
久八　惡事千里と若旦那が吉原通ひをなさるゝが、吉兵衞
様のお耳に入つた様子、然し今の様に云うて上げれば、
是からふッつり思ひ留る様篤くり御異見申さにやなら
ぬ。それに此間町内の九兵衞様が口入で質に取つた白
露の短刀、此間藏へ行つて見たれば、何處の棚にも見え
ぬ故ひよつと若い者が仕業かと心を附けれど其様子も見
えず、未だ部屋住の若旦那何をなさるゝも不自由勝廓の
金には詰るの譬、ひよつと持出しはさつしやらぬか、あ
の短刀が流質の品ならよいけれど、まだ月のあるあの代
物、今にも請けに來られたら何と言譯が出來ようぞ、打
捨置かれぬ一大事、なんぼお若いとは言ひながら前後見
ずのなされ方、とつくり御意見申さにやならぬわえ。
トぢつと思入、花道より千太郎羽織着流し自墮落なる
拵にてッカ〳〵と出で來り、直に内へ入り邊りをう
ろ〳〵して、

千太　おゝ其所に居るは、久八か。
久八　おゝ若旦那様只今お歸りでございますか、何方へお
いでなされました。
千太　久しく佛參をせぬ故、今日は淺草へ行つて墓參りを
して來ました。
久八　それは御奇特な事でございます、ようお參りなされ
ました。
千太　さあ、わしが今日寺參りに行つたは、人間といふ物
は斯う達者なやうに見えても、老少不定とやらで今夜に
も死なうも知れぬ故、それで墓參りに行つたのぢや。
久八　お前様も何を仰しやりまするやら、其様な忌はしい
ことを言はぬものでございまする。如何に老少不定ぢや
とて、今の若さに死んでたまるものぢやございませぬ。
千太　それぢやというて、死なぬと堅い事も言はれぬぢや
ないか。
久八　左様ではございますが、何時死ぬ事やら知れぬで持
つた物でございます、あなたの様に死ぬ事が知れたか何
んぞの様に、あゝ鶴龜々々。
千太　いや〳〵、これ久八どの、おりや事に依ると死ぬか
も知れぬわいの。

久八　よう死ぬ〳〵と仰しやりますが、御氣分でも惡いのでござりますか。

千太　さあ氣分が惡い所ぢやない、惡うて〳〵、悔しうてどうもならぬわいの。

トわな〳〵震へながらいふ、久八も思入あつて、

久八　まゝお顏の色も常ならず、又例のお癇が發りましたな、さういふお氣持の所へ大旦那樣のお目にかゝり、又お小言でもおつしやれば、やつぱりあなたのお氣分の障り、まだお見世へおいでのない中直に二階へお上りなされませ、さうしてちつとお休みなされますと少しは御氣分も、殊には遠方へお出故又お勞れも。

千太　え。

久八　いやさ、大方お草臥でござりませう、まあ〳〵お休みなされませ。

千太　そんなら二階へ行てちつと横になる程に、誰も人をよこしてたもるな。

久八　宜しうござります、誰もやる事ぢやござりませぬ。

ト千太郎思入あつて立上り、

千太　これ久八。

久八　へい、何でござります。（ト千太郎久八の顏を見て、）

千太　頼んだぞよ。

ト思入あつてツイと奥へ入る。久八後を見送り、

久八　あゝ息づかひの忙しさといひ心に掛る詞の端、何か仔細のありさうな事、御發明な樣なれど世間知らずの懐中子、意氣地とやらで若氣の至り、ひよんな事でも、（ト思入あつて）こりや打捨てゝは（ト煙管で灰吹を叩くを、道具替りの知らせ）置かれぬわえ。

ト獨吟になり、久八ぢつと思入よろしく、道具廻る。

（伊勢屋二階の場）――本舞臺三間の間上手へ寄せて常足の二重二階家の道具、上の方三尺の袋戸棚、正面床の間一間二枚の襖、下の方庭の黒塀後へ下げて土藏の張物、下家の家根物干など宜しく取附け、總て奥二階の模樣。爰に千太郎脇差を出し、手拭にて拭ひ居る。やはり獨吟にて道具留る。と千太郎思入あつて、

千太　思へば憎くき村井長庵、親切ごかしに私を欺し五十兩といふ金取つて今日になつて素知らぬ顏、却つて此方が言掛したと手籠めになして打ち打擲、此意趣返しに汝を殺し、わしも直に死ぬ覺悟、人の恨があるものか無い

ものか、おのれ長庵待つて居をれ。唯濟まぬのは親父樣、孝行すべき身をもつて不孝重ぬるのみならず暖簾迄に疵附ける憎い奴とも思召しませうが、どうも捨ては置かれぬ仕儀、先立つ不孝は親父樣お許しなされてくださりませ。（ト宜しくこなしあつて、）明日にもそれと知られたら親父樣が嘸お歎き、取分けて母さまは不斷からの血の道持、死んだと聞いたら猶更に御病氣の種になるであらう、濟まぬ事とは知りながら思ひ切られぬ絕體絕命、唯何事も前の世の約束事と諦めてお許しなされてくださりませ。あゝいつ迄言うても返らぬ繰言、又久八が見咎めなば嘸や苦勞にするであらう、人目に掛らぬ其中に少しも早く、さらばぢや〳〵。

ト身拵へして脇差を袖に隱し行きに掛る。此以前より久八後へ出掛り居て、

久八　若旦那、何所へござらつしやりまする。

千太　や、そなたは久八。

久八　いやさ、何れへおいでなされまする。

千太　さあ、あの、わしが行くのは。

久八　お袖に隱した其一腰、そりや何になされまする。

千太　さあ、是はな。

久八　あなたはそれで人を殺し、死ぬるお心でござりませうがな。

千太　や。（ト恟り思入。）

久八　そりや惡い御了簡でござりまする、どう云ふ譯か存じませぬが、膝共談合私になぜ斯う〳〵ぢやとお話しをなされては下さりませぬ。勿體ないことながらお主樣とも親身とも思うて居ります此久八、他人行儀になされますは、そりやお恨みでござります。

千太　（思入あつて、）これ久八、堪忍してくれ〳〵。

ト手を合せて拜む。久八其手を拂ひ、

久八　あゝ是はしたり、其樣になされまするとは罰が當ります、定めて餘儀ない譯でもござりませうが、其仔細を私めにお聞かせなされて下さりませ。

千太　今に初めぬそなたの親切、今更言ふも面目ないがまあ一通り聞いてくりやれ。いつぞや仲間の參會で否と云ふのを無理やりに吉原へ連れて行かれ、丁字屋で今流行の小夜衣といふ女郎を買ひ、濟まぬ事と思つた故たつた一度で行くまいと思うて居たが惡緣か、二度が三度と度重なり引くに引かれぬ仲となり、頻に女房に持ちたくなり身請せうにも樣子は知れずどうした物と思ふ所、其小

夜衣が伯父おやといふ麹町に居る町醫者で村井長庵といふ人が事馴れて居ると聞き、其長庵を呼びに遣り相談をした所、客の方で身請をすれば三百兩も入りますが其所を判方の私の方で親の病氣と偽つて掛合を致しますれば賣つた時の五十兩で小夜衣を取戻しますから、五十兩都合して持つて來いと云ふ故、道ならぬ事ながら九兵衛殿の口入で三次殿から質に取つた白鞘の短刀を持出して、遊び仲間の遠州屋へ五十兩の質に入れ、其金を長庵へ、明神下の龜の尾で渡した時に明後日は家へ連れて來る程に、逢ひに來いと言うた故今日尋ねて行た所、其樣な事は知らぬと言うて私を打つたり叩いたり、金を渡した其折に一寸一札取らぬのは私が不念に仕方なくすご〳〵家へ歸つて來たが、五十兩と云ふ金を只取られた悔しさにどうも蟲が納らぬ、是から行つて恨を言ひ、彼奴を殺して私も死ぬ氣、譯といふのは此通り、無分別ではあるけれど、止めずに遣つて下されいなう。

ト久八是を聞き思入あつて、

久八　成程お話を承はりますれば御尤もでござります、其長庵といふ奴は噂に聞いた悪い奴、其樣な者に欺されたがお前樣が悪い故、唯斯樣に申しますると分からぬ奴と思召しませうが、よう物を積つても御辨じませ、五十兩で買つた娘を諸藝を仕込んで親方で突出す迄の物入りは安い金ではござりませぬ。それを元金の五十兩でどう取戻しがなりませう。如何に世間を御存じないお若い身とはいひながら、それを實に心得て、金をお渡しなされたは言はゞ此方の不調法、こりや思ひ切つておしまひなされませ。よし又それが五十兩で取戻しになつてからが、身許の知れぬ女をば伊勢屋の嫁になりませうか、十間間口の居附地主、神田組の質屋では五本の指に折るるお家、何の何某といふ名前の聞えたる商人の娘でなければ、どうまあ嫁御に貰はれませう。さうすれば女房に持たれぬ女、どんなよい器量かは存じませぬが此身代を振捨て女房に持つても詰らぬ譯、お若いとは申しながらもう御勘辨が出になりませぬ。今し方も富澤町の旦那様がおいでなされ、此間も廻りの髪結が吉原で伜をば見かけたといふ話だが、ひよつと不埒でも初めはせぬかとお案じなされて、わざ〳〵おいでなされました故、若旦那に限つては決して其樣な事はござりませぬと立派に申して上げますれば、それは〳〵お悦びでお歸りなされました。親御樣の御心配といふものはどの樣でござりませ

う、此女がいゝのあの傾城に限るのと言ふはほんの當座の事、其小夜衣とやらばかりが女子でもござりますまい。どうぞ思切つて下さりませ。もう半年か遲くも一年二年とは待たしませぬ、器量望みでどの樣な美しいお嫁御でも、私が御世話致しまするから、もう〳〵惡い御了簡をお出しなされまするな。あの通りお濶達の旦那樣、此事がお耳に入らば直にお里へ人が參りまする、さうなる時はあなた樣ばかりではござりませぬ、請合ひました私迄面目なうござりまする。御兩親樣の御孝行且は私をお助けなさると思召し、此後ふツつり此事は思ひ止つて下さりませ。(トこれにて千太郞術なき思入にて。)

千太　段々との其方の異見、聞けば聞くほど私が過り、今更悔んで返らぬ事、惡企をする長庵が親身の伯父のあの小夜衣、首尾よう女房に持つてから生涯難儀をせねばならぬ。あゝ迷つた〳〵、心が附いて見る時は、猶々濟まぬわしが身の上。(ト心配の思入。)

久八　あゝお出かしなされました、ようお心を取直して下さりました、あなたが御了簡さへ定まりますれば短刀の事は私が引受け、どうか都合を致した上、取戻して人知れず元の所へ入れ置きませう程に、必ず御心配なされますな。然し一寸しても五十兩、今といふ譯にも。

千太　もし其中に三次とやらが、請けに見えたらどうせうぞ。

久八　いえ急には出さぬ品といふ事は大概知れて居りますれば、氣遣ひはござりませぬ。唯旦那が土藏へおいでなされまして、無いのがお目に掛つた時は、言ひ譯に困りますて。

千太　もしさうなつたら、どうも私は。

久八　いえ〳〵宜しうござります。言ひ譯の立たぬ時は絕體絕命、私が其罪は着ますほどに、あなたは知らぬ顏をしておいでなさりませ。

千太　それぢやというて、どうして其方に其罪が。

久八　はてお前樣と知れましては、富澤町の旦那樣へ私が濟みませぬ、然しさうなる氣遣ひはござりませぬが、是は其時の心得、それ迄には都合致して取戻して置きまする、何事も私次第にお任せなされてくださりませ。

ト此時奥より小僧出で來り、

小僧　番頭さん、旦那樣がお呼びなされまする。

久八　おゝ、只今參ると言うて下され。

小僧　畏りました。(ト奥へ入る。)

千太　親父樣がお呼びなさるゝは、若し詮議では。
久八　はて、それなれば、又其時の事。
千太　それぢやというて。
久八　はて、お任せなされてお置きなされませ。
小僧　（奥にて、）番頭さん〳〵。
久八　はて、忙しない。
千太　そんなら久八、どうぞそなた。
久八　宜しうござります。どうか其事で、（ト思入あつて立上り、）無ければよいが。
ト唄になり、宜しく道具廻る
（元の店頭の場）——本舞臺元の見世の道具へ戻る、爰に五兵衞帳場に帳面を調べ居る。傍に手代兩人立ちかゝり居る、平舞臺に三次判人好みの拵へにて煙草を喫み居る。此傍に後家定の澁右衞門着流し大小侍の拵へにて控へ居る。此見得合方にて道具留る。
三次　もし、短刀は見えませぬか。
五兵　へい何所へ積込みましたか、唯今知れまするでござりまする。どうぞもう一ぷく上つて下さりませ。
ト奥より手代出て來り、

清七　與助殿知れましたか。
與助　はい、藏の隅を殘らず搜しましたが、どうも見えませぬ。
五兵　これ〳〵見えませぬといふ言譯はない、よく搜して見さつしやい、さうして久八はまだ來ぬか。
小僧　はい只今參りますると申されました。
三次　どうぞ早くして下さいまし。
與助　まことに早お待遠でござりまする。（ト奥より久八、千太郎出で來り、）
久八　何ぞ御用でござりまするか。
五兵　おゝ久八か、九兵衞さんの判で此お方より預つた短刀を出しにおいでなされたが、どうも藏に見えぬさうだが、貴樣覺えはないか。（ト久八、千太郎びつくりして、）
千太　あの、そんなら短刀をば。
久八　出しにおいでなされましたか。（ト當惑の思入。）
五兵　先刻からお待ちなされてお出でなさるわ。
千太　これ久八、どうしたら。（ト言はうとするを久八押へて、）
久八　はて、お前樣の知つた事ぢやござりませぬ、默つておいでなされませ。

三次　もし／＼番頭さん、去年の八月廿日の晩お前の所から貰つた質手形、此短刀を出して下さい。

ト質手形を久八の前へ置く。

久八　はい／＼、唯今見出して差上げまする。

三次　實は爰においでなさる澁川澁右衛門樣から賴まれて置いた短刀さ、明日お國へおいでなさるといつて唐突に言はれたから、大急ぎで來やした。外に用もあるし、早く出して下さい。

久八　すりや、あなたが御持主でござりまするか。

澁右　いかにも身共が所持の短刀、先祖より持傳へたる品なれども、餘儀無き事にて此者を賴み預けたが、此度殿樣より御懇望に就いて是非々々差上げねば相成らぬ。それ故取る物も取敢ず請戻しに參つたのぢや、どうぞ早う渡して下され。

久八　左樣でござりまするか、誠にお待遠でござりまする。（トちよつと三次に思入あつて、）もし三次さん、お氣の毒樣だが一寸お顏をお貸し下されませ。只今手代共が搜しましたが、何處へ仕舞ひましたか、どうも知れませぬさうでござりますが、どうか明日迄御勘辨くだされませ。

三次　もし／＼番頭さん、そりやあお前のお賴みだが、わつちが物なら一日や二日はどうでもいゝが、あの旦那が持主で今お前も聞く通り殿樣から御懇望で、御上へ上げるといふ大切な代物、あのお方が早速差上げませうと御請をして來た日限の物だらうぢやあねえか。今是が質に置いて知れねえといふ日にやあ、二百石取の御侍樣を一人棒に振らにやあならねえ譯だ。質手形をよこしなすつてお預け申した品だから、無えといふことはあるめえぢやあねえか。

久八　そりやあ預かり申した品に相違はござりませねば、あるに違ひはござりませぬ。

澁右　これ／＼番頭容易ならざる白露の短刀、知れぬで事が相濟まうか、今日は是非々々上へ差上げねば相ならぬ。それ故にこそ此澁右衛門が態々是迄推參致した、暫時も猶豫は相ならぬ。これ三次殿、其方も請合つて質物に差入れながら、無いと申して事が濟まうか。（トきつといふ、）

三次　御尤も樣でござりまする、私も掛り合でござりますれば知れませぬでは濟ましませぬ。もし／＼番頭さん、預かつた代物が無くなつちやあ濟むめえぢやあねえか。早く詮議をしておくんなせえ。

五兵　これ〳〵久八、先刻からお待遠だ、貴樣早く尋ねてお上げ申さぬか。
久八　はい。（トもぢ〳〵立兼る故）
五兵　何をぐづ〳〵、さつさと尋ねて上げ申せ。
久八　はい畏りました。（ト久八立掛るを、三次留めて）
三次　もし番頭さん、一寸待つておくんなせえ。
久八　はい、待てとは何んぞ御用でも。
三次　いゝや番頭さん日が短えや、むだな立居によしなせえ、あの短刀はありやしめえね。
千太　え。
三次　いやさ、其の短刀は爰の家の藏の中にやアあるめえが。
久八　どうしてそれを。
三次　家の息子が擔ぎ出し、賣つたといふのを聞いて來たのだ。
千太　え（トびつくり思入）
三次　月の切れねえ質物を置主へも斷らず、ばつたりに賣つても濟みやすか、もし、そんな事はわつちらがする事だ、乞食伊勢屋と言はれちやあ神田きつての質兩替、地面地屋敷を持つて居る旦那衆の御身分で、早乘をして濟みやすか。はゝあ、こりやあなんだね、置主がわつちだから、出されねえと見くびつてしなすつたのだね。
久八　いえ〳〵、全くもちまして、
三次　いや、さうだ〳〵、人の大事の代物を女郎買の遣繰に使はれちやあ堪らねえ。さうされりやあ此方も意地だ、入らねえ物でも出さにやあならねえ。まして日限で入用のあの短刀がねえ日にやあ、お侍樣は腹切道具だ。さうなる時にやあうぬの家へも兇狀を掛けにやあならねえ。あるとも無えとも番頭さん、度胸をすゑて返事をしねえな。
ト三次胡坐をかき、きつと言ふ、五兵衞びつくりして、
五兵　やあ〳〵、そんならあの短刀は、伜が餘所へ。
三次　お前の息子が女郎買の穴ツぷさげに、やらかしたのだ。（ト此時久八前へ出て）
久八　あ、いや〳〵そりや若旦那ではござりませぬ、此久八が持出したのでござりまする。
與助　やあ〳〵、すりやあの番頭さんが、
清七　あ、人は見掛けに寄らぬものぢや。
ト五兵衞きつとなつて、
五兵　やい久八、大まい五十兩と云ふ短刀を、何でおのれ

久八　は持出した。今更申しまするも面目ない事ながら、不圖吉原に馴染が出來、五兩七兩筆先で遣つた穴の埋草にあの短刀を盗出し、五十兩に質に入れました。（ト思切つて言ふ。千太郎術なき思入にて、）

千太　それではどうも。

久八　はて此久八が遣ひました。私の所業でござります。

五兵　（あきれたる思入にて、）いやあきれて物が言はぬわえ。これ久八、汝は〳〵大それた、私が所業でござりますと、よくも〳〵言はれた事だ。これよく聞け、そなたは代物が無くなつても、五十兩といふ金を遣つてゐなされば、まだしもそれだけ得なれど、己は正金五十兩目に見えての損をせねばならぬ。これ五十兩といふ金が尋常大抵で出來ると思ふか、爪へ火を點す樣にして積上げた此身代、それを澤山さうに遣ひをつて、汝どうしてくれう、えゝ腹が立つわえ〳〵。

ト久八を突廻し悔しきこなし。

三次　何だえ今聞いて居りやあ、わつちが方は五十兩遣つたが得だえ、面白くもねえ、そりやあ其方の得手勝手だ、五十兩遣つたといつて只貰つた金ぢやあねえ、二百兩にもなる代物だ、そつちやあ五十兩の損だらうが、こつちやあ百五十兩の損だ。さあ、たつた今出して呉れ。

五兵　そりやあなた出せと云うて、お預かり申しました其代物は久八めが持出したとあれば此奴が科、此久八から金を出させ、其金で短刀を請戻し、お前さんへお返し申しませう。

三次　いゝや、そりやあちつとも待てねえ、先刻からもいふ通り、今日限りの短刀だ、さあたつた今、出せ〳〵出せ、出しやあがれ。

久八　さあ〳〵御尤もでござりますが、長うとは申しませぬ、どうぞ明日迄の所をばお待ちなされて下さりませ。もし三次樣、此通りでござります、拜みまする〳〵。

三次　えゝ、厭だわえ。

千太　もし〳〵、私が里へ云うて遣りまして金を拵へ、きつと差上げまするから、どうぞお待ちなされて下さりませ。

三次　いやだ。

千太　どうぞわづかな所をば。

三次　えゝしちくどい、厭だと言ふに。

久八　そんならどうでも。

兩人　待たれませぬか。
三次　知れたことだ。(トきつと言ふ。久八千太郎思入、三次居直つて、)これよく聞け、年中人の物を早乘つて、斯う云ふ仕事で喰つて居る早乘り三次だ、手前達の樣なうぶな野郎に代物を早乘られちやあ、友達へ顏向がならねえ、平つたく云やあ待たれるものも待たれねえ、爰らがこちとらの附目だ、ちつと目の明いた挨拶をしろ、さあ親父、番頭や息子にやあ構はねえ、伊勢屋五兵衞と云ふ名目で大帳に附いてゐる代物だ、五兵衞が取つた質だから五兵衞から出せ。(ト懷中より金包を二つ出し、)さあ元金は纏銀包で二た包、五十兩持つて來たのだ。さあ質物を出しやあがれ。
五兵　それではお前が無理といふもの、無い物が出されるものか、それを出せと云ふのはお前がゆすりぢや。
三次　なに、ゆすりだ、途方もねえ事を言やあがらあ、ゆすりとは誰が事だえ、置いた質を出さうといふのが何でゆすりだ、己がゆすりならお前方は盜人だ、さあゆすりならゆすりにして己を爰から突出してくれ、何奴も此奴も抱込んで皆んな吠面を見せてやるぞ。さあ突出せ、ええきり／＼と突出しやあがれ。

トきつといふ、此時奧より以前の六右衞門出で來り、前へ出て、

六右　もし／＼、最前からの樣子は奧で聞きました。又お話しも致しませうから、まあ靜かにして下さりませ。
三次　いゝや靜かにしちやあ分りやせん。ゆすりだとぬかしやあがつたから、此明かりを立てにやあなりません。
六右　いち／＼お前の御立腹が眞尤も、それも詞の間違ひといふもの、まあ／＼待つて下さりませ。
五兵　これ／＼六右衞門殿、此方も掛り合ひだ、其方が請判で置いた此久八が、五十兩といふ短刀を持出した不屆者、それから發つた此騷ぎ、どうともかうとも片を附けさつしやれ。
六右　宜しうございます、あなたの御厄介にはなりませぬ樣、私がどうとも致しまするでございます。
三次　さあ親仁、何をぐづ／＼ぬかすのだ、短刀の方はどうするのだ。
五兵　えゝどうもかうもいるものぢやない。もう請人に引渡したから、其六右衞門殿に掛合はつしやれ。
三次　これいゝ年をして分らねえ事をぬかすなえ。奉公人の掛合は手前が勝手にするがいゝ、置いた質は伊勢屋五

兵衞だ、主人が相手だ、早く方を附けやあがれ。

澁右　これ／＼三次、あの短刀がない日には、此澁右衞門命を捨てねば相ならぬ。

三次　御尤もでござります、とても命をお捨てなさるなら行きがけの駄賃だ、片つ端から切つてお仕舞ひなさいまし、其中にもあの親仁短刀をなくしやあがつてお前樣には敵同志だ、あいつから先へ敲き切つてお仕舞ひなせえ。

澁右　なるほど身共も其心得で罷り在る、先主人の五兵衞より一分試しに致してくれう。

ト身拵をなし立上る、五兵衞驚き、

五兵　あゝ、わしが知つた事ではない。（ト逃にかゝるを）

三次　うぬを逃がしてつまるものか。（ト五兵衞を引すゑる、六右衞門中へ割つて入り）

六右　これ／＼必ず短氣をさつしやりますな、私が話をしませうから、まあ／＼待つて下さりませ。

ト久八千太郎も思入あつて、

久八　事の發りは私故、切つてお腹がいるならば私を先へ殺して下さりませ。

千太　いや／＼其方が知つたことではない、わしを殺して下さりませ。（ト兩人して三次、澁右衞門に縋る。）

澁右　いや／＼さう死にたがる者を手に掛けては、此方の仕事が、いやさ、身共が一分が立たぬ。是非とも厭がる主人から。

六右　先々お靜まりなされませ、只今御挨拶を致しませう。暫くお待ち下さりませ。（ト五兵衞の前へ來て）中々あの樣に云ひ出しては聞き入れませぬ、こりや首代でも出さずばなりますまい。

三次　なるほどこりやあいゝ思ひ附だ、さあ命が惜しくば首代を出せ。

五兵　そんなら首代を取られるのか。

六右　はて、見込まれたが此方の災難。

五兵　あゝ仕方がない、今日は如何なる惡日ぞ、思ひ切つて一分も遣らずばなるまいか。

六右　いえ／＼一分位では濟みますまい、先一兩をおだしなされませ。

五兵　なに一兩、途方もない、どうして／＼めつさうな事を言はつしやるな。

澁右　これ／＼町人、否やを申せば首がないぞ、此方は金より首が望みぢやわえ。

ト又刀の柄へ手を掛ける。

五兵　あゝ申し出します〳〵、惜しいものだが、それ一兩、
ト小判を一枚出す。
三次　何だ、首代が一兩か。
澁右　一兩ばかりで了簡がならうか。やつぱり首を。(ト又
立掛ける。)
五兵　あゝ仕方がない、もう二分、〆て一兩二分。
澁右　いや〳〵二兩や三兩では了簡ならぬ、只の面ならよ
けれども、其長い面が端金で了簡ならうか。
五兵　三兩ではなりませぬか。
三次　まだ〳〵。
五兵　もう一朱貰ひませうか。
三次　一朱ばかりどうなるものか。
六右　そんなら堪忍五兩。
三次　密夫が七兩二分。
五兵　さう値打のある首ではないか。
三次　見てくれはふめなくつても、首の値段は目方の物だ。
六右　そんなら譬の通り、目方に掛けたら十匁。
五兵　あの十兩が相場かな。さう聞いては是から大事に遣
はねばならぬ。(トしぶ〳〵十兩出す。)
澁右　了簡しにくい所なれど、命を取るも不便故、十兩で
許してくれるわ。
五兵　あゝ此の首が十兩とは、我ながら高いものだ、
ト頭を撫でる。)
三次　もし十兩ばかりで不承しちやあ、お前殿樣へ濟みや
すめえぜ。
澁右　それでも是が眞の取得。
三次　えゝ意氣地のねえ、質兩替の旦那の首、見掛は間拔
けな面つきでも二十や三十の値打はあらあ。
澁右　むゝなるほど、十兩では八百屋か魚屋、質兩替の主
人の首十兩では了簡ならぬ〳〵。
久八　(思入あつて、)これ三次殿、折角旦那が十兩で了簡
しようと仰しやるを、お前が傍から餘計な事、十兩取れ
ばよいではないか。
三次　いゝとは何だ、己あ錢貰ひに來たのぢやあねえ、質
を出しに來たお客樣だ、十兩でいゝとは何の事だ。
六右　これさ何を言はつしやる、先刻から見て居ると、い
、ら几帳面なお人とも見えぬ、股皸は言はずとも切れた
お人と見て取りました、まんざら錢貰ひでないこともご
ざりますまい。
三次　何で己が錢貰ひだ。

六右　さあ、短刀が無いを承知で質受けにござられた三次どの、無いからよけれどあつた日には、其金では請けられまい。

三次　何と。

六右　さ額銀か知らぬが溫石の石によく似た金包み、明けて言つたら物がない、其溫石より十兩でお前の腹も暖たまらう、うんと言つてもよいではないか。

三次　(思入あつて、)成程おめえの云ふ通り、己が置いた短刀のねえのを承知で請けに來た、五十兩はお祭しの時候ちがひの箱入溫石、斯う見出されちやあわつちも三次だ、十兩持つちやあ歸られねえ、此御家定を侍に仕立てて來たも大小から身の廻り迄損料物、元手を掛けて來た仕事だ、十兩ばかりぢやあ歸られねえ、おめえの方でもゆすりと知れちやあ、只は置かれめえ、さあ爰の家から突出しなせえ。

溢右　これ／＼兄貴喰え込んぢやあつまらねえ、十兩取つて歸んねえな。

三次　いゝや打捨つて置けねえ。

溢右　それだつて牢疥癬ぢやあ懲り／＼だ。

三次　案じるな手めえは抜いて遣るから、其替りにやあ五兵衛を始めどいつもこいつも抱いて行くぞ、手めえ達を土蔵にして行きやあ直に役附いて、娑婆に居るより樂をするが、遁れるだけは行き度くねえ、其所が譬の地獄だ、手前達が行つて見ろ、三日も行きやあ直に熱氣でころりといかあ、然し一度は見るのも得だ、己が案内してやるから覺悟を極めてうしやあがれ。(ト三次きつと思入。)やい、其所に居る息子、短刀を盗みやあがつたのは手めえだらう、今ッから其了簡ぢやあ此家を叩き潰すのは造作もねえ、いや今の中だ、どし／＼やれ。

久八　あゝこれ／＼三次さん、其短刀は今云ふ通り私が吉原通ひで金に詰り、ついした事の出來心。

三次　えゝ知つてゐるわ、息子が逆上て通ふのは、丁子屋の小夜衣と云ふ流行妓だ。

久八　さあ其小夜衣に打込んだは此久八、私の科でござりまする。もし三次様、嘸お腹も立ちませうが今日の所は此儘にお歸りなされて下さりませ、お前様へは別段にきつと御禮を致しまする。もし今日の故をば御慈悲でござりまする、お歸りなされて下さりませ。

　ト三次に頼む、六右衞門も思入あつて、

六右　これ三次殿とやら、今云うたのは私が言ひ損ひ、お

前に無理は少しもござらぬ、此天窓に免じて其金でどうぞ歸つて下さりませ。

三次　そりや歸つてくれろと頼みなさりやあ歸らねえとも云はねえが、一番天窓を押へられちやあ何所迄も居直らにやあならねえ、爰がわつちらが體を張る所だあね。

瀧右　兄貴、もう歸つてもいゝ時分だぜ。

三次　それぢやあ今日は歸つて遣らう、云ひてえ事はあるけれど、久八どんおめえに免じて何にも言はねえぜ。

久八　いやもう何事も私が越度、後で話をしませうから、どうぞ二三日の所をば、

三次　男は當つて碎けろだ、二三日なら待つて遣らうよ。

五兵　さう話が附いたなら、其首代には及ぶまい。

三次　是が欲くば返して遣らうが、其替りに抱込むぞ。

五兵　いやそれは眞平。

三次　それぢやあ己が持つて行つても、言ひ分はねえか。

五兵　ある樣な無い樣な。

三次　今日は歸るが、明後日迄に話が附かにやあ又來るぞ。

五兵　え。

三次　定や行かうぜ。

瀧右　おい。(ト立たうとしてぺつたり坐り、)歩けねえ歩けねえ。

三次　どうしたのだ。

瀧右　長く坐つてしびれがきれた。

三次　とんまな男だぜ、額へ埃でも附けて見ろ。

ト是にて定額へ埃を附ける。

定　やつと立たれた。

トよろける。三次介抱しながら門口へ出て、

三次　それぢやあ久八さん、いゝね。

久八　何事も私の胸に。

三次　おい吉次、明後日來るから待つて居ろ。(ト花道まで行き、)どうだ、しびれはいゝか。

定　やつと直つた。おい兄貴、おめえはいゝ肚胸だ

三次　べら棒め、いゝの悪いのと云つたつて大丈夫な仕事だ、手前も二本差の上りぢやあねえか、もうちつとはきはきするがいゝや。

定　お前があんまり根強いから、此方が脚にまかれらあ。

三次　是からもうちつと張込んで遣つて見ろえ。さあ今日の立前だ。(ト金を一分出して、)さあ、手を出せ。

定　おい來た。(ト兩手を出す、三次一分載せる、)兄貴たつた一把か。

三次　知れたことだ、一把ぢやあ少ねえか。
定　これぢやアあんまり酷からうぢやあねえか、山割なら五兩宛よ、三つ割ならば三兩廿匁よ、お前一割にも付くめえぢやあねえか
三次　えゝ意氣地のねえくせに、慾張つて居やあがらあ、仕方がねえ、そんなら二把よ。（ト又一分出す。）
定　ごうぎに刻むぢやあねえか、せめて三把にもしてくんねえな。
三次　なに、三把。三把と切出しちやあ猶厭だ。
定　なぜ〳〵、三把ぢやあいけねえのか。
三次　知れたことよ。我思ふ所より外へはやらじと思ふ、
定　へゝ、悪りい洒落だ。
三次　爰が志賀山流だ。
定　そんならいよ〳〵三番は舌出しか。
三次　あたりめえよ。
ト好の端唄になり、三次、定花道へ入る。後皆々思入あつて、五兵衞恨めしさうに後を見送り。
五兵　扨々太い奴もあるものだなあ。
六右　いや、彼奴等は容易な奴ではござりませぬ。あゝ云ひ出しますと、大なり小なり金子を取りませぬ中は歸りませぬ、實に人間ではござりませぬ、逆らひますればお見世のお邪魔、よう金子を遣はされました。
五兵　これ〳〵六右衞門殿、あんまりようも金は出しませぬ、是と云ふのも、貴様の見さつしやる通りあの久八が爲した業、此方請人の役ぢや、五十兩の金を償うて當人を引取つて行かつしやれ、見るもなか〳〵腹が立つわえ。
ト疊を叩いて云ふ。
六右　へい〳〵御立腹は重々御尤もでござりまする、請人の事でござりますれば、否やなく引取りまする。（ト久八に向ひ）これ久八どの、さて〳〵こなたは見損なつた人だの、如何に天魔が魅入ればとて、あんまり呆れて物が言はれぬ、國許の親父や、お袋が、あの久八にもう戻つて來るか何日故郷へは歸るぞと指折り算へて待つて居るは、度々の書状でも知れてあるに、飛んだ事を仕出かして私から何と云つて遣り様がない。十九や二十歳の者ではあるまいし、是がお家の若旦那とか若い者ならありがちの事、お見世の締りをする者が此樣な不始末して、貴様は濟まうと思ふか、いやさ、御主人樣へ濟まうと思ふか。
トきつといふ、千太郎術なきこなし、久八思入あつて、
久八　いやもう一言の申譯もござりませぬ、今更申すも返

らぬ不埒、面目もなき此度の仕儀、御不承でもござりませうが、どうぞ引取つて下さりませ。

六右　そりや引取るも腹が立つけれど、首と釣替の判を捺したが私が不承ぢや、否でも應でも引取らにやならぬわえ。あまりと云はゞ馬鹿々々しい。

千太　あゝこれ〳〵六右衞門殿、久八に科はない、あの短刀は、此私が。

ト言ひかけるを久八消して、

久八　これはしたり若旦那樣、年來勤めた此久八殊故にあなたが御養子においでなされた其時に、お取持致したる私故。かばうて罪を引受くるお志でござりませうが、どうまあ家來の私がお主に難儀を掛けられませう。何にも仰しやらぬが宜しうござりまする。はて口出しはなされますな、お志は屆きました。さ、默つておいでなされませ。

千太　それではどうも。

久八　其やうに仰しやりますと、どうやらあなたがなされた樣で、人聞が惡うござります。

千太　それぢやと云うて。

久八　はて、是程苦勞を致しましても、お聞入れはござりませぬか。

ト千太郎を鎭める、千太郎是非なく控へる。六右衞門扨はといふ思入あつて、

六右　おゝ、出來た。

ト思はず言ふ。

五兵　出來たとは、金が出來たか。

六右　(氣を替へ、)いえ、ひよんな事が出來たと申しましたのでござりまする　久八どの其方は私がしつかりと引取りませう。

久兵　引取つて行くならば、五十兩の金を爰へ置いて行かつしやれ。

六右　さあ引負なれば兎も角も、今と云うては多くの金子、何れ濟方致しませう。

久八　これ伯父樣、其五十兩は旦那樣へお預け申せし此久八が御給金、今年で丁度卅五兩、不足の所は衣類其外二た葛籠殘らず拂つて仕舞ひましたら、十四五兩にはたりませう。それをどうぞ私が引負の償ひに。

五兵　いや〳〵そりやならぬ、首尾能く勤め上げたなら給金も衣類も殘らず渡さうが、此樣な事を仕出かした不埒者、給金は元より衣類一つなりと渡す事はならぬわえ。

六右　それは餘りでござりませう、何も持つて歸らうとは申しませぬ、引負金の償ひにあなたへ納める其品々、それを水になさらうとは、ちと御無體でござりませう。
五兵　無體とは何が無體、不奉公すりや給金も仕着も水にして仕舞ふは、餘所外の店は知らず乞食と世間で綽名を呼ぶ、此方の家の家風だわ。
六右　如何に御家風と仰しやつても、人にこそよれ此久八、
五兵　えゝ誰でも彼でも二色はござらぬ、これ六右衞門殿、證文の表にも御家風背き申すまじくと、書いてあるのを忘れたか。
六右　さうではござりませうが。
五兵　えゝ證文が物を云ふわえ。
　ト大きくいふ。
久八　あゝもうし伯父様、あゝ仰しやつては是が非でもお聞き入れなさらぬが旦那様の御氣性故、後で事が分ります、何に致せ今日の所は、どうぞ此儘私を引取つて行つて下さりませ。
六右　いやも、其方が然う云ふことなれば言ひ度い事も云ひもせぬ。そんなら此儘引取りませう。
五兵　いや、只引取ることはならぬ、五十兩の其外に三次めに遣つた十兩、耳を揃へて持つて來い。
久八　何れ都合を致しまして、あなたに御損は掛けませぬ。
五兵　知れた事だ、損をしてたまるものか。
六右　とはいへ現在卅五兩、溜めた衣類の二た葛籠。
　ト悔しきこなし。
久八　はて何事も私が、胸に納めてござりまする。
五兵　きり／＼と出て行かぬか。
六右　いや、出て行くなと仰しやつても、此樣な無慈悲の家には置かれぬわえ。さあ／＼久八どの、行かつしやい。
　ト久八の手を取り引立てにかゝる、久八も思入あつて、
久八　はい／＼只今參りまする。（ト五兵衞に向ひ）左樣なれば旦那様、十二の年から長の年月御恩になつたお禮もせず、御苦勞掛ける不忠者、憎い奴とも思召しませうが、是には種々、さあ、色に迷ひし此身の不埒、何日かは御恩を送ります、不奉公せし罪科は、お許しなされて下さりませ。
五兵　あゝつべこべと、汝が物をぬかすと癪に障るわえ。
久八　へい／＼其お腹立は御尤もでござりまする。（ト千太郎にこなしあつて）又旦那樣、是迄は御厚恩に預りまして有難うござりまする。あなた樣もお身を大切に、申す

迄はござりませねど旦那樣へは御孝行、お里方の旦那樣お袋樣へは猶の事惡い事をばお聞かせなされてくださりますな、此久八の身の上がよい手本でござりまする、此樣な身にならぬやう。

千太　これ久八、どうも私は濟まぬ。いつその事に打明けて。

久八　あゝ是はしたり、これ程迄に私が心配致すが見えませぬか、濟まぬと仰しやるお心なら、どうぞ辛抱なされて下さりませ。

ト五兵衞に見えぬ樣に思入。

五兵　あゝ何をぐづ〳〵ぬかすのぢや。こりや伜、久八の樣な不忠者の側へ寄ると人でなしが移るわえ。

千太　何のこれが人でなし。

五兵　えゝ主人の物を盜みしからは、犬畜生も同じ事だわ。

六右　犬でも義理は知つて居ますわ。

ト立上り、門口へ出る。

五兵　えゝ畜生め、出をらぬかえ。

ト久八をむごく門口へ突出す、久八よろ〳〵となるを千太郎隔てゝ、

千太　あゝあぶない、何處ぞ怪我でも。

ト寄らうとするを、五兵衞引退けて、

五兵　一昨日うせう。

ト門口をしめる。

六右　いかに乞食といひながら、あまりといはゞ無慈悲な仕方。

ト立かゝるを、

久八　あゝもし。

ト支へる。

六右　それでもあんまり、

ト又息込むを、

久八　はて、主といふ字にや、（ト六右衞門を引廻し、きつと留めるを木の頭）勝たれませぬ。

ト千太郎門口を明け、手を合せ拜む、五兵衞突退け、門口をしめる。六右衞門は口をしき思入、久八宥める、此仕組宜しく、唄へ寺鐘を冠せ、

ひやうし幕

五幕目　淺草千束村田甫の場

（役名――早乘三次、日雇取市郎兵衞、相長屋路治右衞門、同井戸六、燗酒賣藤助、長屋妹おそよ、市郎兵衞女房おふみ等。）

四幕目の幕引附ると葬禮の鳴物になり、幕外へ花道より相長屋の路治右衞門、井戸六の兩人白布を掛し燒場行きの早桶を擔ぎ、是へ日雇取市郎兵衞尻端折り懷へ猫を入れ、弓張提灯を持出で來り、舞臺へ來て早桶を下し、

路治　こう市郎兵衞さん、お前のおかみさんだが、めつぽう重い佛樣だ。

井戸　舂米屋の力持で四斗俵位はさす己だが、肩がめりめりするやうだ。

市郎　そりや其筈のことだ、町内一の太つちよう、不斷身體が丈夫だからこんな事はあるめえと思つたが、あんまり早い別れだつた。

路治　お前の前ちやあ言ひ難いが、大概打つては死にそもねえ、くり／＼太つたおかみさん。

井戸　俄にころりと行きなさるは、やつぱり一件の病氣かね。

市郎　どうして／＼長家中で稻荷樣のお祭をしたからは、そんな嫌な病氣ぢやあない、話をするも馬鹿々々しいが、お月樣へ飾つて置いた大きな團子を口へ頰張り呑込めねえのを無理やりにうんといつて呑込むと、咽へ支へてそれなり往生、直に芒の一本花に殘りの團子は枕團子、芋や枝豆はお通夜の茶菓子、蛤の鹽蒸で出立の飯を喰はしたは月見と葬禮の段返し、飛んだ茶番をしましたのさ。

路治　然し片月見は人が忌むから、來月の月見にやあお前ころりと死になさるがいゝ。

市郎　いや外の事は兎も角も、假令片月見にならうとも、死ぬ事ばかりは眞平だ、おゝ鶴龜々々。

井戸　そりやあさうと市郎兵衞さん、お前懷に入れて居るのは何だえ。

市郎　こりやあかゝアが可愛がつた三毛よ。（ト猫を出して見せ）一生の別れだから懷へ入れて連れて來たのだ。

路治　いやお前は途方もねえ人だ、死人を擔いで行くに、猫を連れて來るといふがあるものか。

市郎　なぜ、猫を連れて來ては惡いかえ。
井戸　惡いの惡くないのと、死人に猫が附いた日には生返つて踊り出すわ。
市郎　なに、生返つて踊り出す、そりやあ何より有難い、どうぞ生返つてくれゝばいゝ、亡者の女房も氣が替つてよからう。
路治　氣が替つてよいものか、夜寢た時坊主天窓も極りが惡いぜ。
市郎　所が剃刀が切れねえから、剃らずにやつたがもつけの幸ひ、生返る物ならば斯うで早く生返らせたいものだ。
　ト猫を出して早桶の上へ乘せる、兩人留めて、
井戸　えゝけんのんな事をしなさんな、斯うで生返られてたまるものか。
路治　早く燒場へ舁いで行かう。
　ト兩人早桶を舁ぎ上げる、市郎兵衞猫を抱き早桶へ思入あつて、
市郎　や、何だか桶の中でがた／＼といふやうだぜ。
路治　えゝ氣味の惡い事を云ひなさんな。
井戸　これから先は田圃だ
兩人　早く行かう／＼。

市郎　どうぞ猫で生返ればいゝが、にやんまみだぶつ／＼。
　ト葬禮の鳴物になり、皆々上手へ入る。と鳴物打上げ、淺草千束村田甫の場となる。
（中田甫の場）――本舞臺正面一面の藪疊み、松の大樹、正面草土手、後ろ田甫、吉原の二階を見たる灯入の夜の遠見總て中田甫の體。題目太鼓にて幕明く。と花道より三次半合羽を着き一本差し、尻端折り、麻裏草履小田原提灯を提げ、後よりおそよ着流しやつし裝にて出で來り、
そよ　もし三次樣、娘の居ります所は何處でござりますぞいな。
三次　この田甫を一つ越すと、直にその御屋敷だ。
そよ　それではもう僅かでござりますな。
三次　僅かどころか二三町だ
そよ　早う逢ひたうござりますわいな。
三次　今に逢はして遣るから、そろ／＼來ねえ。ト行きかけ下へ思入あつて、（）それ道が惡いよ。
　トおそよ思入あつて、
そよ　有難うござります。

三次　これから先は猶悪いから、お前提灯を持つて先へ立つて行きねえ。
そよ　はい、左様ならさう致しませう。
　トおそよ提灯を持ち先に立ち、三次後へ下り思入あつて舞臺へ来り、花道の角にて脇差を拔き、切らうと振上げる、おそよ振返り見る、三次びつくりして脇差を後ろへ隱す。
　もし、今光つたのは、何でございますぞいな。
三次　え、今光つたのかえ、ありやあ稲光だ。
そよ　雨が降りさうでもございませぬのに、
三次　さあ雨の降らねえのに光るのは、豐年の證だ。
そよ　左様でございますか、稲光がございますとこう實がいると申します、それに今年は荒も無くよう出来ましてございます。無在所でも稲刈で忙しいことでございませう。
三次　此鹽梅ぢやあ此暮は一升位になるだらう。おゝ一升と云やあ、さつき貰つた酒が家にあつたつけ、一杯やつてくりやあよかつたに、斯う云ふ時にやあ酒のことだな。
そよ　今に娘に逢ひますと、お禮に御酒を上げませうわいな。

三次　それ迄待つては居られねえ、呑みてえにも田甫中、えゝ角の蕎麥屋で二合ばかり引つかけて来りやあよかつた。
　トやはり右の鳴物にて上手より藤助やつし裝の尻はしをり草鞋にて煮染を列べし屋臺、當り屋といふ提灯を附け、吉原商人の拵にて荷を擔ぎ出て来り、往来の狭き心にて、
藤助　はい御免なさいまし、是はお邪魔でございます。
　トおそよを避け、下手へ行くを三次見て、
三次　あゝ丁度いゝ所へ當り屋さん、一ぺい喫んねえか。
藤助　はい、御酒はございますが、お煮染が、
三次　何もねえかえ。
藤助　棒鱈に鍋の足、蓮がちつとばかりでございます。
三次　何でもいゝから早く喫んねえ。
藤助　畏まりました。(ト屋臺より德利を出し、桶の中で燗をしながら)鐵炮が消えましたから、お燗がぬるうございます。
　ト茶碗を出す、三次取つて藤助德利より酒をつぎ三次呑む、此内捨ぜりふ宜しく。
三次　えゝいゝ酒だ、めつぽうな酒を賣るな。

藤助　私が好でございますから、大道賣でございますが、
灘の利物を遣ひます。
三次　道理でいゝ筈だ。（ト又一杯呑みながら、）おいお前どうだ、一ぺいやらねえか。
そよ　わたしや一向不調法でございます。
三次　それぢやあ何ぞつまんで喰ひねえ。
そよ　有難うございますが、何も喰べたうございませぬ。どうぞ早う連れて行て、娘に逢はして下さりませ。
三次　今直に連れて行くから、もう一ぺい呑む中待つてくんねえ。
ト酒を呑みながら、
どうだ此頃は俄かでしつかり賣れるだらうね。
藤助　有難いことには、一晩でも殘して歸つた事はございませぬ。今夜はちつと用事があつて早く仕舞つて歸りました。
ト此内三次呑み仕舞ひ、
三次　おい、幾らだ。
藤助　御酒が三杯に足と蓮で、八十八文になります。
三次　それ、百錢だよ。
ト財布から百錢を出し遣る。藤助受取り、
藤助　はい只今お剩錢を上げます。
三次　なに、八文ばかり剩錢にやあ及ばねえ。
藤助　そりやあ有難うございます。
三次　こう氣を附けて行きねえ、此先に惡い犬が居るぜ。
藤助　そいつあ險難でございます。
ト荷を擔ぎ、藤助足早に花道へ入る。三次後を見送り酒に醉ひたる思入にて、
三次　あゝいゝ心持に醉つた。
トよろ〳〵とするを、
そよ　あゝもしあぶない、どぶへ落ちて下さんすな。
三次　なに、おれよりやあお前落ちねえ樣にしねえ。
そよ　何で私が落ちませうぞいな。
三次　所が今に落してやる。
そよ　え。
三次　いや何所へ落したか、手拭が見えねえ。（トおそよの持つて居る提灯を取り、邊りを搜す思入にて提灯を消す。時の鐘。）はい、又提灯を落した。
そよ　おゝ眞暗で何所が何所やら。（ト暗き思入、吉原の遠見に心附き、）もし、向うに見える灯りは、あれは何所でございます。

三次　おゝあれかえ、あれがお前の娘の行つてゐる御殿の
二階だ。
　トこれよりかすめて吉原騒ぎになる。
そよ　大層賑やかでござりますな。
三次　屋敷が派手だから毎晩あの通りだ〳〵ト此中落したる
提灯を拾ひ、袂へ入れ、そつと脇差を抜き殺さうといふ
思入」あれ見な、あの隅が娘の部屋だ。
そよ　どれ、何所でござります。
　ト後ろを見る。
三次　あれ、あすこよ。
　ト云ひながら後ろからおそよに切附ける、おそよアッ
と言つてどうと倒れるを、又一刀切る、ちよつと立廻
つて、
そよ　や、こりやこなさんは、何故わしをむごう殺すのぢ
や。
三次　おらあ殺す氣はねえが、無據頼まれてそれでお前
を殺すのだ。
そよ　その頼み手は何者なるぞ。
三次　誰でもねえ長庵だ。
そよ　えゝ、すりや兄さんが。

三次　おゝ屋敷へ遣つてあるといふ娘は疾に吉原へ女郎に
賣つてしまつた故、逢はせることが出來ねえから、殺し
てくれと長庵が達つての頼みに殺すのだ、恨みがあるな
ら兄貴に言へ。
そよ　そんなら屋敷へ遣つたといふお梅は女郎に賣つたと
や、あゝ言はう樣ない人でなし、逢うて恨みを言はねば
ならぬ。
三次　恨みがあるなら兄貴に言へ、おらあ何にも知らねえ
ことだ、化けても出るならば長庵の所へ行くのだぞ、
必ず己が家へ來るな。
そよ　假令長庵が頼みにもせよ、汝も惡事の荷擔人なれば。
三次　あゝ己ぢやあねえ長庵だ。
　ト又切附ける、騒ぎ唄へ木魚を冠せ、兩人立廻る。こ
こへ花道より以前の早桶を擔ぎて市郎兵衛附添ひ出で
來り此中へ入る、三次白刃を振廻す、これにてびつく
りなし、
市郎　わあゝ人殺しだ。
兩人　逃げろ〳〵。
　ト早桶をよき所へ捨て上手へ逃げて入る。後兩人早桶
の周圍をあちこち立廻り、此中三次誤つて早桶の繩を

切る、丸太下へ落ちる、三次おそよを踏へきつと見得、
時の鐘、凄き合方蟲笛になり、

そよ　あゝ誰ぞ來て下され、人殺しぢや〳〵。

三次　幾ら泣いても喚いても、往來稀な中田甫、たまさか通る提灯は此世に迷ふ人魂か、盂蘭盆過ぎて草の中精靈ばつたの啼聲も、枯れて哀れな秋の夜に、無常の風の吹廻し火屋の燈りと消えてなくなれ。

ト蹴返す、おそよ苦しき思入にて、

そよ　殺さば殺せ此恨み、今にぞ思ひ知らしてくれん。

三次　おゝ醜くわれを殺すのも、己ぢやあねえ長庵だぞ。

トおそよを早桶の上へ仰向に引附け、喉を突く、おそよ虚空を摑み落入る、是にて早桶の白布へ血汐したゝる　三次ほつと思入あつて、

初めて人を殺したが、あんまりどつともしねえものだ。

ト三次氣味の悪き思入にて、おそよを後へ突落す。此時後へ市郎兵衛出て伺ひ、早桶の棒を取つて、

市郎　うぬ、女房をどうしやがる。

三次　なんと。

市郎　大事の死人、野郎め覺悟。

ト棒で打つて掛るを、身を躱し、

三次　えゝ何をしやあがる。

ト三次切込むを市郎兵衛棒で受け、兩人立廻り、市郎兵衛誤つて早桶を棒で突く、是にて引くり返り中よりおふみの亡者髮振亂し紅絞の樣に血汐の附いたる經帷子、頭陀袋脚絆にて轉がり出る、兩人は立廻りあつて、トゞ市郎兵衛かなはず懷の猫を投り出し上手へにげて入るを三次追駈けて入る。後時の鐘どろ〳〵の樣な風の音をかしみ幽靈の合方になり、件の猫亡者の側へ來りうなづく、此時亡者猫に誘はれて起上り、ひよろひよろと歩く、ばた〳〵にて上手より三次とつて返し、亡者に行き當りびつくりして星明りに透し見て、おそよと思つてぎよつとなし。

三次　やあ、もう迷つて出たか、恨みがあるなら長庵に言へ。

トいひながら下手へ逃げて行くを亡者引留め、

亡者　眞暗で家が知れない、一緒に連れて行つて下さりませ。

三次　家は麴町だ、勝手に行け。

ト振拂つて行かうとするを、又とらへて、

亡者　あれさ、連れて行つておくれと云ふに。

三次　えゝ幽靈を連れて行かれるものか。

ト亡者を突倒し、花道へつか／＼と行き、躓きてばつたり轉ぶ、亡者起上り向うを見て、不氣味な聲にて、

亡者　あゝ恨めしい人だなあ。

三次　わあゝ。（ト着物をすつぽり天窓へ冠るを、木の頭）こいつはたまらぬ。

ト時の鐘ばた／＼にて三次いつさんに怖き思入にて花道へ走り入り、

よろしく幕

ト時の鐘、亡者立上り思入あつて、

亡者　月見の團子が喉へ支へ、何でも死んだに違ひないが、どうして息を吹返したか、さつぱり分からない。

トドロ／＼の樣な風の音になり、以前の猫足許へ出る

亡者見て、

おや其所に居るのは三毛か、死人の傍に猫が寄ると踊出すといふ事だが、それぢやあわたしの生返つたのも、猫ぢやな、（ト猫を見る、猫點頭く）おゝ猫ぢや／＼、

ト是より唄になる。

〽猫ぢや／＼とおしやますが、猫が下駄履いて杖突いて、絞の浴衣で來るものか、おつちよこちよいのちよい、

ト太鼓入りの鳴物になり、亡者頭陀袋を引裂きて手拭に冠り、踊りながら花道へ入る。知せにつき、鳴物打上げ直に引返す。

六幕目

飯田町紙屑屋の場
寺門前裏借屋の場

〔役名――紙屑屋久八、人宿貝坂ノ忠藏、伊勢屋の息子千太郎、家主雷五郎兵衛、道十郎倅道之助、同巳之松、紙屑買ひよろ八、雇中間はげ松、同ぐづ市。道十郎後家おりよ、雇女おあさ、同おくさ。〕

（六右衛門店頭の場）　本舞臺四間の家體、上手へ寄せて三間常足の二重、正面暖簾口、押入戸棚、古帳買入の帳面、秤など掛けあり、下手一間落間、折廻して板羽目、古帳紙屑の大包み積上げあり、この前に紙屑買の籠あり、柱に「古帳買入れ三河屋六右衛門」といふ札、いつもの所門口、下の方路地口、黒塀、天水桶、總て紙屑問屋の體。幕の内よりお淺、

八　おくさ紙屑を伸す女の拵へ、手拭を冠り襷を掛け、紙屑を伸して居る、此傍にひよろ八紙屑買にて籠より紙屑を出して居る、此の見得さんげ／＼にて幕明く。

八　おあささん、よく毎日精が出るの。

あさ　精を出さにやあ喰えねえわな、朝から晩迄選分けても、一貫目廿四文だから、二百取るのは大仕事さ。

くさ　それに又秋口で、かずや落が多いから六貫目精切りさ。

八　此屑に新ぼろが多いから、足袋底になるぼろが出たら面倒でも除けて置いてくんねえ、かゝあに足袋をさゝせるから。

あさ　そんなに夫婦で稼いだら、金の置き所があるまいぜ。

八　どうして／＼大違ひだ、麻疹で久しく休んだ揚句が、此間からのばら／＼降りで、半日出ちやあ彌太一で日を暮して酩酊になりすつかり種を耗つてしまつてどうしようかと思つた所へ、ありがてえ事に隣り裏に首縊りの獨身者があつて、其仕舞物を見倖してそれから商賣に取附きました。

くさ　それぢやあお前の爲にやあ、首縊りは助けの神だね。

八　もう四五人首縊りがあると、おらあ身上を直すけれど、

あさ　そんな縁喜でもねえ事をいつて、お前縊られねえ様にしねえよ。

くさ　物は願ひからといふから、始終は首縊りだぜ。

八　こんな氣の利いた首が、首縊りにあるものか。

あさ　そりやあお前の慾目だよ、鼻をたらすときつといゝよ。

くさ　然し知つて居る家は御免だよ。

八　さうよ、爰の家の軒下へは。

トいひかける、此時奥より前幕の六右衛門肴流し前垂掛にて出で來り、

六右　ひよろ八さん、軒下がどうしました。

八　え。(ト振返りびつくりなし)六右衛門さんか。

あさ　もし親方さん、家の軒下が丁度いゝから。

八　あこれ／＼。

ト言つては惡いといふ思入、

六右　おゝ軒下がどうしましたな。

くさ　首を縊るに。

八　あこれ／＼、首ぢやあねえ、釘が出て居るといふことさ。

六右　あゝあの釘か、あれは提灯掛けだ。
八　提灯掛かえ、それぢやあ首を掛けるにやあ、いやさ、屑を掛けたが一貫五百目ござります。
　ト紙に包みし屑を出す。
六右　一貫五百目ぢやあ二朱だね。
八　明日持つて來ますから、一分貸しておくんなせえ。
六右　此頃にどうだね。
八　どうだ所か極閑さ、二朱といふ金を儲けたことがねえ。
六右　いゝ首縊りもないと見えるね。
八　いや面目次第もない。
二人　いゝ氣味だねえ。
六右　(帳箱より金を出し、)さあお前のいふ通り、一分貸しますよ。
八　そりやあ有難うござります。
六右　今日はもう怠業かね。
八　どうして／＼、もう一稼ぎしますのさ。
あさ　首縊りでも搜しておいで。
八　えゝやかましい、(トいひながら門口へ出て、)それぢやあ六右衛門さん、
六右　明日逢ひませう。

八　屑や／＼。
　トひよろ八籠を擔ぎ花道へ入る。
六右　あの男も商賣は人並より目が利いて、いゝ錢を儲けるが、女と酒には目のねえ男だ。
あさ　それはさけ／＼困つたものだね。
六右　悪い洒落だ、はゝゝゝ。
　ト六右衛門は帳箱へ向ひ帳合をする、兩人は屑を選分けて居る。端唄の合方になり、花道より前幕の千太郎、結城着流しにて出て來り、後より着流し白足袋の茶屋の若い者出で來りて、
若者　もし／＼そこへおいでなさいますは、三河町の若旦那ぢやあござりませぬか。
千太　おゝ誰かと思つたら濱正の與助か、今日は何處へ行つたのだ。
若者　掛廻りに出掛けましたが、丁度よい所でお目に掛りました。小夜衣からお屆け物がござりまする、
　ト懷から文を出して渡す。
千太　おゝ小夜衣からか、急用としてあるが何ぢや知らぬ。(ト開き見て紙入へ入れながら、)急に逢はねばならぬ事があるから是非來てくれとの文、都合して行くほどに、

歸つたらさう言うてくりやれ。
若者　お手間がとれませずば、お供致しませうか。
千太　いや少し手間が取れようから、片附き次第駕籠か舟で、葉方迄には行く積りぢや。
若者　左樣ならお仕舞ひ申して置きますから、お早ういらつしやりませ。
ト若い者は引返して花道へ入る。千太郎は門口へ來て、
千太　ちとお頼み申しまする。
あさ　はい、どちらからおいでなされましたか。
くさ　此方へお入りなされませ。
千太　御免下さりませ。
ト合方きつぱりとなり、千太郎内へ入る。
六右　や、是は三河町の若旦那樣。
千太　おゝ六右衛門殿、そこにござつたか、此間から訪ねようと心には思うて居れど親掛りの自由にならず、大きに無沙汰をしましたわいの。
六右　いえもう私こそ上らねばなりませぬを、まあ〳〵何はともあれ、是へお出でなされませ。
千太　忙しいに構うて下さるな。
ト上手へ住ふ。

六右　これ〳〵お客樣へほこりがする、手前達は奧へ行つてちつとの間休んだがよい。
あさ　それに有難うござります。
六右　久八に、ちよつと來いと言うてくりやれ。
くさ　畏まりました。
ト兩人奧へ入る。
六右　これ久八は何をして居る、久八若旦那樣がお出でなされた、久八々々、
ト奧へ向ひ呼ぶ。
久八　只今それへ參りまする（ト奧より前藏の久八出て來り）これは〳〵若旦那樣、ようお出でなされました。
千太　おゝ久八か、逢ひたかつた〳〵。
久八　私もお目に掛りたうござりました。
千太　何から先へ言はうやら。
久八　思つた事が急に出ませぬ。
六右　まあ急かずとお話し申すがよい、どれ何はなくともお煮花でも。
ト立掛る。
千太　あこれ、さうしては居ませぬわいの。
六右　まあ御ゆるりとなされませ。

ト合方にて奥へ入る。千太郎久八の裝を見て氣の毒だといふ思入。

久八　どうなされましたかと存じましたが、お替りもなくお目出たうござりまする。

千太　わしは替りはなけれども、以前に替るそなたの身の上。さうして今は何をしてゐやる。

久八　達者な體で遊んで居るも勿體なうござりますゆゑ、紙屑を買うて歩きまする。して今日お出でなされましたは、何ぞ御用でもござりましてか。

千太　いや別に用はなけれども、私が遣うた五十兩引受けてくれた主人思ひ、直にも禮に來ねばならぬがそなたが居ぬので見世は忙しく、一寸出るさへ心にまかせず、定めてわしを不實者と思うて居ようが知つての通り自由にならぬ親掛り、是まで無沙汰になつたのはどうぞ許してくりやいの。

久八　いえ其樣におつしやりましては御挨拶に困りまする。私こそ御機嫌を伺ひながら參るべきを、御遠慮申して上りませぬ。

千太　いや／＼そなたの方から來られては、猶々わしが濟まぬわいの。

久八　まづ引負の一條も段々とお願ひ申し、御給金の三十兩へ衣類を殘らず添へまして、四十兩と額を極め、殘りは月々壹兩づゝ差上げまする積りにて御了簡下さりますれば、お預けなすつた短刀は返りましたでござりませうな。

千太　おゝ此間受戾したが、置主の三次からあれぎり何とも言うては來ず、てつきり他所へ預けしを何處でか聞いて來たと見える。

久八　あの三次といふ奴は、あなたの金を衒りとりし村井長庵と一つ穴、兄弟分とか申しますれば、知つて參つたに違ひござりませぬ。

千太　そなたに餘計苦勞掛け、あのまゝ置いては心が濟まずどうかして返したいと明暮思へど五十兩、今が今といふ譯にゆかぬは養子のわしが身の上、其中都合が出來ればよし、出來ずばわしが世に出る迄長い事ぢやが待つてくりやれ。其時こそは倍にしてそなたに金を返さうから、それ迄の借證文、これ取つて置いて下され。

ト紙入より證文を出す。

久八　是は又改まつた、あなたと私の仲に、なんの證文が入りませう。

千太　いや／＼人間は老少不定、何の仲にも念には念、證據になるは書いた物、是非とも取つて置いてくりやれ。

ト久八の手へ渡す、久八思入あつて、

久八　それ程におつしやりますを、兎やかう申すもいかゞなれば、お預かり申して置きまする。

千太　どうぞさうしてくりやいの。それに附いても今の身の上、無不自由であらうと思ひ、せめて小遣の少しづゝでも送り度いと思へどもそれ迚も心に任せず、（ト千太郎脇を向き、紙入より金包を出す。久八是を一寸覗く、千太郎見せまいと紙入を仕舞ふ。此時以前の文を落す事。）ほんのわしが志し、是れを取つて置いてくりやれ。

ト久八の前へ出す。

久八　これは／＼有難うござりまするが、あなたとても御小遣の御不自由なは存じてをります、決して御心配には及びませぬ。爲馴れぬ事ではござりますが、天道樣のお惠みで出さへすれば喰べるだけのお錢に儲けて參りまする。

千太　さうでもあらうが遣らうと思うて里の母から貰うた此金、不足でもあらうけれど、どうぞ取つて置いてくりやれ。

久八　いえ／＼それには及びませぬ、お納めなされて下さりませ。

千太　それでは心が濟まぬわいの。

ト兩人金を何なあちこち、する、此時奥より六右衛門盆へ茶碗茶臺小さな土瓶を載せて持出で來り、落ちてある文を拾ひ、反故と思ひ紙屑の籠へいれ、

六右　これ／＼久八、樣子は奥で聞いて居たが、折角其方に遣らうとてお持ちなされたお志し、お貰ひ申して置いたがよい。

久八　それぢやというて。

六右　はてそれを元手に精出して、又若旦那へ其方から御恩送りをしたがよい。

久八　そんならお貰ひ申しませう。

千太　どうぞさうしてくりやいの。

久八　あゝ有難うござりまする。

ト久八金を頂く、六右衛門茶を汲み千太郎へ出し、

六右　まあお茶一つお上りなされませ。

ト捨ぜりふにて千太郎茶をのむ。久八思入あつて、

久八　いやもし伯父樣、今日迄はお隱し申しましたが、若旦那樣から念の爲下された此證文、是で久八が引負を御

推量下さりませ。

ト以前の證文を見せる。

六右　おゝ最前からの一部始終櫺子越しに承はりました、久八がいふ事であらうかと推量はしてをりましたが、久八が隠します故表向はそしらぬ振で、心にも無い小言をば久八に申しました。

千太　それと言ふも此身の不埒、久八ばかりか伯父御に迄苦勞を掛けるも若氣の至り、堪忍して下さりませ。

六右　あ勿體ない事おつしやりませ、十二の年から御恩になつた御主人様の若旦那、よう成代つて久八が、あなたの罪を背負ひました。是でこそ誠の人、伯父も嬉しうござりまする。いやお茶ばかり何もお菓子が、

千太　いや〳〵構うて下さりますな、是から廻る所もあれば、もうお暇致しませう。

久八　まあよいではござりませぬか、何はなくともお蕎麥でも。

千太　今日は急な用事もあれば、又其中ゆつくりと馳走になりに來ませうわいの。

久八　して急な御用とは、何所方へおいでなされまする。

千太　え。(トぎつくり差支へし思入にて、)さあ、今日は、あのお屋敷へ。

久八　お屋敷とは、どちらのお屋敷へ。

千太　あの廓内の。

久八　え。

千太　いやさ、おくるわ内の六角様へ。

久八　おくるわ内ならよけれども、廓へおいではござりますまいな。

千太　はて一旦誓言したからは、足も向けはせぬわいの。

久八　それ承はつて安堵致しました、此後ともに私がかういふ身分になりましたを、不便な事ぢやと思召さば、どうぞおいで下さりますな。

千太　なんの行からぞ、そなたへ對し義理にも行かれたことではない。

六右　お留め申す所なれど、いや家を急げば少しも早う。早うお返りなされまするが、親御様への御孝行。

久八　左様なれば若旦那様。

千太　久八、また其中。

六右　おついでがござりましたら、

久八　どうぞゆるりと、

千太　尋ねませうわいの。

ト唄になり、千太郎門口へ出て思入あつて、足早に花道へ入る。

久八　引負の五十兩、わしが使はぬ證據の證文、伯父樣預かつて置いて下さりませ。

六右　おゝ預かつて置きませう。

ト六右衛門證文をとる。

久八　いや、とてもの事に下された三兩の金も共々に。

ト以前の金を出す。

六右　いや、それは其方持つて居て、古着でもあつたらば買つて來て儲けさつしやい。

久八　いかさま、三兩買へば三兩だけ餘計に利分がござりますれば、そんなら是を持つて行つてなんぞ買つて參りませう。

ト下手より屑籠を持つて來る。

六右　もう今に午であらうに、飯を喰つて行つたがよい。

久八　いえまだちつと間もあれば、辨當を持つて行く積りで、お淺どんに頼んで置きました。

ト荷拵へをする、奥よりいぜんの女二人辨當箱を持出で來り、

あさ　久八さん、辨當を詰めて置きましたよ。

久八　それはお世話でございました。

くさ　まだお菜が出來ないから、梅干と澤庵ばかりでござります。

久八　何でも宜しうございまする。左樣なら行つて參ります。

六右　あゝこれ久八どん、安い物は油斷がならぬぞ。

久八　それに如在ござりませぬ。（ト門口へ出で荷をかつぎ）どれ一稼ぎして參りませう。

トさんげ／＼にて久八屑籠を擔ぎ花道へ入る、六右衛門後を見送り、

六右　あの久八は捨子だが、よい家の胤かして子供の折から素直にて、篤實な者であつたが、お主の難儀を身に引受け恥も厭はずあのやうに、屑を買つて歩くとは、あゝ感心な事だな。

ト女兩人は紙屑をひろげながら、

あさ　ほんにあの久八さんは、今時の人には珍らしい、ああいふ亭主を持ち度いものだ。

くさ　私らが女らしいと、頼んでも女房になるが、朝から晩迄屑の中で漉返し臭い體では、初まらないせんさくだ。

あさ　蓼喰ふ蟲も好々とやら、日に八貫目の仕事を持參に

なられまいものでもないから、一寸辻占に是をお見、
　ト いぜん千太郎の落せし文を出す。
くさ　こりやあ女郎の文だね。なんだ「千太郎さまゝまゐる、小夜衣より」、この千太郎様といふのは聞いた樣だね。
あさ　聞いた筈さ、三河町の若旦那のことだ。
六右　なに若旦那の文があつた。
くさ　はい、此籠の中にありました。
　ト 出す、六右衞門取つて見て、
六右　おゝこりや今し方屑と思ひおれが拾つて籠へ入れたが、そんなら是は若旦那が此處へ落してござつたか。廓通ひはなされませぬと、今も立派におつしやつたが斯ういふ文があるからは、やつぱり廓へござると見える。
あさ　あの旦那なら此間燈籠を見に行つた時、仲の町で見掛けました。
くさ　十六七な可愛らしいおいらんと、連立つて歩いてゞございました。
六右　そんならいよ〳〵廓へござるか。
くさ　たしかにおゐでなさいました。
六右　いかに若いといひながら、あの久八が忠義も無駄に、廓へござる心では此方で思ふ親切も。

トきつとなる、兩人は端唄の本の反故を開き、一寸唄ふ。
あさ　〽先や左程にも思やせぬのに、
六右　それにこつちが、
くさ　〽登り詰め、
六右　えゝ腹の立つ。
　ト 紙屑籠を取つてはふる。紙屑ぱッと散る、兩人これを拾ふ。六右衞門はきつと思入。
　事ぢやなあ。
　ト この見得よろしく、やはりさんげ〳〵にて道具廻る。

（裏借家藤掛宅の場）

——本舞臺三間の間前へ出し常足の二重家體、正面押入戸棚、上に三尺の佛壇、瀬戸物の佛具位牌など宜しく、下手鼠壁、膳棚是にいろ〳〵の世帶道具、一ツ竈に釜を掛け、鍋摺鉢など取散しある。いつもの所門口、上の方後へ下げ卒塔婆を結込みし生垣、下の方路地、朝鮮矢來、總て寺門前貧家の體。爰におりよやつし裝世話女房にて、古蚊帳へ繼を當てゝ居る、上手に破れたる二枚屏風を立て巳之松を寐かしてゐる。五郎兵衞家主の拵へに

て、煙草を呑みながら店賃の催促をして居る。床の
三重にて道具留る。
浮るり〽秋の日の次第に詰るかせ世帯、きのふに替る飛鳥川ふちにはなれし身の果の、哀れを知らぬ家主が、
五郎　これおりよどの、店賃の貸しはどうする氣だ。
りよ　打續く不仕合せについ〳〵延び〳〵になりましたが、伜が歸りましたらば少しなりとも差上げませう。
五郎　息子どのは何所へ行つたのだ。
りよ　枝豆を賣りに參りましたが、もう歸りますでござりませう。
五郎　歸る迄待つても居られまい。これ、その蚊帳は損料蚊帳か。
りよ　はい、十六錢で借りましたが、そこら中に寄りがあつて蚊が入つてなりませぬゆゑ、繼當がひを致しますわいな。
五郎　そんな破れ蚊帳を釣らずとも、青々とした新らしい糊氣のある蚊帳を釣らすが、侍氣質の野暮を捨て、おれが女房になる氣はないか。
トおりよの傍へより、袖を引くをふり拂ひ、
りよ　又しても大家樣の其樣な事をおつしやりまする。此間も申します通り、夫は無實の難にあひ、非業に死なれましたゆゑ、修羅の苦艱を助かるやう明暮願ふ菩提の道、其日稼ぎに仕方なう髮は結うて居りますれど、心の内は尼になり佛に仕ふ身の上なれば、有難うはござりまするが御免なされて下さりませ。
五郎　そりや尤もな樣なれど、其所は又謠と歌、夫が死んで尼になり、生涯男を持たぬといふは、そりや上つ方でいふことだ、下々の貧乏暮し親切な人があるなら其身を任して、子供らの手足を伸ばして貰つた上年忌佛事を立派にしたら草葉の蔭で御亭主が悦びこそすれ恨みはしまい、惡い事は言はぬから、よく了簡をして見なせえ。
りよ　見る影もない私を其樣に迄思召すお志しは嬉しいけれど、是ばかりは女子の操、二人の夫は持たれませぬ。どうぞ堪忍して下さりませ。
五郎　それが野暮の上なしだ。よくいふ事だが、常磐御前は淸盛に身を任したばつかりに三人の子供が助かり、後に平家を亡して源氏の御世になつたぢやねえか、十間間口の二人役、此町内で雷と異名をとつた五郎兵衛が自身番での太政大臣、家主仲間の淸盛公、おれが女房になる時は大家樣の常磐御前、二人の子供は今若乙若此上も

ない立身出世、掃除代はやられない、お節句錢や釣瓶錢は、化粧料にこなたにやる氣だ。これ野暮をいはずとうんといやれ。

ヘ常磐ごかしにいひ諭す、淸盛ならぬ貞節な淸き心に突放し、

トおりよむつとして、

りよ　えゝ又しても〳〵いやらしい事ばかり、一人身なれど佛前に飾つてある位牌が夫、貧苦に迫れど武士の妻達つて慮外をなされますと、大家樣とは申させませぬぞ。

トきつといふ。

五郎　いやこれはきついお腹立、さう又そつちが色氣もなく愛嬌をこぼして言へば、こつちも邪慳に言はにやあならぬ。去年の秋此長家へ引越して來て、二月三月店賃を拂つたばかり、それから後は今日の明日のと六百づゝ七ケ月六七四貫二百といふもの貸して置くのは何が目的、家財は知れたがらくたばかり、こなたといふ見込がある故、それが不得心の上からはもう一時も待たれない、家財か家財を賣つてなりとも、たつた今勘定さつせえ。

りよ　御尤もではござりますが、何をいふにも親子三人其日に迫はれまするゆゑ、今というては御勘定が、

五郎　出來ずば店を明けてしまふか。

りよ　さあ、それは、

五郎　此家主の女房になるか。

りよ　さあ、それは、

五郎　耳を揃へて勘定するか。

りよ　さあ、

五郎　店を明けるか、

りよ　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

五郎　うんといつて女房になりやれ。

ヘ又も手を替へ言ひ寄るを、

ト五郎兵衞おりよの袖を捉へる。

りよ　えゝ穢らはしい、知らぬわいな。

ト振拂ふ。

五郎　おゝいゝわ、さう情なくさつしやるなら、可愛さ餘つて憎さが百倍。

ヘ破れかぶれに古蚊帳を引つ抱へて立上るを、おりよは裾に取りすがり、

ト五郎兵衞蚊帳を持つて立上るを、おりよ留めて、

りよ　今に伜が歸りますれば、どうぞそれ迄暫時の中、

五郎　いや〳〵何時歸るか、だん〳〵とこれが待つて居られるものか、是を抵當に取つて置くから、殘らず家賃の勘定するとも店を明けて立退くとも、うんといつて女房になるとも、三つに一つの返事をしやれ

りよ　すりやどうあつても。

五郎　えゝ人を恨むな、心柄だ。

〽情用捨もあらけなく、留めるを突きのけ家主が、蚊帳を抱へて立ちかへる。

ト　おりよ五郎兵衛を留めるを突退け、蚊帳を持ち下手へ入る。

〽後におりよが兎やせんと案じ煩らふ親心、知らぬが佛幼兒が、

ト　おりよぢつと思入、寐て居たる巳之松起上り。

巳之　母さま、何ぞ喰べたいわいの。

りよ　今に兄さんが戾つたら、何ぞお土產があるであらう。おとなしう待つてゐや。

巳之　いや〳〵待つては居られぬ、まだおまんまを喰べぬから饑じうてならぬわいの。

りよ　今甘酒を呑んだではないか。

巳之　それでもなんぞ喰べたいもの。

りよ　いかに藏是がないというて、少しは物を辨へや、此間から血の道で、わしがぶら〳〵して居る故、可愛さうに兄さんは仕つけもせぬ商ひして夜の目もろくに寐はせぬぞ。それにそなたはやんちやんばかり、さう言ふ事を聞きやらぬと、母さまの子にはせぬから、お藏の子になつたがよい

〽おどせばしく〳〵泣きながら、可愛い兩手を膝につき、

巳之　もうおとなしうしますから、お前の子にして下さりませ。

りよ　おゝおとなしい〳〵、それでは母の子にしませう。

巳之　嬉しいわいの。

〽悦ぶ顏を見るに附け、不便な者と淚ぐみ、

ト　巳之松の縋り附くを抱上げ、

りよ　あゝこの樣に叱るものゝ、世が世であらば言ふなり次第、好な物を取つて遣らうに、三度の食さへろく〳〵に、喰べさせぬものひもじい筈、泣くのも無理ではないわいの。それはさうと今の蚊帳、取り戾し度いものぢやが。

〽蟲が知らして案じる折から、

ト　花道の揚幕にてぐづ市はげ松兩人の聲にて。

兩人　うしやあがれ〳〵。

ト言ふ。

へ呑んだる酒の後ねだり喧嘩仕掛に中間が引ずり來る道之助

トはげ松ぐづ市紺看板一本差し、雇中間の拵へにて、枝豆の籠を肩に掛けたる道之助を引ずりながら出て來る。

道之　どうぞ御免なされて下さりませ、宿に居るのは母ばかり、女の事ゆゑ案じますれば、是で御免下さりませ。

はげ　いくら言つても了簡ならねえ、家がお袋ばかりなら家主が相手だ、案內しろえ。

道之　そこをどうぞ。

ぐづ　えゝ、うしやあがれ。

へ詫びる程猶つけあがり、了簡ならぬと門へ來て、

はげ　さあ、うぬが家はこゝか、

兩人　きり〳〵と入りやあがれ。

へ襟がみ取つて突き倒すを、見るに母親打驚き、

ト道之助を門口から內へ突倒す、おりよびつくりなし、

りよ　や、悴ではないか。

道之　あゝもし母さま、ひよんな粗相を致しました、お詫び申して下さりませ。

りよ　どういふ譯か存じませぬが、年端も行かぬ不束者、お許しなされて下さりませ。

ぐづ　いやだ〳〵了簡ならねえ、此界隈で面を賣る看板着のこちとらが、恥をかゝせられちやあ歸られねえ。

りよ　そりやまあ悴が何を致して、恥をおかゝせ申しましたか、譯をお聞かせ下さりませ。

はげ　譯といふなあ外でもねえ、枝豆を一把くれとこいつが言つたを、此息子が遣られねえと言つたからだ、明日來りやあ遣る錢を、なんのかんのとぬかすから、こんな間違になつたのだ。

りよ　いえも御覽の通り大きうても年の行かぬ不束者、お前さん方に一把や二把上げぬといふは不調法、さあ〳〵何把でもお持ちなされて、許して遣つて下さりませ。

ト枝豆を出す。

ぐづ　いゝやいらねえ、貰はねえ、年中看板一枚だが面を賣るこちとらだ、これが二朱か一分するもんぢやあなし、四文か八文の枝豆で盜人と言はれちやあ、了簡ならねえ。

道之　えゝめつそうな事おつしやりませ、誰が其樣な事申

しませう。

ぐづ　誰でもねえ、手前が言つた。

道之　何でまあ、私が。

ぐづ　言はねえことがあるものか、枝豆一把でも人のものを只取りやあ盗人だと、うぬが口から言やあがつた。

トぐづ市枝豆をとつてはふり附ける、道之助むつとするを、相手が悪いとおりよ留めて、

りよ　あこれ〳〵、腹も立たうが、いやさ、御腹の立つは御尤も、なぜ其樣な事を言やつたぞいな。

道之　いや〳〵、言うた覺えは。

はげ　いやそりやあ言つたに違ひねえ、此野郎は喰ひ醉つて居るが、素面のおれが證人だ、錢せえありやあこちとらは四文の物を八文でいつでも買つて喰ふ男だ、枝豆賣や玉子賣微な商賣する者を、ついに籠めたことはねえ。

ぐづ　其替りにやあ商人なら、見世先へ踏反り返つて貸せと言ひ掛つた其日にやあ、一兩二兩する物でも借りずに歸つたことはねえ。それでも今迄盗人と言はれた事アー度もねえ、四文か八文の枝豆で盗人と言はれちやあ男が立たねえ。おれと一緒にうしやあがれ、大部屋へ釣し上げ、敲きしめてやらにやあならねえ。

りよ　まあ〳〵お待ちなされて下さりませ、夫に別れて三年越し引續いての不仕合せに、見る影もない此暮し、ほんに杖にも柱にも、便りに思ふはこれ一人。

道之　これといふのも私が不調法から起りし事、これ此通り手をついて、お詫を致しまするから、

りよ　お部屋へお連れなされまするを、

道之　何卒許して、

兩人　下さりませ。

〽何心無き幼兒まで、手をつき詫びるを見向もせず、

トおりよ道之助手をつき詫びるを見て、巳之松も同じ樣に手をつき辭儀をする。兩人これに構はず、

ぐづ　厭だ〳〵、了簡ならねえ、なんでも屋敷へそびいて行つて、筋骨抜かにやあ腹がいねえ。

りよ　さあ其處をどうぞお情に。

ぐづ　えゝ知らねえわえ。

〽寄るを蹴倒す傍若無人、如何はせんと親と子が取附く島も泣く涙、わざと一人が猫撫聲、

トおりよぐづ市に頼むを蹴倒す、これにて巳之松おりよに縋る、道之助はおろ〳〵と、如何したらよからうかといふ思入、はげ松點頭て、

はげ　もし／＼お上さん、ちよつと來なせえ。(トおりよを下手へ連れて來て)お前知つて居るかも知らねえが、あの野郎はぐず市と言つて私らが仲間で名うての惡漢、喰え醉つて言ひ出したらどんな事でも聞きやあしねえ。此間もこんな息子をそびいて行つて敲きしめ、たうとう打殺してしまつたが、そこへ來ると町家と屋敷慮外をしたから殺したと言やあそれで濟む話だ、そんな事になつても氣の毒、わつちがだまして連れて行くから、一升買つてあやまんなせえ。

りよ　それはまあ御親切に有難うございまするが、そのお酒を買うて上げますお錢が唯今。

はげ　高が四百か五百のことだ、それしきの錢のねえこともあるめえ。

りよ　お恥しうございますが、こゝにわづか四五十あまり、

　　ト緡にさしたる錢を見せる。

はげ　無けりやあ止しねえ、それ迄の事だ、達つて貰はうといふのぢやあねえ、其替り此息子が打殺されても、おらあ知らねえよ。

ぐづ　さあおれと一緒にうしやあがれ。

　　ト襟がみ取つて引立てる、其手におりよは縋り附き、

りよ　まあ／＼お待ちなされて下さりませ、どうなとして上げませうからお待ちなされて下さりませ。(ト留めて)これ倅、そなたが今日の賣溜をこゝへ出しやいの。

道之　はい、三百四五十ござりまする。

　　ト首に掛けたる財布より錢を出す。

りよ　それにこれを一つにしたら、四百餘りになりませう。これで御不承下さりませ。

　　トおりよ錢を一ツにしてはげ松の前へ出す。

道之　あもしそれをあげましたら、晩の御飯をどうしませう。

りよ　はて御飯はどうなとならうわいの。

巳之　母さま、お飯が喰べたいわいの。

りよ　おゝ又其樣な事を言やるか。

　　ト巳之松を睨む、はげ松錢を取つて、

はげ　一分か二分貰はにやあ歸り難い所だが、大負にまけて連れて行きやす。

ぐづ　いゝや歸らねえ、おらあ厭だ、一升や二升で歸られるものかえ。

はげ　これが立派な家體骨なら、己も共々居しかつて菰冠りの一本も部屋へ土産に持つて歸るが、高が四文の枝

豆賣だ、これで不承して一緒に歸れ。
ぐづ　厭だ／＼、盜人と言はれた明りを立てにやあ。
はげ　明りも絲瓜もいるものか、歸れと言つたら歸れ。
ぐづ　厭だ、歸られねえ。
はげ　己が言ふ事を聞かねえのか。
トはげ松ぐづ市の胸ぐらを取つて引立てる、おりよ案じる思入。
はげ　なに、打捨つて置きなせえ。さあ野郎歸るか歸られねえか。
ぐづ　歸らねえとは言はねえが、あんまり手前が分らねえ、何でこいつらが屑を持つのだ。
はげ　屑も脊もいるものか、己が胸にあるから歸れ。
ぐづ　なんだ、溜飲ぢやアあるめえし。
はげ　それぢやあお上さん、こりやあ貰つて行きやすよ。
ト錢を財布へ入れる。
りよ　どうぞお持ちなされて下さりませ。
ぐづ　どれ、不承して歸つてやらうか。
ト立上る。
はげ　こりやあおやかましうございました。
ト兩人門口へ出て、

ぐづ　こう門百の錢ぢやあ詰らねえな。
はげ　さうよ、あんまり馬鹿々々しいけれど、あの家の樣子ぢやあ、いつ迄言つてもむだなことだ。
ぐづ　これでも取らねえよりましか。
はげ　違えねえ。
〽慾に目のなき惡漢は酒屋を指して急ぎ行く、
トはげ松、ぐづ市捨ぜりふにて花道へ入る。
〽跡に佇む二人の影恨めしさうに見送りて、
ト道之助門口より向うへ思入。
道之　今日はいつより餘計賣り、澤山儲があつたゆゑ、殘りの豆を賣りながら早う家へ歸らうと急いで來た後から、今の二人が呼びかけて籠へ手籠に二把づゝ取り、お錢も置かず行くゆゑに、呼返したら腹を立ち、踏んだり蹴たり打ち打擲、擧句の果に家迄來て屋敷へ連れて行くと脅し、豆の元手やお米の代、當にしてある賣溜を殘らず持つて行かれたれば、翌日はどうして暮さうぞ。
りよ　まだそれよりは大家さまが、これ迄溜りし店賃を勘定するかさもなくば、店を明けろと嚴しい言ひつけ、其返事をする迄の抵當に取つて置くというて、損料屋から借りて置いた蚊帳を持つて行かれたわいの。

道之　すりや店賃のその抵當に、蚊帳を持つて行かれましたか。

りよ　知つての通り損料物、先方へも濟まず、一晩でも蚊帳が無うては蚊に責められ、巳之松が泣いて寐ぬ故に、其方が歸つたことならば、少しなりとも勘定して、蚊帳を返して貰はうと思つた事も鶍となり、只一錢のお錢にさへ困るといふは何事ぞ。

道之　世が世であらば鹽冶の家來、何不足なき身の上ながらお主の沒落父の不運、夜討の折も病氣にてお役に立ず、其後に無實の罪に非業な御最期。

〽跡に殘りし妻や子が、かゝる憂目の艱難は神佛にも捨てられしか。

こりやどうしたら、ようござりませう。

りよ　此苦しみをするよりも、いつそ死んでと思へども、其方と逢ひ僅五歲これが不便と二つには夫の汚名が雪ぎたく惜しからざりし命を存へ、すゝぎ洗濯賃仕事、

道之　せめて些しの手助けと、恥も恥辱も打捨てゝ、元手も薄き際物賣り、

りよ　繼褄させてふ蟲の來て、啼けども冬の仕度もなく、

道之　秋の日脚と共々に、次第に詰る世帶、

りよ　運も傾く軒朽ちて、

道之　杖柱さへ無き身の上、

りよ　破れたる壁を洩る風に、

道之　消ゆる灯のそれならで、

りよ　思へば果敢なき、

兩人　身の上ぢやなあ。

〽濕り勝なる雨雲に、身の秋歎く親と子が、傍にぐわんぜも泣く幼兒、

ト　おりよ道入助よろしく思入。

巳之　母さま、なんぞ喰べたいわいの。

りよ　おゝさうであらう〳〵、今にお飯を炊いてやるから、おとなしう待つてゐや。

道之　母さまお米がござりまするか。

りよ　なんのお米があらうぞいの、今朝のお粥に拂つてしまひ、今夜は買はねばならぬところ、

道之　買ひに行くにもお錢はなし、

りよ　どうで家賃も遣らねばならず、明日の元手お米の代二分程無ければならぬけれど、無心を言はう當もなし、今に屑屋が來たならば何なりと賣代なし、此の二三日を凌がうわいの。

道之　それが宜しうござりまする。
巳之　早う飯が喰べたいわいの。
りよ　あゝ忙しない、待たぬかいの。そなたよりは道之助飢からうが辛抱しや。
道之　いえ／＼私はまだ飢じうはござりませぬ。
巳之　おりや飢じいわいの。
ト大きな聲する。
りよ　あゝこれはしたり、其樣な事を大きな聲で言はぬものぢや。
巳之　それでも飢じいもの、
道之　どれ、よい物をやりませう。
〽籠に殘りし枝豆をやれば渴えし幼兒が悅ぶ顏を見るに附け、親は寒がる棟割の心も狹い路地口を、荷籠かたげて屑買が、
ト花道より以前の久八出て來り、
久八　屑はごぜい／＼。
〽門より内を差覗き、
ト久八舞臺へ來り、
まだ屑は溜りませんか。
りよ　おゝよい所へ屑屋どの、一寸内へ入つて下され。

久八　へい畏りました、大きにお涼しくなりましてござりまする。
りよ　屑はまだ溜らぬが、外の物でも買ひなさんすか。
久八　何でもお買ひ申しまする。
りよ　そんならこゝへ來て下さんせ。
久八　まつぴら御免下さりませ。
〽荷籠下して内に入る、此方は數々の品々を、屑屋が前へ取並べ、
ト久八荷を下して内へ入る、おりよ道之助兩人して重箱、蓋物、茶碗などを出し並べて、
りよ　是を買うて下さんせ。
久八　へい／＼畏りました。（ト品を見て、）是は一向お値打な物がござりませぬ。（ト鐵砲籠より小さな算盤を出し勘定して、）悉皆で七百五十文でござります。
りよ　（鏡を出し、）是はどの位に買ひなさる。
道之　あゝもし、それをお賣りなされては、
りよ　鏡は女の魂ゆゑ、今日迄除けて置いたれど、時の用には何とやら、賣つてもだいじないわいの。
久八　（鏡を見て、）是は結構な鏡でござりまする、一分におもらひ申しませう。

りよ　どうかみんな一つにして、二分に買うて下さらぬか。

久八　なか／＼さうは買へませぬが、一分二朱ならお買ひ申しませう。

りよ　定めて如在も無からうが、二分なければならぬ譯、はて困つたものぢやなあ。

ト何ぞあるまいかと辺りを見廻す。

久八　（煙草入を出し、）お火を一つお貸し下さりませ。

道之　あい／＼。（ト火鉢を見て、）生憎みんな立消えて、

久八　いえ是に火打がござりました。

ト煙草入より火打を出し、煙草を呑み兩人を見て思入。

道之　母さま、なんぞござりませぬか。

りよ　さあ考へては居るけれど、三年此方賣盡し、何も値になる物がない。

〽又も戸棚をそこ爰と、搜し明くれど寒がる胸、始終を見やり久八が、

久八　最前から見ますところ、賤しからざるお二人樣、定めて以前はお歴々由緒あるお方と見えまする、私なぞも先月まではさる大家に奉公なし、米の値段も存じませなんだが、據無い事からして暇を取つて此樣な、しがない渡世を致しますれば、身につまされてお二人樣がおいとしうござりますから、もう一朱買ひませう、それでお拂ひなされませ。

りよ　見るから律義な屑屋どの、押して言ふのも氣の毒ながら、是非二分なければならぬ仕儀、どうか二分に買へますまいかの。

久八　いえもう御難儀と存じますゆゑ一分三朱と申しまするは踏込んで買ひました、なか／＼御前樣方の此御道具を買ひまして儲ける心はござりませぬ、少々買値が切れましても厭はぬ心でござりまする。

りよ　見ず知らずでありながら親切なお人ゆゑ恥を明かしてお話申すが、今もお前のいふ通り以前は武家であつたれど、不圖した事から浪人なし夫に死なれて三年越し、子供を相手に女の身、衣類調度も賣代なし、母の病に藥より煎じ詰つた二分の金、なければならぬといふ譯はこれ迄溜る店賃の勘定するかさもなくば、店を明けろと家主が蚊帳をば抵當に持つて行き、今夜迄に返事をしろと退引ならぬ其所へ、惡い者に倖が出逢ひ、僅か四文か八文に商なふ元手を持つて行かれ、明日の晝の代もなく三方四方に二分の金、出來ねば明日から親子共路頭に迷ふ果敢ない仕儀。

道之　ひよんな所へ來合せし屑屋どのもなんぞの緣、所詮數にもなるまいが、私が習うた此手本、是をば數に入用の二分に買つて下さりませ。
〽出だす手本の折目高、昔床しき墨の香に、久八心察しやり、
ト道之助戸棚より折手本を三本出し、久八の前へ出す、この中久八氣の毒なる思入にて、
久八　その御難儀を承はつては、假令損がまゐるとも高が一朱か二百のこと、是が買はずに行かれませうか。
りよ　そんなら買つて下さりますか。
久八　はい二分にお貰ひ申しませう。
兩人　えゝ有難うござりまする。
久八　何のお禮に及びませう、さあ御受取り下さりませ。
〽金を渡せば押頂き、
ト久八財布より二分出し、道之助に渡す。
りよ　あゝ嬉しや〳〵、これで蚊帳も取戻せば、
道之　明日商ふ元手も出來、
りよ　殘りは今日の烟りの代
道之　是でやつと、
兩人　安堵しました。

〽悦ぶ親子の傍には、手本の名書を打見やり、久八は不審顔、
久八　こりや御前さまのお手本でござりまするか
道之　さあ、此弟に讓らうと、殘して置いた師匠の手本、
久八　そんなら是に記してある、藤掛道之助樣とは、お前樣の御名でござりまするか。
道之　おゝ、道之助とはわしぢやわいの。
久八　それではもしや鹽冶樣の、御家來ではござりませぬか。
兩人　えゝトぎつくり思入あつて、いかにも、以前は鹽冶家の者でござりまする。
久八　扨は藤掛道十郎樣の、御新造樣や若旦那樣でござりましたか。
兩人　如何してそれを。
久八　御浪人とのお話から、手本に記せし御苗字に、それと知つたも盡きせぬ緣、駿州江尻にをりまする、久右衞門といふ百姓を御存じでござりませうな。
りよ　おゝ其の久右衞門夫婦の者は、親父樣に仕へし者。
道之　それでは若しや噂に聞いた。
久八　へい、その久右衞門の倅久八と、申しまする者でご

ざりまする。

道之　そんなら母の話に聞いた、其方はたしかに。

久八　へい、江尻在の地藏堂へ・二つの時に捨てられし元は捨子でござりまする。

りよ　すりや久右衞門が拾つたる、

道之　養子の伜であつたるか。

久八　藤掛樣の御新造樣、若旦那樣でござりましたか。

りよ　思ひ掛けない手本から、

道之　互ひに知れる氏素性、

久八　嬉しい中に悲しいは、

りよ　以前に替る今の身の上、

道之　名乘り合ふのも、

兩人　面目ない。

〽落目になれば人の身は涙ばかりが先立ちて、互ひにそむける顏と顏、

ト三人宜しく思入あつて、

久八　してまあどうして此樣な、お暮しにはおなりなされました。

〽問はれて涙を押拭ひ、

りよ　話せば長い事ながら、お預りの短刀を御國元より持參の途中盜まれしが越度にて、既に切腹にもなるべきを、御慈悲を以て御追放、間もなく御家の騷動に茲ぞ御恩の送り所と思ひの外、二年越し、病の爲に討入りのお供に立たぬを口惜しがりしが、死ぬにも死なれぬ短刀の詮議の爲に麹町の平川町に暮す中、おなじ所の軒並び村井長庵といふ町醫者の妹聟にて、三河の百姓重兵衞といふ者が娘を賣つて歸る途中、人手に掛つて身の代の金を取られし其場所に、藤掛といふ印のある夫の傘が捨てゝあり、それが御上へ證據に上り、無實の罪に入牢なし、言譯立たぬ其中に非業な死をばなされしゆゑ、所の人に親子共顏見らるゝが恥かしく、此處や彼處と宿替なし持ち傳へたる貯へも、三年此方手減の立つに是非なく此樣な見る影もない裏家住み、世にも因果な身の上を推量してたもいの。

久八　承はつて驚き入つた旦那樣のお身の上、御恩になつた久右衞門夫婦の者が五年あと引續いて故人になり、つい御行方も知れざればお尋ねも申しませず、眞平御免下さりませ。今承はつた麹町の村井長庵といふ醫者は、一方ならぬ惡漢にて、私などが此樣な身になりましたも元は長庵、旦那樣の無實の罪も若しや彼れが仕業では、

いや、此事は又追つて、先づ差當り唯今にては何を渡世になされまする。
道之　話すも面目ないけれど、そなたに道具を賣る程な身の上故に母樣は、すゝぎ洗濯賃仕事、わしは當座の果物賣り、冬は蜜柑秋は柿、其間には茹玉子、又は枝豆、薩摩芋、面を包んで賣り歩けど以前出入の商人や職人などに出會うた時、此方より却つて向うから顏をそむけて通らるゝ其悲さも我家へは隱して歸る苦しさは、どの樣であらうぞいの。
久八　それ程迄に御難儀をなされまするを、もう一年早く知つたら何樣にも親久右衞門の御恩送り、御新子樣を御貢ぎ申し、此御苦勞はさせますまいに、間の惡いと申すものは、十二の年から勤めました主人の家を譯あつて、忠義の爲に年來の給金から衣類迄殘らず置いて着のみ着の儘、暇を取つて是非なくも伯父の所に掛人、今更いうて返らねど殘念な事でござりまする。
〽返らぬ愚痴を車井の綱の切れたる思ひにて、人は釣瓶の浮沈み、
ト久八ぢつと思入、巳之松おりよにすがり、
巳之　母樣飢じいわいの。

りよ　又其樣な事を云やるか、今お晝飯を喰べたではないか。
巳之　いや／＼坊はまだ朝から、お飯を喰べぬわいの。
りよ　なんの喰べぬことがあるものか。
道之　今米屋から取つて來て、暖たかに炊いてやるから、おとなしう待つていや。
巳之　いや／＼待たれぬ、飢じいわいの。
道之　えゝ聞分の惡い、待つて居ぬか。
〽叱れどぐわんぜ泣く顏を見る親の身を察しやり、
久八　あゝもし、これからお炊きなさるのでは急なお間には合ひますまい。幸ひよい物がござります。
〽荷籠の內より取出す、辨當箱も昔物、
ト久八籠の內より以前の辨當箱を出し、
失禮ながら私の辨當がござります、是をお上げ下さりませ。
〽兀げぬ忠義の堅地塗り、
ト辨當箱をおりよの前へ出す。
りよ　それは何より忝いが、其方が後で困るであらう。
久八　いえ私は懇意の所でお晝に茶飯を馳走になり、持つて出た儘手を附けませねば、どうかこれをお坊樣に。

〽蓋取除けて差出すを、見るに渇ゑし幼兒が、
ト久八蓋を取つて出す、巳之松見て手をたゝき、
巳之　やあ、お飯ぢや嬉しい／＼
ト取りに掛るを留めて、
りよ　これ、行儀の悪い、どうしたものぢや。
巳之　それでも早う喰べたいもの。
久八　さあ／＼お上りなされませ。
道之　どれ、取分けてやりませう。
〽時世につれて物事も缺けたる膳に箸茶碗、盛るを待兼ね澤庵の香の物さへ醍醐味と悦ぶ顔を見るに附け、子は支へねど母親は胸に支へる憂思ひ、
ト此内道之助縁の缺けたる膳へ小さな茶碗箸を添へ、辨當箱より箸にて盛り、香の物を手鹽へ取つてやる。巳之松嬉しさうに喰ふをおりよ見て涙を拭ふ、久八も是を見て氣の毒だといふ思入。
りよ　これ久八、其方の前も恥かしい、人は氏より育とて賤う育てば賤しうなり、今日は御飯の都合が悪く、わたしら初めまだ巳之松にも實はお晝飯を喰べさせぬゆゑ、御飯を見るとがつ／＼と、
〽犬か猫を見る様に喰べるといふは何事ぞ、以前は正しき御家來にて、三百石の知行取り、藤掛といふ侍の倅と人に言はれうか。
えゝ淺ましや。
〽悲しやとわつとばかりに泣伏せば、兒は賢く母親の背撫で摩り共々に泣くをも知らず幼兒は、我嬉しさに莞爾莞爾と笑ふ程猶いぢらしく、久八涙を押拭ひ、
トおりよ泣伏すを、道之助顔をそむけ泣きながら背中を摩る。巳之松嬉しき思入にて笑ひながら飯を喰ふ、久八情ない事ぢやといふ思入あつて、
久八　あゝ御尤もでござります／＼、したがそれも皆時世、譬にもいふ人間は七轉び八起とやら悪い後は必ずよいもの、今の難儀を昔語りに致す時節もござりませう。せめて少しの御苦勞休め、爰に僅か二兩一分持合せがござりますれば、是をあなたに差上げますから、半月なりともすゝぎ洗濯出商賣をなされませずに、氣樂に御暮し下さりませ、ほんの九牛の一毛ながら親久右衛門が御恩送り、お納めなされて下さりませ。
〽黄金の花の心榮貢に贈る千疋は、天晴男一疋なり。
ト久八財布より金を出し、籠の上にある破れ扇の上へ乘せ、おりよの前へ出す。

りよ　まあ〳〵それは忝いが、今も聞けば伯父の所に其方も掛つて居るとやら、定めて不自由がちであらう、志しは貰ひましたが、金子は其方に戻しまする。

　ト おりよ金を取つて頂き久八へ返す。

久八　いえ〳〵その御遠慮には及びませぬ、高が男の一人口仕慣れぬ事でも商賣冥利、出さへ致せば二百と三百、きつと儲けて歸りますれば、樂に暮して參られまする。必ずお案じ下されますな。

りよ　さうでもあらうが其方も元手、是れが無うては明日から差詰困るは知れた事、それぢやによつて此金は氣の毒ながら戻しまする。

久八　すりやこれ程に申しても、お受けなされて下さりませぬか。

りよ　さあ、それを受けては濟まぬわいの、

久八　（思入あつて、）いや、こりや私が不調法、お主樣へ家來の身で金子を上げるは失禮千萬、眞平御免下さりませ。

りよ　〽兩手をついて詫入れば、

りよ　あこれ、さういふ譯ではないわいの。

久八　左樣でなくば此金子、お受けなされて下さりますか。

りよ　さあ、それは、

久八　但し御不足でござりまするか。

りよ　さあ、

久八　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵、

久八　どうぞお納め下さりませ。

　〽親切面に現るれば親子は顏を見合せて、

りよ　これ伜、それ程迄に言うてくれる久八が志し、無足にするも本意ならず。

久八　すりや御受けなされて下さりまするか。

りよ　嬉しう貰ひますわいの。

久八　それで安堵致しました。

りよ　思ひがけなく此樣に其方の恵を受けるのも、切なる緣の折手本、

久八　以前は厚き御身分も、此本書に引替へて、薄い世帶の糊放れ、

道之　折目高なる行儀さへ、眞も草書の崩れがち、

りよ　替らぬものは墨の香に、

道之　名のり合ひたる嬉しさに、

久八　思へば筆の、
三人　命毛ぢやなあ。
〽嬉し涙に主從が其水入の水あふれ、硯の海やましぬらん。
　ト三人宜しくあつて、
りよ　これ作、久八が志し御佛前へ供へてたも、草葉の蔭で道十郎殿が嘸お悦びであらうわいの。
〽佛へ、の金は經文の三部に勝る一分銀、
　ト道之助件の金を佛前へ供へる。
道之　おとゝ様、久八が浪々を貢いで呉れし此金子、お悦び下さりませ。
久八　して旦那様にはいつお果てなされました。
道之　算へて見れば三年後、而も九月の十九日、
　ト位牌を見せる。
りよ　双舉劍道信士といふが、夫道十郎殿ぢやわいの。
久八　すりや旦那様でござりまするか、承はりますれば、無實の罪にて御最期とやら、嘸御無念でござりませう。して、今もつて殺したる其本人は知れませぬか。
りよ　村井長庵が仕業ならんと推量なせど證據もなし、夫が仕業と世間の人に言はるゝのが口惜しく、何卒して殺したる其本人を尋ね出し汚名を雪ぎし其上に、紛失なせし短刀の在所を求め御舍弟の大學様へ差上げて、亡き殿様へお詫なさんと神や佛へお願ひ申せど、今に在所が知れぬわいの。
久八　して其短刀と仰しやりますは、銘は何と申しまする。
道之　無銘なれども業物にて、燒刃に露のこぼれたる跡がある故白露と、中身に金の入銘あり。
久八　や、其短刀ならござりまする。
道之　それはいづくに。
久八　先達て迄私が奉公なして居りました、而も神田の三河町伊勢屋五兵衛といふ質屋に、五十兩の質物に預つてござりまする。
りよ　嬉しやそれが手に入らば、夫がなくせし越度のお詫
道之　とはいへ大まい五十兩、
久八　はて金は世界の湧物ゆゑ、調ふ時節がござりませう。
りよ　便りない身の二人故、
道之　此後ともに、どうぞ力に、
久八　及ばずながら精いつぱい、御恩送りを致します〔ト時の鐘鳴る。〕もう入相でござりますれば、秋の日の釣瓶落し、日の暮れるに間もござりませねば、今日はお暇致

しませう。
〽買ひたる品を差戻し、立たんとするを、
ト久八以前の道具を返し、歸らうとするを、
道之　これ、此道具を持つて行かぬかいの。
久八　えゝめつそうな事をおつしやりませ、知らぬ先は兎も角も、どうして持つて參られませう。
りよ　いや〳〵それは不用な品、どうぞ持つていつてくりやれ、
久八　にて禍も三年とやら、又お入用もござりませう、先づ先づお置きなされませ。
りよ　そんならどうでも、
兩人　此品は、
久八　お置きなされて下さりませ。
りよ　あ、禮は詞に、
道之　盡きせぬ奇緣、
久八　左樣なればお二人樣、
兩人　久八、
久八　(巳之松へ向ひ)ぼつちやん、たんとお上りなされませ。
巳之　又持つて來て下されや。

久八　はい。
〽はいとはいへど久八が如何に浮世に落つればとて、此辨當をさ程迄悦び給ふはいとしやと口に言はねど目は涙、袖に隱して門へ出で、
ト久八以前の辨當箱を取り、巳之松へ思入あつてほろりとなし、門口へ出て荷籠へいれ、
お暇申しまする。
ト門口をしめる、おりよは後を拜み居る、道之助は道具を片附ける。
〽門の戸しめて久八は、わつといひ度き口に手をあたり窺ひ吐息をつき、思案に暮るゝひともし頃足許暗く、
ト此中花道へ行掛ける、おりよ門口を明け、
りよ　これ、下水板があぶないぞや。
久八　はい、有難うござります。
〽たどり行く
ト時の鐘、久八荷を擔ぎ思入あつて花道へ入る。おりよ金をとつて、
りよ　捨てる神あれば助ける神と、思ひ掛けない此金で、大家樣の勘定なし殘りで米屋薪屋の拂ひ、今宵はゆつくり寐らるゝわいの。

巳之　母さま睡たらなつたわいの。
〽横にころりと寐入るを見て、
ト巳之松横になり直に寐ろ、
りよ　おゝ腹がようなつたら直に寐やつた。
道之　正直なやつでござりまする。
〽早日の入りて群れる蚊に、蚊遣の仕度何やかや忙しき門へ人入れの頭を連れて以前の中間門より内を差覗き、
トおりよ道之助蚊遣の仕度をする、花道より忠藏好の拵へ銀拵への一本差し、人入の拵へ以前のはげ松、ぐづ市、鰹節箱を持ち附添ひ出で來り、直に舞臺へ來て、
はげ　親分こゝでござります。
忠藏　案内をしやれ。
ぐづ　はい御免なさいまし。
ト門口を明ける。
りよ　道之　や、こなたはさつきの。
はげ　ぐづ　へい、又參りました。
〽いふにびつくり親子が驚き、門に控へし忠藏が小腰をかゞめ内に入り、
ト忠藏内へ入り、
忠藏　眞平御免下さりませ。

ト脇差しを抜きながら下手へ住ふ。
りよ　して、こなたさんは。
忠藏　へい私は忠藏と申しまして、こいつらが親分でござります。
兩人　え。
トびつくりして、
りよ　最前少しばかりなれど御酒代をあげましたが、僅四筋のお錢故不足で又もござつたのか。
忠藏　いえ／＼どう致しまして、さういふ譯ではござりませぬ、こいつらがお前樣方へ無理な事を申しまして、おねだり申した御酒代のお詫に參りましてござりまする。
はげ　もし御新造樣、若旦那樣、さつきは御免下さりませ。
ぐづ　つい喰ひ醉つた勢ひで、とんだ事を致しました。
ト兩人あやまる。
忠藏　不斷いひ附けて置きますが酒ばかりは控へられず、つい一合が一升と呑めば呑む程呑度くなり、酒の力で言ひ掛り、惡い事してなりませぬ。定めてお腹も立ちませうが、どうか私にお免じ下され、御免なされて下さりませ。（ト懐から以前の錢を出し）是は先刻お貰ひ申した、御酒代のお錢でござります（トはげ松が持つて來た鰹節

箱を出し)又是は輕少ながら、お詫の印に差上まする、どうぞお受取り下さりませ。

ト辭儀をなす。

りよ　これは／＼痛み入つた御挨拶、却つて迷惑致しまする。決してお返しには及びませぬ、殊には結構な此品を、どうまあお貰ひ申されませう。

忠藏　左樣仰しやつて下さりましては、私の方が迷惑致しまする、何卒お納め下さりませ。

りよ　どうも受けては濟みませぬ。

忠藏　(思入あつて)これ／＼手前達も此處へ來て、共々お願ひ申せ。

ト是にてはげ松、ぐづ市前へ出て、窮屈さうに坐り、

はげ　もし御新造樣、折角親分があゝ言ひなさるから、長い短いおつしやらずと、早く貰つてお置きなせえ。

ぐづ　錢だつて鰹節だつて、まんざら不用な物でもござりませぬ。

忠藏　これ／＼／＼、どうしたものだ、いけぞんざいな、もつと丁寧にお願ひ申せ。

はげ　眞平御免なせえまし。(ト手をつき思入あつて、)へい、さつきは私共お二人さま共、彌太一のお居酒屋でお鯨のお鹽燒で一升ばかりお酒を召上り、お醉ひ遊ばした所から、飛んだ悪い事を致しました。

ぐづ　それも全くお出來心、心から遊ばした事ではござりませぬ、是に懲りてお二人さま共、今日から御酒をお止め遊ばし、お下戸におなり遊ばしますから、

はげ　それをおきいぼに此お錢、

ぐづ　お鰹節も共々に、

兩人　御頂戴あられませう。

ヘ疊に天窓をすり附けて、詫り入るこそをかしけれ

ト兩人天窓を下げてあやまる。

忠藏　こいつらもあの樣に申しますから、お納めなされて下さりませ。

りよ　その樣におつしやりますを、兎やかう申すも如何なれば、お詞に任せまして、

兩人　お貰ひ申しますでござります

忠藏　それで私も心が濟みました。

ト此中はげ松ぐづ市矢張舞臺へ天窓を附け、蚊の喰ふ思入にて足を叩き居る。

忠藏　これ、もういゝから天窓をあげろ。

はげ　やれ／＼ひどく蚊に喰はれた。

ぐづ　おらあ又擲れが切れて堪えられねえ。
道之　おゝいつの間にか暗うなつた、どれ明りを點けませう。
りよ　あこれ、油がたしか無かつたわいの。
はげ　油か無かア、買つて來ませうか。
ぐづ　御遠慮なくおつしやりませ。
りよ　有難うございまする。
〽わづかに殘る佛檀の油を皿へ絞り入れ、二寸に足らぬ燈心にこゝろも細き灯の光り、初めて見合す顏と顏、
トおりよ佛檀の油皿を取つて行燈へつぎ、明りを點ける。是にて忠藏おりよと顏見合せ、
忠藏　や、お前樣は麹町においでなされた、藤掛道十郎樣の御新造さまではござりませぬか。
りよ　いかにも左樣でござりまするが、さうおつしやる、
兩人　お前樣は。
忠藏　へい貝坂に居りまする、人入の忠藏でござりまする。
りよ　すりやお屋敷方へお出入りの。
忠藏　左樣でござりまする、諸方へお出入り致しまする、取り分けてお屋敷樣へは祖父の代からお出入りゆゑ、且那樣のお顏はよう存じて居りまする。

りよ　そんなら以前はお屋敷へ、お出入りであつたとか。
道之　今日の樣な、思ひ掛ない人に逢ふことはない。
はげ　何處にどう知つた人があるか。
ぐづ　めつたな事は出來ねえなあ。
忠藏　扨て、過ぎ去つた事でござりますが、且那樣には不慮な事で、とんだ目にお逢ひなされましたな。
りよ　定めて近所の事なれば樣子は知つてゞござりませうが、傘の印が證據となり、言譯立たず果敢なくも非業な死をば遂げられました。
忠藏　嘸御殘念でござりませう、全く御存じない事なれど、傘の印に言譯立たずお調べ中の御死去故、どうやら且那の仕業の樣に知らぬ者は申しまする。して殺しました本人は、未だそれと知れませぬか。
りよ　明暮尋ねて居るけれど、今に慥な證據もなく、
道之　空に月日を送りまする。
忠藏　正しく百姓重兵衞を、赤羽根橋で殺したは女房の兄村非長庵、あいつが仕業と思ひます。
りよ　え、すりや、あの長庵か仕業となして、それにはなんぞ、
道之　證據でも。

忠藏　さあ別に證據もござりませぬが、重兵衞が殺されましたあの日は八月廿五日天神樣の御縁日、災難事を脫るるやう人の參らぬ其先にかゝさず參る此忠藏、烏も啼かぬ夜明前、而も宵から大降に天神樣の裏門前、やつと見分ける人顏に、すれ違つたる村井長庵、傘もさゝずに天窓からずつぷり濡れて歸つて來たを、犬も怪しく思つてか吠えつく所を切倒し逃げて行くのを見掛けましたが人殺しの其場所へ落ちてあつたる傘が證據になつて、入牢となり、一旦事は濟んだれど傘をさゝずに長庵が其朝濡れて歸つたが、不思議な事と思ひましたが、迂濶な事も申されず、それから樣子を見る所日にまし募る惡事の段段、それ故あいつが仕業だと、この忠藏は思ひます。

りよ　すりや、あの折も淚をこぼし眞實らしう歎きしも、夫を罪に落さう爲め、

道之　僞り事であつたるか。

はげ　あの長庵は根が醫者陸、早乘三次が兄弟分で賣つた娘の客を誑し、五十兩取つたとやら。

ぐつ　國から娘に逢ひに來た重兵衞の女房が、中田甫で殺されたも、これも彼奴等二人が仕業。

りよ　扨はいよ〳〵長庵が仕業と知れた上からは、

道之　とりも直さず親の敵、

りよ　倅、來やれ。

〽戸棚に隱す嗜みの一腰さすが武士の妻、倅もともに駈出だす、

ト戸棚より兩人脇差を出し、つか〳〵と行くを忠藏留めて、

忠藏　こりやお二人には血相替へ、何れへお出でなされます。

りよ　無實に死せし夫の敵、麴町へ尋ね行き、

道之　村井長庵を討つ心。

忠藏　いやお心逸るは御尤もだが、それは惡い御了簡、今お二人で踏ん込んでもなか〳〵、己が殺したと容易に言はぬ村井長庵。

りよ　それぢやというて現在の、

道之　敵と知れた上からは、

忠藏　はてめつたな事をおつしやつたら、却つて此方が逆ねぢに、どんな難儀にならうも知れぬ、急く所ではござりませぬ。

兩人　それぢやというて。

忠藏　まあ〳〵お待ちなされませ。

へ言ふに親子は是非なくも、行くに行かれず拔きかけし鯉口納め座に直り、

りよ　何をいふにも女の事、伜といふてもまだ若年、どうしてよいやら悪いやら、勝手知れざる町家の作法、

道之　力と頼むは忠藏殿。

忠藏　袖振合ふも他生の縁、知らぬ者でも頼まれたら後へは引かぬわしが氣性、まして以前はお出入の鹽冶樣の御家來なれば、及ばずながら忠藏がお二人樣の腰押なし、旦那樣の御無念の晴れる樣に致しませう。然し相手の長庵は一筋繩で行かぬ奴、爰は一番高びしやにお上の力をかりにやあ行かない、當時仁者と名の高い大館樣へお願ひ申し御詮議受けたら御名智に蛇の目を灰汁で洗つたやうに、善と悪とは分かります。

はげ　こりやあなるほど親分の、

ぐづ　一點張りが上分別だ。

りよ　すりや此由を大館樣へ、

忠藏　お願ひなさればその時は、證據人に忠藏が出る所へ出て長庵を、罪に落して旦那樣の汚名を雪いで上げませう。

りよ　今日はいかなる吉日か、紛失なせし短刀の在所の知れし其上に、又もや夫の敵が知れ、

道之　久八といひ、忠藏殿、力を得しも夫の導き。

りよ　是からとつくり相談なし、夜が明けたらば大館樣へ、

忠藏　願ひでるにも勝手知らねば、

りよ　そりやあ氣遣ひなされますな、手引はわしが致します。

ト此以前より、下手へ五郎兵衛出で、

五郎　願ひ事なら家主が、

りよ　いや、こなたは頼まぬ、

五郎　直訴は御法度、

忠藏　えゝ默つてござれ。

ト忠藏五郎兵衛を突廻す、おりよ思入あつて、

りよ　嬉しや日頃の、

ト向うへ思入。

五郎　願ひが叶ふか。

ト寄らうとするを、

りよ　えゝ、それ所かいな。

ト突倒す、是にて火鉢の土瓶ひつくり返り、五郎兵衛の頭灰にて眞白になる。

忠藏　いや、ひどい灰神樂だ。

〽勇み勇んで、

ト おりよ道之助向うを拜み、嬉しき思入、忠藏手拭にて灰を拂ふ、五郎兵衞寄らうとするをはげ松ぐづ市押へ附ける。此見得三重にて、道具元へ戻る

（六右衞門宅の場）――本舞臺元の道具、此處に以前の久八に六右衞門詰寄り居る、矢張三重にて道具留る。

〽入る月や秋の習ひの空よりも、身の雲晴れぬ久八が替りし姿見るに附け、伯父は涙にくれながら、

六右　最前そちが持つて行つた息子殿から貰うた金、一寸爰へ出してくりやれ。

久八　さあ、あの金はよんどころなう、

六右　え、どうぞしやつたか。

久八　はい、親父樣の御恩になつた藤掛樣の御新造樣、若旦那樣にお目にかゝり、話せば長い事ながら、其日の煙も立てかねる御難儀を見兼ねまして、お貢ぎ申して歸りました。

〽聞くに六右衞門口あんごり、

六右　あゝそれは殘念な事をした、貰うた金を返した上、言分言はうと思うたに

久八　なに、あの三兩の金を返し、言分言はうとおつしやるは、そりや誰に、

六右　誰でもない、千太郎殿に。

久八　そりや又、どういふ譯あつて。

六右　これ久八、おりや其方がいとしいわいの、忠義一途な心から千太郎殿の難儀を引受け、年來溜めた給金に二葛籠の着類迄水になしたる甲斐もなく、千太郎殿は今もつて廓通ひをさつしやる故、最前貰うた金を返し、伊勢五へ行つて一理窟言はねば腹がいぬわいの。

久八　其御腹立は御尤もではござりまするが、言ふのは何時でも言はれます、まあ／＼お待ち下さりませ。いつぞや若旦那に私が御異見申した其時に、再び廓へ行くまいと堅い御誓言をなされましたれば、よもやおいでなされますまい。大方それは人の口、無い事もある樣に言ふのが習ひでござりまする。

六右　いや／＼さういふ譯ではない、こなたに金の罪を着せ、知らず顏して今日迄過ぎ、いつ返すか知れもせぬ反故同然な證文に、三兩ばかりな金を添へ、持つて來たが

腹が立つ、まだ其上にまざ〳〵しう廓へ足は向けぬなどと口先ばかりの眞實顏、外へ出たなら舌なと出し、笑うて行つたであらうと思や、おりや悔しうてならぬわいの。

久八　若旦那に限つては無い事とは思ひますが、その樣におつしやりますには、何ぞ證據がござりますか。

六右　最前見世に落ちてあつた女郎から來た是此文、證文を出す其の時に落して行つたに違ひない。

ト差出す文を久八は、不審ながら手に取り上げ、

久八「千太郎さま參る、小夜衣より、」

ト扨は眞實と打驚き、思はず開き見る文は、文字もやさしき小夜衣が、筆の命毛二世かけて比翼と契る鳥の跡墨の光りの濃い中に、今宵來いとの迎へ文、卷納めても久八が納め兼ねたる胸の内、

ト久八此中宜しく文を讀む事あつて、口惜しき思入にて、

そんならいよ〳〵今もつて、廓へおいでなされますか。え丶情ない若旦那、あなたを誠のお人にしようと、數年勤めし勤功を捨て丶此身に罪を負ひ、伯父ぢや人に引きとられ、身すぎ世すぎに恥を捨て、しがない元手で紙屑買ひ、貯へとてもあらざれば養父が勤めし御主人が難儀を見ながら救はれず、是も誰ゆゑあなたゆゑ、此久八に是程に艱難苦勞致しますを、不便と思うては下さりませぬか。そりやどうよくでござります。

ト忠義一途に久八が、思はず伯父の胸づくし、ぐつとしむれば六右衞門、

ト久八悔しき思入にて、六右衞門の胸づくしを取り、こづく。

六右　あゝこれ、喉がしまる〳〵、放してくれ〳〵。

久八　いえ〳〵放しませぬ。

六右　あゝこれ、死ぬといふに〳〵。

久八　假令糠に釘にもせよ、今一應若旦那に、逢うて異見を言はにやあならぬ。

六右　これ久八、おれぢや〳〵おれぢやわいの。

久八　おゝ腹立さぎれに、ついうつかり、眞平御免。（ト辭儀をなし、手を上げるを木のかしら。）下さりませ。

ト久八向うへ思入、六右衞門は胸をさする。時の鐘草き合方にて、

ひやうし幕

七　幕　目

日本堤浄瑠璃の場

（浄瑠璃）蘆の野や顔撫で揚る夢ごゝろ　恨葛葉濡衣　（岸澤連中）

〔役名――紙屑買久八、早乗三次、貝坂ノ忠藏、伊勢屋の息子千太郎。丁子屋の遊女小夜衣、其他。〕

本舞臺一面の淺葱幕、柳の釣り枝、下の方樹木の張物。爰にひよろ八、前幕の紙屑屋にて立かゝり居る。是を太助紺の前垂尻端折り、若い者の裝にて留めて居る。此見得禪の勤にて明明く。

八　これさ〳〵、此人は、わしを引張つてどうするのだ。

太助　どうもかうもいらぬから、まあ一寸待つて下せえ。

八　待てといふなら待ちもしようが、此日の短いのに今にもう日が暮れます、用なら早く言ひなせえな。

太助　おゝさつき賣つた紙屑に入用な物があるから、どうぞあのまゝ返して下せえ。

八　なに、あの紙屑を返してくれ、お氣の毒だが御勝籠へ一緒に明けてしまつたから、どれがどうやら分らねえ。

太助　どうして〳〵大事の書附が入つて居るから、返すことがならねえなら一寸見せてくんなせえな、ありせえすりやあ其代り、お禮に一合買ひますよ。

八　酒と聞いちやあのがせねえ、それぢやあ此處へ明けるから、有るかねえか御覽なせえ。

ト紙屑を舞臺へあける。

太助　こりやあ有難うござりまする。

ト太助選り分ける。

八　どうだね、有りましたか。

太助　有りました〳〵、是が入用でござります。（ト反故を開き見て）「浄瑠璃名題――」（ト讀んで）此連があるなら見せて下さい。

八　その連は是だらう。（ト反故を開き）東は和田倉八代洲川岸。

太助　そりやあ江戸方角の手本だ、太夫の名を書いたものだ。

ト又反故を取つて、

八　おツと、太夫の名ならこれだ。つる田舍太夫旅宿。

太助　そんな名ぢやあないはずだ、えゝこりやあ御師の所

書だ。これだ〳〵。（ト反故を開き、）「淨瑠璃太夫、岸澤
――」
ト太夫連名を讀む。ひよろ八又反故を開き、
八　「三味線、」
太助　おゝ、あつたか〳〵
八　「三みせん堀、七つ藏の向う曲つて、角から三軒目、一
太助　えゝそんなものぢやあねえ。（ト又開き、）「三味せん
堀、」えゝおれまで引込まれた「三味線、岸澤式佐、上調
子岸澤――、相勤めまする役人、」
八　おつと、その後はこれだ。
ト反故を開き、
太助　「相勤めまする役人、中村福助、坂東三津五郎、」
八　「市川米十、中村鳴藏樣。」
太助　こう〳〵そりやあ違つたぜ、こんな所へ出る顏でも
なし、樣の附いて居るのはをかしいぜ。
八　あゝ違つた〳〵、こりやあ流質の書出しだ。
太助　えゝ外聞の惡い。
八　是だ〳〵。（ト反故を開き、）「中村鶴藏、市川小團次。」
太助　やれ〳〵嬉しや、是で殘らず揃つた。
八　さあ約束で、一合買ひなせえ。

太助　なに、これを讀めば用はねえ、酒を買つてたまるも
のか。
八　えゝ、それぢやあ嘘か。
太助　知れた事よ、早く仕舞つて引つこみねえ。
ト太助上手へ入る、ひよろ八反故を籠へ入れ、
八　いやとんだ目に逢ふものだ、然し只ア引込まれない。「い
よいよ此所淨瑠璃初まり、その爲口上さやう。」屑はご
ぜい、屑はござい。
ト禪の勤にて呼びながら上手へ入る。鳴物打上げ、知
らせに附き淺葱幕を切つて落す。

（日本堤の場）――本舞臺正面高二重の土手、後田町
より斜に吉原の家根を見たる夜更の遠見、上の方に
柳の立木、舞臺前に芒の土手板、流の波板、總て吉
原土手下の體。下手淨瑠璃臺に岸澤連中居並び、道
具納る。と直に淨瑠璃になる。
〽引四に月夜の里に戀の闇、忍び廓をおちこちの人目堤
を横ぎれて、誰そやの灯り細道を、たどり〳〵二人連、
ト本釣鐘合方にて、上手より土手の上へ千太郎、おし
よぼからげ一本差し頰冠り、小夜衣部屋着の裝手拭を

吹流しに冠り出て來り、後へ思入あつて、

〽濡るゝもすその露ならで、心證く身は雨空に亂れて渡る雁さへも、若し追手かと驚かれ、顫ふ足元音を忍ぶ秋の蛙の聲かれて、田川の水の淺き緣、死ぬる覺悟も癪ゆゑに歩み兼ねてぞ立ちやすらひ、

ト此中土手より平舞臺へ下り、振あつて千太郎癪の差込む思入、胸をおさへ。

千太　あいたゝゝゝ。

小夜　もし、どうかしなさんしたかいな。

千太　掟嚴しい廓を脫け、やれ嬉しやと思うたら、心のゆるみに持病の癪が、あいたゝゝゝ。

ト千太郎胸を押へ、下に居る。小夜衣介抱しながら、

小夜　こりや困つたものでござんすが、なんぞ藥はござんせぬかいな。

千太　此世で添はれぬ身の上に死なうと覺悟極めし故、藥を呑むにも及ばねど、せめて二人が死所と定めし小梅の菩提所迄、どうぞ早く行きたいものだが、行くに行かれぬ此の差込み、

小夜　さうして此處らにからして居たら、追手の者に捉へられ、いかなる憂目に逢はうも知れず、

千太　小梅村迄行かれずば、どこで死ぬのも同じ事、

小夜　此處を二人が最期場に、果敢なく消ゆる土手の露、

千太　秋の夜永に引きかへて、契り短き身の上に、

小夜　西へ傾く月代を、

千太　よすがとなしてあの世の旅、

小夜　今更いふも愚痴ながら、

〽そもや初會の其日より勤め放れてしみ〴〵と、末の末まで言ひかはし、樂しみ逢うた甲斐も無く、書く書置もにじみ勝ち、薄い契りに今日の今、筆の命毛切れ果てゝ硯の海の御主人に恩も送らず死ぬるのも、みんな定まる約束事、早う殺して下さんせと、言ふにこなたも苦しさ怺へ、

ト此中小夜衣千太郎を捉へ口說のもやう、始終千太郎癪を押へ苦しむを小夜衣介抱しながら、よろしくあつて、

〽そりや我とても父母へ孝も盡さで今死なば、歎きを掛くる不孝の罪、お詫は草葉の蔭よりと絞る袂の露時雨、暫し淚に暮れにける、

ト千太郎苦しさを怺へながら此中よろしく思入あつて、トヾ小夜衣と手を取交し泣居る。時の鐘。

〽鐘の音しづむ眞夜中に、往來も稀にそゝりぶし、
そゝり〽鐘が恨みのきぬ〴〵に、泣いて別るゝ明烏、
ト此中上手土手の上へ、早乘三次尻端折り頬冠りにて
出て來り、
三次 今伏見町で勘太に逢つたら、丁子屋の小夜衣が駈落
をしたといふ事だが、千太郎が連出したか、彼女アおれ
も掛合ひ、聞捨にやあならねえわえ。
〽いふ聲聞いて兩人が逃げんとなすをすかし見て、
ト三次の聲を聞き、千太郎、小夜衣びつくりなし、兩
人逃げようとする、三次之を見て、
三次 や、そこに居るのは、小夜衣、千太郎か。
兩人 えゝ。
三次 いや、いゝ所で見附けたわえ。
ト三次つか〳〵と平舞臺へ來る。
兩人 もし、どうぞ見逃して下さりませ。
ト逃げようとするを引とらへ、
三次 どうしてこれが見逃せるものか、外の者なら知らね
え事、おれが判の入つて居る小夜衣、連れ出されてたま
るものか、二人共丁子屋へそびいて行くから覺悟しろ。
千太 (おど〳〵しながら、)もし三次さま、御尤もではご
ざりますが、添ふに添はれぬ身の上に、死ぬる覺悟で廓
から連れて逃げたる此小夜衣、
小夜 見ず知らずと言ふではなし、麴町の伯父さんと兄弟
分のおまへゆゑ、わたしは姪のことなれば、知らぬ顏し
て此儘に、
兩人 どうぞ見逃して下さりませ。
三次 いやあんまり呆れて物が言えねえ、なんぼわからね
え手前達でも、よく物を考へて見ろ、大金を出して抱へ
た小夜衣、今死なれて見ろ丸損だ、其祟りは判方の長庵
とおれが難儀だ。目に掛つたは天の助け、見逃す所か二
人共貧乏ゆるぎもさしやあしねえぞ。
千太 そんならどうでも、此儘に、
小夜 見逃しては下さんせぬか。
三次 知れたことだ、そびいて行きやあ丁子屋からしつか
り金になる仕事だ、こんな事がこつちの附目だ。
千太 さう聞く上は、
兩人 ちつとも早く。
ト兩人行かうとするを捉へ、
三次 うぬ逃げるとて逃さうか、長年季のある小夜衣を連
出しやがりやあ勾引だ、じたばたすると敲き殺すぞ。

ト千太郎を突倒す、小夜衣寄らうとするを三次引附ける、千太郎起上り、

千太　それぢやというて此儘に、

小夜　どうまあ廓へ歸られませう。

三次　そりやあうぬしが心柄だ、さあきり〳〵とうしやあがれ。

〽小肱取つて引立つるを、やらじとすがり留むる折柄、更けて田町の騷ぎ唄、

きやりくづし〽船の通路おせ〳〵やつさつさ、好いた女郎衆のまねく目元にすとんと打込んだ、好いたら其氣でこんえもしよ、さつさよい聲かけろ、よんやな。

ト此中在鄕の屋體囃子を冠せ、三次小夜衣を引立て行かうとするを千太郎さゝへる。三次あり合ふ竹の折にて千太郎を打つ立廻り宜しくあつて、

〽在の囃子に紙砧、うち合ふ三次千太郎、これまあ待つてと小夜衣が留めるもかよわき女郎花、情嵐の一と吹に折れて倒るゝ萩芒、後白露と、

ト三次立廻りて千太郎をひどく打つ、これにてうんと悶絶なし倒るゝ、小夜衣はつと思つて寄らうとするを三次無理に引立て上手へ入る、風の音になり、

〽又一と吹きの小夜風に雨雲運ぶ秋の空、替る習ひの男氣も替らぬ忠義久八が、只一と筋にあゆみ來て、

ト花道より久八着流しにて思案の思入にて出て來り、花道にて、

久八　宵に土手で若旦那を見掛けたゆゑに後を附け、茶屋の見世迄行つて見れば、女郎が先に待つて居て現たわいもない有樣、直に踏ん込み御異見をしようとは思うたが、滿座の中で若いお方に恥かゝすをも本意ならねば、歸りを待つてと此土手を宵から往つたり來たりしたが、待退屈する中に今打つたのは八つの鐘、七つ過には歸られよう、是から土手に待合せ、逢うて恨みを言うた上、とつくり異見を言はにやならぬ。

〽小川に掛ける橋の名の神ならぬ身にそれぞとも、知らで躓く緣のはし、

ト久八思入あつて舞臺へ來り、思はず千太郎に躓きびつくりなし、

これは〳〵いづれのお方でござりますか、心せきゆゑ思はぬ粗相、眞平御免下さりませ。

ト此中紙砧の入りし合方、千太郎うんと心附く、久八心得ぬ思入にて、

久八　この往來に今時分、寐て居らるゝは生醉か。や、息づかひの樣子ではどうやら病に苦しむ樣子。もし、どうかなされましたか。

〽抱き起して取形の似たはもしやと見る折しも、雲間をいづる月影に顏さし覗きびつくりなし、

やあ、若旦那でござりますか。

ト千太郎心附き、久八にむしやぶり附き、

千太　これ、小夜衣はやらぬ〳〵。

久八　もし、氣をしつかりお持ちなされませ。

千太　や、さういふ聲は。

久八　久八でござりまする。

千太　えゝ、(ト久八を見てびつくりなし、)おゝそなたは久八、あ面目ない。

〽面目なやと逃出すを、引きもどしてつれ〳〵と、涙もつ目に顏打ち見やり、

ト千太郎逃出すを久八引留め、千太郎の顏をうらめしさうに見て涙を拭ひ、

久八　もし若旦那、此久八の顏を見て逃げる樣なお身持に、何でおなりなされました。

千太　え。

ト蟲笛入の合方になり、久八千太郎を引すゑ合方になり、

久八　こなたはなう、今更いふに及ばねどお前樣は私がお世話をなした御養子の御身ゆゑ、一と方ならず思へばこそ、五十兩の質物も此身に罪を引受けて、十二の年から勤めたるお家を不首尾に出ましたも、惡い御名を附けまい爲め、伊勢五の家の番頭は見掛によらぬ不埒者、紙屑買つて步くのは心がらぢやと人樣に芥の樣にいはるゝとも、お前樣さへ御辛抱にて御家督相續なさるれば、盡せし忠義も顯はれて又元々の主從になられませうと、それのみを朝夕願ふ甲斐も無く、これ此樣な御身持ではあの物堅いお家故、明日をも知れず御離緣におなりなさるのは知れた事、さうなる時は富澤町の御兩親さまへも私がなんと言譯がなりませう。なんぼお若いお心でも、よもや再び廓へはお出でなされぬ事とのみ思ひましたは田舍氣質正直すぎたが今での後悔、お前樣より十から年を取つたる久八を、よくも詐して下さりました、實に悔しうござりまする。

ト久八よろしく思入。千太郎術なき思入にて、

千太　その腹立は尤もぢやが、さら〳〵詐すの僞るのと、

そんな心は微塵も無い、色に迷ひし若氣のあやまり、久八そなたへ言譯は、此場に於て、

へ差したる一腰拔くより早く、既にかうよと見えければ、久八あわてゝ押止め、

ト千太郎脇差を拔き、死なうとするを久八留めて、

久八　えゝめつそうな事なされますな、お前樣に命を捨てさせ、此久八が悦びませうか、どうぞして誠のお人にしたいばかり、此樣に夜の目も寐ずにまご／＼と行きつ戻りつ此土手を、幾度歩くか知れませぬ。今お前樣に死なれたら是迄盡した忠義も水、短氣な事して下さりますな。

千太　いや／＼わしはそなたに逢はずとも、今宵は死ぬる覺悟の身の上。

久八　え、そりやまあいかなる譯あつて。

千太　さあ是迄隱して遣うた金のたゝまり、二つには思ひ切らうと思うても、いかなる前世の惡緣か思ひ切られぬあの小夜衣、所詮此世で添はれねば、長い未來を樂しみに心中せうと覺悟を極め、(ト右の手で懷より書置を出し)これ、此樣に書置迄互ひに持つて廓を脫け、爰まで首尾よく逃げのびしが、思ひ掛けなく長庵が一つ穴なるあの三次に、見咎められて小夜衣を引戻されるをやるまいと、爭ふはずみに脾腹を打たれ、氣を失なうて後は知らねど、たしかに三次が小夜衣を連れて行つたに違ひない、さすれば明日は我家へも彼奴が來るに違ひない、最早家へは歸られねば、せめてそなたへ言譯に、此處で死ぬのが此身の本望、どうぞ留めずにくりやいの。

久八　知らぬ先は是非もないが、此久八の目に掛り、なんであなたが殺されませう。

千太　それぢやというて生きては居られぬ。

久八　めつたに放しは致しませぬ。

へ留めるはずみに久八が持つたる刄過まつて千太郎が脇腹へ、ぐつと突きこむ急所の深手、たまぎる聲に打驚き、

ト此中久八千太郎の持つて居る脇差を取上げる、千太郎それを取りに掛るをやるまいと爭ふ立廻りに過つて久八千太郎のわき腹へ突込む、これにて千太郎アッというてどうとなる、久八びつくりして、

久八　もし若旦那、どうぞなされましたか、

千太　(疵口を隱す思入にて、)いや／＼案じるな、どうも仕はせぬ／＼。

久八　や、五音の調子呼吸の狂ひは(ト千太郎の疵口と我持つてゐる脇差の切尖を見てびつくりなし)こりや過つ

て若旦那を、やゝゝゝゝ。

〽あきれて膝はわな〳〵と、目もくれなゐの草紅葉血しほにすゝる足も空、苦しむ手負を介抱なし、

ト此中早めたる合方、蟲笛、久八千太郎を我殺せしといふ思入あつて、わな〳〵顫へ、齒の根も合はぬ思入、千太郎疵口を押へ苦痛を怺へる、久八介抱なし、

もし若旦那、お氣をたしかにお持ちなされませ。あなたにお怪我をさせまいと、留めるはずみに過つてひよんな事致しました、こりやどうしたらようござりませう。

千太 あ、いや〳〵そなたの知つた事ではない、元より死ぬる覺悟といひ、我と我手に突いた疵、是で死ねば我本望、必ず〳〵構うてくれるな。

久八 いえ〳〵あなたぢやござりませぬ、此久八が取る拍子突いたに違ひござりませぬ。

千太 まだまあそんな事をいふか、先非を悔いて自殺する身のいひわけを親達へ、我に替つて言うてくりやれ。

〽言ふ息さへもたえ〳〵に野末によわる秋の蟲、哀れをそへる道哲の鉦鼓の聲もすみ渡り、

ト此中千太郎苦しき思入にて水を呑ましてくれといふ、久八手負に水は呑まされぬといふ思入、千太郎手を合はして頼む、一ッ鉦になり、

〽なむあみだ〳〵〳〵。

ト千太郎段々によわり、うつとりとなる、久八抱起し耳へ口をよせ、

久八 若旦那々々、千太郎さま〳〵。

〽あの世を照す常燈の灯りも消ゆる夜半の露、果敢なく息は絶えにける。

ト千太郎よろしく苦痛の思入にてばつたり落入る。久八どうとなり、

こりやもう事は切れたのか、ほい。

ト思入、是より竹笛入りの合方になり、久八途方に暮れし思入にて、

あ忠義一途に凝固まり、怪我とはいへど御主を殺し、今は不忠となつたる久八、身の言譯は此場にて腹かつさばいて死出三途、若旦那の御供なさん。(ト思入あつて)とは言ひながら追腹はまことの人のする所業、現在此身は主殺し、我が手に死んでは今日の天道樣へ濟まぬ科、是よりお上へ訴へ出で、三尺高い木の空で主殺しの御成敗受けて死ぬるが罪亡し、(ト思入あつて、千太郎の亡骸へ向ひ)もし若旦那さま、遲かれ早かれ私も後より冥土へ

参りまして、此身のお詫を致しまする。
〽今は詮方亡骸へ手向の水も宵の雨、木々の雫に袖濡れて唱ふ六字の無常音、
ト久八鼻紙を流れの水へ浸し、千太郎の口へ絞りこみ泣きながら手を合せ、
南無阿彌陀佛々々々々々々。
トはあゝと泣く、この途端本釣鐘を打込み、久八きつとなる、此以前より上手にて三次窺ひ居る。
ありやもう七つ、夜明けぬ中に。
トつか／＼と土手の上へ上る。
三次　うぬ、人殺しめ。
ト後から組附くをふり拂ひ、一寸立廻る。爰へ上手より忠藏着流し一本差し早歸りの心にて出て來り此中へ入る。三次胸ぐらを取るを、忠藏ふり拂ふ、久八行かうとするを忠藏三次と心得引戻す、これより忍び三重もやうの合方、本釣鐘にて探り合の立廻り、此中三次以前の遺書を拾ふ、是を忠藏引附けて取る、久八脱れて身仕度をなす。
〽佛の誓ひ頼みなき罪科重きおのが身は、心は鬼に責められて今に地獄の苦しみと、
ト此中立廻りよろしくあつて、久八つか／＼と花道へ行く、舞臺には忠藏三次引張りの見得、
〽奉行所指して、
トばた／＼三重本釣鐘にて久八花道へ入る。忠藏三次を引附け書置をすかし見る、此見得よろしく、

幕

八幕目大詰　町奉行白洲の場

（役名 ― 村井長庵、紙屑買久八、早坂ノ忠藏、早乘り三次、甲州屋吉兵衛、六右衛門代與兵衛、大舘左馬之介義晴、伊勢屋五兵衛、道之助。道十郎後家おりよ其他。）

（白洲の場）― 本舞臺四間通し白木造り高足の二重家體、欄間上板屋根の庇を見せ、正面大形の襖、眞中に白洲階子を掛け、上の方板羽目、大戸口出這入の潜戸、下の方板羽目、爰に捕繩手錠掛けあり總て町奉行所白洲の體。宜しく飾りつけ爰に下役人〇△

○　の兩人黒羽織一本差にて左右に控へ居る見得、時の太鼓にて幕明く。

△　今日の御白洲は、先達てお召捕に相成りし麴町の町醫者長庵人殺しのお調べ、

△　又神田三河町伊勢屋五兵衛召仕ひ、久八主殺しの御詮議、

○　只今打ちしは八つのお太鼓、最早程なく御退出、

△　御出席の刻限なれど、萬事手配り致したれば、

○　是にて暫時控へ、

兩人　申さん。

ト やはり時の太鼓にて、下手の襖より役人◎□の兩人上下一本差しにて、書物入の箱硯箱を持出て來り、左右へ別れて住ひ、差出しの名前書を前へ置き、

◎　先刻申渡せしり、一昨年芝赤羽根にて人殺しの一條、

□　今日お直の再吟味、

□　まつた神田三河町主殺しの一件、幷に訴訟人道十郎後家りよ親子其外掛り合の者一同、

◎□　相揃ひしか。

○　御達しの通り、一同差控へさせ置きましてござります る。

◎　然らば、先づ囚人村井長庵、

□　藤掛道十郎後家りよ、伜道之助、

◎　町役人共一同、

□　呼出し召され。

○△　はツ。

ト○は上手へ向ひ、

○　囚人村井長庵、是へ引出しめされい。

ト奥にて、はあゝと返事ある。

△　(下手へ向ひ、) 藤掛道十郎後家りよ、伜道之助、一同是へ出ませい。

ト花道にてはあゝと返事する。是にて上手の奥にて牢の戸を明ける音、説教掛りの合方になり、花道よりおりよ、道之助やつし裝にて町役人兩人附添ひ出る。上手の潜戸を有け、長庵月代の伸びたる坊主鬘、好みの拵へにて繩に掛り、法被の下番繩を取り、外に二人、黒羽織の役人一人附添ひ出て、双方宜しく思入、見合つてきつとこなし。

下番　下にをらう。

ト是にて長庵は上手へ坐り、下の方におりよ、道之助住ひ町役人下手後へ控へる。

◎ 囚人町醫師長庵、
長庵 へい。
□ 道十郎後家りよ、伜道之助。
兩人 はあゝ。
□ 其外町役人共、
町役 はあゝ。
□ 一同罷出たな。
町役 御意にござりまする。
◎ 今日はお直の御裁斷、訴答突合せの御吟味、
□ 双方共神妙に御受け申し上げろ。
◎ 即刻御出席なさるゝ間、
□ 差控へ罷りをらう。
皆々 はゝあ。
ト是にて時計の音になり、正面の襖を左右へ開き、左馬之助上下脇差の拵へ袴裝の侍二人、一人は刀を持ち一人は手文庫を持ち附添ひ出て、左馬之助眞中よきところへ住ひ、侍二人後へ居並ぶ。差出しの名前書を持ち行き、左馬之助の前へ置く、
◎ 右一件の者共、殘らず召出だしましてござりまする。
左馬 おゝ、ト思入あつて差出しを見る事あつて、麹町牢河町町醫者長庵、
長庵 へい。
左馬 藤掛道十郎後家りよ、伜道之助、
兩人 へい。
左馬 其方共が願ひ出でたる儀に依つて、此方にも深き含みあつて、先達て長庵を召捕り入牢の上吟味に及べ共、白狀を致さず、依つて今日双方突合せの吟味致し遣はすぞ。
兩人 有難い事でござりまする。
左馬 こりや長庵、去る未の八月中芝赤羽根に於て、其方が妹婿百姓重兵衞を殺害致し、所持の金子を盜取りしは同町に住居致せし浪人藤掛道十郎の所業と、其砌斯波左衞門役所へ召捕はれ吟味中牢死なしたるに依つて、人殺しは道十郎と相成り、右一件一旦落着致したるを、今般右道十郎後家りよ伜道之助差添人忠藏より願ひ出でたる訴狀面の廉により、再吟味の筋これあるに依つて、先達て召捕入牢の上此程より吟味を遂げさするに、いまだ白狀致さゞる由、依つて今日双方共呼出し突合せの上予が吟味を遂げるが、有體に申せ。
長庵 はツ、恐れながら申上げまする、先達て存掛けなく

もお捕へに相成り、直樣入牢仰付けられましたる儀如何樣な事と驚き歎き居りまする中に、御呼出しに相成りお調べには、妹婿重兵衛を殺せしを私の所業であらうと度度の御詮議、此身に覺えない事は如何樣な拷問仰付けられましても、毛頭覺えござりませぬ。

左馬　豫て吟味に及べども存ぜざると申すのみ故、今日は予が直の調べ只一通りでは濟さぬぞよ、其方とても業體の事故聖賢の書籍を讀んだであらう、善惡は人の性によると云へど其元は善なるもの故、知らざるは知らざるとせよ是知るなり、過つて改むるは是丈夫のする所、臍にこたへのある事、絶體の其期に及ばゝ明白に申すが人の人たる所、是人倫の道ぢやぞよ。

長庵　此儀に付き何樣御理解仰せ聞けられまするとも、元より覺えのない事は斯波樣御役所にて右の一條お調べの砌、重兵衛が死骸の邊に捨てござりましたる目印の傘が道十郎所持の品故、全くの證據と相成り疾に御詮議の上道十郎の所業と極り、明白なる御取裁にて一旦落着に相成り、私におきましては弟が敵を取りまして有難い事と存じ居りましたるに、唯今と相成り右樣のお調を受けますは、何か私へ遺恨を差含みましたる者が、跡方もない取拵へを申上げましたるやとも恐れながら存じ奉りまする。

りよ　あゝ算へて見れば三とせ後、其傘故夫道十郎も無實にて果敢ない最期を遂げました、其詮議の折とても常に無口な夫故、長庵殿が辯舌に鷺を烏といひくるめ、終に夫を無實に殺し、まざ／＼しくもあの樣に、

道之　幼少の私故其折の御調の場所へは參りませねども、後で母より委しく聞き何のやうにか口惜しく、非業な最期は是非なけれど、侍の身にあるまじき穢れし汚名が晴らし度く親子二人が艱難、

りよ　明暮それのみ忘られず、神や佛へ祈りし甲斐に天道樣が親子の者を哀れみて、其お惠みにはからずも助けに依つて今度の御訴訟、親子二人が命に替へての此お願ひ、今長庵より申上げました傘は、夫道十郎が長庵方へ療治の禮に參りまして忘れて戻つた其傘にて、殺されし重兵衛とやらの死骸の側にあつた故、それを證據と言ひ立てられ、

道之　終に無實に陷りし父の汚名の晴れますやう、

りよ　どうぞ御慈悲のお裁きを、偏に、

兩人　願ひ上げまする。

左馬　其方共が此一件願ひ出でたるに依つて、其砌差上置きたる口書、其外取調中の書物、殘らず斯波左衛門役所より受取り調置きたるが、なぜ其砌申開きは致さぬのぢや。

りよ　其節とても私が其申譯は精々申上げましたれど、長庵が申上げます事のみを、眞實と思召して御取上げにはなりますれど、此方より申上げまする事は一向に御取用ひはなく、片手落なる御裁きでござりまする。

長庵　これ／＼婦人とはいひながら後前をも顧みず、口さがなくもよく其樣な事が言はれたもの、假初ならぬ天下の御裁、依怙の御沙汰があらう道理はない。全く道十郎がお弟を殺し金を盜んだ故のことだ。

りよ　えゝ穢らはしい、何で夫がそんな事を。

長庵　假令何と言はうとも其時申譯立難く、入牢の上の御吟味濟み旣にお仕置と極つた所を、牢死したのがまだしも仕合せ。

りよ　さあ御吟味中牢死なされしが其身の不運、まだ明かに其罪と極らぬ中に果てたる故、それなり終に惡名受け、

長庵　それはそつちの惡事の報い、それをさうとも思はずに今更何か拵へ事を企んで、御訴訟に附き此長庵を苦しめて殺さうといふ言ひ掛に、外に腰押する者が遺恨でもあつての事に違ひあるまい、天道樣がなくば知らず、落し穴へやらうと言つてもさう自由にもならぬもの、何卒此儀御賢察の程願ひ上げまする。

左馬　長庵よく承はれ、當三ヶ年前未の八月中百姓重兵衛が其方宅に止宿致し、金子を持參して麹町を出立致せしは、夜中の樣に承知したが何時であつたぞ。

長庵　へい右重兵衛が私宅を出立致しましたるは、其夜の七つ前とも存じましてござりまする。

左馬　金子を所持せし一人旅の者を、なぜ夜中に一人出立は致させた。

長庵　其お咎めで恐入りましてはござりますれども、私も其節見送りも致し遣はさうとの心組にござりましたれども、折節風邪にて臥せり居りまして、病家へも斷り他出も致し兼ねまする程、惡寒も烈しく殊に雨中の事と申し、何分步行なり兼ね實氣懸りにはござりましたれども、右の次第故是非なく見送りも致しませず、變事の後にて見送つたらば此歎きもあるまいと、只悔みましたる次第にござりまする。

左馬　それ程に思ふ義理ある弟なら、夜中は差留めて夜明

けて後には立たせぬのぢや。

長庵　其儀も精々差止めましたれども、田舎者の一徹に申出した事は聞入れませず、夜中の旅も度々致せば心遣ひは決してない、最早仕度も出來たれば是非々々出立致すと申し、止事を得ず其意に任せ出立致させましてござります。

左馬　何樣左樣な事でもあつたであらう。今其方が申すには、風邪にて其夜他出は致さぬと申したな。

長庵　へい仰せの通り、重兵衞さへ見送りませぬ事故、一切他行は致しませぬ。

左馬　むゝ、いよ／＼他出は致さぬな。

長庵　御意にござりまする。

左馬　その他出の相ならぬ者が、重兵衞が殺害されし其曉に、傘もさゝずづぶ濡に相なつて、何故近邊を歩行致した。

ト是にてぎつくりこなしあつて、氣を替へ、

長庵　いえ、へい、左樣な儀聊覺えはござりませぬ。

左馬　いやさ、風邪にて惡寒嚴しく他出致されぬと申す者が、其曉に限り、何故歩行致したと申すのぢや。

長庵　存じも寄らぬ儀を承はりまするが、決して他出は致しませぬ。

左馬　いや其方も年限經つたる事故忘れたものでもあらうが、しかも當三ヶ年前未の八月廿五日曉の事ぢやぞ、篤と勘考致して見よ、覺えがあらう、どうぢやぞ。

長庵　恐れながら、何をもつてかやうな儀を仰せあるや、私におきましては、一圓相分り兼ねまする。

左馬　こりや長庵、此方をたじらうとて證據だてを申すな。其方で申さいでも、此方で其證據見せうわえ。それ、證據人を是へ呼べ。

○　はゝ。差添人忠藏を、是へ呼出せ。

△　はつ。（ト揚幕へ向ひ、）訴訟人りよが差添忠藏を召連れめされい。

ト揚幕にてはあいと聲して時の太鼓になり、花道より忠藏羽織着流しにて腰を屈め出る、後より町役人二人附添出て來り、直に舞臺へ來り下手へ控へる。町役人は後へ控へる。

□　差添人を召出しましてござりまする。

左馬　（思入あつて、）忠藏、それへ出い。

忠藏　へい。

ト前へ進み、道之助の次へ住ふ。

左馬　其方共が一件、今日長庵と突合せ申付ける間、豫て申立てたる通り、今一應これにて長庵へ申し開けい。

忠藏　はつ有難き仕合せにござりまする。これ長庵、人は知るめえと思つて居ようが、三年後の八月廿五日は御縁日だから、わしは猶よく覺えて居る、平河の天神へ心願で明六ッ前に日參の其日は大降、人顏もまだわからねえ明方に傘なしのづぶ濡を犬でさへも怪しいと吠えたを切つて行く所へ出合せたは此忠藏、東が白んでしつかりと見留めて置いた其夜の事、赤羽根の人殺し、目印の傘故に道十郎殿は入牢と聞き、こりやあ人違ひであらう氣の毒と御檢屍の下りた其時の樣子を聞いたら、こんたは其夜風を引き出歩きはしねえと云ふ書上げをした者が、變つた裝であの明方歩かう道理はねえ筈だが怪しい事と思ふ中、道十郎殿は牢死してそれなり落着、あゝ情ねえ事をしたと思つたばかりで日を暮し、丁度今年が三年忌、是も佛の導きかおりよ殿にはからず出逢ひ、今の始終を話したら、常日頃から長庵を怪しく思つて居た所故、さういふ證據がある上は彌々夫を無實に落し殺した敵の長庵を、討つて恨を晴さうと駈出す親子を漸やく留め、それ程思ひ込んだなら、これから御上へ願ひ出て敵を取るが上分別と、證據人に私が立ち親子の愁に願はせたは男を磨くばかりでなく、以前御出入屋敷故昔の恩を忘れぬ性根、かういふ慥な證據があつては、なんと遁れはあるめえな。只此上は御憐愍の御沙汰を御願ひ申上げまする。

りよ　今忠藏殿が申上げし通り、人殺しの其場所に假令傘がござりませうとも、非道な事を致す樣な道十郎ではござりませぬ、全く長庵殿が申掛にて以前御吟味の折柄も、あの辯舌に任せまして夫が申すも私が申す事も皆打消し、あれの是のと言ひくるめ、終に夫が無實の罪にて果敢ない最期を遂げたるが親子共殘念にて、どうぞ明りが立てたいと明暮心に絶えぬ折柄、思ひ掛なく忠藏殿に出逢ひて聞きし話より、女子の淺い心から一途に逸り、長庵を一太刀なりと夫の敵、

道之　幼年ながらも武士の悴、宅へ參つて名乘り合ひ討果さんと存せしを、

りよ　忠藏殿に留められ、以前のよしみに私共の差添人になりまして御訴訟申してござりまする。何卒御上のお慈悲をばお願ひ申上げまする。

忠藏　前後の次第を考へますれば、どうあつても長庵の所業の樣に存じられます。何と長庵、男らしく斯樣々々と

申上げたがいゝではないか。

長庵　へゝゝ、誰だと思つたら貝坂で人宿稼業の忠藏か、證據といつてない事をある樣に拵へて、實しやかに言ひ並べ、此長庵を深い所へ埋めようとは意趣遺恨でもあつての事か、扨恐ろしい惡巧み、其明方に雨に濡れ歩いたなんぞとは思ひもかけねえ。そりやあ忠藏夢おやあねえか、此長庵に限つては少しも覺えのない事だ、何を馬鹿な。

〇　こりや長庵控へい、斯る證據人あつて申立てる儀を、其方は彼是陳じて、

□　白狀致さぬ此上は、獄屋へ引いて拷問さすぞ。

兩人　それでも違つて陳ずるか。

ト兩人きつと言ふ、長庵思入あつて、

長庵　へゝえ、憚ながらどの樣な假令責苦に逢はうとも、存ぜぬ事は申されませぬ。

忠藏　これさ長庵、そりやあ卑怯だ、世に惡事を働く者が一生知れずに仕舞ふなら御仕置になる者はないが、天知る地しる人知ると廻つて來るのが世に言ふ惡報、今度はどうで脫れはない此方の運の盡きたのだ、大舘樣の直の御詮議もう言ひ拔ける事はならねえ、卑怯未練に事を延ばさず、是が惡事の年明と覺悟極めて言つてしまへ。

長庵　默れ忠藏、大舘公の御前故言ひ度き事も差控へ、默つて居ればいゝかと思ひ、身に覺えない言掛を仔細らしく拵へて、其上卑怯とは誰が事だ、さういふおのれが大の卑怯だ。

忠藏　なに、此忠藏を卑怯とは。

長庵　おゝ卑怯でたい事があるものか、此長庵が生きて居て邪魔になる事があるにもせよ、今の樣な言掛をして御上へ御苦勞掛けずとも、なぜ手頸に殺してしまはぬ。男を磨く樣でもねえ、それだに依つて卑怯だといつたのだ。

忠藏　これ／＼長庵、今こなたのいふのを聞けば、何か根に持つ事があつて、ない事をある樣に申立てた樣に聞えるが、此方に對し忠藏は意趣もなけりやあ遺恨もないわ。何卒御賢慮の程願ひ上げ奉つります。

左馬　長庵、今其方が申口では忠藏が其方に何か遺恨を含み、りよ親子が訴訟に就いて事を巧みし樣にも申すが、何か忠藏より遺恨を受ける覺えがあるか。

長庵　へい、其儀は是にて申上げまするも如何なる儀と差控へ居りましてござりまするが、元より彼に遺恨を受けまする覺えは毛頭ござりませぬが、りよ親子が御訴訟へ

忠藏が差添ひまして御前に於て、只今の樣身に覺えない事を申掛け致しまするは、心得ぬ事と先刻より考へましたが、何心なく私が見ました事がござりますが、それを口外致さうかと斯樣な事にかこつけて、罪に落さう底巧み、お上を僞る横道者、憎い奴でござりまする。

左馬　ふむ、して、仔細と申すはどうぢや／＼。

長庵　へい、其儀を申上げましては、何か私が人の非を申上げる樣でござりますれば、此儀は御免を蒙りまする。

左馬　如何なる事か苦しうない、人の善惡眞僞は元より何事なりとも聞きおいて、邪正を糺し裁斷するは此方が役目、忠藏が其方を遺恨に思ふ事あらば有體に申せ、どうぢや。

長庵　再三のお尋ね故、人の非を訴へまするは私に於いては恐入りますれど、無據申しまする。餘の儀ではござりませぬ、忠藏りよ儀は道十郎存生中より密通致し居りましたる儀にござりまする。

左馬　何と。

長庵　以前同町に居りましたる故存じ怪しい儀も見受け、道十郎死後にも慥なる儀を私が見屆けましてござりまする。

ト皆々是を聞きびつくりなし、おりよは思はず前へ出て、

りよ　これ長庵殿、そりやまあ何を言ふのぢや、いかに口から出る儘とて跡形もない僞り事、凡身に覺えはない、元より我身も武士の娘夫に死なれて主とせし此方、貧苦の中に操を立て幼き小供を守り育て、どうぞ無實に死なれたる夫の汚名をすゝがんと、小供の世話と細々に續や神佛に願籠めの外に他事ない貧しい暮し、石の上にも三年と念が屆いて此お願ひ、力と頼む忠藏殿と密通せしの何のとは、おのれの惡事の詰りから、人に惡名附けようとは、思へば／＼極重惡人。

道之　母に限つて其樣な猥らな身持のない事は、朝夕側に居ります故、私が慥な證據、近所の衆の言はれるにも貞女といふはお前の母、御大事に孝行せいと云はれます世間の噂をお糺しあつても、知れまするでござります。

長庵　いや口巧者にも言合せ、よくも其樣な僞りを申立て、此長庵をお上の御手で殺さうとは、扨々恐ろしい巧み事、もう此上は何もかも打明けて言はねばならぬ。只今申上げました兩人の密通を、慥に見屆けました故、此長庵を其罪に落さうといふ彼等兩人の惡巧みにござります。

左馬　して密通せしと申すには、何か證據があつての事か。
長庵　へい慥な證據がござります。あゝ近くは三月後の事、しかも麹町貝坂の天滿屋と申す料理屋の奥二階にて密會せしを、其夜其家へ參り合せ、小用所へ參らうと廊下を通りてはからずも、おりよ忠藏兩人と顔見合せて、其時見屆けましてござりまする。
左馬　こりや長庵、其方が申立て、只見屆けしとばかりにては、其證據には相成らぬぞ。
長庵　へい、見屆けましたばかりにては、證據には相成りませぬか。
左馬　如何にも相成らぬわ。
長庵　只見屆けしとばかりでは證據には相成らぬと、只今仰せでござりまするが、しからば三ケ年以前八月廿五日の朝忠藏が私を見たと申すも、見たのみにては證據にはなりますまいな。
左馬　むゝ。
　トつまる思入、長庵せゝら笑ひ、
長庵　此儀いかゞにござりませうや。
　トきつといふ、左馬之助思入あつて、
左馬　流石は長庵道理あるその詞、予もほとんと感じ入つた、今そちが詞を證據となし、忠藏りよ兩人が密通せしと極らば、其方も忠藏の詞の如く、重兵衛を殺せしに相違あるまいな、どうぢや。
長庵　さあ、其儀は、
左馬　申開きあるか、
長庵　さあ、
左馬　さあ、
兩人　さあ〳〵〳〵。
左馬　長庵返答いかゞなるぞ。
長庵　へい。
　トちつと思入、左馬之助思入あつて、
左馬　雌雄證據の爭ひは、此處で取上げはないぞ、此上は双方とも、外に慥な證據になるべき品があらば是へ出せ。
忠藏　はつ、(ト忠藏懷中より旅日記を出し)憚りながら此品が、密通致しませぬと申す、證據にござります。
　ト出す、△より□へ取次ぎ左馬之助へ出す、左馬之助取上げ見て、
左馬　ふう、こりや旅日記と相見えるが、是を證據と申立てるは。
忠藏　其旅日記の儀は、三ケ月後會津様の御供にて奥州へ

參りましたる日記にて、只今長庵が申しましたも三ケ月後と申しますれど、私旅行中の儀は右日記にて御賢察奉願上ります

りよ　三月後には私も大病を煩ひまして、長屋の衆の厄介になりましたれば、兩隣を御詮議下さりますれば、相分ります。

左馬　ふう、忠藏は旅行致し、りよ儀は不快にてありしとあれば、如何致して密會せしか、長庵何を其方見留めしぞ。

長庵　さあ、それは。

左馬　猶密會せし證據があるか。

長庵　む〻。

　ト詰りて俯向く。

左馬　斯る言掛なすからは重兵衞を殺せしは長庵己れが所業であらう。速に白狀致せ、どうどうぢや。

　トきつと言ふ、長庵默然としてゐる。此時花道よりばたばたになり、黑羽織の下役走り出て來り、

只今三次と申す者駈込み訴訟仕り、長庵一件に附き申上度き仔細ありと達つての願ひ、此儀如何計ひませう。

左馬　お〻長庵の儀とあるからは、直に是へ呼出だせ。

△　はつ（ト向うへ向ひ、）訴へ人三次、是へ出ませい。

三次　はつ。

　ト揚幕より三次着流しにて法被の下番附添ひ出て來り、おりよの上の所へ住はせる、◎□見やりて、

○　長庵一件に附き、申上ぐる仔細ありと申立て、

□　當御役所へ駈込みし、三次とは其方か。

三次　へい、私めでござります。

左馬　三次面を上げい。

三次　へい。

　ト手を突いて顏を上げる。

左馬　其方は何れに住宅致し居るぞ。

三次　へい、其住宅と申しましても、極つた所はござりません。懇意に致す友達の所にごろついて居りますが、其中にも半月はあすこに居る長庵の所に。（ト言ひかけるを、長庵言ふなと目で押へる。）なに、隱すにや及ばねえ。大がいは長庵の家に寐泊りをして居ります。

左馬　む〻、して長庵一件に付き其方が訴へとは。

三次　人殺しがござりますから、それを申上げまする。

◎□　何と申す。

三次　此長庵が實の妹、赤羽根橋で殺された重兵衞が後家

おそよといふ者、生かして置けねえことがあるから、三兩遣るから殺してくれと長庵に頼まれましたが、丁度其折工面が悪く、二朱の金でもほしい所故、おそよを欺して家を連出し、淺草田圃で殺らしましたが、實は仕附ぬ仕事だから、薄氣味悪く其晩から何だか後が見られる樣で其怨靈に取附かれ、誰いふとなく人殺しを世間の人が知つた樣子、どうで取られる命なら潔よく名乘つて出て、お上のお仕置受けるのがせめて此身の罪亡ぼし、又長庵が召捕られ悪事が露顯致すのも、みんな死靈の祟り故先非を悔いて、今日駈込み御訴訟申上げまする。

左馬　ほゝう神妙なる其方が訴へ、悪黨だけによい覺悟、此上は長庵が悪事の條々申立てよ。

三次　申しますとも〳〵、殘らず申上げまする。

ト是を聞き、おりよ道之助、忠藏宜しく思入あつて、

りよ　よい所へ此お方が御訴訟に出て下さんした、長庵殿の悪事の次第。

道之　親子の者を天も憐み給ふのか。

忠藏　脱れようとてのがれぬは悪事の報い、忽に手の裏返す今日の今、上の御沙汰を願ふのみ。

三次　これさ長庵、さう知られえ顔をするな、黙つて居らやあ理が分からねえ。もう斯うなつちやあ仕樣がねえ、何もかも言つてしまへ己も人殺しせえしなけりやあ、まだ御息災で居られるものを手前に頼まれおそよを殺し、其怨靈に取附かれ、たうとう御上の御厄介だ、早く己が道連に友達甲斐になつてくれ。

長庵　汝が悪事に體が危ふく、日頃の恩も打忘れ、人を抱込む横道者、妹を汝が殺しておいて塗付けようとはふとい奴、飼ひ犬に手を喰はれるとはよく言つた譬だな。

三次　此期になつて卑怯な奴だ、何もかも一つ懐のおれに迄不知をきるとは、こんたもよつぽど愚に返つたの。言はざあ己がいひ上げよう三、年後に赤羽根で重兵衛を殺し金を取つたも、伊勢五の倅の千太郎から五十兩騙り取つたも、妹のおそよを殺させたも、此長庵が皆仕事。つまんだ所がこんなもの、悪事の段々並べたらどうでも死なにやあならねえ體、立派に御上の御仕置受け、切られて死ぬのが罪滅し、己と一緒に冥土へ行きやれ。

長庵　手前はそんな悪事がある故、名乘つて出て御仕置を受けるが其身の勝手だらうが、此長庵は覺えのない事、其御仕置になられるものかえ。

忠藏　其身の悪事を懺悔して訴へに出た三次殿、一つ仲間

で内幕を明けて並べて訴へても、罪に落ちねえ太い根性、
りよ　かほどの證據あるとても知らぬとばかり言張つて、重兵衛を殺しておいて、道十郎殿へ罪をぬり付け知らぬ顔なる憎い奴、ずた〳〵に切りさいなんでも飽きたらぬ長庵。
りよ　えゝ悔しい事でござりまする。
道之　おゝ悔しからう〳〵が、おれが白狀せぬ中は此儘死んでも長庵を、うぬらが敵とは言はれぬぞ。
長庵
りよ　無實に果てし夫の敵、現在此處にありながら、
忠藏　手出しもならぬ此御白洲、
道之　思へば〳〵、
三人　口惜しい。
　ト きつとなり、悔しき思入。
◎□　こりや〳〵、御前なるぞ。
◎□　控へ居らう。
三人　はゝあ。
　ト 控へる。左馬之助思入あつて、
左馬　假令長庵が辯舌を飾り、詞巧みに陳ずるとも、天下の御威光、此大館が白狀させ敵は取つて得さするぞ。
忠藏　身に餘つたる御慈悲のお詞、

三人　有難う存じ上げます。
長庵　責めらば責めろ、白狀して上の仕置を受けて死ぬのも、責殺されて死ぬのも五分だ。一分試しに切り刻まれても、言ふめえと思つたら、なに白狀をするものか、元より知らぬ人殺し、何のつけに言ふものか。
三次　これ長庵、まだ夢が覺めねえか、強情もいゝ加減にしろ、白狀しねえは立派な樣だが、己が口から白狀したのに、もう手前の罪は極つた、僅な間も痛い目をするのはたはけの行留り、おれも惡事の友達づれ、友誼甲斐に言つてやるのだ
長庵　えゝやかましい默つて居ろ、白狀しねえと云つた日にやあ骨になる迄言やあしねえ、尻腰のねえ大ははけめ。
忠藏　まだしぶとくも言募る、上を恐れぬ極惡人、
りよ　どうぞ御慈悲に彼奴を殺し、
兩人　敵をお取り下さいまし。
◎□　こりや〳〵控へぬか。
兩人　はゝアい。
　ト 宜しく控へる。
左馬　三次、其方は自身に其罪を訴へ出でしは、神妙なれども、人殺しの罪科はのがれぬぞ。

三次　へい、直訴致しますからは、人殺しの御仕置は覺悟致して居りまする。
左馬　事落着致すまで、入牢申し付けるぞ。繩うて。
」　はつ。
ト〇、宜しく三次に繩をかける。
左馬　それ、長庵を引立てゝ拷問致せ。
〇　‥立たう。
ト是にて法被の中間兩人長庵を引立てる。同じく中間兩人は三次の繩を取り、兩人を引立てる。兩人宜しく立上り、双方ちよつと顏見合せ、
長庵　へゝゝ、世間の人の噂には大館公は名奉行、勝れた智者の仁者のと評判するのは大違え、己が目からは只の人間、あんまり褒めた人でもねえなあ。
三次　これ、お互ひにもう知れた命、憎まれ口は未練だぞ。
長庵　やい三次、
三次　何だ、
長庵　地獄で逢はうよ。
下番　きり／＼歩め。
ト時の太鼓にて、長庵は上手の潜りの内、三次は下手家體脇へ、下役人下番附添ひ入る。皆々是を見送る左馬之助思入あつて、
左馬　こりや道十郎後家りよ、其外兩人
三人　はあゝ。
左馬　長庵が惡事の次第三次が訴へにて事明白、重兵衞を殺せしは全く道十郎にあらざる事分明なる上は、そち達が爲には長庵は敵故、無口惜しく殘念には思ふであらうが、天下政道の大法當人の口より白狀致さぬ其中は、其罪に行ひ難し、今日は某が手段を以て長庵に白狀致させ、恨を晴らし遣はす間、暫時の間控へ居よ。
忠藏　重々厚き御憐愍、何卒お慈悲をもちまして、
りよ　三歳の間の艱難も今日を待つたる甲斐あつて、
道之　父の仇たる村井長庵、殺した修羅の妄執を、
三人　おはらしなされて下さりませ。
左馬　あゝ佞人の詞甘き事蜜の如く、人を害ふ事利劍にも優れりと、憐むべきは道十郎、無實に死しても孝貞の妻子の爲に汚名も晴れん。
りよ　それといふのも忠藏殿が、俠氣故に願ひも立ち、
忠藏　御上の御威光あればこそ、長庵ほどの惡黨も、
道之　終には野邊に身を晒し、
りよ　鳥や獸にあさられる、

忠藏　天の御罰に引替へて、
道之　草葉の蔭にて父上は、
りよ　汚名も晴れて成佛あらん。
忠藏　でも有難い、
三人　お慈悲ぢやなあ。
ト三人宜しく思入あつて、大館を拜む。○□思入あつて、
◎□　一件殘らず立ちませい。
三人　はあゝ
ト時の太鼓になり、おりよ道之助、忠藏町役人附添ひ殘らず下手へ入る。◎□思入あつて、
◎　神田三河町久八一件、
□　殘らず是へ呼出し召され。
○△　はつ。
△　神田三河町家持五兵衞、富澤町又兵衞地借吉兵衞、飯田町萬助店六右衞門、煩ひに就き代與兵衞、
○　右五兵衞召仕久八、双方共に、
兩人　是へ出ませい。
ト上下にて、四人はあゝと答へ、上手より久八腰繩にかゝり、下番二人繩を取出る。下手より吉兵衞、五兵衞、與兵衞三人共羽織着流し、町役人六人羽織袴にて附添ひ出る。
下番　下に居らう。
ト是にて久八俯向き面目なき思入にて上手へ控へる。三人は久八を見て氣の毒だといふ思入にて、下手へ控へる、大館双方を見て思入。
◎　千太郎養父五兵衞、同じく實父吉兵衞、久八伯父六右衞門代與兵衞、
□　五兵衞召仕久八、
四人　はつ。
ト皆々辭儀をなす。
□　一同揃ひましてござります。
左馬　こりや五兵衞、其方が養子千太郎一昨夜日本堤にて、これなる久八が殺せしと名乘り出て、成敗願ふが、それに相違ないか。
五兵　はつ、御意の通り千太郎事は人手に掛り相果てましてござりまするが、久八が殺したるか、誰が殺しましたるか、其儀は存じませぬ樣にござりまする。
左馬　吉兵衞、其方は如何ぢや。
吉兵　はつ、私におきましては、久八が所業とは存じられ

ませぬ様にござりまする。奉公中にも千太郎を眞身も及ばぬ厚き世話、何故あつて殺しませう。是には仔細ある事かと、憚りながら存じられまする。

左馬　其方共が申す通り、内々取調致せしに、忠義の者と聞及ぶ、何故あつて千太郎を殺害せしと尋ぬれど、いまだ其仔細を申さず、只主殺しの成敗に行ひくれよと彼が願ひ。

與兵　これ久八殿、なぜ仔細を云はぬのぢや、こなたの伯父六右衛門殿は此事を聞くと其儘びつくりなして足腰立たず、それ故わしが代りに出たが、千太郎殿を殺したは廓通ひの事であらう。なぜ其譯を言はつしやらぬぞ。

久八　それを露に言ふ程なら、斯ういふ事にはならぬわいの。

吉兵　(思入あつて、)すりや豫々噂に聞きし千太郎が廓通ひ、それ故こなたが殺せしとか、

五兵　包み隱さず其仔細、

與兵　どうぞ言うて、

三人　下さりませ。

久八　五兵衛樣、吉兵衛樣、お目にかゝるも面目なき久八が不忠の始末、嘸やお憎しみもござりませうが、主殺しの御成敗受けまするを、お腹いせにお許しなされて下さりませ。

左馬　そりや久八、其方が願ひなれど、千太郎を殺せし仔細有體に申さねば、刑罪には行ひ難し。さあ其仔細疾く申せ。

久八　仰せではござりますが、其儀ばかりは、

左馬　仔細を言はねば政事の掟、成敗には行はぬぞ。

久八　え、すりや仔細を申上げねば、御成敗は下さりませぬか。

左馬　いかにも、

久八　あ是非に及ばぬ、此場の仕儀、

吉兵　さあ、早う仔細を、

久八　そんなら、どうでも、

左馬　さあ、有體に申せ、

久八　仔細と申すは私がいまだ主人五兵衛方に奉公致しをつたる砌、養子千太郎殿事質屋仲間の參會より吉原町に伴はれ、丁字屋の遊女小夜衣にふと馴染しが縁となり、身請をも致し度く、其小夜衣の實の伯父村井長庵といふ醫者に欺され、五十兩の金さへあれば身儘になると聞きしより、三次といへる者よりして質に取つたる短刀を他

へ預けて五十兩才覺なせしも長庵に掠め取られし其上に、右三次より短刀を請けに來られて仕方なく、千太郎殿の越度なれば此久八が引受けて、五十兩の其抵當に三十五兩の給金から二タ葛籠の衣類をば後へ殘して請人の、伯父六右衞門に引渡されしが、いがない渡世を致しまするも、お主を大事に思ふ故、私不便と思召さば必ず廓へござるなと、堅く御異見申せしに、やはり廓へござると聞き、それでは御身の破滅と存じ、又も異見を加へんと日本堤に待伏なし、廓へござるを見た故に、歸るを待つて其晩は行きつ戻りつせし折に、氣絶なしたる人に躓き介抱なせば若旦那、仔細を問へば廓から、小夜衣を伴ひて逃げる途中で判方の三次に出逢ひ、小夜衣を連れて行かれし上からは、生きて居られぬ千太郎、そなたに逢ふも面目ないと用意の脇差拔きはなし死なうとなすを止むるはずみ、此久八が過つて千太郎殿の脇腹へぐつと突込む急所の深手、呼べど叫べど情なや日本堤の露霜と消えてはかなき最期故、怪我とはいへど主殺し、御上の成敗受けざれば言譯立たぬ罪科に、我と我手に訴へ出で、御仕置受ける身の覺悟、仔細と申すは斯の仕儀。此事申し上げますれば、御法通の御刑罪、偏にお願ひ申し上げまする。

ト此中吉兵衞、五兵衞びつくりなす。大館も宜しく思入。

五兵　やあ、そんなら短刀を持出せしは、千太郎であつたるか。さうとは知らず此方と思ひ、暇を出したのみならず、給金から衣類迄引留めたのは面目ない。

吉兵　なぜさういふ譯ならば、此吉兵衞に内々で打明けてはくれぬのぢや。さうした事なら此樣な間違にはなるまいもの。

五兵　それも今更返らぬ事なれば、只此上のお願ひは、人殺しとはいひながら、

吉兵　主人を思つてした事なれば、何卒命の助かる樣、お慈悲をお願ひ、

三人　申し上げまする。

左馬　すりや、久八は千太郎が遣ひし金を身に引受け、給金衣類を殘し置き五兵衞方を立退きしか。

與兵　御意にござりまする、則ち請人六右衞門方へ引取りましてござりまする。其後千太郎殿參られ、後日の證據と久八に渡し置かれし借證文、

ト懷より證文を出す、○取つて□に渡す、□開いて大館に見せる。

左馬　こりや久八より千太郎が五十兩借受けし、後日の爲の借證文、是にて慥な證據なるぞ。

久八　（思入あつて、）一旦罪を着た上は、若旦那が御家督を相續なさるゝそれ迄は、決して誰にも言ふまいと、人の笑ふも厭はずに、伯父が世話にて紙屑買、苦勞苦艱も昔語りと樂しむかひもなき身の上、あまりお主を思ひ過し、終に已が命迄捨てる樣になりましたは、因果な事でござりまする。

五兵　おゝ尤もだ〳〵、强慾非道と世の人に言はれるのも合點で、爪に火を燈すのも家の榮えを思ふ故、餘り已が吝嗇から斯ういふ事になつたるか。今日といふ今日が覺めて、慾も得もいらぬわいの。

吉兵　久八殿の實親が聞かれたことなら、嘸や嘸、其歎きはいかばかり、我子をなくせし吉兵衞が身につまされて思ひ遣らるゝ。

ト吉兵衞五兵衞愁の思入。

久八　其實親も何くの誰やら、知らぬ此身は捨兒の悲しさ。

左馬　すりや久八は捨兒となして何歲の時捨てられしぞ。

久八　はつ、養父久右衞門が話にて、成人の後承はりましたが、此久八が當歲にて藤川在の地藏堂へ捨てられましたと申す事。

吉兵　（是を聞き吉兵衞びつくりして、）え、して、それは何年後にて、月日を覺えて居らるゝか。

久八　今年で丁度とる年も三十一年後にして、しかも極月十日とやら、

吉兵　それでは若しや守袋の中に、唐銅で鑄た觀世音と、九重の守りはなかりしか。

久八　いかにも仰しやる二品は、守の中にござりまして、親の形見に肌身放さず。

吉兵　扨はそなたは。

ト我子かと側へ寄らうとするを、

左馬　こりや吉兵衞、待て。

吉兵　はつ。

左馬　捨兒は天下の法度なるぞ。

吉兵　はつ。

ト控へる大館腹痛の思入にて、

左馬　あゝ折惡しくも先刻より、腹痛にて堪へ難い。

〔一〕　御不快とござりますれば、御裁斷は是限りにて、

〔口〕　久八一件の者共は、又候後して呼出しませう。

左馬　いや暫時休息致しなば、快くなるであらう。

○△　して、此者共は。
左馬　予が出席を待たせ置け。
○へ　はつ。
左馬　其方共は次へ立ちやれ。
しへ　畏つてござりまする。
左馬　（立上り、）こりや、暫時休息致す間、心置なう。
四人　はつ。
左馬　相待居れ。
四人　はつ。
ト辭儀なす。大館先に○□近習附き奥へ入る。○△下番は上下へ入る、皆々有難き思入にて、
吉兵　あゝお慈悲深い大館様、此場で親子の名乘りをせいと言はぬばかりの今のお詞。
五兵　えゝそんなら此方は、久八殿の、
與兵　若しや親御ぢやござらぬか。
吉兵　如何にも、わしは實の親。
久八　えゝ、すりや思ひ掛けないお前様が。
吉兵　おゝ三十一年後の事、藤川在の地藏堂へそなたを捨てたは己ぢやわいの。
久八　えゝ。

ト　びつくりなす。
五兵　扨はいよ／＼吉兵衞殿は、
與兵　久八殿の親御であつたか。
吉兵　絶えて久しき俤なるか。
久八　親父様でござりましたか。
吉兵　年來懇意にしながらも、
久八　知らぬことゝて。
五兵與兵　是はしたり。
ト兩人思入。
五兵　して吉兵衞殿は爺と聞いたが、以前は如何なる身の上なるか。
與兵　まだ當歳の幼兒を、何故あつて、
兩人　捨てられしぞ。
吉兵　話せば長い事ながら、此身の懺悔聞いて下され。この私は京の産れ、圓山近き邊りに住ひ、爰やかしこの寺へ雇れて行く料理人、二十四の時女房を持ち間もなく出來し男の子、やれ嬉しやと悦びし其甲斐もなく女房が、産後の惱に果敢ない最期、其所や此所やの貰ひ乳で、七本塔婆も忽に四十九日の忌も明き、里に遣るにも口はなく、是も此身の前厄と水兒を抱いて此江戸の知邊を便り

下る道、乳に困つて仕方なくひもじい目をさせるより、いつそ捨てゝ拾はれたら、乳も澤山飲まれようと、子育と云ふ額を賴みに地藏堂へ其方を捨て、泣々江戸へ下つて後、誓願寺の出入となり、和尚樣のお世話にて其檀家の甲州屋へ入夫に入りて出來た子が、萬之助に千太郎、二人の倅を見るに就け捨てた其方が案じられ、何處にどうして居る事と、三十一年尋ねたる念が屆いて此樣に、名乘るは盡きぬ親子の緣、よう無事で居てくれたなあ。

久八　（嬉しき思入にて、）神ならぬ身の露しらず、是迄他人と思うたるお前樣が眞實の、わしが親でござりましたか、あゝおなつかしうござりまする。

吉兵　親と云ふのも面目ない、西も東も辨へぬ水兒を捨てし此吉兵衞、まだ其頃は二十五の曉越さぬ身ながらも明暮心に掛りしが、世の譬にも言ふ通り親はなくとも子は育つと、如何なる人に拾はれて其方は人となつたるぞ。

久八　わしを拾うて下すつたは、藤川在の百姓にて久右衞門といふお人、それは／＼兩親共可愛がつて下すつた故、眞實親身の親と思ひ、我儘言うて育ちましたが、忘れもせぬ七つの年寺屋へ上り、いろはから段々子供に馴染が出來、動ともすると捨兒々々と大勢寄つてなぶる故、泣いて歸りて親達へ話せば二人も淚ながら、今日迄そちには隱してゐたが捨兒と人になぶられても仕方のないそなたの身は、七年以前十二月十日の晩に地藏堂で、拾つて來たる捨兒ぞと素性を聞いて恥かしく、其翌日からは子心にも何となく隔てが出來、寺屋へ行ても肩身が狹く、捨兒々々となぶられて、指を銜へて唾も返さず、泣いて歸るを親達も不便と思つて十二の年、こんな田舍で育つより江戸に己が弟の六右衞門といふ者が、それ相應にして居れば是へ賴んでやらうから、何れへなりと奉公して、人となつて歸つたら、いつか捨兒の名も消えて末始終がよからうと、捨てられた日の十二月十日を此身の誕生と、赤の飯で祝をなし、親子連立ち伯父樣の所へ便つて其年に、御緣あつて五兵衞樣へ十ケ年の年季奉公、不束な身を番頭に迄お取立て下されて、大恩のある其お家へ御恩も送らず剩へ、御難儀掛ける不忠な久八、三尺高く木の空で死ぬのがせめて申譯、別れ程經し親父樣に名乘るかひなき主殺し、餘計な御苦勞掛けまする。

　ト吉しく思入にて言ふ、吉兵衞も思入あつて、

吉兵　今更言つて返らねど、千太郎が廓通ひを包隱さす打明けて、言つて吳れたら親の事、この難儀は掛けまいに、

久八　なまじ庇うたばつかりに、お爲を思つて異見も言ひ、終には怪我とはいひながら、現在主人を殺せし久八、
五兵　それも名乘つて見る時は、
與兵　千太郎殿は此方の弟、
吉兵　其兄弟と知れぬ故、かゝる事にも成行きしが、訴へ出ずば内々で、其方の科にはせまいもの、早まつた事してくれた。
久八　假令兄弟なればとて、主人は主人家來は家來、ましてそれと知らぬ前、お主を殺し家來の身で生きながらへて居られませうか。
吉兵　これといふのも、此己がまだ年若に後前見ず、天より授かる賜を捨てたる罰が子に報い、
久八　三十年來明暮に尋ねし親に廻り逢ふ、其嬉しさに引替へて、
吉兵　捨てる時より猶更に、悲しさまさる今日の仕儀、
久八　いつそ親子と名乘らずば、此お歎きはかけまいもの、
吉兵　そりや己よりも名乘らずば、其方にみじめは見せまいもの。
久八　これも定まる約束にて、切つても切れぬ親と子が、
吉兵　血筋にからむ捕繩に、
久八　草も枯行く秋の末、
吉兵　涙の雨の小止なく、
久八　晴れぬ目ぶたの重き科、
吉兵　野末の露と消え行かば、
久八　逆さまながら一遍の、
吉兵　おゝ、（ト涙ながら手を取交し）伜、
久八　親父樣、（ト顏見合せ）御回向なされて下さりませ。
皆々　はあゝ。
　　トみな〳〵泣く、此とたん奧にて「御出席」ト呼ぶ、是にて上下より○へ出で來り、皆々思入あつて、
久八　やゝ大館樣の、
四人　御出席とな。
○　双方共に、
兩人　控へて居らう。
四人　はあゝ。
　　ト控へる、合方になり正面の襖を明け、大館先に近習刀を持出で來り、眞中に住ひ、
左馬　今其方共が物語、襖隔てし事故に、露には聞えざりしが、是なる囚人久八は、吉兵衞其方が實子となる。
吉兵　左樣にござりまする、三十一年後藤川在の。

ト言掛けるを、冠せて、
左馬　百姓久左衞門方へ、音信不通にて、養子にやりしか。
吉兵　はつ。
ト いひ兼ねるを、
左馬　さうであらうな。
吉兵　はつ。
ト 平伏なす。
左馬　さすれば、久八千太郎は腹は異れど、吉兵衞が胤は同一の兄弟ぢやな。
吉兵　左樣にござります。
左馬　こりや五兵衞、其方千太郎を貰ひ受け、養子の披露致せしか。
五兵　はつ、先達て致しましてござりまする。
左馬　こりや〳〵五兵衞、何を申す、老衰致して忘れしか、いまだ披露は致すまいな。
五兵　はつ。
左馬　さうか〳〵。
五兵　はつ。まだ披露は致しませぬ樣にござりまする。
左馬　養子の披露致さねば養子と云つて養子にあらず。これ久八、千太郎はそちが爲には主ではない、弟なるぞ。
久八　お詞ではござりまするが、假令私が弟に致せ、表向の披露をせねば、此五兵衞の養子ではないぞ。
吉兵　大館樣のお詞に、主でないと御意あれば、めつたな事を言はつしやるな。
久八　さあ有難い御意ながら、主でなくとも人殺し、科は脱れぬ此久八。
左馬　それとても留めるはずみ、其方が突いたるか又千太郎が突いたるか、證據なければ分明ならず、人殺しとは言はれぬぞ。
久八　左樣ではござりますが、千太郎は私が、
ト 言ひかける時、ばた〳〵になり、下手より以前の忠藏出て、
忠藏　憚りながら其人殺しは、久八殿ではござりませぬ。
○　おゝ其方は、最前の人入れ忠藏。
左馬　して、是なる久八が人殺しでないと申すは、なんぞ慥な證據あつてか。
忠藏　はつ、千太郎殿横死の砌、日本堤を通り掛り、思はず拾ひし此一通（ト紙入より前幕の書遣を出し、）これ御覽下さりませ。

ト出す、◎取つて大館へ渡す。

左馬　むゝ、こりや千太郎が先非を悔み、養父實父を初めとして、久八へも言譯なく覺悟極めし自殺の書置。

五兵　すりや千太郎は先非を悔み、

吉兵　死ぬる覺悟であつたるか。

忠藏　最前よりの一部始終、あれにて殘らず承はり他人なれども世に稀な忠義を感じて忠藏が、久八殿を助けたく思ふ折柄、禍も三年待たず拾ひし一通、役に立つべき證據故、お叱り受けるも合點で持參致してござりまする。

左馬　流石は物の頭ともなるべき程の器量あつて、仁心厚きそちが計らひ、よくぞ持參致せしぞ。

忠藏　はつ。

ト大館以前の證文を取つて、

左馬　この書置と最前の五十兩の借證文、今引合せ見る所、寸分違はぬ彼が同筆、千太郎はいよ／＼自殺、久八そちはお構ひないぞ。

久八　でも私が殺しましたれば、

ト言ひかける、大館きつとなつて、

左馬　やあ大館左馬之介義晴が、裁許を破るか、無禮者めが。

トきつと言ふ。久八平伏なし、

久八　はつ、恐入りましてござります。

左馬　それ、久八が繩目をゆるせ。

〇へ　はつ。

ト繩を解く

吉兵　大館樣の御慈悲の段々、

皆々　有難う存じ奉りまする。

ト嬉しき思入、ばた／＼になり、奥より上手へ□出で來り、

□　はツ申上げまする、怪我にて致せし事なるを、主殺しと訴へ出し久八が忠義を感じ、強情不敵の村井長庵先非を悔いて惡事の段々、只今白狀致してござりまする。

左馬　すりや、十兵衞を害せしと自身に白狀致せしとか。

□　はツ。

左馬　性は善なるものぢやなあ。

トばた／＼になり下手より、おりよ道之助出で來り、

りよ　はつ、憚りながら村井長庵白狀致しましたる上は、

道之　何卒親の敵討、

兩人　御許しなされて下さりませ。

左馬　敵討は天下の法度、許す事相ならぬぞ。

りよ　え、すりや夫道十郎を無實の罪に陷れ、非業な死をば遂げさせし極惡人の村井長庵、
道之　正しく親の敵ながら、
忠藏　討つ事ならぬは御上の掟、是非もない儀でござります。
りよ　はあゝ、
道之　ト兩人泣き伏す。
左馬　こりや敵討は相ならぬが、貞女孝子の心に愛で、死罪の砌太刀取りを、道之助に申附けるぞ、
りよ　はつ、すりや太刀取りを倅めに、
道之　お許しなされて下さりますか。
忠藏　それにて敵を討つたも同然、
三人　有難うござりまする。
久八　もし御新造樣、御場所がらを憚りて何事も申しませぬが、嘸御本望でござりませう。
りよ　久八、そなたも科が許り、何より嬉しう思ふわいの。
左馬　是にて一件落着なせば、五兵衛事は老年故、千太郎が身代りに久八を養子となし、家相續を致させよ。
五兵　あ、願うてもない其仰せ、老いても安心致しまする
りよ　すりや久八には、五兵衛殿の。
久八　私家督となりますれば、お尋ねなさるゝ短刀は、親久右衛門が御恩送りに、あなた樣へ差上げまする。
りよ　あの短刀が手に入れば、御舍弟樣へ差上げて、
道之　父上樣の汚名も晴れ、
忠藏　猶行末は忠藏が身に引受けて、御世話致さん。
左馬　只不便なは十兵衛夫婦、倅が緣に小夜衣を吉兵衛養育致し遣はせ。
吉兵　はツ、身受致して彼が家名絶えざる樣に私が、計ひますでござりまする。
久八　あ、何から何迄大館樣の、
りよ　お情厚き御裁き、
皆々　有難うござりまする。
左馬　あ、惡は滅び、善は榮え、目出度い〳〵。
皆々　はあゝ。
ト皆々辭儀をなす。太撥の時の太鼓、カケリにて、

村井長庵（終り）

初狂言慶賀
女形振袖態
茲願繁栄披
第二番目の
正本読
鈍筆も憚らず
脚色は當世の
人情談話

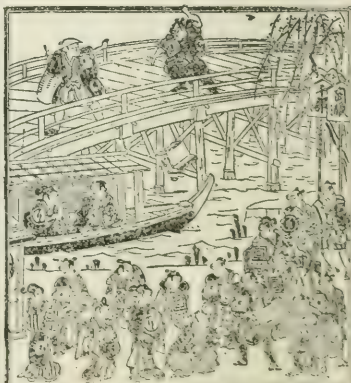
浮世を渡る橋の上人の榮華に悟の道發心ならぬ悪事の錆付身にひゞたけの鑄かけ松闇を忍びの見越の塀隣に噂の間者お吹もいつか轉寐の夢にも知で文蔵は湯治戻りの屏風の內明て言ぬが花屋の門附袖も涙の雨舍親子を導く寺門前悪念折し線香に恩義も厚き灸するゑの腹切仕組も味に藤兵衛が無理な戀路に登龍くりから傳次が男氣に半七は寶詮議の緒も絡れ掛た酒の座をお梅が粋に取持て緣をお組と宗次郎義理に迫て思切たる封印の金故身をも暗夜の眠りも覺て明の春是大切の淨るりに女夫目出度三々九度時に相生高島屋料理の獻立膳部もそろつてサテ新らしき御慶の年玉

船打込橋間白浪

三幕

流行穿本朝風俗

船打込橋間白浪（鋳掛松――三幕）

序幕

花水橋廣小路の場
同　遊山船の場

「役名。――鋳掛屋松五郎、島屋文蔵實ハ梵字ノ眞五郎、蔦ノ者くりから傳次、刀屋手代半七、六浦主膳、柴崎屋藤兵衞、森戸屋丁稚與之助、紙屑屋ぐづ八、小道具屋與市、噺家ゑん八、船頭伊之助、甘木勘藏。文藏の妻お咲、藝者おくみ、お酌おやま、其他。」

（廣小路の場）――本舞臺三間彼方見世物小屋の横を見せたる張物、上の方に髪結床、この次に開帳、千部の札などを立て、下の方に葭簀張りの出茶屋、煎じ茶の行燈、其他茶屋道具を一式飾り、よき所に床几二三脚並べ、仕出し[]〇への三人腰をかけ、茶屋女お玉盆を持ち立つてゐる。上手髪結床の内には扇床の吉、髪結裝にて若い衆〇の髪を結つてゐる。この模樣鳥追通り神樂にて幕明く。

お玉　もう一つお茶を上げませうか。

□　いやもうお構ひでない、とんだ長居をしてお見世のお邪魔をいたします。

〇　然しこりやあわたしどものせゐぢやあございませぬ、連の者が髪を結つてゐるから、そこでこんなに手間をとるのでございます。

△　ほんに姐さんにお氣の毒だ。（ト上手へ向ひ）こう、てえげえに待たせるがいゝぢやあねえか。何も清正公様へ詣るに、急に思ひたつて髪を結ふには及ばねえぢやあねえか。

◎　（床の内にて、）さうでないつて事よ、清正公様へは女が多く詣るから、思ひ附れめえものでもねえ、ねえもし、親方。

吉　その積りで女の惚れるやうに結つておきました。へい、よろしうございます。

◎　いや、有難え〳〵。

ト言ひながら此方へ來る。

[]　何だ、むだな面へ髪なんぞを結やあがつて、止せばい

いに。
○　また手前のやうに頭を荷厄介しにする者はねえぜ。
△　どうだ、其方は清正公樣が信心だから、まるツきり剃つてしまつて、蛇の目をおいて貰ふがいゝ。
△　さう惡く言ふな、待たした代りに深川亭を奢つてやらア。
二　めづらしい、大そう今日は張込むな。
○　淸正公樣だけ、ぐつと大盡氣になつたのだ。
三人　いや、惡く洒落やあがる。
○　さあ〳〵出かけよう〳〵。
四人　大きにおやかましうござりました。
　ト四人は上手へ入る。
吉　お玉さん、今日は大そうお忙しかつたね。
お玉　淸正公樣のお蔭で、有難い事でござんすわいなあ。
吉　此また淸正公樣のあらたかなことゝいふものは、わたしなども信心を始めてから、大そう見世が繁昌になりましたよ。
お玉　わたしどもゝその通りさ。
吉　まことに有難いことさねえ。
　ト流行唄になり、花道よりお組藝者の拵にて、後よりお酌おやま箱廻し喜助附いて出來りて、
お組　お玉さん、此間は。
お玉　おやお組さん、お座敷でござりますかえ。
お組　まだお客がおいでなさらないから、其間にちよつと淸正公樣へお詣りに來ましたわいな。
喜助　もし、また來るとやかましうござりますから、早くお詣りをなさいまし。
やま　わたしや怒られると怖くつてならぬわいな。
お玉　それでは今日のお座敷とおつしやるのは、柴崎屋の藤兵衛さんでござりませうね。
お組　お察しの通りさ。
喜助　よく誰でも知つてゐる、賣込んだ甚助さね。
吉　同じ金を遣ひながらさう人に嫌はれるのは、いやなこただなあ。
やま　あれでも外のお方にはさうでもないが、姉さんにばつかり意地の惡いことを言ひますわいな。
喜助　そこがよく芝居でも言ふ通り、戀のかなはない意趣ばらしといふのさ。
お組　ほんに芝居といへば、三丁目(守田座)が大そういゝといふから、氣晴しに行きたいものぢやわいなあ。

やま　その時は姉さん、わたしも連れて行つて下さいましよ。
お玉　わたくしもお願ひ申します。
お組　是非お誘ひ申すが、あゝいつ行かれることぢややら、
　ト しんきなる思入。
喜助　もし、またお迎ひがかゝるといけませぬから、お早くなさいまし。
やま　さあ、姉さん、まゐりませうわいな。
お組　あゝ、おもひでござんすな。（ト立ちかゝり、）大きにおやかましう。
お玉　左様ならおまゐりなされませ。
　ト お組先に、おやま喜助附いて上手へ入る、吉後を見送りて、
吉　たしかあの藝者衆は、雪の下の森戸屋の息子宗次郎とかいふ男と、大そういゝ仲だといふ噂だね。
お玉　さあお聞きよ、此頃ではその事がぱつとしたものだから、今言つた柴崎屋の藤兵衞さんといふお客が、あのお組さんに大層惚れてゐる故に、宗次郎さんとわけあることを聞いてから、二人を逢はせないやうに、お組さんを買ひきりさ。

吉　また相手の宗次郎といふのも、名にしおふ大家の息子だから、金にあかしたら逢へさうなものぢやあないか。
お玉　まだ息子株だから、お金が自由には遣へないわね。
吉　可哀さうなものだなあ。
　ト 此時花道揚幕の内にて、甘木勘藏、瀧川粟平、磨非藤八等三人の聲にて、「うしやあがれ、うしやあがれ」と呼びたてる聲して出來る、三人は馬乘袴大小にて、嘶家の拵への圓八を引きずり來り、花道にて、
圓八　どうぞ御免なすつて下さいまし／＼
勘藏　ならぬ、御免なせえもよく出來た、夜でもあるか晝日中武士たるものに突當りながら、たゞ言葉の詫ばかりで濟まうと思ふか。
粟平　汝がやうな奴は、以後の見せしめ。
藤八　是非會所まで連れて行かねばならぬ。
三人　さあ、うしやあがれ／＼。
　ト 詫びるを構はず引きずりて舞臺へ來る。
圓八　あゝもし／＼お侍様、暫くお待ちなすつて下さいまし、お待ちなすつて下さいまし。
勘藏　何だ、待てとは詫の仕樣でもあると申すのか。
粟平　次第によつたら許してやる。

栗平 藤八　さあ〳〵、申せ〳〵。

ト兩人圓八を突放し、三人は床几へかける、圓八は起上り手を支へて、

圓八　へい、別にお詫のしやうもございませぬが、どうか會所のところは御免なされて下さいまし、わたくしも顔を賣ります生業だけ、何だか悪いことでもいたしたやうで、人氣にも拘はりますからどうぞはやお情にお見のがしなされて下さりませ。

勘藏　なに、顔を賣る生業だ、あつかましいことを言ふ奴だ、そんな面を誰が買ふ奴があるものか。

栗平　して、いつたい汝が生業は何だ。

圓八　へい、噺家でございまする。

勘藏　なるほど、噺家といへば、先刻から手前の顔色を見るところ、どつか間拔けたぽかんとした奴だと思つたが、それぢやあこれが圓朝の弟子のぽん太だな。

圓八　常談をおつしやつちやあいけませぬ。あんな者とは違ひます、これでも場末へ行けば眞を打ちます、圓八と申す噺家でございます。

栗平　嘘言を申せ、どうも手前がぽん太らしい面附だ。

吉　（この時前へ出て、）いえ、あの人はまつたくぽん太ぢやあございませぬ、ぽんたと申すのは元わたくしの同職の者の弟子でございましたから、よく存じてをりますが、こりやあ圓八に違ひございませぬ。

藤八　こりや、同職と申すが、その方の職分は何だ。

吉　わたくしは未でございます。

藤八　えゝ年を聞くのではない、汝は何生業だと申すのだ。

吉　その生業がひつじで、髪結だと申すのでございます。

栗平　何のことだ、未だの噺家だのと、花鳥茶屋へでも行つたやうだ。

勘藏　花鳥茶屋といへば、見るは法樂で思ひ出したが、これなる者が噺家とあれば、我々が三人寄つてさいなみ栄えも致さぬ奴なれば、その替りに何なりと藝をいたさせ、それをきぼに唯今の無禮を許してやりませう。

兩人　なるほど、それがよろしうござらう。

圓八　あゝもし〳〵とんだことをおつしやります、豆藏ではあるまいし、往來なかで何ができますものか、それとも亦川長か青柳へでもお供を仰せ附けられますなら、隨分藝當をいたしてお目にかけませう。

栗平　押の強いことを申す奴、達てこの所に於て出來ぬとあれば、うぬ眞二つに。

ト柄に手をかけて立かゝる、圓八びつくりして、

圓八　あゝ待つて下さい〳〵、それはもう眞二つになりましても、命さへあることなら隨分寄席の掛持などには調法になるけれど、何を申すも命がなくては不自由でござります、どうかそれも願ひ下げにはなりますまいかな。

藤八　此奴我儘を申す奴だ、然らば命替りの成敗には、坊主にして助けてやらう。

圓八　あゝ、そいつも御免だ。

ト逃げにかゝるを勘藏、粟平捉へて、

勘藏　それ髮結、此奴めをくり〳〵坊主にいたせ。

三人　早くいたせ〳〵。

吉　畏まりました。

ト床の内より剃刀を持來り圓八に立ちかゝる、圓八頭から羽織を冠り、

圓八　それはあんまりお情ない、地藏ならあたりまへ、圓八に坊主があるものか。

吉　お前の言ふのは地獄(至極)御尤もだ。

ト無理に剃らうとするを、

圓八　あゝ致します〳〵、致しますからどうぞ御免なすつて下さい〳〵。

勘藏　藝をいたすとあらば許してやる、髮結もうよいぞ、よいぞ。

吉　へい〳〵、いやとんだ駄骨骨を折つた。

ト控へる。

三人　さあ〳〵、早くやれ〳〵。

圓八　左樣なら、坊主替りの藝當は、ちよいとまづこんなものでござります。(ト何なりとちよつと藝をして、)どうかこれで御免なすつて下さいまし。

三人　いや、面白かつた〳〵。

粟平　然し手前は噺家が本職とあれば、これから噺を一つ聞きたいものだ。

圓八　それでも高座がござりませぬから。

吉　おつと待つたり、高座代りはこの床几、さあ、この上へでやんなせえ。

ト床几を二脚合せる。

三人　さあ〳〵、早く始めろ〳〵。

圓八　とんだ目に逢ふものだ。(ト床几の上へ上り、)高座御免、(ト工藤の見得をなし、)と言つて逃げるのだ。

ト上手へ逸散に逃げて入る。

三人　いや、たはけた奴だ。

ト こゝへお玉茶を汲み持來りて、

お玉 はい、お茶をお上りなされませ。

ト三人捨ゼリフにて茶碗を取り、

勘藏 どうだ、汝も何ぞ藝をいたして見せぬか。

お玉 左樣なことは存じませぬわいな。

粟平 知らずば身共等が教へてやらうか。

ト お玉の袖を捉へる。

お玉 あれ、そのやうなことをなされますと、御入體がすたりますわいな。

ト振放すを藤八留めて、

藤八 然らば一本まゐらうか。

お玉 えゝも御常談をなされまするな。

ト振切つて出茶屋の内へ逃げて入る。

藤八 いま／＼しい、皆々逃してしまつた。

勘藏 何ぞ又面白い奴がまゐればよいな。

兩人 左樣でござる。

ト三人は茶を飲みゐる、と上手より森戸屋の丁稚與之助小さき風呂敷包みを持ち出來り、三人の前を通り下手へ行きかける、三人これを見て頷き合ひ、

三人 やい／＼、待て／＼。

ト與之助振返り見て、氣味の惡きこなしにて、

與之 はい、何ぞ御用でござりまするか。

勘藏 知れたことよ、用があるから呼ぶのだ。

三人 こゝへ來い／＼。

與之 はい。

ト おど／＼してゐる。

粟平 えゝ何をぐづ／＼しやあがる、來いと言つたら來やあがれ。

ト與之助の襟上を取つて引戻す、與之助顫へながら手を突きて、

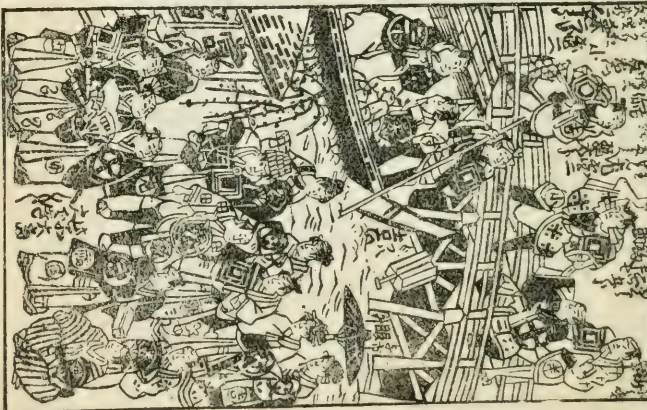
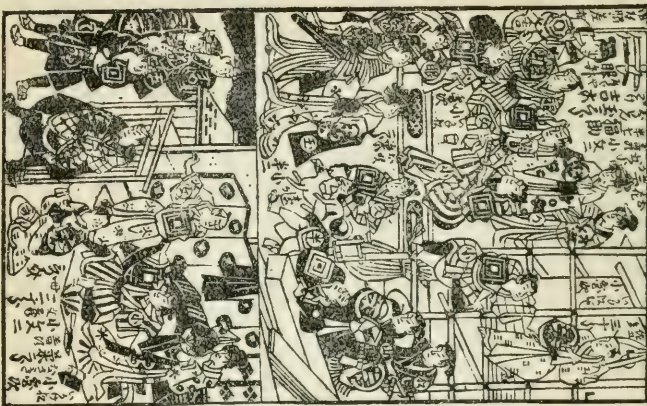
與之 はい／＼お武家樣、何を御無禮いたしましたか存じませぬが、どうぞ御免なされて下さりませ。

勘藏 なに、何の無禮をしたか知らねえ。こりや、汝やアよもや明盲目ぢやアあるめえな。

粟平 見りやあ商人の丁稚らしいから、ちつとは行儀も知つてゐる筈、

藤八 それに何だ。武士たるものがこゝに居るを、小腰もかゞめずつか／＼と、何故素通りを、

三人 いたしたのだ。

ト きつといふ、與之助手を支へて、

稿下當時の繪番附の一部

與之　それはまあお武家様へ對しまして、濟まぬことをいたしましてござりますが、わたくしは主人の用にて使にまゐり、少々戻りが遲うなり、叱られまいと急ぎ足、外見もせずにまゐりし故、あなた方が此の所においでとも存じませず、それ故無禮をいたしましてござりまするが、どうぞ御免なされて下さりませ。
勘藏　その遲くなつたのは汝が不奉公、叱られやうが追出されやうが、それをこつちで知つたことか、そりやあ言譯にやあならねえぞ。
粟平　して汝は、いつたいどこの奉公人だ。
與之　はい、わたくしは雪の下森戸屋の丁稚でござりまする。
三人　なに、森戸屋だ。
　ト顏を見合せて思入。
與之　左樣にござりまする。
勘藏　こりやこの分には濟まされぬ。
與之　えゝ。
勘藏　汝が主人へ連參り、挨拶次第で打放す。さあ我々と、
三人　一緒にまゐれ。
　ト立ちかゝるを與之助支へて、

與之　あゝもし、どうぞ主人へおつしやることは御免なされて下さりませ、お慈悲でござりまする、お情でござりまする。
　ト拜むを構はず、
三人　えゝやかましい、うしやあがれ。
　ト三人與之助を引立てる。
與之　あれえ、誰ぞあやまつて下さりませ／＼。
　トこれにて吉、お玉見兼ねて三人を留めて、
吉　もし／＼あなた方、お腹も立ちませうが相手は子供のことでござります。
お玉　御不承ではござりませうが、私どもがお願ひ申しまする。
兩人　どうぞ堪忍してやつて下さいまし／＼。
　ト縋つて頼む。
勘藏　何もそち達の存じたことではない。
三人　打ちやつておけ／＼。
兩人　さあ、さうでもござりませうが。
三人　えゝ控へてをれ。（ト兩人を突倒し）さあ、きり／＼とうしやあがれ。
　ト三人は與之助を引立て花道へかゝる、この中花道よ

り鳶ノ者くりから傳次、褞袍腹掛尻端折り、盲縞の股引にて、麻裏草履、縞物の羽織を袖だゝみにして肩へかけて、出來り、花道よき所にて双方行合ひながら、傳次三人を突廻し、與之助を圍ひて、

傳次　あゝもし〳〵お侍樣、何の粗相か存じませぬが、どうかまあ堪忍してやつて下さいまし。

勘藏　やい〳〵汝は何だ、仔細も知らす留立ひろぐ憎い奴、

三人　すつこんでやあがれ。

ト拳を上げて打つてかゝるをよろしく留めて、

傳次　これはしたりお前さん方あわしやあ仲人でごぜえますぜ、それを打たうとしなさるのは、あんまり無法といふものだ。

勘藏　いや無法とは汝がことだ。やいよく聞け、その素丁稚めはな、身共等へ對し無禮をしたのだ。

栗平　それ故我々が召連れまゐるのだ、それを横合から、

藤八　何で其奴を、

三人　庇ふのだ。

ト きつとなる、傳次思入あつて、

傳次　いえ、何も庇やあしませぬが、高が相手は子供のこと、長い短い言はねえで、わしに任して兎も角も、向うの茶屋まで。

三人　むゝ。

ト息込む。

傳次　まあ、ごぜえましな。

ト これにて三人も領き合ひ思入あつて舞臺へ戻る。傳次は與之助の手を引き舞臺へ來る、吉、お玉前へ出て、

吉　これは頭、よい所へおいでなすつて、わしどもまで安堵いたしました。

お玉　ほんにどうなることかと思ひましたに、ようござんしたなあ。

ト この中皆々よろしく床几へかける。

傳次　いや、どんだ所へ來合せて、またお見世のお邪魔をいたします。

お玉　どういたしまして。（ト言ひながら茶を汲み持來り）先づお茶一つお上りなされませ。

ト傳次と與之助とだけへ茶を出す。

傳次　もし、あなた方へもお茶を上げておくんなせえ。

勘藏　いや構やるな、呑みたくばこの方より申附け、勝手に呑む。

栗平　先づ何はさしおき、いつたいその方は。

三人　何者だ。
傳次　わたくしはこれにをりまする丁稚の主人、森戸屋の抱への鳶、傳次と申す者でござりまする。
勘藏　すりや、其方は森戸屋の抱への鳶とな。
粟平　これが所謂味方びいき、
藤八　仔細も聞かず何故に、われは此の場の、
三人　邪魔をするのだ。
傳次　決してお邪魔はいたしませぬ。また仔細と申したところが高が子供、どれほどの不調法がありますかは知りませぬが、どうかわたくしにお免じなされて今日の所は幾重にも御了簡なすつて下さりませ。
勘藏　いゝやならぬ、譯を知らぬから左樣に申すが、いぢてえあの丁稚めは我々がこゝに居るを存じながら、素通りいたした無禮者、それ故了簡ならぬのだ。
傳次　もし、そりやあちつと御無理かと存じますぜ。
三人　やい〳〵〳〵、無理とは何が無理だ〳〵。
　トたゝきたてゝいふ。
傳次　さればさ、假令百萬石取る大名のお通りでも、懷手をしてぼんやりと立つてゐるのが大都會、この膝下の有難さ、それにお前さん方はどれほどの御身分か知らねえが、お武家とせえ見りやあ町人は一々に挨拶をした日にやあ、諸國の武家の寄りどころ、この鎌倉は歩かれますめえ。
三人　むゝ。
　トぎつくり詰る。
傳次　さあ、それだから何事も言はぬが花の花水橋、水に流していざこざは御不承でもお武家樣、どうかわつちにおくんなせえ。
　トこれにて三人見合せどうしようといふこなし、粟平頷きて、
粟平　いゝや、その素丁稚の無禮といふは、まだそればかりでない。おゝさうだ、某が足へ躓きながら挨拶もいたさぬ無禮者、それ故了簡ならぬのだ。
與之　いえ〳〵、何のわしがそのやうな。
　ト言ふを打消して、
粟平　えゝ、さうだ〳〵。ト鋏にかゝつて言ふ、これにて與之助控へる。あの通りの口强情。
藤八　あれだから身共等がよいか惡いかめんばれに、引連れまゐつて森戸屋の、主人に逢つて掛り合ひを、いやなに、きつと掛け合はねば相成らぬ。

與之　あのやうにおつしやつて、わしや連れて行かれたら、どうしませう、どうしませうぞいの。

ト泣く。

傳次　何も案じるには及ばねえ、わしが斯うやつて口を利くからにやあ、どこがどこまでもお詫をしてお前に難儀はさせないから、落着いてゐるがいゝ。

勘藏　いやさう言はれゝば此方も意地、是非とも連れて行かねばならぬ所ぢやが、それとも亦其方が武士の一分立てるなら、勘辨いたすまいものでもない。

傳次　つまらねえことをおつしやいまし、家藏ならば生業だから、隨分立てもしませうが、意氣の者のわたくし風情、何で武家の立てやうを。

粂平　知らずば教へてやる、その武士の立てやうは、其方我々が、

三人　相手になれ。

傳次　なに、相手になれとは、

三人　眞劍の勝負をいたすのだ。

トきつといふ、傳次思入あつて、

傳次　そりやあ隨分いたしませうが、高の知れた意氣の者たつた一人を、お歴々三人がゝりで相手にして勝つたところが見得にもならず、また勝負は時の運とやら、どうかいふ間違ひからあなた方が負けたらば、この人だかしい花水橋、引込みがつきますめえぜ。

トちやかして言ふ、三人むつとして、

勘藏　やあ、うぬ憎い雜言、勝つか負けるか我々が腕の手の内見せてくれん。御兩所支度めされ。

兩人　心得ました。

ト三人きつとなり袴の股立を高く取り、下緒を取つて襷にかける、與之助これを見ておどろき前へ出て、

與之　あゝもし、元の起りはわたくし故、此の人は知らぬこと、お腹が立つならわたくしをお切りなされて下さりませ。

ト覺悟の思入にて三人の侍の傍へ行かうとするを、傳次留めて、

傳次　これはしたり、お前を殺す位ならこんな苦勞をするものか、あぶねえから退いてゐなせえ。

與之　それぢやというて。

傳次　はて、いゝからそこで、(ト下の方へ突きやり、)見なせえといふに。

ト與之助是非なく控へる、この中三人支度をなして、

三人　さ、支度いたさぬか。
傳次　支度をしろと言ひなすつても、わつちやあ何もねえ鳶の者、それにまた形ばかり仰山で、負けた時に極りが悪いから、逃げる時の用心に尻でもしつかり端折りませうよ。
勘藏　何のおのれを逃がすものか。
三人　覺悟をいたせ。
　ト三人拔連れて打つてかゝるを、傳次身を躱しちよつと立廻つてきつと見得、これより見世物の鳴物になり、床几を遣ひ傳次三人を相手に立廻りの內、與之助は傳次を氣遣ひうろ／＼してゐる。トヾ傳次一人の刀を打落し、これを取つて三人を峯打に打ちすゑる。この中上手より以前の圓八出てゐて、この時出茶屋の內より手桶を持來りて、
圓八　こゝらが意趣の返しどこだ。
　ト柄杓にて侍三人の頭へ水をかける、三人は這々の體にて花道へ逃げて入る。これを見て與之助嬉しき思入にて傳次の側へ來り、
與之　あゝ有難うござりまする、どうでもわたしは連れられて行くことゝ思うてゐたに、お前のお蔭で難儀も脫れて、このやうなほんに嬉しい有難いことはない。
圓八　いやわたくしも頭のお蔭で、先刻の仕返しをしてやつたので、ちつと蟲が落着きました。
傳次　然し、今日は淸正公樣の御緣日だといふに、おらあとんだ殺生をしたよ。
吉　（前へ出て、）どうして頭、彼奴等を酷い目に遭はしてやんなすつたのは、人助けにこそなれ決して殺生にはなりませぬ。
お玉　ほんにさうでござります、毎日こゝらを荒して步く悪漢でござりますが、もうあれに懲りて當分參りませぬわいな。
與之　ほんたうに、もうまたこゝへまゐりはいたしますまいな。
吉　大丈夫、頭がお手の內を見せつけておやんなすつたから、もう來ることぢやあござりませぬ。
圓八　お手の內といへば、頭は擊劍の方はよつぽどいけますね。
傳次　いや、とんだ隱し藝を見られて、面目次第もねえ。
　ト頭を抑へゐ、この以前立廻りの中より、上手へ天蓋を深く冠りし立派なる虛無僧尺八を持ち、高きぼくり

を突き、始終の樣子を窺つてゐたが、

虚無　實もつて町人には惜しき武藝、失禮ながら感心仕ッた。

　ト言ひながら前へ出る、圓八見てびつくりして、

圓八　おや、今度は虚無僧だ、此奴あ何だか強さうだ、險難だから逃げなせえ〳〵。

　ト與之助の手を引張り下手へ逃げて入る。吉は床の內へ、お玉は出茶屋の內へ逃込む、傳次思入あつて、

傳次　これは〳〵思ひがけない梵論字樣、今わたくしが無法にやつたまぐれ當り、時の機で勝ちましたを、そのやうにお褒めにあづかりましては、實にお恥しうございます。

　トこなし、この中虛無僧天蓋を取ると六浦主膳にて、傳次をよく〳〵見て、

主膳　いやなか〳〵左樣でない、若輩者と申し、且はかゝる姿の某が斯樣申さば小賢しと思召されんが、最前よりの働きをあれにて篤と見受けしところ、武士も及ばぬ身の構へ、ちよつと使ふ太刀筋といひ正しく流儀は神影にて、皆傳免許を取りたる手の內、何と左樣でござらうがな。

傳次　どういたしまして、わたくし共が何の劍術柔術のと、しん以て何にも知らぬ鳶の者、そりやあちつとお前樣の、失禮ながらお目違ひかと存じます。

主膳　何さま下世話に申す如く、能ある鷹は爪を藏すとやら、左ほどの業を持ちながら、それに誇らず包まるゝは猶々もつて奥床しい、實は愚僧も未熟にはあれど、神影流を學ぶ者ぢやが、同じ流儀のその中でも、進退早速の駈引は師匠によつて差違あれども、御身が今の太刀筋は我師と同じ構へだ、、もしや御身はその以前、武士にてはあらざるか。

傳次　（これにて思入あつて、）かくまでお目立ちまする上からは、包むは却つて無禮とやら、何をお隱し申しませう、以前は武家出でござります。

主膳　然らば尋ねんが、もしや武術の師範を受けしは、下總千葉に住居なす、神柳齋殿にてはなかりしか。

傳次　なるほどおつしやりまする通り、少しばかり先生の御指南を受けましたが、それを御存じであらせらるゝ、してあなた樣には。

主膳　不審な尤も、ちと仔細あつて斯く姿はやつせども、某事は結城の藩中六浦主膳と申す者。

傳次　えゝそれではあなた樣が。

ト言ひながら尻の端折りを下し、下にゐる。

主膳　して、御身が以前の名は。

傳次　その六浦樣の御同家たる金澤樣に御奉公せし、傳次郎と申せしわたくし。

主膳　すりや話に聞及びし、金澤文吾が家來たる、あの傳次郎であつたるか。

傳次　六浦の旦那でござりましたか。

主膳　まことにはや、思ひがけない。

傳次　とんだところでお目にかゝりました。(ト腰の手拭を取り床几の塵を拂ひ)さゝ旦那樣、そこは穢うござります。

主膳　もう構やるな〳〵。(ト言ひながら床几へ腰をかけ)いや、思はぬことが縁となり、不思議な人に逢ふものぢや。

傳次　わたくしもあなたが御幼少の砌、お國を出まして御成長の後お顏を存じませぬ故、先ほどよりの無禮、まつぴら御免なされて下さりませ。

主膳　あゝ苦しうない、苦しうない。

傳次　思ひ出せばまことに面目次第もござりませぬ、若い折とは申しながら、朋輩とつまらぬことを言募り、果は相手に疵を附け、内證で濟まぬ表向、御主人樣のお耳に入り以ての外の御立腹にて、すでにお手討にもなる所、折よくあなたの親旦那樣がお扱ひ下すつて、相手の者は宿へ下られ、わたくしめは御追放、その時死ぬる命をば助かりましたは親旦那樣の皆お情、その有難さにこの以後は決して短氣を出すまいと、失禮ながら御覽下さりませ。(ト腕をまくつて見せ)このやうに堪忍の二字を肱へ彫りましたれば、いさゝか短氣は出しませぬ。往時を思ひ出しますと、實に後悔いたしまする。

トよろしく思入

主膳　いや〳〵若い中の粗相は誰も皆ありうちのことぢや。おゝ若い中の粗相と申せば、ちとそちに承はりたいは、身共が弟主水と申すもの、先達お家の重寶赤木の短刀を失ひし故、それを詮議のその爲めに國許を罷り出しが、ふと承はればこの鎌倉にをるとのことぢやが、もしやその方心當りでもないかな。

傳次　その儀は最前より申上げようと、存じてをつたところでござりまする。

主膳　何と申す、然らば其方存じをるとか。

傳次　左樣でござりまする、その主水樣もこの如く、やはり途中でお見受け申し、あなたと逢ひ親旦那主計樣にそのみそのまゝ、もしやと存じ承はれば、案に違はず六浦の御子息、直に家へお伴ひ申し、唯今にてはわたくしがお世話をいたしまして、この雪の下の小道具渡世鎌倉屋と申す家へ短刀詮議の爲めに、御奉公をなされてござりまする。

主膳　それははや何かとその方が厄介と相成り甚だ以て氣の毒千萬、某もその儀に就て等閑ならぬ寶の詮議、實は弟の身持氣遣はしく、四五日以前當地へ着なし、所々方方と尋ねしが、雲を當なる尋ね者、いかゞはせんと思ひしに、測らずも其方にめぐり逢ひ、早速弟の住所も相知れ、まづはこれにて安堵いたした。またそれに就短刀詮議の日限り近く相成りし故、追願ひはいたしたれど願はくば一日も早く尋ね出し差上ぐるやう、その方よりどうか弟へ申し傳へてくりやれ。

傳次　委細申上ぐるでござりませう。それに又ちと手がゝりもござりますれば、及ばずながらわたくしも、親旦那樣への御恩返し、假令身を粉に碎きましても、きつと寶はお手に入れますれば、必ず御心配はなされまするな。

主膳　往時を忘れず親切なるそちが言葉、祝着に存ずる。どうかその短刀の在所が知れなば早速手前が旅宿まで、太儀ながら知らしてくりやれ。

傳次　畏まりましてはござりまするが、してあなたの御旅宿はいづれでござりまするな。

主膳　我は琵琶小路の本町にて、伊勢屋佐兵衞が貸座敷を借りをるが、して又その方が宅はいづれぢやな。

傳次　わたくしは名越通り左り手にて、材木川岸に住ひをりまする。

主膳　して、何と尋ねれば相分るな。

傳次　鳶の傳次とお尋ね下さりますれば、直わかりまする。

主膳　承知いたした、いづれ兩三日の中に改めて尋ねまゐるであらう。

卜立上る、この時上手より紺看板の中間酒に醉つたるこなしにてよろ〳〵と出來り、主膳に突當り、

中間　やい、汝アおれに何で突當りやあがつた。

卜胸倉を取る、その手を捻じあげて、

主膳　人立多き花水橋、花なきぼろに拳の手の內、

傳次　いたゞくお身の天蓋も、人目を忍ぶその巢籠り、

主膳　鶴といふ名に目出度も、測らず聞きし詮議の歌口、

傳次　その尺八の、

主膳　節なくこゝを、(ト中間を突放す)中間又うぬとかゝるをきつと引附け、あ、產神からとて鎌倉は、よほど氣性の、

傳次　え。

ト主膳中間を投退け、

主膳　いや、荒い所ぢやの。

ト唄になり主膳は下手へ入る。傳次後を見送りて、

傳次　思ひがけない方にお目にかゝるものだ。何にしても早速この事を、主水樣へお報せ申しておかう。(ト行かうとして)いや／＼行つたところがまだお歸りぢやアあるめえ、先刻ちよつと向う川岸でお目にかゝつたから、是非こゝを通りなさるに違ひねえ、それまで奧を借りて、どれ待合してゐようか。

ト出茶屋の内へ入ると、花道より與市小道具屋の裝にて、短刀の包みを持ち、刀屋手代半七出來り、花道にて與市の袖を控へて、

半七　これさ、さう言はずとも、少し待つて下さい。

與市　えゝ止しなせえな、往來中で見つともねえ。

ト振拂ひ、兩人捨ゼリフにて爭ひながら舞臺へ來る。

半七　まあ手間は取らせぬから、ちよつとこゝへかけて下さい。

ト與市を無理に床几へかけさせる。

與市　かけろならかけもしようが、こう半七さんよく聞きなせえ、お前も商賣人のやうにもない、三朱でも値のいい方へ賣るのが、こりやあ世間一統商人の習ひでござえます。

半七　さあ／＼さうでもあらうがあの短刀は、外へ賣られてはならぬ品、是非わしが買ひまするから、どうぞ人手に渡さずにおいて下さい。

與市　そりやあ今も言ふ通り、値さへよければどちらへでも早く賣つて、儲けさへすればいゝのだから長い短い言はないで、百兩手取りに、半金手附を渡しなさるなら、四日や五日は待ちませうよ。

半七　それは忝ない、そんならきつとわしに賣つて下さるな。

與市　賣りは賣るが五十兩の手附はえ。

半七　その金はあの、今といつては。

與市　出來ねえのかえ。

半七　どうかくどいやうだが、もう四五日のところを待つて下され。
與市　(半七の顏を見てせゝら笑ひ、)さりとてはお前も意氣地のねえ、家の後家か娘をだまし、借りたら直に出來るように、後家も娘も首つたけお前に惚れてゐるぢやあねえか。
半七　あゝこれはしたり、假初にも御主人樣、嘘にもそのやうな事は言うて下さるな。
與市　齒がゆいやうだ、お前のやうな腑甲斐ない人にやあ、この短刀は買へねえ、無駄なことだ、止しにしねえ。
ト立上るを半七留めて、
半七　いや／＼、どうなりとしてその短刀は、きつとわしが買ひまする。
與市　えゝ働きもねえくせに、退きなせえ。
ト半七を突退け行かうとする、この中出茶屋の內より傳次出てゐて、
傳次　あゝもし道具屋さん、ちよつと待つて下せえ。
ト前へ出る、半七見て、
半七　おゝ、こなたは傳次どの。
與市　ほんに頭、呼びなすつたのはわたしかえ。
傳次　知れたことさ。
ト床几へかける、與市傍へ來り、
與市　もし、わたしを呼びなすつたのは、何の御用でござります。
傳次　外のことでもねえ、その短刀、仔細は聞いて知つてゐるが、長くとは言はねえ二三日の所、おれが請合ふから待つて下せえ。
與市　頭こればかりはいけませぬ、かう申すとお前さんの顏をつぶすやうだが、待たれぬといふその譯は、外にお金も右から左、直に儲かる口がありますから、一日はおろか半時も待つことはできませぬ。
傳次　さう言はれたんぢやアあんまり物に愛嬌がねえといふものだ、おれも一旦請合ふからは、當人に其の金が都合が出來ざあおれも男、口を利いたが不承だから、家を賣つてもその金はきつとこなたに渡さうぢやあねえか。
半七　またわたしとてこのやうに、頭に口を利かれたればどのやうなことをしても、才覺せねばならぬ羽目、こゝの道理を聞分けて、どうぞ後生ぢや、待つて下され。
與市　何とおつしやつても、出來さうで出來ねえものは、金でござりますからね。とても亦家を賣る思召しなら、

今賣つてお貰ひなせえな、一寸脱れはまつぴらでござります。
傳次 そりやあ出來ねえ曉の話よ、今賣つちやあ居所に困らあ。
與市 それぢやあ御縁のないのだから、外へ持つて行つて賣りませうよ。
ト立ちかゝるを傳次留めて、
傳次 これさ、それを賣られてなるものか。
與市 賣るが厭なら、金を渡しなせえ。
傳次 それだといつて、今といつちやあ、
與市 出來ざあ外へ賣りませうか。
半七 あゝもし、それは、
與市 そんなら金か。
兩人 さあ、それは、
與市 さあ、
兩人 さあ、
三人 さあ〳〵〳〵。
ト與市床几を強くたゝきて、
與市 えゝ、どうしなさる氣だ。
トきつと言ふ。この以前上手より柴崎藤兵衛羽織着流し一本差し、物持町人の拵、後より以前の圓八、船頭伊之助附きて出來り、藤兵衛上の方の床几にかけ始終を見てゐて、思入あつてこの時手早く二十五兩包みを胴卷より出し、
藤兵 さあ、その金をおれが貸してやらう。
ト傳次藤兵衛を見て、
傳次 や、お前は柴崎屋の藤兵衛さん、それぢやあ今の樣子をば。
藤兵 殘らず聞いてゐましたが、男をみがくこなさんが、僅な金に人中で耻をかくのが氣の毒さ、貸してやるのも滿更にこれが縁のないぢやあなし、末始終は汝が妹お組をおれが女房にすりやあ、兄弟になるお前の難儀、勿論錢金ばかりは親子の仲でも他人だが、おれは又そんな薄情なことの出來ねえのが生附いた持前だから、それを早く道具屋さんに、渡してらちを明けなせえ。
ト金を傳次の前へおく、傳次思入あつて、
傳次 まことに藤兵衛さん、思召しは有難うござりますが、こりやあちつとお借り申し難うござりますから、御親切を無にするやうだが、どうかこりやあお納めなすつて下せえまし。

ト金を突戻す、藤兵衞少しむつとせしこなしにて、

藤兵　それぢやあこの金を入らぬといふのかえ。

傳次　なに、さういふ譯ぢやあねえ、そりやもう唾の出るほどほしい金だが。

藤兵　さあ、そんなら遠慮せずと使ひなせえな。

傳次　どうも、こればかりは。

トぢつとなる、回八、伊之助前へ出て、

回八　もし／＼頭、旦那が折角の思召しだから、お借り申しておきなせえ。

伊之　何も見得をする場所ぢやありやせんぜ、遠慮は無沙汰だ、早くお借り申して、その短刀とやらを外へ賣られねえ用心をしなさるがいゝ。

與市　わたしだつても、さう／＼と待つちやゐられませぬ、御相談が調はずば外へ賣るから、さう思ひなせえ。

半七　あゝこれ、今お前に行かれては。

與市　それだつても、のんべんぐらりぢやあ、わたしが困ります、どうぞ放しておくんなせえ。

ト振切つて行きかゝる、これまで傳次ぢつと思入あつたが、きつと領いて、

傳次　こう、待ちねえ。

與市　それぢやあ御決着が附きましたかえ。

傳次　むゝ、ト領き、藤兵衞を見て間の惡きこなしにてもぢ／＼しながら、もし藤兵衞さん、折角あなたがそれほどまでにおつしやつて下さるもの、一旦はお氣の毒と存じまして御辭退をいたしましたが、切羽つまつたこの場の仕儀。お言葉にあまへまして、少しの間拜借いたしてもよろしうございませうか。

藤兵　いゝのなんのと此方は初手から貸さうといつたに、お前がよけいな遠慮をして、おれにまで心持を惡くさせつまらねえぢやねえか。まあ／＼そりやあいゝから、早く金を渡してやんなせえ。

ト件の金を傳次へ突出す。

傳次　これは有難うございます。ト金を取り與市に向ひ、さあ道具屋さん、手附の半金五十兩、改めて受取りなせえ。

與市　はい／＼有難うございます。ト金を受取り封印を改め見て、よろしうございます、たしかに受取りました。それぢやあ短刀は後金の五十兩と引替にしますから、どうか日限を間違へぬやうにしておくんなせえ。ト言ひな

がら金をしまひ)こりやお大きに、どなたもおやかましうございました。

ト足早に下手へ入る、半七胸を撫でおろして、

半七　あゝ嬉しや、これで安堵したト思入あつて藤兵衛の前へ進み)これと申すも皆あなた様のお情、何とお禮の申上げやうもござりませぬ。まことに有難う存じました。

藤兵　何のお前あればかりの金を、御用立申したとて、そんなにお禮を言はれては却つて此方で痛み入ります。

半七　どういたしまして、お蔭様で安堵いたしてござりまする。(ト傳次に向ひ)これ傳次どの、わたしは御昨今のことなれば、お前からあなたへようお禮を申上げて下されや。

傳次　またわたくしからもよくお禮を申しますから　お前さんは早く後金の算段をなせえましな。

半七　そりやどうか都合をしようわいの。

傳次　どうかぢやあござりませぬぜ、先刻からあの一件にかゝり合つて申さずにをりましたが、お國許からお兄い様が短刀のことに就き、お前様のお行方をば尋ねておいでなすつたところ、測らずこゝでお目にかゝりましたが、それに就きましていろ／＼お話もござりますが、それは又後でいたしますから、何でも短刀を買求め、お兄い様に御安心を、おさせ申さにやなりませぬぜ。

半七　さう聞く上は猶のこと、一日も早く手に入れてそれを土産に兄者人に早うお目にかゝりたいが、またお叱りが出るであらう。(ト思入あつて)おゝお叱りといへば、あまり又遅うなると、番頭どのがやかましい故、一足先へ行きまするぞ。

傳次　さあ／＼、それでなくとも主人持は遅く歸つちやあ済みませぬ。早くおいでなさいまし。

半七　また明日逢ひまする。(ト立上り藤兵衛の前へ小腰を屈め)左様ならばあなた様、今日は存じがけない御厄介にあづかりまして有難う存じました。

藤兵　いや、またお禮かえ、どれほどのことでもしたやうだ。

傳次　それぢやあ御免を蒙むつて。

半七　どれ、お暇といたしませう。

ト上手へ入る、圓八、伊之助見送りて、

圓八　いやあの若い者も、男がいゝから女が辛抱させておくめえ。

伊之　どうも始終は引負者、請人難儀といふ野郎だ。
藤兵　さういへばあの男は、たしかお前の世話で奉公に行つたのだの。
傳次　左様でござります、ちつとわたくしが肩を入れて、世話をいたさねばならぬ義理合がござりまして、それ故お前さんにまであんな御厄介をかけまして、まことに有難うござりました。實にお禮の申し樣がござりませぬ。
藤兵　何の、あの人にしたのではなし、お前への義理でしたことだから、さう氣の毒がるには及ばない、まだ困るなら後金の五十兩も、わしが貸して進ぜませうよ。
傳次　え、あれのみならず後金を。
藤兵　さ、それが物は相談だ、その替りおれも亦ちつとこなたに頼みがある。
傳次　なに、お頼みとはね。
藤兵　外でもねえ、汝が妹お組をばおれが女房に貰ひてえ。
トきつといふ、傳次思入あつて、
傳次　そりやあ年季の明けた曉なら、隨分上げまいものでもないが、まだ自前にならぬ彼女の身體、
藤兵　それも合點、假令どれほど金が入るとも、そこに絲目をつけぬ藤兵衛、金を積んで藝者を引かせ女房にするから親代り兄のこなたに貰ひたい。
傳次　さ、それも一旦主人へ掛合ひ、また當人へも言聞かせ、何れ御返事いたしませう。
團八　これさ頭、一寸脱れを言ひなさらずと、兄の威光でうんと言はせ、旦那へ上げてしまひなせえ、藝者をさせておかうより、大家と言はるゝ柴崎屋の御新造樣になつたらば、お前が肩身が廣いぢやないか。
伊之　その緣りでお前も亦附合の多い生業だけ、どんな金の入るめえものでもねえ、そんな時にやあ大そう強味だ、そこらこゝらを考へて、うんと言つてく
兩人　しまひなせえ。
トこれを聞き、傳次少しむつとせし思入あつたが、氣を替へて、
傳次　お前方まで御親切に、妹といひわつちのことまで、思つて言つてくんなさるのは忝ねえが、おいそれとは返事のし難いことがある。
藤兵　その返事のし難いのは、お組が情人の宗次郎、大方彼奴のことだらうが、あのまた野郎に義理を立て、厭だと言やあこつちも意地、厄病神で敵とやら、百兩のものは二兩出しても、赤木の短刀をおれが貰ひ、今の二才に

も鼻を明かせる、それともに又お組に色よい返事をさせれば後の五十兩もたゞやる氣だ。

團八　こいつあ頭、

兩人　考へものだぜ

藤兵　またお組をくれずばあかの他人、緣のない者に五十兩といふ金を、無證文ぢやあ貸しておけねえ、たつた今返して貰はにやあならぬ。さ、否か應か、どつちの道ここで埒を明けてしまやれ。

ト言放し正面を向いて知らぬ顏をしてゐる。この中傳次ぢつと思入あつて、

傳次　よろしうござります、おつしやる通り兄の威光で得心させ、きつとお手に入れませう。

藤兵　それぢやあ色よい返事をさせるか。

傳次　うんと言はせて、お目にかけませう。

團八　それ旦那、お望み通りに行きましたぜ。

伊之　こりやあよつぽど勘定筋だ。

藤兵　いや早速の承知忝ない、それぢやあ善は急げとやら、約束通り後金の五十兩直にこゝで渡しておかう。

ト懷へ手を入れるを、

傳次　あゝいえ、そりやお借り申さずともようござります。

藤兵　それぢやあ得心させるといつたは、當座脫れの思ひ附か。

傳次　何のつけ、わしも男、一旦斯うと言つたらば寐返りは打ちませぬから、安心しておいでなせえ。

藤兵　さう言つてくれりやあおれも安堵だ、また金のこともかういふ仲になつて見りやあ、いつでもいゝといふものだ、そんなら前祝ひに藤岡へ行つて、一ぱいやらうか。

團八　その事〳〵、もし旦那、今日ばかりはお酒が旨く上れますぜ。

伊之　何でも今夜は祝ひ酒の夜明しとやりませう。

藤兵　それぢやあ兄貴、お前も一緒に。

傳次　いえ、わたくしはその事に就き、お組に逢はにやあなりませぬから、あなたはお先へいらして下せえまし。

藤兵　ほんにそれが肝腎だ、それぢやあこれから藤岡へ、

傳次　彼女を連れていづれ後程、

藤兵　來るのが合圖で、

團八　日頃の本望、

伊之　首尾よくこゝまで、

藤兵　金の威光で。

傳次　え。

藤兵　いや、藤岡に待つてゐるよ。

ト三人は下手へ入る、傳次殘り思入あつて、

傳次　あゝ時の切羽とはいひながら、とんだ金を借り込んだので、上げも下げもならねえ始末、果しがないから妹に得心させると請合つたが、宗次郎樣とあゝいふ譯、なか／＼うんと言やあしめえ。こいつあ困つたことになつたなあ。

ト當惑の思入、この中上手へ以前のお組、おやま、喜助附き出て樣子を聞いてゐて、

お組　兄さん、わたしや厭でござんすぞえ。

ト言ひながら前へ出る、傳次見て、

傳次　おゝ手前は妹、そんなら今の樣子をば。

お組　詳しい譯は知らないが、お前が今の口振りでは、大方わたしを藤兵衞さんへお前やる氣でござんせうが、そりやあんまりでござんすわいな。

やま　ほんにそれは、あんまりでござんすぞえ。

お玉　わたくしも樣子を聞いてをりましたが、それはあんまりでござります。

喜助　あの通り、あんまりでござります。

ト口々に言ふ。

傳次　えゝ見つともねえ、止されえか。

トこれにて三人控へる。

お組　見つともないと言はしやんすが、そりやお前が惡いからぢやわいな。

傳次　何をおれが惡いのだ。

お組　さあ、惡いわいな、宗次郎さんとわたしの仲知つてゐながら藤兵衞にお前やる氣でゐやしやんす故、惡いというたのぢやわいな。假令兄さんの威光でも、この道ばかりは別なもの、お前の自由にやなりませぬ、厭でござんす、あい、わたしや宗次郎さんも女房になるのでござんすわいなあ。

トつんとして脇を向いてゐる。

傳次　いや、手前もよつぽど分らねえものだ。

お組　わたしや何が分らぬえ、さあ、わたしや何か分りませぬ分りませぬ。

ト傳次に摺寄つて言ふ。

傳次　まあ靜にしろえ、假令汝を藤兵衞さんにやるやらねえは兎も角も、宗次郎樣には添はされねえぞ。

お組　え、そりや何故でござんすえ。
傳次　何故とは言はねえでも知れたことだ、あの森戸屋は
おれで二代、革羽織まで貰ふお店、昨日や今日の出入場
なら、捨てもしようが知つての通り酒の上悪のい親父、
幾度となく失敗つたも目をかけて下すつた、それのみな
らずおれまでも勿體ねえ、御子息でも堅いお店の習ひだ
から、自由に金を使はせぬを、おれがいつかの間違ひに
やあすでに牢へも行くところ、大金出して穏便に事なく
濟まして下すつた大恩のある旦那様、そりやあ手前に言
はしたら、そりやあわたしの知つた事ぢやあないと言ふ
だらうが、先づ第一によく考へて見ろ、土藏造りの居附
地主、抱へ地面も十ケ所から雪の下で五本の指へ折られ
る家の花嫁に、鳶の者の妹を嫁だといつて披露がならう
か、大概積りにも知れたものだ、よしんば先様で眼をね
むり、性が好いたことならば何でもいゝとおつしやつ
ても、おれが嫁にやあ上げられねえ、慾にふけつて無理無
體、はぎ附でもしたやうに世間の人に思はれると、おれ
ばかりの耻でなく、大勢ある組合の名折になることだか
ら、無理な兄だと思はうが、どうぞ言ふことを聞いて、
これ妹、若旦那のことは思ひ切つてくれ、こればかりは
おれが一生のお頼みだ。
ト始終思入にて頼む、お組愁ひのこなしにて、
お組　いえ／＼假令何と言はしやんしても、わたしや若旦
那のことばかりは思ひ切られぬ思ひ切られぬわいな。
ト泣伏す、傳次無駄だといふ思入あつて氣を替へ、
傳次　それぢやあ何か、おれがこれほど譯をいふに、どう
あつても汝やア聞かれぬといふのか。
トわざと荒く言ふ。
お組　あい、達つてと言はしやんすりや、わたしや死んで
しまふわいな。
ト立上るをおやま、お玉、喜助を捨ゼリフにて宥める。
やま　姉さん、どうぞ堪忍して、そのやうな事言うて下さ
んすは、お前にもしものことがあると、わたしや頼りが
ござんせぬわいな。
トお組へ縋つて言ふ。
お玉　ほんにつまらないことをおつしやりますな、このお
子さんが御心配をなさいますわいな。
喜助　又頭もあゝは言ひなすつても、そこは又御兄弟仲の
ことだから、どうでも話は後で分ることでござりますわ
ね。（ト傳次の側へ寄り、）もし頭、お前さんもお腹も立ち

ませうが今日はお座敷へお出かけのことでござりますから、お叱りなされずに下さいまし。

傳次　いゝや打ちやつておいてくんねえ、死ぬなら勝手に死ぬがいゝ。

お組　死なくつてかいな。

ト又立ちかゝるを三人にて留め、

喜助　まあ〳〵ようござります、こりやあこゝにおいでなされちやあ果しがありませぬから、兎も角も藤岡までいらつしやいまし。

やま　ほんに藤岡の姉さんに、わたしがよくこの事を頼まうわいな。

お玉　なるほど、それがよろしうござりまする。

喜助　さあ〳〵おやまさん、姉さんをお連れ申しておくんなさい。

やま　また迎ひを受けると悪うござんす、姉さん早うまゐりませう

お組　もうお座敷を勤める元氣もござんせぬ。

喜助　そんなことをおつしやつちやあ困りますわね。

やま　さあ、まゐりませうわいな。

ト お組の手をとる、お組元氣なく立上り、

お組　お玉さん、大きにお世話さまになりました。

お玉　御機嫌をおなほしなさいましよ。

お組　はい。

ト行きかゝるを傳次見て、

傳次　えゝ見つともねえ、涙でも拭いて行け。

お組　お前の世話にやならぬわいな。

ト流行唄になり、お組足早に、おやま喜助附いて下手へ入る。

傳次　いや、困つた奴だなあ。（トお玉を見て）おゝお玉さん、大きに長居をした上に、とんだ御厄介になつて濟みませぬ、何れお禮はいたしますよ。

お玉　とんだことをおつしやりますわいな。

傳次　然し、もう何時だね。

お玉　先刻七つを打ちました。

傳次　それぢやあ門のしまらねえ中、どりや清正公様へまゐつて來ようか。

ト行きかける。この時以前の悪侍三人後に窺ひゐて、

三人　うぬ、さつきの返報。

と唐突に傳次に切つてかゝるを身を躱し、ちよつと立廻つて三人を一時に當て、

傳次　なるほど世間に、
　ト肩へ手拭をかける、この途端三人は見事に轉る、これを木の頭、
物騒だなあ。
　トこなしあつて肩で笑ふ、これをきざみ、佃にてよろしく、
　ト波の音のつなぎにて、直に引返す。　ひやうし幕

（花水橋の場）――本舞臺下手より上手へ斜に大いなる橋、この下より彼方百本杭の遠見の書割、上の方二重の石垣、これへ棧橋をかけ、この傍に丸物の障子船、艫の方に船頭兩人茶碗にて酒を飲みゐる、總て花水橋の模樣、鳥追通り神樂にて幕明く。と、花道と橋の上より思ひ／＼の仕出し出て、入違つて入ると花道より、鑄掛屋松五郎縞物の木綿の半纏同じ着附、股引、尻端折りにて、手拭を米屋冠りになし、鞴掛の荷を擔ぎ、呼びながら出來り、

松五　こりやあ今日もあぶれかな、いつでもおれが生業は春先に閑なものだが、また今年のやうなことも少ねえものだ。何でも鑄掛屋と燒きつぎ屋は、主人にやあ迷惑だがそゝつかしいおさんどんが澤山なくつちやあ飯が喰えねえ。あゝ飯と下やあだいぶ腹が北山だ、ドウお馴染の小大橋へでも這入らうか
　トやはり呼びながら舞臺へ來る。この中橋の上より紙屑屋ぐづ八籠を擔ひ、やはり呼びながら出來り、舞臺よき所にて松五郎に行き逢ひ、
ぐづ　もし鑄掛屋さん、ちよつと待つておくんなせえ。
松五　何だえ、また鍋や盤陀の賣物なら入らねえよ。
ぐづ　なあに賣物ぢやあない、この鐵瓶だがね、（ト籠の中より鐵瓶を取出し）この穴は鑄掛けられようか。
松五　どれ、見せなせえ。（ト荷を下し、鐵瓶をとつて見て）おや／＼こりやあめつぽうけえ大きな穴だ、これが鐵瓶で仕合せ、こちとらがこんな大きな穴を明けようもんなら、生涯塡るせいはありやあしねえ。
ぐづ　違えねえ。いや常談をのけ、どうだえ鑄掛が利かうか。
松五　そりやあ利かねえことはねえのさ。
ぐづ　いくらでやつてくんなさる。
松五　さうさ、お前も商賣物だらうから、まけてやらう、

三百出しねえ。

ぐづ　待ちなせえよ、どら、いゝで見たふしたのだから、ト
ちよつと考へ、二朱にやあ買れるね。

松五　あゝ代物は川口だが、極く古いだけ買れようよ。

ぐづ　それぢやあやつておくんなせえ。

松五　承知しやした。

ト荷箱の中より鞴其外鋳掛道具を種々取出し、小さき腰掛に腰を掛け、足の指の股へ鞴の棒をはさみ、鞴を押しながら、

屑屋さん、この節は儲かりますかね。

ぐづ　どうしてお前、日に四百か五百儲けた分にやあ、わたしどもは嗅に餓鬼だから、なか〳〵活計がつきませぬ。

松五　ほんにこの諸式の高いのは貧乏人殺しだ。老人じみたことを言ふやうだが、もう一遍どうか往昔のやうな世の中にしてえものだ。

ぐづ　わつちなども餓鬼の中親父の話に聞いて、子供心に覚えてみますが、大そう物は安く、錢も儲かつたといふことだが、その時分でも世の中はまだよかつた、その證據には往昔から見ると今の人間は大そう小さくなつたといふことだ。

松五　はつくしよ。

ト嚏をする、

ぐづ　お前風邪を引きなすつたね。

松五　風邪ぢやあねえやな、おれが前で人間が小せえといふのは、禁句だわな。

ぐづ　いや、こりやあとんだ粗相を言つた。然し、この諸式の高いにしちやあ大そう人は出るね。

松五　そりやあ今日は二十四日だ、清正公様に丁度庚申を持込んだもんだから、ちつたアそのせゐもあるだらうよ。

ぐづ　なるほど今日は清正公様だな、それぢやあ歸りにちよつとお參りをして行かう。

松五　お前お宗旨と見えるね。

ぐづ　大のかたまりさ。

松五　おれと反が合はねえな。

ぐづ　なぜね。

松五　わつちやあ門徒だもの。

ぐづ　はあ、それぢやあ首と耳とに珠數をかけるね、然し門徒宗の者は皆工面がいゝといふから、定めしお前工面

がよからう。
　ト常談のやうに言ふ。
松五　そりやあ看板に僞りなし、鰤の向うづらで、どうやらかうやら、息が通つてゐるばつかり。
　ト兩人顔を見合せ、
兩人　はゝゝゝゝ。
　と笑ふ。
松五　ほんにかうしてお互ひに、天秤棒を肩へあてゝ日がら一日稼いでも、これでやつと喰ふのがすうすう、またさうかと思やあ年が年中懐手で金を儲け、遊んで暮す人もある。其の身の果福とはいふもの、同じ人間に生れながら、思へば意氣地のねえことだ。
　ト仕事をしながら、少しぢつとなる。
ぐづ　然しながらさう思ふとこちとらは、生きてゐるのはべらぼうらしい譯だが、こゝがあの心學の歌にある通りさ、「上見れば及ばぬ事の多かりき、笠着て暮せおのが心に、」これを又蜀山が「下見れば及ばぬ事の多かりき、上見て通れ兩國の橋、」なんと洒落たものぢやあないか。見なせえその通りだ。
　トこれにて松五郎鐵瓶を手に持つたまゝ首をさしのべ、川の中を見て思入あつて、
松五　なるほど、橋から下を見りやあ、涼しくなつてもまだ川に幾艘となく屋根船で、藝者を入れてあの騷ぎ、こちとらの身にとつちやあ及ばねえことばかりだ。
　ト川の中へ思入あつて、癪にさはりしこなしにて、思はず持つた鐵瓶を投り出す、ぐづ八びつくりして周章て取上げ、
ぐづ　とんだことをするぢやあねえか、鐵瓶が破れらあな。
　トこれにて松五郎心附き、
松五　おゝ、ついうつかりと。鐵瓶が出來ましたよ。
ぐづ　出來たら出來たで手へ渡してくんなせえ、すんでのことに鐵瓶一つ玉なしにする所だ。
　ト口小言を言ひながら、財布から天保錢を二枚出して、投り出した箇條に、二百でまけてくんねえ。
松五　えゝ、いくらでもようござります。
ぐづ　いや氣前のいゝ鑄掛屋さんだ。(ト言ひながら荷を擔ぎ)屑はごぜえ〳〵。
　ト呼びながら下手へ入る。松五郎思入あつて、
松五　あゝ、どう考へて見てもつまらねえ、どれ早くしまつて歸らうか。

ト荷を片附にかゝる、この時上手船の内にて島屋文藏の聲にて、

文藏　こう、秋の日は逆上せてならねえ、ちつと障子を明けちやあどうだ。

お咲　氣晴らしに、よろしうござんせうわいな。

ト流行唄になり、船の障子を引拔くと、内に島屋文藏羽織着流し、野暮なる田舍客の拵へお咲派出なる姿の拵へにて、文藏に酌をしてゐる、船の中よりお咲の母お虎婆あ、下女お榮船の艫へ出て、船頭の○□に向ひて、

お虎　船頭さん、ちつとお相手をしようかね。

○　さあ／＼お母さん、一つお上んなせえ。

□　それに船の中ぢやあお著うござりませう。

お虎　いやも、たまらないよ。

お榮　それにレコの傍では、窮屈でなりませぬわいな。

ト親指を出す、この中お虎茶碗にて酒を呑んでゐる、文藏見て、

文藏　お母あ、又そつちへ附込んだの。

お虎　ちよつとお相手をしたばかりでござりますよ。

文藏　そつちにや何も肴があるまい、何ぞさういつてやればいゝ。

お虎　なあに、お肴はなくつても、御酒さへいたゞけばようござりますよ。

文藏　肴がなくて酒が飲めるものか、待ちねえ、肴をやらう。（ト紙入より金を出し、四箇紙にひねり／＼）これを皆皆にやつてくんな。

ト　お咲に渡す

お咲　お母あ、旦那から。

ト各自へわたす。

お虎　おやお氣の毒な、お止しなさればよいに。（トひねつて見て）これは結構なお肴だ、櫻鯛四つづゝ。

お榮　おばあさん、旦那へお禮を申さうぢやありませぬか。

お虎　ほんにならう、あんまり嬉しいので、肝腎のお禮を申すのを忘れてさ、年を取るとこれだからいけないよ。（ト船の中へ向ひ）もし旦那、唯今は大きに。

四人　有難うござりまする。

文藏　いやお母あ、お前には又別段にどうかするから、まあそりやあ座並のことだから、不承しておくんなせえ

お虎　とんだことをおつしやりますよ、娘がお世話になつ

てをるので澤山でござります。お咲やお前からもよくお
禮を申してくんな。
お咲　あい、そりやあ申しまするわいな。
お虎　おいらはちよつとこの間に、回向院のお開帳へおま
ゐりをして來るよ。
お榮　この節、回向院に開帳はありはしませんよ。
お虎　えゝもこの女は氣の利かねえ、いやなに、昨日から
始まつたとよ。
お榮　おや、さうでござりますかえ。
お咲　そんなら行つて來なさんせいな。
お虎　それぢやあおいらは行つて來るから、お前も後で、
お咲　え。
お虎　いやなに、歸りは遲くても案じなさんな。旦那ちよ
つとおまゐり申してまゐりますよ。
文藏　御信心だね。
お虎　年寄はこれが樂しみでござります。
船頭二人　うまく言ひなさるぜ。
お虎　えゝやかましい。さあ、皆々一緒に來なよ。
ト　お虎先にお勞、船頭兩人附き、棧橋より上手へ入る
この中松五郎は荷を片附け舳の火壺を鉄箸にて挾み
川の傍へ來り水をすくつて火を消し、手など洗ひなが
ら船の中の樣子を見てゐる。船の中には文藏四人の後
を見送りて、
文藏　いやお母あも食へない代物だ、おつゥ幕を切つたな。
お咲　あなたがあんまりお眞面目だからでござんすわい
な。
文藏　なに眞面目なことがあるものか、眞面目でないから
おぬしにもつい、斯うやつて惚れたのよ。
お咲　そりやあなた、ほんたうでござりますか。
文藏　いや、疑深いことを言ふ女だ。然し、馴染の薄い
おれのことだから、さう思ふのも尤もだ、そんならば
うしよう、おぬしがほしいものがあるなら、何なりと金
には構はぬから、遠慮せずに言ふがよい、これが惚れた
たしかな證據だ。
お咲　それは有難う存じまする、左樣ならば旦那、どうか
わたくしは頭のものがほしいと、思うてをりまする。
文藏　そりやあ易いことだ、(ト胴巻より金を出してお咲に
やり)これでおぬしが好きなのを買ふがいゝ。
ト　お咲金を取つて見て、
お咲　いえ、旦那、このやうには、

文藏　にて、殘つたら芝居でも見やれ。
ト　お咲の手を取らうとする、この中松五郎は荷を擔ぎ橋の上よき所まで來り、始終船の中へ思入あつて、
松五　かう見たところが江戸ぢやあねえ、上州あたりの商ノ體だが、横濱でゞも儲けた金か、切放れのいゝ遣ひぶり、あれぢやあ女も自由になる筈、鎧釜鋳掛をしてゐちやあ、生涯出來ねえあの榮耀、あゝあれも一生、これも一生か。
ト　つまらぬといふ思入、此時の花道揚幕の内にて題目太鼓鳴る、松五郎これへ聞耳を立て、
あの太鼓は、清正公樣か。
ト　思入、文藏思入あつて、
文藏　おゝ、二十四日はたしか庚申、
お咲　今夜は寐ると泥坊の、
松五　こいつあ宗旨を、
ト　思入あつて鋳掛の荷を川へ打込む。どんと水の音、これにて兩人びつくりして飛び退く。松五郎は橋の上にて高欄へ片脚かける、双方見合つて木の頭
替へにやあならねえ。
ト　下を見込む、下よりは兩人上を見上げる。この仕組よろしく。　　　ひやうし幕

二幕目

本町浜江屋の場
同　秦戸屋店の場
同　新道妾宅の場

〔役名〕──鋳掛松、島屋文藏、花屋佐五兵衛、刀屋手代半七、番頭五郎兵衛、道具屋與市、囲ひ者お咲、刀屋娘お花、刀屋後家おくぼ、下女お染、刀屋下女おきよ、お虎婆あ、其他。〕

〔街道の場〕──本舞臺三間後黒幕、彼方一面玉椿の垣根、上の方へ寄せて片附け葭簀張りの出茶屋、床几など積重ねあり、下手に松の立木。こゝに茶飯屋ぬく藏下の方へ荷を下ろし、盆の上へ丼を載せしを持ち、立ちかゝりなり、よき所にならずの三次頬冠りをなし、外に下馬三尺帯の惡漢の拵への者〇〇の二人、何れも下にゐて茶飯を喰つてゐる、この模樣

ぬく　時の鐘合方にて幕明く。
〇　へい、お替りでございます。
ぬく　茶飯屋さん、大そう冷てえの。
□　宵に炊いたのだから、冷めましたらうよ。
　贅澤なことを言ふなえ、年中冷飯ばかり喰つてゐるくせに。
〇　よしてくれ、手前ぢやアあるめえし。
　トこの中三次茶飯を喰ひながら、
三次　おい茶飯屋さん、おらあもう片替りだよ。
ぬく　畏まりました。
　ト丼を取る。
□　兄い大そういけるなう。
三次　こりやあ負けッ腹だ。
〇　違えねえ、今夜のやうに外れるのも珍らしいぢやあねえか。
ぬく　（茶飯を持來りて、）へい、片替りでございます。
三次　（取つて喰ひながら、）何でも虎の野郎が持つて來やあがつた甕つぶは、怪しいと思ふぜ。
□　馬鹿ア言ひねえな、虎は勿論のこと、あの顏の中でお前を白痴にするものがあるものか。
〇　そりやあこちとらのやうな白痴の言ふことた。
三次　やつぱりおれが目の立たねえのかな。
□　へ、また時にやあかういふものよ。
三次　何ぞかう旨え仕事がなあ。
　ト兩人と顏見合せて思入、ぬく藏前へ出て、
ぬく　有難う存じます、皆さんがそのやうにうまい〳〵とおつしやつて下さります。
三次　何をいふのだ、お前の茶飯を褒めたのぢやねえやな。
ぬく　はい、これはしたり。
　ト控へる。
三次　いや、とんだつんぼう話した。
　ト時の鐘、花道より花屋佐五兵衛胡麻鹽髮、穢ない手拭を意氣地なく冠り、尻端折、繼布のあたりし股引にて、草鞋を穿き出來り、花下に留り、
佐五　あゝ夜明方といふものは寒いものだ、老人の身體にはめつぽうこたへる。
　ト言ひながら舞臺を見て、
　おや〳〵六つだと思つて出て來たが、まだ夜明しの茶飯屋がゐるところを見れば、今しがた打つたのは七つかしら

ぬ、物騷だといふに、こんな物を持つて、あゝとんだことをした。何にしろあそこへ行つて、何時だか聞いて見よう。(ト舞臺へ來り、)もし茶飯屋さん、今しがた打つたのは、何時でございますね。

ぬく　ありやあ七つでございます。

佐五　それぢやあ一時間違へたのか。

ぬく　はあ、時を違へなすつたのかえ。

佐五　さあ、聞いて下さいまし、朧月で薄明るいのを夜明だとばかり思つて出かけました。

ぬく　さうでございましたか、然しお年寄といふものは、お前さんには限りませんよ、斯う申すと惡うございますが、どうもこの年を取んなさると氣が短かくなるに、おまけに早く眼が覺めるといふものだから、得てこんなことはありがちでございますよ。

佐五　いえ/\こりやあわたしの惡いのではございませんよ、さうおつしやるなら何をお隱し申しませう、わたくしは本山へ祠堂金を持つてまゐりますのだが、それはそれはお住持が大の性急で、いえもうこんなことは今日に限りませぬ、度々でございます、それ故唯今なぞももう六つだ/\と申しますから、うつかり出かけて來ましたが、七つとあれば歸りませうかしらぬ。

ト考へてゐる。

ぬく　お前金を持つてゐなさるなら、この節は大そう物騷だから、夜が明けて行きなさるがいゝぜ。

佐五　左樣でございますな。(ト戾らうとして、思入あつて、)然し、また出なほすも面倒か。

ト又立留る、この中三次は金の事を聞き、〇口と顔を見合せうまいといふ思入あつて、この時少し前へ出て、

三次　もしおとつさん、夜は短かくなつたから、もう直に明けます、わたし共も職人だがちつと場所が遠いから大概早く出かけて來るがね、あんまり今朝は早過ぎるから、もうちつと明るくなつて行かうと思つて、先刻からこゝにかうしてゐるところさ。それぢやあ丁度いゝや、少しの中の辛抱だ、お前もこゝへ來て話しなせえ。その中にやあ夜が明けらあ。

佐五　それはよいお方がおいでなされました。左樣ならお邪魔樣ながら、少しの中御厄介になりませうかな。

三次　さあ/\、こゝへ來なせえ/\。

佐五　御免下されませ。

ト言ひながら三次の傍へ來り、下にゐる。

〇 おい棟梁、もう夜が白んで來たやうだぜ。
三次 よつぽど夜はつまつたから、ぞうさねえ。
□ あんまり明るくならねえ中に、やツつけようぢやあねえか。
三次 これさ、さう急いで行つたつて、まだ材木が廻らねえよ。
ト ぬく藏へ顋で思入。
□ なるほど、それぢやあもうちつと待たうかな。おい／＼茶飯屋さん、まだ仕舞はねえのか。
ぬく もう二三膳でしまひになります。
三次 おとつさんどうだえ、お前茶飯を一ぱいやんなさらねえか。
佐五 いえもう有難う存じますが、わたくしはまだほしうございませぬ。
三次 御馳走と申すとお恥しいが、わたしが上げるのだから、決して遠慮をなさいますな。
佐五 なか／＼御遠慮はいたしませぬが、實はまだお腹がすきませぬ、その替りに一服いたゞきませう。〔ト腰の煙草入を取り、煙草をつぎて〕茶飯屋さん、一つ火を貸して下さい。

ぬく さあ、お附けなさいまし。
ト佐五兵衛行燈の灯にて煙草を吸附け、こちらへ來り三次に向ひて、
佐五 あなた一服上りませぬか。
三次 一つお借り申しませう。
ト懐より叺煙草入を出し、煙草をつぎ、兩人吸附けながら佐五兵衛三次の裝を見て胡散な奴だといふ思入あつて、あわてゝ吸殻をはたき煙管をしまひ、手早く煙草入を腰に提げ、
佐五 わたくしはちとまだ外に用事もござりますから、自由ながらこれでお別れ申しまする。
ト行かうとするを三次留めて、
三次 まあ待ちなせえな、それぢやあわつち共がそこらまで送つて進ぜませう。
佐五 いえ、あなた方も御生業を抱へてゐらつしやることそれに年寄といふものは足がのろうござりますから、若いお方様にはこぢれつたいものでござりますから、どうぞお構ひなされて下さりまするな。
三次 わたし共も隨分足ののろい方だから、ようございますよ。

佐五　どうぞもうお構ひなされて下さりまするな、左樣な
らお先へまゐります。

ト言ひ捨て足早に上手へ入る、三次見送りて、

三次　あの親父はよつぽど氣の短い奴だ。

○□　逃がさねえやう、後から直に。

三次　えへん、(ト兩人に目くばせなし、)茶飯屋さん、いく
らになるえ。

ぬく　へい、三百二十四文いたゞきます。

三次　剩錢は入らねえ。

ト錢を渡す。

ぬく　それは有難う存じます。

三次　さあ、早く仕事に出かけよう。

○□　急ぎねえ／＼。

ト三次先に○□足早に上手へ入る、ぬく藏後を見送り
て、

ぬく　剩錢を貰つて惡く言つちやあ濟まねえが、何だかを
かしな素振の奴等だ、盜賊ぢやあねえかしらぬ、どうも
險難だ、覔溜でも取られねえ中、どれ早く仕舞つて歸り
ませう。(と荷を擔ぎ、)餡かけ豆腐、茶飯屋でござい。

ト呼びながら下手へ入る、これにてこの道具廻る。

(本町通り近江屋の場)――本舞臺三間上手に足場を
かけし土藏、これに續き正面立派なる商人店の屋體、
前側へ一面に戸をおろしあり、總て本町通り夜の體、
時の鐘にて道具留る。と上手より番太△割竹をたゝ
きながら出來り、

△　火の廻り／＼。

ト呼びながら下手へ入る。と花道の揚幕にて佐五兵衞
の聲にて、

佐五　誰ぞ助けて下され、泥坊だ／＼。

ト時の鐘ばた／＼になり、花道より以前の佐五兵衞逃
げて來る、後より以前の三次、○□兩人と共に追ひか
けて出て來り、直に舞臺へ來り、佐五兵衞を捉へる。

あゝどうぞ御免なされて下さいまし、御免なされて下さ
いまし。

三次　えゝやかましい、靜にしねえとたゝき殺すぞ。

佐五　はゝい。

ト顫へながら蹲まる、○□は舞臺上下に別れ、人でも
來はしないかとの思入にて窺ひゐる、三次佐五兵衞に
向ひて、

三次　さ、汝が持つてゐる祠堂金をこゝへ出せ。
佐五　いえ、何のわたしが左樣なものを。
三次　べらぼうめ、いくら不知ア切つたつていけねえや、道中筋の駕舁ぢやあねえが、こちとらが一目睨んだら、いくら懷にあるといふなア知つてゐらあ、それに今祠堂金を持つてゐると、汝が口からぬかしたぢやあねえか。
佐五　え。
ト懷を押へる。
三次　それ見やあがれ、汝達つて出しやあがらねえと、たたツ殺してふんだくるぞ。
ト立ちかゝるを佐五兵衞居ながら留めて、
佐五　あゝもし待つて下さいまし〳〵、うつかり言うたがこつちの過り、かう御存じの上は何をお隱し申しませう實はこゝに、はい、百兩持つてをりまする。
三次　なに、百兩。
ト思入。
佐五　さゝ、その百兩はな、こりや本山へ屆けまする祠堂金、わたくしは使ひの者、自分の金なら是非もござりませぬが、人の物をお前樣方に持つて行かれてしまひましては、わたくしもよい年をして取られましたと言うて戻られませうか、どうも死なねば言譯が立ちませぬ、それぢやによりてお慈悲でござります、年寄一人助けると思召して、どうぞこれは見脫して下さりませ、もし、をがみまする〳〵。
ト手を合して三次を拜む。
三次　汝が死なうがくたばらうが、それをこつちで構ふものかえ、ぐづ〳〵言はずと金を出せ。
佐五　それはあんまりお情ない。
三次　えゝ、じれつてえ。やい、手前達も手を貸せ。
○□　合點だ。
ト○□の兩人佐五兵衞を引附け、三次佐五兵衞の懷より金の入りし財布を引出す、佐五兵衞やるまいと焦り、
佐五　助けて下され〳〵。
ト言ふを構はず財布を引取り、
三次　勝手にそこで怒鳴りやあがれ。
ト言ひさま佐五兵衞を蹴倒し、三次先に○□の兩人も逸散に花道へ走り入る、佐五兵衞直に起上りて、
佐五　泥坊々々。
ト言ひながらこけつ轉びつして、花道よき所まで追つて行き、花道を見、思入あつて、

あゝもう何處へ逃げて行きをつたか、影も形も見えなくなつた。よし又こゝらにゐたところが、年寄一人に先方は三人、なか／＼取戻す力もなし、とあつてこの儘家へは歸られず、あゝこりやひよんな目に遭ふものだなあ。

ト言ひながら段々舞臺へ戻つて來り、有合ふ石に腰をかけ腕組をなし、ぢつと考へてゐる。この時少し凄味の合方、時の鐘になり、頰冠りなせる鎌掛松事盗賊となりし鎌掛屋松五郎、家根傳ひに土藏の足場を頼り下へおりようとして邊りを窺ひ、佐五兵衞に眼を附け、足場の中途の段に身を潜め、有合ふ苫をそつと被つて窺ひゐる。この時佐五兵衞顏を上げ、ほつと思入あつて、

どう考へて見ても、死ぬより外に思案はない、然しおれは死ぬのは構はぬが、可愛さうなは伜の與之助、雪の下の森戸屋へ奉公にやつてもう六年、これまで一度この親へ惡い耳を聞したことのない孝行者、年取つた子は一倍可愛いとやら、殊にほんの一粒者、どうぞ彼兒が辛抱しあげ、お見世など出して貰ひ、孫の顏など見て死にたいと願うてゐたも悉皆無駄事、これもあの泥坊に御本山へ納める祠堂金の百兩を取られずば、こんな思ひはあるまいに、あゝ先行のよくない奴等ぢやなあ。

ト涙ながらに、恨めしさうに花道の方を見て、思入あつて心附き、

いや／＼、こんなこと言うてゐる際に、夜が白んだら死におくれる、この間に早く、さうだ／＼。

トこの中どうして死なうといふ思入にてうろ／＼してゐる中、落散りある繩足へからまる、佐五兵衞これを取上げ、土藏の足場へ思入あつて頷き、足場の側へ來り、有合ふ石を臺にして足場丸太へ繩をかけ、罠にしてしつかり結ぶ。この中足場の上にて鎌掛松可愛さうにといふ思入あつて、始終の樣子を見てゐて、この時懷から白鞘の懷劍を出して拔き、刄をそつと件の繩にあて窺ひゐる、佐五兵衞はこれを知らず、

あゝこゝの家へは、お氣の毒ぢやな。

ト堪忍してくれとちよつと拜むことあつて、件の繩を首にかけ、

南無阿彌陀佛。

ト首をくゝらうとする、この途端に松五郎上より懷劍にて繩を切る。これにて佐五兵衞どつさりと落ちて尻餅をつき、びつくりしながら又立ちかゝる、こゝへ松

五郎上より飛下り、あわてる佐五兵衞を留めて、

松五　いゝや死ぬにやあ及ばぬ、まあ待ちねえ／＼。

佐五　いゝえ、どうぞ放して下さりませ。

ト焦るを留めて、

松五　はて、情の強い、待てといつたら、（ト無理に佐五兵衞を下にをらせ）まあ待ちねえな。

佐五　御親切に留めて下さるのは有難うは存じまするが、どうでも死なねばならぬと申す、その譯は。

松五　あゝいや、そりやあ聞くにや及ばねえ、樣子は上で聞いてゐたが、何も金せえありや死なずとも濟むぢやあねえか。

佐五　あなたその金がありますほどなら、

松五　さあ、それだからその金を、おれが貸してやるからいゝぢやねえか。

佐五　え、そんならこなたが大まい百兩。

トびつくりする松五郎懷より百兩包を出し、

松五　これをやるから、決して無分別な事をしなさんなよ。

ト佐五兵衞の前へ置く、佐五兵衞これを見て呆氣に取られてゐたが暫くして兩手を突き、

佐五　これはまあどうした樣か存じませぬが、まことに思召しのほどは有難う思うてはをりまするが、これが僅な金ではなし、大まい百兩といふ金を、何の縁も由縁もない知らぬお方にお貰ひ申す、どうも謂がござりませぬ。わたくしもこんな災難に遭ひまして、非業な死狀いたしまするも定業とあきらめてをりますれば、どうぞお留めなされずと、後生に死なして下さりませ。

トちよつと立ちかゝるを松五郎留めて、

松五　又しても情の強い人ぢやあねえか。こう老爺さん。よく胸へ手をあてゝ考へて見なよ、今上でおれが聞いてゐたに、お前にやあたつた一人の息子があるぢやあねえか。そりやあ死んで行く身になつたらば後のことは知るめえが、一人の親に死別れた息子の心になつて見なせえ。それにまた疊の上で死ぬことか外聞の惡い首縊り、明日からその子が人中へ顏向けが出來やあしねえぜ、そこらこゝらを考へて決して死なうと思ひなさんな。これさ、おい、お前伜は可愛かねえのか、あんまり邪慳な人ぢやあねえか。

ト思入、佐五兵衞淚を拭ひて、

佐五　それも考へぬではござりませぬが、何を申すも金の

こと故。

松五　さあ、それだから此金を持つて行きねえ。

佐五　そのやうにまでおつしやつて下さりまするもの、左樣ならお言葉にあまへまして、お貰ひ申しは申しまするか、何と申しても大金のこと、たゞお貰ひ申すといふ譯にはまゐりませぬが、いつたいあなたのお宅は何處で、御生業は何をなされまするな。

トこれにて松五郎ぎつくり思入あつて、

松五　なに、おれが生業かえ。

佐五　はい。

松五　おれが生業は、、、レコよ。

ト人差指を曲げて見せる、佐五兵衛見て、

佐五　あなたの生業は、レコ、(ト同じやうに人差指を曲げて、ちよつと考へ)釣針屋さんでござりまするか。

松五　なアにさ、假名で書きやあ、どろばうよ。

佐五　えゝゝゝゝ。

トびつくりする。

松五　これさ、何もそんなにびつくりすることはねえ、濱の眞砂と世の中に種の盡きねえ盗人だが、其金を貸したつて、翌が日おれが喰え込み、海老責にかゝつてたゝかれても、とまりは知れた身の兇状、人を抱込むなんぞといふそんなけちな根性ぢやあねえ、案じずとその金は持つて行きなせえ、おれもこんなろくでねえ根性だから、お前のやうな父さんへ苦勞をかけた佛への、こりやあ恩返しと思つてお前を助けるのだ。その替りにやあおれもお頼み、始終は斬られる身體だから、お前がおれへ恩返し、どうぞ今日を命日に一遍の回向をしてくんなせえ、そればつかりがこなたへ賴みだ。

ト少し悄れて言ふ、佐五兵衛思入あつて、

佐五　そりやもうおつしやりませいでも、命の御恩のあなたのこと、回向はきつと怠らず朝晩にいたしまする、それにまたお住持樣へも此の事を打明けまして。

松五　あゝこう〱、そりやあ止しなさるがいゝ。堅いお寺のことだからうつかり話したその後で、そんな不正の金ぢやあ打捨つておけねえと、また訴へるのすべつたの轉んだのと、しちむづかしいことでも言はれると、却てお前の爲にならねえから、決してそりやあ言ひなさらねえがいゝぜ。

佐五　なるほど、こりやあ大きにそこもござりまするな、左樣なら誰にも申さず此のお金はお貰ひ申しておきま

す、有難う存じまする。（ト金を取つていたゞきて納ひ、思入あつて）ときにまあ、此のやうな御恩にあづかりまして、お名前も知らいでは濟みませぬ、どうかお名をお聞かせなされて下さりませ。

松五　いや、お前の名も聞かにやあおれが名も言ふめえ、何故ならこちとらの生業はつまらねえ所から足の附くものだから、もしそんな事でもあつた日にやあ、お前も寐覺が惡からうし、第一はおれがつまらねえから、言はず語らずお互ひにちつとでも、長生をする算段しよう。

佐五　それではどうも濟みませぬなあ。

ト思入。この時烏啼、松五郎思入あつて、

松五　おゝもう夜明だ、老爺さんおれも行くから、お前も早く行きなせえ。

佐五　左樣ならもうおいでゞございまするか、これは大きに有難うございました。お蔭樣で命一つ拾ひました。（ト松五郎を見て感心の思入あつて）あゝ同じ御生業でありながら、年寄の物を無慈悲に持つて行く奴もあり、またあなたのやうなお情深い方もあり、

松五　そりやあ世の中は、千差萬別とやらさ。

佐五　ほんに、同じお仲間でも、

松五　ぴんからきりまで高下があるので。（トちよつと思入あつて）いや然し、盜人の手前味噌は見得にもならねえそれぢやあ老爺さん、

佐五　はい。

松五　達者で暮しねえよ。

ト思入あつて松五郎は花道へ入る。佐五兵衞は伏しをがみて、

佐五　あゝ有難うございました。この御恩は決して忘れはいたしませぬ、これからは一生懸命あなたのお捉へにならぬやう、わたくしが信心をいたしてをります。あゝ盜人にはをしいお方ぢやなあ。

ト感心のこなしにて花道を見ながら、ふら／＼と上手へ行かうとして、切れたる繩が足へ絡まるのを取上げ見て、身顫ひをなし繩を下へ打附ける、これを道具替りの知せ、

死神が放れたさうな。

トこなし、烏啼早き合方にて、この道具廻る。

（刀屋「森戸屋」の場）――本舞臺三間、正面商人店頭の道具、上の方の揚戸はおろしたるまゝ、下手の潜

り戸だけ明けあり。下の方黒塀、この前に用水桶、こゝに刀屋番頭五郎兵衞、着流しにて駒下駄を穿き前へ手拭をはさみ片手に楊枝箱を持ち、楊枝を使つてゐる。丁稚長松草箒にて表を掃いてゐる、總て雪の下刀屋の體、夜明の模樣、烏啼、合方にて道具留る

五郎　これ長松、何故こんな無精をするのだ。これ見るがいゝ、こゝだけ眞黑に掃殘つてゐるわ。

長松　そりやあお前さんの影法師だよ、耳ばかりかと思つたら眼まで惡いなあ

五郎　又そんな憎まれ口を利きやあがる、早く掃除をしまつて汁の實でも買つて來い。

長松　もう買つて來ましたよ。

五郎　それぢやあ早く行つて、水でも汲んでやれ。

長松（掃いてしまつて、）おさんどんの贔屓ばかりしやあがる、助兵衞め。

ト少し浮いた合方になり、長松は言捨てゝ下手へ入るこの内花道より前幕のお咲派出なる着附にて吾妻下駄を穿き、後より下女のお榮附き出來り、直に舞臺へ來て五郎兵衞を見て、

お咲　お早うございます。

五郎　これはお咲さん、大そうお早く、どちらへおいでのだえ。

お咲　ちよつとお詣りにさんじます。

五郎　そりやあ御信心だが、一日用もあるまいから、ゆつくりと出かけなさればいゝに、

お榮　それがいくら申しても、朝の中お詣りをせぬと、氣になるとおつしやりますわいなあ。

五郎　さう心にかけて信心をしなさるのは、旦那の身體を案じてと見える。さうして旦那は、まだお歸りなさらないのか。

お咲　まだ戻りませぬ、それにたつた一度便りのあつたぎり、その後沙汰がありませぬ故、どうなされたか尋ねて上げようとは思うてをりますが、もう大概戻られませうわいな。

五郎　何にしろ旦那のお歸りがなくては、夜分などはさぞお淋しからうね。

ト いやらしく言ふ。

お咲　いえ、夜分は近所のお方が遊びに來て下さるので、大そう賑やかでござりますわいな。

五郎　はあ、張り半分だな。
お榮　皆お上さん達でござりますわいな。
五郎　さう聞いて安堵した。
お咲　御常談ばかりおつしやりますわいな。
お榮　番頭さん、ちつと夜分お遊びにいらつしやいましな。
五郎　是非行きますよ。
お咲　左樣ならば。
　ト二人は上手へ入る。この以前お咲の舞臺へ來りし頃、下手より松五郎深く頰冠りをなして出來り、お咲を見ていゝ女だといふ思入あつて、下手用水桶の蔭へ身を寄せ、始終を聞いてゐる五郎兵衞はお咲の後を見送りこなしあつて、
五郎　あゝ美い女だなあ。どうかして彼女を一晩しめたいものだが、然しこりやあ出來さうなわけだ。今彼女が素振りを見るに、おれが顏を横目でぢろりと見ながら、にこ〳〵笑つてゐたやうだが、して見るとおれの顏もよつぽどきれいだと見える。（トちよつと顏を撫でゝ）はい、まだ顏を洗はなかつた。
　ト潜戸の内へ入る。後に松五郎用水桶の影より延上り見て、誰もゐぬ故出來り上手へ思入あつて頷き、窺ひながら上手へ入る。後しらせなしにこの道具半分ほど廻る。
　本舞臺三間上の方に木戸、正面柵矢來、この前に角材木一丁ねかしあり、側に犬二匹寢てゐる、この模樣合方にて道具留る。と、花道より噺家の圓八合羽尻端折り、脚絆草鞋にて、手に菅笠を持ちて出來り、花道にて、
圓八　あゝ睡い〳〵、場末の夜席はこれがいやだ、ちつと終演がおそくなると、長い田圃を越して歸るのが厭だから、昨夜も宿へ引かゝつて、あんまりおそく登樓つて氣の毒だから、女にお臺場やつたらば、その達引で今朝の睡いつたらありやあしねえ。その上昨夜天氣がいやだつたから席亭で菅笠を借りて草鞋がけで出かけて來たら、足は痛し、睡さは睡し、こんな苦しいことはねえ。（ト言ひながら舞臺へ來て、角材木を見て）丁度いゝ、この材木の上で足休めながら一寐入りやつて行かう。
　ト捨ゼリフにて材木の上へ寐る。替つた合方になり上手木戸の内より以前の松五郎出來り、圓八の寐てゐるを見て思入あつて頷き、そつと側へ行き寐息を考へ、

松五　よしといふ思入あつて、そつと圓八の合羽を脱がせ、脚絆草鞋を取り菅笠を持ちて此方へ來り、
御ゆるりとお休みなせえ。
ト肩で笑ひ下手へ入る、この時寐てゐた二疋の犬起上り一疋は圓八の口の邊を舐め、又一疋は膝の邊を舐める。圓八現の思入にて、
圓八　あゝこれなにをするのだ、いゝ加減にふざけておかねえか、しつッこいにも程があらあ、止しねえといふに。
ト犬を突飛す、これにて犬圓八の向脛へ噛附く、圓八びつくりして起上り、
あゝ、痛え／＼。
トこれにて犬は逃げて入る、圓八足を押へよく／＼見て、
おや、脚絆も草鞋もねえ、こりやあ大變だ、損料で借りた合羽から菅笠まで持つて行かれた。然し裸にされねえのがめつけものだ。とんだ災難に遭ふものだ。あゝ痛え痛え。
ト向脛を手拭にて結へ、跛を引きながら上手へ入る。
後やはり報せなしにこの道具廻る。
本舞臺元の店頭の道具になる。前側の戸を明け、二重正面納戸口、上手は刀、脇差などを載せし棚、この下間平戸の戸棚、下手鼠壁、これに帳面状差しなどの書割。總て刀屋店頭の模樣、よきところに以前の番頭五郎兵衛帳面を調べてをり、若い者兩人、○□は釆配にて刀の棚を拂つてをり、□は雜巾がけをしてゐる、この見得稽古唄合方にて道具留る。
五郎　これ、もう大概にするがいゝ、埃がしてならねえ。
ト袖を拂ひながら言ふ。
○　はい、もうよろしうございます。
ト控へる。
五郎　こう忠藏や、掃除がよけりやあ、ちよつと甚兵衛が所へ行つて、此間の鞘の塗を急いで來て下せえ。
□　畏まりました。
ト下手へ入る。
五郎　貴樣おれが店にゐるから、早く行つて飯を食つて來るがいゝ。
○　左樣なら、お先へいたゞきます。
ト五郎兵衛へ辭儀をして奧へ入る。
五郎　これ、また汁の實はかりむしやうによそふなよ。あゝ世話のやけた奴等だ。

ト帳を調べてゐる。この中花道より松五郎件の脚絆草鞋を穿き菅笠を持ち出て來り、直に舞臺へ來り、

松五　はい、御免なさいまし。

五郎　いらつしやいまし、何ぞ御用でござりまするかな。

松五　安い道中差を一本お見せなすつて下さい。

五郎　左樣なら、仕入物でもよろしうござりませうな。

松五　ほんの大脅しでござりますから、何でもよろしうござります。

五郎　畏まりましてござります。（ト戸棚の中より脇差を二三本持ち出來り、）大概この位なところでよろしうござりませう。

松五　これおやあよすぎる位だ。

ト兩人捨ゼリフにて脇差を見てゐる。と上手より以前のお咲、お榮を連れて出來り、下の方へ行きながら五郎兵衛を見て、

お咲　さきほどはおやかましう。

五郎　いやお咲さん、今お歸りでござりますか、まあお話しなさいな

お咲　有難う存じます。

お榮　まだ御飯前でござりますから、お急ぎなさいますわいな。

五郎　御飯はこちらで上げますから、まあ話しておいでなさいましな。

お咲　いえ、また上りますわいな。

ト言捨てゝ二人は花道へ入る。松五郎はお咲に目をつけてゐる。五郎兵衛は脇差を抜き持つたまゝ拔身へ顏をうつしながら、

五郎　まあいゝぢやあござりませんか、お咲さん、ちよつとお話しなさいな、お咲さん〳〵。

ト夢中になつて呼びながら、段々前へ出て、持つたる拔身を松五郎の顏の前へ突出す。松五郎びつくりして、

松五　これさ、あぶねえわな

ト これにて五郎兵衛心附き、

五郎　へい、この位な所では如何でござりますな。

ト松五郎の前へ刀をおく。

松五　いや負けをしみな番頭さんだ。もし、そりやあさうと、今のはありやどちらのお上さんでござりますね。

五郎　いえ、あれは圍ひ者でござりますよ。

松五　へえさうでござりますかえ。お家はこの御近所と見えますね。

五郎　直き此の先の横町で、角から三軒目でございますが、旦那といふのは上州の商人で、これはこの頃のことでござりましたが、伊豆へ湯治に行かれまして、此間などもあちらから山葵を澤山持たして便りがござりましたが、何でもわたくしの思ひますには、ありやあ異見かと思ひまして。

ト　これを聞き、松五郎頷き思入あつて、

松五　そりやあ何故ね。

五郎　はて、おれが留守に浮氣なことをすると、此のやうに澤山辛い目に合はせるといふ、判じ物かと思はれます。

松五　茶番ぢやアあるめえし。（ト脇差を取り）それぢやあ番頭さん、この方にしませうよ。

五郎　そちらなら二百疋にいたしておきまする。

松五　承知しました。（ト懐より額金を二つ出し）金をよく御覽なさい。

五郎　（金を改め見て）へいよろしうござります、有難う存じます、

松五　大きにおやかましうござりました。

ト　件の脇差を差し、花道附際まで行き、花道揚幕の方へ思入あつて、

それぢやあ角から三軒目か。

五郎　え。

松五　いやなに、下緒はお前のところにやアあるまいね。

五郎　それは糸屋へいらつして下さいまし。

松五　知つてるらアえ、間拔め。

ト　少し小聲にて言ひ、思入あつて花道へかゝる。この中花道より稽古所のお仙、粋なる拵へにて吾妻下駄を穿き、湯上り浴衣を抱へ、糠袋手拭を持ち出來り、花道にて松五郎と行合ひ、松五郎は花道を入り、お仙は舞臺へ來り上の方へ行かうとするを五郎兵衞見て、

五郎　もし／＼お仙さん、ちよつと／＼

お仙　おや番頭さん、何の御用だか知りませんが、ちよつと一風呂入つて來ますから、歸りにして下さんせいなあ。

五郎　いや、手間は取らせないから、ちよつとこゝへかけておくれ。

お仙　何でござんすえ。

ト　揚縁へかける、五郎兵衞こなしあつて、

五郎　その用といふわな、お仙さん、今日はよいお天氣で

ございますね。
お仙　常談を言つちやうあいやでございますよ。
　ト立たうとするを引留めて、
五郎　いや〳〵常談でない、大眞實。
お仙　何だか早くおつしやいなねえ。
五郎　そんなら言ふが、お仙さん笑つてはいけないよ。
お仙　笑ひはしないから早く言つておくんなさいよ。今の
　中お湯へ入つておかないと、また行けないからさ。
　ト焦つたきこなし、
五郎　あゝ、改まつては少し言ひ憎い譯だぜ、もしお仙さ
　ん、お前のお隣りのお咲さんね。
お仙　お咲さんがどうしましたえ。
五郎　どうか話は出來まいか。
　トお仙の背をそつと打つ。
お仙　なに、話とはえ。
五郎　これさ、お前も粹のやうにもない、取持つておくれ
　といふことさ。
お仙　ほゝゝゝゝ。
五郎　それ〳〵、それだから笑つてはいけないと斷つてお
　くのだわね。

お仙　笑ふまいと思うても、あんまりをかしいので。
五郎　え、
お仙　いえなに、をかぼれをしなさんしたのぢやな。
五郎　いやもおかぼれどころか深みへ入つて、首ツたけ惚
　れて〳〵惚れぬいたお咲さん、どうかお前の働きで、あ
　の子がうんと言ひさへすれば金銭には不自由させぬ。ど
　うかお前の御工夫で得心させて下されば、無駄骨は折ら
　せませぬ、もしお仙さん、この通りお頼み〳〵。
　ト手を合してながむ、お仙困りし思入にて、
お仙　そのやうにおつしやるなら話しては見ませうが、あ
　あいふ旦那のあることなれば。
五郎　さあ、旦那は旦那、わたしは間夫、蔭の者ならいゝ
　ぢやあないか。
お仙　ほんにまあ押の強い、いえなに、押手を強くわたし
　が行つて、どうか話して見ませうわいな。
五郎　それは忝ない、もし、お脊でも流しませうか。
　トお仙の脊を洗ふ眞似をする。
お仙　あれ、氣味の悪い。
　ト立上る。
五郎　もし、どうか何分。

ト をがむ。

お仙　とんだ仲人を頼まれたわいな。

ト唄になり、お仙は上手へ入ると、花道より前幕の小道具屋與市出來り舞臺へ來て、

與市　番頭さん、今日は。

五郎　いやこれは與市さん、何ぞうぶなものでもありますかね。

與市　お前さんに向くものは何にもありません。そりやあさうと半七さんはお留守でござりますかね。

五郎　奥にゐるが、何ぞ御用かね。

與市　ちよつとお目にかゝりたいのでござります。

五郎　それぢやあ呼んで上げませう。

ト立上る。

與市　これは憚りでござります。

ト合方になり五郎兵衛奥へ入ると、引違へて前幕の半七出來り、與市を見て、

半七　これは與市どの、ようおいでなされました、まあこちらへお上りなされませ。

與市　もうお構ひなされますな、さうしちやあなりませぬ。早速ながら半七さん、先達のお約束の短刀の後金、あまり長くなりますが、どうなさる思召しでござります。

半七　さあ、その事に就きわしもお前の所までちよつと行かうと思うてゐれど、店の事に隙がなく、大きに御無沙汰になつて濟みませぬ。

與市　そりやあ御用多でござりませうから、おいでなさらなくつてもようござりますが、何にしても後金を早くして下さいな、わたしの方も外へ賣れば直に金の取れるのを、達てとおつしやるから、わたしも達引でお前さんの方へ上げたのだ、それをかうべん／＼と引つぱられちやあまことに迷惑でござりますから、手附の半金は待引けを立つてお返し申しますから、どうぞ短刀は外へ賣らしておくんなせえ。

半七　さう言はるゝは尤もぢやが、もう長くとは言ひませぬ。わしが、方にもたしかに金の出來る當があるのなれど、ちつと先方に取込があつたので、それ故延々になりましたが、それに就いて傳次の方からお前へ何も頼みはござらぬかな。

與市　話はありましたけれども、さう／＼わたくしの方だつて待つちやあゐられないぢやあござりませぬか、またあれほどまでに言ひなすつて、今になつてもうちつと待

つてくれぢやあ、あんまりわたくしを踏附にするといふものだ。

半七　いや、傳次とてもなか／＼こなたを踏附にするといふ心ではなけれども、今も言ふ通り當にした金が少しおそうなつた故、こなたにも腹を立たして濟まぬけれど、こりやきつと出來るに違ひなければ、どうかもう一日二日のところを勘辨して下され。

與市　そりやあまあ今までさへお待ち申したものだから、一日や二日のことなら仕方もございませぬから、お待ち申しませうが、その替り今度間違ふとお斷りなしに、外へ賣りますが、そこは御承知でございませうね。

半七　えゝもう、そりや間違ひはござらぬわいの。

與市　それぢやあきつとようございますね。

半七　よいといふ事よ。

與市　今度間違ふと賣りますよ。

半七　間違ひはせぬといふに、

與市　何だか知れるものか、こんな間拔な話はありやあしねえ。（ト立上り、）あまりといへば馬鹿々々しい。

　ト口小言を言ひながら上手へ入る、後に半七ぢつと思入、この時奧にて、刀屋娘お花の聲にて「あれ母さま御免なされませいな。」と聲し、ばた／＼と足音して、島田髷、振袖娘にてお花逃げて出て來る。後より刀屋の後家おたれ、煙管を振上げ追ひかけ出來るを下女お大留めながら出來り、

お大　あゝもしお袋樣、どうぞ堪忍して上げて下さりませいな。

たれ　いゝや、うつちやつておくと彼女の爲めにならねえから、留めなさんな／＼。

　ト又立ちかゝるを、半七お花を圍ひ、

半七　これはしたりお袋樣、店頭で見ともなうござります、まあお靜になされませ／＼。

たれ　そなたが彼女を庇やるだけ、猶々腹が立つてならぬ、うぬ、どうするか見やあがれ。

　ト煙管を振上げるを留めて、

半七　わたくしだと申して、これが見て居られますものか

お大　どうぞまあ下においでなされて下さりませいなあ。

　ト兩人捨ぜりふにておたれをいろ／＼に宥める、これにておたれ下にゐる。

半七　いつたいこれは、如何なされたのでござります。

たれ　さあ半七聞いておくれ、このやうに背丈も延びた、

たつた一人のこの娘、殊にわたしは生さぬ仲の、義理があればどうぞして、相應な所があつたらば、立派にして嫁入らさうと思つてゐたところ幸ひよい口があつたから、嫁にやらうといへば否の應のと我儘なことばつかり、ほんにもう此女が家にゐられては何やかやわたしの邪魔に、いえなに、邪魔にでもわたしがすると思うてどうのかうのとぬかすのであらうが、これ半七、わしが惡いか彼女が惡いか、よう考へても見やいの。

半七　へい。

　ト挨拶に困る思入

たね　それだからわたしや腹が立つてならぬのぢや。

　ト又立ちかゝるをお大留めて、

お大　あゝもしお袋樣、そのお腹立は御尤もさまではござりますれど、またお花樣のお心にも、(トちよつと半七へ思入あつて)いえ何もお心に、あなたをお恨みなさると申すやうなことはござりませねば、どうぞまあ御了簡して上げて下さりませ。(トお花へ向ひ)もしお花樣、あなたが情の強いことをおつしやる故、お袋樣のお腹立ち、早うお詫をなされませ、さ、早うお詫をなされませいなあ。

　ト言ふ、これまでお花は半七の後にちつと泣伏してゐて、此の時少し前へ出て手を支へ、

お花　母樣どうぞ御免なされて下さりませ。

たね　これ、御免なされといふのは、嫁に行くのを御免なされか、また御免なされませ嫁に行くと言やるのか。

　トきつと言ふ。

お花　さあ、それは、

たね　、それでは分らぬ、どつちの道こゝで返事をしや。

お大　其のお返事もつい應と、どうも直にはおつしやられますまい、嫁入りは一生の定め事、先樣へおいでなされば、もう否應はならぬもの、せめてお見合ひもなされたその上のことになされて上げて下さりませ。

たね　えゝまた汝までがつべこべと、男でさへありや何でもよいぢやないか、殿御の毛並を選ふといふは、そりやわたしなどのいふことぢや。なう半七、さうぢやないか。

半七　まことに、御尤も千萬でござります。

　トいやらしきこなし。

たね　それ見よ、誰に聞かせても大概積りにも知れたものぢや。わしも亦かう言出すからは親の高下、否と言はうが應と言はうが、なんのやらずにおくものか。

お大（思入あつて、）左様なればお袋様、どうぞ斯うなされて下さりませ、わたくしがお連れ申し、御得心の行くやうにお勸め申して見ますれば、どうぞ暫くわたくしにお任せなされて下さりませ。

たれ　そりや得心さへさせることなら、汝に任してやらうから、早く返事を聞かせてくりや。

お大　畏まりましてござりまする。（トお花に向ひ）さあお花樣、わたくしと御一緒にちよつと奥へおいでなされませ。

トお花の手を取つて引つぱる。

お花　いゝえ、わたしや。

ト半七へ思入。

たれ　どうしたと。

お大　それ、また叱られまするわいな。

ト唄になり、お大捨ゼリフにてお花の手を取り引張るお花は半七に心の殘る思入にて、お大に引つぱられながら奥へ入る、おたれ後を見送り、

たれ　ほんに、あのやうな情の強い、憎らしい奴は。（ト言つたが、半七のぢつとうつむいてゐるを見て、）またこゝには可愛らしい。（ト半七の側へ行き、）これ半七、何故そのやうにふさいでゐるのぢやぞいの。

半七　へい、ちつと家業向の事に就きまして、心配がござりまする故。

たれ　何も家業向の事に、そのやうに心配してやるに及ばぬ、こゝは始終は汝の家。

半七　え。

たれ　いえなに、内輪のそなたぢやによつて、ちと下相談があるわいの。

半七　なに、わたくしに御相談とはな。

たれ　外のことでもないが、あの娘を他家へやり、わたしが好いた戀聟取つて、この家を嗣ぐ積りぢやわいの。

半七　それはお目出度いことでござりまする。

たれ　さあ、それがねつから目出度うないわいの。

半七　そりや又何故でござりまするな。

たれ　何故というてその戀聟が、どうもわしを嫌ふ樣子ぢやわいの。

半七　それは了簡違ひな奴でござりまするな。

たれ　汝それをば了簡違ひぢやと、思うてゐやるか。

半七　思はいで何といたしませう。

たれ　そんなら言はうが、その戀聟といふはの。

半七　その御新造様は、
たれ　そなたぢやわいの。
　ト顔を隠す。
半七　え
　トびつくりなし、立上らうとするをおたれ半七の裾を捉へ、いやらしきこなしにて、
たれ　これ半七、これほど思ふわたしの心、どうぞそなた推量して言ふことさへ聞くならば、有金殘らずそなたの物、それをちび／＼小遣錢に二人手を取り連立つて、物見遊山の樂しみを、夫婦仲よくして見たいわたしの願ひを、これ半七、どうぞかなへてくりやいの。
　トいやらしき身振りにて半七に寄添ふ、半七術なき思入にて、
半七　その思召しは有難う存じまするが、生憎わたくしは女が斷物でござりまする。
たれ　何の斷たずともよいことを。
　ト半七の手を取らうとするを振拂つて、
半七　あゝもし、店頭で外聞が惡うござりまする、まあ其の返事は何れ考へましてからいたしますれば、あなたはどうぞ奥へゐらしつて下さりませ。
たれ　奥で待つから、色よい返事を。
半七　どうかまあ、いたす積りでござりまする。
たれ　そんなら半七、（ト半七と顔見合せ、）待つてゐるぞよ。
　ト唄になり、いやらしき身振りにて奥へ入る、半七思入あつて、
半七　あゝ人の心も御存じなく、お年に耻ぢぬ色好み、ああ困つたお方ぢやなあ。
　ト思入れ。奥よりお花とお大出て、お花半七に縋りて、
お花　これ半七、わしやどうせう／＼、どうせうぞいなあ
お大　お前よい思案はござんせぬかいなあ。
半七　さあ、思案というてどうも外に仕様もなければ、お袋樣の言葉に附き、嫁入りなさるがよろしうござりませう。
お花　そりや聞えぬ、聞えぬわいなあ。これまで深う言交し、そなた一人を夫と思ひ外の男は持つまいと、思うてゐるを母さんのお胴慾にも今のお言葉、わしを憎んで餘所ほかへ嫁入らさうとおつしやるさへ、勿體ないが恨めしいに、そなたまでがそのやうに嫁入りせよとは、そりや聞えぬ、何故その口で外へはやらぬ、こゝで添はれぬ

ことなれば連れて退いて夫婦になると、何故に言うては
くれぬのぢや、そりやあんまりぢや、あんまりぢやわい
なあ。
ト泣伏すを、お大介抱して、
お大　これほどに思うておいでなさるもの、情ないことを
言はずとも、何處へなりと共々に連れて退いて上げて下
さんせ。どうぞわたしもお頼みぢやわいなあ。
ト半七へ縋つて言ふ、半七始終ぢつと思入あつて顏を
上げ、
半七　そのやうにこのわしを思うて下さるお志しは忝ない
が、今こゝを連れて退かれぬその譯は、國許より我兄者
人主膳どのが短刀の詮議に就いてはる〳〵と、當地へ出
府なされてなれば、少しも早う後金こしらへ短刀を我手
に入れ、持參せねばならぬ故、お氣の毒ぢやがあなたを
ば、どうも連れては退かれませぬ。
お花　そんなら後金をこしらへて、短刀さへ手に入らば、
お大　連れて退いて、
兩人　下さんすか。
半七　假令短刀手に入りても、彼堅い兄者人、猥な事をい
たしたと御勘氣でも蒙らば、この艱難も水の泡、
トぢつとなる。
お花　そのやうに言やるのは、どうでもそなたはわしを嫌
ひ、あの母樣と夫婦になる心ぢやな。
半七　何のわしにそのやうな。
お花　いや、さうぢや〳〵、あの母樣と夫婦になる氣に違
ひない、そりや胴慾ぢや、胴慾ぢやわいなう。
トハアッと泣伏す、半七も當惑の思入、この中お大思
入あつて頷き、立上つて棚にある刀をそつと持來り、
お花の傍へ來り思入あつて、
お大　もしお花樣、いくらお歎きなされても半七どのがあ
のやうに言うてなれば、とてもお望みは叶ひませぬから、
もうさつぱりと思ひきつておしまひなされませ。
お花　いゝや、わしや思ひ切られぬ、切られぬわいの。
お大　これはしたり、あなたも聞分けの惡い。それ、これ
で、思ひきつておしまひなされませいな。
ト件の刀にて自害する仕方をして見せる、お花呑込み
て、
お花　おゝさうぢや、南無阿彌陀佛。
ト自害しようとするを半七見てびつくりなし、あわて
て縋り留め、

半七　あゝこれ、早まつたことをなされまするな。
お大　それなら、連れて退いて上げて下さんすか。
半七　それだといふて。
お花　やつぱりわたしは。
　ト自害をしようとする。
半七　どうも、あなたを。
お大　得心して下さるか。
半七　さあ、それは、
お花　さあ、
三人　さあ〳〵〳〵。
　トお花半七に縋りて、
お花　どうぞ、連れて退いてたもいなう。
　ト半七當惑の思入、この時奥よりおたれ出來り、この體を見て、
たれ　えゝまた店で、じやらくらしやあがるか。
　トこの聲にびつくりなし、お花飛退きて、
お花　お前は母さん。
たれ　母さんもないものだ、早く奥へ行かねえか。
　トきつと言ふ、お花是非なく立上り、
お花　まゐりまするわいな。
　ト半七に心の殘る思入にてお大附いて奥へ入る。おたれ後を見送りて、半七の傍へ寄り、
たれ　これ半七、今娘とこゝで何をしてゐやつたのぢや。
　ト半七に寄添ふ。
半七　またしても店頭で、ちとおたしなみなされませ。
たれ　店頭ぢやとて構ふものか。
半七　御常談をおつしやりまするな。
たれ　常談ではない、ほんまぢやわいの。
　ト半七の逃げるのを追廻す、この時奥にて、五郎兵衛の聲にて、「お袋樣、お袋樣」と呼ぶにびつくりなし、眞面目になり、半七も下にゐる。奥より五郎兵衛出來りて、
五郎　もし最前から魚屋が待つてをりまする、早うおいでなさりませ。
たれ　なに、魚屋が、えゝ折角うまい。
五郎　え。
たれ　いやなに、うまいお肴でも買ひませうか。
　ト半七に尻目遣ひをなし、いやらしき身振りにて奥へ入る。五郎兵衛思入あつて、
五郎　あゝ困つた婆さんだ。こう半七、貴樣も店頭で、ち

つとたしなんだがいゝぜ、

半七　はい、いえ何もわたくしは。

五郎　わたくしはぢやあない、あんな猥なことがあると、店の暖簾にも拘はることだ、以來きつとたしなむがいゝ、といふのは半七嘘ぢや、はておれも粹だ野暮は言はぬから、後家の言葉に從つて、こゝの後嗣になるがいゝ。然しそこが話だ、貴樣とても若いこと、後家も女のことなれば、どうしても家が猥になり勝ちなれば、貴樣から後家へ言はうには、如何にも得心いたしませうが、どうか番頭の五郎兵衞を後見にして下されと斯う言ふわ、所で後家は汝のいふことだから、うんといふ、そこでおれが後見なれば、こゝの家の有金を自由にして、悉皆あのお咲がところへ。

半　えゝ。

五郎　いやなに、お先まつくらにたゞ得心してはいけないぞ、必ずともにそのことを忘れぬやうに頼むぞ、頼むぞ。

半七　そりやもしなる心なら申しませうが、元より何もわたくしは。

五郎　さ、好きはしまい、厭であらうが、そこを一番我慢をして得心すれば、こゝの家の有金は殘らず汝のもの。なりや其方もよし後家もよし、おれもよし。然しまだ、おれが方に返事のないのが甚だ氣遣ひ、あ、これを思へば倅一人の女に焦がるゝもあり、また二人の女に惚れられるもあり、あよい男に生れた一得、あのこゝな、

ト半七の背をたゝくを、木の頭、

あやかりものめ。

ト半七へ顎でこなし、半七は顔をそむける。五郎兵衞は得心しろと頼むこなし、この模樣よろしく稽古唄にて、

ト道具出來次第に引返す。

ひやうし幕

(妾宅の場)――本舞臺三間常足の二重、大和葺軒口、正面眞中に茶立口、上下腰張のある茶壁、上手に障子屋體、腰通り船板の蹴込み、よき所に沓脱石、上手に石燈籠、手水鉢、上下に四つ目垣、例の所きれいなる門口、總て雪の下妾宅の模樣、二重の上に長火鉢をなほし、鍋、土瓶など掛け、上の方に以前のお咲住ひ、蝶足の膳へ酒肴を載せ、酒を飲みゐる下手にお榮前に鰹節箱をおき鰹節をかいてゐる。こ

の模様端唄の合方にて幕明く。

お咲　もうお鰹節はたいがいにして、お酌をして下さんせいなあ。

お榮　畏まりました。

ト酌をする、お咲一口飲みて、

お咲　今度つけたお酒は大そうよいねえ。

お榮　左樣でござりまするか。旦那樣などは湯治場にゐらしつては、よいお酒は上れますまいな。

お咲　さうさ、伊豆などにはこんなよいお酒はあるまいよ、どうぞこの酒のある中に、早うお歸りなされぱよいがな。

ト酒を飲みゐる。終始端唄の合方にて、花道より以前の鑄掛松出來り花道にて、彼方を見てうなづき舞臺へ來り、

松五　はい、御免なさいまし。

お榮　どなたでござんすえ。

松五　お咲さんとおつしやるのは、こちら樣でござりまするかな。

お咲　はい、お咲はわたくしでござりますが、どちらからおいでなされました。

松五　左樣なら、御免下さいまし。(ト内へ入り)わたくしは伊豆からまゐりました。

お咲　なに伊豆から、それでは旦那からのお使でござんせう、まあこちらへおかけなされませ。

松五　もうお構ひ下さいますな。(ト椽へ包をおろし、中より手紙を出し)ええ、旦那樣がおつしやりましてござります。委細は手紙にも認めてあるが、この節疝で手が顫へて書けないから、代筆だとお斷りがござりました、それに又先達中山葵を澤山持たして便りをしたが、たしかに此方へ屆いたか、よくお聞き申してくれとおつしやりましたが、屆きましたかな。

お咲　それはたしかに屆いたと、おつしやつて下さりませ。

松五　左樣なら、いづれ晩ほど上りますから、どうかお返事をお願ひ申します。

お松　さうでござんすか、承知しましたが、それではまだちよつくりには戻られぬと見えますな。

松五　まだちとお手間がとれませうよ。

お咲　それは困つたものでござんすなあ。

松五　わたくしは又外に賴まれた使もありますから、その

用を足しまして晩ほどお返事をいたゞきに上りまする。

お咲　大きに御苦勞樣でござりました。それはさうと、あなた御時分でござりませう、御飯を上つておいでなされませ。

松五　有難う存じまするが、唯今道で食事をいたして參じました。

お榮　もし、御遠慮をなされまするなえ。

松五　どういたしまして。(ト門口の外へ出て)左樣なら、いづれ晩ほど上ります。おやかましうござりました。

ト思入あつて松五郎花道へ入る。お咲手紙を開き讀んでゐる、この內下手より前幕のお虎婆出來り直に內へ入る、お榮見て、

お榮　もし、お婆さんがおいでなさいました。

お咲　おや、お母あ、よくおいでだね。

お虎　あんまりよくも來ねえのよ。(ト言ひながら上へ上り)何だ、朝からだいぶ奢り込むの。

お咲　一つお上りな。

お虎　いや、四段目の山名のセリフぢやあねえが、酒も咽喉へは通らねえよ。

お咲　お前病氣でも惡いのかえ。

お虎　馬鹿ア言ひなさんな、煩ふやうな老碌をするものか。

お咲　それに又何で好きなお酒が飲めないのだえ。

お虎　借金で首が廻らねえからよ。

お咲　また負けなさんしたな。

お虎　さうよ。それだからお前の所へ、ちつと借りに來たのよ。

お咲　お前の負けるも久しいものぢやわいな、それだからわたしが言はぬことではない、もうなぐさみは止しなさんせといふに、やつぱりお前は性懲りもなく、ほんに困つたお人ぢやわいな。

お虎　困るとは何が困るのだ、そんなに又困る親なら、くびり殺してでもしまふがいゝや、あんまり御勿體ねえことをぬかしやあがるな、このお多福め、こんな時に世話にでもならうと思へばこそ、どこの牛の骨だか馬の骨だか知れもしねえ奴の餓鬼を、おれが娘にしてやつたのだ、それに何だ、うぬはいゝ子の振をしやあがつて、この物の高いのに年が年中絹布ぐるみで、やれ圍ひ者だのお妾だのと、箸より外重いものを持たねえのは、そりやあ皆誰のお蔭だ、いやさ、誰のお蔭だよ。

ト たゝきたてゝ言ふ、お榮見兼ねて留めて、

お榮 まあお袋さん、靜に言つてもお話の分かること、ちつと靜におつしやりませいなあ。

お虎 えゝ、手前達の知つたことぢやあねえ、打ちやつておきやあがれ。（トお榮を突倒し、お咲の前へ進み、）さあ、困るから金を二十兩貸してくんな、おい、貸してくんねえよ。

ト お咲の顏を烟管にて突く。

お咲 何をしなさんすぞいな、假令お前がいくら貸せと言ひなさんしても、これが僅なことではなし、二十兩といふお金、それも旦那がおいでのことなら、おねだり申すといふ當もあれど、何をいふにもこの通り、まだちよつくりには戻られぬといふ旦那からのお手紙が、今こゝへ屆いたばかり、わたしさへどうしようとふさいでゐる所ぢやわいな。

お虎 それぢやあ何か、旦那がゐなくつちやあ、どうしても手前にやあ算段は出來ねえといふのだの。

お咲 旦那がおいでなさらねば、出來ぬのは知れたことぢやわいな。

お虎 あゝ仕方がねえ、借金で苦しむより死ぬはうが遙に優だ。お咲おさらばよ。

ト 作の經師小刀を取り、咽喉を突かうとする。

お榮 あゝもしあぶない、お待ちなされませいなあ。

お咲 これ母さん、お前氣でも違うたのかいなあ。

お虎 氣が違はなくつてよ、あつちもこつちもあしだらけで、たて催促で逆上せあがるやうだ、そんな苦しみをしようより死ぬはうがよつぽど優だ、留めずとも放しねえな。

ト 振放さうとするをしつかりと留めて、

お咲 どうしてこれが放されるものかいな。

お虎 留めるからにやあ金を貸す氣か。

お咲 そりやあお前無理ぢやわいな。

お虎 それぢやあ、やつぱり。

ト 死なうとする。

お咲 あゝもし、待ちなさんせいな。

お虎 そんなら貸すか。

お咲 さあ、それは、

お虎 さあ、

兩人 さあ〳〵〳〵。

お虎 これさ、年寄りは氣が短いわな。

ト　お咲を突く、お咲是非なき思入にて、
お咲　ようござんす、どうか都合をしようわいな。
お虎　なに、都合する、（ト小刀を投り出し）娘、度々のことで氣の毒だなう。
お咲　今日のところは都合をするが、重ねてはならぬぞえ。
お虎　どの面下げて來られるものかな。
お咲　それでは晩に取りに來なさんせいな。
お虎　どうぞ頼むぞよ。（ト立上り）お酒半とんだお邪魔をしたの。
ト　言ひながら履物を穿き行かうとする。
お咲　あゝもし母さん、四つ頃でなければいけぬぞえ。
お虎　それぢやあ四つには間違ひなく、
お咲　こしらへておかうわいな。
ト　この中お虎門口の表へ出て、
お虎　あ、孝行な娘だなう。
ト　ぺろりと舌を出し、下手へ入る。
お榮　もし、御機嫌なほしに、もう一つお上りなさりませいな。
お咲　いやもうわたしや飲みたくないから、こゝを片附けておくれ。
お榮　畏まりました。
ト　稽古唄になり、お榮膳を持ち奥へ入る。これと一緒に下手より以前のお仙出來り、直に内へ入り、
お仙　お咲さん、今日は。
お咲　おやお仙さん、よくおいでなさいました。
ト　元氣なく言ふ、お仙は思入あつて二重へ上り、
お仙　お前大層今日はふさいでゐなさんすが、どこぞ氣合でも悪いかえ。
お咲　別に變ることはござんせぬが、ちつと氣の揉めることがござんす故、それでふさいでゐるのぢやわいな。
お仙　氣の揉めるとはどのやうなことか、お心安いわたしのこと故、話して聞して下さんせいな。
お咲　さあ、その氣の揉めるといふは、晩までにわたしや急にお金が二十兩入るのぢやわいな。
お仙　なに、お金が二十兩入るえ。
お咲　あいなあ、今夜四つ頃までに出來ればよいのぢやが、お前何處ぞへ頼んで見ては下さんせぬか。
お仙　それなればちやうどよいことがあるわいな。
お咲　よいこととは何でござんすえ。

お仙　さあ、聞きなさんせ、先刻わたしがお湯へ行きがけ
あの刀屋の前を通る時番頭さんが呼びなさんしてな、お
前へどうぞお頼みだが、お咲さんを取持つてはくれまい
か、出來さへすればお金には不自由させぬと言うたこそ
幸ひ、騙してお金をお取りなさんせいな。
お咲　それぢやといふて外聞の悪い。
お仙　お前もまあ氣の弱い、お金故には身を賣るものもご
ざんすわいな。
お咲　（思入あつて、）さうでござんすなあ、それではお仙
さん、お前よいやうにして下さんせいな。
お仙　お前得心かえ。
お咲　得心は得心ぢやが、どうも身を任せることは。
お仙　それはお前の口頭で、何とでも言はしやんせいなあ。
お咲　どういうてよいか、知れぬわいな。
お仙　おや、初心ぶつて憎らしいねえ。
　　トお咲の背を打つ。
お咲　あれ、そんな悪婆は、わたしにはむかないものを。
お仙　旦那仕込みでやるがよいわな。（ト門口の外へ出て、）
とんだわたしは提灯持だねえ。
　　ト唄になり下手へ入る、お咲殘り思入あつて、

お咲　お仙さんがあのやうに言うて下さんす故、お頼み申
しは申したものゝ、假令嘘にも此事がもしも旦那のお耳
へ入らば、どうもわたしは濟まぬもの、お世話をなさる
甲斐もなく、これまでおいでなされても、枕交したこと
もなく何やかやと御親切なるなされ方、今日も今日とて
このやうにわたしを案じたこのお手紙、どういふ旦那の
お心か、一圓合點が、（ト件の手紙をさらりと開くを道具
替りの知せ、）行かぬわいなあ。
　　ト手紙を見て考へる思入、よろしく誂への合方にてこ
の道具廻る。
　　（元の刀屋の場）　本舞臺元の刀屋の道具になる。
　　トこゝに半七ちつと思案してゐて、
半七　あ、短刀の在所が知れても、後金の才覺ならぬ腑甲
斐なさ、殊更こちらのお家にも長くゐては此の身の害、
どうぞお暇願はうと思うてゐれど短刀が、手に入らねば
それもならず、あゝどうかして金こしらへ、この苦艱を
ば脱れたいものぢやなあ。
　　トちつと思入、この時暖簾口よりお花出て、奥を窺ひ
ながら半七の側へ寄り、

お花　これ、半七。

半七　おゝお花樣、またこゝへおいでなされては、お袋樣がやかましうおつしやりまする、早く奧へおいでなされませ。

お花　いや／＼、今母樣は親類のお客なれば、おいでなさる氣遣ひない、その間にわしがこなたに遣らうと、そつと持つて來たこのお金、（ト金包を出し、半七の前へ置き）さ、これで早うその短刀とやらを求めてたもいの。

半七　これはまあ御親切に、有難うは存じまするが、母御樣へ內證にて五十兩といふお金お借り申して此の事がもしも知れるとあなたの御難儀、わたくしはまあどうなりと才覺いたしますれば、早うこのお金は元の所へそつと仕舞うておいでなされませ。

お花　わしを思うてそのやうに心遣ひしてくれるのは嬉しいが、假令知れてもだいじない、愛しいそなたが困つてゐやるをどうまあ見捨てゝおかれうぞ。もし母樣がやかましうおつしやれば、汝の難儀にもなること故、わたしが死んで言譯はするわいの。

半七　めつさうな、あなたを殺してどうなるものでござりませう。

お花　いゝや、そなた故ならわしや死んでもだいじないほどに、早うそのお金を使やいの。

半七　それぢやと申して、みす／＼あなたの難儀になるを。

お花　えゝも、そなたも殿御のやうにもない、早う持つて（ト金を半七の手へ持添へ）行きやいなう。

トこの中奧よりおたれ出來り、これを見て、手早く金を取上げ、

たれ　汝はまあめつさうな、いつの間にやらわしが眼を拔き、大それた金などを持出しをつて、うぬどうするか見やあがれ。

トお花へかゝるを半七留めて、

半七　あゝもし後家樣、これにはだん／＼。

たれ　さあ、そなたがお金の入るわけも知つてゐる、彼女は憎いが汝に何も科はない。これ半七、この金がほしいかや。

半七　ほしいと申して、道ならぬそのお金。

たれ　道ならぬ金ではない、わしがやればよいではないか。

お花　いゝえ、それはわたくしが。

たれ　えゝ、何をおのれが。（トきつと言ふ、これにてお花控へろ。おたれ半七の側へ寄り）さあ、この金遣るからうんと言や。

半七　どうもそれは、

ト立ちかゝるを捉へて、

たれ　あこれ、情なうせすと、言ふこと聞いて。

ト半七に寄添ふを、お花見て悸へ兼ね、

お花　あまりな母さん。

ト立ちかゝる。

半七　あもし、

トお花をゐながら留める。これを道具替りの知せ。

たれ　くりやいの。

ト尚も半七に寄添ふ、半七は當惑のこなし、お花は泣伏す、この模樣よろしく早い合方にて、道具廻る。

（妾宅裏の場）——本舞臺三間の間眞中に二軒立の惣雪隱、手水鉢、この上手掃溜、ずつと上の方黒塀、三尺の開戸、この塀の内より掃溜へかけて見越しの松、雪隱の後長屋の下見、下の方路地口、黒塀、總て妾宅の裏、庭口の體。時の鐘四つの拍子木にて道具留る。と、時の鐘端唄になり、花道より松五郎うそうそと出來り舞臺へ來て、こゝが裏口だなあと思入あつて頷く、人音する故掃溜の蔭へ小隱れする、と花道より以前の番頭五郎兵衛出來り、花道にて、

五郎　先刻賴んだお仙さんから、お咲の話が出來た故四つを打つたら庭口へ、忍んで來いとの使が來た故、四つを打つのが待遠で、番太郎に二百やり、少し早く打つて貰ひ、裏からそつと拔けて來たが、早くお仙さんに逢ひたいものだ。

トやはり端唄にて舞臺へ來る、路地口よりお仙ぶら提灯を下げて出來り、舞臺にて、

お仙　おや、五郎兵衛さんでござんすかえ。

五郎　おゝお仙さんか、逢ひたかつた／＼。先はどはお使だつたが、いよ／＼首尾はよいのかえ。

お仙　よい所ぢやござんせぬ、ものゝ出來る時といふものは、よい都合な事がござんしたわいな。

五郎　はあゝ、よい都合なことゝいふは。

お仙　先刻お前さんに賴まれてから、お咲さんに話さうと家へ行つて見たところ、大層ふさいでゐなさんす故、どうした譯と聞いたらば、繼母のお虎婆さんが二十兩貸し

てくれ、生きても死んでもをられぬ譯故、貸してくれずば死ぬと言はれ、脅しとは知りながら親のこと故お咲さんも苦勞にしてゐるそこへ附込み、金を借りて上げるからお前の知つての五郎兵衞さんの言ふことを聞きなさんせと、たうとうわたしの口頭で口說きおとしましたわいな。

五郎　いやそれは有難い〳〵、日頃から仲のよいお前故出來たのだ、わしが爲めには結ぶの神、お仙大明神さまさま。

お仙　ほんにお前のおだてに乘つて言ふのではござんせぬが、何といつても旦那のある身、ごく內々ですること故わたしでなければ出來ぬわいな。

五郎　お前へお禮は、お咲と一緒に芝居へでも行きませう。

お仙　それは有難うござんすが、さうして先刻さう申して上げたお金は、持つて來て下さんしたらうな。

五郎　おゝ、そりやこゝへ持つて來た。

　ト懷から財布を出して見せる。

お仙　そんなら今お咲さんにさういつて、庭口を明けて上げるから、そこに待つてゐなさんせ。

五郎　おゝ待つてゐろとも〳〵、思ひに思つた戀人に今夜いよ〳〵逢はれるもお前のお蔭、(ト袂から紙に包みし金を出し)お仙さん、少しばかりだが。

　ト金をやる、お仙取つて、

お仙　お止しなされればよいに。

五郎　そりやあほんの心祝ひだ。

お仙　ほんにお樂しみでござんすな。

　トお仙は路地口へ入る。五郎兵衞後を見送り、髷をなほし衣紋をつくりて、

五郎　とんだ五郎のセリフだが、今日はいかなる吉日か、日頃戀しい〳〵と思ひ思うたあのお咲に、かうして逢へるとは有難い。

　トこの中上手へ松五郎出て窺ひゐる、暗き思入にて五郎兵衞すかし見て、

そこにゐるのはお咲さんか。お咲さんぢやないかえ。

　トこれにて松五郎そつと雪隱へ入る。

はあゝ、扨はこゝで、

　ト五郎兵衞雪隱の側へ來て、入らうとすると內にて、

松五　えへん〳〵。

　ト咳拂ひをする。

五郎　はあゝ、お咲さんではないさうだ
　ト五郎兵衛思入、端唄にて上手の開きを明け、お咲出
　て五郎兵衛をすかし見て、
お咲　五郎兵衛さんかえ。
五郎　おゝ、お咲さんか。
　ト大きく言ふな、
お咲　あゝもし
　ト四邊へ思入あつて五郎兵衛に囁く、五郎兵衛嬉しき
　思入、お咲手を取つて内へ入り、後を閉る。この中雪
　隱の中より松五郎窺ひ出て、手水鉢にて手を洗ひ着物
　で拭き、開き口へ窺ひ寄り、明けようとして明かぬ思
　入、邊りを見て頷き、掃溜へ上り見越しの松へ手をか
　ける。此の時犬出て來て吠える、松五郎思入あつて袂
　から菓子を出して投げてやる。これを道具替りの知せ
　松五郎忍び込まうとする。この見得時の鐘にて道具廻
　る
　（元の妾宅の場）—本舞臺元の妾宅の道具、上手に
　屏風を立廻し、内に夜具をのべあること、こゝにお
　咲五郎兵衛住ひ、傍に目前の酒道具火鉢などよろし
　く、合方にて道具留る。と五郎兵衛いやらしき思入
　に、
五郎　これお咲さん、女中は何處へ行きましたか。
お咲　お仙さんの所へやりましたが、何ぞ御用なら呼びま
　せうか。
五郎　いや／＼呼ぶには及ばぬ、差向ひが有難いが、お前
　ほんたうにこのわしと、情人になつてくれる氣かえ。
お咲　お前もまあ疑り深い、わたしだとて旦那のある身、
　嘘にこんなことが出來ようかいな。
五郎　そりやさうではあるけれど、色で暮す鬪ひ者、どう
　も安心ならぬわいの。
お咲　そりやわたしの方でいふことでござんす、男振とい
　ひ氣立といひ、どこに一つ拔目のない好いたらしい番頭
　さん、そりやもう浮氣盛りの娘御には氣に入らぬかは知
　らぬけれど、生涯の身を任さうと女も少し了簡のあるも
　のなれば番頭さん、誰でもお前に思ひ附からうと、わたし
　が安心ならぬわいな。
五郎　そのくせこれまでについ一度そんな事もないが、今
　もお前のいふ通り、浮氣を捨てゝ眞實に、生涯の身を任
　されたら、金はおろか命でも、遣る氣になるかわしが持

前。

お咲　さういふことをお仲さんから、わたしも聞いて。

五郎　思ひ附いてくれたとか、それが眞なら有難いが、さうして今まで世話になつた且那どのは、どうする氣ぢや。

お咲　かうして世話にはなつてゐれど、旅商人といひながら、年中旅へばかり出て賴みにならぬお人故、斷つてしまひますが、お前世話をして下さんすかえ。

五郎　おゝ、しなくつてどうするものだ、したくつてしたくつてならぬのだ。

五郎　そんなことを言はしやんすが、外にお樂しみがござんせうな。

ト五郎兵衛を抓る。

五郎　あいたゝゝゝ。

お咲　その逢ひたいと言はしやんすも、外のお方でござんせうな。

五郎　何の外に樂しみなぞがあらうかいの。

お咲　そりや嘘らしうござんすぞえ。

五郎　嘘でない證據はこれだ。

ト財布から包み金を出し、お咲へやる。

お咲　このお金は。

五郎　情人になる證據にやるのぢや。

お咲　ほんたうに下さんすか。

五郎　何か少し金の入ることがあると聞いたから、實のあるところを見せようと、お前にやる氣で持つて來たのだ。

お咲　それは有難うござんすわいな。

ト金をいたゞき、煙草盆の中へ入れる。

五郎　さあ、わしが實を見せたからは、お前の實も見たいものぢや。

お咲　わたしの實も見せませうが、まあお酒でもお上りなさんせ。

五郎　いや／＼酒は飲みたうない、少しも早く。

お咲　はて、そのやうに急かずとも。

五郎　えゝ、こぢれつたい。

トお咲を追廻す。その以前上手より松五郎出來り、屛風の蔭へ入る。兩人はこれを知らず、お咲は五郎兵衛に追廻されて、屛風の內へ逃げて入るを、五郎兵衛追ひかけて屛風を明けると、內に松五郎お咲の襟際を提へて立ち、この脇にお咲はこれを見て顫へてゐる五郎兵衛はこれを知らず寄らうとするを突倒す、五郎兵衛起上つて又寄らうとして、松五郎と顏を見合せびつく

りする。
松五　間男見つけた、動きやあがるな。
五郎　やあ。
ト下にゐる、お咲こは／＼ながら、
お咲　お前は。
ト言ひかけるを、
松五　あゝこれ、おらあ亭主だぞ。
お咲　え。
ト合點の行かぬ思入。
松五　それ、晝間伊豆から歸つて來た、それ、おらあ亭主だ、亭主でなけりやあお前の旦那え、なんでもかでもおれが亭主だ。（トお咲にお前の爲めに惡いといふ思入をして呑込ませ、）よくおれが留守の中、こんな男を引込みやあがつたな。
お咲　何でわたしが。
松五　はて、何でもいゝから、いやさ、何でもいゝと言ひてえが、顔へ泥をぬられたからア、このまゝにやあならねえぞ。
ト始終お咲へ呑込ませるやうに言ふ。五郎兵衛は段々後退りに下にゐるを、
やい、間男め、こゝへ出ろ。
五郎　あゝもし、わしは間男ではござりませぬ。
松五　なに、ねえことがあるものか、女ばかりのこの家へ晝でもあるか四つ過ぎに、このしだらをば何とする、これでも間男でねえといふか。
五郎　さあ、それは。
松五　亭主の留守に此の床を何でからして取つてあるのだ。
五郎　さあ。
松五　間男に違ひあるめえが。
五郎　さあ、
松五　さあ、
兩人　さあ／＼／＼。
松五　きり／＼こゝへうしやあかれ。
トきつといふ、五郎兵衛おど／＼しながら、
五郎　あゝ斯うなつたら仕方がない、こゝにゐたのがわしが過り、間男になりませう。
松五　なりませうもねえものだ、柳樽にもある通り、家にも胡麻の蠅がつきと、旅の留守を附込んで、よく間男をしやあがつたな。汝が首から先へ取るから、野郎め覺悟

なしやあがれ。
ト松五郎脇差を抜き振上げる、五郎兵衛はびつくりして、
五郎　あゝこれ〳〵、首を取らうとはそりや短氣だ、短氣は損氣、損氣は短氣、どうぞ偏に世間並の七兩二分の首代で、お濟ましなされて下さりませ。
松五　いゝやならねえ、なんでも首を取らにやあならねえ。
五郎　えゝ情ないことになつて來たな。
ト首を押へる。
松五　そんなやくざな雁首は、あつてもなくつてもだ、切らしてしまへ。
ト白刃を突出す。
五郎　どうして〳〵やくざでもなんでも、この首を切られてたまりますものか、どうぞ偏に首代でお助けなすつて下さいまし。
ト手を合せてをがむ、松五郎思入。
松五　それほどをしい首ならば、切らずと手前の言ふ通り首代の金で濟ましてやらう。
五郎　それは有難うござります。これお咲さん、よう酷い目に逢はしなすつたな。
お咲　なんでわたしが知るものかいな。
五郎　えゝ知らぬといふがあるものか、このやうな陷穽へ人をぼんと嵌めてからに、その替りさつきやつた二十兩の金を返して下さい。
お咲　そんなら先刻のあの金を、
五郎　はて首代を出さねばならぬ。
松五　なんだ、お咲にやつた金を返せ、途方もねえことを言やあがる、そりやあ手前が忍んで來たので、勝手でお咲にやつた金だ、しみつたれなことをぬかしやあがると、やつぱり汝が首を取るぞ。
五郎　あゝこれ〳〵滅まるまい〳〵、やつた金は取返さないから、七兩二分の首代を堪忍五兩まけて三兩、そこらでまけて下さりませ。
松五　なに七兩二分の首代を五兩か三兩でまけてくれ、この節そんな安い物はねえ、七兩二分の首代もぐつと値上で百兩だ。
五郎　えゝ、（トびつくりなし）そんなにふめる首ではないか。
松五　そりやあ手前が言はねえでも、値打にしたら一百か

三百、二朱とふめねえ間拔な首だが、間男といふ肩書で百兩と値が極つたのだ。

五郎　あゝ我身ながら高いものだ。

ト首を押へ思入。

松五　さあきり〳〵と早く出せ。

五郎　早く出せといつたとて、こゝには持つてゐませぬものを。

松五　持つてゐざあ家へ歸つて、算段をして持つて來い

五郎　そんならどうでも百兩取る氣か

松五　ぐづ〳〵するとたゝツきるぞ。

ト白刃を振上げる。

五郎　あゝこれ〳〵、出さぬとは言はぬから、必ず短氣なことをして下さるな。

松五　それぢやあ早く家へ歸つて、今夜の中に持つて來い遲いと家へ取りに行くぞ。

五郎　えゝあつそうな、家へ來られてたまるものか、みすみすお咲に二十兩とられた上に又百兩、とんだ罠にかゝつたわえ。

松五　何をぐづ〳〵言つてゐるのだ、早く行つて算段しろ。

五郎　あゝ行きます〳〵、今行きかゝつてゐるところだ。

（ト立上り思入あつて門口へ出て、）何のことだえ馬鹿馬鹿しい、四つを打つのを待兼ねて忍び込んで差向ひ、先づそれまではよかつたが邪魔が入つて突出されるとは、思へば此の身がおさきまつくら、さきやさほどにも思つてゐぬをのぼりつめたは不覺の至り、思ひも晴さぬその中に百兩金を取られるとは、あんまり相場が高間ヶ原だ。

松五　どうしたと。

五郎　え、なに、こつちの事だ。

ト唄になり五郎兵衞つまらぬといふ思入にて、腕組なして花道へ入る。松五郎後を見送り、門口へ掛金をかけ、

松五　お咲さん、嘸びつくりしなすつたらう。

お咲　わたしや何だか譯が知れず、怖うて〳〵ならなんだわいなあ。

松五　何も怖いことはござりませぬ、金故お前が番頭に手籠にされるが氣の毒だから、裏から忍んで間男と、脅して彼奴を歸したのさ。

お咲　よく歸して下さんした、思ひがけないお前のお蔭で、今夜の難儀を脫れましたわいな、それはさうと取込みで、旦那の所へ上げる返事を、ついまだ書かずにおきました

わいな。
松五　旦那へのお返事なら、もう書きなさるにやあ及びませぬ。
お咲　なに、及ばぬとはえ。
松五　熱海の湯場から頼まれて、飛脚に來たといふのは嘘さ。
お咲　え。
松五　今朝道具屋の店頭で、お前と今の番頭との話を思はず立聞いて、ふつと浮んだ出來心、足を附けるに緣のある飛脚になつて化けて來たのさ。
お咲　さうしてお前は、
松五　わつちかえ、わちやあ人さ。
お咲　いゝえいな、何御生業でござんすえ。
松五　問はれて何の何某と長兵衞なら言ふとこだが、その鈴ケ森か小塚原へ始終はかゝる泥坊だ。
お咲　えゝ。
　トびつくりなす。合方きつばりとなり、
松五　そんなにびつくりしなさんな、人のしれえ事でもねえ。
　ト傍にある酒道具を引寄せ、猪口を取つて、
お咲さん一つ注いでくんな。
お咲　あい。
　ト燗德利を取り、顫へながら注ぐ。
松五　何をそんなに顫へるのだ、お前寒いか。
お咲　いゝえ。
松五　それぢやあおれが怖いのか。
お咲　あいなあ。
松五　なにも泥坊だつて同じ人だ、そんなに怖がるにやあ及ばねえ。
　トお咲の手を取つて引寄せる、お咲はやはり顫へながら煙草盆より五郎兵衞に貰ひし金を出して、
お咲　少しばかりでござんすが、どうぞこれを持つて歸つて下さんせ。
松五　(金を見て、)つまらねえことをしなさんな、この二十兩の金故に、今の間拔な番頭に身を任す氣になつたのだらう。こりやあお袋にやんなせえ。お前達の金を取る氣はねえ、あの番頭から百兩取つたら、おらあお前に半分やる氣だ。
お咲　お金が入らずば何なりと、こゝの家にあるものを、持つて行つて下さんせいな。

松五　金を取らねえくれえだから、何にもおらあ入らねえが、たつた一つ望みがあつて、お前の所へ忍んで來たのだ。
お咲　え、その望みといはしやすんは、
松五　お前を自由にしてえのよ。
お咲　えゝ。
　ト　びつくりする。
松五　二十兩の金故に、おれが來ざあ番頭にお前身を任したのだらう、どつちにしてもこりやあ五分だ、番頭代りにうんと言ひねえ。
お咲　どうぞそればかりは堪忍して下さんせいな。
松五　堪忍してくれもねえものだ、これが御新造さんかお孃さんなら、明日から世間へ顏向のならねえこともあらうけれど、藝者揚句の月圍ひ、年中人の世話になりやあ、これまで一人や二人の男を守つてゐもしめえ、どうで穢れた身體だから、盗人でもいゝぢやあねえか、客を騙してたゞ取る金は、滿更のいた仲でもねえ、さあ附合つてうんと言やな。
お咲　さあ、それは。
松五　それとも達て厭だといやあ、愛嬌こぼしておれも亦、荒つぽいことをしにやあならねえ。
　ト　脇差を拔き疊へ突立てる。
お咲　さあ、
松五　往生するか。
お咲　さあ、
松五　いやだといふのか。
お咲　さあ、
松五　さあ、
兩人　さあ／＼／＼。
松五　苦勞人のやうにもねえ、往生際の惡い女だなあ。
　ト　お咲を引寄せ、左りの手を懷から出して、お咲の手を取らうとする、お咲その手を見てびつくりなし、松五郎の顏をぢつと見て、
お咲　や、お前は。
松五　なんだと。
お咲　左の腕の松の彫物、朱入の蔦が目覺えに、見れば見るほど違はぬ面相、もしやお前は五年後關宿船へ夜に入つて、乘つた記えはござんせぬか。
　ト　これにて松五郎思入あつて、
松五　むゝ、草津へ湯治に行つた歸り、連に別れてたゞ一

人、而も九月の五日の晩草臥足に關宿から、乘合船へ飛込んだが、そんなら、お前はその晩に、

お咲　伊香保稼ぎに母さんと二人連にて三月越し、凉風立つて、江戸へ行き雁の啼音に氣も急かれ、生れ故郷がなつかしく、片月見をば合點で、無理に歸つた歸り道、

松五　旅に道連夜通しに下る夜船の苫の内、筑波おろしに肌寒く、互ひに側へ寄りこぞり、

お咲　浮世話も乘合の田舍道者や旅商人、永が違つて言ふことも口に合はねばお前と二人、

松五　假令所は違つても、話が合つて百年も、馴染んだやうに一晩で打解けるのが旅の常、

お咲　それもいつしか更くる夜に、いづくの鐘か川水へ、響く數さへ九つに、

松五　睡氣がついてだん／＼と、話も途切れて高いびき、

お咲　岸にすがれし草に啼く、蟲も哀れに寐られねば、

松五　又起返つて一服と、吸附煙草の火の影で、

お咲　互ひに見合はす顏と顏、側に寐てゐた母さんも、

松五　白川夜船に引寄せて、

お咲　嬉しい夢を見るまもなく、

松五　眼を覺したるお母あに、

お咲　そしらぬ裝でそれなりに、

松五　所も聞かず名も聞かず、

お咲　別れて丁度五年ぶり、

松五　廻り廻つて今日こゝで、

お咲　逢ふは盡きせぬ、

ト　兩人よろしくセリフあつて、松五郎世話に碎け、脇差をしやんとをさめ、

松五　いや、こいつは芝居でするやうだ。

お咲　五年この方神樣や佛樣へお願ひ申したその御利益で思はずも、今宵こゝへござんしたか、よう盜みに來て下さんしたなあ。

松五　それぢやあお前は盜人でも、以前のことを反故にせず、おれが女房にしようといつたら、旦那を捨てゝ女房になる氣か。

お咲　そりや言ふまでもござんせぬ、かうして人の世話になり、機嫌きづまを取つてゐるも、どうぞしたならもう一度、逢はれることがあらうと思ひ、辛い思ひをしてゐたわいな。

松五　その口先でこれまでにやあ、多くの旦那を殺したらうが、素人と逢つて兇状持ち、明日をも知れねえおれが

身體。
お咲　それも合點とも〳〵に、どんな罪科着ようとも、命をかけて添ふ氣でござんす。
松五　そんならどこがどこまでもと、口はゞつたく言ふもの〻、居所せえもねえ始末、
お咲　そこは互ひの仲だから、お前故なら旅へ出て、宿場稼ぎも厭はぬ心。
松五　それほど肚胸がすわつたら、
お咲　鬼の女房に鬼神とは、受取りにくいが持つておくれか。
松五　持たねえでどうするものだ。
お咲　それでわたしも落附いたわいな。
松五　いや落附かれぬはおれが身體、就いちやあ汝も旦那のある身、
お咲　旦那は湯治の留守中故、氣遣ひなければどもしひよつと、
松五　又彌次馬の來ねえ中、
お咲　五年ぶりにてゆつくりと、
松五　溜つた愚痴をこぼさうか。
ト唄、時の鐘にてお咲邊を窺ひ、屏風を立廻す。時の鐘、合方にて、花道より鳥屋文藏半合羽脚絆草履一本差し、菅笠を肩へ掛け小田原提灯を提げ出來る。後よりならずの三次頬冠り尻端折りにて窺ひながら、出來り、文藏は花道にて、
文藏　夜が短くなつたので、四つまでには歸られようと思つてゐたが、おそくなつた。もう大方寐てしまつたらう。この位なら歸らずに何處ぞへ泊つて來りやあよかつた、
ト振返る、これにて三次は知らぬ裝をして引返して入る。
何だか胡散な今の男、荒稼ぎでもあるか知らぬ、いや油斷のならぬことだな。ト思入あつて、舞臺へ來り、門口を明けようとして明かぬ思入。案の定、寐てゐるわえ（ト門口にて聞耳を立て、内を窺ひ思入あつて）誰か男の聲がするが、こいつあうつかり入られない。暑さ凌ぎにこの夏から熱海へ行つて三月越し、旅の留守故間淋しく、情人でもこしらへたか知らぬ。あと悪い所へ歸つて來た、知らずにゐりやあそれまでだが、眼にかゝつては捨てゝはおかれぬ。裏から忍んで様子を見ようか。
ト思入あつて路次口へ入る。屏風の内にて、
松五　行燈が消えさうだ、かきたつてくれねえか。

お咲　暗いはうがよいぢやないかね。
松五　いや、くらやみはまつぴらだ。
お咲　どれ、それぢやあかきたつて上げようか。
ト屏風を明け、お咲出て行燈をかきたてる、この中奥より文藏出來り窺ひゐる、お咲、松五郎これを見つけて、
や、それにゐるのは。
松五　誰だえ。
ト是にて文藏前へ出て、
文藏　誰でもない、おれだ。
松五　なに、おれだとは、
お咲　旦那さんぢやわいな。
松五　え、旦那だ、そいつあ大變だ、
ト飛起き帶をしめなほしながら逃げようとする、
文藏　あゝこれ、二人とも何も逃げるには及ばない。
松五　それだといつて。
兩人　どうしてこゝに。
文藏　間男見つけた動くな、といふ所だが言はぬのは、この美しいお咲をば一人おいて二月越し、湯治に行つてゐるからは、こんなことは覺悟の前さ。

松五　それぢやあ旦那は間男を、するのを承知でゐなさるとか。
文藏　いかにも承知はしてゐれど、知らぬ中は兎も角も、眼にかゝつちやあたゞはおかれぬ。
ト脇差を側へ置き、きつと言ふ。お咲びつくりして、
お咲　そんならあなたは。
文藏　顏へ泥を塗られたからは、こりやあ切らにやあならぬわえ。
ト悠々と煙草を喫みゐる、松五郎思入あつて、
松五　高金出した圍ひ者、それを人に盜まれたら、切らうといふのは尤もだ。いかにもわつちやあ間男だが因縁のあるこの女、お前は知らねえ事だけれど、五年後に關宿から乘つた夜船で色になり、夫婦にならうと約束をしたのも利根の水となり、又夜川の分れ〳〵に互ひに行衞も知らなんだが、水の流れと人の末思ひがけなく出會し、旦那のあるも合點でお咲と枕交したのは、深い淺いを言はずとも間男にやあ違えねえが、眞水と汐の道筋を分けて言やあお前よりわつちあ先の惡足だ。
お咲　今言ふ通り元からの情人ではあれどお世話になる、旦那の留守へ引込んで、お顏へ泥を塗つたからは、兎や

から愚痴な言葉を言つたところがつまりは間男。
松五　見付けられたら切られても、女を盗みやあ切られ損、顔が立たずば立つやうに二人をすつぱり切りなせえ。どうで切られる身體だから、惚いことをいふやうだが、女故なら死んでも花だ
ト づう／＼しく言ふ、文藏きつとなり、
文藏　むゝ、腹のすわつた二人の言分、男は兎もあれお咲おぬしは、恩を仇にて返す氣か。
お咲　さあ、濟まぬことゝは知りながら、
松五　言つて返らぬ二人が科、
文藏　是非に及ばぬ、切つてやらう。
ト 脇差を取りきつとなり。
松五　さあ、未練は言はねえ、
兩人　すつぱりと、
文藏　むゝ。ト拔きかけ、しやんと納め、お咲は縁を切つてやらう。
松五　何と。
文藏　さあ、女房替りの閨ひ者、間男した故命よりすつぱりお咲が縁を切り、惚れたこなたへ進ぜませう。
お咲　そんならわたしの縁を切り、

松五　この間男に下さるとか。
文藏　（思入あつて、）外でもないこのお咲、ふとした縁で去年からわしが世話をしてゐれど、いつがいつまで閨ひ者と人に指をさゝれるのも、あんまり出來たことでもないから、疾うより好いた男でもあるなら言へと言ふけれど、まさか斯ういふ情人があるから添してくれとも言ひ難いは、こゝへ居拔の家を買ひ、心良からぬお袋へ手當の金から頭の物、着類も夏冬一通り着せてやつたこの文藏、算盤をとる生業ながら、無勘定でしてやりましたが、勘定したら三百兩斗り、その義理のあるわし故に言ひにくゝもあつたらうが、丁度幸ひ元からの情人とある故家財を附け、お前へこれを上げようから、どうぞ貰つて下さりませ。
ト 文藏おだやかに言ふ故、兩人は顏見合せ思入あつて、
松五　切ると言つたは縁を切り、端金でもあることか、三百兩といふ金をかけ、閨つておいたこのお咲、
お咲　お顏へ泥を塗つたのも、憎いとも思はずに結構過ぎたこのお裁き。
松五　何と言つてよからうか、うつかり禮も言はれぬ仕儀
お咲　取分けわたしは御恩のある身、どうもそれでは濟ま

ぬわいな。

文藏　何の濟まぬことがあらう、これが女房といふではなし、當座の花の圍ひ者、知つての通り旅商人、この鎌倉へ出てゐる中旅籠屋住ひも不自由故、この新道へ圍つておけど、酒の相手をさせるばかり、ついに一晩枕をば交したことのない二人、それ故さのみ悔しいとも又憎いとも思はぬのさ。

松五　そんならお前は旅商人で、この鎌倉へ出てゐる中、寐所に拵へた妾宅は、お咲が當と思ひのほか高金出して一晩も、伽さへさせぬはどういふ譯か。

お咲　お世話になつてこの家を買つてお貰ひ申してから、五日とおいでのこともなく、年中旅へ出てばかり、

松五　何にしろ三百兩からかゝつたお咲に家財を附け、ただ呉れるとは大きな肚だ。

文藏　さあ、一分五厘を爭ふ身なれど、大きく商ひする日には籍で儲かるわしが生業、百や二百の端金は、塵埃故何でもない、僅な中でも緣あつて世話をしたこのお咲、他人のやうにも思はぬ故、末長く見捨てずに、添つてやつて下さりませ。

松五　何のつけに見捨てるどころか、この後どんな事があつて別れることがあらうともお前へ對してこのお咲は、生涯わつちが捨てやあしねえ。

お咲　わつちもあなたのお蔭故末始終添ひとげて、何ぞで今日の御恩をば、返すやうにしたいわいな。

文藏　さあ、どうぞさういふことになつて、今夜の事を雨の夜の昔話にしたいものだ。

ト文藏嬉しき思入、松五郎はふさぎたる思入にて、

松五　どんな大きな商ひだか、切放れのいゝ文藏さん、ただ取る金でも斯うはいかねえ。折角きれいにくんなすつたが惡い生業する故に、長持のねえおれが身體、今日のお禮が出來りやあいゝが

ト ぢつと思入、文藏もこなし、

文藏　何生業か知らぬけれど、資本にでも困るのなら、五十や百はいつ何時でも、わしが貸して進ぜませう。

松五　いえ、金はわつちも自由になるが、たゞ生業が惡いのさ。

文藏　何を生業にしなさるのだ

松五　盜みをしますよ。

文藏　え、そんならこなたは。

松五　あい、わつちあ鑄掛松といつて形より小さな盜人だ

が、縁といふものはおつかなもので、お前故になつたのだ。

文藏　なに、わし故盗みをしなさるとは。

松五　先刻からお前の顔を、どこでか見たと思つたが、忘れもしねえ花水橋の川岸へ繋つた屋根船に乗つてゐたのはお前にお咲、石か瓦を見るやうに金を遣ふが羨しく、ふつと浮んだ悪心に鎌掛の道具を川へ打込み、榮耀がしたさに盗みを始め、今夜もこゝへ忍び込み思ひがけなくお咲に出逢ひ、かういふことにはなつたけれど、明日が日知れねえわつちが身の上、折角お前が俠氣に家財を附けてくんなすつても、長くこゝにやあゐられませぬ。

文藏　それぢやあお前は噂のある、鎌掛松といふ盗人かえお咲もそれを合點で、惚れた仲故夫婦になる氣か。

お咲　あい、假令一緒にどのやうな恥かしい目に逢ふとても、一旦思つた男故。

文藏　むゝ男に附くが女の情、こりやさうなければかなふまい。

松五　何にしろこの後に御苦勞かけては濟まねえから、

お咲　後へ難儀のかゝらぬやう、

松五　禮證文を張つて行から、

文藏　いや、禮證文を張るには及ばぬ。

松五　それでも堅氣な商人衆に。

文藏　いや、わしも名乗れば堅氣でねえのさ。

兩人　え、堅氣でねえとは。

文藏　やつぱりおれも、同じ仲間だ。

松五　なんと。

ト替つた合方になり、文藏思入あつて、

文藏　こんなセリフも度々言つたが、生れ故郷が上州に僞博多のくはせもの、堅氣と見せる商人も、糊が落ちりやあ長脇差、元より地性の悪いのに氏より育の所柄、獻に織の花菱を手本にこは〴〵した悪事も、箴よりだん〴〵功が積み、片身替りに織分の晝夜をかけて尋ねられ、獄鉆に縁ある眞言寺に暫く隠れてゐた故に、異名を取つた梵字の眞五郎、どうで始終は紙附か板附になる店ざらし、同じ符牒の仲間故、その心配にやあ及ばねえ。

ト思入にて言ふ。

お咲　そんなら疾うから聞いてゐた、梵字といふのはお前のことか。

文藏　互ひに隠す盗人と、名乗り合ふのも不思議なわけ。

お咲　ほんにかうした三人は、なんぞの縁でござんせう。

文藏　むゝ、おぬしとおれとは、切つても切れねえ。
お咲　え。
文藏　血を分けた同胞だ。
お咲　そんならお前は、
文藏　子供の時に別れた兄だ。
お咲　えゝゝゝゝ。
　　トびつくりする。
文藏　五歳の時に別れたから、おぬしやあ顏を知るめえが
おらアうす／＼知つてゐるから、初めて逢つたその時に
はてよく似た顏と思ふ中、どうした拍子か腕守の拔けた
を取つて嵌める時、ちらりと見たる二の腕の三つ並んだ
黒子が目印、扨は妹とよそながら素性を聞けば上州で、
佐五兵衞といふ百姓の娘で親に別れてから、藝者になつ
たと身の上ばなし、段々問へば父さんも不幸が續いて親
子とも、別れ／＼になつたと聞き、あゝ濟まねえことゝ
思つたが、どこにゐるやら行衞も知れず、せめて親父へ
不幸をしたその言譯におぬしを圍ひ、樂に暮しをつけさ
せたも、おれが親身の妹ゆゑ。
松五　それで樣子がからりと分かつた、枕交さず圍つてお
いたは、

お千　妹故でござんしたか。
文藏　おゝ妹でなくて何のつけ、たゞ取る金でも枕交さず
誰が圍つておくものだ。
お咲　わたしを妹と知つてゐながら、なんで今日まで知ら
ぬ顏、何故名乘つては下さんせぬ。
文藏　さあ、名乘らねえのも盜人故、おぬしに難儀を掛け
めえ爲め、惚れた男にすつぱりとやつて行かうと思つた
が、相手が同じ盜人故、隱す身性を明かしたのだ。
お咲　よう名乘つて下さんした、別れ程經て十三年、積る
話の數々は。
文藏　あとでゆつくり聞かうかい。
松五　（この中思入あつて、）上州邊の商人は箱で儲ける商
ひ故、大きな肚だと思つたが、大きい筈だ名の高い、兄
貴は梵字の眞五郎。
文藏　つながる縁の弟も、噂の高い鑄掛松。
お咲　これから親身の兄弟同樣。
松五　乞食も身祝ひ、堅めの盃。
文藏　丁度幸ひ、この酒で、
　　ト猪口を取る。
お咲　あゝもし、それは冷たうござんす。

文藏　言はゞ目出度いやりとり故、冷酒のはうが本式だ。
（ト　お咲注いで文藏飲み、）それぢやあ兄貴こつちから、
松五　（取つて、）行末長く頂戴しませう。
お咲　大層堅いことだねえ。
ト松五郎飲んで文藏へさす、文藏懐から金包を出し、
文藏　こりやあ少しばかりだが、妹をやる結納替りだ。
ト松五郎前へ出す。
松五　こりやあ兄貴つまらねえ、こんな義理にやあ及ばねえ。
お咲　先刻貰つたお金もござんす。
文藏　ありもしやうが志し、邪魔にもなるめえ、受けてくんねえ。
松五　それだといつてお前から、この金まで貰つちやあ、（云ひながら金包を見て、）なんだ「金百兩、祠堂金」こりやあちつと當りがあるが、何處でお前盗みなすつた。
文藏　こりやあ宵のばらばら降に、雜司ケ谷の不動堂へ入つて止むのを待つてゐる中、こいつも雨に三人連れ駈込んで來た緣端で、この百兩の金を出し、二人が三つに分ろといふのを、四つに割つて二分はおれが取ると一人が言ひ、やるやらねえの爭ひからたうとう三人摑み合ひ、脅してやらうと堂から出て、片ッぱしから覺悟しろと引こぬいて振上げたら、根が素人にびつくりして、盗んだ金もそこへおき逃出して行つたので、思はぬ金を拾つて來たのだ。
お咲　そのまた金を、どうしてお前は。
松五　知つてゐるのは昨夜の仕事、雪の下の角近江屋へ二階の窓から忍びこみ、百兩盗んで屋根傳ひ、出て來る下に年の頃六十ばかりの爺さんが、祠堂金を百兩盗まれ、言譯なさに死ぬといつて、土藏の足場へ繩をかけ、首を縊りにかゝつたから、上からぽんと繩を切り助けてやつたは譬に言ふ地獄で佛の祠堂金、盗んだ金を替りにやり繩一本で死ぬことを留めてやつたは今朝の事、僅一日經つか經たぬに、廻り廻つて爺さんが取られた金を兄貴から、貰ふと言ふなあこいつあ不思議だ。
文藏　そこが譬にいふ通り、陰德あれば陽報ありと、善い事でも惡い事でも、廻つて來るは早いものだ
松五　これを思ふとお互ひに、長くしちやあゐられねえ。
文藏　いゝ加減に切上げて、堅氣になるが上分別だ。
お咲　さうして兄さん、お前はこれからどつちの方へ行き

なさんす。

文藏　さつきこゝへ來る後を、四五間離れて附けて來たは何でも通常の奴ぢやあねえ、長居は恐れと思つてゐるから、今夜おそくか明日の朝、明けねえ中に出かけよう。

松五　さういふことなら猶のこと、結納替りの百兩は、お前の路用に返します。

　ト文藏の前へ出す、文藏思入あつて、

文藏　こりやあおれが惡かつた、目出度え妹の結納替りに祠堂金は縁喜が惡い。こりやあお寺に縁のある梵字のおれが路用にしよう。(ト胴卷から別の百兩包を出し)この百兩は一昨日の晩和田の屋敷で盗んだ金、これを目出度く祝ひませう。

　ト松五郎の前へ出す。

松五　然し、これを貰つちやあ。

文藏　こりやあおれがやるのぢやあねえ、こなたがやつた親仁から返す金だ、取つておきねえ。

松五　それほどまでに事情を分け、言ひなさるならこの百兩、

お咲　わたしら二人へ、

兩人　貰ひまする。

　ト松五郎金を取つていたゞく、この以前花道より屑屋のぐず八先に黑四天の捕手六人附添ひ出來り、門口から内を窺ひ、明けようとして明かぬ故門口をたゝき、

ぐづ　もし〳〵、ちよつと明けて下さいまし。

　トこれにて三人思入あつて、お咲門口へ來て、

お咲　どなたでございますか、もう臥りましたから。

ぐづ　先刻旅からお歸りなすつた、旦那に逢はして下さいまし。

　トお咲戸の間から覗いて見てびつくりなし、文藏、松五郎に囁く。

文藏　それぢやあ表へ捕手が來たか。

五郎　兄貴、お前は早く裏口から、

文藏　おらあ一人だ、二人は先へ。

松五　こゝはわつちが受込んだ。

　トこの時ばら〳〵と門口を毀し捕手内へ入る。松五郎灯を消す。時の鐘。探り合ひの立廻りよろしくあつて、松五郎お咲を探り、頷いて手を取り、立廻りながら上手へ入る。後文藏六人を相手に立廻りよろしくあつて、

　トゞ文藏すり抜けて花道へ行く。捕手は文藏と心得ぐづ八を喰はし、折重なりて、

捕手　捕つた。

トこれにて文藏につたり笑つて、時の鐘ばた／＼にて逸散に花道へ走り入る。やはり時の鐘、合方にてこの道具廻る。

（初瀨小路の場）本舞臺一面の平舞臺、眞中に黑き町木戸、上の方戸をおろしある町家の前側、下の方木戸から續いて柵矢來、この前に大八車後方町家夜更の遠見、ずつと下手に柳の立木、總て初瀨小路夜更の體。どん／＼（ト捕物の鳴物）にて道具留ると、ばた／＼になり以前の番頭五郎兵衞頰冠り尻端折りにて出來り、

五郎　何だか今夜はどん／＼と騷々しい晩だから、辻番へ行つて聞いたらば、お咲の旦那も亦情人も、二人ながら泥坊で代官所から捕手が來て、今捕られるといふことだまづ百兩强請られる御難を首尾よくのがれたわえ。この拍子にお咲に逢ひ、先刻やつた二十兩を取返してやりたいものだ。

トばた／＼になり、上手よりお咲逃げて出來り、五郎兵衞に突きあたるに顏をすかして見て、

や、お咲か。

お咲　番頭さんか。

五郎　こりやいゝ所で出ツくはした、先刻やつた金を返せ。

お咲　わたしや持つてゐぬわいな。

五郎　金がなければその替り、こゝで思ひを晴らさにやならぬ。

ト五郎兵衞お咲の手を取るを振拂ふ、これを追廻して夢中になる思入。よきほどにお虎婆出來り、何心なくこの中へ入る、五郎兵衞これをお咲と心得、お虎婆を捉へる、これにてお咲車の蔭へ小隱れする。どん／＼になり、上手より松五郎捕手六人と立廻りながら出來り、五郎兵衞お虎十手で打たれ下手へ逃げて入る。これより松五郎、車を使ひ捕物の立廻りあつて、トゞ皆皆下手へ逃げて入る。この中お咲出て、

お咲　松さんか。

松五　おゝお咲か、この間に早く。

ト手を取り行かうとする、後へ五郎兵衞出て、

五郎　うぬ、先刻の金を。

トかゝるをちよつと立廻つて、松五郎五郎兵衞の横腹を蹴る、これを木の頭。お咲を引廻し、五郎兵衞を見

る。五郎兵衛は横腹を押へて苦しむをかしみのこなしよろしく、合方、どん／＼にて、　ひやうし幕

三幕目

同朋町藝者屋の場
寺門前花屋の場

（淨瑠璃）春風さそふ一節は　梅柳軒朧夜
（淸元連中）

（役名。―盗賊壽掛松、森戸屋宗次郎、花屋佐五兵衛、森戸屋丁稚與之助、千葉の出入り李兵衛、同九介、同十兵衛、壽掛松女房お咲、藝者お組、其他。」

（見附前の場）===本舞臺上の方見附の石垣、下の方町木戸、彼方柳原を見たる書割、總て鎌倉馬喰町見附前の體。こゝに○の駕舁四つ手駕籠をおろし、呼びかけゐる。傍に千葉の出入り李兵衛羽織尻端折りにて立つてゐる、この見得勸化の題目太鼓にて幕明く。

○　もし旦那、御都合までまゐりませう。
李兵　明神下まで急に行くのだが、いくらでやる。
○　へい、四百五十下さいまし。
李兵　四百五十は高いぢやあないか。
○　いえ、辻駕籠でございますから、四百五十でまゐりますが、看板をかけた店ならば、六百より安くはまゐりませぬ。
李兵　なに、乘つてもよし乘らなくつてもよしだから、四百なら乘らう。
○　それぢやあ一朱下さいまし。
李兵　よし／＼、どうでもいゝから早くやつて下せえ。
○　畏まりました、棒組が一杯飲みに行きましたから、呼んでまゐる中お待ちなすつて下さいまし。
李兵　久しく待たしてはいかねえぜ。
○　なに、直でございます。
ト○の駕舁は下手へ入る。上の方より同じく千葉の出入りの九介、十兵衛羽織着流し、柳屋の貸提灯と笹折とを提げて出來り、
九介　そこにゐるのは李兵衛どのぢやあねえか。
李兵　おゝ九介どのに十兵衛どのか、いゝ所で逢ひました。

十兵　もう御奉納は濟みましたか。
杢兵　いや、濟むどころではない大間違ひ、宗次郎どのが御奉納の金を持つてござらぬ故、お役所ではお腹立、それに生憎意地悪の軍太夫様が御當番故、目の玉の出るほど叱られました。
九介　それはまあとんだ事だ、寄金へ封印をして宗次郎どのへわたした故、お屋敷の方はよいと思ひ、柳屋で一ぱい飲み、今家へ歸るところだ。
杢兵　悪い時の行事に當り、お屋敷では思入叱られ、宗次郎どのゝ所へ行けば、まだ家へ歸らぬと言ふ故、出入頭のことなればお前方に相談しようと、今駕籠を頼んだのだ。
十兵　そりやあ無駄足にならなくて、よい所で逢ひましたが、宗次郎どのはどうしましたらう。
九介　先達から聞いてゐるが、藝者に情人があるとのこと、大方澤長か染川で、飲んでゐるに違ひない。
杢兵　事と品による時は、出入中の失錯になる事も構はず、藝者狂ひをしてゐるとは、扨々若い者といふ者は考へのないものだ。
十兵　それといふのもわしらと違ひ、名におふ森戸屋の後嗣で、男がよいのにほどがよいから、女の惚手が多いからだ。
九介　道樂をするは悪いけれど、生利ッけは少しもなく、男でさへ惚れるもの、女の惚れるのは無理はねえ。
杢兵　そりやあ無理でもなからうが、宗次郎どの故お役所でどんなに叱られたかしれぬ。今夜五つの御門限までに持参せねば大失錯。
十兵　いかさま、此度は宗次郎どのだが奉納は出入中、ちつとも早く行方をたづね、お詫をして持つて行かう。
九介　何にしろちつとも早く、此の近邊をたづねて見よう。
十兵　然し、穴入りのことなれば、隠れ所が知れゝばよいが。
杢兵　いはゞ空な尋ねもの故。芳山先生に見て貰つたが、きつと知れるに違ひないと方角を書いて下さつた。
ト懐から手紙を出す。
十兵　それぢやあ、これに方角が書いてあるか。
九介　どれ〳〵見せなせえ。(ト手紙を取つて開き見て、)「淨瑠璃名題――」(ト名題、太夫連名を讀んで)こりやあ何だか違つたやうだ。(ト九介それを取つて、)
九介　「相勸めまする役人――、」違つた筈だ、淨瑠璃觸だ、

杢兵　芳山先生の所を出て、交來さんの所へ寄つたら、今夜石町の獨吟が同朋町にあると言つたが、たしかにその淨瑠璃觸と取違へて持つて來たのだ。
十兵　株でこなたもそゝツかしいぜ、同朋町にあるといふのが、時に取つての辻占だ。
九介　先づ近所のことだから、梅屋へ行つて尋ねて貰はう。
杢兵　それがいゝ／＼、ちつとも早く行くとしよう。
十兵　何故そんなに急ぐのだ。
杢兵　駕籠屋にあぶれをやらねえ積りだ。
九介　こなたもいびきをかくはうだな。
十兵　違えねえ。
ト三人上手へ入る。下手より以前の駕舁先に立ち、棒組の駕舁△附き出來り。
○　へい、旦那大きにおそくなりました。
△　棒組、客人はどこだ。
○　もし旦那々々、(ト邊を見て)こりやあ來やうのおそいので、待兼ねて行つたと見える。
△　そいつあ往生だ、あぶれにもならねえ。これと知つたらもう一合獨吟でやつたものを。
○　それぢやあ手前まだ飲むのか。
△　どうして／＼飲まにやあゐられねえ。いよ／＼この所獨吟始まり。
○　客には逃げられ、あぶれは取れず、
△　その爲往生(口上)左樣。
ト題目太鼓にて駕籠を擔ぎ、兩人上手へ入る、これにて道具廻る。

(藝者屋の場)——本舞臺平舞臺、正面暖簾口、上の方一間折廻し障子屋體、正面上手三尺壁床、細立物を掛け、この脇の三味線掛に三味線二挺掛けあり、下手押入戸棚、例の所門口、續いて黑塀、二階家の淨瑠璃臺、伊豫簾あり、總て同朋町藝者屋の模樣。こゝに以前の宗次郎着流しにて桐の長火鉢にうつむきゐる、傍にお組土瓶へ茶を入れ、鐵瓶の湯を注ぎゐる、この見得端唄の合方にて道具留る。
お組　もし宗さん、心持でも惡いのかえ。
宗次　なに、どうもしやあしない。
お組　それでもいつになくふさいでばつかり、ちつと話でもなさいましな。
宗次　何だか今日はぼんやりして、話をする力もない。

お組　ほんに柴川のいさくさで心持が惡うござんせうか、何もかも濟んだれば、夕霧ではないけれど、笑ひ顏を見せておくんなさいましな。（ト湯を注がうとして手へかけ）あつゝゝゝ。

宗次　（びつくりして）お組、どうしたのだ。

お組　鐵瓶の湯をかけました。

宗次　そりやアあぶないことをした。（ト紙入を出し）こゝに上の守のお守りがあるから、これで撫でゝおくといゝ。

トこれをきつかけに下手二階家の伊豫簾を捲上げる、

トこゝに清元延壽太夫連中住ひ獨吟の淨瑠璃になる。

〽憂き事を忘るゝ花も昨日今日、散行く風に雨氣づき、空さへもめて兎や角と思ひに暮るゝ鐘の聲、

ト此の中宗次郎紙入より火傷の守りを捜し出し、撫でてやりながら隣りの淨瑠璃を聞き思入あつて、

お組、あの淨瑠璃は何處だ。

お組　あれは隣りのお竹さんの所へ、本町の旦那が來て、石町の太夫さんに獨吟で語らせるのでござんす。

宗次　ついぞ聞かない淨瑠璃だが、新淨瑠璃でゞもあるかしらん。

お組　家元はいゝ聲でありますね。

宗次　嘸女が惚れるだらう。

お組　男がよくつて聲がよいから、どんなにみんなが惚れませう。

宗次　お組も惚れてゐる仲間だらう。惚け賃に中川へ甘味でも取りにやんねえな。

お組　折角のお望みだが、買ひに行き手がござんせぬ。

宗次　おつるは何處ぞへ行つたのか。

お組　あい、不動樣へ代參にやりました。

宗次　それぢやあ誰もゐねえのか。（ト思入、お組茶を注ぎて出し）

お組　まあ受け賃にお茶でもお上りなさいまし。

宗次　向うの伯母さんぢやアあるまいし。

お組　何でござりますとえ。

宗次　なに、こつちのことさ。

〽月も朧に晴れやらぬ、春の習ひの曇り勝ち、

ト宗次郎溜息をつきふさぐ思入、お組案じるこなし、宗次郎茶を喫みむせる、お組背を擦りながら、

お組　あれさ、惜しみはしませぬのに。

宗次　あゝ切ない、とんだ目に逢うた。（ト胸を擦りゐる、お組顏を見て）

お組　もし宗さん、しつこく聞くやうでござんすが、常に替りし御附に何を言つてもふさいでばつかり何がそんなにふさぐほど、苦勞になるのでござんすえ。

宗次　包むとすれど顏へ出るこの宗次郎が苦勞といふは、言ふに言はれぬ譯ある故。

お組　どういふことか知らねども、斯う〳〵いふ事があつて、苦勞になると打明けて、何故に言つては下さんせぬ。

宗次　さあ、言うたらそなたが一倍に、苦勞をするであらうと思ひ、

お組　そりや水臭い宗次郎さん。斯うして藝者はしてゐれど、お前の女房の氣でゐるに、何故に共々わたしにも、苦勞をさせて下さんせぬ。

〽眼には涙の雨持ちて、忍び音に啼く歸る雁、

トお組宗次郎に縋り、膝をこづき恨みを言ふ思入。宗次郎もこなしあつて、

宗次　それほど迄に思ふのに、言はぬはおれが惡かつた、何を隱さうふさぐのは、事によつたらこのおれが命を捨てねばならぬわいの。

お組　えゝ、(トびつくりなし、)そりやあまあどういふ譯あつて。

宗次　(思入あつて、)そなたの兄の切羽を見兼ね、先刻渡した五十兩、あれはおれの金ではない、千葉の屋敷の妙見樣へ出入中から奉納金、出入頭が封印してたしかに預けた金なれば、わしが手籠に使うては出入中へ濟まぬといひ、今日お屋敷へ奉納せねば失錯となる大事の金、御門限の五つまでに才覺できぬその時は、この身ばかりか第一に、親仁へ難儀をかけねばならぬ、どうかかうかと考へても、まだ親がゝりに都合はできず、實に途方に暮れるわいの。

お組　さういふ譯のお金と知らず、さしつまつたる兄さんの樂川での難儀をば救うてお貰ひ申しましたが、今となつては濟まぬ譯、どうか仕樣はござんせぬかいな。

宗次　さあ、しやうもやうもならぬといふは、親がゝりの身に不相應、これまで多く遣うた故、そこやかしこに借が出來、僅の金ではなけれども次第につまる春の宵、五つというても間もなければ、僅かなれども時限り故、封印切つた五十兩の金ができねば言譯に、死ぬより外の思案はない。

お組　えゝ、そんなら今宵五つまでに、金が出來ずば死なしやんすとか、さういふことなら兄さんに譯を話してこ

の身をば、賣つても都合しませうわいな。
宗次　その志しは嬉しいが、何を言ふにもたつた僅一時あるかなし、死んで言譯するほどに。
〽こなたは後になからへて今日を忌日に七七日、散り行く後を訪うてたも、たゞ何事もこれまでの緣と思うてさらばやと、言捨て立つを縋り留め、
ト新内模樣の淨瑠璃になり、宗次郎よろしく思入あつて立掛るをお組引留めて、
〽今更言ふも愚痴ながら、色に成田の朝參り、お手水鉢で思はずも水にうつりし面影を、見たが柄杓の緣にて、互ひに思ひ染川の二階で逢うたその日より、一日逢はねば百日も逢はぬ辛さに生きながらへ、後に殘つてゐられうぞ、一緒に殺して下さんせと、言ふにこなたも背撫でさすり、
ト お組宗次郎を捉へ、新内模樣くどきの振よろしくあつて、
宗次　すりやそなたもともぐに、おれと一緒に死ぬ心か。
お組　これが死なずにゐられうかいな。
〽男にひしと縋りつき、暫し涙にくれすぎて西へ傾く五日月、僅な影も世を忍ぶ
トこの中花道より掛松頬冠り尻端折り、お咲同じく手拭を冠り三味線を彈き、門附流しの拵へにて出來り花道にて前後へ思入あつて、松五郎鼻緒を切りいめえましいといふ思入、お咲は向うへ行つてなほせといふこなしにて舞臺へ來り、門口にて松五郎半紙を撚り鼻緒を立てる、お咲は三味線の絲をかけ替る。
〽暗き其の身に片影へ佇む夫婦の門附が、語る文句にさも似たる内には二人がかこち言、
トこの中宗次郎お組よろしく思入あつて、
宗次　これお組、死なうと覺悟しながらも考へて見れば腑甲斐ない、その日暮しの者ではなし、雪の下の角屋敷一二と言はれる森戸屋の宗右衛門が伜と生れ、お乳母育ちの懷兒、何不自由のない身ながら、親がゝりの悲しさは僅五十兩の金故に、この身ばかりかそなたまで、死なねばならぬといふことは、いかなる前世の約束なるか。
お組　假令このまゝ死ぬとても、お前と一緒に死ぬこと故わたしは嬉しうござんすが、嘸や後にて親御さんが、斯ういふ事もお組故憎い奴ぢやとおつしやりませう、それが悲しうござんすわいな。

宗次　そりやわたしとても同じこと、そなたの兄の傳次どのが、たつた一人の妹をわし故捨てたと恨むであらう。

お組　それもこれも今宵の切羽、死なねばならぬことながら、

宗次　切ない譯を知らぬ人は、浮氣同志の心中と、

お組　隣りで語る淸元や、

宗次　門に聞ゆる新内の、

お組　文句につゞられ明日からは、

宗次　人に唄はれ語られて、

お組　浮世の噂になる身の上、

宗次　思へばはかない、

兩人　事ぢやなあ。

〽春も暮れ行く別れ際、名殘りの寒さ身に染みて、肌に覺ゆる夜の風、

トこの中松五郞は鼻緒を立て、お咲は三味線の絲をかけ替へながらこの話を聞き、思入あつてお咲にさゝやき、お咲巾着より小判を實だけ五十兩出し、松五郞懷より半紙を出しこれを包み、思入あつて門口の上から内へ投込む。宗次郞お組この音におどろきて、

宗次　や、今の音は、

お組　大方誰か悪戯に、石を投込んだのでござんせう。

ト門口の兩人は内の樣子を窺ひゐる、お組は邊を見て金包みを取上げ、

や、投込んだのはこれかしらぬ。

宗次　すりや石でなく、包みし物を、

お組　どうやらこれはお金の樣子、

宗次　どれ、見せやれ、（ト宗次郞開き見て）こりやこれしかも小判にて、（ト金を算へ）その金高も五十兩、

お組　え、誰がこれを投込んだか、死ぬる二人を不便に思ひ、神か佛のお助けならん

宗次　但しは先刻與之助が、家へ默つて母樣に今日の仔細をお話し申し、よそながらのお惠みなるか。

お組　何にもしろ五十兩の、お金が手に入る上からは。

宗次　封印切りしは何とか僞り、納めてしまへば死ぬには及ばぬ。

お組　主の知れざるお金ながら、

宗次　今さしあたる命の際、

お組　思ひがけなく手に入りしは、

宗次　まつたく神の御助け、

お組　こんな嬉しい、

兩人　事はない。

〽上手の蛙の啼きつれて、嬉しと雨を呼ぶ空の雲足早く門附は、哥を傳うて行過ぎる。

ト宗次郎お組は嬉しき思入。松五郎お咲はしめたといふ思入にて、兩人頷き下の方へ入る。この中宗次郎懐より金を出し、

宗次　思ひがけなく此の金が、手に入る上はこゝにある五十兩を一つになし、御門の限れぬその中に、お重役へお渡し申さん。

お組　もう暮れてからよほどの間、今に五つでござんせう、少しも早く仕度をして、これから直にお屋敷へ、

宗次　持つて行くにも遲刻といひ、金の封じを切つたる言譯、何と言うたものであらうか。

お組　よい思案はござんせぬか。

ト宗次郎思入あつて、

宗次　お重役への言譯は、途中で俄に癪氣が發り、それ故遲刻なしたる上、肌へ附けたる胴卷へ苦しむ中に汗が染み、損せし故に上封じを仕直せしと言うたらば、言譯になるであらう。

お組　そりやよい思案でござんすから、封じをなして少しも早く。

宗次　おゝ、合點おや。

〽折からこゝへ息せきと、急げど足も遲れ後、お主思ひに打ちしほれ、人目を忍ぶ葉隱の門も目當に歩み來て、

ト宗次郎は金の封じをする、お組は手燭を出し、宗次郎有合ふ硯箱を取つて上書をする。この中花道より與之助前幕の裝にて、弓張提灯を持ち出來り、花道にてちよつと思入あつて舞臺へ來り、門口を叩け、

與之　若旦那樣

宗次　おゝ與之助か。

ト あわてゝ金を隱す。

お組　よい所へござんした。

與之　いえ／＼よい所ではござりませぬ、今お出入りの衆が來て、御奉納がおそなはり、お屋敷から度々の催促、それに生憎御留守番が意地惡の軍太夫樣故、お出入仲間も心配いたし、是非若旦那に逢ひたいと御座に待つてゐる故、人に知らさずこつそりとおしらせ申しにまゐりました。

宗次　それは丁度幸ひだが、出入頭も一緒にか。

與之　はい、大概おいででござりまする。

宗次　さういふことなら打明けて、出入頭へ話した上とも
どもお詫をして貰はう。
與之　それは兎もあれさし當る、金子がなければお詫もな
らず、
宗次　おゝ案じやんなその金も、思ひがけなく手に入つた。
ト包みなほせし百兩包を見せる、與之助びつくりし
て、
與之　どうしてそれが手に入りました。
宗次　仔細は道々話さうから、
お組　五つを打たぬその中に、
與之　これから直にお屋敷へ、
宗次　少しも早く、
ト立ちかゝる。とお組羽織を後から引かけながら、
お組　必ず歸りに、
宗次　おゝ、おそくも來るから、
ト振返りにつこり思入、與之助顔をそむけ提灯の心を
切る、宗次郎氣を替へ、羽織の紐を結びながら、
待つてゐやれ。
ヘ死ぬる覺悟の兩人が明日の噂も川水に、流して又も兩
國の長き契りぞ、

ト與之助提灯を持ちて先に立ち、宗次郎花道へ行く、
お組門口にて見送り兩人思入、宗次郎後へ歸らうと
する、與之助心附かず先へ行きかけ振返り見て、つか
つかと行き宗次郎の袖を引く、これにて三重になり花
道へ入る。お組はほつとして胸を撫下す。やはり三重
にてこの道具廻る。これと一緒に太夫座の黒塀を張物
にて消す。

（花屋の場）〔本舞臺三間の間上手二間常足の二
重、こけら葺古瓦を載せし屋根、竹の本椽附、眞中
暖簾口、上手押入戸棚、佛壇、これに黒塗りの立派
な位牌、瀬戸の佛器をよろしく飾り、この傍に延久
四年三月十三日と記せし白木の位牌あり、崩れたる
鼠壁、よき所に居爐裏、二枚折りの屏風、古行燈、
屋體に續いて下の方一間臺所、こゝ境に障子を閉切
り、一つ竈、置流し、手桶、米揚笊、臺所道具よろ
しく飾り、上の方黒塗り寺の門、屋體の側に角塔婆
流灌頂、小さき塔婆二本立て、樒を入れて手桶、
下の方黒塀、卒塔婆を結込みし藪疊、この前に井戸、
樒を入れし桶をならべ、總て寺門前花屋の體、雨車、

木魚の勤にて道具廻る。と、奥より佐五兵衛粗朶を抱へ出來り、空へ思入あつて、

佐五　八専中故曇り勝ち日和ぐせかと思つたら、たうとう本降りに降り出した。枯らしておいた焚物をすんでのことに濡すところ、まづこれを取込んだれば焚物に困らぬ、どれ、ちつとこなしておかうか。

ト鉈替りの刀の折にて枝を切り、居爐裏の傍へ持つて來て、煙草を喫みながら、

風と違つて雨の音は、氣が落附いて寐心がよい、先刻貰うた川びたりの餅のせゐか醉くなつたがまだ五つになるかならず、今から寐るのも勿體ない。(ト思入)おゝお住持から貰つておいた玉子で出來た茶があつたつけ、あれを一ぱい煮花に入れ、睡氣ざましとしようかい。(ト言ひながら居爐裏へ粗朶をくべ、焚附けながら)あゝ、年のせゐでこの頃はどうも眼がかすんでならぬ、ちつと逆上の下るやう、鑵子の湯の煮立つまで、三里へ灸でもすゑようか。(ト言ひながら足を捲り見て)久しく灸をすゑぬので、さつぱり痕が消えてしまつた、墨でしるしを附けずばなるまい。

ト佐五兵衛押入を明け硯箱を出し、抽出より線香と艾を出して、盆の上へ艾をほごし二枚折の屏風を立て、線香へ居爐裏の火をうつし、

どれ四五丁すゑようか。

ト二枚折の蔭で灸をすゑる思入。雨車　静な木魚入りの合方になり、花道より以前の松五郎、お咲頬冠り尻端折り、お咲は三味線を袖にて覆ひ、糸立を引張り合ひて出來り、花道にて、

お咲　ちつと小降りになつて來たね。

松五　雨がすつかり晴れてゐるから、今にこりやあ止むだらう

お咲　さうしてお前この絲立は、何處から持つて來なすつたのだえ。

松五　こりやあ豆腐屋のいけ構に干してあつたのを持つて來たのだ。

お咲　それぢやあ盗んだのかえ。

松五　あゝこれ、よけいな事を言はねえで、向うの家の軒下で、ちつと雨を止めて行かう。

お咲　どうぞお前の生業同樣、早く止んでくれゝばいゝが。

松五　とんだ意見を聞くものだ。

ト兩人舞臺へ來り、下手に佇み思入あつて、

お咲　ほんに禍ひも三年と、兄さんから貰つた金をお前から預つて、もしもの時の入用にと肌身放さず持つてゐたが、とんだお役に立つたねえ。

松五　さうよ、あの五十兩が役に立てば、死んだ親父やお袋が一方ならずお世話になつた、御恩送りになるといふもの。

お咲　行末長いお二人の命をお助け申したなら、まさか惡くは報うまい、少しはお前の罪亡し。

松五　惡事はするが涙ッぽろく、人の難儀を見てゐられず、時折難儀を救ふもの、、差引き勘定したならばやつぱり惡事が多いから、始終は命の分散だ。

お咲　二束三文その時は、わたしも小附に死ぬ心。

松五　えゝ縁喜でもねえ事を言つてくれるな。

お咲　ほんにこりやあ氣が附かなんだ、まだ素人だから堪忍しておくれ。（トこの時雨車烈しくなり。）松さん、もつとこつちへお寄り、又強く降つて來た。

松五　こいつあ軒下ぢやあ凌げねえ。

お咲　こゝの家をお頼みな。

松五　おゝ押を強くやつて見よう。

トこの中佐五兵衞は灸をすゑてゐる。松五郎手拭を取り、小腰を屈め、

はい、往來の者でございますが、俄雨で困りますから、ちつとの中お置きなすつて下さいまし。

佐五　（兩人を見て、）そりやあ嘸困らつしやらう。ゆつくり止めて行きなさるがいゝ。

松五　そりやあ有難うございます。さあお願ひ申した、こつちへ入んな。

お咲　入つてもよいのかえ。

佐五　さあ／＼遠慮はない、入らつしやい／＼。

お咲　これは／＼有難うございます。

ト内へ入り、松五郎佐五兵衞を見て、

松五　こりやあお灸でございますか。

佐五　逆上のせゐか此の頃は眼がかすんでなりませぬから、引下げをすゑますだ、何と言つても年の上そこら中ががたぴしして、ほんの古家の造作さ。

松五　古家どころか、斯う見たところがまだ／＼達者な御樣子だ。

佐五　六十三になりますが、年よりは達者でございまする。

松五　なに、六十三におなりなされますえ、こりやあめつぽうにお若い。

お咲　どう見ても五十代でござりまする。

佐五　一升買つて進ぜたいが、酒の替りに湯が沸いたら、香花を入れて進ぜませう。

松五　お構ひなされて下されますな。

佐五　なに、構ひはしませぬ、わしも喫まうと思ふ所だ。

お咲　それは有難うござりまする（トこの中松五郎は煙草をのみゐる。）松さん、一服おくれな。

松五　つまつてゐるぜ。

ト煙管を出す、お咲三味線を下へおき、煙草を喫む、佐五兵衞これを見て、

佐五　おゝお前方は門附かえ。

松五　はい、左樣でござりまする。

佐五　どこから出なさるのだ。

松五　え、（トぎつくりなし、）わたしらは。

ト言澁る。

佐五　あま崎町かね。

お咲　はい、その邊でござります。

トこの時湯の煮立ちし思入。

佐五　おゝいつの間にか湯が沸いた、どれ、茶を入れて進ぜませう。

ト有合ふ土瓶へ茶を入れ湯を注ぎ、佛壇の佛器を取り初穗を注いで、茶盆の茶碗を取り、

さあ／＼、勝手に注いでのんで下さい。

松五　そりやあ有難うござります、左樣なら御辭儀なしに御馳走になります。

お咲　どれ、お初穗をとりませうか。

トお咲茶碗へ初穗を注ぎ佐五兵衞の前へ出す、佐五兵衞はこの中佛壇へ茶湯をする、兩人茶を喫みゐる佐五兵衞は佛壇へ向ひ、

佐五　八月二十日の晩鐘の下で逢つたお方、壽命長久、守らせたまへ／＼。

ト手を合せをがむ、佐五郎これを聞き、合點の行かぬ思入、佐五兵衞は居爐裏の側へ來る、お咲茶碗を取つて、

お咲　はい、お初穗でござりまする。

佐五　そりや憚りでござりまする。

ト松五郎思入あつて、

松五　もし、ひよんなことをお聞き申しますが、今佛檀へ茶湯をして壽命長久守らせたまへと、佛へ向つて願ひなさるは、死んだ人でもない樣子、どういふ譯でござりまする。

佐五　おゝ、そりや合點の行かぬ筈、念佛檀へ茶湯して、壽命長久祈つたのは、わしが命の親でござります。

松五　命も親といひなさるは、込入つた譯と見えますね。

佐五　あゝ袖振合ふも他生の縁、仔細を話して聞かせませうか。

お咲　どうぞお聞かせなされて下さいまし。

佐五　(思入あつて、)然し話すも面目ないが、わしが命を救はれし仔細を聞いて下さりませ。この八月の十日の事まだ夜の明けぬ七つ過ぎ、このお寺のお住持から御本山へ納める金百兩受取り七つ半ば六つと間違へ出たのがあやまり、悪い者につけられて途中で金を盗みとられ、言譯なさに突詰めて、すでに死なうと思つたところ、思ひがけなく後から、死ぬを留めて失ひし金まで呉れし若いお人、神か佛か有難いと、顔を見れども夜明前、月は隱れてしかとは見えず、いづれ何處のお方なるかとその名所を聞いたれど、禮にも及ばずその金を返すにも及ばぬから、今日をおれが忌日と思ひ回向を頼むと言捨てゝ、留むる袖を振拂ひ、後をも見ずに行かれしお人、大恩受けしお方なれば、所も知れねば名も知れず、それ故其の日を目當にして壽命長久を祈りますは、命を助けて貰うた恩返しでござりまする。

ト佐五兵衛思入にて言ふ、松五郎これを聞き、扨はといふこなしあつて、

松五　もし、そりやあたしか宵の口に、小雨の降つたその明方、寺の下は四つ角で、屋根の修覆に足場のある、藏の前ぢやあなかつたかえ。

佐五　(びつくりして、)え、どうしてそれを、お前さんが。

松五　知つてゐるのはその晩に、お前の命を助けたのは、外でもねえこのおれだ。

ト佐五兵衛松五郎をつくづくと見て、

佐五　さうおつしやれば身丈恰好、くらがりながら記えてゐます。あの折助けて下すつたはお前樣でござりましたか。

松五　それぢやアあの晩、首くゝりは、爺さんお前か。

佐五　いや、面目もねえお出逢ひも、

お咲　俄に降りし春雨に、

松五　軒を借りたが縁となり、
佐五　助けられたるお人とも、
お咲　又助けたは爺さんとも、
松五　知らぬが佛の寺門前、
佐五　煙りも細き線香や、
お咲　樒の花の香も失せず、
松五　朝夕茶湯をしてくれるは、
佐五　水になさゞるわしが心、
お咲　これも何ぞの約束か、
松五　不思議に廻り逢つたのも、
佐五　盡きせぬ縁の、
三人　行合ひぢやなあ。
ト三人思入あつて、佐五兵衛ほた／＼と悦び、
松五　やれ／＼嬉しや／＼、どうぞ再びお目にかゝり、しみじみお禮が言ひたいと、朝夕願うた念が屆き、こんな嬉しいことはない、何とお禮を言はうやら言葉でお禮は盡されませぬ。
ト手を合せてながむ。
松五　あゝこれ爺さんつまらねえ、その禮にやあ及ばねえ此方で言はにやあならねえのだ。
佐五　なにめつさうな、お前様にお禮を言はれる覺えがござりませぬ。
松五　お前の方にはあるまいが、知つての通りのわしが世渡り、これまで危ねえ所をば、度々運よく脱れたは、まつたく壽命の長久をお前が祈つてくれたからだ。
佐五　さうおつしやつて下さりますれば、何より嬉しうござりまする。（ト表へ思入あつて、）何にしろ、まだ雨もさつぱりと止みませねば、どうか今夜はむさくとも、こゝへ泊つて下さりませぬか。
松五　そりやあ何より有難い、家へ歸るもよつぽどあれば氣の毒だが爺さんの厄介にならうかの。
お咲　ほんに濡れて歸るも難儀なれば、今夜は泊めてお貰ひなさいな。
佐五　どうぞさうして下さりませ、幸ひ今夜は門前に義太夫の會がござりますれば、寐ながら聞くもまた一興。
松五　思ひがけねえ爺さんに逢つたばかり、樂々と、
お咲　今夜はあたりへ氣兼ねもなく、
松五　枕を高く寐られるな。
ト　お咲佛檀へ思入あつて、
お咲　もし松さんちよつとお見、ぶしつけながらこゝのお

家に不釣合なお位牌だね。

松五　なるほど、こりやあ立派なものだ。爺さん、ありやあお前のかえ。

佐五　はい、先祖代々持傳へた、わしの位牌でございまする

松五　あの位牌がある位ぢやあ、立派な暮しと見えますね。

佐五　さあ、田舍でこそあれ苗字も名乘り、名主までした身分であつたが、不幸が續いて田畑から、家財かざいを賣盡し、胞衣をうづめた土地にもゐられず、この江戸へ來てこれほどに成下つたことなれば、以前の者は何一品手に殘つたものはなく、賣らうというても買手もなく、又賣られもせぬもの故位牌ばかしが昔の姿、實に先祖へ對しましても、濟まぬことでござりまする。

ト佐五兵衞佛檀より位牌を取りて來り見せる。お咲これを取りてよく／＼見て合點の行かぬ思入にて、

お咲　この寺澤氏といふ苗字は、これはお前の御苗字かえ。

佐五　いかにも、以前は上州の寺澤村の草分にて、而も寺澤佐五郎と人に知られた大百姓。

お咲　（びつくりして、）えゝ、そんならお前が佐五郎樣とか、もし御連のお名を、お澤と言はしやんせぬか。

佐五　やあ、どうしてそれを。

トおどろく。

松五　さあ、それをこれが知つてゐるのは、何を隱さう、お前の娘だ。

佐五　えゝ、扨はお澤ともろ共に、十七年後別れたる、おれが娘であつたるか。

お咲　父さんでござんしたか。

佐五　あゝ、よく無事でゐてくれたなあ。

お咲　さうして父さん上州から、どうして江戸へござんしたぞいな。

佐五　話せば長いことながら、今も言ふ十七年後、夫婦別れをする時に、其の倅とおれが連れ、この鎌倉の知邊を頼り、種々さま／＼な事をしたが、寺門番の花屋にまで成下るほどなれば、艱難苦勞を察してくりやれ。

お咲　わたしもその折母さんと里へ歸つて六七年、いかない暮しをする中に貧苦に迫る苦に病んで、纔りに思ふ母さんが三年越しの長煩らひ、藥の代に差詰り、輕井澤へ身を賣りしその甲斐もなく母さんは二月經たず死なしやんした、後は此の身の賴りさへないしよの憖に段々と流れ流りの旅から旅、結局の仕舞ひがこの鎌倉。

松五　世間も狭え九尺店、貧乏暮しの違棚が女房になるまで長い中、これも大そう苦労をしました
佐五　互ひの苦労も前の世から持つて生れた親子の因果、
お咲　身には襤褸を纏ふとも、命があればいつか又、
佐五　綺羅をかざつて此の難儀を、話す時節がありませう。
松五　そりやあなくつてどうするものだ、譬にもいふ人間は七転び八起とやら、
佐五　何にしろこのやうな、無事な顔をば見る嬉しさ。
お咲　わたしも嬉しうござんすわいな。
ト佐五兵衛に縋りよろしく思入。
佐五　かう名乗り合ふ上からは、縁に繋がる親子仲、当分此方に足を留め、ゆつくり話をして下されい。
お咲　おゝその話で思ひ出したが、わたしや兄さんとこのやうに、不思議な事で兄弟の名乗り合ひをしたわいな。
佐五　えゝそんなら、あの真五郎とか
松五　さあ、こつちもその時つながる縁に、近附になりやしたが、同じ稼業はしてゐれど、今日この頭出来星のわつちなざあ及びもねえ、なか〳〵兄貴は立派なものだ。
佐五　何のお前立派というて、あのやうなろくでなし、〳〵ト松五郎へ思入あつて いや、ろくな死様しをるまいと思うたに、達者でゐるとは、まだしも運にかなうた奴、そして今ではどこにをりますな。
松五　兄貴もくれえ身の上だから、居所も言へねえ壁に耳、どうせ今夜はお世話になるから、その中ゆつくり話しませうよ。
お咲　そりやもうお前が言はずとも、わたしも積る話の数、言うたり聞いたりしたいわいな。
松五　それぢやあ丁度幸ひだ、隣り知らずの寺門前、あんまり近所へ気兼ねがなけりやあ、四五日お世話になるがいい。
佐五　えゝ四五日と言はずとも、いつまでなりと遠慮なくどうぞ逗留して下されい。いや長話で馳走もせず、せめて蕎麦でも進ぜたいが、蕎麦屋までは三丁ばかり、急にこゝまで持つて来ねば、何はなくとも飯を炊き、畑へ出来た菜でも摘んで煎り菜でもして進ぜませう。
ト下手へ行き、米櫃から桶へ米を量るこなし。
松五　あゝこれ父さん、まだ二人とも腹がいゝから、明日のことにしなせえな。
佐五　明日炊くも今炊くも同じこと故、留めさつしやんな。

お咲　父さん仕掛をしなさんすなら、わたしがといで上げようわいな。

佐五　いや〳〵、人の家は勝手が知れぬ。今日は客のことなれば、足でも延ばしてゐたがよい。

ト佐五兵衞米を桶へ入れ、井戸端へ出かけようとする。ばた〳〵になり、花道より以前の與三郎森戸屋といふ弓張提灯を持ち走り出來り直に舞臺へ來て、

與之　父さん、家でござりましたか。

ト息を切つて言ふ。

佐五　おゝ與之助か、どうしたのぢや。

與之　どうしたどころではござりませぬ、大事でござりまする。

佐五　大事とは氣遣ひな、（ト茶碗へ水を汲み）まあ〳〵水でも呑んだがよい。

與之　え有難うござります。

ト水を呑み胸を撫でおろす。

佐五　さあ、若旦那の宗次郎樣が妙見樣へ奉納の預り金を百兩、餘儀ないわけでお遣ひなされ、その才覺が出來兼ねて言譯なさに死なうとせしを、思ひがけなく門口から誰とも知らず投込んだ、その金高も五十兩、天の助けと二つになし千葉樣へ納めしところ、その金故に若旦那に疑ひかゝつて代官所へ、引かれておいでなされた。

佐五　えゝゝゝ、そりやまあどういふ譯あつて。

トびつくりする、松五郎お咲もこれを聞き心得ぬ思入。

與之　さあ、門口から投込んだ五十兩は、一兩々々三つ鱗の極印ある北條樣の紛失金、言譯立たぬその時は、獄舍へ行かねばならぬ故、傍輩衆の親達が皆見舞に來ましたから、お前もちよつと來て下され。

佐五　それはひよんな事ができた、與之助そちが子飼から御恩になつたお主樣、おれもお見舞に行かねばならぬ。

トこの中松五郎、お咲よろしく思入あつて、松五郎與之助に向ひて、

松五　もし、今お前がお話の門から金を投込んだのは、そりやあたしか同朋町の中ほどぢやあござりませぬか。

與之　あい、しかも右側の中ほどで、お組さんといふ醫者の家。

松五　それぢやあ先刻の、

與之　え、

松五　いやさ、先刻そんな噂があつた。

ト松五郎とんだ事をしたといふ思入、この中お咲は始

終與之助を見て、我が弟かといふ思入。
お咲　もし父さん、この子が弟でござんすかえ。
佐五　あゝ、これがその時乳呑であた、末の弟の與之助ぢや。
與之　わたしを弟といふお前は。
お咲　幼い時に別れたる、わたしやそなたの姉ぢやわいの。
與之　え、そんならお前が話に聞いた、姉さんでござんしたか。
お咲　おゝ弟であつたか。
與之　おなつかしうござりまする。
　ト お咲の傍へ行く、お咲手を取つて、
お咲　よう顔見せてくりやいの。
　ト この中松五郎はぢつと思入。
佐五　あゝこれ／＼、その名乘合ひは今日せずとも、又後でしたがよい、先づ差當る御主人様のお身の上の一大事お見舞ひに行かねばならぬ。
松五　なるほど、こりやあ少しも早く御主人様へ行きなせえ。わしも繫がる縁ながら、その中逢つて話しませう。
お咲　ほんにかうして同胞の名乘り合ひをするからは、どうぞ明日にもゆつくりと。
與之　お暇を貰つてまゐりませう。
佐五　さあ／＼與之助、支度はよいか。
與之　はい、もうよろしうござりまする。
　ト 提灯を持ち下手へ來る。
佐五　これ、二人は後を頼みますぞ。
松五　二人でしつかり留守をするから、後は必ず案じなさんな。
お咲　そんなら弟。
與之　姉さん、お暇いたします。（トこの時仕掛にて提灯消える。）あゝ、これはしたり。
佐五　與之助どうしたのだ。
與之　蠟燭がござりませぬ。
松五　あゝ、灯がなくちやあ、
お咲　外はくらやみ。
　ト 佐五兵衛思入あつて、
佐五　あゝ、そのくらやみへ若旦那が。
佐五 松五 お咲　え。
佐五　ござらぬやうにしたいものぢや。
　ト 時の鐘、佐五兵衛思案の思入にて與之助附き花道へ

入る、お咲は粗朶の燃えさしを出し、これを灯に門か
ら見送る、松五郎はホロリと思入。この時上手にて、
淨瑠璃の口上聞える。
（口上）東西〳〵、お染久松新版歌祭文、野崎村の段切ま
り左樣。
ト これより床の淨瑠璃になる。
〽後に娘は氣もいそ〳〵、こんな事なら今朝ふたり髮も
結うておかうもの、鐵漿の附けやう挨拶もどういうてよ
からうやら、覺束なます拵へも、祝ふ大根の友白髮、
ト 後に松五郎お咲濟まぬことをしたといふ思入あつ
て、顏見合せ、
松五 これお咲、とんだ事をしたなあ。
ト 時の鐘、合方、蛙の聲になり、
お咲 ほんに先刻のあのお金が、さういふ印のあるとも知
らず、
松五 親が受けたる大恩を少しは報ふ了簡で、危ふい命を
お助け申した金が却つて仇となり、宗次郎樣へ御難儀か
け、今となつちやあ濟まねえわけ。
お咲 言つて返らぬ事なれど、極印のあるお金をば、何故
下さんしたことであらう。

松五 こりやあ兄貴も知らなんだのだ。
お咲 どうか仕樣はあるまいか。
松五 どうといつてからなつちやあ、所詮たゞぢやあ濟ま
ねえが、まあ父さんが歸つて來て樣子を聞いた上のこと
だ。
お咲 なるほどそれがようござんす、三人寄れば文珠の智
惠、又よい思案がござんせう。
〽門の戸ぴつしやりさしもぐさ、燃ゆる思ひに娘氣の細
き線香に立つ煙り、
ト お咲外を見て門口へ入る、松五郎思入あつて、
松五 今隣りで語るのは、ありやあお染の野崎村、おみつ
が灸をすゑる件、幸ひこゝに父さんがすゑかけた灸があ
る、三里でもすゑようかしらぬ。
ト 死なうといふ覺悟の思入。
お咲 ついにすゑたこともないに、何で三里をすゑなさん
すのだ。
松五 これから旅へ出かけるのに、足を丈夫にしようと思
つてよ。何にしろ飯が食ひてえが、冷てえのでもありや
あしねえか。
ト お咲下手にあるお櫃の蓋を明けて見て、

お咲　お櫃にあるのは一膳ばかり、

松五　道理で炊いて喰はせると父さんが言つたつけ、無いと思ふと猶喰ひてえ

お咲　それほどお前喰べたくば、わたしが炊いて上げようか。

松五　然し、これまで絹布ぐるみで樂をして來た手前の身體、飯を炊かすも氣の毒だ。

お咲　何の氣の毒なことがあるものかね、あのお染の文句をお聞きよ。

〽二人一緒に添はうなら、飯も炊かうし織りつむぎ、どんな貧しい活しでも、わしや嬉しいと思ふもの、お孃さんでも莫連でも、女の心はあの通りさ。

松五　それおかあ、早く炊いてくんねえ。

お咲　どれ、井戸端で流して來ようか。

〽曇り勝ちなる久松も、背撫でさすり聲ひそめ、そのお恨みは聞えてあれど、十歳の時から今日が日まで、船車にも積まれぬ御恩、仇で返すのいたづら、

トこの中お咲は米かし桶を持ち下手へ來り、井戸端にて本水を汲み、米をとぎにかゝる。松五郎は上手にて手を組み思案の思入、これより心々になり、

松五　積る悪事の帳消しに、死んだ親父やお袋がお世話になつた御恩送りと、善に返つてした事が却つて先方の難儀となり、

お咲　知らぬことゝはいひながら、現在弟の與之助がお主様の若旦那、繩目をお受けなされたも、元の起りは兄さんから貰つた金があつた故、

松五　お觸のあつた北條家の、極印金とも露知らず、お役に立つたを悦んだ、その甲斐もない今夜の仕儀、

お咲　悪い心でしはせねど、今となつては仇となり、もしものことがあつたなら、

松五　手はおろさねど二人して、宗次郎様を殺すも同然、

お咲　これから直に名乘つて出て、

松五　科をこの身に引受けようか。

お咲　どう考へても死ぬよりほか、

松五　言譯するに思案はない。

お咲　これも定まる約束ながら、

松五　思へば金が、

兩人　敵ぢやなあ。

ト心々の思入、これより地藏經になり、松五郎懷より四つ折りの半紙を出し、これへ書置を書く。この中

お咲は米をとぎ水にて流しゐる。松五郎は書き仕舞ひ思入あつて有合ふ二枚折りの屏風を出しよき所へ立て、以前の刀を取つてよい物があつたといふ思入にて屏風の内へ住ふ。この中お咲は障子をへだて、下手屋體にて水加減をなし、火を焚附ける思入よろしくあつて、松五郎を見て、

お咲　お前屏風を立廻して、何をしてゐなさんすえ。

松五　膝脚氣が起つたから、三里へ灸をすゑるのだ。

お咲　今夜に限つたこともないのに。

松五　おれもすゑる氣もなかつたが、今も言ふ父さんのすゑかけた灸があつたから、そこからの思ひ附だ。

お咲　そりやアあつい思ひ附だね。

松五　これといふのも鎌倉に長く足は留められねえから、手前を連れて上州の兄貴の所へ行く積り。

お咲　して兄さんの所までは、どの位でござんすえ。

松五　その道程は十萬億土、いやさ、奥の方まで行く心だ。あツつゝゝゝ。

〽互ひに眼と眼見合する心の覺悟は白髪の親父。

ト松五郎灸をすゑる積りで腹へ突立て苦しむ。花道より佐五兵衛出來り、下手を窺ひゐる。お咲は灸をすゑると思ひ、

お咲　おやまあ、高が三里位に子供ぢやアあるまいし、何で齒をたてなさるのだ。

松五　それだといつて灸は嫌ひ、今があつい皮切だ。あツつゝゝゝ。

お咲　そんなに三里はあついものかえ。

松五　いや、三里ぢやあねえ脇腹の左りせうもんから右へかけ、あつゝゝゝ。

ト苦痛を怺へる思入。

お咲　ほんにお前は仰山な、ぢつと我慢をしてすゑさんせ。

松五　さあ、我慢はすれど、怺へられねえ、あつゝゝゝ。

お咲　そりやあどんな灸でござんす。

トへだての障子を明けて此方へ來る途端に、二枚折の屏風倒れ、松五郎腹へ短刀を突立て糊紅になり、苦しみゐるを見てびつくりなし、

えゝゝゝ、こりやまあ氣でも違うてか、何で腹を切らしやんした。

松五　なんでとは情ねえ、宗次郎様を助けうと、おれが命を捨てたのだ。

お咲　そんならそれで死なしやんしたのか。

佐五　（内へ入りて、）様子は門で聞いてゐたが、宗次郎様を助けるとは、そりやまあどういふ仔細にて、

松五　おゝ父さんか、いゝ所へ歸つてくれた。宗次郎様を助ける爲め死なにやあならねえ事情を、一通り聞いて下せえ。（ト竹笛入りの合方になり、）おれが親父が森戸屋に若い時分勤めてゐた、その縁により地面内に長らく住つてお世話になり、忘れもしねえ七年後、おれが伊勢から上方を遊び歩いた留守の中、親父が死んでお袋一人、取り片附に困つたところ、お慈悲深い旦那様が二十五兩下すつて、それで後の仕末が出來、四十九日の餅までも世間へやつたは旦那のお蔭と、去年死んだお袋がやゝともするとその話し、御恩送りをしてくれと、眼を瞑る時おれへの頼み、今日思はずも森戸屋の若旦那が、金故に死なうと覺悟のその所へ、丁度折よく出合つたは、こゝで御恩を返せといふ亡き親達の導きと、極印金とも知らずして投込んだのが身の過り、その金故に若旦那へ難儀をかけては濟まねえから、一部始終を書殘し、身の言譯に死ぬ覺悟、どうで始終はこれまでの惡事に切られて死ぬ身體、千住の犬や品川の烏の餌食にならねえのが、何よりおれの身の仕合せ。さあ詳しく書いた書置を、上へさし上げ若旦那を、どうぞ助けて下さりませ。

へ思ひきつたる眼の中に浮む涙は水晶の、玉より清き眞心に、今更何と言葉さへ涙呑込み、呑込んで、

トよろしく思入あつて言ふ、お咲は縋り泣き、佐五兵衛はこれを聞き思入あつて、

佐五　あゝ惡に強きは善にもと、あつぱれ見上げた松五郎どの、恩を知らぬは人ではない、よく覺悟をさつしやつた。この書置を持參なし、若旦那をお助け申し、こなたに犬死させぬほどに、安堵して往生さつしやれ。

松五　えゝ忝い、それでわしも冥土へ行き、死んだ親父やお袋へ、娑婆の土産がござりまする。

トこの中お咲下手より庖刀を持つて來て、

お咲　その道連にわたしもとも〴〵、

ト死なうとするを留めて、

佐五　あゝこれ娘早まるな。

お咲　いえ〳〵放して下さんせ。わたしが爲めには弟のお主宗次郎様へ疑ひかけ、この御難儀をかけたのも、元の起りは兄さんから貰うた金が紛失金、ぬしよりわたしが濟まぬ義理、どうぞ死なして下さんせいな。

佐五　あゝこれあぶない、待てといつたら待たぬかい。

松五　これ／＼お咲、そりやあ悪い了簡だ、おれはこれまでした科に、長く此世にゐられぬ身體、かういふ事で命を捨てるは願つてもねえ身の仕合せ、手前は後で父さんの先途を見屆け、二つにやあ、親兄弟もねえおれが間弔ひをしてくりやれ。

お咲　それぢやというてお前を先立て、どうまあ跡にゐられうぞいな。

佐五　死たらといふも尤もだが、若旦那への義理立ては松五郎どので濟んだれば、そちは存らへ後々の間弔ひが恩返し、必ずともに早まるな、それとも達て死ぬならば、おれもとも／＼死なねばならぬ。

お咲　何でお前がとも／＼に死ぬことがござんせう。

佐五　はて、聟や娘を先だてゝ、何で生きてゐられうぞ。親を殺すも殺さぬも、娘そなたの心一つだ。

お咲　すりや、死ぬにも死なれぬか、はあゝゝゝゝ。

ヘ言葉に否も言兼ぬる鴛鴦の片羽の片々に、

トお咲泣く。松五郎思入あつて、

松五　さゝ、暇どつてゐるところでねえ、ちつとも早く書置を代官所へ持参なし、若旦那をお助け申すが、何より肝要。

佐五　おゝ、いかにも、これから娘とゝも／＼、事の仔細を申上げん。

お咲　そんならどうでも。

松五　達てと言はゞ是非がねえ、夫婦の縁もこれ限りだ。

お咲　えゝ。

松五　人でなしでも一旦の亭主と思はゞ生きながらへ、間弔ひをしてくりやれ。

お咲　それほどまでに言はしやんすなら、死ぬる命を存らへて、

佐五　若旦那をお助け申し、こなたの義理を立てさせませう。

松五　えゝ忝ねえ、その心なら少しも早く、

お咲　とはいへ、このまゝ

佐五　見捨てゝ行くも、

松五　はて、人がましい身ぢやあなし、野末に晒す死人同然、おれに構はず代官所へ。

トこれにて兩人是非なく、

佐五　そんならこれから、

お咲　夜更けぬ中に、

松五　ト兩人立上る、松五郎思入あつて、
思へば深い親子の縁も、
佐五　舅や男といふ間もなく、
お咲　縁短かき春の夜に、
松五　婆婆と冥土の別れ霜、
佐五　明日は消え行く、
お咲　この世の名殘り、
ト傍へ寄らうとするを、
佐五　あ、これ。
〽船と堤はへだたれど、縁を引綱一筋に思ひ合うたる戀仲も、義理のしがらみ情のかせ杭、駕籠に比翼を引分けて、
トこの中佐五兵衛お咲をへだて、兩人花道へ行く、松五郎はこれを見て安心したる思入、知せなしに道具斜に廻る、松五郎門口に匐ひ出で、延上りて、
松五　父さん、
佐五　おゝ、
松五　お咲、
お咲　あい。
ト松五郎ひよろ〳〵と立上り、
松五　頼んだぞよ。
トにつたり笑ひ、たぢ〳〵と後へ下り、大卒塔婆に打附かる、これにて流灌頂の二本の卒塔婆打違ひて十文字となり、これへ手をかけ留まる、これを見て兩人舞臺へ歸り、お咲泣伏し、佐五兵衛手を合せる。
〽心ごゝろに、
ト松五郎の腹より血流れ出で、佐五兵衛は念佛を唱へる、この仕組よろしく、三重本釣鐘にて、

幕

鑄掛松（終り）

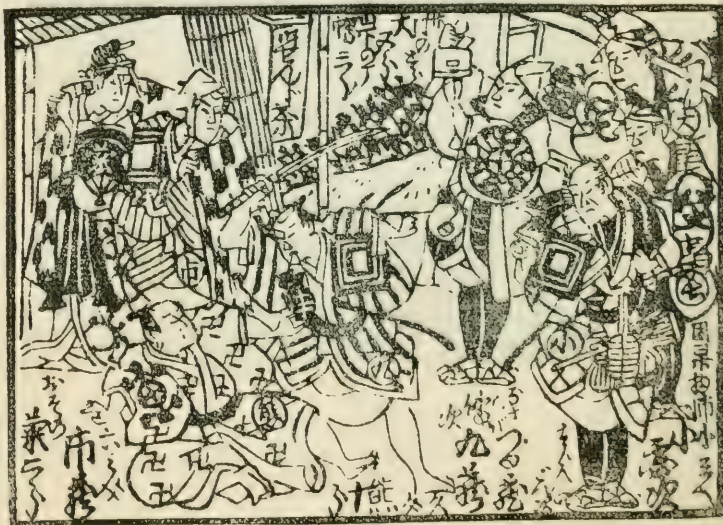
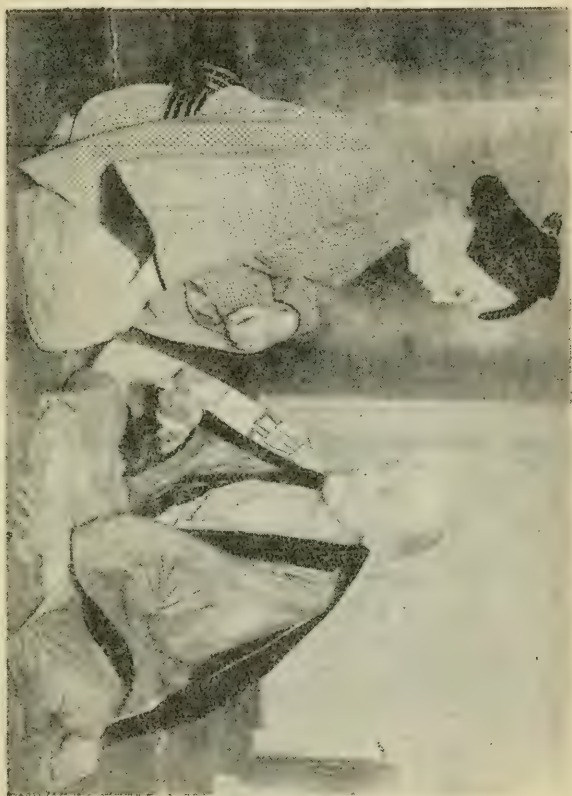
小團次の鑄かけ松は河竹の作にて、非常の好評なれば、出幕にならざりし當狂言の見世場鑄掛松の立腹と、大切の淨瑠璃とを付幕として、三月七日より出せしに評判ます〳〵能く、近來稀なる大入大當りなりしが、わづか二日を過ぎ同月十日より小團次病氣に罹り、抑して勤めしも終に叶はず引込みしかば、いかんともなしがたく、同日かぎり舞ひをさめたり。

（續續歌舞伎年代記七〇頁）

龍三升高根雲霧　二幕

綠林白波の漢和有るが中にも魁首の雲霧仁左衞門が手下のおさらば傳次逃足早きすばしりとは四五段上手の六之助裏は有德の息子株廣間の客で初會からおそのと女房約束に心を鬼に品川を逃げた夜に八ツ山下の人殺しも身に降りかゝる雨宿り身は野ざらしの罪深き子故の闇に妙法の功力でも助からぬ七三郞お吉が情死の孝道せめては忠と主恩の纒目にかゝる因果小兵衞と因果小僧が輪廻はめぐる世話物語り

繪草紙の一部（序幕）

因果物師小兵衛
（尾上松助）

因果小僧六之助
（尾上菊五郎）

龍三舛高根雲霧（因果小僧——二幕）

序幕

品川福島屋の場
高輪八ツ山下の場

（役名——因果物師野晒し小兵衛、因果小僧六之助、おさらば傳次、判人見てくれ權次、福島屋の若い者喜助、同太吉、近江屋手代九助　福島屋抱へかしくのお園、同お勘、同お菊、同お玉等。）

（福島屋見世先の場）本舞臺四間通し常足の二重、上手戸棚踏段、向う下手へ寄せて福島屋と記したる柿暖簾、此の上框、間平戸の戸棚、左右折廻し板羽目、下の方一間千本格子、此の前に手桶を積み重ねたる用水桶、二階格子、煙出しの附きし庇の張物をおろし、總て品川宿福島屋見世先の體。二重眞中に大きな角行燈、此の側に帳箱、喜助着流し若い者の裝にて帳を調べゐる。側に見てくれ權次着流し半合羽判人のこしらへにて煙草を呑み居る、下手に太吉臺の物を片附け居る、此の見得賑かなる流行唄にて幕明く。

喜助　權次さん、好い掘出しもないかね。
權次　此の間一人野者の娘で、五年百兩といふ好い玉があつたが、二十兩のことで吉原の中萬字へ買はれてしまつた。
太吉　萬字屋は豪氣に出來るさうだね。
權次　元地の假宅ぢやあ、ぶすこたざア當りさ。
喜助　久しく何處へも行かないが、川崎へでも行かうかね。
權次　驛へでも行きやあ知らねえが、宿ぢやあ何處へ行つても顏が知れて化けられねえ。

ト此の時奧よりお勘胴抜卷帶新造のこしらへにて出來り、

お勘　おや、權次さんおいでかえ。
權次　誰だと思つたらお勘さんか、お前も胴抜に大きいの。
お勘　お前の口に似てさ
權次　こいつア一番お前の鼻だ。

お勘　何だとえ。
權次　凹んだといふことよ。
太吉　凹んで居るは有難い。
お勘　なに、有難いことがあるものかね。
喜助　ほんに自由にならねえものだ、此の脊丈が鼻へ延びたらよからうに。
お勘　大きにお世話だ。權次さん、一服おくれよ。
　ト權次の煙管を取り煙草を呑む。
權次　お勘さん、豪氣に賑かだね。
お勘　あの騒ぎにお園さんの座敷さ、それ、お前も知つておいでの、本郷の九助さんさ。
權次　あゝ、あの近江屋の手代の九助さんか、あの人もお園さんにやあ大層熱くなつて居るが、あれがほんの無駄を知らねえといふのだ。
喜助　然し都合がよさゝうだが、金でも貸して居るのかね。
權次　とんだ店卸しをするやうだが、元本郷の元町で、近江屋喜左衞門といふ金貸の內の手代さ、所で聞きねえ、そこの家の女房が見世の若い者と情事をして、着類から天窓の物、金もどつぽど掌握して其の若い者と逃げた所、向島で盗人に、持出した雜物から金まですつかり取られた上、二人とも殺された。
喜助　その話しは此の間、講釋師の琴鶴さんと伯圓さんが一座で來て、種になりさうだと話しなすつた。
權次　それから後が大變よ、家へも又盗人が入つて亭主を殺し、有金をそつくりと持つて行つたさうだが、その騒動が仕合せで、九助さんなざあそれまでこかした金がそれツきり、今ぢやあ小金を貸すさうだ。
喜助　道理こそ見掛けより、金が廻ると思つたが。
太吉　性來はよかあないね。
權次　どうして／＼油斷はならねえ。
お勘　道理こそ、お園さんが厭がんなさる筈だね。
權次　これさ、今のことを言つちやあ惡いよ。
　ト此の時奧にて、
九助　いやだ／＼、歸るから留めるな／＼。
お榮　あれさ九助さん、お待ちといふに。
　ト流行唄になり、奧より九助着流しにて手に羽織を持ち出來る、これをお榮胴拔卷帶女郎のこしらへ、お玉縞の着附、端折つて細帶新造にて留めながら出來る。
　あれさ、お待ちと言つたら待つておくんなさいなね。
九助　こうお榮さん、お前にいふのぢやあねえけれど、斯

う來る度に廻しだ〳〵と、馬鹿にされてたまるものか、爰ばかり女郎屋ぢやあねえ、何處へ行つても憚りながら買手のある九助さんだ、あんまりてうせへぽうにして貰ふめえ

　トこれにて喜助、太吉立ちかゝり、

喜助　こりやあ九助さん、どうなさいましたのでござります。

九助　どうもかうもいられねえ、歸るのだ、履物を出せ。

お榮　あれさ、お前さんをお歸し申す位なら、こんなにお留め申しやあしない、

お玉　まあ靜になさいまし、お園さんが氣を揉むから。

九助　何のあいつが氣を揉むものか、お前方がそんなことをいふと、尚おらあ癪に觸らあ

喜助　生憎今夜は、やかましいお屋敷のお客樣で、それでお園さんが明けましたのでござりませう、

太吉　只今お座敷へ、あげますから、まあ御勘辨なさいまし。

九助　いやだ〳〵、歸ると言つたら歸らにやあならねえ。

　ト行きにかゝるを、

お榮　あれさ、お待ちなさいといふに。

　トこれにて權次出て、

權次　もし九助さん、何をそんなに腹をお立てなさるのだ、

九助　ま、お前は判人の權次さんか、

權次　何だか譯は知らないが、お前さんにも似合はねえ、好い加減に野暮をおつしやいな。

九助　言はにやあならねえ斯ういふ譯だ、お前も判方のことだ聞いてくんねえ、あの駿河の府中から來た鞍替もののお園にやあ、是れまで物日はいふに及ばず移替から天王樣、軒提灯までおれが厄介、この間も大枚の五十兩といふ金を、貸して遣つた九助樣だ、その恩を忘れやあがつて野呂間が鰹を買やあしめえし、やれさしがある〳〵と白癡にするから歸るといふのだ、何と無理ぢやアありますめえ。

權次　そりやあお前さんが尤もだが、斯うしてみんなも留めますから、今日の所は御不承なせえ

お榮　さあ、見世先きで外聞が惡いから、座敷へおいでなさいよ。

お勘　おいでなさいと言つたら、おいでなさいよ。

　トお勘手を取つて引張るを振拂ひ、

九助　えゝ引張りやあがるな、歸るといつたら歸るのだ。
ト行きにかゝるを皆々留める。
喜助　これさ、九助さん。
皆々　お待ちなせえ〳〵。
ト九助歸らうとするを、皆々わや〳〵と、捨ぜりふにて留める、やはり流行唄にて、奥よりお園さら毛の結び髪へ抱柏の紋の附きし鼈甲の簪を立挿しにさし、緋の長繻袢好みの仕掛を羽織り上草履にて出來り、九助の後より手を執つて留め、
お園　もし九助さん、お前どうしたのだね
ト九助お園を見て思入。
九助　どうするものか歸るのだ。
お園　何だねお前歸るのなんのと、今夜のお客は分らないから、ちつとのうち待つてゝおくれと、あれ程わたしが言つて置くのに、お前にやあ分らないのかねえ。
九助　えゝ、聞きたくもねえ止してくれ〳〵。
ト無理に振放さうとするを、
お園　お前も不斷からわたしの氣を、知らないぢやアあるまいし、あつちの客を早く寐かしてゆつくりお前と樂しまうと思つて居るに、それも知らず座敷でゞもあることか、見世へまで出て腹を立つちやあ、實にわたしがお仕様がないわね、斯うして恥をかゝせなさるからは、やつぱり只のお客の氣かえ、さういふ中ぢやあないぢやあないかね
トお園泣聲にて九助の體をゆすぶる、これにて九助ぐんにやりとなる。
權次　これさ九助さん、惚れて居りやこそお園さんが、あんなに氣を揉んで居なさらあ、罪になります、いゝ加減にしなせえ。
喜助　ほんに權次さん聞いておくんなせえ、九助さんがお出でなさると、お園さんが浮々と外の客人を粗末にしなさるから、お部屋ぢやあ小言をいふし、わたしでも賄ひでもどんなに心配をいたしませう。
權次　併し、さういふ目には逢ひてえものだが、金づくぢやあ出來ねえことだ。
トお園思入あつて、
お園　賄のおしげどんが、いつでも異見をするけれど、ちつとはさういふ樂しみもなけりやあ、苦界の勤めが出來るものかねえ。
トお園權次と顏見合せちよつと舌を出す、九助これを

見て、

九助　やい、その舌は何だ。

お園　えゝ、あの是れは、歸らうといふお客をば、留める時の禁厭さ。

　ト言ひながらお園九助の額へ舌をおッ附ける、九助ぞつとする思入

お榮　さあ、九助さん後生だから機嫌を直して、早く座敷へお出でなさいよ。

お玉　あんまりお園さんに氣を揉ませると、

お勘　又あとで癪でございませうよ。

喜助　まあ兎も角もお座敷へ、お出でなすつて仲直りに、

太吉　お一つお上りなさりませ、

權次　わつちも久し振りでお附合ひ申しませう、さあお園さん、早くお連れ申しておくんなせえ。

お園　それだつても九助さんは、わたしの言ふことを聞いておくれでないものを、どうしたら好いのだか、じれつたいよ。

　ト九助をゆすぶる。

權次　さあ／＼九助さん、夜が短い、わつちと一緒にお出でなせえ。

　ト九助思入あつて、

九助　歸るのだが仕方がねえ、みんながそんなに言ふのだから、座敷へ行つて酒でも呑まう、

皆々　それがようございます。

九助　然しお園に引ふされて歸るのぢやあねえせ、みんなへの義理で歸るのだよ。

お榮　何でもようございますから、

女皆々　早くお出でなさいましよ。

九助　それぢやあ行かうか。

お園　さあお出でよ。

　ト手を取る。

九助　えゝ、みつともねえわ。

　ト流行唄になり、お園九助の手を取り引張りながら奧へはひる。跡より權次、お榮、お玉、お勘、附いてはひる。

喜助　いや、あの人もたふしもんだせ、何時でもぐづ／＼言やあがらあ、其の癖しみッたれだ。

太吉　全體廣間で遊ぶ輩ぢやあねえのだ。

　トやはり流行唄にて、花道より○△の駕籠舁二人垂れを下せし四手駕籠を舁き出來り、直に舞臺へ來て、二重

へ横附にする。

喜助　へい、いらつしやいまし。お客樣だよ。

ト奥にて、

大勢　あい〳〵。

此の内駕籠の垂れを上げる、内より因果小僧六之助剃立て着流し、粋な町人の息子のこしらへにて、羽織を手に持つて出る、

喜助　これはどなたかと存じましたら、六さんでござりますか

太吉　よくいらつしやいました。

六之　大分賑かだね。

喜助　へい、仕合せと賑かでございます。

ト○駕籠よりばら緒の雪駄を出し、

○　はい、お履物。

太吉　あい〳〵。

ト草履札を附ける、此の時奥より以前のお榮、お玉、お勘出來り、

お榮　おや六さん、よくお出でなさいましたね。

お玉　お前さんの聲だと思つたから、駈出して來ましたよ。

お勘　お園さんが、どんなに待つておいでだらう。

六之　こりやあみんなお揃ひで、今に遊びに來ておくれよ。

お榮　來るなといつても行きますよ、みんなが待人を掛けて、待つて居ましたものを。

六之　嘘にも有難いね。おい若い衆大きに、御苦勞だつた。(ト懐より二つ折の紙入を出し、額を一つ紙に捻つて)歸りに一口やつて行きな

○　へい〳〵、是れは有難うござります。棒組、お禮を申しな。

△　旦那有難うござります。

ト喜助に向ひ、

兩人　よろしう

ト辭儀をなし下手へ來て、兩人駕籠を疊んで居る。

六之　おい、御苦勞でも、ちよつと淸水を呼びにやつておくんなせえ。

喜助　へい〳〵、畏まりました。丁度お仙どんが參つて居ります。

六之　そりやあよかつた。

お勘　もし六さん、今日は何をお奢りか知らないが、わた

しやあ甘味がよいよ。
六之　あゝ奢らうとも〳〵、何でも奢るが、わたしやちつと腹が來たから、先きへ結びたいものだ。
太吉　畏りました、淸水へさう申して遣りませう。
お榮　ほんに六さんよくお出でなすつたね、今もお勘さんとの前さんの話しをして居た所でありますよ。
六之　惡く言つてかね。
お榮　いゝえ、誰かゞ好い人だと言つてさ。
六之　大分程があがつたね。
お榮　お前さんの仕込みでさ。
お勘　六さん早く座敷へお出でなさいよ。甘味が喰べたいからさ
六之　よく喰ひたがる子だの。
お榮　喰物無用の札でも附けて遣りませうよ。
六之　それがいゝ。
喜助　さあ、いらつしやいまし。
六之　どれ、座敷へ行つて話しでも仕ようか。
トやはり流行唄にて六之助先にお榮、お玉、お勘、喜助、太吉奥へはひる。〇△殘り思入あつて、
〇　こう棒組、今の客人を知つて居るか。
△　さうよ、お馴染ぢやあねえか、何處かで見た人だ。
〇　裝かたちは違つて居るが、いつか向島ででツくはした。
△　違えねえ、人殺しか。
〇　あこれ、靜に言へ、似た人もあるものだ。
△　いや、錢放れがいゝから、さうかも知れねえ。
〇　掛り合ひにならねえうち、早く行かうぜ。
△　さうだ〳〵、引合ひは眞平だ。
と兩人駕籠を擔ぎ花道へ行く、此の以前より後へ權次出て居て、
權次　おい、駕籠屋さん〳〵。
〇　はい〳〵、何でござります。
權次　お前方は何處だ。
△　はい、あつちの方でござります。
權次　えゝ分らねえ、所はどこだ。
〇　山下でござります。
權次　聞きてえことがあるから、ちよつと來ねえ。
△　いえ、急ぎでござりますから、
兩人　眞平御免なさいまし。
ト駕籠を擔ぎ、逸散に花道へはひる。

権次　えゝ待ちやあがらねえか。(ト思入あつて)今廊下でちらりと見た、粋なこしらへの息子株、聞きやあお園さんの客ださうだが、形恰好が似て居るゆゑ、若しやと思ふ出合頭、今の蔦蒲屋の話しちやあ、慥にあれが、(ト権次思入あつて)こいつあお部屋へ言はにやあならねえ。
ト思入、流行唄になり向うへ思入あつてうなづく、是にて道具廻る。

(下座敷廻部屋の場)　本舞臺三間の間平舞臺、正面茶壁、床の間、上の方一間の附屋體、此の内、向ふ廊下の書割り出はひりあり、下の方後へ下げて誂への階子出はひりあり、總て品川島崎屋下座敷廻し部屋の體、爰に屏風を建て蒲團の上に六之助住ひ、小楊枝を遣ひ居る、お園煙草を吸附けて居る、側に臺の物を取散らし、お玉蝶足の膳を片附け居る、此の模樣よろしく流行唄にて道具留る。

お園　六さん、今夜は生憎だつたから、明日はおいでな。
六之　降りでもすりやあ仕方がないが、お天氣ぢや歸らにやあならねえ
お玉　きつと明日は降りますよ。
お園　どうぞ降らしたいものだね。
六之　降ると嫌ひな雷さまが鳴るぜ
お園　なに、鳴つてもよいよ、溜池の黒田さまの天神さまの梅のお守りを、裏河岸の蔦頭から此の間貰つたから、もう鳴つても大丈夫さ
六之　そりやあいゝものを貰つた、あの溜池の天神さまは、去年から参詣させるが、今ぢやあ大層人が出るとよ。
お園　金毘羅さまに續いて、お流行りなさるさうだね。
六之　さうよ、此の頃の流行ものぢやあ、黒田の天神さまと福島屋のお園さんだ。
お園　えゝも、憎らしい。
ト六之助の肋を抓る。
六之　あいたゝゝゝ。
お園　誰に逢ひたいえ、おまんさんにかえ。
六之　おまんさんとは。
お園　表二階のさ。
六之　又詰らないことを。
お園　なに、詰らないことはありません、お前に大層惚れて居るよ。
お玉　ほんにおまんさんは、六さんの噂ばつかり言つて居

なさいます。

六之　お前までがおんなじやうに。

ト お園六之助に寄り掛り、

お園　もし、浮氣をするときかないよ。

六之　誰がするものか。

ト肩へ手を掛けて引寄せる。

お園　本當にかえ。

六之　知れたことよ。

お園　うまく言ふね。

ト背中を叩く、此の時下手階子の口より、太吉鰻の岡持を二ツ持ち出來り、

太吉　へい、六さんあなたへ、お遣ひ物でございます。

お園　どこの客人だえ。

六吉　今夜初會でお出でなすつたお客でございますが、慥か傳さんとおつしやいました。

六之　その客は、幾歳ぐらゐだえ。

太吉　二十七八でございます。

六之　むゝよし〳〵、分つた〳〵。

太吉　何れ後程お目にかゝりますと、おつしやつてゝございました。

六之　よろしく申してくんな。

太吉　畏りました。

ト下手へはひる。

六之　こう、此の鰻は冷めないうちに賄のおツかあに遣んな。

お園　あい、さうしませうよ。お玉さん、六さんからと言つて持つて行つてくんな。

お玉　あい〳〵。

トお玉岡持を提げ下手へはひる。

お園　さあ六さん、引けようぢやないか。

六之　引けてもいゝかえ。

ト此の時上手屋臺より九助下りて來り、

九助　いや、悪からう。

六之　え。

ト思入、合方替つて、

お園　誰かと思へば九助さん、何しにお出でだ。

ト九助よき所へ住ひ、

九助　何しに來るものか、これお園、大概に馬鹿にしてくれ、冷てえ夜具に一人寐る位なら、えつちらおつちら品川まで金をなくしに來やあしねえ。然し斯ういふ色があ

つちやあ、おれが所へ來ねえも尤も、見りやァ見るほど好い男だ、此の太ッちようで張合つて氣を揉むのは駄目だから、最う色男はすつかり止めて、是れから慾張りと生業替へだ。さあ、此れまで手前に拵へて遣つた、諸道具は云ふに及ばずその抱柏の紋附の鼈甲の簪から、仕掛は元より長襦袢、褌までおれがものだ、細に勘定したならば六七十兩もあらうけれど、見切物で五十兩、たつた今貰ひたい。

ト お園思入あつて、

お園　これ九助さん、どうしたといふのだ、無理も大概にお言ひな、これが貸借りといふぢやあなし、お前わたしに呉れたのぢやないかえ。それを今更五十兩金にして返せとは、そりやア無いもの喰はうといふもの、酸も甘いも知りながら、野暮なことをお言ひでないよ。

九助　いゝや、おらあ野暮だから金を取らにやあ承知しねえ、今言ふ通り大枚な金を掛けて物を遣るも、訝な氣休めを聞かうばッかり、それも色氣を捨てた日にやあ、是非とも金を取らにやあならねえ。

お園　いくら取らうと言ひなすつても、わたしやあ上げる金はないよ、仲の町を張る花魁ならちよつと簞笥の抽斗しに五十や百はありもせうが、お恥かしいが宿場の飯盛一分のお金もありやあしない。よしんばあつても此の金は二朱でもお前にあげられないよ。

ト 此の時下手から喜助出來り、

喜助　もし／＼お園さん、どうしたものでござります、さう色氣なく言ひなすつちやあ、九助さんが腹を立つばかりだ。

お園　腹を立たうが背を立たうが、これから呼ぶといふ客ぢやあなし、喜助どん、打捨つて置きなよ。

喜助　それぢやアどうも濟みませぬ。

ト 九助立ち掛り、

九助　さういつて勝手を言はれちやあ、金が出來ざあ座敷の諸道具、さし物から仕掛は元より、褌まで、素ッ裸になつて今返せ。

お園　馬鹿らしい、お客の前で女郎が、裸になられるものかね。

九助　なれざあ代りの金を寄越すか。

お園　さあそれは。

九助　裸になるか。

お園　さあ、

九助　さあ、
皆々　さあ〳〵。
九助　どうでも片を附けてくりやれ。
　ト きつといふ、此の内六之助思入あつて、
六之　もし、憚りながら其處のお方え、わたしも斯うして遊びに來て、女郎が裸にされるのを、まさか見ても居にくい譯、五十兩あげりやあいゝのかね。
九助　左樣さ、六七十兩掛つたものをぐつと負けて五十兩、安いものだ買ひなせえ、然し玩具の金ぢやあねえよ、本當の金で五十兩だ。
六之　お園、あの人に返してしまひな。
お園　金をかへ。
六之　さうよ。(ト六之助懷より紙包みの五十兩を出し、お園の前へ投り)これを遣つたらいゝだらう。
お園　六さんそれぢやどうも、わたしが。
六之　はて濟むも濟まぬもお前のこと、どうでしげ〳〵來るわたし、なし崩しに遊ぶわさ。
お園　そんならお借り申しますよ。
六之　いや貸すんぢやあねえ、そりやア遣るのだ。
お園　六さん、何にも言はないよ。(ト金を取つて戴き)さあ九助さん、五十兩持つてお出で。
　ト九助の前へ投り出す。
九助　おゝ、持つて行かねえでどうするものだ、六七十兩掛つたものを、五十兩で負けて賣るのだ、恩ひらなしに持つて行くわ。
六之　もし、玩具ぢやアないから、改めてお見よ。
九助　御念の入つたことだ。
　ト九助金を取つて改める。
お園　もし九助さん、斯ういふ器用なお客があるから、お前をわたしが厭がるのも、何と無理ぢやアあるまいがね。
九助　どうしたと。
　ト立ち掛らうとするを喜助留めて、
喜助　これさ九助さん、金を取つたら何にも言はず、早く二階へお出でなすつて、見立替へでもなさいましな。
九助　おゝ、今夜はこれから夜明しに、此の五十兩を撒散らして、大騒ぎに騒いでやらう。
喜助　それでは定めし揚りがしつかり、何より有難うござります。
お園　えゝ、取る物を取つたら、早くそつちへ行つておく

れな、何處まで野暮だか分らないの。
六之　これさ、いゝわさ、打捨つて置きねえ、ちつと爰は放れにくからうよ。
九助　なに、放れにくいことがあるものか、居ろと言つても居やあしねえ。
お園　そんなら早く行つておくれよ。
九助　行かねえでどうするものだ。
ト金を懐へ入れ上手へ行きかけろ、此の時お園煙草を吸附け六之助の膝へ凭れかゝり「あい」と煙管を出す、ちよッと手を掛けて煙草を呑む、是れを九助見て腹の立つ思入にて、
えゝ、小胸の悪い。
ト立歸らうとするを喜助留めて、
喜助　はて、外に女郎衆もござりますさあ。
九助　むゝ、覚えて居ろ。
ト流行唄にて九助先きに喜助附いて上手屋體へはひる跡跳へ端唄の合方になり、お園思入あつて、
お園　六さん、わたしやお前にあの金を、出さして済まないが、堪忍しておくんなさいよ。
六之　詰らないことを言ひねえな、お前が無心でも言やあしめえし、おれが酔狂で出した金、何済まないことがあるものか、そんなくだらないことを言はずと、もう寐ようぢやないか。
お園　わたしや疾うから寐たいのだが、何だかおつウしらけたから。
六之　厭になつたと言ふのか。
お園　なに、お前ぢやアあるまいし。
六之　何時おれが厭だといつたえ。
ト　お園を引寄せる。
お園　それぢやあいゝのかえ。
六之　よくなくつてどうするものだ。
ト　お園六之助の顔をぢつと見て、
お園　六さん。
六之　何だ。
お園　なぜこんなに、
六之　え。
お園　いゝ人だらうね。
ト　お園上着を羽織り顔を隠し恥しきこなしにて屏風を引廻す、やはり右の合方にて上手廊下より傳次好みの鬘着流しにて出來り、四邊へ思入あつて屏風の側へ來

て、

傳次　おい六さん、もう寐たのか。

六之　さういふ聲は、誰だ。

傳次　傳次だが、明けていゝかえ。

六之　明けてもいゝ、大よしだ。

傳次　御免なさい、（ト屏風を明ける、床の上に六之助居る。）お邪魔ぢやあなかつたかね。

六之　なに、そんなことがあるものか。

ト　お園煙草を吸附けて、

お園　もし、一服お上んなさい。

ト出す。傳次ちよッと戴いて呑む。

六之　さつきは有難う、止しなさりやいゝに。

傳次　詰らねえ、禮を言つちやあ損が行きます。

六之　そりやあさうと、何ぞ用かえ。

傳次　ちつとお話し申したいことがあつて。

六之　何の用だか知らないが、まあ後で聞きませう。お園、ちよつと烟をつけねえか。

お園　お肴が何にもないね、何ぞさう言つて遣らうぢやあないか。

傳次　いえもうよしておゝんなせえ、わたしあ此の頃願掛だから、お酒はお預けにしませう。

六之　それぢやあ甘味でお茶でもいれねえ。

お園　あい、さうしませうよ。

ト此の時階子より太吉下りて來り、

太吉　もし、お園さん、ちよつとお部屋で逢ひたいから、お呼び申して來いとおつしやいました。

お園　何だえ、お部屋でかえ。今時分何だねえ。六さんじれツたいぢやないかね。

六之　何も遠くへ行くのぢやあなし、お部屋までなら造作もねえ、早く行つて來ねえな。

太吉　お手間の取れることぢやあございませんから、ちよつとお出でなすつて下さいまし、

お園　それぢやあちよつと行つて來ますよ。もしお前さん、遊んでお出でなさいましよ。

傳次　お前の歸つて來なさるまで、留守番をして上げませう

お園　どうぞさうしておくんなさい、此の頃おさ[illegible]ん も、性悪になつてはいけませんから

傳次　わたしが番をすれば大丈夫さ

太吉　お園さん、お早く、お出でなさいまし、

お園　えゝも、忙しないぢやないか。

ト右の合方にてお園上草履を履き、ばた〳〵と、太吉附いて二階へはひろ、跡時の鐘合方替つて兩人四邊へ思入あつて、胡坐をかき、

六之　こう傳次や、どうしておれが爰に居るのを突當てゝ來たのだ。

傳次　さつき駕籠から出る所を、ちらりと見たゆゑ茶屋をこせえ、初會の客で上つたのだ。

六之　手前もさうして居る所は、おさらば傳次と名に高い盜人とは見えねえが、おれも斯うして居る所は、因果小僧とは見えめえな。

傳次　見えねえ所か、何處へ出しても、小道樂をする息子株だ。

六之　斯うして化けて遊んで居ると、人を馬鹿にして面白いよ。

傳次　然し、化けた〳〵と思つてると、いつか尻尾が出て居るよ。

六之　なに、尻尾が出て居るとは。

傳次　おれが隣に居るとも知らず、あの本郷の九助野郎が、若い衆に話すを聞きやあ、手前があいつに渡した金は加賀樣のお國紙で包み紙に印があつて、近江屋から出た金に違えねえから、それを持つて訴へに行くといふことだうつかりしちやあ居られねえぜ。

ト六之助是を聞きぎつくり思入、

六之　むゝ、そんならさつき渡した金の包み紙に印があつて、それを證據に訴へるとか、はて氣の附かねえことをした。然し今夜行きもしめえ、どうなるものか仕方がねえ。

傳次　そこでおれが話しがあらあ、今夜引けにあの野郎が高輪通りを歸るといふから、跡を附けてあいつをばらし手前の難儀を救ふから、あの金はおれにくんねえ、そいつを直に路銀にして上方の方へふける積りだ。

六之　そりやあ丁度いゝ都合だ、實はおれも此の頃にちつと噂が惡いから奧州の方へ行く積りで、今夜來たのは餘所ながら、あの女に暇乞をして、のろいやうだが小遣ひにやらうと思つて持つて來た、五十兩の包み紙から盜んだ足が附くといふのも、こう傳次、天道樣は怖しいものだ。

傳次　成程惡いことは出來ねえが、然したゞ取る生業だから、止めろといつても止められねえ。

六之　やるだけやつた曉は、此の首一つで濟むことだ、考へて見りやあ安いものだ。

ト兩人よろしく思入、此の時上手障子の内にて、

お園　お仙さん、善さんによろしく。

六之　や、あの聲はお園だ。

傳次　素知らぬ振で。

ト兩人居住ひを直す、合方にて下手障子を開けお園出て來る。

六之　お園もう用はいゝのか。

お園　詰らねえことで呼び附けられて、癪に障つてなりやあしない。（ト言ひながら六之助の側へ住ひ）傳次さん、有難うございますよ。

傳次　しつかりお渡し申しますよ。夜の短いに浮々と、大きにお邪魔をいたしました。（ト言ひながら立ち上り）お園さん、ちつと時代だが、たんとお樂しみよ。

お園　まあ、いゝぢやアありませんか。

傳次　又來ませうよ。

六之　そんなら傳次、

傳次　兄貴、

お園　え。

傳次　ト思入、傳次氣を替へ、

六さん、

六之　お匆々よ。

ト流行唄にて傳次六之助うなづき合ひ、上手廊下へはいる。

お園　もし六さん、今夜お前鬱いでおいでだが、何ぞ氣になることでもありやあしないかえ。

六之　何も氣になることもないが、ちつと差掛つた用があるから、今夜は早く歸らにやならぬ。

お園　そりやあまあいけないことだが、さうしてお前何日お出でだ。

六之　又四五日うちに來やせうよ。

お園　きつとお出でかえ。

六之　來なくつてどうするものか。

トこれにてお園思入あつて、

お園　もし六さん、おつなことを聞くやうだが、あの奧州とやらまでは、どの位あるえ。

六之　さうさ、七八十里もあるだらう。

お園　その七八十里ある所から、四五日のうちに來られるかえ。

六之　どうしたと。

　トびつくりなし、きつと思入、時の鐘誂への合方になり、お園思入あつて、

お園　さあ、わたしがお部屋へ呼ばれたのは、あの六さんといふ客人はどうも錢の遣ひやうが、常ならねえと思つた所、見てくれ權次が話しに聞けば、さつきこつちへ乘せて來た駕籠屋が見世で問はず語りに、向島の人殺しによく似た人と言つたとのこと、そこへ又喜助が來て、今夜丸江屋の九助さんに渡した金の上包みが、何處とやらの國紙で、これも盜んだ金とやら、どうも怪しい客人だから、何かのことに氣を附けろと、旦那さんからわたしへ言附け。もし六さん、お前そんな覺えがあるかえ。

　トこれにて六之助南無三といふ思入あつて、

六之　そんなら亭主がその事を、（トもう仕方がないといふ思入にて、勘附かれたら仕方がねえ、實はおらあ因果小僧六之助といふ盜人だ。

　トきつといふ。

お園　あれさ、六さん、靜かにおしな、そりやあわたしや知つて居るよ。

六之　むゝ、そんなら疾うから、おれの身性を。

お園　知らなくつてどうするものかね。（ト合方きつぱりとなり、惡婆の思入になり）あばずれたことをいふやうだが、初めてお前が上つた時、何處の息子か小粹なと、初手は浮氣の初會惚れ、何時來ておくれと約束して裏馴染から三囘目、そこでふつと氣が附いたが、なまじ堅氣の生業より、榮耀榮華の仕飽きをして樂に暮すが當世に、人の怖がる泥坊と知つて惚れた上からは、お前ゆゑなら命も捨てる氣、今奧州へ行きなさりやあ、何時逢はれるか知れねえ譯、跡に殘つてくよ／＼と夢見の惡いその度に、若しや切られはしなさらねえかと、案じるだけが餘計な仕事、苦勞するなら共々に何處が何處までわたしやする氣、どうぞ一緒に連れて行つておくれな。

　トよろしく思入にて言ふ。

六之　いや手前もたゞの鼠ぢやあ初手からねえと思つたが、盜人をば合點で色になるとはいゝ肚胸、おれから見るとよつぽど上手だ。

お園　なあにわたしは意氣地はねえが、ほんの親仁の附燒刃、音羽屋といふ家名からこんなせりふも言ふものゝ、訛りの拔けねえその口で、よせばよいにと皆樣が、嘸おつしやつてゞあらうと思ふと、實にわつちやあ恥かしい

よ。
六之　そりやあおれも同じことだが、出來ねえながらに御當地の、眞似がしたさに故郷を捨て、六年此方六之助も水道育ちの今ぢやあ江戸ツ子、然し肚胸でやる仕事さ。
お園　ほんにわたしも是れまでは、駿河の府中で丁字屋の、かしくといつて其の土地ぢやあ、花魁といはれたが、身性が惡さに借金で、あそこや爰へ住替へも箱根を越して品川で、かしくのお園と肩名のある、莫連者もこれで年明け、命を掛けて添ふ氣だから、早く連れて逃げておくれ。
六之　斯うなるからは何處が何處まで、おれが銜へて歩かうが、まだ逃げるにやあ時刻が早い、もう一寐入りやつて行かう。
お園　然し斯うして居るうちに、若しやお前の身の上を、
六之　詮議に來たら、それはそれまで、
お園　成程先きを苦勞しちやあ、
六之　片時でも寐られねえ。
お園　それぢやあこれから、もう一寐入り、
六之　八ツを打つたら出掛けよう。
お園　ほんに、どうした縁でがな、
六之　斯うして一つになるといふなあ、
お園　これが世に言ふ譬の通り、
六之　鬼の女房に、
お園　鬼神だねえ。

ト時の鐘、合方にて屏風を立廻す、流行唄になり、上手の障子より以前の九助喜助出來り、

喜助　それぢやあ九助さん、明後日いらつしやいますか。
九助　明後日はきつと來るよ。
喜助　氣休めぢやあございませんか。
九助　なに、氣休めを云ふものだ。
喜助　あんまりさうでもありますまい。

ト言ひながら花道へ行き掛け、振返つて、

九助　二人ともに待つて居ろ、夜が明けると吠え面だぞ。
喜助　もう譯が分つたら、いゝぢやあございませんか。
九助　それだといつて。
喜助　はてまあ、お出でなさいまし。

トやはり流行唄にて、九助階子の口へはひる、時の鐘凄き合方にて、下手より以前の傳次窺ひながら出て、九助の跡を附け來る思入にて、階子の口へはひる、これにて屏風を明け、六之助思入あつて、

六之　とろ〳〵と仕ようと思つたら、廊下を歩かれるので寐られねえ。
お園　それに、是れでも氣になるからさ。
六之　もうかれこれ八つだらう、そろ〳〵出船の支度をしようか。
お園　何處からお逃げか知らないが、裏梯子から庭口へ。
六之　そんなことは案じるな、盗人に拔目はねえ。
お園　お前支度はいゝのかえ。
六之　おらあいゝが、手前其の裝か。
お園　爰を出りやあどうでもなるわね。
六之　なりやあなるが、金でもあるか。
お園　馬鹿をお言ひな、何があるものか。
六之　やつともねえか。
お園　宵越しの錢は、わつちやあ嫌ひさ。
六之　成程手前も、
お園　え、
六之　持餘しものだぜ。
　ト六之助帶を締め、尻を端折り、お園身拵へをする、此の模樣よろしく、時の鐘合方にて道具廻る。

（八つ山下の場）――本舞臺向ふ黑幕、通しの波手摺、下手に葭簾張りの出茶屋、疊みたる道具床几二脚程重ねあり、前側葭簀立廻しあり、此の側に永代兩國乘合船の立札、側に船板の崩れ、櫂の折れなど積みあり、上の方松の立木、同じく釣枝、總て八つ山下、夜の模樣、波の音にて道具留る。波の音、佃ばたばたになり、上手より以前の九助逃げて出て來るを、跡より傳次追つかけ出で、舞臺にてちよつと立廻つて、傳次九助を引提へきつとなつて、
九助　こりやあうぬは、盗人だな。
傳次　知れたことだ、とんだ定九郎のせりふだが、われが持つてる五十兩、福島屋から附けて來たのだ。
九助　そんなら是れを。
　トびつくりなし懷を押へて思入。
傳次　さあ、きり〳〵と出しやあがれ。
九助　むゝ。さう知られたら隱しやあしねえ、如何にも爰に持つて居るが、うぬ等がやうな小二才に、是れを取られて詰るものか。
傳次　いや、形は小さな野郎だが、金ばかりぢやねえ、うぬが命も、取らにやあこつちの都合が惡い。

九助　洒落ツくせいことを言やあがるな、取れるものなら取つて見ろ。

傳次　取らねえでどうするものだ。

九助　何を。

ト波の音、佃になり、傳次船板の折にて打つて掛る、九助も櫂の折れにて受ける、是れより兩人立廻りよろしくあつて、トヾ九助の向脛をなぐる、是れにてひよろひよろとして、

人殺しだ〳〵〳〵ト逃げようとするを、傳次追打ちになぐる、九助逃げながら、あゝ苦しい〳〵。

トのたうち廻る、傳次手拭を持つて、

傳次　どれ、苦痛を助けてやらうか。

ト九助を手拭にて締殺す、九助よろしく苦しみ落入る、傳次鼻へ手を當て、よしといふ思入にて、九助の懐より以前の五十兩を出し旨いといふ思入。此の時風の音になり、出茶屋の葭簀はら〳〵と仕掛にて下手へ倒れる、内に野晒小兵衛、白髪鬘やつし装、半合羽脚絆甲掛裏草履、好みのこしらへにて床几へ腰を掛け、煙管を銜へ摺火打にて火を打ち居る、傳次これを見て、ぎつくり思入あつて上手へ行かうとするを、

小兵　おい兄イ、ちよツと待あな。

傳次　呼んだのは、わつちかえ。

小兵　おゝ、お前よ。

傳次　何ぞ用かえ。

小兵　手拭が殘つてゐらア。

傳次　え。

トびつくり思入、時の鐘誂への合方、かすめて波の音になり、

小兵　證據になるから持つて行きねえ。

ト死骸の首の手拭に思入。

傳次　むゝ、それぢやアこんたはさつきから。

小兵　お前の仕事を見て居たのよ。

ト知らせに附き、日覆より月出で、兩人顔を見合せ、

傳次　や、こなたは六が父さん。

小兵　誰かと思へば、おさらば傳次か。

傳次　やれ〳〵是れで落着いた、呼び返された其の時から、さうかと思つたが、あんまり肚胸が好過ぎるから、實はわつちも恐れて居たのさ。

小兵　おれも葭簀の蔭に居て、いゝ働きをする奴と思つて居たが其の筈だ、雲霧仁左衛門が手下の内、五本の指へ

折らるゝこなた。

傳次　何だな父さんそんなことを言つて、腋の下から汗が出らあ。そりやあさうと今時分、お前一人で何處へ行つたのだ。

小兵　大森在の百姓家に鷄娘があるといふから、相談旁々池上へ、お參り申した歸り掛け、宿へ泊りやあよかつたを年寄の氣忙しなく、八つまでにやあ歸られようと、ぶらぶら出掛けて來た所、今し方のばらばら降りに傘を買ふにも夜半だし、仕方なしに爰へ這入つて雨宿りをして居たのだが、さうして手前はどこへ行くのだ。

傳次　何處といふ當てもねえが、詮議が嚴しく江戸にも居られず、上方へでも行かうかと思ふ所へ此の野郎が、五十兩といふ金を持つて居たのが運の盡、殺して取つたも此の金で上方筋へ、行く積りさ。

小兵　そんなら五十兩取つたのか、南無妙法蓮華經々々。

傳次　あゝそんな氣ぢやアなかつたが、父さんお前も年を取つて、後生心になつたのか。

小兵　なにおれが後生は願ふものか、堅氣な者ぢやアあるめえし、鰹が來りやあ朝飯から刺身で飯を喰つて來たから、今更味噌汁に香物で、ひね臭え飯が喰はれるものか、もうよく生きて五年か七年、野晒小兵衛と異名を取つて、因果物師をするからにやあ、どうで死にやあ地獄の厄介だ。

傳次　それに又今のやうに、何で題目を唱へたのだ。

小兵　おれが後生は願はねえが、案じられるは野郎が身の上、どうか因果のねえやうと、勘當しても爰が親、彼奴は何とも思やあしめえが、おれが方ぢやあ一日でも胸に忘れたことはねえ、聞きやあお前の父さんは堅氣な人だといふことだが、惡い耳を聞かせなさんな。

傳次　お前と違つて惡堅いから、つひに是れまで親父の所へ、逢ひに行つたことはねえ。

小兵　時折便りをするがいゝ。いや、便りと言やあおらが野郎も、久しく噂を聞かねえが、どこに此の頃は燻つて居るな。

傳次　兄貴にさつき、品川に、

小兵　え。

ト思入。傳次言つては惡いと思入にて、

傳次　いや、信濃の方へ行つたさうだ。

小兵　江戸に居にやあ先づ安堵た、どうで彼奴も又お前も、人の物をたゞ取るゆゑ生涯盜みは止められめえが、娑婆

に長く居る氣なら惡いことをしねえがいゝ。盗みをしながら惡いことをするなといふはをかしいが、その內にも次第があらあ、近くは次郎がいゝ手本、先づ第一が頑婬だ、こいつが一番罪になる、又なくつてならねえ金などは取つても返しに行くがいゝ、有り餘る所の金ならば向うも取られて痛にならにやあ、こつちも取つて罪にならねえ、ちよつとしても今のやうに、手拭でも忘れるか、又は提灯傘のしるしが證據に持主へ、難儀の掛ることがある、そいつがみんな身に報はあ、爰が盗人の心學だから長くしようと思ふなら、非道な惡事はしねえがいい。

傳次　成程こりやあ尤もだ、六にも逢つたら言つて遣らうよ。

小兵　詰らねえことで足を留めた、ちつとも早く行くがいいが、是れからどつちへ掛つて行くのだ。

傳次　厚木に知つた者があるから、そこまで今夜乘ッ附けて、笠や脚絆の支度をして、それからぶら／＼甲州から東海道へ出る積りだ。

小兵　それぢやあ別れに一杯と、

傳次　言つた處が夜る夜半、

小兵　緣があつたら、又その內、

傳次　ゆつくり江戶で呑みやせう。

ト上手へ行きかけるを、

小兵　おい、傳次待ちな。

傳次　また何ぞ落したかね。

小兵　いや、これから旅へ立つのだから。（ト煙草入の間火打を出し）ちよッと祝ひに淸めてやらう、

ト傳次に切火を打ち掛けてやる。

傳次　そんなら、父さん。

小兵　傳次、

傳次　おさらばだよ。

ト時の鐘、波の音にて傳次頰冠りをしながら上手へはひる、これにて月隱れる。

小兵　いや、あの傳次を見るにつけ、野郎もやつぱり何處その果で、こんな仕事をして居るだらう、久しく噂を聞かねえが、どうで始終は切られる體、どうぞおれの目に掛らねえ所へ行つて死んでくれ、南無妙法蓮華經々々、（ト雨車になり、）あゝ又今の間にすつかり曇り、ばらばら降りに降つて來た、爰に浮々まごついて喰えこんぢやあ詰らねえ。どれ大木戶までやッつけようか。

ト身拵へする、波の音雨車、誂への合方ばた／＼にて、上手より以前の六之助頬冠り尻端折り、お園頬冠り裾を端折り、男の羽織を引掛け、手を引合つて出て來り。小兵衞に行當り、双方びつくりなし三方へ別れ、ちよつと探り合ひの立廻り、よき程に後へ以前の權次尻端折にて窺ひ出で、

權次　うぬ、見附けたぞ。

ト六之助に組付くを振拂ふ、權次たぢ／＼となり小兵衞へ行當る、小兵衞その儘突廻す、六之助はお園を捜す心にて小兵衞の手を取り引張る、小兵衞びつくりして振拂ふ、爰へお園來るを、小兵衞天窓を探つて、女ゆゑ突放す、此の時ぱつたりと音して、お園紋附の簪を落す、此の内六之助は權次と立廻りあつて、權次小兵衞煙草入を捉へて引張る、それを爭ふ機に取り落す、小兵衞これを捜す思入にて簪を拾ふ、此の内六之助はお園を連れ、花道へ行く、權次は煙草入を拾ひ、小兵衞諸共透し見て、

小兵　こりや簪。

權次　煙草入。

六之　や。

トこの聲にて權次立ちかゝるを小兵衞留める、お園六之助入替り跡を見返る、双方見合つて木の頭、波の音かすめて佃になり、六之助お園の手を取り、逸散に花道へはひる。權次は煙草入を銜へ尻を端折る、小兵衞は簪を持つたまゝ跡を見送る、此の模樣よろしく右の鳴物にて、

ひやうし幕

大切

因果物師内の場

（役名――因果物師野晒し小兵衞、因果小僧六之助、判人見てくれ權次、家主閻魔の正兵衞、六之助弟七之助、見世物師岩戸安、同じやがたらお角、同六部兼、小道具屋嘉兵衞、福島屋抱へかしくのお園、洗濯屋娘お吉、鷄娘おけつこ等。）

（見世物師内の場）――本舞臺一面の平舞臺見世物職の暖簾口、上手一間押入戸棚、下手鼠壁番附の張交ぜ、よき所に神棚、熊手、緣起の百兩包みなど飾り

あり、上の方一間の中二階、丸太梯子、例の所毀れる仕掛けの門口、下の方、朝鮮矢來、向う惣雪隱の張物、總て本所回向院裏手見世物師内の體、じやがたらお角島田鬘首ばかり白き引張物の女のこしらへ、岩戸安着流し三尺帶木戸番のこしらへにて、兩人立ちかゝり居る、是れを六部筆鼠の着附六部のこしらへにて、とけつこ烏冠のある島田鬘順禮裝にて此の兩人を留めて居る、さんげ／＼の合方へ、かすめて屋體囃子を冠せて幕明く。

筆　これさ、二人とも靜にしねえか、親分も此の間から瘧をふるつて寐て居るに。

鷄娘　とツけツこ／＼、とツけツこう。

筆　えゝ、又手前が同じやうに、猶喧しい、默つて居ろ。

安　こう筆や、おれが無理か聞いてくれ、さつき勤番者のお侍が此のお角の顏を見て、がらせい氣に入つた所から小白を一つ取りやあがつたから、此間の晩おれが貸した二百の錢を返せといふのだ。

筆　成程こりやあ尤もだ、お角もそんな浮いた錢なら、二百返してやりやあいゝに。

お角　そりやあ一朱貰はうが二朱貰はうが、小屋の内はわつちが餘祿さ、小遣ひに困るからくれと云ふなら遣りもせうが、返さねえでもいゝ借りだから、返せといつちやあ遣らねえよ。

安　あゝいふ生利なことを言やあがる、返さねえでもいゝ借りか、何處の國にあるものだ。

筆　何でまた返さねえでもいゝといふのだ。

お角　わつちの恥だから言ひたくもねえが、此の野郎が鹽噌に困つて、首も廻らねえ御難の時に、血の出るやうなひどい錢を貸してやつたをいゝことにして、それからおつウ自惚れやあがつて、亭主氣取りでゐやあがるくせに、借りを返せもねえものだ。

安　べらぼうめ亭主氣取りだらうが何だらうが、錢金は他人ツこだ。

お角　他人ツこなら、なぜ返さねえのだ。

安　えゝ、人を馬鹿にしやあがるな。

　ト立ちかゝるを鷄娘留めて、

鷄娘　とツけツこう／＼。

筆　まあお互ひに靜にしろ、さうお互ひに角目だつと、血で血を洗つてあらが出るから、まあいゝやこゝは一番日延べをしたがいゝ。

安　いゝや、返せといつたら、何でも今取らにやあならねえ。
お角　えゝ面白くも無え、取れるものなら取つて見な。
粂　まあ、いゝから、おれに任せろといふに。
鶏娘　えゝ、とツけツこ〳〵とツけツこう。
ト鶏娘笑ふ思入。
安　鶏娘がをかしいか、笑やあがる。
トやはり右の鳴物にて、奥より小兵衛着流し三尺帯、水引で拵へし小搔卷を引ッ掛け、出來る。
小兵　おゝ、みんな歸つたか。
お角　親分、今日はどうだね。
小兵　晝の内は大きにいゝが、日が暮れるとふるふので、燈火の附くのが思ひだよ。
安　此のごろぢや日ぶるひださうだが、もう落してもいゝぢやあねえかね。
小兵　早く落すとぶり返すから、今まで我慢をして居たが、もう落してしまはうよ。
粂　もし、七さんが見えねえが、何處へ行きなすつたかえ。
小兵　村松町まで使ひにやつたが、何處で遊んで居やあがるか。
安　大方隣のお吉さんのとこだらう。
お角　ほんに、七さんはお吉さんと。
小兵　え。
ト聞き咎める、お角氣を替へ、
まことに仲がいゝね。
お角　六さんと違つて、あの子はおとなしいよ。
小兵　ありやあお袋に似たのだが、氣のいゝ代りに役に立たねえ。ときに今日はどうだつた。
安　さつきばら〳〵と來た水ばれで、三べいに四へいさ。
小兵　そんな事ぢやあ水も呑めねえ。今日の割はいゝから、手前達の方へ持つて行け。
お角　然し、それぢやあお氣の毒だね。
粂　四百ばかり置きやせう。
ト四文錢を出す。
小兵　なに、おらあちつと算段にやつたから、錢はいらねえ。
トやはり右の鳴物にて、路地口より正兵衛着流し役半纏、更けたる家主のこしらへにて出來り、
正兵　あい、今日はいゝ天氣だね。

安
ト門口を明け、内へはひる。
もし大家さん、今日は降りましたぜ。
正兵　降つたのはさつきのことだわ、今に見ろいゝ天氣だ。
小兵　大家さん、お出でなせえ。
正兵　どうだ小兵衛どん、瘧はもう落ちたか。
小兵　まだ落ちませぬ。
正兵　いゝ加減に落してしまへばいゝに。（ト正兵衛眞中に住ひ）時に店賃はどうする積りだ、婆アどんを寄越しても、いつもおんなじ挨拶だから、今日はおれが自身で來たのだ。
小兵　なに、お前出來せえすりあ、上げねえでどうするものだ、今日斯うして親子のものが、雨露に濡れねえのは誰がお蔭、この潰れかゝつた家を貸しておくんなさればこそ。何處の借りを遣らねえでも、米屋と店賃はあげにやならねえ。
ト正兵衛むつとせし思入。
正兵　何ぼおれが舌が廻らねえとつて、此方で言ふことをみんな言つてしまやあがる。さあ、さう譯が分つて居るなら、店賃を勘定さつせえ。
小兵　勘定しろと言はねえでも、出來せえすりやあ上げますが、此の間からの長時化で米の錢にもなりやあしねえ、もうちつと待つておくんなせえ。
お角　お氣の毒だが大家さん、親分も煩つて居るから、待つて上げておくんなせえな。
正兵　いや今日は待てねえ、さつき婆アを寄越したら、ふて勝手な事を言つた。さうだ表裏かけて二十七軒の東ねをするおれも大家だ、默つちやあ聞いて居られねえ。そりやあ江戸向きと違つて場末の事だから、羅字のすげ替え、とつけいゝべい、錢のある店子はねえ、みんな二ツ三ツは貸しがあるが、貧に錢のねえのだから、催促しても仕方がねえが、聞きやあ今朝も、深川ものを、三百ばかり買つたさうだ、肴を買ふ錢があるなら、なぜ店賃を拂はねえ。
ト此の内正兵衛煙草を呑みながら、煙管を叩き立てゝ言ふ。
小兵　そりやあお前さんのお詞だが、わつちも先きのねえ體だから、今日肴を喰はねえで今夜死にやあ損だらう、今日店賃をやらねえで、今夜死にやあ徳だらう、損と徳だから店賃は上げられねえ。
ト正兵衛腹の立つ思入にて、

正兵　こう小兵衞、先役の六兵衞どんは手前のそんな脅しを喰つて、恐れて店賃を貸したらうが、おらあさうはいかねえよ。今でこそ羽織を着て、町役人と大家めかすが、元を明しやあ吉田町で、野玉の妓夫に出た男だ、芝居でする大家のやうに道化師ぢやあねえぞ。此の町内の番屋でも煙ツたがられる正兵衞さまだ、どんな出入事を持つて來ても、びつくりともするのぢやあねえ。店子の預りは暇な時書留めておく家主だ、手前がいくら太え奴でも、おらあちつとも怖かあねえ。さあ、店賃が出來ずば店を明けろ。

安　もし大家さんえ、お前さんがお腹立ちは御尤もだが、親分も病氣ゆゑ、ついお氣に障ることを申します。

伴　跡でおつち等がどうかしますから、まあ今日はお歸りなすつて下さいまし。

正兵　いや歸らねえ〳〵、これ三月溜りやあ店立ては、世間一統當り前だ、おれなればこそ七月八月、質でも流れる時分だわ。

安　そこは分つて居ります、お前さんだからお貸しなされるのだ、外にこんな大家さまはござりませぬ、實に此の町内の大黒柱。

伴　イヨウ家主の親玉。

お角　兀天窓大明神様。

ト　これにて正兵衞腹を立てし思入にて、

正兵　えゝ、こいつ等まで同じやうに、家主を馬鹿にしやあがるか。

安　なに馬鹿にしますものか、お前さんを、

三人　褒めましたのだ。

正兵　こうはぐらかされちやあ了簡ならねえ。さあ、たつた今店を明けろ。

小兵　そりやあ明けろとおつしやりやあ明けもしませうが、お氣の毒だが行く所がござりませぬ。

正兵　そりやあ何處でも勝手な所へ、引越して行くがいゝ。

小兵　引越して行きたくつても御存じの生業に、勘當してありますが、因果小僧六之助と肩書のある餓鬼はあるし、年が年中居候でけんのんな事受合だから、間拔な大家なら、知らねえこと、誰が店を貸すものか。

正兵　店の貸し手がねえならば、お定りの店受けへ引取られて行くがいゝ。

小兵　大家さん、店受けはありますかえ。

正兵　なくつてどうするものだ、本所松倉町二丁目與九右

衛門店の權兵衛だ。
小兵　その權兵衛は四年後、コロリで夫婦行きましたよ。
正兵　行つたとは何處へ行つたのだ。
小兵　何處へ行くものか冥土へさ。
正兵　や、そんなら店受けは死んだのか、（トびつくりなし）なぜそれを知らさねえのだ。
小兵　誰が店受けの死んだのを知らせる間抜があるものだ。
お角　それぢやあ大家さんお氣の毒だが、
兼　生涯お前の御厄介だ。
小兵　たつて店立てがしたけりやあ、ちよつとした庭附といふ、小綺麗な店を借りて、お前が店受けになつて遣つておくんなせえ、何處へでも行きます。
正兵　いや太えにも程がある、何處の國に家主が店受けをして店立てをする、そんな箆棒があるものか。
安　まあありやあお前さんだね。
正兵　えゝやかましいわえ。さあ行き所がなけりやあ召連れ訴へをして、寄場へでも遣つてやらう。
ト正兵衛立ちかゝるを皆々留めて、
安　これさ、どうしたものでございます、それぢやあ大黑柱とは言へませんせ。
兼　家主の親玉なら、
お角　まあ／＼待つておくんなせえ。
正兵　いゝや、斯う言ひ出したら一寸も待たれねえ。さあ、一緒にうしやあがれ。
鶏娘　とツけツこう／＼。
トやはり屋體囃子にて正兵衛小兵衛を引立てようとする、これを皆々留める、此の以前よき程に花道より七之助剃立て着流し、草履下駄にて出來り、門口にて此の樣子を聞き内へはひり、正兵衛を留め、
七之　まあ／＼大家さま、お待ちなされて下さりませ。
正兵　や、手前は伜の七之助。
七之　お腹立ちは御尤もでございますが、その御勘定は私が上げますから、どうぞお待ちなされて下さりませ。
ト言ひながら懷より財布を出し、中よりばら／＼と額銀を出す、
正兵　やあ、こりや額銀で慥に四五兩。
ト取りにかゝるを、小兵衛突廻して財布の中へ金を入れて引取り、
小兵　これを取られて、たまるものか。

正兵　さあ、斯ういふ金があるならば、たつた、今勘定しろ。

ト小兵衞思入あつて、

小兵　えゝ手前も氣の利かねえ、悪い所へ出しやあがつて見られたからは仕方がねえ、さあ大家さん、上げやすよ。

正兵　そんならこれまでの勘定するか、一分二朱づゝ八月ゆゑ、丁度數よく三兩だ。

小兵　遣らねえでもいゝ金だが、仕方がねえ、さあ上げやす。

ト一分銀を一ツ投げて遣る。

正兵　や、こりやたつた一分か。

小兵　知れたことさ、三兩はさておいて、十と二十と借りがあつても、家主の借りは一分で澤山だ。

正兵　成程手前は太え奴だ、せめて一兩も入れるかと思やあ、素一分ぢやあ待たれねえ。

小兵　待たれざあよしなせえ、五十兩の貸借りでも、一分で日延べが出來やさあ。

正兵　どう言へば斯ういふと。

ト立ちかゝるを、

七之　どうぞそれで今日の所を、お待ちなされて下さりませ。

正兵　むゝ、一分でも取らねえにやあまし、どうで召連れ訴へをしにやあならねえ、辨當代に取つて置かう。

ト一分とつて煙草入の中へ入れ、立上り行かうとする、

小兵　おい〳〵大家さん、受取りを置いて行きなせえな。

正兵　なに、一分ばかりに受取りが入るものか。

小兵　受取りを置いて行かねえと、一兩遣つたと言ひやすよ。

正兵　えゝ、何とでも勝手にぬかせ。（ト言ひながら門口へ出て）いや太え奴もあるものだ。

トやはり屋體囃子、さんげ〳〵にて路地口へはひる。

安　いや兀天窓め、豪氣に怒りやあがつた。

兼　この町内にも大勢あるが、あんな慾張つた奴はねえ。

お角　見るから奴かねえ大家だね。

小兵　店子の褒める家主は、何處の町内にもねえものだが、其の内にも彼奴の面を見ると、つい癇積に障るから憎まれ口をきく氣になる。そりやあさうとして、手前達は湯へでも行かねえか。

安　あい、一風呂いつて來やせう。

小兵　これで歸りに呑んで來い。

ト額銀を一つ投げてやる。

安　こりやあ有難うございます。おい、みんな親分から。

ト見せる。

兼　そいつはすてきだ、暮れねえうちに出掛けよう。

お角　その子も一緒に連れて行かうか。

小兵　それは內へ置いて行くがいゝ、晩に蕎麥でも喰はしてやらう。

安　それぢや、親分、行つて來やす。

ト三人門口へ出る、

小兵　おいお角、兩の手に桃櫻だなあ。

お角　おや、親分厭でありますよ。

安兼　こいつあ面目ねえ。

トやはり右の鳴物にて三人は、花道へ鶏娘は奧へはひる。小兵衞思入あつて、

小兵　七や、あの簪はいくらに賣れた。

七之　あい、嘉兵衞さんに譯を言つて、五兩に買つて貰ひました。

小兵　そいつはいゝ直になつた。

七之　あの簪は池上の歸りに、高輪で拾つて來たのだね。

小兵　さうよ、あれを拾つたその代り、煙草入を落して來た、手前嘉兵衞さんにさう言やあしめえの。

七之　いえ、お前の判でやつてある、女郎衆のだと言ひました。

小兵　むゝよし／＼、そいつあ氣がきいて居た。おゝそこへ慈姑を買つて置いたが、皮を剝いて置いてくれ。

七之　あい／＼。（ト桶にはひりし慈姑を見て、）こりやあいい慈姑だね。

ト誂への端唄になり、七之助俎板と庖刀を出し慈姑の皮を剝き居る、路地口よりお吉やつし世話娘のこしらへ、駒下駄にて風呂敷包みを持ち出て來り、

お吉　はい、御免なさいまし。

小兵　誰だ。

お吉　小父さん、わたしでございますよ。

ト右の合方にて內へはひる、七之助顏見合せ思入あつて、知らぬ顏をして居る。

小兵　おゝお吉坊か、爰へ來な／＼。

お吉　お鹽梅はどうでございますえ。

小兵　今日はちつといゝやうだ、おれが斯うして煩つて居るのに女房のねえ家だから、おつかア世話になるよ。

お吉　いえもう仕事で忙しいゆゑ、ろく／＼お見舞にも參りませぬわいな。
小兵　おゝ仕事といやあ、此の間頼んだ七が袷はまだか。
お吉　あい出來ましたから、持つて參りました。
　ト風呂敷包みより袷を出す。
小兵　おゝ、それは御苦勞。（ト袷を見て）とんだ仕立榮えがした。
　トお吉いそ／＼と七之助の側へ來り、
お吉　七さん、何をおしだえ。
七之　慈姑の皮を剝いて居るのさ。
お吉　憎らしい、知らない顏をしてさ。
　トお吉七之助を抓る。
七之　あいたゝゝゝ。
小兵　どうした、指でも切つたか。
七之　なに、お吉さんが。
お吉　あゝもし。
　ト七之助を留める、小兵衛思入あつて、
小兵　あゝ丸大家にからかつて、豪氣に肩が張つて來た。七や、ちつと叩いてくれ。
七之　あい／＼。

お吉　小父さん、わたしが叩いて上げませうか。
小兵　お前は慈姑を剝いてくんねえ。
お吉　あい／＼。
　ト七之助小兵衛の後へ廻り肩を叩く、お吉は慈姑の皮を剝き居る、小兵衛お吉を見て、
小兵　あゝお吉坊はいゝ娘になつたな、親子とツて爭はれねえのだ、死んだとつさんに生寫しだ、今おいて見せてえな。こりやあお前にやるから、頭掛でも買ひな。
　ト以前の額銀をお吉にやる、お吉取つて、
お吉　まあ小父さん、こりやあ金でございますね、こんなにお貰ひ申しては。
小兵　なに、一分ばかりの金を、又やるから切でも買ひな。
お吉　まことにお氣の毒でございますね。
　ト金を戴いて紙に包み、帶の間へはさむ、
小兵　さうしてお吉坊は、いくつになる。
お吉　あい、十六になります。
小兵　それぢやあ、もうお嫁にいけるの。
お吉　小父さん、厭でございますよ、わたしやそんなこと嫌ひでございます。
　トお吉七之助へ思入あつて恥かしきこなし。

小兵　あゝ、お前は嫌ひか。
お吉　大嫌ひでござります。
小兵　それぢやあ仕方がねえが、おらあ好きなら七のお嫁に貰はうかと思つたのだ。
お吉　えゝ、(ト持つたる慈姑を投り出し)小父さん、そりや本當かえ
小兵　本當に違ひねえが、嫌ひぢやあ無駄な話だ。
お吉　いえ／＼、わたしや七さんなら、あの疾うから。
ト言ひ掛けるを七之助言つては惡いといふ思入にて、頭を振りながら小兵衛の天窓を押へ、同じやうに頭を振らせる、お吉思入あつて、
さあ、よいと思へど七さんに、人の心も知らないで、此の間も横丁のお民さんと連立つて、毘沙門さまへ參つてさ。
ト悋氣の思入。
七之　そりやわたしよりお前こそ、熊さんの小父さんと寄席へ一緒に行つたくせに。
お吉　何の一緒に行つたとて、熊さんの小父さんはおぢいさんだわね
七之　おぢいさんでも男は男さ。
ト七之助空を向いて、うつかりと小兵衛の天窓を打つ、
小兵　あいたゝゝゝ、何をするのだ。
七之　ついうつかりと、(ト肩を叩きながら、)おぢいさんでも、男は男さ。
ト七之助お吉にひそりながら肩を叩く、小兵衛煙草を呑み居る、お吉悔しき思入にて、
お吉　えゝ、人の事を言ひながら、お前もそこらの三毛猫を、可愛がつて抱くくせに
七之　ありやお前、猫だもの。
お吉　猫でも女は女でござりますよ。
ト俎板を庖刀で叩く。
七之　そんならお前も、なぜ人形をお抱きだ。
お吉　ありやお前持遊びだものを。
七之　持遊びでも男は男でござります。
ト七之助俎板を叩くやうに小兵衛の天窓を叩く、
小兵　あゝ痛え、何をするのだ。
七之　眞平御免なされませ。
小兵　もういゝ／＼、手前に叩いて貰ふと、どんな目に逢ふか知れねえ。
お吉　わたしが叩いて上げませうか。

小兵　いやも、按摩は懲り〳〵だ。
　ト七之助お吉が惡いといふ思入、お吉過つて庖刀で指を切る、
お吉　あいたゝゝゝ。
　ト紙にて指を結へる。
小兵　お吉坊、どうした、七が抓つたか。
七之　え。
お吉　いえ、つい指を切りましたわいな。
小兵　そいつは危え、どの指だ。
お吉　小指を切りました。
小兵　丁度そりやあ心中に、
兩人　え。
小兵　あゝ、女郎だといゝ金だ。
　トさんげ〳〵になり、路地口より前幕の權次半合羽脚絆尻端折り、嘉兵衞着流し前垂掛けにて出來り、權次嘉兵衞に囁く、嘉兵衞思入あつて路地へはひる。
權次　あい、御免なせえ。
七之　どちらからお出でなさいました。
權次　品川から來ました。
　ト門口を明ける。

小兵　なに品川から。おゝ、權次か。
權次　とつさん、此の間は。（ト思入あつて内へはひる。）いつもお達者でようござります。
小兵　なに、達者所か煩つて意氣地はねえ、
權次　そいつは惡いね。
　ト言ひながらきよろ〳〵四邊を見廻す。
七之　はい一服お上んなさいまし。
　ト煙草を出す、權次見て、
權次　この子は、六さんの弟だね。
小兵　さうよ。
お吉　お茶をお上りなさりませ。
　ト盆へ茶碗を載せて持出る、權次お吉を見て、
權次　こりやあ好い玉だ、内のかえ。
小兵　なに、隣の娘よ。
權次　話しにやあならねえかね。
小兵　直に慾張るな。
權次　そりやあ生業さ。
　ト小兵衞思入あつて、
小兵　さうしてそつちは、何しに來たのだ。
權次　ちつとお前に話しがあつて來たのよ。

ト誂への合方になり、小兵衞思入あつて、

小兵　何の話しか知れねえが、年を取ると氣がせはしねえ、早く筋を聞かして下せえ。

權次　いや外のことでもねえが、わつちが判で入れた福島屋のお園がことさ、聞きやあお前の息子の六之助が連れて逃げたといふことだ、そこでわつちが態々來たは、知らねえ中といふぢやあなし、お前とおれのことだから氣障なことを言ひッこなしに、話し合に仕ようと思つて來たのさ。あの子も是れまでよく賣つて何時の勘定でも玉頭、もう一年で明く年だから證文卷いて遣つてもいゝほどお部屋ぢやあ儲かつて居るが、然し、逃げたものをそれなりにしちやあ、外の奉公人の示しになりやせぬ、そこで一日三日でもあの子を返してくんなさりやあ、年季も貰つて及ばずながら、わつちが媒人で上げやせうから、どうぞ器用にあの子をば、福島屋へ返してくんなせえ。

小兵　こう權次や、さつきから默つて聞いて居りやあ、おれの内にその玉が、隱してあると思つて來たのだな。

權次　これさとつさん、しらばつくれちやあいけねえ、御免の場所でねえからといつて、お傳馬を勤める御用宿、飯盛何人とお代官へ書上げになつてる女だよ、お恐れながらと出る日にやあ言はずと知れた勾引し、然し何も知り合つた仲で、そんな荒ッぽいことを仕度くねえから、態々わつちが出て來たのだ。とつさん、隱さずと出しなせえ。

小兵　いや手前も目先きの見えねえ奴だ、おれが所へ駈込んで來りやあ、何のつけに隱すものか、此方から掛り合ひをつけて、假令何年あらうとも、年季はおれが踏んで見せらあ、吉原町なら知らねえこと、高が宿場の旅籠屋に江戸で育つた遊び人が、けぢめを喰つて詰るものか。

ト小兵衞きつと言ふ。

權次　詰るか、詰らねえか知らねえが、宿場々々と安くしなさんな、五街道の其の内で、東海道の咽喉ッ首大名衆の下り上りにやあ、大窓を下げにやあならねえ土地だが、江戸の勢ひや破落戸に天窓を下げたことはねえ、山向うは知らねえこと、小田原切つて宿々で誰知らねえものゝねえ、品川宿の見てくれ權次、こつちも態々脚絆掛けで、江戸へ出て來て籠められちやあ、生れた土地へ歸られねえ。

小兵　歸らざあ、何時までも、おれが内に遊んで居ろ、米

は三合五勺しても居候の絶えねえのは、江戸の遊び人の
習ひだから、四五日遊んで見て行かッし。
權次　おゝ、居るなと言つても居にやあならねえ、隱した
玉を出さねえうちは、金輪奈落動きやあしねえ。
ト權次胡座をかき、煙草を呑む七之助お吉思入あつ
て、
七之　もし權次さんとやら、今お尋ねの女郎衆は、本當に
こつちに居ないから、どうぞ疑ひ晴らして下され。
お吉　ほんに七さんのいふ通り、わたしも知つて居ること
ゆゑ。
權次　えゝ喧しいわえ、うぬ等が知つたことぢやあねえ。
態々おれが來るからにやあ、きつとした尻尾を見て掛り
合ひを附けに來たのだ。
小兵　ムウ、それぢやあ手前はどうあつても、おれが匿つ
たと思つてるな。
權次　知れたことだ。
小兵　何ぞ證據でもあつてのことか。
權次　おれも權次だ、來るからにやあ證據のねえことをい
ふものか。
小兵　して、證據といふは。

權次　今見せるから、びつくりするな。（ト此の以前門口へ
正兵衞と嘉兵衞出來り、囁き合ひ居る、）おい道具屋さん、
こつちへ這入んな。
嘉兵　はい、御免なさい。
ト嘉兵衞內へはひる、小兵衞見て、
小兵　や、こなたは。
七之　道具屋の嘉兵衞さん。
嘉兵　小兵衞さん、とんだ目に逢はしたの。
ト小兵衞ぎつくり思入。
權次　今の簪を。
嘉兵　へい。
ト誂への前幕の簪を出す。
權次　とつさん、この簪はどうしてありやした。
小兵　さ、それは。
權次　こりやお園が馴染の客の九助といふ、金貸の手代が
拵へてやつた定紋附、惡いことはしねえもの、さつき此
の道具屋さんの見世へ立つて、煙草入を何心なく見て居
ると、これ此の息子が賣りに來た、抱柏の紋附は覺えの
ある簪ゆゑ、氣の毒ながら道具屋さんを、證據に一緒に
連れて來た。これ、此の簪があるからは、お園は內に居

ざあなるめえ、四の五のなしに出しなせえ。

小兵　その簪がお園のか、何處の女の簪か、おらあ持手は知らねえわ。

權次　持手の知れねえ簪が、何でお前の手にあつた。

小兵　そりやあおれが拾つたのだ。

權次　して、拾つた其の先きは、

小兵　さあ。

ト小兵衛言兼ねる。

七之　慥高輪八ツ山下。

權次　して又そりやあ、いつの幾日に。

小兵　いつであつたか忘れてしまつた。

七之　それは先月池上へ、お參りに行つた歸りがけ。

お吉　そんなら大方十三日。

權次　むゝ、此の簪を後の月、十三日の晩高輪の八ツ山下で拾つたら、まだ此の外にとつさんに、見せにやあならねえものがある。

小兵　して、其の品は。

權次　この煙草入は、覺えがあらう。

ト懐より前幕の小兵衛の煙草入を出す、

小兵　や、これは。

トぎつくり思入。

權次　しかも其の晩殺された、九助が死骸の側にあつた、赤銅鎖の煙草入、前金物の野晒しは。

七之　そりやとつさんの煙草入。

小兵　あこれ、その煙草入は、おらあ知らねえ。

ト嘉兵衛思入あつて、

嘉兵　いや、知らねえとは言はれまい、しかも去年の春のこと、其の金物に取合せ、わしが拵へた煙草入

權次　小豆鎖のしつくりと、拔き差しならねえ此の證據、これでもお前はしらを切るか。

ト小兵衛思入あつて、

小兵　何處がどこまで、覺えがねえ。

權次　どうでおれにやあ言ふめえから、出る所へ出て白狀しろ」大家さんの御苦勞ながら。

ト門口に正兵衛窺ひ居て、

正兵　おい〳〵。

ト内へはひる。

權次　樣子は門で、お聞きなすつたらうね。

正兵　おゝ、殘らず聞いて居ました。

權次　どうで一筋繩じやあいかねえ爺イ、出る所へ出ます

から、お氣の毒だがお預け申します。
正兵　おゝしつかりと預りました。早くこんな事で喰ひこんで、片附いてしまふ方が、此の家主も厄介拂ひだ。
權次　道具屋さん、こりやあお前に預けるよ。
ト簪を嘉兵衛に渡し、煙草入を懐へ入れる。
嘉兵　あゝ二三兩も儲けようと、思ひの外に簪ゆゑに、引合ひになるとは難儀なことだ。
權次　全體お前も五兩とは、あんまり見倒し過ぎたから、
正兵　こんな目に逢ふも當り前だ。
嘉兵　いや、これに懲りねえことはねえ。
權次　それぢやあ大家さん、わつちア是れから代官所へ。
正兵　ちつとも早く訴へさつせえ。
ト權次立上り、下手へ來る、七之助留めて、
七之　あもし、どうぞ代官所へは。
權次　えゝ、何をしやあがる。
ト振拂ひ、
小兵　あこれ、七や打捨つて置け、こいつらに言つたつて分らねえ、分る所でわけて見せらあ。
ト小兵衛仕方がないと覺悟の思入、三人は門口へ出て
權次　それぢやあ大家さん、お預け申しましたよ。
正兵　しつかりと預りました。
權次　おい、とッつあん、
ト門口から顔を出す。
小兵　何だ。
權次　砂利の上で逢ひやせう。
トきんげ／＼になり、權次、嘉兵衛は花道へはひる。
正兵衛いゝ氣味だといふ思入にて路地口へはひる。時の鐘合方、七之助お吉案じる思入。
七之　こりやとつさん、どうしたらよからうな。
小兵　どうしたらぢやあねえ、われが間抜けからだ、言はねえでもいゝ事を高輪で拾つたの、池上へ行つた時のとそりやあまあ仕方もねえが、死骸の側にあつたといふ、證據に彼奴が持つて來たのに、そりや父さんの煙草入と、手前が一口言つたので、もう拔き差しはなりやあしねえ、あゝいふ證據があるからにやあ、此の金を土產にして喰へ込まにやあならねえわ。是れまで積る舊惡に、今度行きやあ出られねえ。同じ兄弟でも六之助は因果小僧と名に呼ばれ、おれが手にせえ合はねえからお帳に附いてしまつたが其の代りにやあ何處へ行つても喰ふに困るやうなことはねえ、手前などはおれが死ぬと直に明日か

ら孩ッ冠りだ、片輪な子程可愛いと殘して行くが心掛りだ、いつその事三年後大煩ひをした時に、死んでしまつてくれたなら、今この苦勞は見めえもの、あゝ餓鬼は厭だ厭だ、死んでもくれゝばいゝに。

ト小兵衞宜しく思入にて言ふ。七之助は俯伏き言譯なく泣いて居る。お吉も是れを聞き、同樣に泣き居る。

おゝお吉坊、まだ居たか、おつかあが案じて居よう、早く内へ歸るがいゝ。

お吉　あい、今歸りますわいな。

小兵　手前は油掃除でもして置けよ。

七之　あい。

ト顏を上げずに泣いて居る。

小兵　一時でも我が内で、足を伸ばして寐て置かうか。

ト時の鐘獨吟の端唄になり、小兵衞看板で拵へた二枚屏風を立て、搔卷を持つて此の蔭へはひる、七之助屏風へ思入あつて、そつと門口へ出る、お吉も跡より出て、

お吉　もし、七さん。

七之　あ、これ。

ト四邊へ思入。

お吉　情ないことになつたわいな。

トお吉七之助に縋り泣く。

七之　今お前も知つての通り、ひよんなことをわたしが言つて、それが證據に父さんが命を取られるやうになつても、打ち打擲もなされずに、跡でわたしが困るだらうと、終に泣いたことのないに、ほろ〳〵涙をこぼしながら、三年後に死んだなら此の苦勞はあるまいにと、聞いては生きて居られぬゆゑ、死んで御苦勞かけぬ心、是れまでのことはこれぎりに、水に流して下さんせ。

お吉　そりや七さん聞えない、小い時から隣同士、仲のよいのでかゝさんが、夫婦にしたらよからうと言はれた時の嬉しさに、其の常談が誠となり、去年の秋から言交し早く一緒に成り度いと茶斷ちをしたる甲斐もなく、お前が先きへ死なしやんして、何で殘つて居られませう、わたしも共々死ぬるわいな。

七之　その志しは嬉しいが、わたしは死なねばならぬ體、お前は死ぬに及ばぬゆゑ、後に殘つて命日に、お念佛でも申して下され。

お吉　いえ〳〵わたしも共々に、死なねばならぬ譯あるゆゑ。

七之　そりや又何で。
お吉　恥かしいゆゑ今日までは、お前にさへも隠して居たが、わたしや疾うから。
七之　え、
お吉　身重になつて居るわいなあ。
七之　そんならそれゆゑ。
お吉　後に殘つて居られぬ體、一緒に殺して下さんせいな。
　ト七之助に縋り泣く、七之助是非なき思入にて、
七之　さういふことなら仕方がない、二人一緒に死ぬわいの。
お吉　えゝ、嬉しうござんす。
　ト兩人手を取り交し、よろしく思入、時の鐘。
七之　とはいへ跡でかゝさんが、嘸やわたしを恨むであらう。
お吉　その言譯は彼の世から、
七之　きつとお詫びを、
兩人　いたしまする。
　ト時の鐘、屏風の内にて、
小兵　七や〱、灯りを附けねえか。
七之　さあ、見咎められぬ其の内に。
お吉　石を拾うて、
七之　少しも早う。
　ト時の鐘獨吟の端唄にて、兩人石を拾ひ袂へ入れながら花道へはひる。時の鐘合方にて、屏風の内より小兵衛出來り、
小兵　これ七や〱、えゝ、彼の野郎め、叱られてお吉が所へでも遊びに行つたか、灯りを附けて貰ひてえが、誰もまだ歸らねえか知らぬ。
　ト奥より鷄娘出來り、
鷄娘　こッけッこ〱。
小兵　えゝ、手前ぢやあ分らねえ、飯を喰つたら寐てしまへ。
鷄娘　こッけッこう。
　ト羽根ばたきをして二階へ上る、小兵衛火鉢を見て、
小兵　おゝ、すつかり火が消えてしまつた。（ト行燈と燧箱を出し火を打ち）あいたゝゝゝ、いやといふ程拇指を打つた、又水ばれか豪氣に濕つた。（ト又火を打ち見て）おきやあがれ、蓋がしてあらあ。（ト又打つて）やつとのことで附いた。（ト行燈へ灯りを附け思入あつて）そろそろ兆して來たわえ。何にしろ素敵な蚊だ。どれ、燻しを

仕掛けて遣らうか。
ト時の鐘端唄になり、小兵衛火鉢へ蚊燻しを仕掛ける此の内花道より六之助好みのこしらへ、尻端折り頬冠り、お園巻帯宿場女郎好みのこしらへ、同じく手拭をかぶり出來る、跡より黒四天の捕手一人菰を冠り、窺ひながら、出來る。花道にてお園つまづく。
六之　あ、危ねえ、氣を附けて歩け。
お園　つい心が急くものだから、石に躓いたのさ。
六之　そんなにおど／＼することはねえ、これから旅に出掛けりやあ、もう後は見られねえ。
お園　今まで江戸に隱れて居て、今夜捉まりでもしてお見な、苦勞した甲斐がないわねえ。
六之　もう二十日から日が經つたから、江戸に居るとは思ふめえ、何にしろ父さんに逢ひてえものだ。
お園　わたしやあ初めてだから、極りが惡いね。（ト此の時捕手つか／＼と側へ來る、お園振返る、これにて花道へ引返してはひる。）おや、誰か跡を。
六之　なに、氣のせゐだ。（ト右の唄にて兩人舞臺へ來て門口から覗き、）丁度父さんが一人居る。
お園　そんなら、あれがお父つさんかえ。

ト これを聞き、
小兵　そこに居るのは、誰だ。
六之　父さん、おれだよ。
小兵　おれだとは誰だ、名があるだらう名を言へ、おれといふ人に近附きはねえ。
六之　入り早々もう皮肉だ。
ト これにて小兵衛思入あつて、
小兵　さういふ聲は、六ぢやあねえか。
六之　あい、六之助さ。
ト 小兵衛惡い所へ來たといふ思入に、
小兵　これ、手前はお帳に附いた體、おれの所へ何しに來た。
六之　今度奥州の方へ行くに附き、又何時逢はれるか知れねえから、ちよつと暇乞ひに來たのさ。
小兵　そりやあ何處へ行かうと、うぬが足でうぬが行くのに、他人のおれが構ふものか。
六之　さうでもあらうが、ちよつと内證で内へ入れてくんなせえ。
ト 小兵衛瘧にて寒き思入、
小兵　あゝ、又寒氣がして來やあがつた。（ト門口を見て、）

此の野郎め、まだそこに居やあがるか、まご／＼すると叩き挫くぞ。

　ト立上り、ぶる／＼顫へどうとなる。六之助これを見てつか／＼と内へはひり、

六之　父さん、こりやあどうしたのだ。

　ト側へ來て介抱するを、

小兵　どうでもいゝ、打捨つておけ。

　ト六之助を突き退ける。

六之　それだといつて、そんなに顫へて。

小兵　顫へやうが顫へめえが、うぬが世話になるものか。（ト又側へ寄る六之助を突き退け、）あゝ、寒い寒い。

　ト搔卷を着て顫へ居る、六之助側へ行かれぬ思入、お園見兼ねて内へはひり、

お園　もし、こりやどうなさんしたのだえ。

小兵　えゝ、喧しいやい。

お園　えゝ。

　ト大きな聲をする。

　トびつくりする、小兵衞お園を見て、

小兵　や、お前は。

お園　お初にお目に掛りますが、品川の園でござります。

小兵　むゝ、話しに聞いたのはお前か、よく來たの。

　ト言ひながら矢張り顫へて居る。

お園　不思議な緣で六さんと、斯うして一緒になりますれば、お前さんとは申さば親子、出過ぎたやうだがわたしのお願ひ、どうぞ今日ばかりは六さんを、堪忍して上げておくんなさいな。

　ト小兵衞思入あつて、

小兵　六ばかりならどんなことでも、敷居から内へは入れねえが、初めて逢つたお前の頼み、愛敬もこぼせめえから、今日ばかりは大目に見ようよ。

お園　そりやあ何より有難うございます。さあ六さん、こつちへお出でよ。

　トこれにて六之助小兵衞の側へ來て、

六之　父さん、お前どうしたのだ。

小兵　瘧を久しう煩つて居るのよ。

お園　それでそんなに顫へなさんすのか。

小兵　おゝ、寒くつて堪えられねえ、そこの戶棚に蒲團があるから、此の上へぶッ掛けてくれ。

お園　あい／＼。

　トお園戶棚より蒲團を出し、小兵衞に着せる、此の内

六之助思入あつて、門口へ掛金をかける。
小兵　これ六や、家へ誰ぞ來ると惡い、入口を締めて置け。
六之　案じなさんな、掛金を掛けて置いた。
小兵　拔目はねえな。あゝ寒い〳〵、もつと何ぞ掛けてくれ。
六之　おゝ、今掛けてやるよ。（ト六之助着物を脱ぎ、紺の腹掛白縮緬の褌一つになり、小兵衛へ着物を掛け、）父さん、何うだ。
小兵　まだ寒い〳〵。
六之　お園や、手前も脱げ。
お園　あい〳〵。
　ト卷帶を解き、緋の長襦袢一ツになり、小兵衛へ着物を掛けて、
六之　これぢやあどうだえ。
小兵　まだ〳〵寒くつて堪えられねえ、六や上へ乘つてくれ。
六之　合點だ。（ト小兵衛の上へ馬乘りに乘り、押へ居る。）おらあ瘧の味を知らねえが、豪氣に顫へるものだなあ。
（ト小兵衛苦しき思入、六之助は體へ蚊が取附きしこなし、お園蚊を打たうとして背中を叩く。）あゝ痛え、何をするのだ。
お園　蚊が取ツ附いて居るからさ。
六之　さつきから喰やアがるけれど、手が放せねえから我慢をして居たのだ。
　ト六之助蚊にくはれたる思入。お園これを追ひながら、
お園　もしおとつさん、少しはようございますかえ。
小兵　あゝ大きに凌ぎよくなつた、此の擧句が熱が出て、あつくツて堪へられねえ。
六之　嘸毎日困るだらうの。
お園　誰がこんなお世話をしなさいますえ。
小兵　此の野郎の弟が、よく世話をしてくれるよ。
お園　そりやあ慥か七さんといひなさるのだね。
小兵　さうよ。
六之　おゝ、其の七は何處へ行つたえ。
小兵　今まで家に居たが、隣りへでも行つたか。
六之　あれにも逢つて行きてえが、早く歸つてくれりやあいゝが。
　トばた〳〵になり、花道より以前の岩戸安走り出來り、門口を叩き、
安　親分々々、大變だ〳〵。

小兵　なに、大變だと。
　ト小兵衛飛び起き、
お権　あもし、危いわね。
　ト留める。
小兵　これ安や、大變とは何が大變だ。
安　七さんとお吉坊が、大川へ身を投げたよ。
三人　えゝ。
　トびつくりなし。
六之　それぢやあ七が、
小兵　あこれ。(ト六之助を留めて)さうして、どうした。
安　どうした所かお袋がそれを聞くと逆上せあがり、此奴も跡から川へどんぶり。
小兵　やれ、可愛さうに。
安　わつちやあ是れからみんなを連れて、すばりをして尋ねて來やす。
小兵　御苦勞だが頼むよ。
安　合點だ。
　トばた〳〵にて逸散に花道へ走りはひる、後三人愁ひの思入にて、
小兵　あゝ、とんだ事をしてくれたなあ。

　ト小兵衛うつむき嘆く思入。
六之　それぢやあ逢ひたく思つたが、もう逢ふことはならねえか。
お園　何で身をば投げなさんしたか、愛しいことをしたぢやあないかね。
六之　父さん、何ぞ當りはねえかえ。
　ト小兵衛我慢の思入にて、
小兵　別に仔細もねえけれど、おれが小言を言つたので、それで大方死んだのだらう。
六之　おれが斯うして内に居ず、親一人子一人だのに、何を小言を言つたのだ。
お園　まだお目には掛らないが、すなほなお子だといふことだのに、惜しいことをしましたね。
　トお園泣く、小兵衛思入あつて、
小兵　なに、根が役に立たねえから、こんなことを仕出來すのさ、こつちアどうで死ぬ體、心殘りがなくなつていいが、可愛さうなはお隣の娘、とんだ者にくツ附いてお袋まで死ぬといふはよく〳〵深い惡緣だ。あゝ店受けの久六が難儀をするのが氣の毒だ、おれが娑婆に居られるなら、どうかしてやらうのに、明日をも知れねえおれが

身の上。
六之　父さん、明日も知れねえ身の上とは。
お園　お鹽梅が悪いのかえ。
小兵　なに、煩つたとて高が瘧、死ぬほどのことはねえが、今夜か遲くも明日の晩は、喰ひ込まにやあならねえ譯だ。
六之　そりや又どうして、
お園　どういふ譯で。
ト合方替つて小兵衞思入あつて、
小兵　譯といふのは外でもねえ、手前達が品川を逃げた晩におれも亦、池上歸りで雨に逢ひ、八つ山下で休んで居たら鼻の先きで人殺し、誰かと見りやあおさらば傳次、盜んだ金を路用にして上方筋へ出掛けると、右と左りへ別れたが、月は隱れて眞ツくらがり、男と女の駈落を追掛けて來た出合頭、逃げる機會に腰提げの煙草入を落したゆゑ、探す手先きに拾つた簪、お園がものと露知らず買つた先きから足が附き、見てくれ權次がおぬしの詮議文句をいやあ勾引、まだ其の上に煙草入で目串の拔けねえ人殺し、此の二口で送られたら、再び娑婆へは出られねえ。
六之　むゝ、そんならあの晩八つ山下で、出ツ會したのは父さんか。
お園　其の時それと知つたなら、さういふ事にはなるまいものを。
小兵　元より知らねえことなれど、今となつちやあ拔けられねえ、これが堅氣なものならば身の言譯も立たうけれど、年來名うてのおれだから、誰でもたゞぢやあ通さねえ、若いうちなら逃げもせうが白髮頭でそれも出來ねえ、そこで是れまでの罪滅しに、手前や傳次が科を背負つて、此の世の別れに行く積りだ。
ト此の内六之助、園これを聞き顏を見合せ思入あつて、
六之　お園、今父さんの話しを聞いちやあ、おらア奥州へ行けなくなつた。
お園　さあお前も此の儘行けまいが、わたしも一緒に行かないよ。
小兵　なに、二人が旅へ行かねえとは。
六之　行かれぬ譯は今もいふ、其の勾引も人殺しもお前の知つたことぢやあねえが、その時拾つた簪に又落して來た煙草入が、證據になつちやあお前だけ、拔けられねえ

のは尤もだ、勘當受けても親子は親子、知らねえことなら仕方もねえが、それと聞いちやあ行かれねえ。

お園　元はといへば品川をわたしが逃げたとこからして、お前にかゝる其の難儀、どこが何處まで六さんと添はうと思つて逃げは逃げたが、斯ういふ譯では逃げられねえ、わたしが是れから福島屋へ歸つたならば勾引の、まあ一方は濟む道理。

六之　又人殺しの其の科も、證據になつた煙草入も親仁にわつちが貰つたと、此の身に背負つて駈込んだら、どんな惡事があらうとも、父さんお前は拔けようぜ。ト是れにて小兵衛起返り、感心の思入。

小兵　あゝ惡い奴ほど分りがよく、勘當すりやあ他人だがよく二人とも言つてくれた、其の志しは忝けないが手前が行きやあ重なる惡事に、人殺しゆゑ切られにやならねえ、又この子も宿へ歸つたら外の者の示しにも、酷い仕置をした果が年季を増して住替だ、もう早桶へ片足は突込んで居るおれが體、生き甲斐もねえ命をば助かりてえとて手前達に、どう難儀が掛けられるものだ。

六之　そりやあ父さんお前も無理だ、現在親が殺されるのを何で子が見て居られるものだ、元よりお前の科ぢやあなし、勾引はおれがしたの、又人殺しは傳次が仕業、何でお前に其の科をおれが背負はせてやれるものだ。

お園　わたしだつて其の通り、これから歸つて見せしめに、三度の食を止められて體に斑の出來る程、責めせつちやうにあつたとて高が三日か五日のこと、わたしも駿河の府中から旅を稼いで來たからは、お部屋の仕置はお茶漬さ。

六之　そんなら手前も辛からうが、是れから宿へ歸つてくれ、おらあ直支度をして代官所へ駈込むから、駕籠にでも乘つて早く行け、ぐづ／＼しちやあいかねえぜ。

ト言ひながら六之助着物を着る、お園も着ながら、

お園　わたしもお前に連れ添ふからは、くだらぬ氣でも心では、鬼の女房に鬼神とやらさ、未練の心は少しもないよ。

六之　どうで出られはしめえけれど、萬に一つお赦でもあつて出られたならば逢はうけれど、さもねえ日にやあこれが別れだ。

お園　何だな六さん、是れッ切り逢はれぬ人ぢやアあるめえし、お前が死んだと聞く時は、直に跡から死んで行くから、六道とやらに待つてゝおくれ。

六之　それぢやあ手前も死んでくれるか。

お園　行かねえでどうするものだな。

ト兩人よろしく思入、小兵衛是れを聞き思入あつて、

小兵　成程、似た者夫婦とは、よく言つた世の譬、二人ともいゝ肚胸だ、今殺すのは勿體ねえ、おらあどうせ近いうち、瘧で死ぬと思つて居るのだ、手前達が死んだ後で、長生きでもすりやあいゝが、間もなくおれが死んで見ろ、虻も取らず蜂も取らず、惡いことは言はねえから、おれに任して二人とも、命を大事に逃げてくれ。

六之　そりやあ父さん無駄な話しだ、達者な時なら知らねえこと、今煩らつて居る其の體で、行つた日にやあ直ぐに往生、長く生きちやあ居られねえ。

お園　それを知りつゝ子の身として、何で見捨てゝ行かれるものかね。

小兵　えゝ、べらぼうめ、氣を揉ませるな、年は取つても野晒し小兵衛、行きやあ娑婆より樂をするらあ、向ふ通りへ押付けられ名主の手當を頂いて喰ふ、そんなしみつたれな親仁ぢやあねえぞ。（ト小兵衛片肌を脱ぐ、この二の腕に野晒しの彫物ある、お園これを見て思入）あゝ、熱が出てべらぼうに熱い。

お園　や、お前の腕の彫物は。

小兵　こりやあ譯があつて彫つたのだが、此の彫物があるゆゑに、渾名を野晒小兵衛といふのよ。

お園　そんなら、お前は若い時、三島の宿の初音屋に、お出でのことはなかつたか。

小兵　おゝ、かれこれ三十四五年先、そこに奉公して居たよ。

六之　其の初音屋といふ穀物屋でお前の首は取られるところ、繼いで貰つたといふことだの。

小兵　忘れもしねえ掛先きを、八十五兩早乘つて既に縛られて行く所を、お慈悲深い旦那さまで、金は世界の湧き物だ、人の命にやあ替へられねえと、八十五兩損をしておれを助けて下すつた、其の時彫つた此の彫物、骨になるまで此の御恩は、忘れぬといふ心の誓ひ、さほどお慈悲の旦那さまが、僅か十年たゝねえ内に、ひよんなことから左り前、店をしまつて微なお暮し、せめて以前の御恩送りと金子十兩拵へて持つて行つて彫物を、お目に掛けたが其の後は便りもないが、御無事だか、おれが死んでも親の恩、手前達は忘れてくれるな。

六之　それはおれも聞いて居るゆゑ、心に忘れたことはね

え。そりやあさうとお園は又、どうしてそれを知つて居るのだ。
お園 知つて居るのは面目ないが、その初音屋の、わたしや娘さ。
小兵 え、そんならお前が。
お園 さあ、尋ねてお出での其の時は、わたしはやう〳〵五ツか六ツ、詳しいことは知らないが、跡での話しに彫物は幽に覺えて居ましたのさ。
小兵 成程お前がさう言ひなされば、御新造さんに瓜二ツ、まことによく似ておいでなさる。
ト お園の顏を見て思入。
六之 それぢやあお園は父さんが、御恩になつたお主の娘か。
お園 思ひがけない彫物から、互ひの素性の知れるといふは、
小兵 これも盡きせぬ主從三世。
六之 こつちは二世の約束に、
お園 一世の親子が寄合つて、
小兵 話す間もなく、
六之 此のまゝに、

お園 逢ふは別れの、
三人 始めだなあ。
ト 三人よろしく思入あつて、
小兵 してまあこりやあどういふ譯で、お前は勤めをさつしやります。
ト 合方替つて、
お園 話せば長いことながら、見世をしまつて在方へ僅の田地を力にして、しがない暮らしにどうせうかとそれを氣に病み母さんが、三年越しの長煩ひ、搗て加へて父さんが風から終に傷寒で、僅か五日で果敢なくなり、跡の始末に仕方なく、しかも府中の丁子屋へ、泣きの淚で此の身を賣り、心のまゝに訪ひ弔らひ、やれ嬉しやといふ間もなく、又その月に母さんが直に亡くなり、それからは便りない、身にぐれ出して流れ〳〵て品川へ、五年あとから宿場の勤め、よく零落れて以前はと人は言へども身の恥に、今日までわたしが隱して居たゆゑ、六さんさへも知らぬ譯さ。
ト これを聞き、お園を見て思入あつて、
小兵 あゝ、そんなら小兵衞が大恩受けし、お二人さまとも此の世には、もうおいでなされませぬか。南無妙法蓮

華經々々。(トちよつと手を合せ拜んで)これ六や、手前のやうな惡黨に惚れて駈落するからにやあ、ろくな者ぢやアあるめえと、思ひの外に大恩ある、お主さまのお孃さん、たゞの女房とは譯が違ふぞ、行末長く見捨てずによくお世話をしてくれよ。

六之　これさ父さん、何を言ふのだ、おらあ彼方へ行く體、お前は殘つて恩返しに、お園の世話をしてくんねえ。

小兵　いや知らねえ内は兎も角も、おれが命を助けて貰つた大恩のあるお主さま、お助け申さにやならねえは、手前が行つて死ぬ時は直に死ぬと今の詞、こゝが御恩の返し時この御子の命が助かるやう、おれを見捨てゝ行つてくれ、それともそれが不承知なら、爰でおれが先きへ死なうか。

ト以前の庖刀を取るを留めて、

六之　あこれ、危ねえ、まあ待ちねえ。

小兵　そんなら爰を、逃げてくれるか。

六之　さあそれは。

小兵　但しは死なうか。

兩人　さあ、

小兵　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

小兵　惡いことは言はねえから、親の言ふことをきいてくれ。

ト是れにて六之助是非なき思入、

それ程までお前のいふのを、達てといつて死んだ日にやあ、孝行する氣もやつぱり不幸、仕方がねえ、お園行かうよ。

お園　行きは行かうがわたしゆゑ、義理に搦んで斯うなつては。

小之　濟まぬとあるなら、わしが死なうか。

お園　あもし。

ト留める。

六之　父さん、行くから案じなさんな。

小兵　あゝ忝ない〳〵、それでおれも落着いた。これ六や、もう今までとは違ふぞ、女房でもお主さま、是れから旅へ出掛けたら泊り〳〵で足でも摩り、又馬駕籠のねえ所なら負つてゞも上げろよ。お孃さん、遠慮なしに遣つておやんなせえ、はゝゝゝ。

お園　あれさ、其のお主あしらひは止しにしておくんなさいよ。

ト此内六之助花道へ思入あつて、

六之　いや、此方のことで忘れて居たが、七の死骸はまだ知れねえか、せめて別れに死顔でも、

お園　わたしも一目見て行きたいに。

小兵　もう一足早く來れば、生きて居るうち逢はしたに、不斷彼奴も逢ひたがつて、兄さんは何處に居るか、煩つてゞも居やあしめえかと、箸の上げ下しに言つて居たよ。

六之　明日まで居たら逢はれもせうが、

お園　待つて居られぬ今宵の仕儀。

ト兩人本意なき思入、小兵衞思入あつて、

小兵　銘々傳の赤垣を、芝居でした時着物を掛け、德利酒の別れをしたが、幸ひこれに七が袷これを此の場の形代に、あれと思つて逢つて行きやれ。

ト地藏經になり、以前の袷を看板の屛風へ掛ける、これを兩人見て、

六之　あゝもうこんなに、丈を着やすか。

お園　話しに聞くより大きな形。

小兵　六に似て丈が高い。(ト小兵衞茶碗へ水を汲み、着物の前へ手向け思入あつて、)これ七や、不斷手前が逢ひたがつた、兄イが來たよ。

六之　これ七坊、手前何で死んだのだ、おれが此の通り身性が惡く、お帳に附いてる體だから、三人居ても位牌所は、手前が纔かにやならねえに。

お園　お前ばかりか娘御まで年端も行かない身の上で、死なうと覺悟しなんすは、よく／＼なことであらうけれど、ひよんなことをしなさんしたな。

小兵　手前ゆゑに三人四人、死んだ中にも不便なのは、娘は七が胤を宿し、もう五月になるとやら。

六之　それでは、腹のその子まで、

お園　闇から闇へやる愛しさ、

小兵　親子四人同じ日に、

六之　水へはひつて死ぬといふは、

お園　如何なる前世の惡緣か、

小兵　是れまで人の因果をば、

六之　引張りもの〻見世物に、

お園　見せたる罪が廻り來て、

小兵　今日は、此の身の、

三人　因果だなあ。

ト三人愁ひの思入、時の鐘。

小兵　いや、詰らぬことで引留めた、すばりに行つた若い

奴等が、歸らぬうちに行くがいゝ。

六之　斯らなる上は父さんに、氣を揉ませぬがまだしも孝行。

お園　少しも早う。

ト立ちかゝる。

小兵　あ、二人共待つてくれ、いはゞ目出度い旅立ちだ、箸を取つて行つてくれ。

六之　なに、手のねえに、

お園　いらぬ事を。

小兵　手間は取らせぬ、待つてくれ。（ト言ひながら戸棚を開け、内より八寸の上へ茶碗、皿、箸を二人前取膳に並べあるを出し）さあ、態と箸を取つてくれ。

六之
お園　この膳は、

ト合點の行かぬ思入。

小兵　手前達が品川を逃げたと聞いて二人とも、こいつは確に旅の空、本街道は行くめえから、嘸喰物にも困らうと、勘當しても親子は親子ひもじい目をばさせぬやう、人目を忍んで戸棚の蔭膳。

ト是れにて六之助お園膳を取つていたゞき、

六之　ろくでなしのおれでせえ、是れほど思ふ親心。

お園　さぞ孝行な七さんが、殘り多うござんせう

小兵　地鐵を言やあ親子の別れ、口ぢやあ強いことを言ふが、心の内ぢやあ泣いて居るわい。

六之　父さん、そりやあ尤もだ。

お園　わたしでさへも胸が一杯。

小兵　みつともねえと、笑つてくれるな。

ト小兵衛手拭を顏へ當てゝ泣く、六之助お園顏を背けて泣く、此の時薄ドロ〳〵になり、上手二階の障子の骨を殘し紙ばかり引いて取る、内に七之助お吉水へはひりし鬘、薄色の衣裳にて背々を拜んで居る、二階より鶏娘つか〳〵と下りて來て、

鶏娘　とッけッこ〳〵、とッけッこう。

小兵　えゝびつくりする、どうしたのだ。

鶏娘　とッけッこう、

ト上手二階へ指さして奥へはひる、これにて六之助お園二階を見て、

六之　や、思ひ掛けねえ七之助。

お園　傍に可愛ゆい娘御さん。

小兵　なに、七と娘が。

ト上手を見る、ドロ〳〵掛焔硝、障子の紙を下し兩人

を消す、此の途端路地口より以前の正兵衛先きに、黒四天の捕手出來り、

正兵　小兵衛どん／＼、ちよつと明けて下せえ。

　ト門口を叩く、

小兵　大家さんか、寐ましたよ。

正兵　寐たおやあ濟まねえ、起きさつせえ、身投げの息子を連れて來た。

　ト又門口を叩く、

小兵　えゝやかましい。

　ト立つて來て門口を開ける、捕手十手を振上げ、

捕手　捕つた。

　トこれにて門口をぴつしやり締め、きつとなり掛金をかける、時の鐘合方になり六之助お園思入あつて身拵へする小兵衛六之助に囁き早く逃げると言ふ、六之助これを見捨てゝは行かれぬといふ思入　小兵衛行かにやあ死ぬと庖刀を取上げる、これにて六之助お園是非なく奥へはひる、小兵衛熱の浮きし思入にて、手桶を持出し柄杓で水を呑む、此の内門口の捕手うなづき合ひ門をばら／＼と毀し内へはひり、捕つたと十手を振上げる。小兵衛柄杓の水をぶつ掛け行燈を消し、きつと見得、これより竹笛入りの誂への合方にて、小兵衛闇黒捕物の立廻りよろしくあつて、よき時分下手より六之助お園頰冠りをなし窺ひ出る。正兵衛見附け、うぬとかゝるを突廻して蹴る、正兵衛うんと倒れる。兩人は花道へ行く、舞臺は皆々小兵衛に繩を掛ける、此の時蚊燻しぱつと燃え上る、花道の兩人振返り見る。小兵衛立上らうとするを、十手で打たれ、下に居る。木の頭。三重模樣の合方早めたるドン／＼にて、兩人花道へはひる。小兵衛は二人を見送る、此の見得よろしく、

ひやうし幕

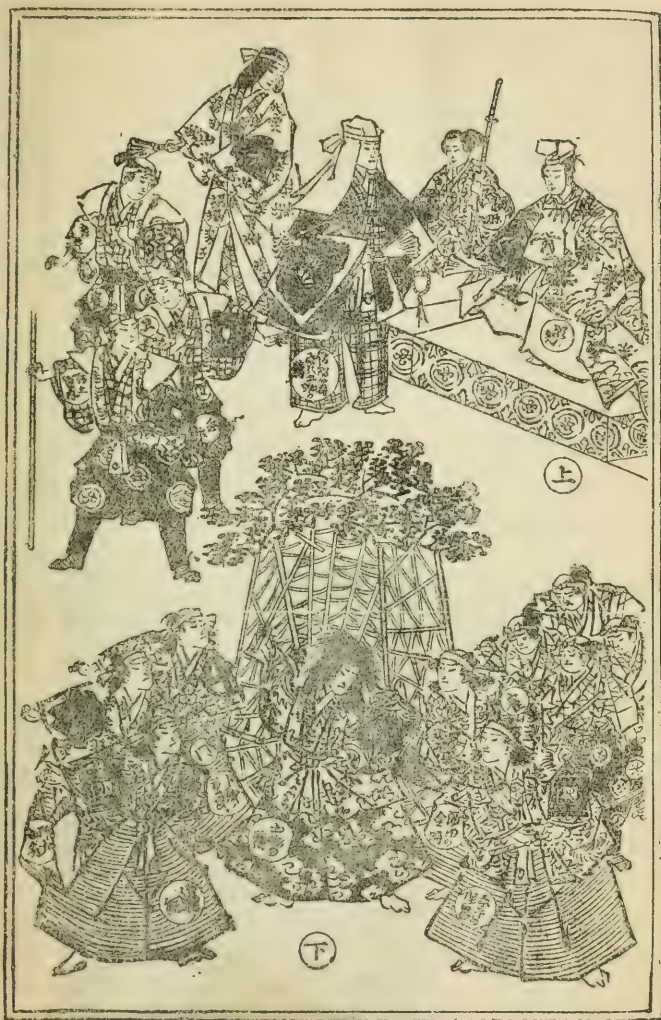
因果小僧（終り）

新古演劇十種ノ内

土蜘

五世尾上菊五郎の土蜘の精智籌上部は先代左團次の平井保昌、豐原國周の筆。

上
下

土蜘

頼光御殿の場
土蜘退治の場
長唄囃子連中

〔役名――叡山の僧智籌實は土蜘の精、源頼光朝臣平井左衛門尉保昌、渡邊源次綱、酒田主馬之丞公時、碓井靱負之丞貞光、卜部勘解由季武、狂言師三人、太刀持、侍女胡蝶等〕

（御殿の場）――本舞臺一面の置舞臺、向う松の鏡板、左右竹の畫の羽目、上手に臆病口の出入り、下手橋懸りの高欄、向う揚幕、下手橋懸りへ緞子模樣の幕を張り、上手大臣柱の際へ一疊臺を据ゑ、總て能舞臺の飾附よろしく、正面の臺へ毛氈を掛け、長唄囃子連中裃にて居並び、此下手舞臺へ囃子連中侍烏帽子にて居並び、片シヤギリにて幕開く。と頭取出て、三代目尾上菊五郎三十三回忌追善に、五代目尾上菊五郎が土蜘の所作を勤めるといふ口上あつて這入ると、次第になり、橋懸りより平井保昌出で來り、舞臺眞中へ立ち、

保昌　これは源家の獨武者、頼光朝臣に仕へ奉る、平井の保昌にて候。扨も我が君には此程より、御不例に依て引籠らせたまひ、されば典藥の頭重雅より御藥調進仕り候へども、未だ効驗のあらざるゆゑ、若し物の怪の祟りにやと諸寺諸山の高僧貴僧へ修法を委ねたまひしが、其奇特にや御快く、病も薄らぎたまふよし、出仕いたし御機嫌を伺はゞやと存じ候。

ウタヒ〽浮立つ雲の行方をば〳〵、風の心に任すらん。〽茲に源の頼光は、病に犯されたまひしも、秋の半の定めなき、空も晴れ行く長月に、長のいたつき快く、暫し端居をなしたまふ。

ト此内橋懸りより源の頼光出で來る、跡より太刀持附添ひ出で、是れにて保昌下手へ來り、頼光上手かつら桶へ掛け、太刀持後へ控へる。

俄に秋の冷氣を催し、風を膚に覺え候、君には如何渡ら

せ候。

頼光　典藥の頭醫療を盡し、諸山の高僧祈念を凝らす丹精の功顯はれて、昨日に今日は快く、庭前の菊咲き出しを今しも心慰めに端居なして詠め候。

保昌　それは一段の事にて候、菊は目出度き草にして、其香をきくも壽命の藥、朝夕に御覽あらば遠からずして御快氣あらん、いと悦ばしき事にて候。

頼光　實に百病の長といふ風邪に此身を犯されて、月を重ねて煩ひしも、思ひ出づれば葉月の末、一條許へをとづれて、

〽秋の長夜も明近く、横雲覆ふ東雲に、盡きぬ別れの袂を別ち、思ひは胸に有明の、月は殘れる朝まだき、道の邊に咲くむら萩の、露重げなる風情に見とれ、暫し佇む草原に、朝風寒く身に染みて、

心聊か惱ましく、それより惡寒發熱し、遂に枕に就きたるぞ。

ト此内頼光中啓を持ち、よろしくあつて。

保昌　さらば御側に仕ふまつる。四天王を始めとして、御館の者打ち驚き、御介抱なしまゐらす內、

〽恐れ多くも朝廷より、典藥頭遣はされ、君の御脈を診察し、

夏三伏の暑に破れ、秋寒冷の時に發す、元風濕の業にして、是れを瘧病と申すなり、風を逐ふにしくべからずと御藥調進ありし上。

〽諸寺諸山の高僧貴僧へ、修法を委ねたまひしが。

其效驗にや日ならずも御心よろしくならせたまふは、誠に目出度き御事にて、大慶至極に存じ候。

頼光　汝を始め四天王等も、是れまで毎夜宿直なせしが、斯く快くなりたれば、最早宿直に及ばず候。

保昌　未だ御病床に居らせられゝば、常の如くに四天王等と、御側にあつて御守護いたさん。

頼光　今宵はそれに及ばず候。用事あらば呼ばん程に、休息いたして然るべし。

保昌　さあらば君の仰せに隨ひ、

頼光　疾く〳〵參りて休息せよ。

保昌　畏つて候。

〽君の仰せに保昌は、暇申して入りにける。

ト保昌下手へ這入る。頼光は一疊臺へ住ふ。

〽月も雲間へ入側を、侍女の胡蝶は靜々と、御前間近く歩み寄り。

ト下手より胡蝶出で、

胡蝶　如何に、誰か御入り候。

太刀持　誰にて渡り候ぞ。

胡蝶　わらはゝ御館に仕へ申す、胡蝶と申す侍女にて候。

刀持　誠に胡蝶どのにて候ひしか。

胡蝶　典薬頭より御薬を、持ち參りし由、御申し候へ。

刀持　暫くそれに御待ち候へ、君の御機嫌伺ひて其由申さうずるにて候。〔ト頼光の前へ來り下に居て〕如何に申上げ候、典薬頭より御薬を持ち、胡蝶是れへ參られて候。

頼光　此方へと申せ。

刀持　はあゝゝゝ。〔ト下手へ來り〕君へ申上げたれば、いざ／＼此方へ御參り候へ。

胡蝶　畏つて候。〔ト前へ出て下に居て、典薬頭より御薬を持つて參り候。御心は何と御入り候ぞ。

頼光　昨日に今日は快く、小春の頃に至りなば、全く癒ゆると覺えたり。

胡蝶　それは上なき事にて候。

頼光　今は暮行く秋の末、千草に後れ庭前の菊は盛りに咲き出でしが、都に近き山々の紅葉も嘸や染めしならん。

胡蝶　仰せの如く山々は、時雨を待たず染みて候。

頼光　何れが見事に候や、我が病の慰めに、是れにて語り聞かせよや。

胡蝶　御氣慰めとあるからは、いざやお話し申すべし。錦なす樹々を都の名所に、

〽其名高雄の山紅葉、暮るゝも知らで、日暮しの、瀧の名忍ぶ愛宕山、〽峰は夕日にまばゆきも、麓はくらき小倉山、殘る青葉を冬近く、染める時雨に笠をりの、山風厭ふ嵐山、散りて流れて流れて散りて、錦織るてふ大井川、飽かぬ詠めの景色かな。

ト胡蝶舞あつて納まる。

頼光　胡蝶が今の物語に、我がいたつきを忘れたり　大儀なりしぞ休息せよ。

胡蝶　仰せに任せ御暇たまはり、典薬頭の御薬を、煎じ參らさうずるにて候。

刀持　胡蝶どのには急がせ候へ。

胡蝶　心得申して候。

〽胡蝶は心得候と、御薬湯へ入りにける。

ト胡蝶下手へ這入る。

〽此處に消え彼處に結ぶ水の泡の、浮世にまはる身こそありけれ、〽實にや人知らぬ、心は重き小夜衣の、恨み

ん方もなき袖を、片しき侘ぶる思ひかな。
ト此内頼光瘧の發せし思入、太刀持訛への小袖を頼光の左の肩へ掛ける。
頼光 今まで快かりしも、瘧病の熱俄に發し、胸苦しく覺ゆるは、病といへど常ならず、實に物の怪の祟りかと、心惑ひて候ぞ。
ト次第になり、
〽月清き夜半とも見えず雲霧の、掛れば曇る心かな、今まで明き燈火の、影さへくらき枕邊に、一人の僧の佇みて、
ト此内花道より、僧智籌出で來り、舞臺へ佇みて、
智籌 いかに頼光、御心地は何と御入り候ぞ。
〽尋ぬる際に現とも、夢ともわかず打見やり、
頼光 あゝら心得ぬ事にて候、人に變れる僧侶には、何れよりして參られしぞ。
智籌 これは比叡山の西塔、寶幢院の學寮に住む、智籌と申す僧にて候。
頼光 何ゆゑあつて夜陰に及び、我が館へ參られ候ぞ。
智籌 承はれば頼光朝臣は、重き病に臥したまひ、醫療業を盡すと雖、其效驗あらざるゆゑ、物の怪の祟りとて、諸寺諸山にて高僧貴僧が、惡鬼退散の法を修せど、未だ全快あらざるよし、猶も祈念をいたさばやと、今宵館へ參りて候。
頼光 それはよくこそ參られたり、諸寺諸山の其内にもわきて叡山は尊き御寺、國家鎭護の祈願所にて然も王城の鬼門に當れり。
智籌 東北の間鬼門の方に一宇を建立なす事は、古き例のある事にて、既に天竺の靈鷲山は、王舍城の鬼門に當り又唐土の天台山は長安城の鬼門に當り、我が日の本の比叡山は平安城の鬼門にして、朝廷本命の靈場なり。
頼光 見受けし所高僧には道德備はる權者と覺ゆ、定めて壯年の頃よりして佛法修行の其爲に、諸國を經歷召され候はん。
智籌 如何にも朝臣の仰せの如く、我も由ある武士の家に產れ候ひしが、父なる者の菩提の爲、一子出家なす時は九族天に生ずといふ、敎へに依つて剃髮なし、
〽身は雲水の定めなく、樹下石上に雲栖の、衣露けき旅の空、〽きのふは法の陸の奧、千松島に杖を曳き、けふは行方も不知火の、心筑紫に足を止め、
春の花秋の月、人は稱へて愛れども、

〽塵の浮世を遁れては、樂しからねば目も止らず、降り積む雪に薪水の、行を我が身にたくらべて、道なき山に分け登り、又は橋なき川を渡り、風に吹かれ雨に打たれ難行苦行の功を積みて、比叡山へ立歸り、遊學なして候ふなり。

賴光　斯かる尊き高僧の祈念を受くるは忝けなし、いざ修法を賴みたし。

智籌　それは何より易き事なり、五大明王を本尊となし修するなり。

賴光　其五大明王とは。

智籌　東方降三世夜叉明王、南方軍吒利夜叉明王、西方大威德明王、北方金剛夜叉明王、中央大聖不動明王、是れ五大明王にして東西南北中央と、五ケ所へ五壇を設け、護摩を上げて修するなり。

賴光　して、降三世明王とは。

智籌　尊容三面八臂にして、三世は所謂貪婪癡、此三毒を降ずるゆゑ降三世と是れを名付く。

賴光　して又軍吒利夜叉明王とは。

智籌　尊容則ち六臂にて、左りの肩に輪寶あり、一切の阿修羅惡鬼神を摧伏す。

賴光　して大威德明王は。

智籌　尊容三面五臂にして、惡龍毒蛇を摧伏す。

賴光　して〳〵金剛夜叉明王は。

智籌　尊容同じく三面六臂、左りの御手に輪寶を擎げ、右の手に矢を持したり。

賴光　中央不動明王は。

智籌　尊容忿怒の形相にて、左りに慈悲の繩を携へ、右に降魔の利劍を持ち、一切の鬼魅諸障惱者を降伏す

賴光　大部の神には本地ありと、承はり及びしが、五大明王にも本地ありや。

智籌　五大明王にも本地あり、降三世は東方の阿閦佛、軍吒利夜叉は南方の寶生佛、大威德は西方の彌陀佛、金剛夜叉は北方の釋迦佛、大聖不動明王は中央大日如來の教化大慈大悲の誓願なり、斯かる尊き明王を本尊となし奉り、護摩を上げて祈念なさば、惡鬼羅刹魑魅魍魎天魔波旬の鬼神なりとも、修力を以て立所に退散なさん事疑ひなし。いで〳〵五大明王を祈りて、障礙を拂ひ申さん。

〽最多角の珠數携へて、賴光朝臣の御前近く、進み寄りし其影の、最も怪しく見えければ、

ト此内智籌、賴光の前へ寄添ふ。

刀持　なう／＼我が君、御油斷あるな。
頼光　なに、油斷すなとは。
持刀　火影にうつる僧の姿、いと／＼怪しく存じ候。
〽怪しむ詞に驚きて、袖を返せば傍なる、燈火はたと消えにける。
頼光　風も吹かぬに燈火の、消えしは化生の業なるか。
智籌　やあ愚なる仰せよな、我がなす業と知らざるか。
頼光　左いふ汝は何者よな、
智籌　我が背子が來べき宵なり、さゝがにの、
頼光　蜘の振舞かねてより、
〽知らぬといふに猶近附く、姿は蜘の如くにて、〽掛くるや千筋の絲筋に、五體を包み身を苦しむ。
ト此内智籌巣を出す、
〽頼光化生と見るよりも、枕邊にある膝丸を、拔き開いて丁と切れば、〽身を躍らして背くる所を、續けざまに薙ぎ伏せつゝ、得たりや應と罵しる聲に、〽又立掛れど膝丸の、劍の威德に叶はじと、形は消えて失せにけり失せにけり。
ト此内智籌又巣を出し、立廻りあつて花道へ這入る。
〽君の御聲訝く、詰所に控へし保昌が、押取り刀に馳せ來り、
ト下手より保昌出で、
保昌　只今君の御聲高く、詰所に聞え候程に、急いで是れへ參りて候。
頼光　よくぞ保昌參りたり。
保昌　して、何事にて候ぞ。
頼光　苦しからず候ゆゑ、語りて聞かせ申すべし。保昌近う來り候へ、
保昌　心得申して候。
ト合方になり、
頼光　扨も今宵夜半の頃、誰とも知らぬ僧の來りて、我が病を問ふゆゑに、夜陰に及び何れより、僧には是れへ來りしと、尋ね問へば殊勝氣に、比叡山の西塔より物の怪の祟りをば退けん爲來りしと、申す詞の訝しさに、詞巧みに佛門の祈念の法を尋ねしに、問ひに任せて一々答へ、軈て障礙を拂はんと、我を目掛けて立寄りし、僧は其儘七尺ばかりの、蜘の形の鬼形に變じ、我に千筋の絲を繰掛け五體を包み、身を苦しめしを事ともなさず、枕邊の膝丸取つて切附けしが、化生は恐れて忽ちに掻き消す如く消え失せたり。

保昌　さては今宵我が君に、障礙を爲さんと來りしは、年經る蜘で候ひしか。
刀持　火影にうつる僧の影いとも怪しく見えけるゆゑ、君にお知らせ申して候。
保昌　いしくも汝認めしぞ、天晴なりける手柄なり。
賴光　此程よりの煩病は、彼れが障礙をなしつるか、思へば不思議な事にて候、かやうな事に先蹤ありや。
〽問はせたまへば保昌は、打ち頷いて座を進み、
保昌　斯かる例もなきにあらず。
〽昔人皇の初めとかや、紀伊國名草の郡、高野の林といへる所に、
二丈餘りの蜘蛛あり、手足は長く力量勝れ、網を張ること數里にして、往來の人を慘害す。
〽是れに依つて勅命下り、官兵彼の地へ馳せ向ひ、四方へ鐵の網を張り、
鐵湯を沸して責めしかば、
〽何かは以て堪るべき、蜘蛛は悶え苦しみて、終に其身は燒け爛れ。
果敢なく命を捨てし由、故老の者の談柄に承はりて候なり。

賴光　それに劣らぬ蜘の障礙を、今宵切拂ひ候ひしは、是れぞ、劍の奇特ゆゑ今日よりして膝丸を、蜘切と名附くべし。
保昌　今に始めぬ君の御威光、又膝丸の劍の奇特、旁々御家の譽れなり。
賴光　切附けし時、正に手應へなしたれば、血汐は流れあらざるや。
保昌　仰せの如く此邊に怪しからず血の滴り候、是れを慕ひて障礙なす、蜘の在所をたんだいて、退治たさうと存じ候。
賴光　いしくも保昌申したり、血汐を慕ひ行方を尋ね、
保昌　四天王と諸共に、
賴光　疾く〳〵蜘を退治候へ。
保昌　心得申して候。
〽君命受けて保昌は、勇み進んで走り行く。
ト保昌下手へ這入る。
〽賴光朝臣も席を替へ、奧殿深く入りたまふ。
ト賴光太刀持下手へ這入る。
〽程もあらせず廣庭へ、土蜘退治の供觸れに、從者の兵卒立ち出で、

ト下手より兵卒軍内、兵作、卒兵出來り、
兵作　こりや軍内、今獨武者の平井殿より、
卒兵　お觸があつたが聞いたるか。
軍内　それは何のお觸であつたぞ。
兵作　今宵御殿へ變化來り、障礙をなさんといたせしゆゑ。
卒兵　變化の居所を尋ね出し、それを退治なすとの事ぢや。
軍内　して其變化は、何でござるぞ。
兵作　比叡山の僧といつて祈念に御前へ來たは僞り、實は年經る土蜘にて、凡そ大きさ七尺ばかり、それに准じて手足も長く、
卒兵　千筋の絲を綛掛けて動けぬやうになしたるも、勇氣勝れし我が君ゆゑ、膝丸の太刀拔きはなし、丁と切附けたまひしかば、
兵作　流石の土蜘敵しがたく、逃げ行く跡に夥しく血汐が滴りありしゆゑ、平井殿を始めとして、
卒兵　四天王の方々が、土蜘退治に行かれるので、物數ならねど我々も其御供をいたすのぢや。
軍内　それは望む所でござる、我等は新參者ゆゑに、未だ手柄をいたさねば、輕い身分の軍卒なれど、いで何事かあつた時は、手柄をなして出世せばやと、兼々待つて居り候、今こそ出世の時到れり誠に嬉しい事でござる。
〽天へも昇る心地して、扇おつ取り悦びの、舞もしどろの上拍子、〽一伸に雲井の空へ羽を伸して、昇る千歳の鶴よりも、出世の雲に飛乘りて、天へ昇るはよけれど、龜の齡の萬歲樂、雲の切目が危うござる。
あゝ有難い／＼出世の雲が舞下りしぞ。
兵作　新參ゆゑに手並を知らぬが、
卒兵　して又武藝は何が得手ぢや。
軍内　何といふ事はない、弓術馬術槍術劍術、凡そ武藝の一通りは、何でもかでも皆得手ぢや。
兵作　三十六計逃げるが勝と、
卒兵　定めて逃げるも得手であらうな。
軍内　それは我等の一の得手ぢや。
兵作　大方左樣で、
兩人　あらうと思うた。
軍内　いや／＼今のは言損ひ、決して逃げるなどゝいふ、卑怯た事は更にない、いでといふ時には、人より先きへ出るのが得手ぢや。
兵作　それでは人より、
卒兵　先きへ出るか。

軍内　出るとも〳〵、後へ下るは大嫌ひぢや。
兵作　いや先きへ出るとは忝けない、是れより血汐の跡を慕ひ、退治る蜘は數年を經て、通力自在の魔物ゆゑ、近寄る者へ絲を繰掛け生血を吸つて殺すといふ。
卒兵　話しを聞いて怖しく、臆病者の我々は後退りをする中に、人より先きへ出るといふは、今もいふ弓馬槍劍、武藝に秀でゝ居るゆゑぢや。
兵作　よき者が組にあつて、我々共は大仕合せ、
卒兵　蜘は生血を吸ふといふから、成るたけ先きへ、
兩人　出てくりやれ。
軍内　いや待て兩人何といふ、其土蜘は年を經し通力自在の魔物ゆゑ、近寄る者へ絲を繰掛け、生血を吸つて殺すとか。
兩人　如何にも、汝がいふ通りぢや。
〽聞いて身の毛も忽ちに、臆病風が襟許へ、染みてがたがた顫へ出し。
兵作　見れば顏の色を替へ、
卒兵　汝は如何いたしたのぢや。
軍内　俄に持病の疝氣が起り、おいたゝゝゝ。腰の筋が引きつツて、歩く事が少しもならぬ、おいたゝたゝゝ。

兵作　土蜘退治に行く時は、汝を先きへ進ませて、
卒兵　我々命を助からうと存じ、力に思ひをつたのに。
軍内　いや、我も人より先きへ進み、手柄いたして出世なさうと、存じ居つた甲斐もなく、おいたゝゝたゝ。
兵作　それでは退治のお供は出來まい。
卒兵　さて〳〵是れは困つたものぢや。
軍内　決して臆病でいふではない、全く持病の疝氣が起りおいたゝゝゝ、おいたゝゝゝ、是れでは一寸も歩かれぬ、おいたゝゝゝゝ、おいたゝゝゝ。
兵作　いや、是れはさつぱりと忘れて居つたが、土蜘退治の前祝ひに、上から御酒を下された。
卒兵　あれは銘酒と申す事ぢや、なるたけ呑手の少ない内に、早く行つて開きませう。
軍内　なに、前祝ひに御酒を下された、それは實の事なるか、我等も一緒に參るであらう。
兵作　汝は疝氣で一寸も、
卒兵　歩けぬというたではないか。
軍内　今の間にさつぱり直つた。
兵作　それはほんまの事か。
軍内　おゝ嘘でない、ほんまぢや〳〵。

卒兵　そちらがほんまなら、こちらは嘘ぢや。
軍内　なに、嘘ぢやとは。
兵作　酒も何も貰ひはせぬ。
軍内　それでは今のは嘘ぢやといふか、おいたゝゝゝゝ、おいたゝゝゝ。
兵作　あの、こゝな、
兩人　横着者め。
軍内　横着ではない病なるぞ、おいたゝゝゝ。
〽腹を抱へ背を縮め、いち足出して軍内は、我が部屋さして逃げ行けり。
ト軍内、兵作、卒兵の三人花道へ這入る。よき程に橋懸りより、袴を着たる後見二人、冬青の葉を葺き萌葱緞子で覆ひし、山の造物を持ち出來り、舞臺眞中へ据ゑ跡へ下る。これにて一聲になり大薩摩掛りの唄になる。
大ザツマ〽それ松柏森々と長へに生茂り、日差すも知れぬ雨催ひ、更けて往來も嵐吹く、音凄まじき秋の末、芒に道も埋もれて、誰に東寺の藪陰に、幾歳ふりし荒墳は哀れにもまた物寂し。
〽折柄松明振立てゝ、保昌先きに綱公時、續いて貞光季武が、滴る血汐のあとを慕ひ、古墳近く歩み來て、
トこれへ大小のあしらひ、花道より平井保昌白の後鉢卷、さばき髪、唐織の着附、上へ錦のそばつぎ白の大口、附太刀、松明を持ち出で來る。後より渡邊綱、碓井貞光、卜部季武、酒田公時、何れも白の後鉢卷、さばき髪、唐織の着附、白の大口、附太刀、此後へ軍卒四人手網達附にて出來り花道へ居並び、大小のあしらひにて、
保昌　今宵障礙をなさんずと、御館へ忍び來り候僧は年經る土蜘にて、我が君切附けたまひたる、血汐の大路へ滴りしを、松明の光りに尋ぬれば、爰は東寺の裏手にて候。
綱　その土蜘の隠れ住むは、あれなる木立の内なるか、
公時　草生ひ茂る古墳に、人に等しき聲なすは、
貞光　疵の痛みに堪へがたく、苦しむとこそ覺え候。
季武　聲を知るべに窺ひ寄り、力を合せて討取るべし。
保昌　その丈七尺有餘とあれば、千歳經りし蜘蛛ゆゑ、如何なる奇術あらんも知れず、方々油斷したまふな。
四人　心得申して候。
保昌　いで〳〵あれへ赴き候へ。

〽蜘蛛の聲をしるべとなし、樹々の茂みへ立寄りて、さてこそ變化は爰なりと、人々古墳に打向ひ、大音あげて申すやう。

ト保昌先に皆々舞臺へ來り、造物の傍にて、蜘蛛の聲を聞く思入あつて、上手へ保昌、綱、公時、下手へ貞光、季武、後へ軍卒立並びて、

是れは音にも聞きつらん、頼光朝臣の御內にて獨武者と名を得たる、平井左衞門尉保昌、

綱　我々四人は臣下にて、四天王と呼ばれたる、我は渡邊源次綱、

公時　續いて跡に立ちたるは、酒田主馬之丞公時、

貞光　碓井靱負之丞貞光、

季武　ト部勘解由季武。

保昌　如何なる天魔鬼神なりとも、今立處に命魂斷たん。

軍卒　此古墳を崩し候へ。

四人　心得申して候。

〽崩せや崩せ人々と、呼はり叫ぶ其聲に、力を得たるばかりなり、〽下知に隨ふ武士の、墳を返し石を崩せば、

ト軍卒四人立掛る、此時後見二人萠葱緞子の布を取除ける。山の造物、四本柱へ紙で拵へし蜘の巣三方一面にかゝりある。軍卒毒氣に恐れし思入にて、たぢ〳〵と跡へ下る。五人松明を上げ是れを見て扨こそといふ思入。

〽俄に地中鳴動なし、四方へ掛けし蜘の圍より、火焔を放ち水を吹き、左も怖ろしき有樣も、事ともなさず大勢が忽ち崩す古墳の、岩間の蔭より土蜘の鬼神の姿は顯れたり。

ト此內軍卒四人立掛る。蜘巢の左右を破り、絲を打掛ける。是れにてどろ〳〵になり、軍卒目くるめきし思入にて、前の二人たぢ〳〵として左右へ見事に轉る。是れと一緒に正面の巢を引破り、土蜘の精黑頭唐織、色なしの着附、錦の法被、紺地金模樣の半切、錦の打杖を持ち出できつと見得、これ。にて保昌四天王立掛り、きつとなつて、

保昌　さてこそ怪しき鬼形の變化、そも〳〵汝は、

五人　何物なるぞ。

ト五人左右より詰寄る、土蜘の精打杖を構へきつと思入、鼓唄掛りになり、

ツヅミ唄〽我を知らずや其昔、葛城山に年經りし、土蜘の精魂なり。

ト軍卒二人掛るを投げのけ、打杖を振上げきつと見得。

土蜘　此日の本に天照す、伊勢の神風吹かざらば。〽我が眷族の蜘蛛群り、六十餘州へ巣を張りて、疾くに魔界になさんもの、〽思ひし望み叶はねば、先づ頼光を惱まさんと、障礙をなせし甲斐もなく、我が命魂を斷たんとや。

ト此内土蜘の精打杖を持ち、軍卒を遣ひよろしく振あつて、

保昌　普天の下率土の濱、王地にあらざる所なし、

綱　此土にあつて日の本を、魔界になさん汝が巧み、

貞光　忽ち天罰その身に報い、

季武　命魂斷つも自業自得。

保昌　疾く〳〵變化を討取り候へ。

四人　心得て候。

土蜘　やあ、我を討たんなんどゝは小賢きものどもよ、蟲類なれど千歲の年經し蜘の通力自在、見よ見よ今におのれらが五體に千筋の絲を繰掛け、手足を包み動かさじ。

保昌　假令如何なる通力あるとも、何條討てぬ、

五人　事あらん。

保昌　いで、命魂を斷つてくれん。

〽蜘蛛の精靈繰溜めし、千筋の絲を右左り、投げ掛げ投げ掛け白絲の手足に纏はり五體を包めば流石の保昌四天王等も、自由に動くこと叶はず。

ト此内鳴物にて土蜘の精は打杖、四天王は太刀を拔き切つてかゝり、立廻りの內土蜘の精千筋の絲を度々打掛け、四天王絲に包まれ困る思入、土蜘の精つか〳〵と花道へ行く、軍卒追掛け行き立廻りあつて、

〽樹木へ掛けし蜘蛛の圍へ、飛びかふ胡蝶や蜻蛉の、掛りし如く身動きならず、

ト四人を相手に立廻り、此内左右へ絲を打ちかけ立廻りよろしくあつて、舞臺へ來り、四天王立掛りて、

〽暫し困じていどみける。

ト此時土蜘の精は能の振と歌舞伎の立廻り、此の仕組よろしくあつて、

〽されども人々少しも屈せず、神國王地の惠みを賴み、彼の土蜘を中に取込め、大勢亂れ掛りければ、妖魔の術も消え失せて、劒の光りに恐るゝを、得たりや得たりと附入り〳〵、難なく蜘蛛を討取りて、

ト舞ばたらきになり、土蜘の精、保昌激しき立廻りよろしくあつて、保昌に切られ飛上り、尻ギバにどうと

下にゐる。

〽誉れを世々に残しける。

ト皆々引張りよろしく、片シヤギリ、カケリにて、

幕

土蜘（終り）

解題

（默阿彌略傳）

默阿彌は文化十三年二月三日、江戸日本橋通二丁目、式部小路に生れた。父は湯屋の株の賣買を業としてゐたが、後芝の金杉に轉住して質業を營んだ。屋號を越前屋、代々名を勘兵衞と稱した。本姓は吉村、幼名を芳三郎と呼んだ。十四歳以後十九歳まで、『滑稽八笑人』に描かれてある如き、江戸末期の頽廢的生活に親しんでゐたが、時には貸本屋の手代ともなり、雜書を耽讀し、新作の茶番を自演したことなどもある。

天保五年（十九歳）の末、踊りの師匠澤村お紋の口入れで鶴屋(孫太郎)南北の弟子となり、勝諺藏と名乘つて狂言作者の見習ひを始めた。この鶴屋南北は四世大南北の孫にあたつてゐる。翌天保六年の三月から葺屋町市村座に出勤し、番附に始めて其の名を載せられた。天保十四年廿八歳の時二世河竹新七を襲名し、木挽町河原崎座に於て立作者の地位に上つた。それ以來舊作の補訂、簡單な一幕物等に新作を試みてゐたが、嘉永四年の十一月『えんま小兵衞』といふ二番目物即ち世話狂言を上演して好評を博した。此作も本來改訂物の一つではあつたが、原作とは全然面目を新たにしたもので、創作と稱して差支へないものであつた。その後『白縫譚』『兒雷也』等の小說の脚色も試みたが、安政三年（四十一歳）以來四世市川小團次と結託して、新作の世話狂言を續出するに至つて、俄然頭角を顯し、狂言作者としての地位を確立するを得た。

四世小團次は近世に於ける世話狂言、寫實劇の名手であつたが、安政の大震以來著名となつた江戸の平民生活を舞臺に上せ、時代を穿つた芝居を上演せんとした。これに對して默阿彌は、その藝風に合致した新狂言を執筆して之れに提供したのであつた。安政の三年から慶應の二年小團次の死に至るまでの約十年間、兩者によつて成された一種の新劇運動は繼續され、江戸歌舞伎に於ける夕陽たるの意義を全うせしめた。『鼠小僧』『小猿七之助』『黑手組助六』『十六夜淸心』『三人吉三』『村井長庵』『鑄掛松』等は此期に於ける代表作である。

明治期に入つては九世團十郎、五世菊五郎、先代左團次、助高屋高助、澤村山之助、中村仲藏、岩井半四郎、中村宗十郎、坂東家橘、坂東秀調、尾上松助等諸優の爲に絶えず新作の筆を執つてゐた。劇場も淺草の猿若町から、先づ京橋の新富町に守田座が動いてから、東京の中央部に悉く移轉したが、それらに屬する大部分の狂言作者は默阿彌の支

配下にあつたと言つてよい。明治十四年(六十六歳)の十一月、河竹新七として書納めの狂言『島衛月白浪』を書いて、默阿彌と改めた。別に古河の姓を名乘つたこともある。默阿彌と改め劇場からは引退したが、作劇の筆は一年も休むことなく、明治二十六年一月二十二日、七十八歳の高齢を以て歿した。默阿彌は俳名を其水と號してゐた。

　默阿彌の作劇生涯は維新の前後約四十年にわたり、其の作の範圍も廣く、時代、世話、淨瑠璃、所作にわたりて、約三百種の著作がある。明治期に入つて特筆すべきことは、散切劇を書いたことゝ活歴劇を書いたこととである。散切劇は明治期に入り散髮令の布かれて以來の新社會を取扱つた寫實劇であつて、散髮頭の人物が現はれるから散切物などとも呼ばれてゐる。『女書生繁』『島衛月白浪』『孝子善吉』等はその代表作であらう。活歴劇は九世團十郎の嗜好に從つて書いた新史劇であつて、史實に忠實なるべく脚色し、故實をただして演出されたもので、明治十年以後の所産に屬する『高時』『重盛諫言』『仲光』等の如きがそれである。

「近松の淨瑠璃を讃美して我劇詩の旭光となすべくは、默阿彌の諸脚本は少くとも其華やかなる夕陽たるの光榮を荷ふ價値あるべし。(中略)三世紀に亙る我近世演劇史上、一作家にして前幾代かの蘊蓄を兼該し、其最終の集大成者として後には一人の來者をも有せざる默阿彌の如きはまたあらず。彼れは眞に江戸演劇の大問屋なり、德川文藝の羅馬帝國なり。」とは、坪内逍遙博士が默阿彌傳に與へられたる序文の一節である。彼れの演劇史上の位置なり、概評なりにはこの一節を引用するに留めておきたい。

(生涯の著作年表は、默阿彌集第二の卷末に附載する。)

『閻魔小兵衛』(升鯉瀧白旗)は嘉永四年十一月、作者三十六歳の時、河原崎座に上演された。作者がある門弟の件に關して、龜戸の佛師屋を訪問した時の情景を巧みに取り入れたと言はれてゐる。初演の時は好評を博したが、その時の主なる役割は市川海老藏卽ち七世團十郎(佛師屋えんま小兵衛)、八世市川團十郎(船頭伊之助、梶原景季)、市川九藏(修行者西念)、岩井粂三郎(若草、お六)等であつた。

『座頭文彌殺し』(蔦紅葉宇都谷峠)は、安政三年九月、作者四十一歳の時市村座に稿卜された。元祖金原亭馬生の噺を脚色したものであつたが、小團次の文彌と仁三との早變り、或は怪談の場面等何れも大好評で以後屢々上演されてゐる。初演當時の主なる役割は市川小團次(文彌、仁三)、坂東龜藏(伊丹屋重兵衛)、四世尾上菊五郎(お菊後に古

今、おしづ）先代坂東彥三郎（佐々木桂之助、彥三）、河原崎權十郎（尾花才三郎）、市村羽左衞門（文彌妹おいち）等であつた。

『十六夜淸心』（花街模樣薊色縫）は原名題を『小袖曾我薊色縫』と稱し、安政六年二月、作者四十四歲の時の作である。此の作は、其當時世間にやかましかつた、將軍家の御金藏を破つて四千兩盜んだ賊の一件を暗に諷刺してあつたので、興行中途に及んで大改訂を施さゞるを得なかつたといふ。「當新狂言何れも大出來大當り」と年代記にも記されてある通り、今日に至つても舞臺によく繰返されてゐる。序幕道行の場の淸元淨瑠璃は、詞句、作曲共に傑れたものとして世に知られてゐる。初演當時の主なる役割は、市川小團次（淸心、鬼あざみ淸吉）、岩井粂三郎（十六夜、おさよ）、關三十郎（白蓮、大寺正兵衞）、市村羽左衞門（求女）、淺尾與六（花賣り佐五兵衞、西心）等であつた。

『三人吉三』（三人吉三廓初買）は安政七年（萬延元年）正月、作者四十五歲の時市村座に上演された。初演の時に諸種の事情から比較的不評であつたが、文里一重の件を除いた三人吉三の件だけが復演されるに及んで、普遍的な作品となつた。百兩の金子を中心に三人の吉三を巧みに按配した、一つの運命悲劇は種々の點から興味を以て見られてゐる。『村井長庵』、『十六夜淸心』等と共に、小團次中心時代の代表的世話狂言とされてゐる。初演の時の主なる役割は市川小團次（和尙吉三、木屋文里）、岩井粂三郎（八百屋お七實はお孃吉三、丁子屋の一重）、關三十郎（丁子屋亭主長兵衞）、河原崎權十郎（お坊吉三）、市村羽左衞門（木屋手代十三郎）、吾妻市之丞（丁子屋の九重、文里女房おしづ）等であつた。

『村井長庵』（勸善懲惡覗機關）は文久二年八月、四十七歲の時、守田座に書きおろされた。小團次が強惡なる長庵と篤實なる久八とを巧みに演じ分けたことは有名な話柄であるし、六幕目の世話場の勝れてゐる事、それから小夜衣千太郎の道行に書いた常磐津淨瑠璃は、俗に「引け四つ」と呼ばれて普及されてゐる事等も著名である。初演の時の主なる役割は市川小團次（長庵、久八）、尾上菊次郎（道十郎女房おりよ）、中村鶴藏後の仲藏（早乘三次、甲州屋吉兵衞）、中村鶴助（紙屑屋六右衞門、百姓重兵衞）、市川市藏（人入れ貝坂の忠藏）、中村福助（千太郎）、坂東三津五郎（小夜衣）、嵐雛助（藤掛道十郎）等であつた。

『鑄掛松』（船打込橋間白浪）は慶應二年二月、五十一歲の

時守田座に書きおろされた。此の興行の時、あまりに世話狂言に風俗人情を穿ち過ぎていけないから注意せよといふ其筋の達しがあつて、小團次を太く憤慨せしめ死期を早めたといふ逸話がある。それほどに此作は頽廢し切つた幕末の世相、人情に觸れる所が多かつたのだとも考へられるやう。初演當時の主なる役割は市川小團次（鑄掛屋松五郎）、尾上菊次郎（お咲）、關三十郎（花屋佐五兵衛、梵字の眞五郎）、坂東三津五郎（刀屋娘お花、藝者お組）等であつた。

『因果小僧』（龍三升高根雲霧）は文久元年（萬延二年）五月、四十六歳の時、守田座に書きおろされた。狂言堂（櫻田）左交が雲霧仁左衛門を書いた中へ因果小僧の件だけを獨立的に助筆したものであつた。近年六代目菊五郎と尾上松助によつて復演されて著明になつた。初演當時の主なる役割は市川小團次（因果物師野晒し小兵衛）、尾上菊次郎（お園）、市川市藏（因果小僧六之助）、市川九藏（おさらば傳次）等であつた。

『土蜘』は前記七種の世話狂言とは全く面目を異にした長唄の所作物である。明治十四年六月、六十六歳の時、新富座に書きおろされ、三世梅壽菊五郎の三十三回忌追善と銘を打つたもので、後には新古演劇十種の一として、尾上家隨一の藝と推されたもの『勸進帳』に於けるよりも一層能曲に近く、高尙な所作事として作者が特に五世菊五郎の爲に執筆したものであつた。種々の說はあるが、作者としては『茨木』、『戾橋』、『釣狐』などと、次々に發表した能曲移植の所作事の第一作でもあり、明治の過渡期を代表する作品の一として、注目すべきものと言はねばなるまい。初演の時の役割は五世尾上菊五郎（僧智籌實は土蜘の精）、坂東家橘（源賴光）、尾上菊之助（侍女胡蝶）、市川小團次（渡邊綱）、尾上松助（碓井貞光）、大谷門藏（卜部季武）、先代市川左團次（平井保昌）、市川團十郎（兵卒軍內）等。作曲は杵屋正次郎、振附は先代花柳壽輔であつた。

（昭和三年三月、河竹繁俊記す）

編輯校訂責任

河竹繁俊
岡　康雄
鈴木　侃

日本戯曲全集・第三十巻
歌舞伎篇。第一回配本

編纂者検印

禁無断上演

昭和三年三月二十二日印刷
昭和三年三月二十五日發行　（非賣品）

編纂者　河竹繁俊
發行者　和田利彦
印刷者　高見靖[illegible]
製本者　高崎鐵五郎

東京市京橋區南傳馬町二丁目六番地
發行所　春陽堂
電話京橋　六五二
　　　　　四四一五
振替東京　一六一七

製版所　新倉東文堂

（神田區松下町・明治印刷株式會社印刷）